
悪魔に導かれて

やがみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔に導かれて

【Nコード】

N0591T

【作者名】

やがみ

【あらすじ】

世界の崩壊を防ぐ為に悪魔として彼は送り込まれた。ただし、神様から試練として両性具有にされて。同情的な魔王様、でも神様には腹黒さ的な意味で逆らえない。彼女になった彼は色々考えるのをやめた。

弄んだ神様と魔王様の顔面を殴ることを目標に、彼女は牙を研ぎ続ける。

基本はネギまでですが、しばらくネギまのネの字も出てきません。

神と悪魔の設定その他諸々はGS美神とBASTARD準拠です。
知らなくても問題ありません。

オリ主はこれ以上ないくらいにチート&変態&すんごいハーレム、
そして、独自設定・解釈てんこもりなのでご注意を。

9月3日 Rainさんによるイラスト追加ッ

全ての始まり

世の中、意外とどうにかなるものだ。

生きていさえすれば非常によくはない状況に置かれていたとしても、どこから救いの手が出てくる。

ともあれ、その救いの手が人間から出てくるとは限らない。

人間が解き明かしているものの方が遥かに少ないのだ。

そういつた訳の分からないモノがいけないとは誰も断言できない。

勿論、観測できない＝存在しないとするのはなら話は別だが、最初からいないと決めつけてかかるのは科学的でも何でもなく、単なる思考停止に過ぎない。

可能性は如何なる場合でも零ではないのだ。

つまるところ、オカルト的なものに出遭ってしまう、そんな可能性も零ではなかった。

「何さ？」

思わず彼は声を上げた。

彼の目の前にあるのは数枚の書類。

それだけならば別段珍しいことでもない。

しかし、その書類の中身が非常に痛々しい質問で埋め尽くされて

いたら、彼のような反応になってしまうのも無理はない。
ましてや、アパートに帰ってきたらそんな書類が机の上に置いて
あったなら。

「……一昔前にあった黒歴史を強制的に思い出させるこの質問」

『転生するなら何時代?』

『転生するならどんな種族?』

そんな感じの質問が1枚目の書類にびっしりと書かれていた。
しかし、それもまだマシな方であった。

2枚目以降には『働くと負け?』とか『人間は好き? 嫌い?』
とか。

何の意味があるのか分からないような質問が書かれていた。
とりあえず全ての書類を彼は流し読みし、一番最後の書類に今日
の午前2時過ぎに回収に行く、とあった。

「まあ、明日は休日だし、別に答えてやってもいいかな」

そんな軽い気持ちだ。

勿論、自分の部屋に勝手に侵入してこんなものを置いていった輩
の顔を見たい、という動機もある。

要するに彼もまた暇であった。

少し時間を遡る。

彼がまだ黒歴史を彷彿とさせる質問が書かれた紙を見つける前と
いうよりか、それを彼の部屋に持ってきた張本人達。

彼らは数日前にあがってきたあるレポートを読み、頭を悩ませて
いた。

「なあキーヤン。これ、どうするんや？」

「サツちゃん、どうしましょうか？」

彼らはそれぞれ神族と魔族の最高指導者。

いわゆる神と悪魔。

そんな2人が仲良く頭を悩ませている……というのは宗教関係者
が見たら卒倒するような光景だ。

とはいったものの、実際のところ神も悪魔も……神族も魔族も一
部の感情的な過激派を除き、どちらか一方を滅ぼそうとすれば世界
が終わる、ということを理解している。

つまるところ、ハルマゲドンが起こると全ておしまいなわけだ。
そうであるから一応表向きは対立しておき、裏では緊張緩和の為
に双方手を尽くしている、というのが現状。

さて、彼ら2柱をはじめとして、強い力を持った神族や魔族……
いわゆる主神や魔神クラスの輩は幾つもの平行世界や極めて似通っ
た異世界に同時に存在している。

また彼らは例え死んだとしても、また同じ存在として蘇る、魂の
牢獄とでも言うべきものに縛られている。

大きな力を持っている代償として。

そんな彼らは同時に幾つもの世界の管理者でもある。

世界が滅びないように、と奔走する役目であるのだが、彼らの管

理する新たに誕生したばかりの世界の一つ　　厳密には時間軸が違
う為に極めて似通った異世界なのだが　　が彼らの悩みの原因であ
った。

レポートとはその世界の大雑把な未来予想図だ。

「神や悪魔がただの御伽話に、妖怪も霊も消え、人間のみが栄える
科学文明……」

「人間としてはええかもしれんが……世界全体で考えるとマズイヤ
ろ」

「ええ、そうですね。彼らは貪欲な精神でもって地球から宇宙へと
飛び出していくでしょう」

「それも別にええんや。ええんやが、それでは霊的なエントロピー
が駄目なんや」

「ええ。まったくです。変えるには何かインパクトのある一撃を叩
き込まねばなりません」

「幸い、今のうちならまだ改変できる。今回は宇宙意思も見逃して
くれるやろ」

「でしょうね。世界の崩壊は宇宙意思とて望まない筈です。ただ、
問題は誰を送り込み、どういう改変をさせるか、です」

「せやな。それについてはうちのアシユに誰がどういう風にすれば
最適か計算させてある」

「彼ですか。ならば信用できますね」

「何しろ、アシユの頭は三界一やからなあ」

「それで誰にどうさせるのですか？」

「簡単に欲に突っ走りそうな人間を悪魔として暴れさせる。以上や」

サツちゃんをジト目でキーちゃんは見つめる。

その視線を受けてややたじろぐサツちゃん。

「欲しいんですね、戦力」

「し、仕方ないやろ！ 一応敵対しとるんやから！」
「……まあ、いいでしょう。正直なところ、神族の誰かを送り込んだりすれば向こうで魔族狩りでもやりそうですし」

最終的には魔族側に迎えるんでしょ、と問うキーヤんにサツチャんは頷く。

「神族は頭堅いのが多いさかいに。人間を神族にするなんて、滅多なことじゃできへんやろ。もーちいつと緩くいつてもバチは当たらんてえ」

「……まあ、バチを与えるのは基本的に私なんですけどね。ヤツさんは旅行行っちゃってますし。ともかく、人間を神族に迎え入れるのはよっほどの功績を上げないと無理です」

「せやる。ちゅーわけでもう選んで送つといたわ」
「何をです？」

「ただ魔族にして送り込むのもつまらん。どういう風になりたいか、選んでもらうために質問書送つといたわ」

「無駄に仕事が速いですね。ふむ……ならば私は神からの試練という事で何か試練でも与えることにしましょうか」

「……あんまり酷いことはせんでくれな」

「試練に打ち勝てば多大な報酬を与えますから頑張るでしょう。たぶん」

そういうわけで彼の下に質問書が送られたわけであった。

「……うん、何も無いな」

午前2時を回ったが、何にも起こらなかったことを確認し、彼は
やれやれ、と溜息を吐く。

「しゃーない。カップ麺でも食うか」
「おいつす」

彼の目の前にパツととんでもないのが現れた。

思わず彼は目を何度もこすり、凝視する。

幸いなことに現れた輩は自らの力を最低限にまで押さえ込んでいた
ので、彼は若干の威圧感を感じる程度だ。

彼に生えている6対12枚の黒い翼はそこまで広くない部屋を容
赦なく占拠し、その翼が当たり、棚の上にあったものが床にいくつ
か落ちた。

「……どちらさま？」

「気軽にサツちゃんと呼んでも呼んでやー」

「えーと……サツちゃん」

「ん？」

「とりあえず、カップ麺食うか？」

現実逃避気味に彼はそう問いかけた。

「うまかったで。ありがとなー」

「いやいや……というか、何者……いや、もういいや」

爪楊枝でしーしーやってるサツちゃんを見て、彼はもう正体とかどうでもよくなってしまった。

その翼から誰でも知ってる宗教上の超有名人であるのだが。とりあえず、カップ麺を彼は片付けて、サツちゃんを見据える。

「で、何の用？」

「ああ、せやせや。あの質問書、書いてくれたかー？」

「書いたけど……」

「見せてなー」

若干……いや、かなり冷や汗が出てくる彼。

調子に乗って色々書いたが、それでも恥ずかしいものは恥ずかしい。

「遠慮はいらんよ。それになってもらうんやから」

「……え？」

ぼかーんとしている彼を尻目に、サツちゃんは質問書をどこからともなく魔法か何かで手元に取り寄せて読み始める。

時折、へーとかほーとか感心とも呆れとも取れる声その口から漏れ出る。

「ふむふむ……合格や。これなら存分に暴れてもらえそつやな。にしても、吸血鬼を選ぶなんて、渋いなあー」

「は、はあ……」

「んで、まあ、とりあえずや。平行世界っぽいところに行ってもらいたいんや。年代としては新石器時代あたりや」

「……え？」

「吸血鬼になつて、好き勝手生きてな」

「はあ？」

「あ、うちの加護とキーやんの加護があるから死にそうになつてもたぶん死なんから大丈夫や」

「えっと」

「色々あるやろうけど、あ、たぶんキーやんが試練与えるかもやから、気をつけてな」

「話が見えない……」

「ああ、こつちのことは気にせんでな。うまくやるとくわ。ほな、いこか」

半ば無理矢理、彼はサツちゃんと共に過去の平行世界へ……厳密には時間軸が違つので異世界にあたるのだが……旅立つこととなつた。

彼の運命は神も悪魔も知らなかつた。

全ての始まり（後書き）

ストックがあるのでちょこちょこ投稿する予定。

ネギまの原作キャラが出てくるまでおおよそ数千年あるんだけども、途中で過程すつとばすこともあるかも……

こんには新石器時代

「……はあ？」

間の抜けた声。

辺り一面の草原。

空には燦々と輝く太陽。

「え？ え？ えええ！？」

思わず叫んだ。

人っ子一人いないどころか、動物も見渡す限りはいない。

頬を撫でていく爽やかな風。普段なら気分が良くなるところだが、さすがにこんな状況でいい気分になれるわけがなかった。

ともあれ、現状を把握すべく妙に低くなった視線に気になりながらも、辺りを見回す。

すると少し離れたところに小さな麻袋が落ちている。

「……なんだこれ？」

中身を開けてみると業務用茶封筒と女物の衣類……それも真っ黒なフリル付きのワンピースや下着、そして数冊の本とノート、筆記用具が入っていた。

封筒を開けて中を見れば、そこには数枚の便箋。

一枚目のそれを食い入るようにそれを読み終え、ぺたんと、地面にへたりこむ。

「神も悪魔もあったもんじゃない……」

その眩きはまさに的確であった。
便箋にはこう書かれていた。

『ども、キーヤんです。

サツちゃんから聞いてるかもしれませんが、あなたは諸々の事情により、その世界の滅亡を防ぐ為に選ばれたので色々と悪さしてください。

あ、どんな悪行を行っても天罰とかはしないので、自分の国を作るなり何なり好き勝手しちゃってくださいね。

で、あなたは吸血鬼に極めて近い魔族になってます。もう人間じゃないですので安心してください。

ただ少々急ぎ仕事だったので、現段階では怪力と体の頑丈さなどの身体能力、そして不老不死ということくらいで、膨大な魔力とか特殊能力とかそういうものはありません。

同封した本でも読んで頑張って修行して身につけてください。

それとあくまで吸血鬼に近い魔族なので、吸血鬼特有の弱点とかはありません。

吸血して眷属を作ることとはできますけど。

良心に苛まれることなく、悪い心でどんどこやっちゃってください。
い。

私の加護があることを。

神界最高指導

者 キーヤん』

ここまで悪いことやってね、と言われると逆にする気がなくなってしまう。

そんなことを思いつつ、2枚目の便箋に目を移す。
そこには追伸が書いてあった。

『私からの試練として女の子にしておきました。あ、正確には両性具有ですので。こういうアブノーマルとか背徳的かつ背信的でいいですよ。まあ、神も悪魔もたいていは両性具有なんですけど。あ、私は男ですよ？』

ともあれ、この試練の他にも幾つか与えるかもしれません。全部に耐え抜いたらきつと魔界で魔王になれるかもしれないし、私からも何かあげます。

それと今、あなたがいる時代は紀元前8000年くらいです。
将来的に私の分霊が生まれてきますけど、悪魔として振舞ってくださいね。

それがあなたにできる善行です。

□

「……現実を直視しろ、とつまりそういうことですね」

盛大なため息を吐いて、彼 両性具有だが、一応見た目で判断すれば 彼女は自分の体へと視線を移す。

膨らんだ胸、高い声、そして、風に靡いている長く艶やかな黒髪。

「ああ、不幸だ……」

神にも悪魔にもある意味、弄ばれている彼女であった。

しばらく途方に暮れていた彼女であったが、ここにいてもどうしようもない、ととりあえずどっか行くことにした。

勿論、目的地などない。

適当に歩いていればどこかに出るだろう……そんな感じだ。

しかしながら、彼女の予想に反して歩けど歩けど、風景は変わらず。

たまに見たこともない小動物や鳥と出くわす程度であり、残念ながら人はいない。

よく見れば生えている草なども何だか微妙に現代のものとは異なっている。

本当に夢ではなく石器時代だ、と嘆息して、もうどうにでもなれ、と草原に寝転がった。

元の場所でも見慣れた青い空に白い雲がゆっくりと流れている。

「……空はいつも変わらないってか？」

そう呟きつつ、これからどうするか考える。

「普通に考えて、言葉が通じないし、文字もまだないだろうから筆談もできない……」

いや、そもそもこんな格好 部屋にいたときのスウェットのま

ま で現れたら外敵として攻撃されかねない、そう思った彼女はまた一つ溜息を吐く。

この時代においてスウェットなどという衣類は存在していない。見る人からは変なものにしか見えないだろう。

紀元前8000年ではまだローマやギリシャもなく、エジプトの

古王国時代が始まったところだ。

「……ひとりぼっち、か」

物悲しい気分となり、彼女はまた溜息を吐く。

「もう本当に悪魔になってやる……悪魔以上に悪魔になって神も悪魔も潰したる……」

呪詛のような言葉を吐いてみたものの、元気のかけらも出てこない。

「……とりあえず寢床を探すかな。まあ、吸血鬼だし、1日中歩いても大丈夫だろう……」

この時代の空気をたっぷり吸って、堪能しておくのも悪くないかもしれない、と思うことで無理矢理彼女はポジティブな気持ちへともっていく。

一度そういう風に考えるとわりと気持ちはすんなり切り替わるもので、この時代をどう堪能するか、とそういう考えが湧いてきた。

「……もしかして、この時代の生物とか植物を生きたまま保存できれば将来的に学者に売って大儲けできるかも？」

西暦2000年まで保存しておく、と仮定するとおよそ1万年程、しっかりと保存せねばならない。

常識的に、あるいは普通に考えれば無理だが、その普通とか常識とかが完全に壊されている彼女である。

非常識なことに遭うと、そういう風に壊れても仕方がない。

彼女には何とかかなりそうな根拠のない自信があった。

「突破口は本かな？」

麻袋から本を1冊取り出してみる。

「ご丁寧に日本語で『魔族入門』はじめてのわるいこと」と書かれている。

「なんだか妙なネーミングセンスだが、1ページ目を開いて著者に『サツちゃん』とあって諦めた。

何かその他にも『リつちゃん』とか『アスヤン』とか色々と本能的に嫌な予感がする名前があつたが気のせいだと彼女は思い込むことにする。

その本を麻袋に戻して、残りの本を取り出してみた。

彼女が呆れて物も言えなくなる題名と著者の数々。

『魔王になる為の100の実践』

『魔法科学の全て』

『魔法入門』まほうってなあに？』

『魔法マスター』魔法のすべて』

『武術入門』

『武術全書』

『錬金術』あなたも金で一攫千金を』

『数理的思考』

「……なんか斉天大聖ってどっかで聞いたような……」

『武術入門』と『武術全書』の著者の1人に思わず首を傾げる彼女だが、とりあえず他の本の著者も彼女は見てみる。

一番分かりやすく名前を載せていたのは『魔法科学の全て』や『

数理的思考』などの著者アシユタロスだろう。

とりあえず、彼女は何だか知らないが自分が悪魔達から凄く支援されているらしいと感じた。

「まあ、とりあえず寢床の確保だ。近くに小川とかがあるといいな」
本を全て袋に戻し、彼女は再び歩み始めた。

さらに数時間歩き、夕暮れ時、彼女は森にたどり着いた。

木々はやはり違うものばかり。

やれやれ、と溜息一つ。

薄暗い中、しばらく歩いていると大きな岩が一つ鎮座していた。

どっかから雨なり何なりで転がってきたのだろうか、と彼女が思

ったそのとき。

彼女の鋭敏となってしまった聴覚が水の流れる音を捉えた。

この時代の水はきつと環境汚染もなく美味いに違いない、そう確信し、彼女は足早に音の方へと向かった。

吸血鬼の身体能力をもつてすれば1分と掛からずにその場に辿り着くことができた。

小川……と表現するには少々大きい川があった。

水面は透き通り、川底や、小魚が泳いでいるのが見える。

とりあえず彼女は手で水を掬い、一口飲む。

「うまい」

市販されているおいしい水とかよりも余程美味い、と思った彼女は、この辺に居を構えることに決めた。

幸いにも、恐竜でも襲ってこない限り吸血鬼に敵はない。

そして、その恐竜もとうの昔に絶滅している。

「……あれ？　わりと現代よりもストレスのない生活がおくれる？」

ストレスを与える存在自体がないのだからそれも当然。

彼女は上機嫌となり、鼻歌混じりで近場で寝ることができる場所を探すことにした。

さらに数時間が経過し、太陽は完全に地平線に沈み、辺りが暗闇に支配される。

未だ人類は暗闇に潜む獣に対抗する術を持たない。

この時代では火を焚き、絶えず明るくしていなければならぬ。

だが、そんなこの時代の常識に真っ向から喧嘩を売っている輩が存在した。

「ふんふんふーん」

鼻歌混じりで彼女は木を怪力でもって折り、丸太を地面に刺していく。

当初の予定とは微妙に目的が変わっているが、彼女は気づかない。今の彼女は自分の領地を作るのに夢中だ。

それからさらに10本ほどの丸太を地面に突き刺したところで彼女は手を止めた。

「ふう……ようやく、私の領地が完成だわ」

川をまたいで丸太で適当な広さで囲む。

すると丸太で隔離された空間が出来上がりだ。川が囲いの中を流れているので飲み水の確保もしつかりとできている。

丸太の長さはおよそ数m、それなりに太く頑丈だ。まず余程の化け物でも来ない限りは安全といえる。

たとえ丸太の堀を超えたとしても、その中にいるのは吸血鬼。襲う方が可哀想なのは言うまでもない。

ただ問題は川が氾濫したとき、水浸しになることだが……そこまですべて彼女は考えなかった。

「さて、とりあえずは……寝るか」

本と黒いワンピースを石を積み上げて作った机のようなところに置き、麻袋を地面に引く。

そして、その上に寝転がる。

さすがに風邪を引いたりはしないだろう、という彼女の判断。

吸血鬼が風邪を引くなどは喜劇にもならない。

「……星が綺麗だ」

彼女が木々をなぎ倒した為に丸太の囲いの中は空が丸見えだ。

雨除けも作らないとなあ、と思いつつ、現代では見ることができない星空を堪能する。

宝石を散りばめたようなその星空を彼女は記録に残したい、と強く思う。

「どうにかできないものか……」

魔法とかでどうにかなるのかな、と思いつつ、ゆっくりと目を閉じる。

全ては明日、日が登ったら……そう考えて。

「……って、そういえば吸血鬼になったのだった」

吸血鬼の生活時間は言うまでもなく夜。

なんだか目が冴えて仕方がない彼女。

本でも読むか、ととりあえず魔族入門から読むことにしたのだった。

いきなり大物ができました

彼女の領地ができてから既に数日が経過していた。

この数日で彼女は雨除けの為に丸太で領地の中に家を造ってみた。ログハウスというような上等なものではなく、塀を作ったときの要領で塀の中に囲いを造り、丸太を囲いに引っ掛けるようにして上に乗せ、その丸太の上に葉っぱを敷き詰めた簡素なものだ。

「私、私、私私私私」

一人称を連呼する彼女。

もうどうしようもないのでこの姿で生きていこう、と彼女はわりとあっさりとは決意している。

なっってから、既に女言葉になっていたにも関わらず、言葉遣いを改めるべく、一人称の練習からしていた。

「あーう。疲れた。私疲れた」

開始後5分でもう面倒くさくなった彼女はおもむろに本を開く。

魔族入門ではなく、魔法入門だ。

読み進めて彼女が気づいたことだが、この本、ハードカバーだが、見た目の厚さはそれほど分厚くはない。

分厚くはないのだが、開いてみると明らかに見た目よりもページ数が多い。

魔法が使われているのだろう、と彼女は見当がついたのだが、さすがに最後のページが10万とか100万とかの大台になっていると読む気も無くなる。

時間はたっぷりあるからたっぷり勉強しろ、と送った連中が無言で告げているのかもしれない。

ともあれ、彼女としても暇だから、という理由で読み進めているのだ。

「これ、全部読んで内容完全に理解したらこの著者達と同じレベルに達したって思っているよね……？」

魔族入門や魔王になる為の10の実践などのハウツー本はともかくとして、その他ものについては彼女がそう思っても仕方がなかった。

「ああ、実践もしないと……めんどくさい」

めんどくさい、と言いつつも彼女が知る現代文明の娯楽……ゲームなり何なりができるのは今から1万年以上先の話。

「自分で派閥でもつくって、人間社会を裏側から支配しようかなあ」

悪っぽくていいかな、と彼女は思う。

そのとき、彼女は閃いた。

「一人だから退屈。ならば、使い魔でも作ればいい。きっとそういう方法も載っている筈」

思わずほくそ笑む。

やる気は十分、あとはやるだけだった。

「ふっふっふ、ふがっつ……私が真祖……いや、神祖になるのだあ
ああああ！」

拳を振り上げ、思いつきり叫ぶ彼女。

一応、この世界で一番初めに誕生した吸血鬼は彼女なので間違っ
てはいない。

吸血鬼の神様という意味で。

「神祖とは……そう、真祖よりも格上で唯一の存在……！」

いい感じに妄想が迸っているらしい彼女。

ともかくにも、まずは力をつけなければ駄目なのは言うまでも
ない。

「そうだ、これから起こることを年表にしておこう……って、そう
いえば何か便箋まだ読んでないのがあった」

ふと気づき、年表を後回しにして残りの便箋を取り出した。

『麻袋やワンピースなどだが、見た目こそ普通だが、様々な処理を
施してある。』

強度は抜群、破れても汚れても元通りになる。有効に使ってくれ
たまえ。

ノートや筆記用具に関しても実質的に無限に使用できる。こちら
も破れても汚れても元通りになる。

ア

シユタロス』

「恐怖公とか呼ばれているわりには意外と親切だなあ」

そんなことを言いつつ、彼女はワンピースを手にとってみる。
見た目も触感も単なる布だ。

しかし、アシユタロスが嘘をつくとも思えない。
来たときから着ていたスウェットは川で洗っている為にそこまで汚れてはいないが、ところどころ穴が開いている。

女の格好をするのは今まで踏ん切りがつかなかったが、ここに至っては仕方がない。

「……そういえばこっちきてから抜いてないな」

女の快樂も男の快樂も両方できる……これはすごいことかわ！？

一部思考が暴走を始めたのか、そんなことを考えてしまう彼女。
とりあえずスウェットを脱ぎ川で体を清め、下着を身につけてみた。

「……なんか暖かいというか程よい感じ」

温度を一定に保つ機能でもあるのだろうか、と思いつつワンピースを着てみた。

下着もワンピースも、サイズがぴったりなところが彼女を洗い顔にさせた。

「……しかし、いい加減小魚も木の実もキノコも飽きた」

彼女の言葉と同時にお腹も鳴る。

こっちに来てから、彼女が食したものは小魚と食べれそうな木の実、キノコのみ。

もつとも、そもそも彼女は吸血鬼によく似た魔族であるからして、食べなくても問題は無い。

彼女が感じる空腹感はいくまで人間であったときの名残であり、徐々にそれすらも感じなくなっていく、最終的には食事は嗜好に成り下がる。

しかし、それは本人には分からないこと。

故に彼女は吸血鬼の怪力でもって摩擦で無理矢理火を起こし、一応焼いて食べている。

試しに魚の血を飲んでみたが、何だか微妙な味しかなかったの
で、あまり飲んではいけない。

幸いにも、毒性のあるものを食べても彼女には痛くも痒くもない
ので見た目やばそうなもの以外は手当たり次第に食している。

しかし、彼女としては動物性タンパク質……早い話が肉が食べた
かった。

「お腹ぐーぐーにや。ぐーぐーですよ。ダンゴムシ食べるにや……
…ダンゴムシいないですよにやあ」

食べたい余りに頭がおかしくなったのか、妙なことを口走る彼女。
そのときだった。

彼女は鼻をひくつかせ、とある匂いを感知する。
とろけるような、とてもいい匂い。

それは吸血鬼の主食、血の匂い。
魚の血より微妙ということはない、と彼女のカンが告げていた。

「血を流すものは動物……ユクゾツ」

足に力を込め、堀を乗り越え、着地するなり疾風の如き速さで彼
女は森の中を駆ける。

森を超え、数日前にいた草原に出た。

血の匂いは徐々に強くなる。

帰り道など知ったことか、と彼女はさらに加速する。
草花は彼女の巻き起こす風圧に強制的に跪かされていく。

やがて彼女は目的のものを見つけた。

「さすがにこれはない」

思わず彼女も引いた。

見知らぬ長身の男が草原の真ん中で鉄板で焼肉を焼いていた。
紫色の髪が特徴的だ。

どうやら血の匂いは山と積まれた血の滴る肉類が出所らしい。
呆然としていた彼女に彼は気がつくど親しげに手を上げ、口を開いた。

「やあ、初めまして。私はアシユタロスだ。諸事情により君に勉強を教えにきた」

彼女は間の抜けた顔で生返事を返した。
なんで地獄の恐怖公がこんなところに、いやいや、そもそもなん

でこんな親しげなんだ……などなど様々な疑問が思い浮かぶがとりあえず彼女は深呼吸をして、告げた。

「肉！ 肉を寄越せ！」

「……相当飢えていたんだな」

思わずほろりときてしまうアシュタロスであった。

「そうだろうと思って用意した。存分に食べたまえ」

彼が鉄板を指させばそこには数々の魅惑のお肉達がいい具合に焼けていた。

カルビ、ロース、タンなどなど……

「う、ごはん！ 白米！」

「用意してある」

彼が指を鳴らせばどこからともなくテーブルと椅子、その上にはお皿に山盛りのごはんが現れた。

彼女はもう躊躇しなかった。

それから彼女の食事はおよそ1時間続き、その間、アシユタロスはひたすら肉を焼き続けた。

ようやくその食事が終わった後、彼女は食後に静岡茶を飲みつつ尋ねた。

「何故？」

ただ一言。

それだけで彼には十分理解できた。

「1000年程、私が君の家庭教師を人界で……ああ、いわゆる地球でやることになったのだ」

「キーヤんとかサツちゃんは？」

「2柱とも承認済みだから問題はない」

「どう呼称すれば？」

「好きなように呼んでくれたまえ」

「了解……で、とりあえず私としては……」

「君の望みについては知っているとも。君については寝ているときやトイレのとき以外は私が監視していたのだから」

ハツとして彼女は冷や汗混じりに尋ねた。

「私が2柱に仕返すことは？」

「問題ないだろう。こちらにも色々とあってな。ちょうどいいガス抜きになる」

小競り合いからハルマゲドンに、というパターンにはなりえないとアシユタロスは判断する。

小耳に挟んだ話によれば、どうせなら適当に理由つけて神魔の過

激派同士をぶつけ合わせて対消滅させよう、とサツちゃんが言っている、と彼は告げた。

「何だか色々大変ね」

「まあ、君には関係ないことだ。君は好きなように動いてくれればいい。それが世界を滅亡から救う」

「一応、私って悪魔なんだけど……」

「君は慣れるだろう。何、問題ないさ」

そんなもんか、と彼女は納得する。

彼の言葉には自身の存在に対する悲しみが僅かに含まれていたのだが、彼女は気づけなかった。

「で、使い魔の件だが、とりあえず何かを素体として使い魔を作るよりもまずは自分の魔力と血のみを使った使い魔を作ったほうがいい」

「何故？」

「簡単な話だ。素体を使って使い魔を作るよりも、自身の魔力と血で作る方がどちらかといえば簡単だからな。ああ、すぐにできるよ」

頼もしいが、とてもスパルタな予感がした。

あんまりひどいことは勘弁して欲しい彼女だ。

「さて、食事も終わり、一通りの説明もした。1000年は人間の基準で考えれば途方も無い時間だが、君にとっても私にとっても、瞬きする時間に等しい。時間を加速させる空間を用いるとはいえ、それでも足りない」

「……つまり？」

「つまり、大前提となるべき魔力。それを手っ取り早く得てもらおう

うと思っ」

「そんなことできるの？」

「できるとも。君は自分が何かを忘れたのかね？」

吸血鬼ってそんなことできたっけ、と首を傾げる彼女。

「簡単な話だ。血液とは魂の通貨。それを吸い、相手の知識その他諸々を己のものにできるのが吸血鬼。ましてや、君はあの2柱に、そしてこの私により魂を変質させ、そうなったのだ。それでできない道理があるのかね？」

彼女は絶句した。

どうやら自分が思っていた以上に神と悪魔に弄ばれているらしい、と。

しかし同時に疑問も出てくる。

何故、そこまで自分に肩入れするのか？

悪魔として暴れてこい、というだけならそんなことをしないで適当に力を与えてくれればいいのに、と。

彼らのやり方は非常に回りくどく彼女には感じられた。

まるでわざわざ自分がより強い存在に、それこそ魔神や魔王になることを望んでいるかのようだ。

「さて、どうして自分にそこまで肩入れするのか、と君は思っていることだろう」

「当然でしょ。何でそんな回りくどいことをするの？ どうしてわざわざ私を強くさせようとするの？」

「将来的に魔王になってもらう為だ。私は少々この位置が嫌なのでね。適当に暴れた後、引退させてもらおう」

彼の言葉に彼女はポカンとした顔を披露する。

「そのことについては既にサツちゃんに伝えてある。新たな後継者が出れば私の引退は黙認することだ」

「……私があなたの後継者に？」

目をパチクリとさせて彼女は問いかける。

「そういうことだ。頑張ってくれたまえ」

なんともまあ、えらい出世だ、と彼女は内心嬉しいような悲しいような複雑な気分であった。

「さて、早速血を飲んでもらおう。予め瓶に入れてある……ああ、勿論、最初は少量だ。許容量を極大にしてあるとはいえ、いきなりは壊れる可能性があるからな」

何だかわくわくとしているような感じのアシユタロスに彼女は苦笑するしかなかった。

「アシユのヤツ、ばらしてもうたか」
「まあ、許容範囲でしょう」

何処とも知れぬ空間にてサツちゃんとキーヤンは彼女達のやりと
りを見ていた。

その彼女は今、アシユタロスの血液を少量飲み、苦しみのあまり
のたうち回っている。

「……にしても、えろう苦しんどるな。死ぬんやないか？」

「まあ、普通の動物の血しか吸っていなかったところに、いきなり
魔神の血ですから当然ですよ。馴染んだらワインと同じように気軽に
飲めるでしょう」

「そか。彼女が死ぬとまた新しい引つ掻き回し役兼アシユの後継者
を探さんとあかんから、頑張つて欲しいもんや」

「ですな。しかし、彼女も随分と吹っ切れてきました。サツちゃん、
彼女の性欲に干渉してもう少し高めるといっか、体質を淫魔的には
できませんか？」

「……何や、神様がそういうこと言つてええんか？」

「いいんですよ。清濁を併せ呑んでこそ良き指導者ですから」

「……できることはない。せやかて、どうしてや？」

「彼女、こつちに来てから性欲発散させてないですし、彼女自身の
願いにも女の子集めたいって言つてましたから、ささやかなプレゼ
ントですよ」

「すまん、わいにはキーやんを止められん……あとで何かわいからも送っておくわ……」

将来的に彼女に殴られても到底文句は言えない2柱だった。

さらっと流れる日々

「青い空、白い砂浜、青い海、爽やかな風、そして背後には豊かな森や山々……」

天国は存在した、と彼女は思わず呟いた。
ここはアシュタロスが造った異空間。
正確には修行用の閉じた世界だ。

「……どこの漫画だ」

もう何でもありだなあ、と遠い目の彼女。そして視線をアシュタロスへと移す。

彼は青空教室ともいうべきものの準備をしていた。

正確には黒板と椅子と机を八ニワ兵なる八ニワのようなものを持ってこさせ、自身はノートを見てブツブツと呟いている。

その近くには彼女の荷物である麻袋があった。

アシュタロスはどうやらどうい風に取り掛かるか考えているようだ。

「しかし、私、何か10年くらい物凄い痛みを感じてたらしいのに……」

数時間前にそれらは唐突に消え、彼女はこうしてびんぴんしている。

むしろ、血を吸う前よりも調子がいいような気さえした。

アシュタロスが言うには飲ませてすぐにこの空間に自分を放り込

んだとのこと。

そして、この空間の効果というものが……

「外の1時間がここでの1年ってなんて便利な勉強空間」

アシユタロスの技術に彼女はただ、驚くしかない。

しかも好きなときに外に出られるというのだから、こっちで1日
過ごしても向こうでは数秒も経っていないことになる。

ちよつとした骨休めをするには最高の環境ともいえる。

「現代のサラリーマンや学生達が知ったら、絶対欲しがる……これ」

1時間の休憩で1年分おやすみができるのだ。その分、歳をとる
がこのメリットは大きい。

「現代社会にこれがあればきっと皆心にゆとりができるんだろうな
あ」

のびのびとした世界がいいです、個人的に、と彼女は言葉を締め
た。

「さて、早速だが君の名前を決めねばなるまい」

「……元の名前ではダメなの？」

「名前とは存在の証明だ。元の名前はあくまで人間の名前。君はも
はや人間ではない。ならばこそ、新たな相応しいものを手に入れね
ば矛盾によって霊的な格が落ちる」

「でも男の人でも女みたいな名前の人っているけど？」

「桁が違う。所詮人間は個体では弱いものだ。だが、魔族は違う。
その差だ」

そういうもんか、と思い彼女はどうしたものか、と考える。
いきなり自分の名前を決める、と言われてもそうそう思い浮かぶ
ものではない。

「もう面倒だから素直にアシユタロスでいいんじゃない？」
「……いや、それはそれでアリだが、紛らわしくないか？」

最終的にはアシユタロスの名も継ぐことが決定している彼女だが、
今はまだ時期ではない。

もつとも、この世界はあくまでサツちゃんやキーやん達からすれ
ば時間軸的には過去であるのでこの世界にはアシユタロスという存
在はまだいない。

別に彼女がアシユタロスを名乗ったとしても、その存在としての
格から単なる同名の魔族と認識されるだけであり、矛盾が生じてど
ちらかが消滅するということはない。

「いいのいいの。どうせあなたの後を継いだら、今ここで考えた名
前なんて意味などない……そうね、アシユタロスから何文字か抜き
出して、アシユレイとでも呼べばいいじゃないの。仮に」

そうか、と頷き彼は彼女の意志を尊重することにした。
下手に妙な名前をつけられても、彼としては反応に困るといっ
もある。

「さて、早速勉強といこう。ある程度の魔力はできた。あとは適度
に血を飲みつっ、座学と実践あるのみ」

「血液飲めば座学とか省けるんじゃない……」

「それでは駄目だ。それでは有機的に知識を活用できない。辞典を
丸暗記したようなものだからな」

なるほど、と頷くと同時に1000年の勉強地獄に彼女は思わず十字を切った。

だが、キーヤんが諦めてくださいと頭の中にささやいて彼女は涙目になった。

「……いや、確かに君の願いは分かっていた。分かっていたが……」

これはやりすぎではないかね、と彼は思わず問いかけた。

加速空間内でおよそ100年程経ち、血液の摂取量は日に日に増大するとともに魔力も増大。

また、この100年でそれなりに魔法の基礎などの必要なことを学んだ彼女に、使い魔作成のGOサインが出た。そして彼女は使い魔の作成を始めた。

しかし、それはアシュタロスの予想を裏切った。

通常、使い魔は素体があっても無くても作成に掛ける時間は僅か数時間だ。

魔族の、特に強い力を持った者が作る使い魔はたった数時間のお手軽なものでも、人間から見れば強力な力を持つ。

さて、魔王候補の彼女はアシユタロスに助言を求めつつ、初めての使い魔をつくるのに時間を掛けた。

というよりも、現在進行形で掛けていた。

「まだよ……もっともっと強く美しく……！」

彼女はそう呟きつつ、半径数十mはあるう巨大な使い魔作成魔法陣の中心で魔力を注ぎ込んでいる。

彼女は完全に魔族化している為、餓死することはないし、もちろん排泄の必要性もない。

当初こそ感じていた空腹感も既にない。食事はもはや単なる嗜好に成り下がっている。

故に何日間も何ヶ月間も何年間もぶっ通しでこういう作業ができる。

「……まだしばらく続きそうだな」

一応、彼の家庭教師期間の1000年というのは現実空間での1000年だ。

加速空間に換算すれば約876万年相当。

これだけあればどんなに彼女の飲み込みが悪くても大丈夫だ、と余裕を持った上での時間。

彼が教えてみたところ、彼女の飲み込みは悪くはない。

ならば数万年程度の口スは全く問題がない。

「ほどほどにしておきたまえ。2体目からが面倒臭くなる」

彼はそう忠告して、彼女のカリキュラムを考える作業に戻った。
32億年分のカリキュラム、大まかなものを決めるだけでも相当な暇潰しになるはずだ、と彼は信じて。

そして、それからさらに膨大な時間を費やし、彼女はついに使い魔を作り上げた。

その使い魔は……一言で言えばメイドであった。

彼女、アシュレイは高笑いをしている。

自身が初めて作りだした使い魔は彼女の前で一糸纏わぬ姿で頭を垂れ、跪いている。

「……いや、何とか凝り性というか……ある意味前衛的というか……」

横にいたアシュタロスは呆れたような感心したような、そんな顔だ。

何しろ、その使い魔の魔力がバカみたいに大きかった。

それこそ、現時点では主である彼女を超越する程に。

単純な話だ。

作成主である彼女は膨大な時間、自身の魔力を使い魔の性能の底上げの為に使用した。

その結果、使い魔は彼女以上の力を持ったというだけ。
だが、普通使い魔とは言ってしまうえば召使いのようなものであり、
そんな手間を掛けたりはしない。

さて、使い魔というのは主の影響を受ける。

性格や身体的特徴や考え方などと様々だ。

もちろん、このような影響が出ないやり方もあるが、そこはアシ
ユタロスが初めての使い魔はそういったものを排除しないほうがいい、
と助言したので、アシユレイは特に何も対策を行ってはいない。
そして、今回、彼女が作った使い魔は身体的特徴が現れていた。
髪は金色であり、瞳は翡翠のような色合いだが……彼女は両性具
有であった。

「顔を上げなさい。あなたの名前を決めなくては」

アシユレイはそう呟き、数度頷く。

瞬間、彼女の頭を駆け巡る無数の名前。

その中から彼女は直感で選び取る。

「テレジアよ。あなたはテレジア」

その言葉に使い魔　テレジアは歓喜に満ちた表情を浮かべる。

使い魔は作成主から名前をもらうことにより、完全に作成主のも
のとなる。

名前の無い不完全な状態では消えてしまう。

そして、使い魔は当然のことながら主に対して無条件に好意的で
ある。

どんな理不尽な命令でも好意的に解釈し、実行してしまうのだ。

しかし、アシユレイは知ってか知らずか、使い魔のテレジアを完

全に自身に対して盲目にさせることを実行する。

彼女はテレジアの両頬を両手でもって優しく触る。

紅い瞳が交わり、数瞬の間

「あなたの誕生を心より祝福するわ。生まれてきてありがとう」

アシュレイは微笑み、そう告げた。告げてしまった。

横で見ていたアシュタロス「やっちまったな」と声を洩らしそうになった。

あんなことを使い魔にしてしまえば狂信的なまでの忠誠を使い魔は向けてくる。

ハッキリ言えば、いらなくなったときに処分に困るのだ。

しかし、それはあくまで彼の思考。

アシュレイとしては処分する気など微塵もなかった。

「さて、テレジア。私の名前を覚えておくわ。今はアシュレイ、でも将来的にはアシュタロス。好きに呼ぶといい」

「アシュ様……」

ぽーっと潤んだ瞳で見つめるテレジアの口から零れ出た言葉。

まあいいか、と彼女は了承の意を込めて頷く。

「で、テレジア。あなたはまだ生まれただ。強くなりなさい。知識を蓄えなさい。私の役に立てるように」

テレジアはゆっくりと頷いた。

一方アシユタロスはそのやりとりに疑問を感じていた。

今は確かにアシユレイよりもテレジアが魔力の量は上だ。

だが、どう頑張っても最終的にはアシユレイが圧倒的なまでの強さを持つものだから、文字通り使い魔なんぞ召使としての能力しかない。

人間社会を裏から操るにしても、そこまでの戦闘力はない。

そこまで考えて、アシユレイの単なる娯楽か何かだろう、と彼は結論づけた。

「で……君は使い魔を何体作れば気が済むのかね？」

アシユタロスは溜息混じりでアシユレイに尋ねた。

テレジアを作って、だいたい50年程はアシユレイはしっかりと勉強に励んでいた。

彼女と共にテレジアもまた勉強に励んでいた。

だが、アシユレイは総司令官は必要とか何とか言い出したのだ。

それはアシユタロスが自身の領地や40の軍団について説明をし

たのがきっかけであった。

具体的には領地を始めとした財産はそのままアシュレイが受け継ぐのだが、軍団については今のアシュタロスを慕ってやってきた者や傭兵なども多いのでアシュレイがアシュタロスとなったときには一度解散となる……というわけである。

この世界には軍団も領地も無いが、別世界にはあるので補足的な感じでアシュタロスは触れた。

そこでアシュレイは魔王軍の総司令官は必要なのだ、と閃いたのであった。

最高司令官は言うまでもなくアシュレイだが、軍を取りまとめるトップとしての人物を彼女は欲しい、と判断した。

……もちろん、今の彼女に軍勢と呼べるような戦力は存在しない。せいぜいがテレジアだ。

「今のところこんだけ」

やっぱり1人の作成に膨大な時間と魔力を費やして、彼女は2人の使い魔を作り上げた。

今回は自身の影響が出ないように対策を行いつつ。

そして、できあがった2人に対して彼女はテレジアと同じことをやらかしていた。

「シルヴィアとベアトリクス……ふふふ、これでいいのよ」

何だか満足そうな彼女にアシュタロスはやれやれ、と肩を竦める。見目麗しい長身のシルヴィアと、ともすれば少年のようにも見える中性的な顔立ちのベアトリクス。

美しく長い銀髪をストレートに流しているシルヴィアに対して、その金髪を三つ編み団子にして後ろで纏めているベアトリクス

後者はテレジアと同じ髪型であった。

テレジアに三つ編み団子をさせたなら予想以上に似合っており、もう1人とアシュレイが思った次第だ。

彼女の趣味がよく分かるチヨイスである。

言つまでもないが、人型の使い魔を作るとき、その容姿は作成主が思うがままに決定づけることができる。

さて、そんなシルヴィアとベアトリクスに使い魔として先輩のテレジアはというと、特に何も感じてはいなかった。

アシュレイが思うがままにやればいい、というのがテレジアの考えだ。

使い魔として至極当然の思考である。

「シルヴィア、ベアトリクスの2人には私が作る軍勢を率いてもらうおつと思つた」

ほう、とアシュタロスは興味深げな視線をアシュレイに向ける。

彼女が自分の手勢について言及したのはこれが初めてであったからだ。

前々から作る、とは聞いていたが、より具体的にはアシュタロスは知らない。

「ベアトリクスは全軍の指揮官に、シルヴィアには近衛でも率いてもらうおつかと」

「アシュ様」

ベアトリクスの声にアシュレイは首を傾げる。

「より強いものが精鋭である近衛を率いるべきです。私はそのシルヴィアよりも強い」

「こう言われてカチンとこない輩はいない。
シルヴィアはすかさず反論した。

「私の方がお前のような発育不良娘よりも強いに決まっている」
「な！ この体はアシュ様がお決めになったものだ！ 貴公はアシュ様のご意思を汚すと言うのか！」

食いかかるベアトリクスだが、シルヴィアは何処吹く風とばかりに受け流す。

出るところは出て、引つ込むべきところは引つ込んでいる理想的な体型であるシルヴィアと比べて、ベアトリクスの体は残念ながら、そこまで起伏にとんではない。

「……どうでもいいけど、あなた達、生まれてまだ1週間も経っていないから、強いも弱いもないと思うの」

アシュレイの最もな言葉に2人共、何も言えなくなる。

「それにベアトリクス。私はあなたなら全ての軍団の指揮を委ねられると思うの」

主からそう言われてはベアトリクスは何も言えない。

「個人的にあなたがそういった大勢の軍団を纏めるのが見たいからなの」

その言葉にベアトリクスはその白い頬を赤く染めて顔を俯かせる。そんな彼女の綺麗な金色の髪を弄びつつ、アシュレイは耳元で囁く。

「任せた」と。

「ああ、言い忘れたけど」

ベアトリクスは耳元から顔を離し、彼女はシルヴィアとベアトリクス、2人へ視線を交互にやりつつ告げる。

「2人共、武勇をあげなさい。何よりも強くなりなさい。そうしなくては私の格が落ちる」

アシユレイの考えは至極単純だ。

将来的に神魔に戦争を仕掛けるから、戦力はあればあるほどいい。そして、自分の使い魔はこんなに凄いだぞ、と自慢できるからだ。

……彼女が誰に自慢するかはわからないが。

ともあれ、主にそう言われて応えないのは使い魔ではない。

2人は重々しく頷いた。

「あ、2人とも得物はできるだけ剣を使いなさい。これ命令ね」

やっぱりヴィジュアルは大切よ、と彼女は呟く。

アシユレイ的には女の子が剣持って戦うのが心の琴線に激しく触れるのであった。

趣味丸出しだが、悪魔だから問題なかった。

夢はでっかく世界征服

「暇だ。暇だ。暇だ暇だ暇だ」

アシユレイはひたすら暇と連呼する。

加速空間に建っているアシユタロスが用意した豪邸。

その自室で彼女はあーだこーだ言っていた。

もはや数えるのもバカになるほど時間が経過した加速空間内のある日のことだ。

アシユタロスが魔界の会議に出席するために1ヶ月ほど家庭教師を休むことになった。

宿題として時間制御に関する理論の考察やら世界システムへの干渉への考察、空間と時間の相関性に関する考察などなど色々なものが出されていた。

いたのだが、1ヶ月の期間というのは当然現実空間での時間。

これを加速空間に直せばだいたい744年。

どんなにのんびりやっても恐ろしく時間が余る。

予習や復習をしても、さすがに飽きる。

そういうわけで彼女はどうせなら、と使い魔達に色々とえっちなことをイタして、そこで初めて自分が底なしの絶倫になっていることに気づいたりしたのだが……それでも時間を潰すのには限界があり、彼女はとにかく暇であった。

時間の感覚も相当鈍っており、だいたい10年が1日のように感じられる。

そして、恐ろしいことだが……彼女が吸血鬼になって今に至るまでの時間は現実空間では1年と経っていない。

1日24時間であり、1日で加速空間では24年の時が進む。
1ヶ月を31日とすれば現実空間での1ヶ月間は加速空間でおよそ744年。

現実での1年はおよそ8760年。

あまりにも効果が強烈過ぎて、寿命の無い種族にしか使えないシロモノであった。

「わかった、もう勉強すればいいのね……」

最初の200年くらいで予習にも復習にも飽きた彼女であったが、またやることにした。

あまりにも暇すぎるが故に。

これもまた寿命のない種族の持つ弱点であった。

退屈は最大の敵なのだ。

あまりにも退屈過ぎると本気で死にたくなる……これは寿命のある種族には到底理解できない感覚であった。

「アシュ様」

傍に控えていたテレジアは主の退屈を少しでも紛らわそうと提案する。

「そろそろアシュ様の御力を人間に知らしめても問題はないかと存じます」

テレジアの提案にアシュレイは目を輝かせた。

彼女の体感としてはもう呆れ返る程に長い時間、加速空間で勉強の日々。

確かに力を蓄えるのは大切だが、少しくらいは暴れた方が体いい、と彼女としては心の底で思っていたこと。

「テレジア」

おいでおいで、とアシユレイは手招きする。

テレジアはススス、と音もなく近づく。

傍にきた彼女を少し屈ませて、アシユレイはその頭を撫でる。

「全く、もつと早く思いつけばよかった。そうだとも、私こそがアシユタロスなのだから」

将来、彼女が正式にアシユタロスとなると今のアシユタロスが行った数々のことが全て彼女がやったことと世界の歴史が書き換わる。未来で起こったことが過去にまで影響を及ぼすという非常に稀な事例だ。

つまり、彼女がこの時代でアシユレイとして行ったこともアシユタロスの行ったこととなる。

「一種の存在不適合なのよね、アシユタロスは……」

え、と不思議な顔を向けるテレジアにアシユレイはくすり、と笑う。

「詳細はアシユタロスについて調べればわかるわ。好きで墮天したわけじゃないのよ、彼」

ともかく、と彼女は立ち上がる。

「シルヴィアとベアトリクスを呼びにいこう。アシュには……ドグ
ラに伝えておけばいいか」

銀色の光と金色の光がぶつかり合うたびに周辺の木々は薙ぎ倒さ
れ、地面には穴が空く。

空には太陽に模して造られた太陽が燦々と光を地上へと降らせ、
その喧騒には興味などないと言わんばかりに変わらず浮かんでいる。

1時間で数百にも及ぶぶつかり合い。

シルヴィアもベアトリクスもまた額に珠の汗を浮かべ、纏った鎧
のあちらこちらに傷をつけながら戦っていた。

今回で通算何回目になるか、数えるのもバカらしい、力比べ。
お互いに声も無く、ただ無心に剣を振るう。

しかし、両者共動きを止める。

自身の主の気配を察知したからだ。

2人は示し合わせたように剣を収め、直立不動で主がやってくる
方向へと体を向ける。

「またやってたの」

あなた達も暇ねー、とアシュレイは声を掛ける。

勉強に励む傍ら、暇さえあればとにかく張り合う2人だ。

「アシユ様、何か御用ですか？」

シルヴィアの問いにアシユレイはこくり、と頷く。

「ベアトリクスを抱きにきたの。今ここで」

一瞬でベアトリクスの顔が真っ赤に染まった。

あわあわ、と狼狽する彼女にアシユレイはくすくすと笑う。

シルヴィアはベアトリクスに殺気混じりの視線を送るが、当の本人はそれには気づかずただ混乱するばかり。

「まあ、それはいいとして、シルヴィアを抱きにきたの」

シルヴィアの顔が歓喜に染まる。

そして彼女はゆっくりと身に纏う鎧を脱いでいく。

今度は一転、ベアトリクスが赤い顔のままシルヴィアを睨みつけている。

「まあ、それも今度にとっておいて、本題はそろそろ人間達に私の力を示してやるう、と思っ。いわゆるひとつの出撃よ」

「あの、アシユ様」

もじもじとシルヴィアは声を掛ける。

既に彼女は鎧を脱ぎ去っており、鎧の下に着ていた黒いアンダーウェア姿だ。

アシユレイには大きな胸が非常に眼福で全くもって問題のない姿だ。

「その……駄目、ですか？」

伏し目がちに、アシュレイと同じ紅い瞳で見つめるシルヴィア。

「ちょっとくらい遅れても問題ないわ……ええ、1年くらいは問題ない」

そのまま一行は住居に戻った。

寝室でナニが行われたのは言うまでもなかった。

「何か10年くらい家に引きこもってヤツてたけど、まあ問題ないわね」

元々暇潰しだし、とアシュは続けた。

彼女の背後に控えるのはテレジア、シルヴィア、ベアトリクス。

4人は現在、加速空間から現実世界へと戻ってきていた。

「とりあえず、村か何かがないかどうか調べなさい」

出た場所は見たことのない場所であった。

あの草原ならどうにかそれなりに分かるのだが、ここは森の中だ。

アシュレイの命を受けて、すぐさま3人が探索魔法を展開する。
数秒と経たずにテレジアが口を開いた。

「ここから少々離れた場所に多くの生体反応があります。数はおよそ300、そして多少大きな魔力を持った者がいるようです」

魔族かと思われ、と付け足したテレジアにアシュレイはどうしたもの、かと思案し、すぐに答えを出す。

「私の許可無く人間を虐めるとは何事か……そこに可愛い女の子がいるなら尚更」

断っておくが、如何に高精度の探索魔法を用いても、そんなところまではさすがにわからない。

「私は宣言する！ 今この瞬間にこの世界は私のものだ！」

傍目から見れば頭の痛い人にしか見えないのだが、幸か不幸か、ここには彼女の使い魔しかいない。

当然、使い魔達は尊敬やら何やらの好意的視線しか向けない。

世界征服なんてことをすれば神界・魔界から総攻撃を食らうのだが……今この場に彼女を止めるものはいなかった。

彼女の第一目標は言うまでもなく世界征服。

何かもう暇だし、面白そうだから人間を支配してやるぜ、という

ノリである。

誰もが成し遂げられなかったことをやってこそ価値があるし、何より最高の暇潰しになる。

そのついでとして、各地の王女やら貴族の令嬢やら町娘やらを誘惑して自分のモノにしてやる、という第二目標。

第二目標に関してはアシュレイは達成したも同然と確信している。永遠の命、永遠の若さ。

世の女性達が喉から手が出る程に欲しいものであった。

そして、アシュレイは吸血鬼化させることでそれを与えることができる。

「ふふふ……」

これからのバラ色の人生に彼女は思わずほくそ笑む。

「とにかく、何かちょっとかい出してる魔族ブツ潰しに行く。何、軽いもんだわ」

「どつしてこうなった！」

アシュレイは思わず天を仰いで叫んだ。
キーヤんが彼女に囁いた。

『あなたがやったことですよ』と。

時間は5分ほど遡る。

アシュレイ一行は空を飛んで堂々とその村に現れた。

とにかく派手に、ということから各々が魔力を垂れ流して。

さて、ここで重要な点は彼女らの魔力だ。

アシュレイは言うまでもなく、その使い魔達も皆、上級魔族……早い話が、魔神を除けば上から数えた方が早い、膨大な魔力を持っている。

そんな連中が魔力を垂れ流して、自分の存在を誇示しつつやってきたのだ。

村にいたのはアシュレイ達と比べるのも可哀想な程に低級の魔族。その魔族は顔を真っ青にして、全身から冷や汗を垂らして一目散に逃げ出してしまった。

村人達は残念ながら極々普通の人間なのでそういったことには鈍い。

故に若干の寒気を感じた程度で済んだ。

魔族が大慌てで逃げ出していくのを察知したアシュレイは人間達が魔力を間近で浴びて死んでしまわないように、とわざわざ抑えたところが妙に律儀である。

「よくぞ村をあゝの魔物から救っていただき……ありがとうございます
す」

村長が深々と頭を下げ、残った村人達も同じように頭をアシユレイ達に下げている……というのが現在の状況だ。

「い、いや、あの、べ、別にあんた達の為に来たんじゃないんだからねっ！」

思わずそんなことを言ってしまうアシユレイ。

この概念はあと1万年は経たないと理解されないだろう。

時代を先取りしすぎである。

そして、その発言を謙遜と受け取った村長以下村人達はより尊敬の眼差しを向けている。

残念ながら、アシユレイ達は翼も角も今のところ生えていないので、見た目は単なる人間だ。

「と、というか！ 私たちも魔族で悪魔なんだから！ 人間じゃないの！ がおー！ たべちやうぞー！」

両手を挙げて、牙をむき出しにしてみるアシユレイ。

鋭い牙が丸見えだ。

しかし、村人たちは微笑ましいものを見るような目を向けてくる。

「あれ？ 何だか失敗した系の予感……」

おっかしいなー、と首を傾げるアシユレイ。

残念ながら彼女には迫力が全然無かった。

修行が終わる頃には迫力はある……かもしれない。

「どうぞ、お名前をお教えてください」

その言葉にアシュレイはここで怖さをアピールしようとする。

「我が名はアシュタロス！ 今は故あってアシュレイと名乗っているが、魔界の魔王である！」

迷うことなく彼女はそう言った。

勿論、将来的にはそうなるのであって、今はそうではない。ハッターかましてもいいかな、と彼女は思ってしまった。

「魔界という国の王様ですか……素晴らしいお方です……」

「ちよっとテレジア！ どうなってるの！」

何だか勘違いされているらしいので、アシュレイはとりあえず忠実なる従者に尋ねた。

「アシュ様、魔界……というか、地獄の概念自体がまだ出ていないのでは……？」

「……それもそうね」

それなら仕方がない、とやれやれ、と溜息を吐くアシュレイ。

この時代、まだまだ原始宗教が盛んであり、悪魔の概念はあっても、地獄とかそういった概念はまだ登場していない。

「何か萎えたから帰る。私の凄さを知らしめてやろうと思ったのに……」

ブツブツと愚痴を言いつつ、帰ろうとするアシュレイを村長が引き止めた。

「よろしければこの村の用心棒をしてはいただけませんか？ 恐ろ

しい魔物もあなた方ならきつと……」

「何をくれるのかしら？ お供え物をして欲しいわ。ほら、私、一応魔王だから」

「では若い娘を……」

若い娘と聞いてアシユレイは口元を歪めた。

その顔を見、村人達からどよめきが起きる。

「……言っておくけど」

不安そうな村人達にアシユレイは告げる。

「殺して食べようとかそういうことはしないわよ？ そんなもったいない……じゃなかった、悲惨なことはダメ、絶対」

本音がポロリとこぼれるが、ともあれ、彼女の言葉に村人一同は胸を撫で下ろす。

「血をちょこつともらうかもだけど、基本的に夜のこととかそういうことだけ」

「アシユ様！ ぜひ、うちの娘を！」

そんな声が飛んできた。

思わず目を丸くするアシユレイ。

その声をきっかけにうちの娘も、うちの娘を、とあちこちから声が上がる。

「魔族の私が言うのも何だけど……倫理観どうなってんの！ 夜に性的な奉仕を要求するのよ！」

「酷いことをされなければ十分です……それだけ、我々はあの魔物

に……」

村長は力無くそう告げる。

「どうやら結構酷いことをしていたらしい、とアシュレイはあたりをつける。」

「何より王様にお仕えできるとは光栄なことです」

「……ああそう」

投げやりになるアシュレイであった。

邪淫地獄にて

結局、アシュレイはアシュタロスが戻ってくるまでの間、その村で暇を潰した。

とは言っても、彼女がやったことは適当に知識を与えて、村の娘を全員美味しく頂いたくらいだ。

「ということがあったのだけでも」

「まあ、いいのではないかね？ そういうことも必要だ……多分」

彼女の1ヶ月間の暇潰しにそう言いつつ、アシュタロスはふと思う。

もしかしたら、彼女の精や魔力を受けて人間の中から突然変異が誕生するかもしれない、と。

「それはそれでまた面白い……」

「ん？」

「何でもない。さて、本日の勉強だ。そろそろ魔界の概念について本格的に教えておかないとな」

アシュレイは目を輝かせる。

彼女にとって魔界とは新天地である。

「言うまでもないが、魔界は地獄とも呼ばれる。サツちゃん……いや、サタンと我々7人の魔王でもって統治している」

だが、とアシュタロスは続ける。

「この世界は少々違う。時間軸的に過去にあたる世界だ。故に今、魔界を統治しているのはサタンや我々ではない」

「この前の会議はどこ行ってたのよ？」

「この世界ではない、時間軸的には未来にあたる別の世界の魔界だ」

なるほど、と頷くアシュレイ。

そして、彼女は閃いた。

すなわち、今ならリリスを自分のものにできるんじゃないかと。

魔王になっていない……否、そもそも存在しているかもわからないが、もし存在しているなら単なるサツキュバスの1人に過ぎない。今のうちに手に入れてしまえばアシュレイ的にはバラ色の未来が待ち受けている。

「……ねえ、今ってリリスっているの？」

「ああ、あの性悪か……」

渋い顔となるアシュタロス。

「何かあったの？」

「……アレは手に負えない。そうか……アシュレイ、君はそうするのか」

彼女が考えていることがわかったアシュタロスはなるほど、と頷いた。

彼としては……というか、彼だけでなく魔王連中はリリスによって非常に迷惑を被っていた。

お気に入りの魔族の子を寝取られたり、冗談では済まないイタズラをされたり……

「リリス被害者友の会が全面的に支援する」

「……苦労したのね」

思わずホロリ、ときてしまうアシユレイ。

「それはさておいて、魔神と魔王の区別はわかるかね？」

「どっちも同じじゃないの？」

「違う。かなり違う」

まじで、と返すアシユレイにアシユタロスは頷き、答える。

「魔王のほうが魔神よりも力が強い。そして魔神とは通称に過ぎない。正式名称は上位悪魔神族。上級魔族の中でも特に優れた者が魔神と呼ばれ、その魔神の中で一握りの者が魔王となる」

「なるほど……」

「私は魔王に限りなく近い魔神だが……君はおそらく魔王になれるだろう」

わーい、と万歳するアシユレイ。

彼女としては強ければ強いほどいいのである。

将来的には自分で新たな種族でも作ってハーレムを、と考えてしまっう程に。

「ともあれ、厳密に言えばこの世界にはアシユタロスは存在していなかった。だが、君はもうなってしまった。この世界のアシユタロスに」

「どうということなの？」

「私は確かに平行世界に無限に存在している。だが、この世界は同じでありながら時間の進みが異なる。故に私はまだこの世界には存在していない」

「それってわりと重要なことだったと思うのだけど？」

「まあ、別に知っても知らなくても特に変わりはない。君はアシユタロスになるのだから」

確かに、と頷きつつ、彼女は続きを促す。

「君は人間達に知識を与えたらしいな。私は墮天する前は豊穡の神であつた。これでこの世界では私ではなく、君がアシユタロスとして上書きされた可能性がある。そうなつたと仮定すれば、この世界でのオリジナルのアシユタロスは君となる。つまり、この世界をオリジナルとして無限の平行世界が展開された可能性があるわけだ」

アシユレイは啞然とした顔を披露する。

彼女が与えた知識はそれこそとてもいい加減なものだ。

耕してもいないところに種をまいたりしていた村人達に畑の概念を教えたりした程度だ。

その程度で豊穡の神になるのか、そしてそこまで大事となるのか、甚だ怪しいが……

「まあ、しばらくしたらその村に行つてみるがいいさ。それで全てが分かる」

「やだ怖い。何この流れ……」

「これが世界だ。世界とはこういうものだ」

偶然は全て必然なのだ、と付け加えたアシユタロス。
彼としても色々と思ひ当たる節があるのか、複雑な顔だ。

「まあ、それはそれとして……リリスを探しに行きたいのだけでも？」

「まだ無名の淫魔だろうから、魔界か、それとも人界のどこかにいるだろう……いや、まだ誕生すらしていないかもしれない」

「……助けて！ アシユえもん！」
「ハハハ、しょうがないなあ、アシユレイくんは……」

というわけで、アシユタロスはリリース追跡機を1時間で作り上げた。

リリースのデータは嫌というほど持っているアシユタロス……正確にはリリース被害者友の会だ。

この機械、データを入力して5分で現在の居場所がでてくる優れものである。

「ところで……モノにするにはどうすればいいの？」

居場所が出てくるまでの時間、アシユレイはアシユタロスに問いかけた。

彼は肩を竦める。

「簡単なことだ。淫魔をモノにするには淫魔が欲しがるものを大量に与えて、中毒にしまえばいい。君のモノなら極上だろう」

「把握したわ……いわゆる、激しくやればいいのね」

「サドに振舞っていてもマゾであるのが淫魔だからな。激しくやればやるほどいい……らしい」

うきうきとした気分のアシユレイにアシユタロスは苦笑する。

リリースの悪行をどうにかしようとしてそれを実行したものの、振り返ちにあっている魔王達である。

アシユレイがモノにできるかどうかは微妙なところだ。

「ん？」

「む？」

ピンポンという間の抜けた音。

2人は追跡機を見れば画面に追跡結果が出ている。

その居場所は……

「……邪淫地獄？　なんだか胸と股が熱くなる名前だわ……」

「うむ、君の考えは正しい。人間は色々と責め苦を負わされるが……
ぶっっちゃければ淫魔の巣だ」

「ぶっっちゃけたわね。よし、私、淫魔全員モノにしちゃうぞ！」

俄然はりきるアシュレイ。

様々な種類の淫魔を妄想して気味の悪い笑みを浮かべている。

「ふむ……ついでに向こうの空気に慣れておくといいな。おそらく
君もそろそろ見た目が魔族のようになる頃合いだ」

「角とか翼とか……胸が熱くなるわ……角付きは強いという法則が
あるし」

「早速、いくかね？　修行は向こうでもできる」

「いく！」

そういうわけですいにアシュレイは地獄入りとなったのであった。

しかし、地獄に行くというのに彼女の喜びよう。

魔族になると感覚も結構変わるものらしかった。

「……うひひ」

アシュレイは笑う。

テレジア達はアシュタロスと共に地獄の別の場所へと案内し、そこで適当に魔族と戦ってレベルアップするように命令した彼女。

彼女の目の前には楽園が広がっていた。

地獄というからには暗い空、荒涼とした大地……そういうものを想像しがちだ。

だが、今、アシュレイの目の前には街が広がり、そこには淫魔が…… 具体的にはサツキュバスがわんさかといた。

幼女から大人までよりどりみどり。

餌となる人間がいない為か、道端で淫魔同士でサカっている。

人間の倫理観を持ち込んではいけない場所だ。

「うふ、うふふふふ……」

気色悪い笑みを浮かべつつ、数度の深呼吸。

肺いっぱい広がる淫靡な香り。

そんな彼女を近くにいた淫魔が見つけた。

彼女はすぐさま他の淫魔に知らせると同時に素早くアシュレイに近寄ってきた。

「ねえ……あなた、やらない？」

「やる。すぐくやる。てか、全員とやる」

そういうとその淫魔はくすり、と笑いアシュレイに抱きついてき

た。

豊かな胸の感触、そして淫魔からの淫靡な匂いに彼女の理性はプツン寸前。

その様子に淫魔はアシュレイの耳元で囁いた。

「いっぱいしてあげる」

アシュレイの理性は完全に崩壊した。

そして数時間後

「さすが淫魔！ 淫魔万歳！」

万歳三唱をするアシュレイ。

その周りには無数の淫魔達がぐったりと地面に体を横たえている。色々な体液に塗れて眠っているのだが、その寝顔はとても幸せそうだ。

淫魔の主食は人間の精気……もっと具体的に言えば性欲だ。

ここで重要なところは別に人間でなくとも性欲があれば食料足り

えるところだ。

言うまでもなく、人間の数は多く、その性欲は強い。故に主食だ。しかし、別に魔族でも性欲が強ければ淫魔は栄養を取ることができる。

だが、魔族で性欲が強いという存在は中々いない。

そもそも、破壊欲や知識欲といったものが強い魔族は多いが、性欲が強い魔族というのは淫魔以外ではあまりいない。

性欲を司るのはアスモデウスであるが、トビト記によれば人間の少女に手を出すこともできなかった小心者とされている。

さて、そんな魔族の性欲事情に降って湧いたアシュレイだ。

人間的な性欲を持ったまま魔族となった彼女はキーヤンの提案によりサツちゃんによって淫魔的体質にされ、底なしの絶倫にされてしまった。

早い話が、淫魔と同じように栄養を摂取することもできるし、淫魔と同じように他者を墮落させることができる上に淫魔達に栄養を与えることもできるのだ。

つまり、淫魔達にとっては最高の魔族。

そんなアシュレイがやりまくった結果が今の惨状であった。

「とりあえず、これだけ私の味を覚えさせておけばもう私しか目に入らなくなる……」

そう呟き、彼女は高笑い。

その声に目を覚ましたのか、1人の淫魔が這ってアシュレイの足に縋りついた。

背中にあるコウモリの如き翼、セミロングの美しい銀色の髪に紅い瞳、その白い肌は火照って朱に染まっている。

「もつと……」

そう呟き、潤んだ紅い瞳を向けてくる。

アシュレイは背筋がぞくぞくとした。

魔族になってよかった、と思いつつ、問いかける。

「あなた、名前は？」

「……リリース」

アシュレイは思わずほくそ笑んだ。

もうモノにしたも同然であった。

基本的に地獄は「力の強い者が偉い、弱い奴が悪い」というとてもシンプルな構造だ。

未来において魔王の一柱となるほどに強大な魔力を持つリリースといえど、今はただの淫魔にすぎない。

「リリース」

名を呼び、アシュレイは彼女の顔を両手で包みこみ、その紅い瞳をまっすぐに見つめる。

「未来永劫、私のモノになりなさい。毎日壊れるまでしてあげる」

淫魔にとってある意味最高の殺し文句にリリースはゆっくりと頷いた。

「うふふふ……アシュからもらった加速空間でやりましょうか……淫魔全員入れないとね……ここにいる淫魔全部をね……」

アシュレイはバラ色の未来を妄想し、再び高笑いを始めたのである。

つ
た。

「悪魔だから問題ない」

「んー……」

アシュレイは背中に生えてきた魔族の……というか、悪魔の証である真つ黒い翼を動かしつつ、手で触る。

滑らかでいつまで触っていても飽きない、そんな感触に思わず彼女は笑みが溢れる。

その様子をリリスは微笑を浮かべて見ている。

「角はまだ違和感があるわね……」

そう言いつつ、彼女は頭に生えてきた角を触る。

ヤギのような角だ。

そんな彼女にリリスは手を伸ばし、彼女の髪を弄る。

「私の可愛いご主人様」

ふふふ、と笑い、髪にキスをする。

終始、リリスはこの調子。

これにはさすがのアシユタロスも啞然であった。

リリスの悪行を知っている彼としてはこんな借りてきた猫のように大人しいリリスは初めてであった。

彼の世界のリリスとは違うとはいえ。

「アシュレイ」

バカッブル……というよりか、リリスの一方的なアプローチを見

なかったことにして、アシュタロスは声を掛けた。

「そろそろ地上に戻らないかね？」

「えー」

不満そうな声を上げるアシュレイ。

「いや、確かに勉強は捗った。実践的なことも地獄でなら行える。だが、そろそろ君が人間達にとってどういう存在になっているか、確かめに行っても問題はないだろう？」

「今日でどのくらいだっけ？」

「加速空間換算で8万7600年、現実だと10年だ」

アシュレイはなるほど、と頷いて体をほぐすべく伸びをする。翼がピンと左右に張る。

やがてアシュレイは伸びをやめて翼を僅かに動かしつつ、リリースの頭を撫で始める。

「まあ、いいじゃないの。というか……アウゴエイデスだっけ？ 天使とか神とか悪魔の究極武装形態よね？」

「うむ」

「なんで私はドラゴンっぽいの？」

「さすがにそれは私にもわからない」

アウゴエイデス、主神や天使達は光体、悪魔のものは暗黒体と表記されるこれらは高次元での神や悪魔の肉体だ。

通常空間における肉体とは大きく異なり、その肉体のもつエネルギーは霊格にもなつて上昇し、魔王クラスともなれば下手なブラックホールやクエーサーよりも遥かに大きいものとなる。

人間レベルで考えれば途方もないものであるが、魔王や魔神、神

々や天使レベルで考えれば極々当たり前のことだ。

「しかも、何か頭が三つ、尻尾が七つあるし。慣れないと視界がきついんだけど」

「だからわからないと言っているだろう。ともあれ、どうするのだから？ 戻るのか？」

「んー、新しい出会いがありそうな予感がするのでもうちよつとだけいるー」

「……この前も新しい出会いが何とかと言って、ケルベロスの子供を拾ってこなかったかね？」

「ドレミのこと？」

「そうだ。そのドレミは今どこに？」

「ベアトリクスが騎士道精神を叩き込むとか何とかって地獄連れ回してららしいの。シルヴィアとテレジアも何か地獄巡りして修行してるとか何とか」

「……犬に騎士道精神……いや、そもそもベアトリクスは悪魔ではなかったか……」

「一応、ドレミも人型になれるからいいんじゃないかしら？ あ、それとドレミって正式名称じゃないから。右からドーラ、真ん中のレナ、左のミアアね。それと両性具有だから。地獄の魔物って無性か両性具有が多いのね」

「どうでもいいな」

本当にどうでもいいことだった。

ともあれ、今しばらく地獄に滞在することにアシユタロスはどうしたものか、と考える。

別に彼としては地獄だろうが地上　いわゆる、人間界だろうがどこでも構わない。

ただ問題は今の魔界において、アシユレイが目立ち始めていることであった。

まだ魔王クラスは動いていないが、下っ端が調子にのっている新入りを潰そうとあちこちで動き始めている。

加速空間には滅多なことでは弱い連中はやってこないとはいえ、騒がしくなるのは勘弁して欲しいアシユタロスだ。

「さて」

アシユレイはリスの頭を撫でるのをやめた。
名残惜しそうなリスに後ろ髪を引かれつつ、彼女は宣言した。

「ちょっと自分の部下が欲しいの。淫魔じゃなくて、使い魔でもなくて、ペットでもない自分の部下が。狂信的な部下が欲しいの」

彼女の今の部下はリスをはじめとした淫魔の皆さんと数人の使い魔、そしてペット1匹だ。

彼女としても、さすがにアンバランスなので強化しようと思った次第。

将来的には数億の悪魔の大軍団をつくってやるぜ、と密かな野望を彼女は抱いていたりする。

「そこらの魔族でもさらってくるのかね？」

「んー、暇だから弟子でもとろうかなと」

膨大な年月を勉強によって過ごした結果、アシユレイはアシユタロス並とはいかないまでも、結構な知識を蓄えている。

弟子をとって教える問題はないレベルだ。

「悪魔が弟子……？」

「そついうこと言わない。新しい概念を取り入れることによって常に進化せねばなるまい」

「いや、君がいいなら問題ないが……極稀にだが寝首を搔かれることがあるから、基本的に魔族は弟子なんぞ持たない。完全な力による上下関係のみということを入れておくように」
「はい。でも、リリースは私に逆らわないよね？」

アシユレイの問いにこくこくと頷くリリース。

彼女から……というか、淫魔からすればアシユレイは最高の食事を提供してくれる存在だ。

文字通り、アシユレイ抜きでは生きていけない。

「ともあれ、ちょっと弟子探してくる。ついでに適当な悪魔ブツ殺してくる。絶望の悲鳴とか最高にぞくぞくするのよね。あ、リリース、ついてきなさい。殺すと昂ぶるのよ」

悪魔らしい嗜好に変わっている彼女。

人間からすれば最悪であるが、彼女は悪魔なので全く問題なかった。

そして彼女達が加速空間を飛び出して1時間。
早くもアシユレイは苦難に直面した。

「いいのがいなくて悲しさを包まれた私」

アシュレイはそう呟いた。

早い話、ピンとくる相手がいなかった。

そんな彼女は現在、適当に歩きまわって因縁つけてきた魔族をブツ殺し、ついでにその場にいた無関係の魔族に因縁つけてブツ殺し、その屍の山の上に座り、リリスの頭を撫でていた。

「ん？」

ふとアシュレイが視線を向けると、物陰からこちらを窺う翠の瞳。視線が合うとすぐさま物陰に消えた。

はて、と思い、彼女は探査魔法を走らせる。

その物陰付近から彼女から見れば極めて小さい魔力反応を察知した。

よくて中級魔族の下、下手をすれば下級魔族クラス。

今、アシュレイとリリスがいるところは地獄の第9圏、反逆地獄。またの名をコキユートス。ここは四層に分かれており、そのうちの上から二番目、アンティノラだ。

将来的には墮天した天使達が封印される場所であるが、まだ何も無い。

そんなところにこんな弱い存在がいるというのは極めて希少だ。いたとしても大抵の場合、より強い魔族に鬪り殺しにされるか、拷問する為にペットとして飼われるか、そういう未来しか存在しない。

「そこにいるヤツ、ちょっと出てきなさい。怒らないから」

その声を掛けると、物陰からその魔族は現れた。

小柄な少女だ。

金髪を背中の中半ば辺りまで伸ばし、頭には渦巻状のアモン角、その耳は尖っており、背中からは小さな翼が生えている。恐怖からか、その体は震えていた。

「誰？」

「わ、私はエシユタルです！」

名乗った少女をじーっと見つめるアシュレイ。その様にエシユタルの緊張はピークに達する。

「なんでここにいるの？ 素直に教えてみなさい」

エシユタルは口を数度、開きかけては閉じるといった動作を繰り返したが、どうにか言葉を紡ぐことができた。

そして、彼女は今まで様々な強い魔族に媚びを売って生き、今回もまたそのご主人様が遊びついでにたまたま見かけたアシュレイに喧嘩を売って瞬殺されたという経緯を話した。

弱いヤツが生き残る為の必須技能がゴマスリであるのは人間社会と微妙に共通しているなあ、と妙なところで感心してしまうアシュレイ。

もう彼女が人間であった頃は太古の昔のこと。

魔族である為か、そこまで記憶は薄れてはいないが、価値観や常識は大きく変化している。

今ならゴマスリするぐらいなら、その相手の喉笛を掻っ切る、という選択肢を彼女は取ることだろう。

ともあれ、彼女はゆっくりとエシユタルに近寄り、その顎をつかみ、エシユタルの顔をじっくりと眺める。

エシユタルは恐怖に顔を歪めつつも、されるがままで。

どう足掻いても倒すどころか絶対に逃げられない絶望的な力の差が2人の間には存在した。

やがてアシュレイは顎から手を離し、エシユタルの髪を触り始めた。

心地良い肌触りに彼女は機嫌を良くしつつ、ふと気がついた。

エシユタルの翼は少々独特であった。

コウモリのような形状の翼であるが、その翼の上側部分から飛膜の後ろ側へとかけて髪色と同じ金色の体毛が生えている。

レアだ、と瞬時に悟ったアシュレイは躊躇なく告げた。

「ねえ、あなた。私に弟子入りしない？」

「……え？」

思わずアシュレイの顔をまじまじと見つめるエシユタル。
なぜという疑問が彼女の頭を過ぎる。

「私、アシュレイっていうの。将来的にはアシュタロスなんだけど、あなた、弟子ついでに部下にならない？」

「えっと……」

「あ、殺したりしないわよ？ もったいないもの」

「それじゃ……よろしくお願いします」

何だかよく分からないが、命が助かるなら、とエシユタルは彼女の申し出を承諾したのであった。

「それじゃ戻りましょうか。帰ったら早速……」

怪しい笑みを浮かべるアシュレイにエシユタルは慄く。

もう早速美味しくいただいでしまおう、と思っているアシュレイ

であった。

数時間後

「君の性癖から予想はできていたが、こんな赤子を拾ってくるとは……」

呆れ顔のアシユタロスにアシユレイはベッドの上で首を傾げる。
彼女の右横にはエシユタルが裸で寝息を立てており、その左には
やっぱり裸のリリスが満足そうな顔で寝言を言っている。

「赤子って……魔族に見た目と年齢は比例しないでしょう」

そう言いつつ、彼女はベッドから降りる。

彼女もまた全裸なのだが、アシユタロスは気にも止めない。

彼には性欲というものが皆無に等しいからだ。

「……彼女の魔力から判別できなかったのかね？」

「小さいとは思ったけど、単なる下級魔族でしょ？」

「いや……私が見たところ、生まれて100年経ってるかどうか、
というところなんだが……？」

言つまでもなく、神や悪魔というのは基本的に不老不死であり、殺されない限り存在し続ける。

勿論、殺しても復活する主神や魔王、魔神クラスは例外であるが……ともかく、寿命がないので、100年程度ではまだ赤ちゃんに等しい。

つまり、アシュレイはロリどころかペドをも突き破った幼い赤ちゃんとイタしてしまったのだ。

「……あ、悪魔だから問題ない！」

都合良く正当化したなあ、とアシュタロス苦笑する。

「ともかく、エシユタルは傍におく。テレジア達もそろそろ呼び戻す。以上」

「ま、私は関係の無い話だ。好きにやってくれたまえ」

そう言つてアシュタロスは締めくくつたのだつた。

偶然は必然であった

「そついえばそろそろ地上に戻るか？」

ふと思いついたようにアシユタロスがアシユレイに問いかけた。
本日の講義は全て終了し、あとは帰ってのんびりするだけという
そのときに。

「今日で何年だっけ？」

「前に聞いたときから加速空間換算でおよそ17万年だな。現実だと20年」

「何か色々あったような気がするけど、エシユタルの他にディアナ
が加わった程度しか変化がなかった」

「お呼びですか、アシユ様」

アシユレイの言葉から数秒と経たずに傍に現れたディアナ。

背中にコウモリのような黒い翼が生えているのを除けば、見た目は
極々普通の人間の女性だ。

ただ問題点が一つ。

「相変わらず、けしからん乳をしているわね……！」

一言で言えばすごい大きさ。

もっと言えばおっぱい革命。

何かもう悪魔なのに神秘的かつ神聖的ですんごい胸であった。

アシユレイが自分のところに連れてきたのも、その容姿が気に入ったからだ。

連れてきたとはいえ、それはほとんど誘拐と同じであった。

魔族同士、破壊欲を満たす為の殺し合いはよくあること　なにせ、肉体が損傷してもすぐに再生する　だ。

そんな感じでディアナもまた戦っていたところをアシュレイが見かけ、一目で気に入り、ディアナが戦っていた相手を瞬殺して、ついでにディアナも半殺しにした上で私に従え、と迫った。

魔界の基本である力による上下関係はスッキリとしたもので、人間にありがちな、感情的な不都合というものは一切無い。

また力の差があまりにも大きすぎるので下克上をしよう、という選択肢は下位の者には存在しない。

そんなわけでディアナはあっさりアシュレイに忠誠を誓ってしまったのであった。

「特に用はないわ。しいて言えば……その乳揉ませる」
「存分に……」

そうやって胸を張るディアナ。

ぼよんと揺れる大きな胸部装甲。

「どーでもいいが、大人のエシユタルも結構大きくはなかったかね？」

「私はどちらかというと彼女は子供形態の方が好きだわ。いや、大人形態もいいけども」

一応、魔族も時間経過によって大人へと成長する。

しかし、精神生命体である魔族や神族にとって、見た目など簡単に変更できるものだ。

そういうわけでエシユタルには子供形態を取らせているアシュレイである。

無論、アシュレイ自身も大人形態になれるのだが、彼女自身が少女形態を気に入っているということもあり、普段は少女である。

「ともあれ、そろそろ地上に行ってみましようか。麗しき地上！あの村はまだあるのかしら？」

彼女のこの一言で地上……すなわち、人間界へ戻ることが決定したのであった。

「イシュタル様！ イシュタル様！」

歓呼の声で迎えられたアシュレイ。

四方八方を人間に囲まれているが、誰もが好意的だ。

彼女がかつて訪れた村は村という規模を大きく超えて街となっていた。

彼女がやってきたのを見つけたある中年男性がイシュタル様、と叫んだところで今のこの騒ぎとなった。

「ていうか、イシュタルって誰よ……私はアシュレイでアシュタロス！」

「尊敬の意味を込めてイシュタル様と呼ばせていただいております」

叫べばそんな言葉が返ってきた。

どうやら尊敬の形容詞をつけて勝手に名前を変化させてしまった

らしい。

イシュタル、というのはアシュタロスが墮天する前、呼ばれていた名前だ。

世界の流れに恐ろしさを感じつつも、アシュレイはその背中にあ
る翼をはためかせ、角を指さす。

「この翼と角を見なさい！ 私は悪魔！ あ・く・ま！」

「なんと美しい翼じゃ……まさか死ぬ前にもう一度イシュタル様にお会いできるとは……」

30年前は青年であった老人が頭を垂れる。

アシュレイはがっくりと項垂れた。

もう観念するしかないらしい。

さすがの彼女もここまで好意を向けられては容赦なく皆殺し……
なんてことはできない。

「イシュタル様、どうぞ神殿の方へ……清らかな巫女がお相手致します」

清らかな巫女、という単語に反応した魔王候補はほいほい住民達
について行ってしまった。

「人間にしてはよくやったじゃないの」

アシュレイは玉座に座り、供え物として出されたご馳走に舌鼓を

うつ。

神殿の天井は高く、石畳の床は綺麗に掃除されており、清潔感が漂っている。

彼女の機嫌が良いのはそれらも確かに重要な要素であるが、最も大きな原因ではない。

その大きな原因は白い薄手の服を纏った若い少女や女性達だ。

彼女達は10代前半から20代前半までの生娘。

色々な意味でアシユレイの大好物であった。

「イシユタル様、葡萄酒をどうぞ」

「これも魔王の特権ね……」

そんなことを言いつつ、コップに葡萄酒を注いでもらつたアシユレイ。

そして一気に飲み干してふと考える。

私、何しに来たんだっけ？

「ナニしに来たんだった。つまり、私が穢すのは全く問題ない。だって、私の巫女なんだもの」

そう呟いて彼女は手近な巫女を抱き寄せる。

巫女達も覚悟はできているのか、嫌な素振りは全く見せず、むしろ興奮した様子だ。

「よーしよーし、私は自分を崇める人間には利益を与えざるを得ない……つまり、この街に私は幸福をもたらそう」

そう告げ、彼女は巫女のお尻を触りつつ考える。
何をあげれば幸福になれるか、と。

数秒思索し、ここはやはり農学と医学を伝えよう、と。

とはいうものの、医学はともかくとしてさすがのアシュレイも農学をアシュタロスから習ってはいない。

アシュタロスから聞かねば、と頭にとどめておく。

基本、何でも知っているアシュタロスだ。きっと農学についても何か知っているだろう、というアシュレイの楽観的な予測だ。

彼女の予測はあながち間違っていない。

なにしろ、アシュタロスは悪魔となる前は豊穡の神であったのだから。

「ところでこの街は何という名前なの？」

「この神殿や住民の住居がある地区―帯をソドム、商業地区としてゴモラと呼ばれております」

「……決めた。私、この街を全身全霊をかけて護るわ」

嘘か本当か定かではないが、神の怒りによって滅びた都市だ。

キーヤンがやるのかどうか定かではないが、ともあれ何がしかの大災害によって滅びてしまう都市であることは間違いない。

自分を崇めてくれる人間を見殺しにするようなアシュレイではなかった。

しかし……ソドムとゴモラは紀元前2600年辺りに成立したとされているのだが、今はまだおよそ紀元前7900年。

史実よりも5000年以上速い成立はアシュレイが手を出したからに他ならない。

「念の為に看板を作っておきましょうか。アシュタロスがいる街っ

て看板を立てときなさい。それで弱い魔族には効果があるから」

もし滅んだら、キーヤンをゴーマンする、と心に誓うアシュレイであった。

「まあ、今はとりあえず」

そう言って尻を触っていた巫女を押し倒す。
きゅんと短い悲鳴。

他の巫女達はごくり、と唾を飲み込み、その様子をつぶさに観察する。

「やるか」

その後、ナニが行われたかは言うまでもなかった。

翌日、アシュレイはとりあえず農地の視察を行うことにした。
知識は無いが、魔法で雨をふらせたり、土壌を豊かにしたりはできる。

そんなわけで視察が始まったのだが……

「おお、さすがはイシュタル様！」

「さすがって……これくらいはまあ……」

アシュレイは農民達から讃えられても微妙な顔だ。

それもその筈で鳥が農地を荒らして回っているという苦情を聞き、鳥よけに力カシを作らせただけであった。

彼女としてはもっと自分の力を使いたいのである。

「他に何か困ったことはない？ 雨が降らないとか、土地が痩せたとか」

農民達は顔を見合わせ、何やら小声で相談しているようだ。

アシュレイの優れた聴覚は「お願いしてもいいものか」とか「これ以上世話になるわけにも」という言葉が聞き取れた。

そんな彼女らに対してアシュレイは咳払いを一つ。

「何でも言ってみなさい。私は私を崇める人間には優しいのよ」

そんな彼女の言葉にやがて農民の1人が意を決したように口を開いた。

「実は近くの川が雨が降ると氾濫して……」

「農地が水浸しになる、と。要望は治水ね」

頷く農民達。

「案内して。治水してあげるから」

歓声を上げる農民達。

そんな彼女らを見つつ、アシュレイは思う。

地道な活動が好感度アップの秘訣。選挙活動みたいだ、と。

数時間後

アシユレイは川辺に数mの土手を魔法でこしらえ、お礼として農民達から作物などをもらった。

その後、暇であったので、ソドムとゴモラにある病院……という上等なものはまだ存在せず、病気が治ることを祈願する祈祷所へと赴いた。

「イシユタル様!？」

「このような場所に……」

突然のアシユレイの来訪に戸惑う祈祷師や患者達。

そんな彼らに楽にするように告げると、祈祷師に一番重症な患者は誰か、と尋ねた。

祈祷師達は困惑しつつも、イシユタル様の頼みならば、と祈祷所の奥の隔離部屋へと案内した。

「これは酷い……」

凄惨な光景を自分で作り出すアシユレイでも思わずそう呟いてし

まった。

嗅いだこともない異臭が漂っている。

隔離部屋は大部屋であった。

そこには数十人の患者達がベッドに身を横たえている。

「ここにいる者達はもう死期が間近に迫った者達です」

案内してくれた男の祈祷師が悔しそうな顔でそう告げる。

21世紀の医学であれば治せる病気も、この時代では不治の病だ。病気や大怪我をしてしまったら、それは緩慢な死と同義であった。

「お、お……」

包帯なども存在しない為、単なる布切れを体に巻かれた中年の男性が寝ていた体をゆっくりと起こす。

「いしゅたるさま……」

その声にあしゅレイは彼の傍に近寄り、その手を握る。

彼はその行動に目を丸くした後、やがて泣き出した。

「いしゅたるさまが……てをにぎってくださっている……」

あしゅレイは彼の様子を見つつ、やはり医学は早急に伝えるべきと確信した。

たとえそれが歴史を乱すことになろうとも。

彼女は自分をここまで慕ってくれる存在を見捨てることなんて到底できなかった。

「イシユタル様、今日明日にも死にそうな者が……是非、会ってや

「ってください」
「わかったわ」

彼女はそう告げ、男の耳元で囁く。

「少し待っていなさい。すぐに戻ってくるから」

「あ、ありがとうございます……！」

彼女は彼から離れると、祈祷師の案内で隔離部屋のさらに奥へと進む。

やがて扉の前にたどり着いた。

祈祷師は深刻な顔で告げる。

「この部屋は死を隔離する為のものです。死を外に出さない為に窓もありません」

この時代特有の言い方にアシュレイは頷きつつ、祈祷師には下がるように指示する。

しかし、彼は自分も部屋に入る、と頑として譲らない。

アシュレイとしても、酷い感染症でもなければ死人の横にいても死ぬ危険はないことを知っているので、あっさりと了承した。

祈祷師が扉を開けた。

中は薄暗いが、アシュレイの目にはハッキリと映っていた。

ベッドに横たわったやせ細った少女の姿が。

意識はあるのか、その瞳がアシュレイへと向けられる。

「食事は食べられないの？」

アシュレイの問いに祈祷師は頷いた。

「食べてもすぐに吐いてしまいます。また、体の至るところに黒いシミのようなものが……」

なるほど、と頷き彼女は少女が纏っている布切れを捲ってみる。
壊死だ、と彼女は心の中で呟く。

確かにこの時代ではお手上げだろうし、何より見た目からして不気味だ。

「今から悪魔の奇跡を見せてあげるわ」

アシュレイは少女の耳元でそう囁いて、彼女の胸元に手を置いた。
そして、呟いた。

「アシュタロスの名において、この者を治癒せん。病魔よ退け。我が民に仇なすことは我に仇なすことなり」

光が、溢れた。

「奇跡だ……」

祈祷師は呟いた。

先ほど、アシュレイが捲った箇所にあった黒いシミが無くなっている。

少女は目をパチクリとさせ、ベッドから起き上がり、自分の体のあちこちを触っている。

「とりあえず学校を作りましょうか。そして私が病気を治す術を教えてあげるわ。それと、この子には私名義で栄養のあるものを食べさせなさい」

アシュレイは手早くそう告げ、踵を返す。

「イシユタル様、どこへ……？」

祈祷師が尋ねると彼女は不敵な笑みを浮かべ、彼を見つめた。

「隔離部屋の患者達を、全員治してしまっても構わんだろう……？」

渦巻く嫉妬、実行された陰謀（前書き）

若干過激な表現アリ。

渦巻く嫉妬、実行された陰謀

「ん……」

リリスはゆっくりと瞼を開けた。

彼女の視界にはご主人様の愛らしい寝顔。

その額にくちづけして、寝顔を存分に眺める。

彼女だけに許された特権だ。

その特権を活かしつつ、彼女は思案する。

なぜ自分がアシュレイのお気に入りなのか、その理由を。

自分よりも容姿がいい淫魔は無論、テクニクが上の淫魔も、より淫らな淫魔も、より魔力の強い淫魔もいる。

だが、なぜ自分なのか。

リリスは今の待遇に不満はないどころか満足している。

他の淫魔達は月に数回、アシュレイと寝ればいい方では数ヶ月に1回という者すらもいる。

何分、アシュレイとしても一度に相手にできる数は限られ、対する淫魔の数は万に迫る。

そんな中で自分だけは毎日アシュレイと一緒にだ。

彼女が言った通りに毎日壊れるくらいにやってもらっており、その為か、最近ではテクニクも魔力も大幅に向上している。

それはいいが、どうにも腑に落ちない。

自分の名前を知っていたらしいところがありますます気にかかる。

リリースは今まで何度かそのことをアシユレイに聞こうと思ったことがあるが、その度に……というよりもいつも聞く暇すら与えられない程に激しくされるのでどうでもいいや、としてしまっていた。アシユレイは知らなかったが、淫魔にとって「毎日壊れるまでしてやる」とかそれ系の淫らな言葉は実質的なプロポーズだ。

考えれば分かることだが、性欲を食料とする淫魔にそれを言うということは人間で言うところの「毎日ご飯を作ってあげる」とかそういう意味なのだ。

もっとも、人間の結婚と淫魔の結婚ではその意味が異なるのだが。

ともあれ、まあいいか、と彼女はこれまでと同じように結論し、アシユレイの小柄な体を抱きしめる。

彼女の腕の中でアシユレイが身じろぎした。

睡眠からの覚醒の兆候にリリースは彼女の顔をじっと見つめる。

やがてゆっくりとその瞼を開ける。

紅い、ルビーのような瞳がリリースの瞳と交差する。

「おはよう、アシユ様」

「……おはよ」

ふああ、とあくびを噛み殺し、アシユレイはリリースの背中に手を回す。

二度寝は悪魔にとっても最高の快樂であった。

リリースとしては二度寝も構わないが、残念ながらアシユレイに二度寝されると困る存在がいた。

じーっとその翡翠の瞳でアシュレイを見つめる真っ黒なゴスロリチックなメイド服を纏ったテレジア。

リリスがアシュレイにキスしたり抱きついたりしているところからずーっと彼女は部屋の隅で待機していた。

テレジアをはじめ、古くからの従者であるシルヴィア、ベアトリクスは最近、主のアシュレイに構ってもらえなくて寂しい思いをしている。

故に今日のテレジアは少し積極的に出ようと決めていた。

「……テレジア」

アシュレイが視線に気づいたのか、二度寝をやめて起き上がる。

彼女はテレジアに手招きすると、テレジアはスススと音もなく近寄る。

「あなたって意外と胸が大きくて形がいいのよね。さすが私の最初の従者」

褒められて悪い気はしないどころか、嬉しいテレジアは顔を俯かせる。

久しぶりに構ってもらえそうだ、という期待を胸に込めつつ。

「アシュ様、私の胸はどうかしら？」

テレジアはリリスの相変わらずのタメ口に眉を顰めるも、口には出さない。

リリスはアシュレイのお気に入りであるが、最近のその増長ぶりはテレジアをはじめとした従者達にとって見逃せないものになりつつある。

あまりにもアシュレイに気安いのだ。

そして、それはリリス以外の淫魔達にとっても同じこと。

最高の食料であるアシュレイを実質的に独占しているリリスに対する不満は水面下で広がっている。

「リリスの胸は黄金比なの。大きすぎず、小さすぎず、弾力が良くて……」

無駄に具体的な褒め方にリリスはアシュレイをその胸に抱きしめる。

テレジアは一縷の望みを込めて、顔を上げアシュレイに視線を送った。

構ってほしい、と。

その視線に気づいたアシュレイはテレジアの方を向いてにっこりと笑った。

「テレジア、今夜は2人で……ね？」

「はい……！」

その言葉に笑みを浮かべるテレジアに対してリリスは不満顔だ。

リリスとしてはいつでもどこでもアシュレイに構ってもらえないと嫌なのである。

そんな彼女にテレジアは心で決める。

淫魔からの、あの提案を実行しよう、と。

「リリースのヤツ、ちょっとアシユ様に気に入られてるからって高くとまって……」

「この前、アシユ様におねだりしに行ったら、これから私とするからってリリースが出てきて手で追っ払われたわ」

「なんで偉そうにしてるのかしら……」

加速空間内にある淫魔専用の居住地区。

そこに設けられた広場では淫魔達がよく集まって雑談しているのだが……最近はおっぱらリリースの態度を非難する話しかない。

「問題ないわ」

1人の淫魔が話の輪に加わった。
銀髪をセミロングにした淫魔だ。

「リリム……問題ないって……あなたの母親よ？」

その問いかけに淫魔　リリムは口元に笑みを浮かべた。

「さつき、テレジア様が私の提案を承諾なされたの。リリースを人間界に捨てるって提案をね」

「ただ捨てるも、戻ってくるじゃないの」

幼い少女の姿をした淫魔が当然の指摘をした。

リリムは懐から小瓶を取り出した。

その中身を見た淫魔達は一様に嫌そうな表情をする。

「吸精虫よ。淫魔なら誰でも嫌がるこの虫、淫魔から精気を吸いと

つたりする効果があることは知ってるわね？　で、精気を吸い取られた淫魔は常に飢えた状態になるわ」
「アシユ様にバレずにやれるの？」

先程の少女の淫魔が再び問いかけた。

「うまくやるわ。で、やり方は簡単よ。人間界にリリースを捨てて、この虫の効果で発情しっぱなしで、誰かれ構わず人間たちと交わっているところをアシユ様に見せるの」

「それはいいけど……今度はあなたが独占するんじゃないでしょうね？」

ジト目で少女が尋ねる。

「交代制でやろうと思うの。人数は10人くらいで」

リリムの返事にとりあえず淫魔達は納得したように各々頷く。

しかし、懸念もある。それはアシユレイがそれだけでリリースを手放すかどうか、という根本的なものであった。

「時期をみて……慎重にやらなくてはならないわ。数百年くらいは掛かるかもしれない」

「リリスにチャンス？」

黒髪の淫魔が問いかけた。

リリムは頷いてみせる。

「一応、母親だから……まあ、親子同士でやつたりするから、親も子もないんだけど……一応ね。ラストチャンス」

失敗してもリリムだけが泥を被り、成功すればリリムも含めた全員にリターンがある。

ならばこそ、この程度の猶予は我慢できるレベルであった。寿命の無い種族にとっては数百年などあっという間であるからだ。

「そういうわけでよろしくねー」

リリムはそう告げて、テレジアに猶予期間を伝えるべくその場を後にしたのだった。

そのチャンスは意外と早く訪れることとなった。

「それじゃちょっと視察してくる」

アシュレイはそう言い残し、アシュタロスと共にソドムとゴモラへと転移した。

年に数度、2人は発展具合を見る為に1週間掛けて視察に出かけている。

そんな2人を見送ったテレジアはリリムに念話を行う。
実行するなら今がチャンス、と。

リリムが淫魔達に自らの策を伝えてから加速空間内で既に20年以上が経過しているが、未だに改善は見られず。故に今回、計略の実施に踏み切ったのだ。

「んふふ……あしゅさま」

甘えた声を出しているリリスは現在、夢の中。
アシュレイのベッドの上で枕を抱いてすやすやと眠っている。

そんな彼女に近寄る影。
テレジアだ。

彼女は素早くリリスを特製の魔力封じの鎖でもって拘束する。
縛られて起きない程、リリスは鈍感ではない。

「テレジア！？ 何をしているの！？」

「お前がやりすぎたからだ」

それだけ告げて、彼女はリリスの口を封じるべく、静寂の魔法を彼女に掛けた。

彼女は口を何度も開くが、言葉は出てこない。

「もう大丈夫だ」

テレジアの言葉に新たな人物が現れた。
その人物にリリスは目を見開いた。

「はあい、お母様……いえ、リリース」

リリースは口をパクパクとさせるが、やはり言葉は出ない。その様子に満足しつつ、リリムは小瓶を取り出した。そこに入っている奇怪な虫を見て、リリースの顔は恐怖に染まる。

「もう分かったみたいね？ あなた、ちょっと調子に乗りすぎたのよ。アシュ様のお気に入りだからって、自分だけアシュ様のモノをもらうなんて」

リリムはそう切り出し、リリースに対して純粋な疑問をぶつけた。

「何であなたは自分だけアシュ様に抱かれたの？ 何で抱かれるとき、他の淫魔達も呼ばなかったの？ 何で他の淫魔達と一緒に抱いて欲しいって、アシュ様をお願いをしなかったの？」

リリースは口を閉じ、俯いた。

それらは全て考えもしなかったことだ。

現状に満足し、思考停止に陥っていた彼女。

彼女は後悔する。

もう少し考えていれば、これから先の生き地獄を回避できたのに、と。

「まあ、今となってはいつでもいいことだわ。アシュ様にあなたが人間と交わっている姿を見て、あなたに失望してもらっし」

リリースはその言葉でこれから先の展開が容易に予想できた。

ただ吸精虫を寄生させられるだけでなく、人間界に捨てられるのだ、と。

「あら、今更怯えてるの？」

その瞳にある感情を読み取ったりリムはくすくすと笑う。

「でも、もう遅い。あなたは人間の家畜にでもなりなさい」

瓶の蓋を開け、その口をリリスの腹部に押し当てた。

リリスは拒否しようと藻掻くが、その抵抗は虚しいものであった。そして、吸精虫はリリスの腹の中へと溶けるように消えた。

数秒後、彼女は全身を震わせた。

息遣いは荒く、瞳は潤んでいる。

「さすが淫魔の拷問に使われる虫ね。効果抜群だわ」

そう呟いて、彼女はテレジアへと向き直り、頭を下げる。

「あとをお願いします。テレジア様」

「任された。適当な街の路地裏にでも捨てておこう。アシユ様への説明はそちらが……」

「はい、お任せを」

こうしてリリスは人間界へと捨てられた。

悪魔も万能ではない(前書き)

微工口表現アリ。

悪魔も万能ではない

「あれ？」

視察から戻ってきたアシュレイは首を傾げた。いつもならいの一番に自分を出迎えるリリスがやってこないからだ。

リリスにどこか似ている淫魔の姿が代わりにある。

アシュレイは頭の中から彼女の名前を探しつつ、何かあったのとテレジアに視線で問いかける。

「アシュ様、その件についてはこちらの者から……」

そう言ってテレジアは口を閉じた。

アシュタロスに興味津々といった風で静観している。

「アシュ様」

その淫魔はアシュレイの前に膝まずき、頭を垂れる。

「あなたは確か、リリムね。リリスの娘の」

アシュレイの言葉にリリムは思わず顔を上げた。

その表情は驚き、ついで歓喜へと変わる。

「覚えていてくださいましたか……」

「勿論。私、淫魔全員の名前と顔を覚えているわ。で、リリスに何かあったの？」

アシユレイの問いにリリムは重々しく頷く。

「実は我が母、リリスはアシユ様のモノに不満を感じるようになったのか……よりたくさんの方と交わろうと、人間界へ……」

いけしゃあしゃあとそんなことを言うリリム。
対するアシユレイははてな、と首を傾げる。

「おかしいわね……人間なんかよりも私の方が濃いし、量が多いし、魔力もたっぷりなんだけども」

リリムに探るような視線を向けるアシユレイ。

「お言葉ですが……毎日、同じ食事を続けていれば飽きてしまいます」

リリムの言葉に確かに、とアシユレイは頷く。

その様子にリリムはもう一押しだ、と思いつつ、さらに言葉を続ける。

「そこで提案がございます。しばらく、リリスは好きなようにさせておいて、私共のお相手をして欲しいのです。アシユ様も毎日リリスの体を味わってはいはさすがに面白みがなくなるかと存じ上げます」

なるほど、とアシユレイは頷いた。

どう転んでもリリスは自分から離れることはない。ならば、マネリとならない為にもこういうのは悪くはない。そう考えた彼女はゆっくりと口を開いた。

「それもそうね。しばらくはそうしましょう。とりあえずリリム

アシユレイは名を呼び、リリムの頬に手を当てる。

「色々と教えてくれたお礼として、あなたには毎日やってあげる。
リリスと同じようにね……」

リリムは予想外のご褒美に歓喜の表情を浮かべる。
しかし、母親と同じ轍を踏まぬように予防策を張っておく。

「アシユ様、できれば他の淫魔達も同時にお相手してください。そ
うすれば多くの淫魔が満足できます」

「ええ、いいわ。でも、とりあえず、今からあなたをじっくりと味
見したいわね」

「はい、アシユ様……！」

そう言って、アシユレイとリリムはそそくさとアシユレイの部屋
へと向かった。

後に残されたアシユタロスはテレジアに告げる。

「中々、面白い試みだな」

その言葉にテレジアは背筋に冷たいものが走る。

「ああ、安心したまえ。私はバラしたりはしない。私も退屈でね」

くっくっくとアシユタロスは笑う。

「もし、これからもそういうことをするなら、私が監視をつけてい

ることを忘れないことだ」

そう告げて、彼はその場を後にした。
後に残されたテレジアは思案する。

もし、アシュ様にバレたらどんな恐ろしいことになるか……

言うまでもなく、今のアシュレイはテレジア、シルヴィア、ベアトリクスが3人まとめてかかってても、返り討ちにできる程に強大化している。

主が強くなれば使い魔も強くなるのであるが、それでもその強さの上昇率は主の方が遥かに大きい。

ちょっとした嫉妬が大変なことを引き起こしそうで、今更ながらにテレジアは後悔した。

彼女にとつて、否、使い魔にとつてもっとも悲痛なことは主の役に立てなくなることだ。

今回の一件で使い魔失格として処分されては目も当てられない。

「……アシュ様の喜びこそが全てにおいて優先される」

その呟きは虚空に消える。

真実を明かしてしまうべきか、早くも真剣に考え始めたテレジアであった。

「あしゅさまあ……」

蕩けた表情でリリムはアシュレイに縋りつき、その体をついばむように口づけをしていく。

そんなリリムを満足そうな顔で見つめるアシュレイ。

言うまでもないが、リリス以外の淫魔でリリスと同じくらいにやられたのはリリムが初めて。

そういうわけで、リリムはあまりの良さから「もうどうにでもして」というような状態になってしまっていた。

「これでいいの……これでね」

そんな風に呟くアシュレイにリリムは耳元で囁く。

「あしゅさま、わたしをずーっとあしゅさまのものにしてください」

荒い息遣いに紛れ、リリムの口から零れ出たそんな言葉。

どういふことなの、と言ってきた本人に問いかけるべく、簡単な精神安定魔法を掛けてみる。

呼吸がやや穏やかになり、瞳にある程度の理性の光が灯ったところでアシュレイは問いかける。

「どづいふことなの？」

「誓約……ギアスです。私をあなたに縛ってください」

それだけでアシュレイは理解できた。

基本的に滅多なことでは悪魔は他の悪魔にそんなことを持ちかけない。

いや、悪魔でなくとも普通はそんなことを言い出さない。ギアスにより魂魄レベルで相手に縛られてしまうからだ。

「どうして?」

「……アシュ様が素敵だから……」

顔をやや俯かせ、小さな声で恥ずかしそうにリリムは言った。その仕草がアシュレイにはたまらない。

「そういえば……リリスはそんなこと言ってこなかったわね……」

私じゃダメだったのかしら、と僅かな不安に襲われる。

リリスは抱えた疑問から、無意識的に遠慮し、そう言い出さなかっただけなのであるが、彼女の疑問を知らないアシュレイの不安はもっともなもの。

そして、リリムはその言葉を見逃さなかった。

「おそらく、アシュ様の不安の通りです。淫魔であるなら、誰でもアシュ様に先ほどのように抱かれればギアスを申し出るに違いありません」

「……そう」

しょんぼりと肩を落とすアシュレイをリリムは優しく抱きしめる。

「私達がついております。裏切り者のリリスを除けば全ての淫魔はあなたのものです」

「そう……ありがとう」

そう言い、リリムの頭を撫でるアシュレイ。
その心地良さと予想以上の順調さにリリムは顔を綻ばせる。
次の、アシュレイの言葉が出るまでは。

「踏ん切りをつけるために一度、リリスを見ておきたいわ」

リリムはその言葉を理解するのに数秒の時間を要し、そしてそれへの対策をさらに数秒かけて考え出した。

「畏まりました。ですが、おそらくアシュ様の御心に多大な損失を与えてしまうかもしれません……」

「構わないわ」

「畏まりました。私からテレジア様にそう伝えておきます。アシュ様、見つけるには時間が掛かります。それまでの間、他の淫魔達に御慈悲をお与えください」

「ええ……そうするわ」

リリス追跡機という便利なものがあつたのだが、アシュレイはその存在をすっかりと忘れていた。

もっとも、アシュタロスが中立というよりか、ややリリム側なので適当な理由をつけて使わせなかつただろうが。

そのとき、扉がノックされる。

アシュレイが許可を出すと、十数人の見目麗しい淫魔達が部屋に入ってきた。

誰もが期待に目を輝かせている。

「アシュ様、お願いします」

リリムの言葉を受け、アシュレイはただ頷いた。

「時間稼ぎを行わねばなりません」

リリムはテレジアを見つけ出し、開口一番そう告げた。

その要件を悟ったテレジアは微かに頷きつつも、その胸中の不安を打ち明ける。

「私は怖い。今回の一件でアシュ様に処分されてしまうのではないかと……」

テレジアは知っている。

アシュレイは普段は見た目相応の少女のように振舞っているが、敵には容赦の欠片もないことを。

今まで裏切り者はいないが、もし出た場合、泣いて懇願しても、アシュレイは嘲笑を浮かべて処分する可能性が非常に高い。

「私は別に死ぬこと自体は……そう、転生すらできない魂魄レベルでのロストすらも怖くはない。ただ、アシュ様に失望され、捨てら

れることが怖い」

自分の身を両手で抱くテレジア。
見た目相応の少女のよう。

「大丈夫です。泥は全て私に押し付けてくださって結構」

リリムの言葉にテレジアは目を見開く。
そんな彼女にリリムは微笑む。

「私達の不満なんて、アシュ様の御心に比べたら塵に等しい……あの御方のお気に入りには手を出す、と決めた以上、覚悟はできています」

テレジアは思わず彼女に問いかける。

「なぜ、お前はそこまで？」

「淫魔として母親に負けなくなかったからですよ。あなた達は使い魔といえど悪魔ですから、淫魔なんて下賤で矮小な種族と思つかもしれませんが、これでも淫魔なりの矜持がありますから……」

アシュレイのお気に入りになって以降、日に日に強くなるリリスの魔力、そして身に纏う淫気に他の淫魔達は嫉妬した。

リリスの淫魔としての格が急激に上がっているからだ。
中でも、娘であるリリムは嫉妬の度合が大きかった。

故に彼女は淫魔としてのプライドにかけて、リリスを蹴落そうと策を実行した。

力が強いものに対して、弱いものは逆らわない……これは地獄の大前提であるが、淫魔のような非戦闘系種族においては例外だ。

未来のリリスのように、他の淫魔と隔絶した力を持っているなら地獄の前提となる法則が当て嵌まるが、今のリリスは他の淫魔達よりも少しだけ力を持っている程度。

それならば下克上は十分にありえることであった。

「我々はお前達が来てから、アシユ様が我々に構ってくれる時間が減ったと嘆いていた。それは今も変わらない。お前達にも事情があるように、こちらにも事情がある」

そこまで告げて、テレジアは一度言葉を切り、リリムの瞳をまっすぐに見据えた。

「こちら辺で妥協点を探そうと思う。アシユ様が求めたときは除いて、だ」

「問題ありません。それに……我々としてはテレジア様も立派なモノをお持ちですし、シルヴィア様やベアトリクス様も良い、と思っておりますので……」

基本、淫魔も例に洩れず両性具有だ。

サッキュバスが女のときの名称であり、インキュバスが男のときのものである。

勿論、女のとくに生やすこともできるが、これはどうでもいいことだ。

「それならばアシユ様が構ってくれないときはお前達で鬱憤を晴らすとしよう」

「存分に使ってください。それが我々の栄養です。アシユ様が構ってくれないときは我々もそうさせてもらいます」

こうして使い魔側と淫魔側で妥協点が見つけられたのであった。

ただ淫魔側は良いとして、使い魔側は問題点を抱えている。
シルヴィアとベアトリクスの説得だ。
シルヴィアはまだいいが、ベアトリクスは淫魔達が求めてこよう
がアシュレイ以外に体を許したりはしない。
彼女は妙に生真面目で堅物であった。

テレジアはどうやってベアトリクスを説き伏せようか、と思案す
るが、ひどく簡単な解決方法があった。

「……我々とそちらの摩擦はアシュ様に普通にお伝えしても、よか
ったのではないか？」
「……」

その言葉にリリムも無言になる。
テレジアはそんな彼女にさらに言葉を続ける。

「淫魔達のリリスに対する不満も、アシュ様に直訴すればよかった
のではないか？ アシュ様は暗愚ではない」
「……私って、もしかしてバカ？」
「……聞かなかったことしておくから、適当に自己正当化の理由
を考えておけ」

悪魔でも間違いは犯すらしかった。

大山鳴動して鼠一匹（前書き）

微工口表現アリ。

大山鳴動して鼠一匹

「ふう……」

出すものを出した男はゆっくりと女から離れる。それを見て、別の男が入れ替わりに女の下へ。

「しかし、こんな美人が娼婦……いや、金すらとらないからそれ以下か？　ともかく、ありがたいことだ」

彼の言葉に順番を待っている男達は一様に頷く。

「だがよ、コウモリみたいな翼があるから……もしかしたら悪魔か何かじゃねーのか？」

並んでいた男の1人がそう言った。

しかし、別の男が反論する。

「悪魔だったら、俺達はとっくに魂を取られてるだろう。まだ生きているから違うってことだ」

「それもそうか」

そんな会話がなされている中、路地裏から女の叫びが聞こえてくる。

道行く人々は気にも留めない。

路地裏の娼婦というのは彼女がやってきてから僅か1週間で街全体にその存在が知られていたからだ。

そして、その女が来てから今日でちょうど1ヶ月目であった。

「ふう……」

先ほど入っていった男がスッキリした顔で出てきた。
また別の男が路地裏へと入っていく。

女 リリスは毎日100人近い男に抱かれていた。
しかし、その日々も今日で終わることとなる。

唐突に路地裏から女の声が消えた。
その数秒後、異変は起きる。

「ん？」

妙な感覚に襲われ、ある男が空を見上げた。
並んでいる他の男達も空を見上げる。

道行く人々も足を止め、空を見上げる。

市場に買い物に来ていた親子も、道端で雑談していた女達も、川
辺で遊んでいた子供達も、その街の住民達は誰一人例外なく、空を
見上げた。

空には黒い太陽が浮かんでいた。

「……少々、やりすぎたか？」

思わずエシユタルは呟いてしまった。
眼下にあった街は巨大なクレーターと化している。

いや、それだけならば彼女の仕事であったから、問題はない。
ただ、問題は周辺にあった湖や草原までも消し飛ばしてしまった
ことだ。

「人界ではもう少し加減しないといけないな……」

アシユレイの弟子であるエシユタル。

彼女が弟子入りしてから既に数えるのもバカらしい時間が経過している。

当初こそ下級魔族程度の力しかなかった彼女も、今では立派な上級魔族だ。

弟子入りした結果、アシユレイが教えてそこまでの力を持った……
…というのは正確ではない。

何分、アシユレイもまだ修行の身、彼女はエシユタルに書物を読むように指示し、魔力の伸ばし方などのいくつかのやり方を教えただけで、あとは自習という形式であった。

勿論、それだけでは到底足りないなので、アシユレイと一緒にアシユタロスの授業を受ける始末だ。

ある意味、予想できたことだが、エシユタルとしてはアシユレイは上司であり師匠だと認識している。

十分に尊敬に値する力を持っているからだ。

「エシユタル……あんまりやり過ぎるとこの星が壊れるでしょ」

横合いからそんな声。

エシユタルが視線を向ければ、そこにはリリスを抱えたディアナの姿が。

「無理を言うな。加減が難しいのだぞ……」

「足らぬ足らぬは努力が足らぬと誰かが言ったわ」

ディアナはディアナで自分の鍛錬法が確立しており、偶にアシュレイやアシユタロスに助言を受けている程度だ。

アシュレイが引き入れたときには中級魔族クラスであった彼女も今では上級魔族となっている。

「ともあれ、リリスの中にあつた虫は取り除いたし、街も潰したし、神族に目をつけられないうちにさっさと帰りましょうか」

「ああ、そうだな……」

2人は転移の為、ゲートを開いたのだった。

リリムは最近、常に機嫌が良かった。
彼女はアシュレイにギアスをかけてもらい、永遠にアシュレイのものとなったからだ。

リリスに関して不安なことはあるが、それはそれ、これはこれで

ある。

一応、時間稼ぎはうまくいっており、現実空間での換算で1ヶ月少々を稼いでいる。

ともあれ、ギアスをかけてもらったのはリリムだけではなく、リリス以外の淫魔全員なのだが。

そして、リリムにとって嬉しい誤算があった。

それは彼女の功績が認められ、また、アシュレイの要望もあって常にアシュレイに求めてもいい、という権利が与えられたことだ。

そんな彼女は今日も今日とてアシュレイに呼ばれた。

今日はどんなプレイをしようか、と期待に胸を膨らませつつ、彼女はアシュレイの部屋の扉をノックした。

中から許可が出、リリムはゆっくりと扉を開けた。

そして、一気に冷や汗が吹き出した。

立っていられない程に体が震える。

部屋の中から底冷えのするような、膨大な魔力がリリムを出迎えていた。

その魔力の主は誰だか分かっている。

リリムは直感する。

リリスの件がバレたのだ、と。

入りたくはないが、入らないわけには行かない。

彼女はさながら水中を歩いているかのような重圧を感じながら部屋の中へ足を踏み入れた。

リリムは部屋に先客がいることに気がついた。
テレビだ。

彼女はリリムよりも震え、怯え、両膝をついて頭を垂れていた。
リリムは視線を動かさず、彼女の前にいるだろう人物を見、そして後悔した。

紅い瞳は爛々と輝き、その小柄な体からは膨大な魔力が零れ出ている。

「リリム、喜ばしいことがあったの」

口ではそう言っているが、その顔は全く笑っていない。

リリムは自分の覚悟が如何に軽いものであったかをたった今、思い知った。

魂を鷲掴みにされているかのような、そんな圧倒的な恐怖の前には覚悟なんぞ吹き飛んでしまった。

「あ、アッシュ様……その……」

リリムは謝ってしまおう、と言葉を紡ごうとするが、それをアッシュが遮る。

「いつも通りにしてくれないのかしら？ 私の征服欲を満たしてはくれないのかしら？」

見えない手で首を握られているかのような、そんな圧迫感にリリムは口をパクパクと開く。

さながらリリスがリリムに何かを言おうとしたときのように。

「まあ、いいわ。リリスが見つかったの。いえ、正確には何時まで経っても見つけてこないから、ついさっき私が直接出向いて探したの。私の探索魔法の精度を舐めないでもらいたいわ……」

アシュレイはそう告げて、ゆっくりとリリムに近づく。

リリムはあまりの恐怖に床にへたり込んでしまう。

そんな彼女にアシュレイは手を伸ばし、その頬を触る。

「吸精虫……あんなものを体内に仕込まれて、人間達と交わっている姿を見たわ」

リリムは何も言えない。

否、あまりの重圧に口を開くことすらできない。

「まあ、それ自体はいいわ。寝取られた感じで私、すごく興奮したし。とりあえず、エシユタルとディアナにリリスの救出とその街はこの世から消すように指示して……たぶん、もう消えたでしょうね」

そこで言葉を切り、アシュレイはリリムに問いかける。

「何で、私が自らそうしなかったと思う？」

しかし、彼女はリリムに答えを求めてはいない。

「それはね、私に許可無く勝手にリリスを弄った馬鹿共にお仕置きをする為よ」

アシュレイの瞳に射すくめられ、リリムは完全に蛇に睨まれた蛙

となってしまう。

「ん？」

そこでアシュレイは視線を移した。

その先はリリムの下半身。

アシュレイは思わず笑みを浮かべる。

そして、彼女から出ていた魔力は収まり、重圧もまた消えた。

「リリム……あなた、こんなときでも濡らして……」

「え……？」

そう言われてリリムは自分の下半身を見れば確かにそうであった。漏らしているというのではなく、確かにアシュレイの言った通りだ。

淫魔の標準的服装とも言える際どいビキニ、そのパンツは確かに濡れていた。

そして、それにより頭もまた反応したのか、彼女は昂ぶりを感じ始める。

「淫魔はDMって聞いたけど、ここまでとは……アシュレイちゃん、大感激。もっと激しく、色んなことできるわね」

ルンルン気分の彼女にリリムはどうしたものか、と考え、とりあえず思いつきり頭を下げた。

「あ、もうリリスの件はいいわよ。寝取られとか本当にぞくぞくし
たし。テレジア、あなたも今まで通り頑張って頂戴」

あっけらかんと。そう言い放つアシュレイにリリムは啞然として

しまう。

これにはテレジアも同じらしく、アシュレイをまじまじと見つめている。

そんな2人にアシュレイは不思議そうな顔となる。

「だってリリスは私から離れられないもの。それにリリムみたいな淫魔を殺すなんて、勿体無いし、リリスとリリムの親子丼というのも中々乙なものだし」

うんうん、と頷くアシュレイ。

どうやら彼女の根源は破壊欲とか知識欲ではなく、性欲であるらしかった。

そうでなければこんな割り切り方は到底できない。

もっと簡単に言ってしまうえば快樂主義者だ。

「で、テレジア。私としてもまあ、ちょっとリリスを優遇し過ぎて、淫魔達に構いすぎていたから、これからは気をつける。そうね……使い魔と淫魔がやってるのを眺めるのもいい……」

怪しげな笑みを浮かべるアシュレイ。

テレジアとしても、主である彼女がそう言うならば一点を除いて問題はない。

「アシュ様、私はこのような失態をお見せしてしまい……栄えある貴方様の使い魔として、一時の感情に流されるなど……」

テレジアはアシュレイへ向き直り、深々と頭を下げる。

彼女は今回のことで何よりも、主の顔に泥を塗ってしまった事を何より恥じた。

むしろ、そのことに関して処罰を受けたいと思ってしまうくらい

に。

その胸中を察し、アシュレイは告げる。

「テレジア、それじゃリリムを今この場で抱きなさい。普段真面目なあなたが、淫らになっている姿を見たいわ。それが処罰よ」

主が処罰と言うならそれは処罰となる。
故にテレジアは躊躇いなく承諾する。

「畏まりました」

「え、ええ？」

唐突な言葉にリリムは柄にも無く困惑する。

「リリム、さつさと脱げ」

「あ、え、テレジア様……？ 本当に……？」

彼女の体の方は問題ないが、精神的にそういつ気分ではない。

「さつさとしなさいよ」

アシュレイが言った。

すっかり観客と化した彼女はいつの間にもやら淫魔を数人、召喚していた。

ギアスを結んだことにより、何時如何なる場所でもこうして呼び出すことが可能だ。

どうやらアシュレイはリリムとテレジアの濡れ場を着に他の淫魔達で鬱憤を晴らすつもりのようなのだ。

リリムは観念したように一応、衣服にあたるかもしれないビキニを脱ぎつつ、思った。

拍子抜けする程にあっさりと解決したなあ、と。

強引な解決策（前書き）

短め

強引な解決策

リリスは悩んでいた。

それはアシュレイにどんな顔で会えばいいか、というものの。

アシュレイが現れるまでは人間達を食料としていたが、現れてから人間界に捨てられるまで一切、人間と交わっていない。

リリスだけでなく、他の淫魔達すらも。

それほどまでにアシュレイが最高であったから。

おかしなことだ。

淫魔としては別に人間と交わろうとそれは極普通のこと、何食わぬ顔でアシュレイの前に出てても問題はない。

例え、吸精虫を仕込まれていたとしても。

食料となる人間と交わることが、たとえ最高の食料であるアシュレイがいても、おかしくはないことだ。

淫魔達はリリスを人間界に捨てて、人間と交わっているところを見せてアシュレイを失望させる、というリリムの提案を良し、とした。

それでアシュレイの寵愛をリリスは失うだろう、と。

だが、前述したように淫魔が人間と交わることは不自然なことではない。

それを淫魔達は恥ずべきこと、と認識した。

淫魔達の価値観が変化している証拠であった。

「……リリス、何をやっているのだ？」

眉間に皺を寄せて考え込んでいるリリスを見かねたエシユタルが声を掛けた。

「あ、エシユタル……様」

「……今更様付けとか、気色悪いからやめろ」

基本、リリスはアシュレイ以外は呼び捨てであった。

それが今回の一件で様付けしよう、と思ったのだが、いきなり言われた側からやめるように言われてしまった。

「あ、えとさ……どういふ顔で会えばいいのにな……」

「別に普通の顔でいいのではないか？ お前に非は無い。アシュ様も特に何も言わないだろう」

魔族らしい魔族であるエシユタルにとって、不意を突かれたとはいえ、他の淫魔達よりもリリスの方が僅かだが力が強い。

ならばこそ、これまで通りで問題はない、と考える。

弱いヤツが悪いのであって、今回の一件は単なる妬みに過ぎないと彼女は判断していた。

「だけど……私、人間に汚されて……」

その言葉にエシユタルは思わず啞然とする。

「……淫魔がそういう事を言っているのか」

「だって、アシュ様だと……人間とやるよりも凄くて、淫魔である

私が失神するくらいに……」

「まあ、アシユ様がいいことには同意する」

エシユタルもまたちよくちよくアシユレイに部屋に呼ばれているのは言つまでもない。

「ともあれ、さっさとアシユ様の下へ行け。お待たせしてはならない」

エシユタルの言葉にリリスは悩みながら、その場を後にした。

アシユレイの部屋に入ると、そこには先客がいた。リリムだ。

彼女はリリスを見るや否や、困惑した顔となる。対するリリスもまた同じような顔だ。

魔族といえど、さすがに気まずい。

アシユレイも一応、ソファに座って、リリムの前にいるのだが、エシユタルが言った通り、特に何とも思っていないようであった。それどころか久しぶりに会うリリスに手を振ってくる始末だ。

そして、彼女はそんなリリスとリリムの気まずさを無視するかのように、明るい声で告げた。

「感情的に納得いかない部分が多々あると思うから、殺し合いしよっか」

リリスとリリム、2人揃ってアシュレイをまじまじと見つめた。確かに、淫魔も一応、肉体が欠損しようと再生する。もっと言うてしまえば、肉体を吹き飛ばされた程度では死なない。

神々や天使、悪魔は精神と靈魂からのみ構成された存在であり、人間などに干渉する場合には、受肉によって物質的な肉体を得ることによって行われる。

彼らは例外なく極めて高い復元能力（分子レベルでの再構築及び時空レベルでの復元能力）を持つため、彼らを倒すには「肉体」のみならず、本来の姿である「精神」「靈魂」の全的破壊を行う必要がある。

これらの核、すなわち肉体の核、精神の核、靈魂の核はそれぞれ永久原子と呼ばれ、完全に殺すにはこれらを全て破壊しなければならない。

故に、たとえ淫魔であっても永久原子を砕かない限り 他の魔族よりも純粹に防御力が低い為に極めて砕きやすいが 死なない。

しかし、なぜ殺し合いなのか……そういう疑問は当然の如く、2人に湧いた。

その疑問を見透かしたのか、アシュレイは告げる。

「だって、話し合いなんかじゃ解決しそうにないでしょ？ なら、スツキリと殴り合いすればいいじゃない。恨みっこなしで」

自分の提案こそが最善と思っているのか、アシュレイは何だか満足そうな顔だ。

彼女の頭にあるのは番長同士が喧嘩して仲良くなる、というものだ。

昭和の漫画かアニメのようなノリであった。

「あ、今いいこと考えた。勝った方が淫魔を取りまとめるとい
のはどう？ リリスも今回のことで一皮剥けたと思うし」

2人の意見なんぞ聞いちゃいない、とばかりにどんだん話を進め
るアシュレイ。

まあ、アシュタロスを除けば彼女の決定を覆せるような力を持つ
た者はここには存在しない。

リリスやリリムが文句を言おうと 実際には言うことすらでき
ないが アシュレイの決定は覆らない。

「あの、アシュ様……他の淫魔達は納得するでしょうか？」

リリムのある意味もつともな疑問にアシュレイはあっけらかんと
告げる。

「私が黙らせるから問題ない。まあ、就任したらお祝いとして淫魔
全員に奉仕してもらおうけども」

その言葉にリリムとリリスはぎよつとする。

淫魔全員に奉仕……それはつまり、1人で自分以外の淫魔達全員
のお相手をするということだ。

「他の淫魔達全員とやったら、きつともつと妖艶で淫らな淫魔にな
れると思うの」

思うの、という単なる予測でそんなことをさせられてはたまらな
い。

そして、2人に拒否権なんぞ存在しない。

つまり、確実にどちらかが淫魔の取りまとめになってしまう。

リリスもリリムも、どうやって負けるか思考を巡らせる。

アシュレイのことだから、わざとらしくいい加減にやっては到底満足してくれないことは想像に容易い。

ならばこそ、真剣にやった上で負けた、という状況を作らねばならない。

しかし、アシュレイは2人がそう考えることまで見抜いていたのか、にやにやと笑ってさらに言葉を紡いだ。

「淫魔の取りまとめになったら、常に私の傍にいても問題ないわね。もっと言えば常に私に奉仕させても問題ないと思うの」

リリースとリリムは睨み合う

アシュレイの傍で常に奉仕……それは実質的なアシュレイの独占だ。

淫魔ならば誰もが望むことを報酬にされては真面目にやらないわけにはいかない。

「というわけで家の外で戦ってきて。外に審判役を頼んだベアトリクスがいるから」

そう言い、アシュレイはソファから立ち上がった。

「私はちよつと行くところがあるから。今日は私が教える日なの」

彼女はあの祈祷所で宣言した通りのことをやっていた。

学校を作り、読み書きを教え、医学を教え……

もつとも、文字自体が未だに存在していなかったもので、それならば、とアシュレイは敢えて日本語を教えることとした。

言葉と文字でかなりチグハグなものになったが、そこはそれ。
アシュレイ「イシュタルの使う、神聖なる言語と現地住民達は勘違いしてしまった為に習得に励んでいた。

アシュレイとしては母国語の方が意思疎通が楽だし、という極々個人的な理由だ。

そもそも、彼女には念話、いわゆるテレパシーでもって相手の精神に直接伝えることすらできるのだから、文字どころか言葉もいらなかったりする。

ともあれ、そんなわけでアシュレイは日本語を教えていた。

「今のところ、神族に動きはないみたいなのよね……天使がきたらどうしようかしら……」

そんな呟きにリリスとリリムは首を傾げる。

しかし、既に2人のことは意識になかったアシュレイはさっさと部屋から出て行ってしまった。

後に残された2人はお互いに顔を見合わせる。

「えっと、リリム……とりあえず、どうしよつか？」

「……とりあえず、外で戦いましょうか。リリス……いえ、お母様」

一応、仲直りの兆しは見えた……のかもしれない。

動き出す物語（前書き）

微工口あり

動き出す物語

アシュレイがソドムとゴモラから戻ってきた。

当然、彼女は現実空間から加速空間へと入ったことになる。

そんな彼女の目の前には未だに戦っているリリスとリリムの姿が。

「……で、まだ勝負がついていないってどうということなの」

審判役のベアトリクスは安楽椅子に腰掛けて、読書をしている。

どうやらあまりにも暇だったらしい。

しかし、そんな彼女はアシュレイを見つけるなり、慌てて立ち上がり直立不動となる。

そんなベアトリクスに構わない、と告げてアシュレイも2人の戦いを見る。

「何と云うか……悪魔らしくないわね」

「こつちの時間では結構な年月が経過していますから、魔力も既に切れており、このような戦いに」

「途中休憩挟んでもよかったのに」

「1週間に1日くらいは休ませました。ただ、2日くらいで魔力が切れるので……」

「……それでああなってるのね」

そう言っつて肩を竦めるアシュレイ。

彼女が現実空間にいた時間は8時間。加速空間では8年が経過していることになる。

そんな中、リリスとリリムはずーっと戦い続けていた。

勿論、2人共、戦闘力が低い種族である淫魔なのでそこまでド派

手な戦いではない。

ともあれ、そんなことは戦ってる2人には関係なく、当初は魔力を砲弾のように飛ばしたり、レーザーのように飛ばしたり、と色々やっていた。

ただ、魔族といえど魔力が切れることはある。

2人は回復が追いつかず、今、アシュレイの目の前で繰り広げられているような、殴り合いを行っていた。

お互い防御せずに顔やら腹やら容赦なく殴り合っている。

ただ、お互いに決め手に欠けているらしいことは容易に分かった。

「……不毛な戦いね」

「休憩させましょうか？」

「いえ、もう終わりにしましょう。淫魔らしく、ベッドの上でどっちが上か競ってもらいましょう」

最初からそうすればよかったのだが、アシュレイとしてもここまですべて長期戦になるとは思ってもみなかったため致し方ない。

アシュレイが背を向けたそのとき。

「くたばれ年増あああああ」

「しねええクソガキいいいいい」

そんな声が聞こえ、ゴキツという音が聞こえてきた。

アシュレイが振り返れば、そこには互いの頬を殴ったりリムとリス。

お互いに決まったらしく、2人はゆっくりと地面に倒れ伏した。

それを見たアシュレイは疑問を顕にする。

「……一応、親子じゃなかったっけ？」

「淫魔も悪魔の一種ですから、こういうものでしょう」

「ドローでいつか。何かもつめんどくさくなつた。リリスが代表でリリムがその補佐。2人纏めて傍におけば問題ない」

「2人は居住地区に放りこんでおきます。数日もすれば完全に回復する筈です」

「そうして頂戴。私はちょっとあちこちで実験しているから」

そう告げ、アシュレイは彼女の家へと向かっていった。

「……………今日もダメか」

シルヴィアはそう告げ、溜息を吐いた。

彼女は現在、地上……………ではなく、地獄にいた。

それもその筈、シルヴィアとベアトリクスにはアシュレイの部下となる優秀な人材を見つけ出す、という仕事があつたからだ。

しかし、ベアトリクスはアシュレイに呼び出されてしまった為に今日は彼女1人だ。

シルヴィアが何をしていたか、という……………酒場の椅子に座って待っていただけだ。

地獄といえど、一応街がある。

勿論、人間の倫理観にたつてみれば悪徳の街なのであるが、街は

街だ。

その街の住民は基本魔族であり、他にも魔族が連れてきた家畜やペットとしての人間がいる。

「待遇が悪いのか？」

シルヴィアはそう呟き、手元にある求人広告の写しを眺めてみる。

『あなたも魔王候補の部下に！

高待遇！ 淫魔と寝れる！

女性形態魔族優遇！

学歴・経験不問！

寮完備！ 殺し合い多数！ 幹部昇任あり！

採用担当係シルヴィア、ベアトリクスまで連絡を！』

そんな宣伝文句と共にデフォルメされたアシュレイの姿が描かれている。

「……わりといいと思うんだが」

この広告、作ったのはシルヴィアであった。

うーんうーん、と悩む彼女。

アシュレイが満足する美貌を誇っている彼女が頭を抱える姿はアシュレイが見れば垂涎ものであった。

しかし、残念なことにここに彼女はいない。

そして、今この場にいる魔族達は強いかわいかわい、しか興味はない。

姿形なんぞ好きに変えられる魔族……あるいは神族にとって、表面的なものなど何の意味もない。

ともあれ、シルヴィアは悩むのを止めて立ち上がった。彼女は立ち上がり、給仕をしている魔族の少女にずんずんと歩いて行く。

少女はというと、ひっ、と小さく悲鳴を上げる。

その拍子に彼女のコウモリの翼がビクンと震えた。

シルヴィアはアシュレイの使い魔であり、その魔力は上級魔族クラス。

今、この酒場にいる者達は中級魔族程度、給仕の少女は下級魔族クラスだ。

誰も、シルヴィアに口出しできない。

「お前、アシュ様のところに就職しないか？」

「……え？」

「いい加減、私も成果をあげないと困るんだ。というわけで就職しろ」

「ええ!？」

アシュレイに褒められたいシルヴィアとしてはベアトリクスに差をつける為にも、成果を上げる必要があった。

「文句はないな？」

シルヴィアが睨めば少女は涙目になりながら、僅かに頷いた。

他のお客達は素知らぬ顔。

給仕がいなくなっても、また別の給仕を連れてくればいい、というのが魔族的思考だ。

適当に弱いヤツをボコして言う事聞かせればいいのだ。

同格と戦ったり、弱いヤツを蹴るのは魔族にとって娯楽の一つで

あった。

「よし、とりあえず1人確保と……ああ、もう求人広告なんてまどろっこしいことはせずに適当に戦って拉致するか……」

シルヴィアが他の客達に視線を向ける。

彼らはマズイ、と思って我先にと酒場から逃げ出して行った。

「根性無しめ……敗北主義者はいらん」

シルヴィアがカウンターへと目を向ければ、先ほどまでいた筈のマスターはおらず、代わりに1枚の紙が張ってあった。

「本日をもって閉店します……ふむ、閉店ならば仕方がないな」

そんなシルヴィアの横で少女はこれからの未来を想像し、その恐ろしさに泣いていた。

泣き声にシルヴィアはやれやれ、と溜息を吐く。

しかし、このまま泣かれっぱなしというのも個人的にうるさいので嫌であった。

ならば仕方なし、と彼女は己の主が最も得意とする手段に出ることにした。

「ちょっとこっちを向け」

少女が顔を向けたところを強引にその唇を奪う。

視線が間近で交差し、彼女は目を白黒させているが、シルヴィアは構わずその口内へと舌を侵入させ蹂躪する。

しばらくの間、店内に水音が響き、シルヴィアが離れたときにはすっかり少女は腰砕けの状態となっていた。

何度も言うようだが、基本、魔族に性欲はあんまり無い。逆に言えばそっち方面には大多数の魔族が初心である。

それは少女も例外ではなく、こんなことをされて快楽を覚えこまされてしまえば……あとは墮ちるだけであった。

少女はぼーっと、潤んだ瞳でシルヴィアを見つめている。

「これで終わりではない。ベッドの上でのことも教育してやる」

シルヴィアはそう告げ、少女をお姫様抱っこし、その場を後にした。

シルヴィアが少女を調教している頃、アシュレイは屋敷地下に設けられた実験場にいた。彼女は大規模な魔法陣を描き、その上で大量の本を引っ散らかしてうんうんと唸っている。

「お忙しい中、失礼致します」

そのような声と共にテレジアが現れた。アシュレイは生返事を返すだけだ。

「アシュ様、リリースのことですが……」

「もう解決したでしょー？」

呑気にそう返すアシュレイ。

彼女の視線はテレジアには向かず、目の前の本のページに向いている。

「私とリリースについては……その、気まずさといつかそういうのが

……」

「それなら簡単よー」

そう返して、がさごそと別の本を漁る。

目的の本を見つけ、内容を確認しつつ、彼女は続きを言う。

「リリースを無理矢理でもいいから抱いてー耳元で謝っとけば万事解決ー」

「そういうものですか？」

「淫魔なんてそういうものよー、あっさりしてるからー」

私としてはドロドロしてる方が面白いんだけどー、と付け加えたアシュレイの言葉を聞かなかったことにして、テレジアはとりあえず普通に謝っておこう、と決意する。

普通に謝って何かむしゃくしゃしたら、その場のノリでやっちなえ、とも考えた。

そう考える辺り、主であるアシュレイの影響を受けている証拠だ。

「あ、そうそうテレジア聞いてー！」

アシュレイが急に声を弾ませた。
彼女はしっかりとテレジアの方を向いて、花の咲いたような笑顔を披露している。

眼福だ、とテレジアは緩みそうになる頬を必死に堪える。

「空間における魔力濃度の関係で新発見なの。一定以上の濃度になると空間そのものに影響を与えることができるの」

つまり、とアシュレイは声を張り上げる。

「これを利用すれば時間そのものを操ることができる！」
「残念だが、アシュレイよ」

そんな声と共にアシュタロスがどこからともなく現れた。

「上位悪魔や天使、神々にとって時間を操ることはできて当然のことだ。私もある程度なら操れるぞ？」

でなければ加速空間なんぞ作れん、と締めくくるアシュタロスに
がつくりと頂垂れるアシュレイ。

「ところでアシュレイ、例の件で提案があるのだが……」

「テレジア、席外して頂戴」

アシュレイの言葉にテレジアは音も無く、その場を後にした。
それを確認し、アシュタロスは言葉を続けた。

「世界システムの改変についてだ」

「システム改変は世界に潰される、という結論が出ている筈よ」

「だが、世界システムに則った改変ならば潰されない」

ふむ、とアシユレイは手に顎をあてる。

「それは道理だ。もし、それを妨害してくるならば世界は自己矛盾により崩壊してしまう。けれど、あなたの望みは自己の消滅であった筈。魂の牢獄に手を加えることはシステムの改変に繋がる」

「そうだ。おそらく直接書き換えようとすれば失敗する。だが、間接的にやれば問題はない。そう、世界のバックアップを受けた輩に倒される、というやり方ならば」

「人間に倒されるつもり？ 陳腐な御伽話のように」

「神族を考えていたが、人間にやられるのも悪くはない……たとえ、サツちゃんやキーヤン、ヤツさんであつても私を牢獄から連れ出すことはできないのだから」

悲痛な表情のアシユタロスを見、嫌な話だ、とアシユレイは思う。友好関係にある知り合いの自殺の相談を受けているのだから。

善と悪はコインの裏表でありながら、基本、悪は常に善に負け続けなければならない。

つまり、世界を維持するために魔族は基本的に悪として神族や人間に負け続けなければならない役割を強制されている。

魔族の中には自分達が虐げられ続けなければならない状態に多かれ少なかれ疑念を持っている者も多い。

もっとも、アシユレイとしてはそんなの関係ない、と常々思っている。

彼女がそう思うのはまだ若いからだ、というのはアシユタロスには簡単に予測がついた。

時間軸的には未来にあたる彼の世界では高度に発達した人間文明

を消すのが惜しいという理由で、魔族は勝つことも完全に負けることも許されてない。

永遠に悪役で在り続けることしかできない、救われない邪悪であることを強制される。

そして、アシュタロスを含め、神々や上位天使、魔王、魔神は死ぬと神魔のバランスが崩れるため強制的に復活させられ死ぬこともできないという魂の牢獄に囚われている。

アシュタロスは邪悪な存在であることを拒んでいた。そうであるが故に彼は新たな世界の創造もしくは聖書級大破壊　ハルマゲドン　を起こそうとしている。

そうすれば彼は世界を乱したという罪で世界により　宇宙意思　と言ってもいい　牢獄から解放され、死ぬことができる。

新たな世界の創造もハルマゲドンも、どちらも実行されれば世界が消える。

邪悪な存在であることを拒むが故に、最も邪悪な存在になりかけているのだ。

アシュレイもまた時が経つにつれ、邪悪な存在として忌み嫌われ、永遠に中途半端に負け続けることを強制される絶望を知ることになるのだろう。

アシュレイ自身としてはそうなっても変わらない自信はあるが、実際、どうなるかわからない。

アシュタロスはアシュレイに心配を掛けぬよう、無理矢理笑みを浮かべ、明るい声で告げた。

「テストケースとしてこの世界を利用したい。ああ場所の選定は既

に済んでいる」

「例のアレかしら？ 膨大な人間の魂が必要みたいけど」

「それらは将来的に解決する。戦争で死んだ人間の魂を使えば問題はないからな」

「で、場所は？」

「神族・魔族から邪魔を受けず、もともと地球から近いそれなりの大きさの惑星さ」

それを聞き、アシュレイは手を打った。

「火星ね」

「ああ、火星だ。そこに新たな世界を創造する。君にはその管理者になつてもらいたい」

「例の装置に関するデータその他諸々は全て頂く。それが条件よ」

「無論だ。それに加えて私が観測した世界システムの作用と思われる事象などのデータも渡そう。何かの参考になる筈だ」

「私は将来的に例の装置無しで改変ができるようになりたいわ」

そう告げるアシュレイにアシュタロスは答えた。

「できるさ。君ならばな」

悪魔達の暇潰し(前書き)

微エロ?アリ。

悪魔達の暇潰し

「はぁ……いいわ」

珍しく大人形態になってベッドの上に寝転がっているアシュレイ。そんな彼女の体をマッサージしているリリスとリリム。

結局、アシュレイの決定によりリリスが代表でリリムが補佐となった。

勿論、2人で淫魔達全員に奉仕をさせた。

その際、人間が見ると色々な意味で毒となることが繰り広げられてたのだが、そこは割愛する。

「アシュ様の御身体、大人るときはより美しいです」

リリムはマッサージの手をやめ、すりすりとアシュレイの背中に頬擦りする。

シミ一つない張りのある白い肌は淫魔達から見ても極上のものであった。

「アシュ様、舐めていい？」

「むしろ舐めなさい」

アシュレイの返事に喜んで彼女の体をペロペロと舐めていくリリス。

「親子丼って本当にいいものだわ……」

アシユレイは満足であった。

「あなたも少しは慣れた？」

彼女はそう声を掛ける。

その相手は下級魔族の少女、テリアナ。

「あ、えと、はい……」

何故か顔を赤くしてそう答えた。

その反応から、彼女が既にアシユレイに美味しく頂かれているのは言うまでもなかった。

彼女、テリアナはメイド見習いとしてテレジアの厳しい指導がなされていた。

今回、アシユレイの傍にいるのもメイドとしてのテストの一環だ。

色々な意味で初々しい反応がアシユレイとしては実に良かった。

「うんうん、いいことだわ」

彼女は起き上がり、おいでおいでとテリアナを呼ぶ。

おやおずと近寄ってくる彼女、その紫色の髪をアシユレイは触り、触感を楽しむ。

そして、その頭を撫で始める。

一応、彼女はまだ修行中なのだが……時間は腐る程あるのでんびりやっても大丈夫なのだ。

とはいえ、既にあの10万とか100万とかいうページ数の教科書は10分の7程度、終わっている。

そろそろアシユレイ自身としても、エシユタルに勉強を直接教え

ようかなと思いはじめていた。

そのときであった。

エシユタルがやってきたのは。

「アシユ様、少々わからないところが……」

ノートと鉛筆持ってやってくる子供……もっと言えば幼女なエシユタルにアシユレイの頬は一瞬で緩む。

「この周波数伝達関数なんです……」

差し出されたノート、そこにある無数の数式。

人類が将来的に発見するものや発見していないものなど種類は様々だ。

「ああ、それはこっちのヤツを微分して、この三つの七次方程式に代入して、最後にsを求めれば出るわ」

なるほど、と頷くエシユタル。

そうしている間にもアシユレイはテリアナの頭を撫でる手を止めてはいない。

「ありがとうございます」

エシユタルはお辞儀して部屋を辞した。

「んー悪魔って最高ー！悪魔でよかったー！」

今度はテリアナを抱きしめて頬擦りし始めるアシユレイ。

抱きしめられているテリアナを羨ましそうに見つめるリスとリム。

「というか、テリアナだけしか私の新しい部下がやってこないって
どういうことなの」

抱きしめるのをやめて、シルヴィアとベアトリクスを呼び出す。
数秒と経たずに現れる2人。

「ああ、そういえば今まで2人とかつて数えていたけど、2柱とするべきかしら……？ まあ、どうでもいいか」

そんなアシュレイの独白に首を傾げる周囲の面々。

「で、シルヴィア、ベアトリクス。新しい子は？」

アシュレイの問いかけに言葉を詰まらせる2人。
希望者がいませんなどは口が裂けても言えない。

「アシュ様、強硬手段に出てもよろしいですか？」

ベアトリクスの問いにはてな、と首を傾げるアシュレイ。
彼女としては強硬手段も何も、2人がどんな方法で部下を集めようとしていたのか知らない。

魔族らしい集め方ではないか、という予想はできるが、実際は求人広告出していました、なんてことはさすがのアシュレイも予想できない。

故に彼女は聞いてみた。

「どういう集め方していたの？」

「これを」

差し出されたのは一枚の広告。

その内容を見、アシュレイは爆笑の渦に包まれた。部屋に彼女の笑い声が響き渡る。

「アシュ様、見せていただいてもよろしいですか？」

リリムの言葉にアシュレイは笑いながらその広告を渡す。

リリムと、横から覗き込んだリリスは内容を読み、アシュレイと同じように笑った。

そんな3人にシルヴィアはしょんぼり、と肩を落とす。

いいアイデアだと思ったのに、と。

それを見たアシュレイは笑いを深呼吸することで抑えて、テリアナを放し、シルヴィアを呼ぶ。

近寄ってきたシルヴィアを屈ませ、その頭をアシュレイは撫で始めた。

「いい子いい子」

撫でられてシルヴィアは元気が出たのか、それとも単純に嬉しいのか、笑みをその顔に浮かべる。

「もう魔族的に強そうなヤツを半殺しにして拉致ってきなさい」

ベアトリクスは頷くが、その視線はシルヴィアから離れない。

その意図を察したアシュレイは彼女を呼ぶ。

近くに寄ってきた彼女をやっぱり屈ませ、もう一方の手で頭を撫で始めた。

「うふふふ、やっぱり悪魔って最高だわ……」

魂の牢獄や永遠の悪役など重いこともあるが、割りきってしまえば天国だ、とアシユレイは判断していた。

「さて、これからどうしようか……？ とりあえず、4人纏めて久しぶりに大人の体で味わおうかしらね」

そのとき、アシユレイの頭にサツちゃんの声が響いた。

『元気しとるようやな？ わいからのプレゼントで大人形態のときは本家の淫魔も吃驚な色気っちゅーか、淫気やな？ それが出せるようにしたるさかい。存分に楽しんでやー』

それと同時に彼女の体から目に見えない何かが出始めた。

それを間近で浴びた5人は息遣い荒く、その瞳を潤ませる。

「……サツちゃん、いい仕事するわ……」

武器などよりも、アシユレイ的にはいいものであった。

「とりあえず、激しくいくか……！」

「ああ、暇だわ……」

一方その頃、ディアナは暇であった。

鍛錬するとしても、24時間ずっとやっているというのは悪魔といえど精神的に疲れるし、何よりつまらない。

しかし、娯楽も何もないので暇となる悪循環。ふよふよと宙を漂いながら暇潰しを探す彼女。

「何かいい暇潰しはないかしらね」

そんな彼女はノートを持ったエシユタルを見つけた。

ああ、これはいい暇潰しだ、とディアナは彼女を見て、あることを思いついた。

「エシユタル、暇だから何かしない？」

「私は忙しいのだ」

「いいじゃない。同僚のよしみで暇潰しに付き合ってよ」
「断る」

取り付く島もないエシユタルにディアナは強硬手段に出る。

「それじゃ、あなたがアシユ様の写真を多数保有していることをアシユ様に教えてしまおうかしら？」

エシユタルはその言葉の意味を理解するのに数秒を要し、ついで硬直した後、顔を真っ赤にした。

「何で知っている!」

叫ぶ。

「暇だったので、つい」

「暇だから人の部屋を漁るのか！」

「悪魔なので」

ああ言えばこう言うディアナにエシユタルは溜息一つ。

「幸せが逃げるわよ？ 溜息なんて吐くと」

「誰のせいだ」

「悪魔のせいね。怖い怖い」

もう一度溜息を吐くエシユタル。

彼女は観念したかのように告げる。

「わかった。お前の暇潰しに付き合ってやるから、さっさと要件を
言え。何か考えてあるんだらう？」

「ああ悪いわね」

「ああ悪いな。そのでかい乳を心臓ごと抉り取ってを食らってやり
たいくらいには」

「アシユ様ならいいけど、何であなたにやらせないといけないのよ」

「もういいからさっさと言え」

「それじゃ遠慮なく……何か、暇潰しできることない？」

「死ぬ。100万回死ね」

「じゃあ100万と1回蘇るわ」

「もう知らん！ アシユ様に言いたければ言え！」

エシユタルはそう怒鳴ってその場を後にした。

彼女が去った後、ディアナは呟く。

「ああ、少しはいい暇潰しになったわ。でも暇ねー」

どうしたものか、と考え、淫魔と戯れようかしら、と思いつく。

「でも、それも気分じゃないしー」

ディアナはふよふよと宙を漂いながら、エシユタルとは逆の方向へ行った。

すなわち、アシュレイの部屋へと。

「アシュ様、今、よろしいです……か？」

ディアナはアシュレイの部屋に入って後悔した。

無数の淫魔達があちこちに倒れており、ベッドの上にはベアトリクスやシルヴィア、そしてテリアナなども倒れている。

鼻をつく強烈な情事特有の臭い。

「……？」

しかし、アシュレイは部屋の中にはいなかった。

ディアナは屋敷全体を魔法でもって探査すると、地下実験場にアシュレイの反応を発見する。

何やら忙しそうだ、と彼女は主の邪魔をしないが為にアシュレイと会うことを諦める。

「ああ、ちょうどいいところにいた」

背後からそんな声が。

振り向けばそこにはテレジアの姿。

その手にはぞうきんやらモップやらバケツやらの掃除道具を色々持っている。

それだけならいいが、わざわざ彼女が気配を消してディアナに近づいたところが不自然であった。

嫌な予感を感じるディアナ。

そんな彼女にテレジアはにっこりと笑みを浮かべて、彼女の両肩をガシツと掴んだ。

「暇か？ 暇だな？ 暇だろう。アシユ様の部屋を掃除するから手伝え」

「え、やだ。めんどくさい」

「問答無用」

こうしてディアナはテレジアと共にアシユレイの部屋の掃除をすることになった。

悪魔達の暇潰し……というよりか、日常はわりと普通のようにあった。

魔法開発（人間用）（前書き）

短め

魔法開発（人間用）

「はい、今日はここまでー、予習よりも復習しっかりやっておく」とー」

アシユレイは授業の終了を宣言する。

彼女は今、ソドムとゴモラの学校にいた。

最近、アシユタロスが例の装置で忙しいということと、専らアシユレイが教鞭を取っている。

「あの、アシユ様！」

各々が帰り支度をしている中、アシユレイに近寄ってきた少女が1人。

灰色髪に灰色の瞳をした少女。

祈禱所でアシユレイが救ったあの子であった。

彼女も元気になって以後、学校に通っており、なおかつ極めて優秀な成績を収めていた。

アシユレイが他の住民に聞いてみると街で頭がいいと評判であったらしい。

「その、この後……アレを教えてくださいませんか？」
「いいわよ」

承諾したアシユレイに満面の笑みを浮かべる少女。

それがアシユレイとしては可愛いつたらありゃしない。

でも、威厳を保つ為に抱きついたりはしない。

「ところで、ずーっと気になってのだけど、あなたはアシユ様って呼ぶのね」

「はい、アシユ様がそう呼んで欲しいと常々仰られていましたから」「そう。まあ、もう諦めてるのだけど。じゃ、外に行きましょうか」「はい」

2人は校舎の外へ出、さらに歩いて街の外れへと赴いたのであった。

「それじゃ始めましょうか。今日は魔力を練り上げる……まあ、簡単に言うて固めることをやってみましょうか」

「はい」

少女は両目を閉じ、自分のうちにある魔力を感じ取る。そして、それを固めるようイメージしていく。

そう、少女にはこっちにも才能があった。

アシユレイの魔力により治癒されたことで眠っていたものが目覚めたのだ。

それに気がついたアシユレイは元気になった彼女にそのことを告げ、どうするか、選択を迫った。

無論、アシユレイは少女に凶悪な攻撃魔法や戦闘方法を教えるつもりは毛頭無い。

なぜならば人間が如何に力を磨いたところで、神族や魔族には勝

てない。

蟻1匹とゴジラ1体が戦うよりももっと大きな力の差がある。

無論、下級神魔族ならば倒せるかもしれないが、それでもリスクはあまりにも大きい。

アシユレイはアシユタロスとソドムとゴモラを護る為に五重の結界を街全体を覆うように張っている。

これはつい最近に完成したものだ。

生半可な神魔族では突破することも敵わないこの結界を破って、ちよつかいをかけてくる輩は最低でも熾天使や魔神クラスとなる。

そんな連中に人間では到底敵わない。

故にアシユレイは少女が希望するならば補助や回復といった系統を教えることを決めていた。

そして、少女は魔法を教えてもらいたい、とアシユレイに告げ、放課後の特訓となったのだ。

「まあまあいいんじゃないかしら？」

30分間、たっぷりと集中し、魔力を練り上げた少女にアシユレイはそう告げた。

少女は汗だくでへたり込んでいる。

「もう少ししたら簡単な魔法を教えてあげるわ」

そう言いつつ、アシユレイはどこからともなく数冊の本を取り出し、少女の前に置いた。

「これ、1週間で全部読んどいて。理解できなくてもいいから、こ

ういうものなんだって感じで」

「は、い……」

「うんうん、頑張る子は好きだね。でも、頑張りすぎるのもダメよ

……エナベラ？」

「はい……」

少女、エナベラは息も絶え絶えながら、しっかりと頷いた。

そんな彼女に満足気に頷きつつ、アシュレイは思う。

自分達の使う魔法は到底人間達には扱えない。

効果や効率は悪くなるが、もっと簡単なものを作らなければ、と。

「さ、私はちょっとやることができたから、これで行くわね」

「はい、ありがとうございます！」

加速空間に戻ったアシュレイは地下実験場へと赴き、早速その人間用の魔法の作成に取り掛かった。

魔族にとっての魔法とは魔力のコントロールなどの際に行う行程や発生する課程が一切省かれた「結果のみが顕現した力」だ。

魔力の大きさと霊的な存在としての格の大きさに比例して威力や効果などが大規模になる。

到底人間には扱えない……というか、どう逆立ちしても人間には真似できない代物だ。

そこでアシユレイは上位魔族や上位神族が通常活動を行う際に、副次的に起きてしまう事象を操る術を人間の魔法としよう、と考えた。

これならば精霊への働きかけなどでどうにか再現可能であった。

アシユレイは自分の知識を総動員し、時折アシユタロスの蔵書などを参考にしつつ、人間用魔法の大元となる精霊を縛り、操る術式を幾通りもノートに書き綴っていく。

なるべく簡単に、分かりやすく、効率は落ちても構わない、という前提に則り、無駄な部分をそぎ落とし、人間には到底理解できないであろう超効率化の式を分かりやすいものに書き換えていく。

どのくらいの時間が経過しただろうか。

アシユレイが書き綴っているノートは既に23冊目。

それでもまだ彼女は止まらなかった。

一方その頃……地獄のとある場所にて。

「いいな？ アシュレイ様に絶対の忠誠を誓うのだ」

「わ、わかった……だから……もうやめてくれ……」

四肢を切り落とされ、地に這いつくばっている魔族が懇願した。そんな情けない様に切り落としたシルヴィアは溜息を吐きたくなつた。

あまりにも無様。

こんな根性の無い輩では到底兵隊としては使えない、と。

彼女はベアトリクスと手分けして、強いと噂されている魔族を片端から襲撃して、アシュレイに忠誠を誓わせていた。

領地を持つていた上級魔族もいたので、忠誠を誓わせるついでにその領地と財産全てをアシュレイのものとして没収して。

力こそ正義の地獄において、そういうことをしても誰も文句は言えないし言わない。

「しかし……中々いい輩がない……」

そのとき気配を感じ、シルヴィアは背後を振り返る。

そこには老紳士が立っていた。

黒い帽子に黒いマントを羽織っており、一見、人間だが、その魔力が悪魔であることを証明していた。

彼はシルヴィアの前までくると、一礼する。

「お初にお目にかかる。アシュレイ様の臣下とお見受けしたが……」

「お前は？」

「私はヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン。地獄の辺境で伯爵を名乗らせてもらっている」

「その辺境伯が私に何の用か？」

「アシユレイ様の配下に加えていただきたい」

そう告げ、彼は頭を垂れた。

「何故だ？」

「あなたのような使い魔を持っている存在が、弱小である筈がない」

ほう、とシルヴィアは感心する。

自らのことを使い魔である、と見抜かれたのは今回が初めてだからだ。

「お前の言う通り、アシユ様は強大な御方だ。しかも、その力は日々増大している」

「私はアシユレイ様に潰される前にその配下につき、庇護を受けた。無論、あらゆるものを差し出す用意がある」

「裏切らない保障は？」

「私が裏切ったところですぐに殺されるのがオチだ。私はあなたが少し力を出せば一瞬で消し飛ぶ程に弱い。それが何よりの保障だと思っ」

「確かに。お前は良くて中級魔族の上、悪ければ真ん中程度だ。戦力としては期待できないが、まあ、いいだろう」

「ありがとう」

礼を言うヘルマンにシルヴィアは構わない、と告げる。

そして、彼女は辺りを見回す。

先ほどの瀕死の魔族に加え、山と積まれた魔族達。

その全てがヘルマンと同程度の中級魔族、そして少々の上級魔族だ。

シルヴィアは上級魔族であるが、何分、主が主なので上級魔族の

中でも中の上、と魔神にわりと近いレベルだ。

「さて、ある程度の人数が集まったし、一度戻るとしよう。アシユ様に見ていただかねば」

「地獄にいるのかね？」

「地上だ。アシユ様は自らを崇める人間達に色々と教えていらっしやるのでな」

「……珍しい御方だな」

ヘルマンの言葉ももつともだ。

将来的には人間に代価を要求することで知恵を与える悪魔も、この時代ではまだそういうことはない。

「ところで一応、私はお前に敬われる立場だと思うのだが……」

遠回しに敬語を使え、と言ってくるシルヴィアにヘルマンは苦笑する。

「何分、癖みたいなものだね。敬語というのはあまり使ったことがないのだ。勘弁して欲しい」

「……アシユ様に同じような態度であつたら、魂魄を砕いてやるかな」

紅い瞳で睨まれ、ヘルマンを体を震わせる。

「あまりいじめないでくれたまえ。眼力だけでも心臓が止まりそうになる」

「止まっても我々は死なないだろう？」

「何、例えだよ」

アシユレイの部下集めは一応、順調であるらしかった。

彼女の名は……！（前書き）

ネギまに関する独自設定あり。

彼女の名は……！

「そういえば……私って魔眼とか使えるのかしら？」

人間の魔法開発も一段落したとき、アシュレイはそんなことを思った。

魅了、石化、運命操作その他諸々の様々な効果を引き起こすことができる魔眼。

悪魔であるならば何がしかのものを持っているのが当然だ。もっとも有名なものは見たものを殺すバロールの魔眼だろう。

未だ訓練以外で戦闘をしたことがないアシュレイとしては自分の力が使いたくしょうがない。

私ってこれだけ強いよね、と自己陶醉に浸りたいのだ。

「あーそういえば今ってどのくらいだっけ？」

地下実験場に籠っていた彼女に時間の感覚は既がない。

「この空間で168年です。現実時間では1週間が経過しております」

アシュレイの問いに答えたのはいつの間にかいたテレジア。

「ああ、いたの……何か用？」

「はい、先ほどシルヴィアとベアトリクスが帰還しまして……アシユ様の新たな配下を多数引き連れて参りました」

「なんだって！」

アシユレイは座っていた椅子から勢い良く立ち上がる。

「こうしちゃいられないわ……ちょっと確認しとかないと。あ、でもその前に」

そこら辺に落ちていた知らない紙を手にとって睨みつけた。

基本、悪意を持って睨むことにより、持っていれば魔眼は発動する。

一瞬で紙が溶けて消えた。

アシユレイはまじまじと握っていた手を見つめ、ついでテレジアに視線を向けた。

「何が起こった？」

「もう少し、大きめなもので試した方がよろしいかと」

「……それもそうね。確か屋敷の外に岩がいくつか転がっていたから、それで試すとしましよう」

「ついでに配下となる者達にお会いください。屋敷の外におりますので」

そんなわけでアシユレイは実験場を出た。

出て少しすると、リリースとリリムに会ったので「私の虜になれ」と念じながら睨んだら一瞬で獣のように発情したので、彼女はそのまま縛って放置した。

アシユレイは自らの目に魅了の効果があることを確信し、もう一つの効果に胸を高鳴らせつつ、屋敷の外に辿り着いた。

「……色々いるわね」

屋敷から出てきたアシュレイに注がれる無数の視線。

それらは全て彼女を品定めしているかのようなものだ。

そんな悪魔達とは少し離れてシルヴィア、ベアトリクスがいた。

2人はアシュレイがどのようなことを新たな配下達に言うのか、期待に胸を高鳴らせている。

アシュレイはそれらを無視し、手近にあった岩を睨みつける。
するとどうしたことが、岩が溶けていく。

それも高熱で溶ける、というものではなく腐り溶けていく。

腐臭に顔を顰めるアシュレイは岩から視線を離し、値踏みする悪魔達へと向ける。

そのとんでもない魔眼に恐怖し、一斉に逃げ出そうする悪魔達にアシュレイはその身に秘めた膨大な魔力を解放した。

ずん、という擬音が聞こえそうな恐ろしいまでの重圧。

多くの中級魔族、僅かな上級魔族達は逃げることもできず、ただ一様に畏怖の視線をアシュレイへと向けた。

「私はアシュレイ。将来的にはアシュタロス。好きに呼ぶといい。
あなた達は幸運だわ」

くすり、とアシュレイが晒う。

「裏切らない限り、私に潰されないのだからね」

アシュレイの言葉に居並ぶ悪魔達は背筋に悪寒が走った。

それと同時に喜びがあった。

こんな強いヤツの下につけるなんて、と。

「で、そうね。私の魔力だけで分かったと思うのだけど、少し戦ってみましょう。シルヴィア、おすすめの輩を」

「そこにいるヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマンが適任かと」

「私かね!?!」

まさかの指名に思わず声を上げるヘルマン。

ほう、とアシュレイの視線が彼を捉える。

「ここに来るまでに無駄に回る口で才能ある若い者がどれほど強くなるのか好きだとか何とか言っていたではないか」

「いや、それはあくまで……」

「アシュ様は十分お若いし、才能も豊かだ。存分に戦ってこい。そして死ぬ」

「酷くないかね!?! 一応私も部下なんだが!」

シルヴィアとヘルマンのやりとりにベアトリクスは溜息一つ。

対するアシュレイは今までにいないタイプの存在に興味津々といった風だ。

「で? ヘルマンでいいの?」

「はい、アシュ様。一応、半殺し程度に済ませてくだされば……」

ヘルマンは仕方がないので気分を切りかえた。
殺されないという保障が　酷くあやふやなレベルであるが
ある中で魔神クラスのアシュレイと戦えるならば幸運だ、と。
なんだかんだでアシュレイは既に魔力だけなら魔神に匹敵するレ
ベルだ。

ヘルマンは周囲にいる悪魔達をかき分け、アシュレイの前に立っ
た。

その距離は5mも無い。

「お初にお目に掛かります、アシュ様。私、ヴィルヘルム・ヨーゼ
フ・フォン・ヘルマンと申します。地獄の辺境にて伯爵を名乗らせ
てもらっております」

「そう……あなた、面白そうだから一応、頭に留めておくわ」

「恐悦至極。さて、そろそろ始めさせていただきます故」

「いいわよ。どこからでもかかってきなさい」

そう言ったアシュレイであったが、その場にただ突っ立っているだ
けだ。

戦闘体勢をとるとのことすらしない。

ヘルマンはおもいつきりその拳でアシュレイの頬を殴りつけた。
しばしの間の後、殴ったヘルマンの拳が砕け散った。

「これは、とんでもない……」

彼は手首から先が無くなった右手を抑えつつ、口から石化光線を
吐いた。

しかし、それはアシュレイに当たることなく、彼女の周りにある
何かに無効化された。

「何とも複雑な呪圈……！」

呪圈とは上位悪魔や上位神族が常時展開している超多重境界だ。半ば無意識的に展開されているこれは余程の実力差がない限り、一撃で貫くことはできない。

このレベル同士の戦闘では呪圈を素通りできる唯一の武器「自己の肉体」による殴打と共に大量の魔力を打ち込み、同時に相手の呪圈を外側から1枚ずつ解呪。

また自身の呪圈の修復を行い相手の呪圈を全て剥がしてから最大攻撃を叩き込むのがセオリーとなっている。

アシュレイの呪圈はヘルマンの石化光線を難なく無効化してしまった。

そして、自己の肉体が唯一の武器と述べたが、今回の場合は例外だ。

ヘルマンは呪圈を素通りできる肉体でもってアシュレイを殴った。その拳には彼のほぼ全ての魔力が込められていた。

しかし、それを食らってなお、アシュレイは微動だにせず、逆に殴ったヘルマンの拳が砕け散った。

「私はただ立っているだけで最低で数十億か、それ以上の魔力があるわ」

アシュレイの言葉にヘルマンは思わず目を剥いた。

他の魔族達も呆然としていた。

あまりにも魔力の桁が違い過ぎる。

上位魔族や上位神族が通常活動を行う際に引き起こされてしまう

事象があることは既に述べた。

まさにヘルマンが殴ったアシュレイがそれだ。

通常、魔族は元来の肉体強度に加え、内包している魔力によってその強度が上乘せされる。

つまり、上位神魔族ともなれば寝ていようが本を読んでいようがどんな状態でも永久的に肉体強化の魔法が掛かっているのと同じ状態だ。

しかもその強化魔法の効果は魔力に比例する。

すなわち、立っているだけで数十億もの魔力を内包しているアシュレイはダイヤモンドよりも遥かに硬い。

人間に分かりやすいように置き換えれば、ボクサーの世界王者が巨大なダイヤモンドを殴ったような感じだ。

当然、熟練したボクサーの繰り出す拳は素早い。その分、何かに当たったときの反動もまた大きい。

そんなわけでヘルマンの拳は砕け散ってしまったのだ。

「いやはや……まさに魔神だ」

ヘルマンが何気なく発した言葉。ぴくり、とアシュレイの耳が動く。

魔神、と呼ばれたことは初めてである。

「そうよ、この魔神である私があるあなたがあなた達の主なの。光栄に思いなさい」

高笑いし始めるアシュレイ。

彼女の機嫌は一気に良くなった。

そして、ひとしきり笑ったところで彼女は尋ねた。

「ヘルマン、あなた、もうちょっと強くなりなさいよ。私、将来的

に神族に喧嘩売る予定だから、最低でも智天使クラスとは殴り合いができるようになってもらいたい。今のあなたじゃ精々大天使クラスと渡り合える程度だし、弱すぎるわ」

「……え？」

思わずヘルマンは聞き返した。

他の魔族達も目を瞬かせている。

「地獄で魔王になった後、地上侵攻して制圧して、神界攻めいって主神達の顔面殴った後、女神達をDNAの名にかけて犯す。以上」

開いた口が塞がらない、とはまさにこれだ、というような表情を見せるヘルマン。

「待て待て待て！ それではハルマゲドンが起こるぞ！？」

敬語をかなぐり捨てて彼は叫んだ。

その懸念はもつともなものだ。

「大丈夫よ。どっちにしるあっちもこっちをこの世から消滅させてくたさずくすくすしていると思うし」

ガス抜きよ、と涼しい顔で告げるアシュレイ。

この辺はアシュタロスからの受け売りだ。

ヘルマンはどうしたものか、と他の魔族達を見てみた。

何だか目を輝かせていた。

彼らとしては憎き神族を潰せるならハルマゲドンだろうが何だろ
うが大歓迎だ。

この時代、まだ神魔のデタントははかれていない。

将来的にはそうなるとしても、まだドンパチしても大丈夫であっ

た。

「というか、人型の悪魔が多いのね。もったときとのヘンテコなのだと思ったのに」

アシュレイが見たところ、見た目は全員人型の悪魔だ。

勿論、変身して彼女の言うところのぎとぎとのヘンテコなものになることもできるだろうが。

「それに……女性型もちらほらいるし……」

褐色肌で白い髪をショートカットにした小柄な少女がアシュレイの目についた。

彼女は自分にアシュレイの視線がきたことに気づき、頭を下げる。

「お会いできて光栄ポヨ」

「……ポヨ？」

アシュレイは思わず首を傾げた。

「地獄の辺境出身ポヨ。方言ポヨヨ」

「ポヨヨ？ ウヨヨヨ？」

なんかヘンテコなのがきたわねー、とアシュレイはシルヴィアとベアトリクスを見る。

私は知りません、と首を横に振るシルヴィア。

アシュレイの視線がベアトリクスに注がれる。

「恐れながらアシュ様。方言こそアレですが、それなりにやり手ではあります」

「そうなの？」

「はい。また彼女の家は代々学者の家系でもあり、自前で研究機関を持っているそうです」

「お父様は公爵を名乗っているポヨ。手を出さないで欲しいポヨ」

少女の言葉にアシュレイは勿論、シルヴィア、ベアトリクスも合点がいった。

つまり、アシュレイへの生贄だ。

娘を差し出すから潰さないで欲しい、というもの。

「ま、いいわ。ただし、私には協力してもらおうから」

「勿論ポヨ。必要となったときに言って欲しいポヨ」

「で、あなたの名前は？」

「ニジ・レイニーデイポヨ」

「ニジ？ 虹……ああ、なるほど。いい名前ね」

「ありがとうポヨ」

雨の後には虹が掛かる、という意味だろうとアシュレイはあたりをつける。

何で名前は日本語で苗字が英語なのかわからないが、まあそういうこともあるだろう、と彼女は納得する。

ヘルマンなんぞどう見ても人間の名前だし、と。

そんなやりとりがされている中、シルヴィアはベアトリクスに尋ねた。

「ところでベアトリクス。なぜ、敬語を教えなかった？」

「何でも、あのポヨというのは彼女の出身地では『です』という意味合いらしい」

「……それなら仕方がないか」
「ああ……」

2人は家族全員がポヨポヨ言っている光景を思わず想像してしまい、げんなりとした気分になった。

そんな従者達とは裏腹にアシュレイの気分は最高に良かったのであった。

彼女の名は……！（後書き）

（、。A、）ウエヨ

魔族はつらいよ

ある晴れた日のこと。

加速空間内にある海辺でのんびりとパラソルの下、リリースとリリムからマッサージを受けていたアシュレイ。

そんな彼女はふと呟いた。

「私ってどんくらい強いの？」

これが始まりであった。

「で、私を呼んだのかね？」

「うん」

「私もそれなりに忙しいのだが」

「いいじゃないの。たまには息抜きも必要よ。それにまだ授業は残ってるじゃないの」

アシュレイへの授業は最近、アシユタロスの事情により行われておらず、定期的に送られてくる課題をやるだけで、あとは自習であった。

手抜きと思われるかもしれないが、実際のところ必要な箇所は既に終わっており、あとは発展的なものばかりだ。

それらは自分で実践・実験して結果を考察する、というものがほとんどであった。

「まあ、いいだろう。少し待ちたまえ」

アシユタロスはそう告げ、何やら紙に書き始めた。
アシユレイはわくわくとその様子を見ている。

そして、数分と経たずにアシユタロスはその紙を彼女に渡した。

「……あら、意外と上ね」

むふふ、と笑うアシユレイ。

「私の世界での神族・魔族を基準に考えている。こっちではどうなるかわからないが、参考にはなるだろう。ああ、言うまでもないが、あくまでそこに書いてあるのは魔力の多寡であって、実際の戦闘力ではないからな」

さすがのアシユタロスも未知数のアシユレイの戦闘力を定義することはできない。

ともあれ、そこに書かれていた順番は非常に大雑把だが、一応アシユレイを満足させるものであった。

『ヤッさん>サツちゃん〓キーヤン>魔王〓主神>>魔神〓アシユレイ>>上級魔族・上級神族〓熾天使>>中級魔族・中級神族>>下級魔族・下級神族>人間の中で特に優秀な者』

「ヤッさんって誰？」

見慣れぬ名前に問いかけるアシユレイにアシユタロスは驚く。

「知らないのかね？ YHVHだ」

その名の持つ強烈な言霊にアシュレイは思わず身を震わせた。とんでもない力を持った存在であることがうかがい知れる。

「なるほどね……だからヤツさんか」

「我々クラスでも身を震わせるレベルの方だからな。だからヤツさんなのだ」

「で、とりあえず私ってもう魔神を名乗っていいかしら？」

「いいのではないかね。魔力も知識も十分だろう」

「もうアシュタロスの名乗ってもいいかしら？」

「いいのではないかね？ まあ、現状とあまり変わらない気もするが」

テレジア以下の従者達も部下達もアシュ様と彼女を呼ぶ。

変わるとしたら、アシュレイ自身の気の持ち方くらいだろう。

「それに君はアシュレイで長いこと過ごしていたからな。最終的にはアシュレイ「イシユタル」アシュタロス、と名前が3つある状態になる。どれもが君を指し示す言葉だ」

「ホントに変わらないのね」

「そついうものだ」

その後、アシュレイは久しぶりにアシュタロスの授業を受け、彼と近況報告や自らの魔眼について意見交換をし、自らの世界へと帰る彼を見送った。

一応、彼女の疑問は解決したのだが、今度は実際に試してみたいくなる。

ヘルマンとのことは戦いのうちには入らない。

とはいえ、あんまり派手に暴れると今度はいらぬところから目をつけられることになる。

まだまだ彼女の軍団は発展途上だ。

どうしたものか、と考えながらアシュレイは屋敷の廊下を歩いていた。

「アシュ様、どうしたポヨか？」

通りかかったニジがそんなアシュレイに声を掛けた。

「ああ、ニジ。私の強さが分かったところなんだけども」

「強さポヨ？」

「うん。で、どうにかその力をふるってみたい、とそう思うの」

「ポヨヨ。アシュ様が全力を出したら、魔王達がやってくるポヨ。」

アシュ様自身は大丈夫とはいえ、他が駄目になるポヨ」

一応、アシュレイはベアトリクスとシルヴィアの部下集めにより、部下にした魔族達から没収したことで広大な領地と膨大な財宝を得ている。

とはいえ、それは未だ地獄ではルーキーとはいえ、魔神としてはそれでもまだ足りなかった。

当然、それらの領地を一括して統治する機関の設置や各地への行政官の派遣などなどやることは山積み。

神族や魔族といえど、こついうところは人間の国家と対して変わらない。

そんな状態で魔王達と戦争なんてしたら全てがご破算となってしまう。

「じゃあどうしようか？」

「私達の調査によればアシユ様は魔族にしては珍しく性欲が強いポヨ。思うに、魔族としてあって当然の破壊欲などは全て性欲に転化されている筈ポヨ。つまり、性欲を発散すればいいポヨ」

「いつも通りやってるのだけでも」

「アシユ様の力は日々増大しているポヨ。それに伴って破壊欲も徐々に大きくなるポヨ。性欲も比例して大きくなるポヨから、今まで以上に発散しないと駄目ポヨ」

なるほど、と頷くアシユレイ。

そして、思う。

キーヤんとかサツちゃんが自分を絶倫にしたのは破壊欲を性欲に転化する為の措置であったのかもしれない、と。

「あなたで発散してもいいのかしら？」

アシユレイの言葉にニジは驚き、ついで戸惑い、最後に顔を赤くして俯いた。

その初々しい反応がアシユレイにはたまらない。

ニジの父親は力を蓄えつつあるアシユレイについて調べ、長女であるニジを差し出せばアシユレイが性的な意味で彼女に手を出してくることは容易に想像がついた。

父親として非常に不安であるが、アシユレイの性格的にそこまで酷いことはされないだろう、と予測を立て、ニジを送り出していた。

無論、ニジ本人に手を出されるだろうことを伝えた上で。

そういうわけで、立場的にも力関係的にも逆らうことも拒否することもできないニジは、仕方がないので開き直すことにした。

すなわち、彼女は情事を存分に楽しんでやるという気持ちだ。

もつとも、やはり恥ずかしいし若干の不安から、言葉が口から零れ出る。

「覚悟は……できているポヨ……でも、優しくして欲しいポヨ……」
「勿論、優しくするわ……ええ、勿論ね」

怪しい笑みを浮かべたアシュレイはニジをお姫様抱っこして、そのまま自室へ直行したのであった。

一方その頃

「ふむ……よく食べますね。いいことです」

ベアトリクスはそう言い、ドレミの大きな体をブラッシングする。ドレミは気持ちいいのか、餌を食べるのをやめ、青銅のような鳴き声を出す。

ベアトリクスはどこを気に入ったのか、暇を見つけてはドレミの世話をしていた。

アシュレイもそれを認めており、すっかりその世話係となつていく。

ドレミ専用の犬小屋　とはいっても、その大きさはちょっとした倉庫並　にて、ベアトリクスは今日も世話をしていた。

「今日も良い毛並みです」

手触りの良い、黒い体毛にベアトリクスは思わず笑みを零す。

一応、犬と戯れる少女ということでは絵画の題材にでも使えそうだが、何分、戯れている犬がケルベロスだ。

事情を知らぬ者からすればシュールな光景であることは間違いない。

「ベアトリクス殿」

背後から呼ぶ声が。

彼女が振り返ればそこにはヘルマンが立っていた。

色々な意味で名前が売れた彼は何かと連絡役をやらされている。なお、ヘルマンは敬語には慣れていないが、それでも上司ということではアシユレイ以外には殿をつけることとなっていた。

「シルヴィア殿が呼んでいる」

「そうか。今行く」

ベアトリクスはドレミの3つの頭を1つ1つ優しく撫でた後、彼と共にその場を後にした。

誰もいなくなった犬小屋でドレミは1度吠えた。

するとみるみるうちに数mはあったドレミの体が縮んでいく。

あっという間にケルベロスが人間の女性となった。

ただし、その頭は3つあり、それぞれの頭には犬耳、お尻には尻尾がくっついている。

ベアトリクスに撫でられるのは彼女達にとって気持ちが良いこと

だが、飼い主であるアシユレイには最近、遊んでもらっていない。そんなわけで、ちょっとだけストレスが溜まっている彼女達は人型となり、アシユレイの下に行ってみよう、という作戦だ。

「アシユ様に頭撫でてもらってー」

「交尾してもらってー」

「一緒に寝たいー」

願いは非常に動物的であった。

ケルベロスはどう言い繕っても、でつかくてちょっと強い犬ではないのかもしれないといえはしようがない。

ともあれ、ドレミの発言からアシユレイは雌もしくは両性具有であれば何でもいける口らしかった。

ドレミが小屋から出発した頃、エシユタルは悩んでいた。屋敷の厨房。その真ん中で。

「……料理とはかくも難しいものなのか」

彼女の手元には屋敷の図書室になぜかあった料理の本。

勿論、アシユタロスの蔵書であるので未来に書かれるだろう本だ。何故、彼女が急に料理を始めようと思ったかといえは、ある本に書かれていたからだ。

料理は好きな相手の好感度を上げる秘密のアイテムである、と。

そんなわけで敬愛するアシユレイの為にエシユタルは料理をつくらうと思ったのであった。

そもそも魔族に食事は必要なく、単なる嗜好に過ぎないのだが、こういうのは気持ちであった。

「難しいのかしら……？ 素材さえ手に入れば簡単なのだとは思っけど……」

そんなエシユタルの横でディアナは別の料理本を眺めている。

「だが、ディアナ。我々には知らないものばかりだ。きゅうり？ なす？ レタス？ キヤベツ？ 地獄は勿論、地上にもないぞ。神界にあるものなのか？」

「さすがに神界にあるものが人間の料理本に出てくるわけないですよ」

「いや、わからんぞ。神族達が未来において広めたのかもしれない」

エシユタルの言葉も一理あるので、ディアナは悩む。

2人揃って悩んでいる様子をテレジアはじつと物陰から見つめていた。

「……その素材達について調べてみればいいのではないだろうか……」

そう彼女は小声で呟いたが、悩んでいる2人が面白かったのでもう少し堪能することにしたのだった。

戦争の足音

「戦争になるの？」

アシュレイの問いかけに彼女の前に片膝をついている特使は重々しく頷いた。

シルヴィアとベアトリクスによる部下集めは地獄で話題となり、その2人の主であるアシュレイは期待のルーキーとしてその名が轟くこととなった。

そんな折、地獄全体を統治する魔族による政府 現在の政府首班兼国家元首はエジプト神話における悪の化身、アペプ から特使がやってきたのだ。

彼が預かってきたアペプ直筆の書簡には次のように書かれていた。

『神族の横暴、もはや我慢ならん。鉄槌を下し、世界を夜に染め上げる故、アシュレイ殿には是非協力していただきたい。協力していただけるのであれば大公爵の地位、空白となっている領地や財宝その他様々なものを贈呈したい』

アシュレイとしては悪い条件ではない。

何しろ、公爵の者はいるが、大公爵の者は今の地獄にはまだ存在しない。

しかし、彼女にはどうしても確認しなければならないことがあった。

「協力するのは考えなくてもない。むしろ、私個人としては協力したい。だが、一つ確認したいことが」

「何なりと……」

「私が守護している街についてよ」

「その点については心配ありません。地上は神々にとっても自らの力となる信仰を得る為に必要な場所。自らの補給源を断つような真似はしません」

「ならば戦場はどこに？」

「地上……地球以外の様々な惑星、すなわち宇宙でございませう」

「SFなんだかオカルトなんだかよく分からなくなってきたわね」

アシユレイの呟きに首を傾げる特使。

そんな彼に何でもないと彼女は告げる。

「ともあれ、ソドムとゴモラに手を出さないということであるなら、極めて良い返事を返すことができるわ。一応、私の部下に戦争が可能かどうか、聞いてみるから時間を頂きたい」

「心得ました。では1ヶ月後に返答を聞きに参ります」

「そうして頂戴。ま、いざとなったら私だけ出るから」

「心強いお言葉、アペプ様もさぞお喜びになるでしょう」

特使が帰り、アシユレイは早速テレジア、シルヴィア、ベアトリクス の 3 人を呼び寄せた。

集まった彼女達に開口一番、アシユレイは尋ねた。

「何か予定より早く神族と戦争することになったみたい。ということとで戦争するわよ」

パチクリと目を瞬かせる3人。

それからさらに数秒の後、テレジアが尋ねた。

「マジですか？」

「マジ。戦争に協力すれば大公爵になれて、おまけに領地とかいっぱいくれるんですって」

アシユレイの言葉にベアトリクスが口を開く。

「軍としては一応可能ではありません。ただ、総数が少ない上にそれほど強い輩もいませんので、派手に立ちまわるとは極めて難しいと言わざるをえません」

「近衛も似たようなものです。というか、近衛って私1人しかいないのですが」

続けたシルヴィアの不満の言葉にアシユレイはそういえば、と思
い出す。

「何かエシユタルとディアナが親衛隊つくってたわね。改名したと思
ってたんだけど、違ったの？」

「……違います」

「それじゃ、シルヴィア、あなたこれから親衛隊の長ね。エシユタ
ルとディアナには私から言っておくから安心して」

シルヴィアが頷いたのを確認し、アシユレイがテレジアに尋ねた。

「うちの財政は戦争に耐えられるかしら？ いや、正直、お金使う
ところとかないんだけども」

「アシユ様、お言葉ですが……一応、配下の魔族には給料を支払っ
ておりますので」

「マジで！？ 下っ端なんて奴隷と同じで使い捨てだと思ってたん
だけど！ 人件費なんて聞いてないわっ」

「いえ……一応、地獄は貨幣経済なので……まあ、本当にあつてないようなレベルですが」

何分、力が強い魔族は何でもやれてしまうのが地獄だ。

例えば酒場のウエイトレスを拉致しようと、力が強ければ何も制裁は無い。

「貨幣は力の弱い魔族への救済策かしらね？」

「そうです。一応、地獄の法律で自分より弱い魔族が金銭を差し出してきたら見逃してあげるよう努力すること、というものがあります」

「そんなの聞いたことないわ。ってというか、地獄で法律って……」

何だかなあ、と呆れてしまうアシュレイ。

アシュタロスがいたならきつと苦笑したことだろう。

「ともあれ、必要なのは人件費くらいなので耐えられます。別にいざとなったら支払わなくてもいいです」

「それもそうね。じゃ、一応、戦争準備を進めておいて。まあ、どつかの星条旗の国みたいに戦時体制に移行してバカみたいな量の兵器を量産するわけじゃないから、楽なもんだと思うけども。あ、それとさっきの特使を呼び戻さないと……」

アシュレイの言葉に3人は頷く。

結構簡単な魔族の戦争準備であった。

そして数日後、アペプによりアシュレイが大公爵となったことが地獄中に伝えられた。

期待のルーキー、魔神アシュレイの参戦により魔族達は大いに士気を高めることになった。

さて、そんなわけで戦争に参加することになったアシュレイは地獄の政府が置かれている議事堂へと赴くことになった。

具体的な作戦などについて協議する為に。

その議事堂はエジプト風の神殿であった。

何気に自分と同格かそれよりも上の存在と会うのは初めてのことなので、アシュレイとしてはわくわくドキドキと興奮していたのだが……

「……なんというか、普通ね」

思わず、小声で彼女は呟いた。

巨大な円卓に座っている魔神やこの時代の魔王、そしてこの時代の魔界最高指導者アペプ。

アシュレイが想像していたのは見ただけで体が震えるような連中であつたのだが、ちょっとした威圧感を感じる程度で、普通の悪魔にしか見えなかった。

ふと視線を感じ、その方向へ視線を動かせばジャツカルの如き頭を持つ男が彼女を見ていた。

「というか、女が私だけってどういふことなの……」

そうボヤク彼女にアペプは咳払いをして、話を始めることにした。どうやら先ほどの咳きは彼には丸聞こえであったらしい。

彼は彼女のペースに呑み込まれたら魔王でもマズイ、と直感した。

「神族との戦争だが、まず宇宙空間にて各自最大戦力を展開。感づいた神族側も展開してくる筈なので、それを迎撃。以上」

「……いや、それが作戦？」

アシュレイの言葉に答えたのは先程のジャツカルの如き頭を持つた男 セトであった。

「作戦を立てようにも、向こうもこつちも戦力が膨大だ。個々の戦闘では戦術的に巧く動いて損害を最小限にはできるが、基本的にはイタチごっこだ」

「虚しくなりそうだわ。それ」

「神界にでも攻めこめればどうにかなるのだがな」

そう肩を竦める彼。

「……あ、今いいこと思いついた」

ピンときたアシュレイは居並ぶ彼らに尋ねた。

「今、地上に神っているの？」

「今なら地中海地方でゼウス達が好き勝手やっているな」

そう答えたアペプにアシュレイはうんうん、と数度頷く。

「私に任せてくれればゼウスの首をもってくるわ。まだ開戦はして

いないから、失敗したら1魔族の暴走つてことで処理して頂戴」

基本、神魔族の戦争に宣戦布告なんてものは存在しない。

どっちかが相手の戦力が集まっているところを見つけたら、戦闘をふっかけ、そのまま全面戦争に発展というものだ。

アシュレイの言葉にアペプが値踏みするかののような視線を向け、セトが興味深そうに見つめる。

他の魔王や魔神達も新米が何を言うのか、興味津々といった様子。

「ゼウスは好色。そこを突くわ……」

そう前置きし、アシュレイが告げた計略は魔界側としては酷く魅力的なものであった。

「良いのか？」

会議終了後、セトがアシュレイに尋ねた。

アシュレイの計略は満場一致で可決され、成功の暁には彼女は魔王に昇格することとなった。

また、その計略の実行タイミングは彼女に一任された。

だが、成功の確率は残念ながら非常に低い。

ゼウスは確かに好色だが、暗愚ではないからだ。

「良いのよ。ハイリスク・ハイリターンは好きだもの」

「だが、お前は穢される」

セトはそう告げ、アシュレイの翼へと手を伸ばす。
ひょいっと彼女は避ける。

アシュレイはジト目で問いかける。

「触りたいの？」

「……ああ」

しょうがないわねー、と一応、上の存在のご機嫌を取る為にアシュレイはセトにその翼を触らせる。

その感触に彼は思わず感嘆の溜息を吐いた。

「さつき初めて会ったばかりだが、お前は美しい」

「……何を言い出すのよ」

そう言われて悪い気はしないアシュレイ。

「本当だ。夜の闇のような翼、勇壮な角……」

セトはアシュレイの容姿をこれでもかというくらいに褒めた。
そこまで褒められればアシュレイとしても嬉しい限りで。

「あなたが女性型だったら、お持ち帰りしていたのに」

しよぼん、と頂垂れるアシュレイ。

一応、立場的には上位存在なのだが、彼女としてはもうそこらは
どうでもよくなっていた。

問題なのは見た目が男なのか女なのか、その一点だ。

さすがのセトもそういう意味で落ち込まれるとは考えもしなかつ

たので、どうしたものか、と考える。

そして、ある案が閃いた。

「ならば、私の血を飲むか？ お前は吸血鬼と聞いている」「頂きましょう」

セトはどこからともなくナイフと小瓶を取り出し、自らの指を傷つけ、その小瓶に血を垂らした。

「そういえば、やるタイミングは一任されたけども何か期限とかあるの？」

「特にはないな。まあ、1000年くらいの間によればいいだろう。開戦はお前の計略の後であるからな」

小瓶に血が溜まるまでの間、アシュレイとセトは暇であった。

「私、すっかり忘れていたことがあったの。血を吸えば私は強くなれるということ……」

ちょうどいいことに彼女のターゲットはゼウスだ。

ついでに吸ってしまったても問題はないだろう。

「ゼウスか。基本、神と悪魔は裏表。お前が神の血を吸った瞬間にお前の内部で神聖な血は邪悪に染まり、お前に力を与えることだろう」

「神の肉とかはどうかしら？」

「それも同じことだ。しかし、それはお前にしかできないことでもある」

そんな風に雑談しているうちに小瓶一杯に血が溜まった。
アシュレイはそれをセトから受け取り、一気に飲み干した。

瞬間、彼女から膨大な魔力が吹き荒れた。

内からみなぎる力にアシュレイはセトに不敵に微笑んだ。

セトは思わず唾を飲み込んだ。

たった小瓶一杯の血を飲んだだけで一気に彼女の魔力量が跳ね上がったことがわかったのだ。

彼は溜息混じりに呟く。

「お前はきつと魔王に、それも強力なものになれるだろう。将来的には宰相か、もしくは政府軍のトップか……」

やはり、とセトは続けた。

「お前は、美しい……」

戦争の足音（後書き）

セトはアスタルト^{II}アシュタロスが妻であるという説があったり。

希望的観測

月明かりが優しい夜、ソドムとゴモラの街に設けられた神殿、その中にある寝室。

窓から差し込む月光が部屋の中を明るく照らし、大きなベッドの上ではアシュレイと彼女に抱きついているエナベラがいた。

2人は既にベッドの上で一戦交えた後であった。

「戦争になるわ」

唐突にアシュレイが告げた。

その言葉にエナベラはその灰色の瞳でアシュレイの顔をまじまじと見つめる。

「神々と私達、魔族との。地上……いえ、この星にはお互いに手を出さないだろうけども、それでも万が一ということもありえるわ」

「そう、ですか……」

エナベラはそう返し、アシュレイの小柄な体をより強く抱きしめる。

数分程の沈黙が続き、やがてエナベラが呟くように告げた。

「私は怖いです……アシュ様が消えてしまいそうで……」

「大丈夫よ。私は絶対に死なない。一時的に冬眠みたいなことにはなるけども、いずれ復活する」

アシュレイは優しくエナベラの灰色の髪を撫でる。

「ソドムとゴモラの皆には少しずつ避難してもらいたいわ。絶対に

安全とは言い切れないから」

「でも、アシユ様。皆はきつとアシユ様の為に戦いたい、と思います」

「残念だけど、人間にどうこうできる存在ではないわ」

アシユレイは告げた。

「それなら私の為に祈って欲しい。神々が信仰によって力を得ることができるよう、悪魔もまた信仰によって力を得ることができ

まあ、悪魔の場合、人間がどれだけその悪魔に恐怖しているか、でも力を得られるんだけど、とアシユレイは付け加えた。

「大丈夫よ。そう簡単には負けない。私は強いから……」

アシユレイはエナベラを安心させる為にその翼で彼女の体を包みこむ。

翼の感触に思わずエナベラは頬を緩ませる。

「エナベラ、もし私達が負けたら、きつとあなた達への迫害が始まるわ。悪魔を信仰するとか何とかでね」

だから、とアシユレイは続ける。

「あなたが皆をできるだけだけ護ってあげて。負けたら、私は一時的に冬眠となるから、あなた達を護れない」

「アシユ様……私には何故か負けることを前提に話しているように聞こえるのですが……？」

アシユレイは力なく微笑む。

「善と悪は表裏一体の存在。けれども、悪は最終的に善に敗れる。それが、世界のルールなのよ」

戦争への協力を表明して以降、アシュレイにはそんな予感があった。

きっと勝てないだろう、と。

「でも、ただ負けたりはしない。派手に華麗に主神クラスと刺し違えてやる」

ヤツさん ヤーウエは無理でも、ホルス辺りならいけるだろう、とアシュレイは思う。

勿論、実際に会ったことなどないので単なる希望的観測だ。

「アシュ様は本当に悪魔なのですか？」

唐突にエナベラが問いかけた。

アシュレイはゆっくりと頷く。

「では何故、私達を助けてくださるのですか？」

「腐れ縁というか、乗りかかった船というか……」

アシュレイの言葉にきょとんとしているエナベラ。

まだこういう言葉はなかったか、と悟り、アシュレイは言い換える。

「ともあれ、あなた達のご先祖達に私は凄いだぞ、というところを見せようとしたら、既に別の魔族が悪いことをしていて、その魔族を追っ払ったらこうなったのよ」

偶然よ、と続けたアシュレイ。
彼女としてもここまで人間との関わりが大事になるとは思っても
みなかった。

「それに私は色々悪いことを部下に命じて……」

やってたっけ、と思わずアシュレイは首を傾げた。

彼女がやったことは加速空間に籠って淫魔や従者やペットとイチ
ヤイチヤ。

地獄で魔族を武力で配下に収めたりしているが、人間に対しては
リリスの件以外は何にもやってはいない。

むしろ、人間達には良い事を行っている。

「……あれ、私って別に悪くなくね？」

思わずそんな言葉が出た。

「最近では他の街の住民達もアシュ様を信仰しております。おかげ
で豊作が続いているとのことです」

「そーなんだ……」

エナベラのトドメとも言える言葉にアシュレイは沈黙せざるを得
ない。

今は悪魔であったとしても、かつては神であったという存在は多
い。

エジプト神話のセトがその良い例だろう。

そして、アシュレイも将来そうなるだろう。

未来において、アシュタロスは多くの人間から悪魔として嫌われ
ているのだから。

「ともあれ」

アシュレイが話題転換を図るべく、切り出した。

「エナベラ、もし酷い目に遭いそうになったら、私を貶しなさい。私からも皆にそう伝えておくけど……皆には酷い目に遭って欲しくない」

エナベラは数瞬の間を置いて、微かに頷いた。

いい子ね、とアシュレイは彼女の頭を優しく撫でる。

「あなたには多くの魔法を教えた。けども、その魔法はあくまで怪我人や病人を治すもの。もし、脅威に遭いそうであつたら逃げなさい。生きていれば巻き返すことができる」

もしかしたら、とアシュレイは更に続ける。

「あなたの子孫も酷い目に遭うかもしれない。だけど、諦めないで欲しい。絶望の淵でも諦めないで」

自分の言葉はエナベラにとって呪縛となるだろうことはアシュレイには容易に想像がつく。

しかし、これは彼女なりの優しさ。

精神的に壊れてしまわないようにする為の、残酷な優しさ。

「やて……」

アシュレイは暗い空気を飛ばすように、エナベラにっこりと笑

ってみせる。

「夜はまだ長い。一時の快樂であっても、沈鬱な気持ちを吹き飛ばすには十分」

彼女はそう告げ、エナベラを押し倒す。

エナベラはその灰色の瞳で彼女を見つめ、微笑んだのであった。

「ふむう……」

ソドムとゴモラの民に警告し、戻ってきたアシュレイは端正な顔を歪ませて悩んでいた。

その原因は2冊の本。

膨大な知識を蓄え、何だかんだで頭も切れる彼女を悩ますことは並大抵ではない。

その本の名前は『武術入門』と『武術全書』だ。

「こう、でいいのかしら……?」

本を目の前に浮かせつつ、本に書かれている通りに体を動かしてみせる彼女。

アシュレイが何でこんなことを今更しているのかというと、やはり戦争になるから少しでも力をつけておこう、という理由に端を発

する。

アシユタロスは基本的に頭脳派であり、彼が教えたのは魔法科学や数学など武術以外のことだ。

基本的に神魔族において、武術を学んでいる者は極めて少ない。なぜならば全力での戦闘ではアウゴエイデスによる怪獣大決戦となり、近接して殴り合うなんていう状況には滅多にならない。

魔神や魔王、主神や上級天使のアウゴエイデスともなれば全高・全長共に数百mにも達する。

そして、その状態では殴るよりも惑星を消し飛ばすレベルの破壊光線の乱射が基本戦術だ。

そんな理由で必要無し、とされた武術を敢えてアシユレイが今更学んでいる理由は彼女の計略にあった。

彼女はゼウスに1人で近づく必要があるので、学んでおいて損はない。

ただ問題は武術の先生がいないことであつた。

「まあいつか。どうにかなるでしょ」

先生がいないことにはそのやり方で正しいのかどうか、判断がつかない。

将来的に誰かに教われればいい、と彼女は結論づけた。

「それよりも、もう少し私の強さを知らしめても問題はないわね」

「アシユ様、何が問題ないの？」

「あんっ」

背後からアシユレイを抱きしめたのはリリス。

勿論、ついでにアシユレイの胸も揉む。

「ああ、アシユ様の胸……」

むにむに、と少女形態なのでそこまで大きくはない胸をリリスは揉みしだく。

「お母様、ずるいわ」

どこからともなく現れたりリムは不満げな顔でリリスを見つめている。

「と、とにかく！ 私が自ら出て配下増やすの！」

アシユレイはそう宣言した。

胸を揉まれながら言ったところで、迫力は欠片もなかった。

しかし、アシユレイは知らない。

彼女の名が予想以上に広まっており、今ではシルヴィアやベアトリクスが出向いただけで下位の魔族はアシユレイの配下となることを承諾することを。

すなわち、彼女が望む戦闘なんぞ起きよう筈もなかった。

ヘルマンは死にかけていた。
体の至るところには切り傷が刻まれ、左腕は既にな
腕や傷は復元されつつあるが、相手はその時間すらも与えてはく
れない。

「これは……訓練というよりも……殺し合いではないかね？」

息も絶え絶えに目の前の上官に問いかける。

彼の目の前には黒い鎧を纏い、両手剣を構えるベアトリクス
の姿。ベアトリクスによるシゴキは開戦が決まってから、激しくなる一
方であった。

その訓練は一応、模擬戦だ。

ただし、手足がちぎれたり首を飛ばされたりすることがよくある
レベルの。

ヘルマンはちらり、と周囲に視線を向ける。

今日の模擬戦内容はヘルマンと同じくらいのレベルの中級魔族達
200体とベアトリクスただ1人。

数の上では圧倒的だが、開始10分でもうヘルマンしか残ってい
なかつた。

より正確にはヘルマンは敢えて最後に残された。

「何を言うか。このくらいでは天使を倒すことはできんぞ！」

すっかりスイッチが入っているらしいベアトリクスは聞く耳持た
ない。

「限度というものが……あるんではないかねっ！」

ヘルマンは残った右手でパンチを繰り出した。
その突き出された拳から圧縮された魔力の弾丸がベアトリクス目
かけて猛速で飛んでいく。

ベアトリクスはその飛んできた弾丸をそのまま受けた。
濛々たる煙が彼女を包みこむ。

しかし、その煙は彼女から巻き起こる風によって吹き飛ばされる。

「というか、もう少し手加減してもいいのではないかね？」

「それでは訓練にならないだろう」

ヘルマンの一撃はベアトリクスの鎧に掠り傷一つつけることが
できない。

こちらの攻撃は一切効かず、敵の攻撃は一撃でこちらを叩き潰せ
る、そういう絶望的な戦いであった。

「やれやれだっ！」

ヘルマンは連続でパンチを繰り出した。

無数の魔力の弾丸がベアトリクス目がけて飛んでいく。

彼が『悪魔パンチ』と名付けたこの技が効かないことは百も承知。
乱れ撃つことで傷の復元の時間を稼ぐことが目的だ。

「この、程度かっ！」

その声と共に弾幕を突き破ってベアトリクスがヘルマンの目の前
に飛んできた。

しまった、と彼が思ったときにはもう遅かった。

彼の視界は宙を舞った。

「……とんだ上司を持ってしまったな」

首だけになったヘルマンはやれやれ、と溜息を吐いた。

横から同じく首だけになっている同僚が「お疲れ様」と声を掛けてきた。

なんだかんだでヘルマンはそれなりにうまくやっているようであった。

全ての戦争を終わらせる戦争

「あれが悪魔が統治している街か……」

遙か天空から、その人物は忌々しげに呟いた。

彼の持つ18対36枚の神々しい翼は太陽の光を受け、より輝いていた。

「メタトロン様」

その声に背後を振り返れば金色の髪を長く伸ばし、翠の瞳と褐色肌が特徴的な3対6枚の翼を持った女性型の天使が現れた。

「ミカエルか。主は……決断なされたのか？」

「つい先刻、なされました。悪魔の統治する街を討滅せよ、と」

ミカエルの言葉にメタトロンは微かに頷いた。

「ならば手早く済ませよう。悪魔を信仰する者など存在していること自体が不愉快だ」

メタトロンの言葉にミカエルは腰に吊るしてある自らの神剣を抜いた。

その刀身は白い炎に包まれている。

「結界を抜く為、大きめの出力で放つてもよろしいですか？」
「構わん」

上司からの許可にミカエルはゆっくりとその神剣を振り上げ、一

気に振り下ろした。

神剣から出た、巨大な白い火球が眼下にある街へと落ちていく。やがてそれは五重の結界を突き破り、爆ぜた。

火球はその膨大な熱量を解放し、眼下にあるものを一瞬で焼き尽くしていく。

火球の急速な膨張により、周囲の空気が圧縮され、衝撃波が発生した。

同心円状に広がっていくそれは、触れたものを一瞬で破壊していく死のリング。

もし、21世紀の人間が見たならばきっとこう言うだろう。核兵器のようだ、と。

この日、ソドムとゴモラは神の使いにより、この世から消滅した。

時間は少々遡る。

エナベラは忙しかった。

彼女は今、ソドムとゴモラを離れ、別の街にある祈祷所を訪れて

いた。

魔法でもって治癒ができる彼女は腕の良い祈祷師としてそれなりに有名だ。

「エナベラ様、少し休みましょうか」

この街の祈祷師の提案に彼女は頷き、伸びをした。体がほぐれる心地良い感触に思わず頬が緩む。

お昼ごはんは何を食べようか、と彼女が思ったそのときであった。

一瞬にして視界が白く染まり、地面が揺れた。

何事か、と思えば色は元に戻り、揺れは収まった。その数秒後に耳を劈くような轟音。

さながら万の雷が一斉に落ちたかのような現象であった。

彼女が祈祷所から転がるように外に出てみれば道には多くの人々がある方角を見ていた。

巨大なキノコのような雲が立ち上っている。

彼女は目の前の現実を否定したい。そのキノコ雲のある方角は彼女の街だから。

だが、誰かの残酷な一言によりそれは事実と認定される。

「ソドムとゴモラの方角だ……あれは天の火か……」

エナベラはその場に崩れ落ちた。

「エナベラ様！ お気を確かに！」

祈祷師が慌て彼女を抱き起こした。
それを見た誰かが呟いた。

「前、やってきたヘブライ人がイシユタル様は悪魔だと言っていたが……イシユタル様が神ならばソドムとゴモラが滅ぼされる筈はない……どうということなんだ？」

「疑念が、生まれた。」

ソドムとゴモラ消滅の報はただちに魔界に伝わり、緊急会議が議事堂にて開かれることとなった。

アシユレイもまた当然、招集された。

「……………どうということかしら？」

アシユレイは苛立だしげに開口一番、そう尋ねた。
彼女の前には魔界最高指導者アペプをはじめとした魔界の実力者達。

「どづいつことだつて聞いているのよ!」

だん、と円卓を叩いた。

頑丈であるはずの円卓がそこから真つ二つに割れた。

「我々も予想だにできなかったことだ」

アペプが告げた。

「連中は自分達を信仰している人間も潰されることを考えていないのか……」

アペプはそう告げた。

そう言うしかなかった。

彼をはじめ、ここにいる上位悪魔達は時間をある程度操ることができるが、さすがに起こったことを無かったことにはできない。

「負けるだろうつてきつと誰もが思っていると思う。私もそう思っていた」

アシュレイは怒気を漂わせながら告げる。

「だが、もうそんなことは関係ない。神族を全員、血も凍るようなやり方で殺さねば私の気が済まない!」

「だがそれでは神魔族が共に滅ぶ」

「共倒れ大いに結構! 連中から仕掛けてきたのだから、こっちが引いてやる義理はない!」

アペプに食って掛かるアシュレイ。

あまりの怒気と零れ出る魔力に魔王達も口を閉ざしている。

彼らとしてもどう言っていていいか、言葉が見つからない状態だ。

「アシュレイ」

セトが名を呼ぶ。

アシュレイは彼を睨む。

文句があるならかかってこいや、とその紅い瞳が言っていた。

「落ち着けと言っても無理だろうから、こつ言っておく。お前の力で神々を倒せるのか？」

そう言われると返す言葉がないアシュレイだ。

彼女は確かに期待のルーキーだが、それでも魔神に過ぎない。

今、力を持っているのは主にエジプト神話、ギリシャ神話、仏教系、そして北欧神話の神々だ。

どいつもこいつもマトモに戦っては勝てそうにない、アシュレイ以上に強大な力の持ち主達である。

セトの言葉に続くように身の丈数mはありそうな、大柄の男が口を開いた。

「お前の強さは知っている。お前は若く、才能豊かだ。だが、お前は同時に聡明でもある。一時の感情に支配されて大局を見失うことの愚かさは分かる筈だ」

男の言葉にアシュレイは顔を俯かせる。

「スルトの言うとおりだ。お前は今回のことで痛みを覚えた。それがお前をより強靱にする。お前の民はお前の為に死んだのだ。お前

の知る、お前の民が幸せであったのなら、それで良いではないか」

最後にセトがそう締めくくった。

「……わかった」

アシュレイは小さく返事をした。

そんな彼女を見、スルトは椅子から立ち上がり、アシュレイの傍まで行くとその頭を優しく撫でる。

アシュレイはされるがままで。

まるで父親にでも撫でられているかのような、心地良さがあつた。セトがその行為に殺気混じりの視線をスルトに送るが、送られた側は素知らぬ振りをして、口を開いた。

「しかし、今回の一件は悪魔とされている我々にとっても非道の行いにしか見えん。ヤツさんの真意はどこにあるのだ？ アペプ、何か聞いてないのか？」

「私が知っていたらとつくに話している。神界とのチャンネルは既に閉じられているし、特使などは当然来てない。何ともならんよ」

セトはスルトから視線を離し、アペプを見据えて告げた。

「やられたからにはやり返させてもらう。神族もそれは当然覚悟している筈だ」

「人間達をこの世から消すのか？」

アペプの問いにセトは頷いた。

それに反応したのはアシュレイであった。

既に彼女からは怒気は感じられない。

撫でられながら、彼女は言った。

「人間達は関係ないわ。彼らは自らの信じたいものを信じているだけであって、その多くは無力よ」

意外な言葉に居並ぶ面々は目を丸くする。

先ほどの彼女を見れば、いの一番に賛成に回ってもおかしくはないのに。

「お前がそう言うのは意外だな……だが、これは戦争を有利に進める為にも必要なことだ。もしかしたら、勝てるかもしれないからな」

セトの言葉にアシュレイはなるほど、と頷いた。

そして、彼女は口元を歪めて晒った。

セトはその笑みにぞくり、と背筋に寒気が走った。

「ならば、こう言い換えるわ。我々よりももっと傲慢な神々とは違って、我々は紳士・淑女だから、無関係な人間達を消すような真似はできるだけしない」

少々の間を置き、誰もが笑った。

それは嘲笑などではない。

「確かに、確かにそうだ！ ああ、我々は紳士だ！ ならば、そんな汚い報復は我々の格を落とすことになる！」

セトは笑いを堪えながら、そう答えた。

アシュレイは不敵な笑みを浮かべながら、更に言葉を紡いだ。

「どうせなら宣戦布告文でも書きましょうか。ああ、私が書いてあ

げるわ」

もはや勝ちも負けも彼らにとってはどうでもいいような雰囲気となっていた。

どれだけこの祭りを楽しむか、ただそれだけが彼らには重要なものとなりつつあった。

そして、数日後、魔族の襲撃を警戒し、神を信仰する人間達の街にいた天使の下に魔界からの宣戦布告文書が届けられた。

その文書は即座に神界へと届けられ、多くの神々の前で封を解かれることとなった。

それは皮肉たつぷりの素敵な宣戦布告文であり、次のように書かれていた。

『悪逆非道なる騙し討ちにより、無力な人間を死傷たらしめたこと誠に許し難し。本件に対し、魔界は天下安寧の為、一致団結し、傲慢なる神々を征伐せしめん』

神々の憂鬱

「本当によかったんか……？」

彼は独り、自室で呟いた。

「本当にやってよかったんか……？」

自問自答するも、答えは出ない。

全知全能に限りなく近い存在である彼をもつてしても、その解答を得るのは不可能に近いことであった。

そのとき、部屋の外に気配を感じ、彼は扉へと視線を向ける。

数秒後、ノックがされた。

彼が許可を出せば2人の青年が部屋へと入ってきた。

最初に入ってきた青年の背には6対12枚の輝ける翼が。

彼の名はルシフェル。

明けの明星と呼ばれ、次代の熾天使の長としてメタトロンから指名を受けている強き熾天使であった。

そして、彼の後ろからはメタトロンが現れた。

メタトロンとルシフェルは片膝をつき、頭を垂れた。

そして、メタトロンが口を開いた。

「主よ、此度の一件は我々の不手際にあります。我々が他宗教の武神を抑えきれなかったばかりにこのような結果に……如何なる処罰もお受けする所存です」

メタトロンは今代の熾天使の長。

ミカエルの前で彼は不愉快だ、と言ったものの、それはあくまで熾天使の長として主の決定に不服をもってはならない、ということから出た言葉と態度。

彼としても、無力な人間を殺傷するのは忍びない。

ならばせめて苦痛少なく、と彼が配慮した結果、討滅の役目をミカエルに任せた。

彼女の力ならば苦痛を感じることもなく、一瞬で 自分達の身に何が起こったかすら感じることもなく 死ぬことができるからだ。

「構わへん。責任は全てワシにある。もつと過激な連中と会合を重ねておくべきやった。そうであれば地球に手を出すことなく、人間達に迷惑も掛けずに済んだんやからな」

すまん、と彼が頭を下げた。

これにはメタトロンとルシフェルが慌てた。

頭を下げてはならない人が頭を下げている……これは公に知れたら大問題であった。

2人が頭を上げるように数分間、懇願し続け、ようやく彼は頭を上げた。

「彼らは武神やった。単なる脳筋な神族とはちやう。戦争のプロや。如何にして戦争に勝利するか、ワシよりも知つとる存在や。ただ、その後のことを考えている連中は少数やけどな……」

主の言葉に対し、メタトロンは告げる。

「主よ、今回の一件で一部の人間達に豊穡の女神として崇められていたアシュレイが完全に悪魔として堕ちました。主が助言を与えた人間達はどうも余程追い詰められていたようで、助けてくれたあな様を無条件に崇拜し、それ以外の存在を悪魔と断じているようです」

「人間の気持ち程、分かりにくいものはない……つちゅーことか」

彼はエジプト地方にて奴隷の階級にあったヘブライ人の中から一人の若者に助言を与え、そこから脱出できるように手助けをした。彼としては悲惨な目に遭っている人間達を助けよう、という気持ちからのものであったのだが……今回の一件と相まって悪い方向に転がりそうであった。

「主よ、我々は戦争を終わらせる方法を考えねばなりません」

ルシフェルが告げた。

彼の言葉に主は頷くが、その口から出た言葉は極めて困難であることを示すものであった。

「こっちは武神達の多くがやる気満々でそれに同調する神族は多い。何分、真面目過ぎるヤツが多いから……対する魔族も今回の一件は笑って済ませられるレベルではない……」

特に人間達の間で神としての信仰を失い、完全に悪魔とされてしまったアシュレイに至っては烈火の如く怒り狂っているだろうことは想像に難くない。

今回のソドムとゴモラ消滅の引き金となった根本的な原因は過激な武神達の突き上げだ。

彼が言ったように、神族には真面目な連中が多い。

そんな彼らを悪魔滅すべし、という風潮にもっていくのはとても簡単なことであつた。

無論、メタトロンをはじめとした天使達は抑えに回り、穏健派で知られる竜族の長、竜神王やオーディン、太陽神ラー、仏陀なども抑えに回つたが、最高権力者の辛いところで配下の半数以上が戦争賛成に回つては容認せざるを得なかつたのだ。

そして、彼らが容認すれば彼としても容認せざるを得ず、ソドムとゴモラの討滅を天使に命じたのであつた。

解決策が見えない彼らの下にさらなる悪い知らせが舞い込んでくる。

それはミカエルからの念話であつた。

『緊急通信失礼します！ 武神達が主や他の神族以外を崇拜する人間達を勝手に攻撃し始めました！』

「なんやとお！」

彼 ヤツさんは立場を顧みず、思わず叫んでしまった。

「これで良いだろう」

彼は呟いた。

彼の眼下には街があったのだが、そこは既にクレーターと化している。

「信仰が増え、戦争を有利に進められる。同時に敵の力を削ぎ落とすこともできる。一石二鳥とはこのことか」

満足気に彼は頷いた。

三面六臂のその特徴的な姿。

その顔は神とは思えぬ程に端正ではない。

「阿修羅様、帝釈天様より連絡が」

配下の神族の1人がそう前置きし、告げる。

「我、20の街を討滅せり、とのことす」

「……ほう」

阿修羅は面白い、とばかりに顔に笑みを浮かべる。

今、彼が滅ぼした街の数は18だ。

神といえど、ライバル心というものは存在する。

特に阿修羅と因縁深い帝釈天ともなれば。

一応、帝釈天と彼は今でこそ和解しているのだが、それでも感情的なしこりはあった。

「負けるわけにはいかん。後始末は任せた」

彼は部下に告げ、その場を後にした。

阿修羅をはじめとした武神や軍神はあくまで戦争にどつやって勝利するか、それしか考えていなかった。

「戦争……ですか？」

思わず彼女は問い返した。

生まれてまだ数百年しか経っていない彼女にはピンとこなかった。そんな彼女に対して彼女の姉は微笑んだ。

「あなたが戦場に出ることはありません。竜族として恥じぬ力を持つよう今は鍛錬に励むのです」

「はい！」

元気良く返事をして、彼女は再び剣を振るい始めた。

戦争が始まったというのに、神界は特に変わった様子はない。それは神界にある竜族の生活圏でも同じこと。

「竜神王様はどういう判断をなさるのか……」

姉は呟くが、確信があった。

おそらく竜族も戦争に参加することになるだろう、と。

「上位悪魔ともなれば主神に匹敵する力を持つと聞くが……はてさて、どのくらい強いかのう」

そんな声に彼女が振り返ればそこには一匹の衣服を纏った猿がいた。

彼女は彼にやれやれ、と溜息を吐く。

「斉天大聖殿、一応言っておきますが、竜族の生活圏に入ることは許可がなければ駄目なのですが？」

「何、堅いこと言うな」

そう告げて彼は懐からキセルを取り出し、一服やり始めた。

かつて神界で大暴れした彼にとって、ルールなんぞ破るために存在するものでしかなかった。

「で、あのお嬢ちゃんがお主の妹か？ 大竜姫よ」

「はい、妹の小竜姫でございます」

「ほお……」

斉天大聖は目を細め、一心不乱に剣を振るっている小竜姫を見つめる。

「筋はいいのう。鍛えればそれなりにはなるじやろつて」

「鍛えますか？」

「それもいいかも知れん」

そう答え、彼は口から煙を吐き出して、輪っかを作る。

「まあ、しばらくはわしも魔族相手に大暴れするので忙しい。今回

の戦が終わった後じゃな」

「やはり、あなたも出るのですか」

「うむ。お釈迦様からいの一番組に話が回ってきてのう。できるだけ人間の被害を抑えてくれ、とな」

齊天大聖はキセルを懐にしまう。

「それに……一番割を食ったアシュレイというお嬢ちゃんをどうにか救わねばなるまいて」

齊天大聖は……というよりか、神族達もアシュレイのやっていたことは察知している。

穏健派の中では人間達を導いた、と彼女を評価する声すらあった。

「戦争は長く、辛いものとなるじやろう。それに、この戦争の目的なんぞ自己満足以外の何物でもない」

彼はそう告げ、その場を後にした。

結局のところ、善が一方的に勝利することもなく、悪が一方的に勝利することもない。

それだけは誰もが 阿修羅などの武神達ですらも 知っていた。

ハニートラップ(前書き)

男性読者の方にはご注意を。

ハニートラップ

神魔族の戦争　　ハルマゲドンが始まり早数百年。

ゼウスをはじめとしたギリシヤ系神族は戦争が始まって以後も地上に……すなわち、人間界に留まり続けた。

人間界に侵攻してくるであろう魔族から守護する為に。

しかし、待てど暮らせど魔族はやってこず、肝心の戦闘も太陽系から数光年程離れた場所で大規模な会戦が数回発生した程度。

両軍合わせて数百万の主神やら天使やら魔王やらが入り乱れた大乱戦となったのだが、地球には全く影響がなかった。

ともあれ、そんな遙か彼方でしか戦闘が起きていないので、ギリシヤ系神族は戦争勃発前と変わらぬ生活を送っていた。

神界からは今までの戦闘で魔神アシュレイが姿を見せていないことから、地上侵攻を目論んでいる可能性あり、という警告が彼らにはきていた。

そのような中、彼らの下にある噂が届いた。

とても美しい人間の娘がいる、と。

その噂をギリシヤ系神族でいの一番に聞きつけたゼウスは早速、その娘に使いを出し、自らの神殿に招いたのであった。

莊嚴なる玉座の間に彼は座っていた。

彼の妻であるヘーラーはしばらく前から旅行に出掛けており後数年は帰ってこない。

故に、鬼のいぬ間に、と彼は考えたのだ。

今か今かという思いで彼が待つこと2時間。

ついに待望の時が訪れた。

黒髪を長く伸ばし、透き通るかのような白い肌。

神々が丹精込めてつくったのではないか、と思えるような整った顔。

その美しさに彼　ゼウスは満足気に頷いた。

その娘はゼウスの前まで来、平伏した。

玉座の間には彼と彼女以外、誰もいない。

「汝、名を何と申す？」

一拍の間を置き、彼は尋ねた。

「イレーシユアです。ゼウス様」

顔を伏せたまま、彼女は答えた。

「顔を上げるが良い」

彼女がゆつくりと顔を上げた。

ゼウスはその美貌を見、再び満足気に頷いた。

「さて……汝は朝昼晩、余に祈りを捧げていると聞く」

彼はそこで言葉を切り、彼女の反応を待つ。

イレーシユアは頷き、言葉を紡ぐ。

その内容はゼウスをして、驚愕させるものであった。

「ゼウス様、あなた様にはヘーラー様がいらっしやることは承知しております。ですが、私はあなた様を愛してしまったのです」

そして、彼女は語り始める。

彼の力である気象の素晴らしさ、そして彼自身の偉大さを。

うっとりとした表情で語るイレーシユアにゼウスは気を良くしてしまう。

元々彼は彼女を手に入れるつもりであったが、これだけ慕われているのならさっさと美味しく頂いても何も問題はなかった。

「汝は余を愛していると申したな」

「はい、私の気持ちに偽りはありません」

ゼウスの目をまっすぐ見据えて、彼女は答えた。

「余についてくるがいい。天上の快樂を味合わせること約束しよう」

ヘーラーが戻ってくるまで楽しめそうだとそういう軽い気持ちであった。

そして、それが彼にとって最悪の事態を招くことになってしまった。

寝室へイレーシユアを案内したゼウスはまず彼女に口で奉仕するよう命じた。

彼女は戸惑いながらも了承し、その様子が彼には堪らない。

彼は両目を閉じ、感触を堪能しよう、と思ったその矢先であった。

「！」

彼は目を見開き、絶叫を上げた。

下を見ればその娘が彼のモノを噛みちぎり、そこから流れ出る血を啜っていた。

不意に彼女が顔を上げる。

彼女の雰囲気は一変し、その顔は邪悪に染まっていた。

そして、彼女の瞳は血のように紅く染まっている。

もはや隠す必要なし、と彼女が判断したのか、その背中からは烏の如き黒い翼、頭にはヤギの角が生えてきた。

「き、さま……！」

ゼウスはそう告げるだけで精一杯であった。

彼女は彼の股間から顔を離すや否や、今度はその首筋に噛みつき、そのまま両手で彼の首を持ち、無理矢理引きちぎった。

溢れ出る鮮血を浴び、彼女の姿は紅く染まっていく。

彼女は狂ったように笑い、その血を呑んでいく。

嚙下する度に自らがより強くなっていくのを、彼女は感じた。

「ゼウス様！」

悲鳴を聞き、おっとり刀で駆けつけてきた数人の兵士達が寝室の扉を蹴破り、中に入ってきた。

彼らは血を啜る娘とゼウスの死体を見、憤怒の形相でイレーシユアに斬りかかった。

しかし、それは無駄に終わった。

「んー、やはりゼウスよりは落ちるわね」

数秒後には首なしとなった兵士の死体があった。

そう感想を述べた彼女は兵士の首を放り投げ、ゼウスの死体に齧り付いた。

血を啜り、肉を咀嚼する音が部屋中に木霊する。

兵士達が突入してから5分と経たずにゼウスの死体を骨まで喰らった彼女はその翼を大きく広げた。

「さて、はじめるとするか」

彼女は巨大な魔法陣を自らの魔力でもって描き始めた。

その速度たるや凄まじく、あっという間にそれは完成する。

「退避退避っ」と

彼女はゼウスが死んだことで神殿を覆っていた結界が消え、使えるようになった転移魔法でもって、その場を後にした。

その数秒後、ゼウスの神殿は巨大な火球に呑み込まれ、この世から消え去った。

魔界に戻ったイレーシユアはただちに議事堂に出頭し、作戦成功の旨を告げた。

もはや言うまでもないが、彼女はアシュレイであった。

「よくやった！」

アペプが喝采を叫んだ。

「まったくもって大したヤツだ！」

スルトがそう言って彼女の背中を叩き、セトは敵ながらも同じ男としてゼウスの冥福を祈った。

ハニートラップはげに恐ろしきものであった。

10分程、大興奮状態に包まれたが、さすがにいつまでも騒いでいるというようなことはせず、誰もが皆、彼女が具体的にどうやったかを聞いたがった。

アシュレイとしても話したいのでわざわざアペプに葡萄酒を持ってこさせるということをやらせ、セトのジャツカルの耳を触らせてもらい、そしてスルトに肩車してもらった後、話し始めた。

人間に化けるととき、魔族であることがバレないようにする為に薬や幻術などでの変化ではなく、細胞レベルで自らの体を作り変えて変化したこと。

ヘラクレスなどの英雄に出会わないように、ゼウスが1人となるようタイミングを図ったこと。

祈りたくもないゼウスに祈ったことなどなど。

彼女の苦勞話は3時間にも及んだ。

「で……正式に魔王としたいのだが、如何せん、今序列を弄ると指揮系統的に面倒となるので、戦争終了まで待つてはくれないか？」

「いいわよ。でも、待つてあげるからお室とか頂戴」

「そのくらいならいくらでも」

アシユレイの要望にあっさりとおペプは頷いた。

彼女の今回の功績を考えれば安いものだ。

「それじゃ疲れたから帰るわ」

じゃーね、と彼女は手をひらひらさせて自分の領地……というよりか、アシユタロスが置いて行った加速空間にある屋敷へと帰還したのであった。

そして、彼女を出迎えた従者達に困惑した。

「……アシュ様、我々がどれだけ心配したか……」

両目一杯に涙を溜めて、アシュレイを見つめるテレジア。

「我々がもつと強ければ……！」

悔しがっているベアトリクス。

「アシュ様にゼウス如きの不潔なものを……」

嘆くシルヴィア。

そんな彼女達とは別にリリスとリリムはアシュレイの前に跪いていた。

わりとフランクであったリリスすらも、礼儀正しく、臣下の礼をとっている。

リリスは帰還したアシュレイを見た瞬間に本能で悟ったのだ。もはや今までのような態度をとってはいけない、と。

「テレジア、ベアトリクス、シルヴィア」

3人の名を呼ぶ。

アシュレイとしては彼女達が心配してくれるのは嬉しいが、力を

得るために仕方がない行為。

故に主の権限でもって黙らせることにした。

「私が強くなることに、そして私の決定に不服があるのなら申せ」

3人は一様に押し黙った。

同時に重い空気が流れるが、それを作った本人は今度は軽い口調で告げた。

「あとで心配していたことも忘れてしまう程に抱いてあげるから、もうちょっと待ってなさい」

そう告げて、ウインク一つ。

普通ならば朝令暮改甚だしい、と呆れられるところだが、テレジア達は使い魔である。

主にそう言われて喜ばない筈がない。

表面上はただ頷いただけであるが、その内心は歓喜に満ちていた。

「リリース、リリム。あなた達にも寂しい思いをさせたから、その体の疼き、私が抑えてあげるわ」

「喜ばしい限りです、アシュ様」

リリムが答え、続けてリリースが口を開いた。

「お言葉ですが、寂しい思いをしたのは我々だけでなく、他の淫魔達も同じこと。どうぞ、御慈悲を……」

思わずアシュレイは固まった。

彼女は目を何度かこすって、リリースをまじまじと見つめ、もう一度、目をこすって再びリリースを見つめた。

「リリース……何か、悪いものでも食べたの？」
「えっ」

これにはリリースが面食らった。
彼女はアシユレイが加速空間から出て行ったときと比べ、数十倍……下手をすれば数百倍も魔力が上がっており、より敬意を払わねばと思うが故に出た態度。

「リリースはいつも通りじゃなきゃヤダ」

ぷいっと頬を膨らませてそっぽを向くアシユレイにリリースは思わず笑ってしまった。

それと同時に彼女は嬉しく思う。

なぜなら敬語を使わなくていい、とアシユレイ本人から容認されたのだ。

自分はアシユレイにとって特別な存在である証ではないか、と。

「もうアシユ様は可愛いんだから……」

リリースは素早くアシユレイを抱きしめた。

抱きしめられた側はその胸の感触に頬を緩ませる。

リリースは呆れた表情でリリースを見つめ、溜息を吐いた。

そして、そんな2人を羨ましそうに見守るテレジア達。

何年経っても、彼女達は変わっていなかった。

「そういえばディアナとエシユタルは？」

アシユレイの問いにテレジアが答えた。

「2人ならニジと一緒に新しい魔法を開発するとか言って実験場に籠っております」

「あとで挨拶に行きましょうか……とりあえず、今からあなた達を堪能したい」

しばらくはのんびりしよう、とアシユレイは決意したのであった。

ハニートラップ(後書き)

今日はまだ更新はないだろう、と思っていたその予想をブチ壊す！

宇宙処理装置 コスモプロセッサ

「で、戦争中っていうとんでもないタイミングでやるの？」
「うむ」

「火星の極冠に古代文明の遺跡があつて、ボソンジャンプを巡って木連と地球が争つたりする未来はどうやらなさそうね」

「何の話かね？」
「こつちの話よ」

久しぶりにこつちの世界にやってきたアシュタロスやアシュレイを連れて、火星に降り立っていた。

2人は現在、火星極冠に立ち、その風景を眺めていた。

悪魔に、というよりか基本的に人外生物にとつては酸素は必要のないものであるが故に、宇宙服なんぞ着てはいない。

火星の極冠は分厚い二酸化炭素の氷で覆われており、その赤茶けた大地を拝むことはできない。

「二酸化炭素の氷ってどういう味なのかしら」

彼女はおもむろに手近にあつた氷を砕き、どこからともなく取り出したかき氷器にセットした。

そんな彼女に相変わらずマイペースだ、と思つ彼。

ゴリゴリゴリ、とかき氷器で彼女が氷を削る音が響く中、彼は問いかけた。

「シロップには何を？」

「メロン味……ではなく、定番のイチゴを」

「私にもくれ」

「わかった」

そしてできたかき氷。

アシュレイはかき氷器と同じく、どこからともなく取り出した皿にセットし、イチゴ味のシロップをかけ、アシュタロスに渡した。

受け取った彼はじーっとかき氷……というよりか、スプーンの位置を見、問いかける。

「……これは嫌がらせかね？」

かき氷のてっぺんにわざわざ彼女はスプーンを突き刺さし、彼に渡していたのだ。

イチゴの赤いシロップはまるで血のようで、かき氷の見た目は墓碑から血が溢れ出しているかのようであった。

「他意はないわ。ディアナの胸を徹底的に責めて、そろそろ頂こうかなって思ってたときに邪魔してきた誰かさんのことは全く関係ありません」

アシュレイはそう告げ、かき氷を頬張る。

しゃりしゃりと咀嚼する音とその甘さに思わず彼女の頬が緩む。

「……その件に関してはすまなかったな。ようやく試作ができたので、つい」

アシュタロスはそう謝り、彼女と同じようにかき氷を頬張った。

言うまでもないが、アシュレイのお楽しみを邪魔したのはアシュタロスであった。

彼女からすれば連絡一つなく、唐突にやってきて邪魔されたのだから、その怒りは当然だ。

「普通の氷と同じ味ね。まあ、美味しいからいいけども」

そう言いつつ、しゃりしゃりとアシュレイ。

「まあ、人間が食べたら問題あるのだが、我々には関係ないな」

そう答え、しゃりしゃりとアシュタロス。

「で、私の世界でもこっちの世界の君は話題になっていな」

「ほう」

「特に君にやられたぜっちゃん……ゼウスは平行世界の自分に嘆いていたぞ？」

「まあ、ゼウスだし……」

「まあな。彼の好色は有名だから仕方がない」

うんうん、と頷き合う2人。

「で、久しぶりに君と会ったのだが、強くなったな」

「でしょ？」

「ああ、もう私でも戦闘では敵わないだろう」

「ふふん。私ったら最強ね」

「魔王は確定、か。歴史は書き換わったな。完全に私の世界とのリンクは無くなった。もはやこの世界はオリジナルだ。私の世界では今、この世界で起きている戦争は無かったからな。それに私と君もやはり別のアシュタロスだ」

地位は魔王だが、実力では魔王に近い魔神であるアシュタロス。

対するアシュレイは地位こそ今は大公爵だが、実力は既に魔王クラス。

彼と彼女は同じアシユタロスであるが、もはやそこに関連性は存在しない。

「この世界をどうするかは君の自由だ。君は今、歴史の最先端に立っている。この世界は君が知っている史実とは別物になる可能性が高い」

「つまり、私が主導権を握っているの？」

その問いにアシユタロスは頷き、言葉を続けた。

「君は歴史を作ることができる資格を持っているのだよ。そして、この資格がある者は同時にある存在になれる可能性がある」

アシユレイはまさか、と呟いた。

彼は彼女が見つけたであろう答えに頷き、肯定した。

「最高指導者だ。神界魔界の最高指導者は歴史を紡ぐ者になる。アペプは……有名な名前ではアポピスか。彼もまた歴史を紡ぐ者だし、ヤツさんは言うまでもないだろう？」

「……さすがに私はそこまでなりたくないわ。仕事、めんどくさーだし」

「まあ、可能性があるというだけだ。そこまで気負うものでもない」
さて、とアシユタロスは話題を変える。

「それでは世界の創造といこう。どのような世界をご所望かね？」
「あら、私が決めていいの？」

「勿論だとも。何分、この世界では君の方が影響力が大きいからね。君が作った世界となれば、魔界も手出しはできない」

なるほど、と頷きアシユレイは思考を巡らせる。
数十秒後、彼女は明るい表情で、弾んだ声で告げる。

「じゃあ、ファンタジー溢れる世界にしましょう。現代社会のストレスが絶対にならない、冒険やスリルに満ち溢れ、そして、人がちよつとだけ他人に優しい世界を」

「了解した」

アシユタロスが何事かを呟くと、2人の目の前に巨大な物体が転移してきた。

巨大なパイプオルガンの上に人間の脳を巨大化したようなものが乗っている。

「宇宙処理装置……コスモプロセッサと横文字で言った方がカッコイイかしらね？」

「その辺はお任せする」

アシユタロスは懐から鍵を取り出し、それをパイプオルガンの鍵盤の横にある小さな穴に差し込んだ。

彼が鍵盤を叩き始める。

パイプオルガンは制御装置であり、本体は脳だ。

コスモプロセッサが低い音を発し、起動し、淡く発光する。

「さあ、刮目したまえ。これが世界を作るということだ！」

アシユタロスがそう告げ、彼がある鍵盤を叩いた瞬間、世界が変わった。

「……で？」

「……で、と言われても困るんだが」

確かに火星は……より正確には火星を基盤として新たな世界の創造には成功した。

だが、そこにあつたのは密林や海や山といったものだ。

無論、大気や重力も地球と同じに作った。

「肝心の人の……というよりか、生物の気配が全く感じられないのだけだ」

そう、あくまでできたのは入れ物だけで中身が存在しなかった。

「物事には順序があるのだよ。しばし待ちたまえ」

アシユタロスが再び鍵盤を叩き始めた。

その様子を見つつ、彼女は問いかけた。

「ねえ、確か計画段階ではドグラが制御する筈だったと思うんだけど？」

「ああ、彼には完成品の方の制御をしてもらうからな。完成品は魔王だろ？が主神だろ？が問答無用で因果律から消し去ることができるとは、こっちはそこまでの力はない」

「つまり、ドグラの演算能力は必要ないってことね」
「そういうことだ。ああ、できたぞ。今、微生物を創造した」
「……肉眼で見えるものを創造してよ」
「わかっているとも。まあ、焦るな。時間はたっぷりとある」
「あ、エルフ作るわよ。あと獣人とか」
「……そっちは君が作った方がいいと思う」

何が目的なのか、誰でもわかるのがアシュレイの凄いとこころなのかもしれない。

「データやコスモプロセスの設計図などはこの世界の創造が終わったら、君の屋敷に届けよう」

「そうして頂戴な。あ、それと私、強い部下が欲しいんだけど、何かいい子いない？」

アシュレイの軍団は拡張されてはいるものの、どうにも雑兵ばかりであった。

彼女のにはもっと有名な悪魔を部下に欲しい、と思っっていたりする。

「ならばベルフェゴールとかはどうかね？ 彼女は頭も切れるし、理論にも実務にも長けている」

「今どこに？」

「彼女も今回の戦争で人間達の間で信仰を失ったようだし、地獄のどこかにいるのではないかね？」

アシュレイはすぐさま念話でもってテレジアに伝える。

ベルフェゴールを探し出せ、と。

「彼女はアッシリアで崇拜された愛と知恵を司る発明の女神でバア

ル・ペオルという名前であった。私の世界ではヤツさんが権天使に迎え入れ、その後のサツちゃんと共に墮天してベルフェゴールとなった」

「この世界では私が迎え入れるのね。悪魔として」

「まあ、ベルフェゴールになるという結果は変わらないな。世界の力なのか……」

「世界は怖い。でも、そのシステムの枠内でうまく活用すれば……」
「先ほど、最高指導者になれる可能性がある、と言ったな？」

アシュタロスの唐突な言葉にアシュレイはあることが思い浮かんだ。

「世界システムを有効利用でき、かつ、歴史を紡ぐだけの力がある者が最高指導者になる為の資格なのね」

「そういうことだ。何だかんだ言いながら、君はなりそうで怖いな」

「でも、サツちゃんがそういうのは似合っているわ。知名度的に」

「我々は確かにメジャーではあるが、彼ほどではないから……」

「残念なことだね」

世界を創造しながら雑談をする2人は色々な意味でさすがであった。

宇宙処理装置

コスモプロセス

(後書き)

昨日三連続投稿したから今日はさすがに更新ないだろう、という予想をブチ壊す！

お前の城は天を突く！

火星での作業が一段落し、アシュレイとアシュタロスの2人は加速空間へと帰還していた。

なお、この加速空間だが、地上で展開しているは神族の標的になる、と戦争が始まって数日後には地獄に作成されている。

加速空間は一種の異界であることは既に述べた。

これを移動するのはとても簡単だ。

加速空間と外との出入口を閉じ、新たに出入口を形成すればいい。例を挙げるならば、地球上にあった加速空間の出入口を閉じ、地獄で新たに出入口を形成するだけだ。

出入口は何も扉を作るというものではなく、加速空間に入る為の特定の鍵……現代風に言うならばパスワードを転移魔法の術式に組み込むことで入ることができる。

先ほどの例に従えば地球上でパスワードを組み込んだ転移魔法を使用しても、加速空間には入れず、地獄で使用した場合のみ、加速空間内部に入ることができるわけだ。

ともあれ、この加速空間が問題となった。

アシュレイは現在大公爵であり、将来的には魔王となることが既に確定している。

そんな彼女は広大な領地を持ち、書類上は40の軍団を保持している。

その40の軍団の内実はお寒い限りだが。

それはさておき、問題となったのは彼女が通常空間に居城を持っていないことであった。

そして、彼女は加速空間に入る為のパスワードをアペプにしか教えていない。

防犯上の理由から考えれば非常に有効だが、アシュレイに喧嘩を売る存在は地獄では今のところ存在していない。

さらに戦争中ということを考えれば意思疎通に問題あり、とされてしまったのだ。

早い話が……金も領地もあるんだから通常空間に城つくれ、とそういうお達しがアペプから出されたのだ。

「私としては君が未だに通常空間に城を持っていないことに驚きだ」

アシュタロスは呆れた顔でアシュレイに告げた。

「いや、別に問題ないかなって思ってた。それじゃ、適当に造らせましょ」

「せっかくだから卒業祝いとして私が設計図を引こ」

アシュレイがジト目で彼を見つめる。

「卒業祝いって……最後の方は私、放置だったのだけでも」

「まあいいじゃないか。君はもう私と同じか上のレベルさ」

「卒業試験とか何もないじゃないの」

「ゼツちゃんを不意打ちで倒すことが卒業試験ということで問題ないな」

「もう終わってるじゃない」

「だから卒業でいいだろう」

ああ言えばこう言うアシユタロスにやれやれ、と溜息を吐くアシユレイ。

「ともあれ、私が勝手に設計図を引いておこう。何、数年で終わる」

「綺麗で華麗で豪華なのヨロシク」

「任せたまえ！」

ぐあんばるずお、とやたらと張り切るアシユタロス。

彼はコスモプロセッサの目処が立ったので、元気一杯なのだ。

「ところで、火星で何かあなたの世界と私の世界で関連が切れたと言っていたけども」

「うむ、言ったな」

「それだと魂の牢獄はどうなるのかしら？ 私はあなたの後継者じゃないなかったの？」

アシユレイの問いにアシユタロスは不思議そうな顔となる。

「もう答えは出ているだろう。コスモプロセッサだ」

「システムそのものを改変するのは無理な筈だわ」

「システム自体は弄らない。誤認させるのさ」

アシユレイはその言葉で彼が何をするのか把握した。

そんな彼女の様子を見たアシユタロスは答え合わせをするかのようについに言葉を紡ぐ。

「コスモプロセッサを使い、一時的に全次元においてアシユタロスはアシユレイのみ、と誤認させる。そうすれば私はあくまでアシユ

タロスに近いが別の魔族という存在となる」

「それですり替わるのね」

「そういうことだ。君は既に魂の牢獄に囚われているが、それはあくまでこの世界とこの世界から派生した平行世界でのこと。こちらの世界では違う」

「そこに全次元で、すなわち私の世界とあなたの世界、他の全ての世界で私がアシュタロスとなれば……」

「牢獄にいるアシュタロスは君以外全て偽物となり、解放されるだろう。まあ、私以外のアシュタロスは結局は牢獄に囚われ続けるだろうが」

「けれども、神魔のバランスはとれるのかしら？ 魂の牢獄は元を辿れば神魔のバランスを保つ為よ。私の世界では問題ないけども、あなたの世界では……」

アシュタロスは確かにアシュタロスではない別の魔族と認識される。

だが、それでも彼の力は大きく、その為に彼は神魔のバランスを保つ為に牢獄に囚われる可能性がある。

しかし、彼は問題ない、とばかりに告げた。

「そこもコスモプロセスの出番さ。君の世界と私の世界を無理矢理関連性のある平行世界とすることができ。そうすればこの世界でさえ神魔のバランスが取れば後は問題ない」

「力技ね」

「そうだとも。どんなにスマートに物事を進めても最後は力技だ」

「シンプルであるが故に強いのね」

「そういうことだ。ともあれ、これで何も問題はない筈だ」

アシュタロスの言葉にアシュレイは頷いた。

そして、彼女はこれ以上なくらいに真剣な表情となり、告げた。

「これで問題はないなら、私はしばらく遊ぶ。誰にも文句を言わせない」

そう宣言してアシュレイはその場から消えた。

「瞬間移動を使ってまでやりたいこと……まあ、彼女のことだからわかるがね……」

そう言いつつ、彼もパツとその場から消えた。

彼が瞬間移動を使ってまでやりたいこと、それはアシュレイの城を彼女の要望通りのものを設計する為。

ある意味、似た者同士であった。

そして加速空間内で数年が経過した

「あー……満足したわ」

アシュレイは寢室のベッドの上で満足げな顔でそう呟いた。彼女は今、ディアナのけしからん胸にもたれかかり、右にリリス、左にリリム、アシュレイに前から抱きつく形で大人形態のエシユタルという鉄壁の布陣を敷いている。

「ああ、前と後ろにムチムチ系美女、左右にスレンダー系美女ってさすが私……ああ、天国だわー」

腑抜けまくっているアシュレイである。

一応、彼女は大公爵でエライ人なのだが、傍目からはエロイ人しか見えない。

「アシュ様、お喜びいただけましたか？」

ディアナが耳元で囁く。

「満足だわーアシュレイが一番満足だわー」

そんな大満足なアシュレイの下にテレジアがやってきた。

彼女はその痴態を見、自分も混ぜて欲しそうな顔をしたが、それは一瞬のこと。

だが、アシュレイはそれを見逃さなかった。

「テレジア、おいで」

ディアナ達をどかし、テレジアを招き寄せるアシュレイ。

ススス、とテレジアは近寄り、ハツとした顔で要件を告げた。

「アシュ様、彼が城の設計図を完成させました」

「あ、そーなの。じゃ、ついでに造ってもらいましょうか。設計図通りに」

アシユレイはそう告げるとアシユタロスに向けて念話をし、設計図通りに実際に造ることと必要な人員資材その他を使う権限を彼に与えた。

そして、すぐにベアトリクスとシルヴィアに念話でもって連絡し、アシユタロスに協力するよう告げた。

「これでいいわ。存分に楽しみましょうか」

テレジアは期待に胸を高鳴らせ、ゆっくりと頷いた。

アシユレイがテレジアを堪能している頃、アシユタロスは自らが選び抜いた建設地に足を運んでいた。

そこに指揮所を作り、彼女の領地の全体図を縦横数 m はある巨大机に広げた。

「……………彼女の領地は私よりも広くないかね？」

思わず、彼は呟いた。

地獄には太陽こそないものの、一応水や植物は存在している。

地球のものと似たような植物もあれば地獄にしかない毒々しく、危険なものまで。

また地獄は鉱物資源が豊富だ。

金銀銅は無論のこと、タングステンやウラニウム、はては地球上には存在しない鉱物までが存在する。

そして、彼女の領地には多くの鉱山や鉱脈が確認されている。

将来的にサツちゃんが造ることになるパンデモニウムを造れそんな膨大な量であった。

「ともあれ、気を取り直して、だ」

アシユレイから全権委任を受けた彼としては中途半端なものを造るわけにはいかない。

すなわち、地獄で一番荘厳で豪華で巨大な城にしよう、というのが彼の目標であった。

「できるのですか？」

ベアトリクスが指揮所に入ってくるなりそう尋ねた。

アシユタロスが城建築の為に使う人員はアシユレイの軍団。その全てを統括する軍のトップがベアトリクスだ。

彼女の協力無くしてこの計画は成功しない。

その後から入ってきたシルヴィアは落ち込んだ様子だ。

「……私は何をすればいいんだろうか」

親衛隊というのはエシユタルとディアナとシルヴィアの3人だけであり、うち2人はここにはいない。

最近では親衛隊もベアトリクスの下に組み込み、一本化しようとしてアシュレイは考えていたりする。

元々、アシュレイが近衛云々と言い出したのが原因であるが、シルヴィアが彼女に対して文句を言えるわけがなかった。

「シルヴィアはサボっている輩を容赦なく殺ればいい」「わかった……」

ベアトリクスは以前はシルヴィアと色々と張り合っていたが、最近では彼女が可哀想でしようがない。

処分覚悟でシルヴィアの待遇を改善してもらおう、アシュレイに意見具申すべきか悩んでいた。

「よし、とりあえず土台から造るとしよう。100年で土台を造るぞ」

「城とそれに付随する様々な施設の建設で間違いないですか？」

意気込むアシュタロスの横からベアトリクスが問いかける。

「そうだとも。城下町も造らねばな！」

「城の部分だけでおよそ10万ヘクタールとはどういうことですか？」

「ヴェルサイユ宮殿をはじめ、各種宮殿や城を参考にした結果、これくらいは必要だと判明した」

天を突く城を造るぞ、と続けるアシュタロス。

「城下町含めて1000万ヘクタール……これは幾ら何でも広すぎ

なような……」

「パンデモニウムも同じくらいだから問題ない」

シルヴィアの言葉にそう答えるアシュタロス。

言うまでもないが、パンデモニウム、すなわち万魔殿は将来、サツちゃんが造る地獄の都市である。

「言うまでもないが……あくまで計画値だから、それよりも広くなる可能性がある」

ベアトリクスとシルヴィアはげんなりとした気分となった。

確かに2人共、主の権威が高まるのでできるだけ大きく、そして豪華なものには賛成だ。

だが、それでも余りにも広すぎるのは勘弁して欲しかった。

なぜならば……彼女達が建設に従事している間、アシュレイに呼ばれることがなくなってしまっただけからだ。

2人としてはジレンマであるが、やはりアシュレイとベッドの上でイチャイチャしたい。

そんな彼女達の気持ちを見透かしたかのように彼が告げた。

「これが終われば彼女からご褒美が出るかもしれないな。私からも2人は頑張ったと伝えよう」

人の扱い方が上手いアシュタロスであった。

落差が酷い話（前書き）

若干の鬱描写あり。

落差が酷い話

「……私、最近思うポヨ。きつとアシユ様を中心に世界は回っているポヨ」

「ふふふ、もつと褒めなさい！」

ニジの言葉に高笑いするアシユレイ。

彼女が受けたのは定期的な健康診断……などではなく、地獄における序列に影響する魔力診断。

この診断結果により、地獄政府から優遇されたり冷遇されたりする。

そういう重要なイベントであるので、当然政府から派遣された者がやるのが筋であるのだが、如何せん契約魔法という便利なものがある。

嘘偽りなく記録を記入する、という契約を交わすことで自分達で診断するのだ。

「通常状態で152億マイト……どう見ても魔王クラスポヨ。私の主は出世街道一直線ポヨ。私の給料とかも安全ポヨヨ」

マイト、というのは魔族の魔力や神々や天使などが持つ神霊力の高さを示す単位だ。

一番弱い、人間でも倒せる下っ端魔族がおよそ2000マイト程度であるから魔王クラスのデタラメさがよく分かる。

より分かりやすい比較対象を出すとするならば、中級魔族であるヘルマンが全力戦闘状態で2万弱。

比喻ではなく、ヘルマンをデコピン一発でこの世から消し飛ばすことができるアシユレイであった。

「もつと褒めて！ もつと讃えなさい！」

アシュレイの高笑いが響く中、彼女の付き添いとしてここに来ていたディアナは思わず呟いた。

「でも、アシュ様って一回も実戦に出たことないんじゃない……」

一瞬で天使が通り過ぎたかのような沈黙。

地獄なのに天使が通り過ぎるといふ矛盾はさておいて、アシュレイ以外は誰もが知りながら気づかない振りをしていたことを……禁句を言ってしまった。

ディアナの隣にいたエシユタルは彼女を小突くことで気づかせる。エシユタルもまた付き添いできていたのだが……災難であった。ハツとしたディアナは主へと恐る恐る視線を向けた。

「誰がゼウスを倒したのか、言ってみろ！」

にこやかな笑顔だが、目が全く笑っていないアシュレイ。

膨大な魔力がその小柄な体から立ち上り、ディアナを含め全員が体を震わせる。

「あ、アシュ様です！ ギリシャ系神族の士気はもはや最底辺となっております！」

ディアナはそう叫んだ。

ギリシャ系神族達は主神を倒されたことから怒り心頭、弔い合戦

だ……というノリではない。

アシュレイがゼウスと1対1でのガチバトルで勝利したのなら、そういう機運になっただろうが、如何せん、彼女のハニートラップでやられてしまったのだ。

これで土気が上がるわけがない。

アシュレイはディアナの答えに満足そうに頷く。

とはいえ、彼女としては自分の力を存分に振るいたかった。

早い話が、魔族としての破壊欲全開でブツ殺したいのである。

「……そろそろ私も名前を売りに行こうかしらね。とりあえず、熾天使辺りを全員ぶっ飛ばせばいいかしら……」

熾天使の誰かを墮天させてしまおうかしら、ととんでもないことを彼女は考える。

もし実現すれば彼女の名は神界・魔界に響き渡る。

今でも十分に響きわたっているが、アシュレイはより多くのものを得ることだろう。

魔界では輝かしい栄光を、神界には恐怖を。

そして、彼女は知っている。

天使はその格が高ければ高い程に墮天し易いということ。

「今、有名な熾天使は誰？」

アシュレイの問いにエシユタルが答える。

「メタトロン、ルシフェルでしょうか。あとはミカエル、ガブリエル……」

「墮天は難しそーね……」

うーん、どうしようか、とアシュレイは悩む。

「バアルゼブルというのはどうでしょう？ わりとマイナーな熾天使ですが」

エシュタルの言葉にアシュレイは手を叩く。

彼はサツちゃんと共に将来的に墮天する予定であるが、少しくらい早まっても別に問題はない。

結果さえ同じであるならば世界は容認する。

「どっちにしろ、戦場に出ないといけないわね。あ、ついでに女神とか女っぽい天使とか捕らえよう！ でもって調教しよう！」

「……ミカエルやガブリエルは女と聞きましたが」

少し不満そうな顔でエシュタルはそう告げる。

彼女としてはアシュレイの妾が増えるのはあまり喜ばしいことではない。

自分に構ってくれる時間が減ってしまうからだ。

しかし、アシュレイはそんな彼女の気持ちを見透かしたのか、念話でエシュタルに語りかけた。

『安心して。あなたが完全に足腰立たなくなった後に調教するから』

エシュタルは思わず顔を赤くし、俯かせる。

そんな彼女にアシュレイはうんうん、と頷く。

「ともあれ、ミカエルとガブリエルを最優先に……ああ、あとワルキューレとかもいる筈……ぐへへ……」

その光景を妄想し、気色悪く笑うアシユレイだが、彼女の暴走を止める者は……というよりか、止められる者はこの場にはいない。唯一、止められるのはアシユタロスくらいだが、その彼は城の建築を楽しくやっている。

「昂ぶってきたわー、早く天使を捕まえたいわー」

おもむろにニジに抱きつき、その膨らみはじめている胸を揉みし
だく。

ニジの喘ぐような声にアシユレイは辛抱堪らん、とこの場で美味
しく頂くことにした。

ディアナとエシユタルもまぜてやれば彼女の的には全く問題がない。

ともあれ、神魔族間には捕虜の取り決めなんぞ存在しない。

将来的にはそういった条約みたいなものができるかもしれないが、
今は文字通りの殲滅戦争だ。

故に、アシユレイが天使や女神を捕まえて、どんな風に扱おうと
も全くもって問題なかった。

その頃、地球の某所では

粗末な山小屋で一人の女性が小さな木彫りの人形に一心に祈りを捧げていた。

それだけならば特におかしなところはない。

ただ、その人形が愛らしい少女の姿で頭にヤギの角、背中に翼が無ければ。

「アシュ様……」

彼女の口からそんな名前が漏れ出た。

やがて彼女はゆっくりと閉じていた瞼を開いた。

灰色の髪、灰色の瞳。

数百年以上前、アシュレイが魔法を教えていたエナベラの面影がどこことなく残っている顔つき。

「私を、私の一族をお護りください」

そう告げ、彼女は自らの下腹部を撫でた。

もはや言うまでもないが、彼女はエナベラの子孫であった。

「ああ、アシュ様……」

彼女はうつとりとした顔で両目を閉じ、エナベラからずっと受け継がれている魔法の一つを使う。

アシュレイがエナベラに便利だから、と教えた魔法だ。

それは記憶再生魔法。

エナベラから彼女に至るまでの記憶を再生できるのだ。

彼女の脳内に展開されるアシュレイとの日々。

それはエナベラの視点であり、同時にそれは記憶を再生している彼女の視点ともなる。

彼女はアシュレイとの楽しい日々を擬似的に体験する。それは勿論、夜のことまで。

やがて場面は変わり、楽しい日々から辛く、苦しい日々へと変わる。

途中で再生をやめることもできるが、そうしないのは一種の儀式でもあるからだ。

エナベラは悪魔を信仰する者というレッテルを貼られ、避けられ、時には石を投げられ……終いにはトチ狂った輩に悪魔を浄化する為とレイプまでされてしまう。

だが、それでもエナベラは自らの手で命を絶たなかった。

アシュレイはこれらのことを予言していたからだ。

エナベラは信じていた。

アシュレイの言葉通りに耐えれば希望が見えてくる、と。

彼女は人里を離れ、山奥に隠れ住んだ。

そして、彼女は1人の子供を産む。

彼女が山奥に住み始めてから4年後のことだ。

そう、彼女はある日突然懐胎した。

彼女はそれをアシュレイの子である、と確信し愛情をもって育て上げた。

すると、その子供は母親であるエナベラと似ていた。

再び場面が変わる。

次はエナベラの娘の視点だ。

特に何事もない平穏な日々が続ぎ、彼女もまたエナベラと同じよ

うに突然懐胎し、子供を生んだ。
すっかり老けたエナベラが孫の誕生を喜んでいる姿が見える。

そして、再び場面が変わっていく。
同じように、同じように、ある日突然懐胎し、決まって娘を産んでいく。

やがて魔法が終わり、視界が元に戻る。

「アシュ様……」

一目でいいから、記憶でなく実際にお会いしたい、と彼女は心の内で呟く。

「私は、私達は諦めません」

彼女はそう口に出した。

エナベラから続く一連の現象は一種の呪いともいえる。
アシュレイは魔神であり、エナベラは人間であった。
そんな2人が交わって、人間であるエナベラが何も無い方がおかしいのだ。

傍目から見ればエナベラから続く、彼女の血筋は悲惨であった。
永遠にアシュレイに縛られ続けるのだから。

だが、彼女達はそうは思っていなかった。
彼女達は数百年以上前の、アシュレイがソドムとゴモラにしたこ

とを知っている。

彼女達にとつてアシュレイは忌むべき悪魔などではなく、祀るべき神であった。

ただ、当のアシュレイはソドムとゴモラに生き残りはいない、と断定していた。

これは一種の先入観によるもので、自分とアシュタロスの結界を抜いてくるような神族が生き残りを見過ごす筈がない、というものだ。

ある意味、自惚れといえるが、それでもエナベラからずっと祈り続けているのだから、いつ、その祈りが通じてもおおかしくはない。

「どうか、この生活がアシュ様にお会いできるまで続きますように……」

警沢は言わない。

ただ、ひっそりとそのときまで平穩に暮らしていたい。

それが彼女の切実な願い。

だが、それは儚い願いであった。

彼女はこの数年後、山狩りに遭い、6歳になったばかりの娘は逃す為に自身を囮とし、神を信仰する人間達に捕まり、凄惨極まる拷問の後に殺された。

ソドムとゴモラ跡地にて

「……うん、つまんない」

アシユレイはポツリと呟いた。

彼女が前線でブツ殺したい、ということのアペプに伝えたところ、彼は快く承諾し、早速、膠着状態に陥っている戦線に投入した。

何分、戦場は広大な宇宙。

戦線はどこまでも広がっていく。

下級魔族と下級神族がささやかな戦闘をし、両軍が互角となってしまう場所がいくつもあるわけで。

今回、アシユレイが投入された戦場はまさに、そのささやかな戦闘が行われている場所であった。

結果は言うまでもなく、開始5秒で敵軍は消滅。

彼らと戦っていた下級魔族達はただただアシユレイの力に畏怖するばかり。

そんな彼らの視線を無視し、アシユレイは次の戦場へと向かう。彼女に与えられた任務は548の埒があかない戦場を、思うように埒をあげることだ。

しかしながら、さすがのアシユレイといえども、あっちこっち飛び回って瞬殺するだけの仕事はつまらなかった。

「ソドムとゴモラの跡地に行ってみようかしら」

360個目の戦場を片付けて、彼女は呟いた。
息抜きがてら、花でも供えようという魂胆だ。
無論、少しサボってもいいよね、という気持ちが彼女にはあったりするが。

誰も止める者などいないので、問題なし、と判断した彼女は地球へと転移したのであった。

そして、彼女はソドムとゴモラがあった場所にやってきた。
彼女は上空からそこを見、思わず呟く。

「……ここまでど派手にやられたんじゃ、いつそ清々しいわね」
隕石でもぶつかったかのようなクレーターしかそこにはなかった。
その底にはどこからか流れ込んだ水が少し溜まっている。
彼女は上空から手を合わせ、黙祷した。

数分後、閉じていた目を開け、あちこち見回してみれば視界の端に違和感が。

よく見てみればクレーターの端っこの方に何かがある。

何事か、とアシユレイは思いその場へと転移し、衝撃を受けることとなった。

「私が教えた文字……生き残りがいるの？」

そこにあつたのはそれなりに大きな岩、その周囲には僅かな草花が存在している。

そして、その岩には文字が彫られていた。

風雨の影響から掠れていたが、それでも十分に読むことができ、そこにはこう書かれていた。

『イシユタル様は我々ソドムとゴモラの民の偉大なる女神である』

生真面目な神族が生き残りを見過ごす筈がない、と彼女は無論、アペプ達もまた思っていた。

だが、このような証拠を見せつけられては、その先入観は間違っていたと言わざるを得ない。

そうと決めたら行動がわりと早いアシユレイだ。

彼女はただちに念話でもってアペプをはじめとした多くの魔王や魔神にソドムとゴモラの生き残りがいることを告げ、ついで暇があったら搜索を手伝うよう要請した。

次に彼女はテレジアへと念話のチャンネルを切り替え、ベルフェゴールの搜索を一時中断してでも、全力でソドムとゴモラの生き残りを発見するよう命じる。

無論、数百年も時が経過していることから、いるとしたらその末裔となる。

搜索が難航するのは想像に容易いが、それでもアシュレイはやらなければならなかった。

自らを崇めてくれた民を彼女は決して見捨てない。

それは大昔、ソドムとゴモラの神殿で彼女が宣言したことだ。約束は守らなければならなかった。

念話が終了した後、彼女はゆっくりと背後を振り返った。そして、ある一点を見つめ、言葉を紡ぐ。

「そこにいるんでしょう?」

その言葉に空間が僅かに揺れ、そこからある青年がゆっくりと出てきた。

神々しい12枚の白い翼、周囲に溢れる神聖な気。

「ルシフェル……かしら?」

「如何にも。私はルシフェルだ。あなたに伝えることがあり、やってきた」

黒い髪と黒い瞳を持ち、美しい顔の彼にアシュレイは意外そうな顔となる。

彼女が知っているサツちゃんとは雰囲気全然違うからだ。

ともあれ、彼女は一番の疑問を口に出すことにした。

「なぜ、私に攻撃を仕掛けないの？」

「なぜ、地球上で魔族は攻撃をしないのか……それと同じことだ。我々は人間に配慮している」

「ならば、なぜ私の街を潰した？」

「そもそもこのきっかけがこちらの不手際だ。一部の過激な武神達が扇動し、開戦へもっていった」

「だが、人間達は関係ない筈だ」

「そうだ。だが、多くの武神達は戦争に勝つことしか考えていない。それが彼らの存在意義であるから、致し方ないが」

アシュレイはなるほど、と頷いた

信仰は神にとっても悪魔にとつても力の源の一つ。

ただ、悪魔は信仰を失いやすいことからもう一つ、特典がある。どれだけ恐怖されるかということだ。

多くの人間に恐怖されればされる程に悪魔の力は増すことになる。

「我々は此度の戦争をなるべく早く終わらせたいと思っている」

「だが、武神達はそう簡単には折れないでしょう？」

「そうだ。魔王や魔神達に過激派を潰してもらいたい」

「自分の尻くらい自分で拭けないのかしら？」

アシュレイの最もな言葉にルシフェルは黙りこむ。

彼に反論する術はない。

「ま、とりあえず理解したわ。私の街は私への補給となる信仰を断つと同時に自分達を信仰しなければこうなるぞ、という見せしめの為に潰された、とね」

あつはつは、と頭に手を当てて笑ったアシュレイは次の瞬間、ルシフェルの首を掴んでいた。

万力の如き力でギリギリと彼は首を絞めつけられ、苦しげにその端正な顔を歪ませる。

「あまり、ふざけたことをやるとお前達を皆殺しにしたいくなってしまう。世界の滅亡なんぞ知ったことか、と……な」

ルシフェルをゴミのように放り投げ、彼女は告げた。

彼の心に棘となる言葉を。

「お前はそれでいいのか？ 盲目的に従っているだけで、それでいいのか？ 自ら行動を起こした者を神は救うと誰かが言っていたぞ。たとえよろしくない行動をとったとしても、最終的にそれでうまく片付けば誰も過程は気にしないものだ」

アシュレイは彼に背を向けた。

「お前達の過激派を処理する件については了承した。アペプには私から伝えておこう」

彼女はそれだけ言い残し、その場を後にした。

「私は、どうすればいいのか……」

主は偉大。

これは間違っではない。

主は光。

これも間違っではない。

主は全知全能である……

「真に全知全能であるならば、今回の戦は起きなかった。主とてできないことがある」

真に全知全能であるならば、主が過激な武神達を抑えられぬ筈がないのだ。

「必要悪というのも世界には必要だ。世界は光と影により成り立つ。だが、我々は魔族に……いや、今回に限っては彼女だけに押し付けているように感じる。どうしたものか……」

悩むルシフェル。

彼は神々と悪魔、そして人間が共存共栄し、世界を保てば良いと常々考える。

これは彼だけではなく、多くの穏健派神族の共通意見だ。

今回の一件は魔族と神族の意思疎通に齟齬が生じたからではないか、と彼は思う。

魔族には魔族の事情があるが、それは神族である彼には分からない。

ならば、と彼は考えた。

「私が魔界の指導者となれば魔族の事情を知ることでもある。そして、事情を汲んだ上で戦争を起こせなくする為にデタントを神族側に提案すれば……」

デタント 緊張緩和 一番賛成するのはおそらくアシュレイであろう、とルシフェルは感じた。

彼女は気丈に振舞っていても、心のどこかではうんざりとしている筈だ。

ともあれ、彼が指導者となれば神族のトップはヤッさん。ヤッさんならば確実に彼の提案を受ける。

ある意味、出来レースだ。だが、悪いものではない。

無論、彼が魔界の指導者となるには墮天しなければならない。その苦痛たるや想像を絶するものがある。

だが、彼は思う。

アシュレイをはじめ、悪魔でありながらも神として信仰されていた者達が今回の戦争で完全に悪魔とされた苦痛を考えれば、墮天など生ぬるいものだ、と。

「だが、私1人が魔界に行ったところで、既存の勢力に潰されてしまうのが目に見えている。果たして賛同してくれる者がいるかどうか怪しいが……信頼できる者に聞いてみるのも良いだろう」

彼は脳裏に信頼できる天使達をピックアップしつつ、ソドムとゴモラの跡地に黙祷する。

そして、数分後、彼は黙祷を止め、神界へと戻ったのであった。

一休的な話（前書き）

微妙にグロ表現あり。

一休的な話

アシュレイはアペプからもらった任務をルシフェルとの会話後、さくつと消化し、加速空間に戻っていた。

しばらく心を落ち着ける為に静養しよう、と彼女は決めたのだ。

唐突だが、悪魔や神も風呂に入ったりする。

上位者であればあるほど、人間と似たような生活を送るようになる。

アシュレイも一時は人間離れた生活を送っていたが、最近では人間と似たような生活を送るようになっていく。

すなわち、食事をし、風呂に入り、とそういう生活だ。

無論、とても爛れた生活であるが、それでも似たような生活であることは間違いない。

ともあれ、彼ら上位悪魔や上位神族がそうする理由はそれらが娯楽の一つであるからだ。

風呂は安らぎを得、食事はその味を楽しむ。

今日はそんなアシュレイの爛れた一日をお送りしよう。

「ん……」

ゆっくりとアシュレイは瞼を開けた。
視界にはリリスの顔が。
彼女は満面の笑顔で告げる。

「おはよう、アシュ様」

「おはよ……ああ、今日の一番搾りはあなただったの」

寝起きのアシュレイに抱かれるのは1日ごとの交代制だ。
順番を決めるのに壮絶な戦いがあったのだが、そこは割愛する。

「アシュ様、おはようございます」

リリスと致した後、終わるのを見計らったようにテレジアがやってきた。

「今日の朝ご飯は？」

「ステーキ、サラダ、オニオンスープ、ライスです」

朝食とは思えない重い料理だが、魔族には関係ない。

「ステーキは何の肉？」

「牛肉です」

「この前は5歳の女の子のお肉だったわね」

「地獄中央市場から生きの良いものが入りましたので」

「確かに美味しかった……って、勿体無いからできるだけ5体満足の生きた状態で持ってきて頂戴」

言うまでもないが、アシュレイは吸血鬼的な魔族である。

彼女は人間の血も肉も美味しく食べることができる。

しかし、彼女は血は吸っても、肉を食べるといふことはしない。なぜならば勿体無いのだ。

彼女の好物は言うまでもなく女。

だが、肉まで食べてしまつては食べられた側は死んでしまつ。

それは勿体無い。一時の快樂だ。

しかし、生きたままとっておけばその後も性的な意味で長く美味しくいただける。

これは言うまでもなく、アシュレイの個人的な感情であり、そうされてしまう人間のことは全く考えていない。

アシュレイは確かに自分を崇める人間には優しい。

逆に言えば、それ以外の人間には悪魔らしく残酷であった。

アシュレイはテレジア、リリスを連れて食堂へと向かう。

加速空間にある屋敷の食堂はそれなりに大きい。

彼女が食事をするときは歌の上手い淫魔達がその歌声を披露し、給仕をするのはその道のプロになってしまったテリアナ。

酒場のウェイトレスが魔神専用ウェイトレスになる、というのはその経緯を考えても、出世なのかどうか複雑なところであった。

「アシュ様、おはようございます」

食堂ではリリムがおり、にこやかな笑顔で挨拶してくる。

「おはよう」

アシュレイはそう告げ、専用の椅子に座る。

リリムはそれを見、待機している淫魔達に合図を出せば、彼女達はその歌声を披露し始めた。

その歌は不思議な旋律だ。

聖歌のようでありながら、禍々しさがある。

リリスとリリムはアシュレイの椅子の左右に陣取る。

2人の役目は食事中的アシュレイの話し相手だが、話をするだけにとどまらないときもあるのは言うまでもない。

さて、準備が整ったところでテレジアが料理を運んでくる。

淫魔達の歌声が響く中、アシュレイはわりと優雅に食事を行う。

過去、アシュタロスから魔王になると、色々と付き合いも増えるのでテーブルマナーは完璧に、と教えてもらったからだ。

当時のアシュレイとしてはそういうのを気にせず、極普通に食べたかったのだが、すっかり今では慣れてしまい、逆に粗雑な食べ方ができなくなってしまった。

「アシュ様、今日はどう過ごされますか？」

ゆっくりと食事を進めるアシュレイにリリムが問いかけた。

「そうね……この後はここにいる子達を抱いて……散歩かしらね。ドレミと」

「アシュ様、私もついていきたいな」

そう言うリリスにアシュレイは首を傾げる。

「ねえ、リリス。あなたとリリムも抱くのだけど。腰が抜けるまで」

その言葉にリリスはアシュレイに抱きついた。

胸の感触にアシュレイは思わず頬を緩める。

言うまでもないが、淫魔にとってそういうことを言われるのほども嬉しいことであった。

「ともあれ、食事をしたいのだけど」

さすがのアシュレイも抱きつかれた状態では食べることができなかった。

リリスは名残惜しそうな顔で離れるが、その際、アシュレイの顔にキスしていくことを忘れない。

リリムは母親のアシュレイの邪魔をするという行動に若干の不快感を示しながらも、気持ちは分かるので何も言わない。

「どんな風にやろうかしらね……コスプレ……制服……学校……！」

食事後にするプレイ内容を思い描いている最中、アシュレイは閃いた。

学校つくってそこに淫魔達通わせれば、大変オイシイシチュエーションで致すことができるのでは、と。

基本、淫魔達は1日中、ヤッて過ごしている。

別に学校に通わせても問題ない。

問題は誰が教師をやるか、ということだ。

「……ちょうどいいのがあるわ」

テレジアに仕込んでもらって、メイドの真似事をしてもらえば労働力の確保にもなる。

一石二鳥だ。

「今日はいいい日かもしれない」

そう呟き、アシュレイは上機嫌で食事を進めたのであった。

食堂にいた淫魔達とついでにテレジアとテリアナも足腰立たなくした後、アシュレイはドレミと共に散歩に出ていた。

今、彼女達は現実空間での地獄の荒野を疾駆していた。

ドレミはその背にアシュレイを乗せて。

手綱も何もないが、魔法という便利なものがある。

それを使い、アシュレイはドレミの背中に寝転がっていた。

ドレミの体毛はもふもふとしているわけではないが、それでも寝転がるにはちょうどいい感触だ。

ご主人様との散歩が嬉しいドレミは張り切って、ジャンプしたり宙返りしたりするのだが、アシュレイは落ちたりしない。

彼女はドレミのはしゃぎっぷりに微笑んでしまつた。

時折、走るドレミの背中を撫でてやれば彼女達は気持ちいいのか、青銅のような鳴き声を発する。

アシュレイはその鳴き声が好きであった。

「現代で例えるなら……掃除機が吸引するときの音かしらね。ぎゅいーん、じゃなくてぎゅうううんって感じの」

意外としつくりとくる表現にアシュレイは満足げな顔。

「ドレミ、そろそろ遊ぼうか」

ぼんぼん、とドレミの背中を叩いてストップを指示する。

その指示にドレミはすぐに止まる。

その背中からアシュレイは降り、ドレミの前へと。

「おいでおいで」

アシュレイの手招きにドレミはその首を彼女の体に押し付ける。

体は勿論、首もわりと大きいのだが、アシュレイはビクともしない。
い。

首を受け止めて、1つずつ、丁寧にその頭や顎の下を撫でてやる。気持ちいいのか、目を細めて小さく鳴く彼女達がアシュレイは可愛くて仕方がなかった。

「お腹撫でてあげるー」

アシュレイの言葉にドレミはひっくり返ってその大きなお腹を見せる。

それぞれの頭は息遣い荒く、舌を出している。

その様子に彼女はくすくすと笑い、彼女達のお腹に手をあて、ゆっくりと撫で始める。

ぷにぷにとした柔らかかで暖かい感触にアシュレイもまたいい気持ちになる。

それから数分程、彼女は撫でていたが、我慢できなくなりそのお腹に体を預けてしまう。

ウォーターベッドのような感触と程よい暖かさにアシュレイの瞼がゆっくりと閉じていく。

ドレミはそれを見、体を少し内側へ折り曲げ、アシュレイを自らの体で守るようにする。

そして、ドレミもまたゆっくりとその瞼を閉じたのであった。

「ん……」

アシュレイが目を開けるとそこは見慣れた自室の天井であった。

覚醒する頭、記憶はドレミのお腹で眠ったところで途切れている。

「起きられましたか？」

アシュレイが視線を動かし、声の主を捉え、その名を呼ぶ。

「エシユタル」

「はい。そろそろ湯浴みを……」

「ああ……あなたが運んでくれたの？」

「はい」

「ありがとねー」

「はい……！」

アシユレイはベッドから起き上がり、ふよふよと宙を浮かぶ。

「今日の当番は？」

「私とディアナです。今日はどちらになさいますか？」

「大人モードで」

アシユレイの言葉にエシユタルは頷くと、その体がみるみる変化していく。

そして、数秒と経たずに彼女は大人となった。

ディアナと同じか、もしかしたらそれよりも大きい胸。

肉感的な太もも。

アシユレイはごくり、と思わず唾を飲み込んだ。

「久しぶりですね……この姿は」

「しばらく、そっちでもいいわね……」

エシユタルの大人形態は久しぶりに見るととても新鮮であった。

「エシユタル、抱っこ」

「はい、アシユ様」

アシユレイの言葉にエシユタルは優しく、主の体を抱きしめる。落とさぬようしっかりと固定し、エシユタルとアシユレイは浴場へと向かったのであった。

その後、浴場において、ディアナを交えたとても大変なことが行われたのは言うまでもないことであった。

とある少女の話(前書き)

鬱描写あり

とある少女の話

「では、よろしくお願い致します」

深々と中年の男が頭を下げた。

彼が頭を下げている相手は魔族であるが、破壊が大好きな、そこらにいる魔族ではなかった。

その魔族は時代など関係ない、と言わんばかりのスイツ姿であり、見た目は極普通の人間であった。

彼は答えた。

「ええ、確かに受け取りました」

「これでこの村には手を出さぬよう……お願いいたします……」

「勿論ですとも、村長。悪魔は嘘をつきません。我々は約束を重視致しますので」

このスイツ姿の魔族は地獄にある様々なものを取り扱っている中央市場の者だ。

中央市場は地獄政府が運営しているので、彼も一応は公務員ということになる。

ともあれ、重要なのは彼の身分ではなく、地獄政府が運営しているということだ。

中央市場は神界を除くあらゆるところからあらゆるものを仕入れている。

人間界からは主に人間を商品として。

勿論、無理矢理奪っていくというようなことはせず、生贄として差し出すことで如何なる魔族も手を出さない、とそういう契約を結んでいる。

「あの……実は……」

中年の男が躊躇いがちに声を掛けた。

「実は今回の生贄は……私の、5歳の娘なのです……」

無理かもしれませんが、なるべく死なないようにお願いします、と彼は頭を下げる。

そう言われても魔族の彼としてはどうしようもない。買い手を選ぶということはできないからだ。

「善処はしましょう」

故に彼は曖昧な返答をする。

ただ、それでも中年の男には十分であった。

彼としても、娘はもはや二度と戻ってくることはない、と覚悟している。

無論、悲しいし悔しいし魔族なんぞ消えてしまえ、と彼は思う。

だが、そうはならない。

現実是非情だ。

魔族へ生贄を差し出すようになってから、大雨や干ばつなどの災害が無くなったのだ。

これらは地獄政府の一部門である災害対策部が行っている仕事なのだが、それは人間達には分からない。

ともあれ、災害が無くなったおかげで村人達は洪水に怯えることもなく、飢餓に苦しむこともなく、豊かになった。

生贄として差し出す者は1人。

村人達は生贄とされる者に心を痛めつつも、皆を助ける為の神聖な者である、と見るようになってしまった。

「では、失礼致します。また1年後に」

スーツ姿の魔族は会釈して地獄へと帰っていった。

後に残された村長は込み上げてくる涙を堪え、その場を後にした。

「ここが地獄なの？ とっても活気があるわ！」

その少女はとても明るく、元気があった。

彼女は檻には入れられているものの、それ以外は特に何の束縛もない。

檻の中から、彼女は初めて見る地獄に思わず感嘆を上げてしまった。

少女の瞳に映るのは多くの魔族達。

彼らは買利物袋を持っていたり、商品を背負っていたり……手に

持つものも様々だが、その姿形も様々であった。

悪魔として想像されている姿と全く同じ者もいれば、より恐ろしい異形の者、もしくははどう見ても人間にしか見えない者まで。

中央市場とはいうものの、その実態は21世紀の日本にあるスーパーマーケットと同じようなものだ。

ある魔族が檻に入った彼女の前で足を止め、値札を見る。

その魔族をまじまじと見つめる少女。

目と鼻の先で悪魔を見るのは彼女は勿論、初めてであった。

「……鬱陶しい」

その魔族は彼女の視線を不快に思ったらしく、すぐさま離れていた。

鬱陶しいから、と殺したりはできない。

中央市場での騒ぎはご法度だ。

騒ぎを起こせば魔王や魔神が出てくる。

一瞬で騒動を沈静化させる為には圧倒的な力を持った者が出てくるのが一番早いのだ。

しばらく彼女が檻の中であちこつちに視線をやっていると、また別の魔族がやってきた。

次に来たのは女の魔族。

綺麗であるが、まるで氷のような雰囲気を持っている。

「……5歳か。12歳がいいのだが」

彼女は値札に書かれていた少女の年齢を見るや、興味を失い、去

っていった。

「何だったんだろう……？」

少女にはさっぱり分からない。

その魔族がその筋ではそれなりに有名なサディストであり、人間の少女を嬲り殺していることを。

次に来たのは優しそうな雰囲気青年であった。

ただし、その背中には鳥のような翼がある。

「ああ、ちょうどいい」

彼は値札を見るや否や、即決した。

すぐに彼は店員を呼び、その少女を購入した。

「私をどうするの？」

檻から出されたが、その代わりに手錠をされた少女は青年に連れられて歩く中、問いかけた。

「お肉屋さんに行くんだよ」

「お肉屋さん？」

少女の村にお肉屋さんというものは存在しなかった。不思議な顔をしている彼女に青年は苦笑し、告げる。

「色んなお肉を売っているところだよ。この中央市場の中にあるんだ」

「そうなんだ」

少女はそう答えつつ、あちこちに視線をやる。

先ほどとはまた違った光景だ。

いくつもの店が軒を連ね、多くの魔族が店内を覗いたり、通路の脇に設けられたベンチに腰掛けて世間話をしている。

それらの店は巨大スーパーにあるテナントなのであるが、少女には分からない。

少女は魔族達の会話がどういうものか、と耳を傾けてみる。

その様子を見た青年は彼女に翻訳魔法を掛けてあげた。

『アシユレイ様こそ将来魔界を背負って立つだろう！』

『ゼウスを倒すなど、そこらの魔族には到底できない。素晴らしい方だ！』

『今度行われる戦闘ではアシユレイ様が指揮を取られるらしいぞ。政府の友人から聞いたんだが、アペプ様はアシユレイ様に魔王となつてもらおう為にもう少し功績が欲しいらしい』

少女にはさっぱり分からなかった。

そんな彼女に青年は告げる。

「今、地獄ではアシュレイ様というとても強い御方がいるんだ。大公爵であり、その魔力は星を破壊してもなお余りある程に」

「そうなんだ。凄いなあ……」

「もしかしたら会えるかもしれないね。アシュレイ様の従者の方は店によく来るんだ」

目を輝かせる少女に青年は再び苦笑した。

それから2人は20分程歩き、彼の店に到着した。

「わー！ 凄い！」

少女は店内を見て、はしゃいでいる。

棚に並んだ様々な種類のお肉。

それらには保存の為に魔法が掛けられているが、少女には分からない。

彼としてもここまで喜んでくれると嬉しいものだ。

「お、来たよ。アシュレイ様の従者の方が」

窓から見えたその容姿に彼は少女に告げた。

数秒と経たずにその従者である彼女が店内に入ってきた。

彼女は金髪を三つ編み団子にし、黒いゴスロリチックなメイド服を着ている。

「これはテレジア様、よくお越しくございました」
「ああ……そっちの人間は？」

テレジアは見慣れぬ少女に店主である青年へと視線を向ける。

「たった今、仕入れたばかりです」
「そうか」

そう答え、テレジアは少女の前へ。

「お前は何歳だ？」
「5歳！」

元気いっぱいに答えた。

「処女か？」

テレジアの問いに少女は首を傾げる。
その様子にテレジアは青年へと視線を向けた。

「処女です」

「たまにはアシュ様に食してもらってもいいと思うのだが……」

テレジアの意図を悟った彼は告げた。

「処理に30分頂ければ」

「よかるう。あと牛肉や豚肉なども頂こう」

「畏まりました。では先に処理しますので……」

「うむ。30分程、他の店を見てくる」

「はい。脳はどうされますか？」

「スープにするので、とっておいてくれ」

「はい、畏まりました」

2人の会話が済んだのを見計らい、少女はテレジアに問いかけた。

「ねえねえ、アシュレイ様って凄いの？」

「ああ、凄い方だ。そして、お前はその方の糧となる。喜ぶがいい」

ではな、とテレジアは店内を出て行った。

「さて、ちょっとこっちにおいで」

青年は少女を誘った。

彼女は首を傾げながらも彼の後をついていく。

そして2人は店の奥にある部屋へ……屠殺部屋へと入っていった。

とある少女の話（後書き）

平日だから今日の更新はもうないだろう……その幻想をブチ殺す！

それぞれの動き

「ついに私が大規模戦の指揮を取ることになったわ！」

ついさつき、議事堂から帰還したアシュレイはテレジア、シルヴィア、ベアトリクスを呼び寄せ、集まった彼女たちにそう宣言した。

「お言葉ですが」

ベアトリクスはそう前置きし、アシュレイに告げる。

「居城の建設が……」

「大丈夫よ。アシュタロスが何とかしてくれるから」

そのアシュレイの言葉には妙な説得力があった。

それでも、それでもアシュタロスならきっと何とかしてくれる
そんな妙な信頼だ。

「というわけで指揮系統一本化の為にもう親衛隊もベアトリクスの指揮下に入っちゃって。集まり悪いし」

ベアトリクスが前々から迷っていたことが、あっさりとアシュレイの口から出てきた。

これで一応、シルヴィアは不憫な思いをせずに済む。

だが、彼女がより悲惨なことにならぬよう、ベアトリクスは問いかけた。

「アシュ様、シルヴィアにはどのような役目を？」

「副司令……というのもアレだから、現場のトップでいいんじゃないな

いかしら。早い話がベアトリクスが後方で全体の指揮を、シルヴィアが前線での実際の指揮を」

「あの、アシュ様」

遠慮がちな声でシルヴィアが口を開いた。

「人間ならばそれでも良いのですが……」

「……そうだったわね」

ベアトリクスという強大な戦力を後方で遊ばせておく、というのは勿体無いことだ。

基本、神族も魔族も強い輩程、最前線で戦うことになる。

人間ならば身体能力などに差がないことから、後方と現場という分け方もできるのだが。

「じゃ、シルヴィアには適当な軍団を率いてもらいましょう。で、個人的なものだけど、40個あるうちの軍団で、最も活躍した軍団には親衛の称号を与えようと思うの」

そこで一度言葉を切り、アシュレイはシルヴィアをまっすぐに見て告げる。

「あなたの率いる軍団が活躍すれば親衛隊になれるわね。頑張つて」

シルヴィアはアシュレイの配慮に思わず体を震わせた。

主にここまでされて、応えないのは使い魔ではない、と彼女は気を引き締めた。

「それはさておき、ベアトリクス。ぶっちゃけ、どうなの？ 私の軍」

その問いかけにベアトリクスは思わず視線を逸らした。しかし、その逸らした先には既にアシュレイが先回りして、きらきらと瞳を輝かせていた。

結構いいレベルに達しているんじゃないか、とアシュレイは期待している。

具体的に言えば上位天使の軍勢とガチンコして勝てるレベルに。

「その……半年ならば存分に暴れてみせましょう」

ベアトリクスはこう言うしかなかった。

一転、アシュレイは長い、長い溜息を吐いた。

「つまり、ぶつちやけ戦力になるレベルじゃないのね」

「……はい。申し訳ございません」

ベアトリクスは勢い良く頭を下げた。

「仕方ないわ。少数精鋭でいきましょう。使える兵隊を1つに集めて、ベアトリクスが司令で補佐としてシルヴィアが指揮をとりなさい」

いざとなったら私が出るから、と彼女は告げた。

アシュレイとしては最低でも熾天使クラスでなければ戦いたくない。

何分、弱いと軽く殴っただけで相手は消滅してしまうのだ。

強すぎるというのも考えものであった。

「じゃ、私はニジと遊んでくるから。たぶん、ディアナとエシユタルも同じところにいるでしょうから、私がさっきのことは伝えてお

くわ

手をひらひらさせて、彼女は消えた。

「ところで、使えない兵隊はどうすればいいのか？」

シルヴィアの問いにベアトリクスが答える。

「アシュタロス様にでも預けておけばいいだろう。いや……いざというときの囷に使えるかもしれん」

「私も前線に出るのだろうか……久しぶりで血が騒ぐな」

テレジアはそう呟き、嗜虐的な笑みを浮かべる。

メイドではあるが、彼女もれっきとしたアシュレイの使い魔。

戦闘力はそこらの上級魔族を凌駕している。

「我々の活躍はそのままアシュ様の名声へと繋がる。気を引き締めてやるように」

ベアトリクスの言葉に分かっている、と答えるシルヴィアとテレジア。

主の初舞台、手抜きなんぞできるわけがなかった。

「オーバー・ザ・レインボー！」

そんなことを言いながら、アシュレイはニジの上を飛び越えた。思わず顔を上に向けたニジ。

そして、彼女は目撃した。

「アシュ様、今日は白ポヨか……」

「昨日、穿いてなかったのだけでも、今日は穿いてみました」

穿かない日がある理由は言うまでもないだろう。

「ところでアシュ様、先程の一発ギャグは寒かったポヨ」

「……この私にそういうことを言うなんて、度胸あるわね」

「地位の濫用は良くないポヨ」

妙に仲がいい2人である。

おそらく、ニジの方言とその雰囲気からアシュレイとしては珍しく、友達のような感覚なのかもしれない。

言うまでもないが、アシュレイに友達はいない。

アシュタロスとは友達というよりかは頼りになる先生だ。

そんな雰囲気の人をじーっと見つめるディアナとエシユタル。アシュレイとくだけた会話ができるニジが羨ましかった。

「で、ディアナとエシュタル。親衛隊解体ね。でもって、ベアトリクス
の指揮下にしたから。詳しいことはベアトリクスから聞いて頂
戴」

さつき、3人に話したことを簡単にアシュレイは説明する。
詳しいことは丸投げするあたり、結構彼女もいい加減だ。

「あの、アシュ様」

もじもじとしつつ、ディアナが声を掛けた。

エシュタルは先を越された、と悔しげな顔を見せる。

「その、もっと構ってください。アシュ様と遊びたい……です」

顔を俯かせて、アシュレイを見つめるディアナ。

そんな彼女にアシュレイは思わず唾を飲み込んだ。

「可愛い……！」

アシュレイは目にも留まらぬ速さでディアナに抱きついた。

そして、その大きすぎる胸に顔を埋める。

ディアナはそんな彼女の背中に手を回し、その頭を優しく撫で始
めた。

エシュタルはその可愛らしい顔を鬼の如き形相に変え、ディアナ
を睨む。

殺気で上級魔族が殺せたら、ディアナは100万回は死んでいそ
うだ。

「まあまあ、落ち着くポヨ」

ぼんぼん、とエシユタルの肩を叩くニジ。

「大丈夫ポヨ。アシユ様は優しいポヨ。僅かな勇気できつとうまくいくポヨヨ」

「そ、そうか……？」

「そうポヨ。今日の夜辺りに寝室に忍び込めばきつといいことあるポヨ」

「わ、わかった。甘えてみる」

ぐ、と握り拳を作るエシユタル。

そんな彼女にうんうん、とニジは頷きつつ、アシユレイにウィンクしてみせた。

アシユレイは先ほどからずっと視線だけ動かし、エシユタルを見ていたのだ。

ニジのウィンクにアシユレイは念話でフォローへの感謝を告げる。部下の管理というか、妾の管理はそれなりに気を遣うもの。

その点、ニジは魔族にしては珍しく、場の空気が読めるのでアシユレイとしては色々な意味で重宝する存在であった。

神界のとある場所にて、2人の青年が向き合っていた。片方は12枚の翼をその背に持つ、ルシフェルであった。

「……この計画は神に仇なす、というものですね」
「そうだ。密告しても構わない」

ルシフェルの言葉に青年は苦笑する。

「まさか。あなたの覚悟は重い。それに、あなたの計画は世界にとっても良いことです。そんなことはしませんよ」
「ならば……？」

青年はにこやかな笑みを浮かべ、頷いた。

「協力致しましょう。僕としても、彼女には興味がありますので」
「純粹であるが故に彼女は恐ろしい」
「悪く言えば、単純である……と？」

その言葉に今度はルシフェルが苦笑する。

「欲望のままに力を振るうのが魔族……神族にもどこかのギリシヤの主神のような者がいるが……」

ルシフェルの言葉に青年は思わず笑ってしまう。

「ともかく、彼女は自らの込み上げてくる欲望のままに自らの力を振るう。その力は強大だ」

「聞けば大公爵でありながら、既に魔王クラスの實力とか……」

ルシフェルは頷き、肯定する。

「前に私は彼女と会った。こちらの尻拭いを頼む為にな」

青年は興味深そうに目を細める。

「底知れぬ魔力だ。私やメタトロン様がアウゴエイデスをもって戦つても、一蹴されてしまいかもしれん」

「次代の魔王であることは確定ですね」

青年の言葉に頷き、ルシフェルは言葉を更に紡ぐ。

「彼女を、魔神アシュレイを味方につけようと思つ」

青年は思わず目を見開いた。
とても難しいことだ。

彼女が神々や天使を嫌っているのは分かりきっている。

「彼女は魔族の英雄だ。地獄でその名を知らぬ者はおるまい。彼女をこちらに引き入れればデタントは一気に進むだろう」

「確かにそうですが、どうやって？」

ルシフェルは深呼吸を一つする。

彼が考えたものは博打に等しいものであった。

「私が指導者となった後、彼女が欲しいものを与える。その代価として指導者となることに協力してもらおう」

「空手形にも程があります。動かせますか？ それで」

呆れた表情の青年にルシフェルは重々しく頷く。

「それしかあるまい。彼女は女を欲しがらるうが、ミカエルやガブリエルを墮天させて彼女に与えるわけにもいくまい。神界の護りが疎かになってしまう」

「それはそうですが……彼女が指導者の地位を望んだらどうしますか？」

「私の勘だが、それだけはないと思う」

「あやふやですね」

「あやふやだが、何故か分かるのだ。彼女はそれだけは決して望まない、と」

指導者になれば世界の維持に奔走しなければならず、遊ぶ暇がない。そういう裏事情をアシュレイはアシュタロスから教えてもらい、知っていた。

「虎穴に入らずんば虎子を得ず、と言いますし、アシュレイの引き入れ策の件も含めた上で改めて協力します……ルシフェル様」
「そうか……ありがとう、バアルゼブル」

青年、バアルゼブルは再びその顔に笑みを浮かべた。

木星は滅びず（戦闘の余波的な意味で）（前書き）

はじめての、戦闘……！

木星は滅びず（戦闘の余波的な意味で）

「木星でかつ！」

右手方向にある木星に驚愕するアシュレイ。

勿論、彼女は宇宙服なんてものは必要なく、いつもの黒いワンピース姿だ。

魔族にとつて宇宙空間を飛び交う有害な放射線や真空中であることは全く関係ない。

「しかし……人間だった頃はまさか自分が宇宙服なしで宇宙遊泳するなんて思ってもみなかった」

しみじみとアシュレイは人間であった頃を思い返す。

「木星を自分の目で見た人類って私が最初よね」

元人類だけでも、と彼女は付け加える。

彼女が生きていた21世紀でも、人類は未だ木星に到達できてはいなかった。

せいぜいが探査機を送る程度。

それを考えれば彼女は史上空前の快拳を成し遂げていることになるが、魔族なので残念ながら人類の功績にはならなかった。

「木星トカゲは？ 木連人のいるコロニーはないかしら？」

ナデシコっていう船でも造ろうかしら、と口走ってみる彼女。

「私は！ 木星圏ガニメデ・カリスト・エウロパ及び他衛星小惑星国家間反地球共同連合体を結成する！」

彼女は自分で叫んでみて気づいた。

「反地球ってことは地球にいる神族と敵対するって意味にもなる？ ソドムとゴモラの生き残りを木星周辺にコロニー造って住ませようかしら……たぶん、神族に狙われると思うし」

そう告げるアシュレイだが、彼女が過去に言った言葉にこういうものがあった。

オカルトなのかSFなのか分からない、と。

アシュレイはそれを思い出すが、何故か胸を張って自信満々に告げた。

「高度に進化した科学は魔法と変わらないってえらい人が言ったから問題ないわ」

そんなアシュレイに念話が届いた。

『……お前は何をやっているんだ』

相手はアペプ。

声だけだが、きっと彼は呆れた顔をしているに違いなかった。どうやらアシュレイが遊んでいることに気づいたらしい。

アペプも……というよりか、アシュレイを除いた全ての魔王や魔

神達はここから遙かに離れた場所で戦闘中だ。

今回、初陣ということもあって 先の下級神族との戦闘は単なるウォーミングアップに過ぎない アシュレイは陽動として、神界にある予備兵力を誘き出して叩き潰すのが目的であった。

『いいじゃないの。で、まだなの？』

アシュレイは問いかける。

『あと少しだ。暗黒体で準備しておけ』

『了解』

彼女はそう答え、念話を切った。

そう、彼女が何で木星くんだりまでやってきたかということ、戦争をする為だ。

なるべく地球から離れた場所で戦わないと、余波で地球が吹き飛んでしまう。

「それじゃ、お着替えしましょうか」

そう呟いた瞬間、アシュレイの体が黒い霧のようなものに包まれていく。

あっという間に彼女を包み込んだ霧はそのまま周囲の空間にまで広がっていき、やがて広がりを止めた。

そして、広がってから数秒と経たないうちに霧が消えていく。

霧が晴れたその場にはアシュレイの姿はなく、巨大な龍のようなものがいた。

その頭は三つ、宇宙空間に溶けこんでしまふかのような真っ黒な鱗に全身を覆われ、その尾は七つ、巨大な翼がその背にあり、その体躯は数百mにも達する。

そして、それぞれの頭には真っ赤な目玉が7個ずつあり、尻尾にもそれぞれその先端部分に口がついていた。

アシユレイの暗黒体……すなわち、彼女が全力で戦闘を行う為の形態であった。

そして、彼女の暗黒体はその場にただ存在しているだけで膨大なエネルギーを発し始める。

そのエネルギーは当然、神界に察知された。

「超巨大なエネルギー反応！ 木星近辺です！」

「エーテル振動波はマイナス！ 魔族です！」

神界の某所にある中央司令部。

全ての天使の軍団に対し、ここから指示を出すのであるが、情報が最も集まることから、他の神族に対しても指示を出すことがよく

ある。

本日、当番として司令所に詰めていたミカエルは思わずその身が震えた。

「大きい……どう見ても魔王クラスか……」

彼女はそう呟いた。

モニターに表示されている全ての数値はミカエルの光体どころか、ルシフェルやメタトロンのもを上回っている。

すなわち、天使では太刀打ちできないという嫌な事実を示していた。

「ミカエル様、この暗黒体から発せられる波長ですが、今まで確認された魔王や魔神のものとは一致しません」

オペレーターの天使の1人がそう告げた。

「……噂のアシュレイか。魔神とは聞いていたが、もはや魔王だな」

ミカエルは眉間に皺を寄せる。

どうしたものか、と。

主神クラスでなければ到底太刀打ちできないことは確か。

だが、その主神達は今、木星から遠く離れた場所でアペプをはじめめとした地獄の主力と戦っている最中だ。

それどころか、メタトロンやルシフェルをはじめとした上位天使のほとんど全員がそっちへ行ってしまうている。

神界に残っている熾天使はミカエル、ウリエル、ラファエル。

神界の守護も考えるとウリエルとラファエルは動けない。

「陽動……か？ それとも単なる散歩か」

単なる散歩に暗黒体を纏う訳がないのはミカエルも重々承知だ。

「私が出る。動ける天使を全て動員し、魔神をどうにかする」

『……なんか当たった』

こつん、と流れてきたデブリがアシュレイの体に当たって砕け散った。

結構大きなデブリであったのだが、彼女には小石をぶつけられたような痛みもない。

『暇……暇だわ』

彼女は暇であった。

勝手に暴れて木星を吹き飛ばしたりするわけにもいかず、彼女はじーっとその場で待っていた。

彼女が暗黒体を纏ってから既に2時間が経過しており、そろそろ神族が出てきてもいい頃合いだ。

『!』

アシュレイはその三つの首をある方向へ向けた。

瞬間、その空間が割れて、神々しい光と共に天使達が湧き出してきた。

『ちやーんす!』

アシュレイはただちに三つの口から膨大なエネルギーを持った光線を発射した。

ほぼ溜めなしで放たれたその光線は彼女の口が光った瞬間、目標地点に着弾していた。

現れるまで待つてから攻撃なんて悠長な真似はしない。

雑魚はさっさと倒してしまうに限る。

そして、彼女の攻撃速度は光った瞬間に着弾していることから、言うまでもなく光速だ。

並の天使では反応することすらできない。

盛大な爆発と共に天使達がちぎれ飛んでいく。

『ああ、勿体無い……!』

彼女の無駄に良い目は女性型の天使達が肉片となったりする様を目撃してしまった。

『悲しいけど、これって戦争なのよね!』

そして、彼女は其三つの口で咆哮した。
その咆哮は衝撃波となつて周辺に襲いかかる。
言うまでもなく、永久原子を潰さねばならない魔族や神族の攻撃はその全てに精神、靈魂破壊効果が付加されている。
当然、アシュレイの咆哮も例外ではない。

近くを浮かんでいた小惑星やデブリは一瞬で粉微塵となる。
それだけに被害は留まらず、衝撃波は天使達に襲いかかった。
天使達は無論、呪圈を張り巡らせ、さらにその上から多重防御結界を張っているが、それら全てを一瞬で貫通し、天使達の肉体を粉碎し、同時に永久原子をも砕いた。

『そこまでだ!』

その言葉と共にアシュレイの背中に何かが当たった。

『……?』

思わず、彼女は後ろを振り向いてしまった。

『……あの、何かした?』

アシュレイは近くにいた天使の光体に思わず問いかけてしまった。

『馬鹿な……ディストーションすらも貫通する私の攻撃が……』

その声からどうやら目の前にいた天使の光体が攻撃を仕掛けたらしい、とアシュレイはあたりをつける。

同時に彼女は目の前の天使はその声色から女である、と判断した。

『あー、言つとくけど、ディストーションフィールドとかは防御に使ってないから』

アシュレイに攻撃を仕掛けた天使　ミカエルは答えることなく更に攻撃を仕掛ける。

彼女の光体周辺に無数の光の弾丸が浮かび、それらはアシュレイの光線と同じように一瞬で着弾した。

だが、アシュレイは回避行動すらとらず、ただその場に立っているだけだ。

光弾が全て命中し、爆発に包まれるアシュレイの暗黒体。

しかし、ミカエルは攻撃の手を緩めない。

彼女の光体は巨大な人型。その両腕を変化させ、火筒となった。

彼女は己の神霊力全てを集めていく。

人類では到底考えられぬ程、天文学的なエネルギーが彼女の両腕に集まっていく。

僅か数秒でそれは完了し、彼女は躊躇なく放つ。

砲口が光つたと同時にアシュレイの暗黒体に着弾。

恒星かと思紛う程の光が辺りにを明るく照らし出す。

『焦点温度は億を遙かに超える。我が最強の一撃だが……』

ミカエルは溜息を吐きたくなつた。

アシュレイの反応は未だ健在。小揺るぎもしていない。

だが、それでもこの攻撃をマトモに食らったのは確か。

それなりにダメージを与えることができているれば、とミカエルは思う。

『馬鹿な……』

光が収まった後、アシュレイは現れた。掠り傷一つ、彼女は負っているようには見えない。

『で……もう終わりかしら？』

につこりと少女が笑ったようなイメージが、ミカエルの脳裏に浮かんだ。

悔しいが撤退するか、と彼女は即座に決断した。

ミカエルが動員した天使達は先ほどの攻撃で全く役に立たないことから、さっさと引き上げさせている。

今、この場にはミカエルとアシュレイしかいなかった。

『あなた、なんて名前？ 教えてくれればまだ殺さない』

無邪気な声だ。

『……ミカエルだ』

1秒でも時間を稼ぐ為にミカエルはしばらく会話に付き合っことにした。

例えばアシュレイを滅殺できずとも、主戦場に赴かせなければそれで良い、とミカエルは割り切ることにした。

『私はアシユレイよ。まあ、そろそろ名前を変えようかなと思ってたところだけでも』

『何故だ？』

『だって、アシユレイって可愛らしいから、もうちょっと迫力ある名前にしようかなと』

そう告げ、アシユレイは心の中で「もうアシユタロスを名乗ってもいいって言われてるし」と付け足す。

『候補はあるのか？』

『アシユタロスよ。神界でも広めてくれると嬉しいかも』

『……広めておこつ』

その後も取りとめのない会話が続く。

基本アシユレイが話題を振り、それにミカエルが答えるという形だ。

ミカエルは針の筵に座っているような居心地の悪さだが、それでも耐える。

やがて、アシユレイからの話題が途切れたところを見計らい、ミカエルは聞いてみた。

『先ほどの私の攻撃、あれはどうやって防いだのだ？ 空間を歪め、

逸らしているようにしか見えないのだが……』

『知りたい？』

『教えてくれると嬉しい』

『しょうがないなーミカエルはー……じゃ、戦争が終わったたら、あなたが私の城に来てくれるっていうなら教えてあげる』

思わず、ミカエルは絶句した。

こんなことを言い出す魔族なんて聞いたことがないからだ。彼女をはじめとした多くの神族は魔族とは不倶戴天の敵であり、世界の為にしようがなく存在を許されているという認識であった。そして、魔族もまた同じ認識であるのが一般的だ。

『……で？ どうなの？』

沈黙したミカエルにアシュレイは問いかける。

『分かった。戦争が終わったら、そっちにお邪魔しよう。ただし、私以外の熾天使も連れて行くのが条件だ』

『いいよ』

あっさりアシュレイが許可を出したことにミカエルは驚いた。いくらアシュレイといえど、何人もの熾天使と同時に戦えばさすがに怪我の一つくらいは負うだろう。

『だって、戦争が終わったなら争う理由はないでしょ。恨みつこなし』
『だが、私は！』

ミカエルは思わず叫ぶ。

彼女はあの一件について、黙っていることに耐え切れなくなった。アシュレイが人間達を導いていたことを、一部の地域では女神として祀られ、人間達に幸福をもたらしていたことを、ミカエルもまた知っていた。

彼女は事実を一視点から見ない暗愚ではない。

確かに主を信仰しないのは多少不満であるが、それでも弱き人間達が幸福であるならば構わなかった。

『私は……あなたの街を焼いたのだ!』

瞬間、アシュレイから発せられる魔力が急増した。

ミカエルは光体であるにも関わらず、その身を震わせる。

彼女は自らの死を覚悟したが、攻撃はなかった。

アシュレイの魔力は徐々に静かなものとなっていき、やがて彼女は暗黒体を解いた。

現れた小柄な少女にミカエルはまじまじと見つめる。

こんなにも幼い姿であったとは、という純粹な驚き。

その後、幼子を悲しませた、という事実、ミカエルの心に湧き出してくる大きな罪悪感。

「あなたが見た、私の街は……私の民は最後まで幸福であったか？
涙を流している者はいたのか？ 争いはあったか？」

ミカエルはその問いに対し、光体を解いた。

今、目の前にいるのは邪悪な魔神などではなく、1柱の女神であった。

ミカエルはアシュレイの前で片膝をつき、頭を垂れる。

主でなくとも、上位存在にはこれくらいするのは当然の礼儀であった。

「あなたの街は、あなたの民は……皆、最後まで幸福でありました。
皆が笑い、争いは一切ありませんでした」

アシュレイはその言葉に微かに頷き、ミカエルに後ろを向けた。

「もう私の任務は終わった。今、念話がきて、主戦場での決着はついたらしい」

その言葉に慌ててミカエルが神界の中央司令所に問い合わせれば、引き分けという形で終わったことが判明した。

「怖い武神達が来る前にさっさと逃げるとしよう。ああ、ミカエル」

アシユレイは振り返る。

何事かとミカエルは顔を上げる。

紅い瞳と翠の瞳が交差する。

「ソドムとゴモラの生き残り、その末裔がいるらしい。もし見つけたら、守護してあげて」

「畏まりました」

ミカエルは再び頭を下げた。

「あ、それと、私の防御の種明かしだけでも。アレは別の次元に逸らしているのよ。最大であらゆる攻撃を 0.97×10 のマイナス48乗%まで遮断するの。まあ、 0.97×10 のマイナス48乗倍まで威力を落とすのよね、簡単に言うと」

「はあっ!？」

思わずミカエルは素っ頓狂な声を上げた。

彼女の顔はこれ以上ないくらいに啞然としたもの。それくらいにその防御方法は有り得なかった。

アシユレイはそれを見て、くすくすと笑う。

「安心して。これは私にしかできない防御だもの。あ、私の攻撃も

逸らすなんて間抜けなことはないから」

アシユタロスが造っていた究極の魔体から持ってきた技術だ。本来なら宇宙の卵などの必要なものがあるのだが、そこはアシユレイのバカ魔力とアシユタロスの知恵で強引に解決してしまった。

そして、彼女は言うだけ言うと、手をひらひらさせてその場から転移した。

後に残されたミカエルは重く、長い溜息を吐いた。

「……よく、私は生きていたものだ」

しばらくくゆっくり休みたい、と彼女は溜まりに溜まっている有給休暇を使うことに決めたのだった。

精強な軍団 勝てる軍団

「うーん……半壊ね」

アシュレイは自室で報告書に頭を抱えた。

彼女の40の軍団のうち、使える連中を1つの軍団に纏め、アペ
プに預け、主戦場で補助戦力として使われた。
使われたのだが……

「損耗率4割って……どこの末期戦よ？」

横にいるベアトリクスに問いかける。

彼女はただ縮こまるばかり。

4割の者が永久原子を砕かれて戻ってこなかったのだ。
アシュレイとしても頭が痛い問題だ。

何しろ、魔王や魔神はその軍団も精強でなくてはならない。

「もう使い魔を大量に作るしかないのかしらね……」

嘆く彼女にベアトリクスは何も言うことができない。

「いや……待てよ？」

アシュレイはある戦術を思いついた。

人件費なんぞ踏み倒しても問題はない。

そして、強い魔族は大抵、既に誰かの軍に所属している。
残っているのは一山幾らの下級・中級魔族。

その数は膨大。

「精強であるという考えを捨てて、とにかく勝てる軍団を作ればいいのよ」

うんうん、と頷き、アシユレイはベアトリクスに笑ってみせる。

「ねえ、ベアトリクス。弱くてもいいから、とにかく数を揃えなさい。とりあえず100万くらい」

「は……？」

意図が読めず、首を傾げるベアトリクスにアシユレイはくすくすと笑う。

「戦争は数つてことをすっかり忘れてたわ。1個の戦場に100万の魔族を投入すれば勝てる。要は相手よりも数で圧倒的に上回ればいいのよ」

「被害も膨大ですが……？」

「女性型魔族は後ろに下げて、それ以外を突っ込ませればいい。その戦場を生き残ってくる者が強者。その生き残った連中を中心に戦争後に軍を再編すればいい。戦争中に肥大した軍のスリム化もできるから経費削減なのだわ」

「戦争をふるい代わりに……良い案です。さすがはアシユ様……！」
「そうよ。人民の海によって耕せばいいのだわ……！」

ベアトリクスも賛同したように、アシユレイの案はわりといいものであった。

何しろ、中級・下級魔族なんぞ代わりは幾らでもいる。

肉の壁として突撃させても何も問題はなかった。

「で、ベアトリクス。今回の戦で戦果を上げた者はいるかしら？」

その言葉にベアトリクスは幾人かの名前を読み上げていく。
アシュレイはシルヴィアやテレジア、ディアナ、エシユタルなど
戦果を上げて当然といった連中を除けば全く知らない名前ばかりで
あるが、唯一知っている名前があった。

「ヘルマン？ 彼、生き残ったの」

「はい。無駄にしぶといですから」

「それじゃ、次も最前線でいの一撃に突撃させましょう」

哀れヘルマン。

彼の境遇は将来的に改善されるかもしれない。アシュレイの気まぐれで。

「他に特筆事項は？」

「特にはございませぬ」

「ならば、ちょっと出かけてくる。アシュタロスと話すことがあるの」

そう告げ、アシュレイは転移した。

トンテンカントンテンカンとハンマーの音があちこちから響き渡る。

アシュタロスはハンマーの音を聞きながら、指揮所で図面とにらめっこしていた。

工事の進捗は順調だ。

戦争により、比較的強い魔族が大量に引きぬかれたものの、その分の埋め合わせは八二ワ兵の大量投入で補った。

「アシユ様、お茶をどうぞ」

見た目、土偶のようなものがそう言い、湯飲みを置いた。

彼の名はドグラ・マグラ。

凄まじい演算能力を誇る、アシユタロスが作りだした兵鬼だ。彼の補佐無くして、効率的な工事は望めない。

「ああ、ありがとう」

アシユタロスは礼を言い、それを受け取る。

彼の頭には安全第一のヘルメットがあり、服装もすっかり現場監督のそれであった。

「はい」

そんな声と共にアシユレイが指揮所の中に現れた。

「おお、アシユレイ様！ お久しぶりです！」

ドグラの挨拶ににこり、と微笑むアシユレイ。

「アシユレイ、先の戦闘の結果は聞いているぞ」

アシユタロスは凶面を見るのをやめ、彼女に視線を向けた。そんな彼の姿に彼女は目を数度瞬かせた。

「あなた、いつから建設会社に入ったの？」

「これが正しい工事現場のスタイルさ」

「……まあ、いいけども」

呆れるアシュレイは気を取り直して、真剣な顔で彼に聞いた。

「究極の魔体から持つてきて、純粋な魔法技術に昇華したあのバリアなのけども」

「何か不具合があったかね？」

「逆よ。腰に穴があったとか聞いたけど、いつの間に埋めたの？」

その問いにアシュタロスはふつと笑った。

「私がいつまでも弱点を残しておくと思うかね？」

「思わない。というか、隠しちゃうと、別次元の存在になって干渉できなくなるんじゃない？」

アシュタロスはその質問を待つてました、と言わんばかりに目を光らせた。

「世界は矛盾を嫌う。君はもうこの世界において魂の牢獄に囚われている。牢獄は如何なる存在も外に出ることはできない。そんな君が牢獄の外の、別次元の存在になってしまった。なのでこの世界にはいないということになる」

アシュレイはそれにより、なるほどと納得した。

「つまり、世界により私はそこにいるのにいない、いないのにいるという状態なのね」

「そうだとも。世界システムの有効活用だ。最も反則なやり方さ」

「納得……ところで、単なるバリアじゃ芸がないから名前をつけて

「いいかしら？」

「どんな名前かね？ 製作者としては変な名前をつけられてはかなわんのだが」

「次元転移シールドとかどう？」

「……まあ、及第点だろう」

そのまんまであるが、分かりやすいといえれば分かりやすい。

「で、工事の進捗状況なんだけども……あと何年くらい？」

「完成まで1000年くらいだな」

「あら、意外と早いのね」

「ドグラがいるおかげで私が細かい指示を出さなくてもいいのでな

……」

「……私も、造ろうかしらね。ドグラみたいな子」

「ベルフェゴールならば問題なからう。彼女の頭も凄いらな。ところで、彼女の搜索はどうなっているのかね？」

「ソドムとゴモラに生き残りがいて、その未裔搜索に力を注いでるのよ」

彼女はそう答え、じーっとアシユタロスを見つめる。

「……分かった分かった。追跡機を作ればいいんだな？」

「うん。3秒でできるでしょ？」

「3秒は無理だが、10分までできるな。リリース追跡機をちょこつと改造すればいい。私の知るベルフェゴールの波長やその他諸々のデータを使えば見つかる筈だ。たぶん」

困ったときのアシユタロスであった。

一応、アシユレイもアシユタロスと同じように追跡機を作れるのだが、頼ることができるうちは頼って楽をしたかった。

「ところで、もう一つ気になることがあるんだけど」
「何かね？」

「こつちの世界のキーヤんとかサツちゃんは私の経緯を知っているの？」

「まだ知らない筈だ。時期がきたら教えると聞いている」
なるほど、とアシユレイは頷く。

「他に何かあるかね？」

「特にない」

アシユレイはこのあとどうしようか、と考える。

そして、あることを思いついた。

「そつだ、私の使徒を作ろう」

「人間界で活動する君の眷属……といったところかね？」

アシユタロスに彼女は頷き、肯定する。

「だが、それをやれば神族も黙ってはいまい」

「あら、それはおかしいわ。だって、地獄中央市場には人間も商品として出回っているんですもの」

「君の場合、派手にやりそつで心配なのだよ。くれぐれも派手にやるなよ？」

アシユレイは頷き、どんな計画名にしようかと考え、彼女は思いついた。

「神族への皮肉も込めて、計画名は闇の福音とするわ」

「皮肉たつぷりだな」

「皮肉は大事よ。優雅に相手を貶すことができるもの」

アシュレイは満足そうに頷き、ここから直接、地獄中央市場へ行くことに決めた。

そこで生きの良い人間を選ぶ為に。

「これが人間社会支配への第一歩……！」

高笑いする彼女を生暖かい目で見つめるアシュタロス。

彼としては彼女が元氣そうでよかったような、悪ノリして悲しいような複雑な心境だ。

ともあれ、彼女の野望は留まることを知らなかった。

一方その頃

加速空間ではディアナが暇潰しに散歩をしていた。

空をふよふよと漂っていたディアナは海から程近い場所に作られた街に降り立った。

淫魔達が暇潰しに作った街だ。

道端では何人もの淫魔が客引きをしている。

何の客引きかは言うまでもなく、また利用しても料金なんぞ取られはしない。

客引きをしている淫魔達は年齢一桁の若い淫魔から、妖艶な大人の淫魔まで様々だ。

ディアナはそんな淫魔達を横目で見つつ 見られている淫魔達は彼女に熱い視線を送っているのだが あちこちを見て回る。

レストランなどの飲食店もそれなりに存在し、アシユレイが前、提案した学校もまたあった。

飲食店に入ったり、学校を覗いたりすれば、大量の淫魔に集まれることは想像に難くない。

敢えていうなら、飲食店や学校などは食虫植物が餌を捕食する為に行う擬態と同じだ。

ほいほい入ってきた輩を店員や生徒の淫魔達が美味しく頂いてしまおう。

339

「暇だわ……」

やれやれ、とディアナは溜息を吐く。

彼女はとにかく暇であった。

かといって、淫魔達とやる気も起きない。

何か面白いことないかしら、と彼女が思ったそのときだ。

「……？」

オーブンカフェで何やらやっている見た目10代後半の淫魔達。

初めて見る光景にディアナはほいほいとそっちへ向かった。

「何をやってるの?」

ディアナがそう問いかければ淫魔達は驚いた顔をするが、すぐに笑みを浮かべる。

「ディアナ様、今、お化粧をしています」

「化粧?」

はてな、と首を傾げるディアナ。

そこで彼女は淫魔達の唇が朱色に塗られていることに気がついた。

「その紅いのがそうなの?」

ディアナが彼女達の唇を指さしながら問いかければ、彼女達は頷く。

「他にも肌を白くしたりとか眉毛を整えたりとか……色々あるんですよ。雑誌で見たんですけど」

「ふーん……」

ディアナはそう言いつつ、じーっと紅い口紅を見つめる。

「ちょっと借りるわね」

彼女はそう言って、紅い口紅を使い、鏡を見ながら自らの唇に塗

る。

すると、彼女には鏡に映る自分が、いつもとは少し違った雰囲気に見えた。

「ねえ、お化粧を覚えてくれないかしら？」

そうやって自らの大きな胸を強調しながら、淫魔達に尋ねた。

「報酬は……分かってるでしょ？」

くすり、と笑ったディアナに淫魔達は躊躇なく、承諾したのであった。

地獄の才女（前書き）

祝ッ

3週間連続更新ッ

微工口あり。

後書きに調子に乗った作者からのお知らせアリ。

地獄の才女

「はあい」

アシユレイは元気良く声を掛けた。

掛けられた側は生氣のない瞳を彼女に向ける。

「こんな洞窟にいたなんて……道理で見つからないわけね」

アシユレイはやれやれ、と肩を竦めてみせる。

ここは地獄の第一層辺獄。

アシユレイが長年探していた相手はこの辺獄の端っここにある山岳地帯の洞窟にいたのだ。

「……何の用？」

蚊の鳴くような声。

悪魔として地獄に墮とされた彼女はもう何もやる気が無かった。

ただ、この洞窟で石のように座ったまま動かさず、静かに時を過ごす。

それが彼女の余生であった。

「私はあなたを必要としている。バアル・ペオル」

その名に微かに彼女の体が動いた。

「……もう私は神ではない。人間達の信仰を失い、悪魔とされた」「ベルフェゴールと呼んだ方がよかったかしら？」

彼女はアシュレイを睨みつける。
バル・ペオルは彼女が神であったときの名前、悪魔となった今ではベルフェゴール。

「悪いけど、完全に悪魔になったのはあなただけじゃないの」

アシュレイは何故か胸を張り、不敵に笑う。

「モアブの地の女神よ。我が名はイシュタル」

ベルフェゴールの目が大きく見開かれた。

彼女もまた知っていた。

ソドムとゴモラをはじめ、広く信仰された豊穡の女神、イシュタルを。

「イシュタルが、私に何の？」

彼女は先ほどよりもハッキリとした声で問いかけた。

「あなたが欲しい」

アシュレイはそう告げ、ベルフェゴールの隣に座る。

そして、彼女はベルフェゴールの長く、茶色の髪を触り、その感触を楽しむ。

ベルフェゴールはそれを拒絶することはできなかった。

なぜならば、彼女はアシュレイの言葉を何度も反芻していたからだ。

悪魔となった彼女を求める者は今まで誰もいなかった。

誰からも求められなかった彼女はそのまま永遠に、薄暗い洞窟で時を過ごそうと決めていた。

神や悪魔とて感情が存在する。

寂しくない訳がないのだ。

孤独に押し潰されて、絶望の淵にあった彼女。

そんな彼女にストレートに欲しいなどと言ってしまったアシュレイ。

最高の口説き文句だろう。

「イシユタル……さま」

じーっとその紅い瞳でアシュレイを見つめ、呟くようにその名を呼ぶベルフェゴール。

「今の私はアシュレイ。そろそろアシユタロスになるわ。ま、好きに呼んで」

「……アシユ様」

まあいいか、とアシュレイは思い、とりあえずベルフェゴールの胸元を見る。

ディアナ程ではないがそれなりに大きい胸。

とりあえず落とせたっばいから、手を出していいよね、問題ないね。

そう心で呟き、アシュレイは言うてみた、

「ねえ、ベルフェゴール。あなた、長いことココに1人でいたんだから、他人の温もりを忘れてるんじゃないか？」

彼女の美しい顔に手をやり、耳元で囁くアシュレイ。
ベルフェゴールは背筋がぞくぞくした。
それは期待であった。

彼女は理知的な女神であったが、同時に放埒な性も司っていた。

早い話が、アシュレイと同じで好き者なのだ。

「アシュ様……あなたが、私を欲しいと言ってくださって、私……
火照ってしまいました……鎮めてください。私の体を……」

期待に染まった目で自分を見つめるベルフェゴールにアシュレイ
は実感した。

ベルフェゴールを見つけてよかった、と。

「あら、あらあらあら」

ベルフェゴールと1戦どころか、10連戦した後、彼女はベルフ
エゴールと共に加速空間へと帰還した。

そこで出迎えたディアナにアシュレイはあることに気がついた。

「ディアナ、化粧しているのね」

主にすぐに気づいてもらえ、ディアナは嬉しそうに笑みを浮かべ

る。

面白くないのはベルフェゴール。

新参者という立場など知ったことかとディアナに敵意の籠った視線を向ける。

それに気がついたディアナは鼻で笑い、その大きな胸を強調してみせる。

女として負けるわけにはいかないベルフェゴールもまたその胸を強調する。

アシュレイを無視して、女の意地を懸けた戦闘が始まるかと思いきや、そんなことなかった。

なぜならば……

「あっ」

「あんっ」

無視されたアシュレイが2人の胸をそれぞれ鷲掴みにしたからだ。しかも、無駄に凄いテクニクで揉みしだき始める。

「皆を交えたベッドの上で歓迎会をするしかないわ……」

手っ取り早く仲良くなるにはそれが一番、とアシュレイは付け加えた。

「ともあれ、ディアナ、この子がベルフェゴール。あなたが先輩なんだから、仲良くしなさい。しないと……」

言葉に出さず、念話で告げる。

1年間、抱かない、と。

「ベルフェゴールも、もつと友好的にしないと駄目。仲良くしないと……」

こっちもまたアシュレイは同じように抱かない、と念話で告げる。2人共それはとても嫌であった。

故にアシュレイが胸から手を放した後、表面的には仲良く握手する。

だが、アシュレイにそんな小芝居が通じるわけがない。

やれやれ、と溜息を吐き、彼女はとりあえずディアナを押し倒した。

自らもディアナの上に覆いかぶさり、突然のことにポカンとしているベルフェゴールに顔を向ける。

「やるから、あなたも混ざりなさい。生やせるでしょ？」

ベルフェゴールは何度も首を縦に振り、2人に近づいたのであった。

時間は進み、加速空間で数十年の月日が経過していた。

ベルフェゴールはアシュレイ主催のベッドの上での歓迎会により、

テレジア以下のメンバーともそれなりに友好的な関係を築くことに成功した。

今日はどうしようかなー、と大人形態のエシユタルの膝の上に座って考えていたアシュレイ。

そんな彼女の下にニジがやってきた。

「ベルフェゴール様、とんでもないポヨ」

開口一番、彼女はそう告げた。

基本、自分より力の強い魔族には様付けのニジ。

そんな彼女は新しく入ってきたベルフェゴールの凄さを目の当たりにしていた。

ニジが所属しているのは研究開発部門。

世界についての研究を始めとして、様々なことをやっている部門だ。

「どうかしたの？」

「下級魔族や中級魔族による人海戦術をやるポヨね？」

「うん。今、だいたい200万くらい集まったみたいよ」

「その200万の魔族達に素手で突撃させるよりも、何か武器を持たせた方がいいと彼女は言っ……」

ニジはポケットから図面を取り出した。

それをアシュレイは受け取り、思わず衝撃を受けた。

「これ、銃よね？ いいの？ ハルマゲドンに銃なんて」
「まあ、向こうも宇宙戦艦とか繰り出してきてるらしいポヨ。いいんじゃないポヨか？」

ニジの言う、宇宙戦艦とは先のアシュレイとの戦闘やこれまでの戦闘で上位悪魔に手も足も出なかった下級神族や中級神族に何とか戦力になってもらおう、と神界が投入し始めたフネだ。

そのフネはどう見てもSFアニメに出てくるような宇宙戦艦であった。

「はっはっは！ そういうのならば任せてくれたまえ！」

そんな声と共に彼は颯爽と登場した。

「助けて！ アシュエもーん！」

「ハハハ、しょうがないなあアシュレイくんは……」

エシユタルの膝から立ち上がって叫ぶアシュレイにそう答えるアシュタロス。

こんなこともあるのかと、を地で行っているアシュタロスだ。彼への期待は大きい。

「というか、いいの？ 工事ほつたらかして」

「私は休憩さ。ドグラがやってくれている」

「ならば問題ないわね」

「で、逆天号とかどうだろうか？」

アシュタロスがどこからともなく取り出した写真。それに写った巨大なカブトムシ。

「これに搭載されている断末魔砲は上級神族すら撃破できる！」

「見た目が嫌」

「ならばこつちだ！ とある世界では王族のみが使用できる聖王のゆりかご！ 月の魔力を使用すれば上級神族をも撃破できる！ オプションとして大量のガジェットというロボットがついてくる！」

「いや、それもちよつと……もうちよつと宇宙戦艦ヤマトとか機動戦艦ナデシコとかガンダムとかそういうので」

アシユレイの要望に不満そうな声を上げるアシユタロス。

「有名なのもってきてもつまらないではないか！」

「いや、聖王のゆりかごも十分有名だから」

アシユレイのツツコミを華麗にスルーして、アシユタロスは唸る。彼の天地魔界に並ぶ者無しと謳われる頭脳が冴え渡る。

「じゃ、BETAとか？」

「地球が危ないでしょ。というか、私が知っているのならまだしも、何で元々魔王のあなたが知っているのよ」

「人間の娯楽は面白いものが多いからね。じゃ、君の暗黒体と似ているキングギドラとか」

「私の方が大きいし、力も強い。私つてば最強ね！」

物凄い勢いで逸れていく話題。

しかし、ニジは2人を止める術を持たない。

それはエシユタルも同じことだ。

彼女は寂しくなった膝にしょんぼりとしつつも、アシユレイの翼を撫で始める。

「で、銃についてだけど、ま、いいんじゃないの？ どうせ効かな

いだろっけど、まあ無いよりマシにはなるんじゃないかしら」

「いや、これは中々いいぞ。弾丸は魔力を込めたものや呪いを込めたものを使用すれば天使にも効く。魔界正規軍で使っているのとは形状が違うが、コンセプトは同じ筈だ」

魔界正規軍、という単語に首を傾げるアシュレイ。

そんな彼女にアシュタロスは将来、サツちゃんが作る政府の軍隊だ、と答える。

なるほど、と頷きつつ、アシュレイは告げる。

「ニジ、ベルフェゴールには量産できるならして、と言っておいてとりあえず200万ね」

「あ、はいポヨ。失礼するポヨヨ」

ニジが部屋から辞した後、アシュレイは再びエシユタルの膝の上に収まった。

背中にあたるディアナと同じかそれ以上のけしからん胸の感触に頬を緩ませつつ。

エシユタルもまた、戻ってきたアシュレイの感触に頬を緩ませる。

アシュレイはしばらく考え込んで叫んだ。

「私も将来は大艦隊造りたい。艦隊決戦こそ戦争の華！ 航空決戦もいいけど！ 迫力は劣る！」

「だから逆天号をだな……」

「もつと戦艦らしい形にしてから言っ頂戴」

「とりあえず試験運用という形で頼む。こっちで使うからデータを取りたいんだ」

「……最初から素直にそう言えばいいのに」

「いや、ノリで……つい」

アシユレイといると、とてもはっちゃけてしまつアシユタロスであつた。

「とりあえず、午後のおやつでも食べようかしら？　あなたも食べる？」

「そつしよつ」

そのときであつた。先ほど出て行つたニジがまたやつてきたのは。

「あの、アシユ様。ベルフェゴール様に量産できるかと聞いたところ……もう量産準備ができています……」

あまりの手際の良さに思わず沈黙するアシユレイ。

「彼女は理論と実務、どちらにも長けているからな。企業でいうなら開発部長だ。私の世界の魔界でも、彼女は地獄政府の魔法科学技術省で副長官だつたぞ。ああ、確か、軍だと大佐だつたかな。参謀本部で作戦の神様と呼ばれていた筈だ」

才女だな、と最後に付け加えてアシユタロスは締めくくつた。

「……ベルフェゴールを引き入れてよかった。本当によかつた」

アシユレイはそう呟き、ベルフェゴールにご褒美としていっぱい抱いてあげようと心に決めた。

「で、闇の福音計画はどうなつたのかね？」

「ああ、あれ。中央市場覗いたけど、いい人間いなかったから今は凍結中」

「……早すぎやしないか」

「今度、暇なときに人間界で探してくるから問題ないわ」

人間から吸血鬼となる輩が出てくるのも、そう遠くはない……か
もしれなかった。

地獄の才女（後書き）

3週間連続更新で調子に乗った作者がコラボを提案してしまいました。もし、うちのキャラを使いたい方がいたらどうぞ。活動報告に詳しく書いておきますね。

ちよんならば言わない(前書き)

ちよつと加筆

さよならは言わない

ベルフェゴールを引き入れて現実時間でおよそ2000年が経過していた。

相も変わらず、飽きることなく神族と魔族はドンパチを繰り広げ、その間、地球の人類はヤツさんへの信仰を広め、異教の神を悪魔と断じていく。

ある程度広まったところで、地理的な理由からその広がりを止めた。

さすがに全世界へと広まるにはこの時代の交通手段では荷が重すぎた。

そして、地獄ではアシュレイの城も完成し、彼女は加速空間から城へとその拠点を移すことになった。

余りにも絢爛豪華であることから観光名所として上位魔族達の間で有名になったのは誤算であった。

しかし、しつかりと見物料や土産を買わせるアシュレイは転んでもタダでは起きなかった。

ただ、悲しいこともあった。

アシユタロスがアシュレイの家庭教師の役目を終えてしまい、元の世界に帰らなければならなくなったのだ。

既にアシュレイとアシユタロスの世界は一応は関連性が失われていることから、戻ってしまえば再び来ることや、連絡を取ることが極めて困難。

連絡一つするにしても、異世界への干渉となるので神魔の最高指導者に許可を取らねばならないし、準備時間も多く必要となる。

なお、逆天号はアシユタロスが改良版を元の世界で造るとのこと

で、こつちの世界にそのまま置いていつてしまった。

ともあれ、城の建設開始段階で僅かな時間しか彼には猶予がなかった。そこから更に1000年も粘った彼を責めることはできなかった。

そして、アシュレイは火星の異世界にいた。

「懐かしい……」

彼女は思い返す。

初めて火星に降り立ち、アシュタロスとかき氷を食べたときを。コスモプロセッサを使い、世界を創造しながら雑談したことを。

「感傷に浸ってる場合じゃないわね。私もやることが多いから、さつさと済ませないと」

アシュレイは気分を切り替えて、アシュタロスから譲り受けた鍵をコスモプロセッサに挿し込む。

この鍵を挿し込み、そして魔力を流して起動となる。

無論、魔力には認証機能があり、アシュタロスから譲り受けた時点でアシュレイのものしか受け付けられないようになっていた。

「コスモプロセッサをいつまでもこんな洞窟に置いておくわけにはいかないし……」

火星極冠にあったこれも、異界の中に当然取り込まれた。

とりあえず、とコスモプロセスサを洞窟に移動させ、その上から十重二十重の結界を張ってあったのだ。

今回、アシュレイがやってきたのはコスモプロセスサの守護者を作るため。

彼女は鍵盤を叩き、創造する。

エルフ、獣人他様々な種族がいる中で、唯一作っていないかった人間を守護者にチョイスする。

もし既存の種族にすれば摩擦が生まれ、対立が起きてしまう可能性があるからだ。

「はい、完了と」

そう告げた彼女。

その横には小柄な少女が裸で立っていた。

彼女はアシュレイを認識すると、ゆっくりと跪いた。

既に創造段階で必要となる知識を全て頭に入れてあり、説明する必要はない。

少女の姿で創ったのはそうした方が侵入者が油断するからであった。

「あなたの名は……そうね、アマテルよ。空でこれを守護しなさい」

「はい……アシュ様」

「ちなみに天照大御神って神がいるけど、そこから取ってるから。

天空にいるんだから、ちょうどいいもの」

アマテルは何も言わない。

もし、有難き幸せとでも言おうものなら悪魔であるアシュレイにとって皮肉となってしまふからだ。

「さて、あなたの国を創る前に……あなたを頂こう」
「存分にご堪能くださいませ」

何年経っても、やはりアシュレイはアシュレイであった。
彼女はその後、アマテルの国を創り、コスモプロセスを設置する為の場所を創り、帰還した。

「アシュ様！ ご報告します！」

帰還したアシュレイを待ち構えていたのはベアトリクス。
彼女は何だか晴れ晴れとした表情だ。

我が世の春がきた、と言わんばかりの。

ベアトリクスは冥王星付近で軍団を率いて神族と戦っていたのだが……その表情からアシュレイは勝利を容易に察することができた。

この戦闘はアシュレイの軍団のみが参加した戦闘。
つまり、単独で神族の軍勢を撃破する、というアシュレイにとってもベアトリクスにとっても夢であったことがようやく叶ったのだ。

「どうかしたの？ ベアトリクス」

「先の戦闘において神族に対して我が軍は大打撃を与えました！」

アシユレイは思わぬ戦果報告に万歳してしまった。
ベアトリクスもつられて万歳。

そんな感じで万歳三唱した後、アシユレイは興奮気味に彼女に問いかける。

「どんな感じだったの？」

「上級神族を含む、およそ20万に対し、我が軍は4個軍団、200万を投入し、敵軍を殲滅しました！」

「今日は勝利記念パーティーよ！」

再び万歳するアシユレイにベアトリクスは若干声のトーンを落とすように告げる。

「ちなみに被害は80万です」

「あーあーきこえない。補充なんぞ幾らでもいるから問題ないわ」
スキップし始めたアシユレイに更に朗報が舞い込んできた。

「アシユ様！」

興奮気味にやってきたシルヴィア。

彼女は太陽系の外で軍団を率いて戦っていた。

「我が軍は上級神族を多数含むおよそ50万の敵軍を殲滅しました！」

「ああもうシルヴィア大好きiiiiiiii！」

シルヴィアの大きな胸に抱きついて顔を埋めるアシユレイ。
そんな彼女を優しく抱きしめ、シルヴィアは続けて言った。

「なお、投入した6個軍団300万のうち、戦死者はおよそ250万です」

「聞こえない聞こえない。代わりなんぞいくらでもいる。赤紙だけで兵力なんぞ簡単に集まるわ」

そう言つて、アシュレイはシルヴィアの下半身へと手を伸ばしつ、ベアトリクスに尋ねた。

「ところで予備兵力は？」

「1200万です」

「軍団に所属していないわよね？」

「勿論です」

「なら問題ないわ。あと、今回の戦で活躍した連中に勲章でも与えておきなさい」

「はい、アシュ様。それとヘルマンですが……まだしぶとく生きてます」

アシュレイの手が止まった。

シルヴィアはもう少して大事なところに当たりそうなアシュレイの手を名残惜しそうに見た。

「……彼、もう上級魔族クラスよね？ 何か凄いレベルアップしてると思っただけども」

「はい、アシュ様。この間の魔力診断では中級魔族の枠から既に飛び出しています」

「確か、彼は私の軍に入って以降は伯爵を名乗っていなかったよね？」

「はい。一兵卒として功績を認めて、アシュ様に爵位を頂きたい、と……当時は見上げた忠誠だと感心した覚えがあります」

「なら、伯爵を彼に授けるわ。もう十分活躍したし、しばらく彼は

休暇よ」

「では、そのように……あの、アシュ様……私も……」

最後の最後でおねだりするベアトリクス。

アシュレイは勿論、異論などなく。

「久しぶりに3人でやりましょうか……！」

シルヴィアとベアトリクスとその場で致した後、アシュレイは自室に戻っていた。

彼女を部屋で出迎えたのはリスとリリム。

加速空間での時間も考えれば既に億単位の年月を共に過ごしていた。

言うまでもないが、アシュレイを含め、年齢について触れるとハルマゲドンよりも恐ろしい事態になる。

アシュレイはいつもの黒いワンピース姿のまま、ベッドの上に仰向けになった。

そんな彼女に集る淫魔2匹。

アシュレイは与えられる快楽に心地良さを感じつつ、これからどうしたもんか、と考える。

軍団の強化についてはひとまず置いておくとして……問題は闇の福音計画だ。

2000年前から凍結されていたこの計画はアシュレイが人間界に行つて人間を探すのが面倒くさいという理由でずっと凍結されたまま。

無論、ソドムとゴモラの末裔に関しては探させているが、やはり眷属にする者は自らの手で探さなければならなかった。

そして、ソドムとゴモラの末裔探しも、目印なんぞないことから大海にいるメダカを探すよりももっと難しいものとなっている。

何よりも、搜索にあたっている魔族は戦場に出されないことから、搜索班がサボっていたことまで発覚していた。

「んっ……まあ、アレができればそういうのも解決する……」

アシュレイが呟くが、リリスもリリムもそれに何かを言うということはない。

彼女達は今、アシュレイの体を味わうので夢中であった。

「とりあえず、エナベラの子孫だけでも……探したいわ……」

闇の福音計画と同時進行でエナベラの子孫を探そう、と決意する彼女。

一通り、考えが纏まった彼女はゆっくりと瞼を閉じた。

「すまない、アシュレイ」

その言葉は唐突であった。

アシュレイの城の落成記念パーティーにて、アシュタロスはテラスに呼び出し、彼女に謝った。

「どうかしたの？ 浮かない顔で」

ワイングラス片手に尋ねてきた彼女に対し、彼は告げた。

「私はそろそろ元の世界に戻らねばならない」

「え……？」

アシュレイはその言葉を理解できなかった。

会った当初は先生、今ではいなくてはならない存在。

そんな彼の別れの言葉を、彼女は理解できなかった。

「だって、家庭教師の期間はまだ残っているのでしょうか！？ 最後なんてマトモに教えてもらってないじゃない！」

「だが、それらは既に済んでいる筈だ。前にも言ったように、君はもはや私と同じかそれ以上だと」

「でも、オーバーしても落成まで頑張ってくれたじゃないの！」

「逆さ。そこまで私は粘ったのだよ。そろそろ戻らねば私は世界により強制的に戻されてしまう。今、向こうでの私は魂の牢獄による

復活の為に一時的に死んでいる状態だ」

「ならばなぜ、様々な資料や逆天号なんかを持ってこれたの？」

「裏技があつてね。魂そのものに仕込んでおいたのさ」

そして、彼は懐から3つの瓶を取り出した。

それに入っている淡く発光しているモノ。

「靈基構造？ 誰の？」

「私が向こうで創った3人の使い魔、もはや娘と言ってもいい……
ルシオラ、ベスパ、パピリオのものだ」

彼は瓶をアシュレイに手渡した。

受け取った彼女は首を傾げている。

「アシュタロスとは過去と未来を見通す者でもある。君は勿論、私もまた未来が視える。夢という形でな。未来を見たい、と思えば見れるもので、滅多に使わないが、久々に昨日使ってしまったよ」

そこでアシュタロスは語った。

自らが辿るだろう未来を。

そして、1人の少年と自らの娘ともいえる使い魔の悲劇の別れを。

彼は自分が死んだ後、アシュレイにその娘を蘇らせて欲しい、と頼んだ。

計画ではコスモプロセッサにより、一時的に彼女が全ての次元で唯一のアシュタロスとなり、彼の世界ともまた繋がる。

そして、彼の世界とアシュレイの世界は無理矢理平行世界とされる。

それは一時的なものではない。

世界システムの改変……すなわち、世界の中身を弄るのではなく、

世界同士の共通点を見つけつつつけるだけなので、世界による修正力も働かない。

そして、平行世界であれば自由に行き来できるのが魔神や魔王であつた。

「私は解放される。唯一の心残りは君の行く末を見れなかったこと。君の未来はまだ見えない。おそらく、ここが異世界であるからだろう」

アシユレイはワイングラスを取り落としてしまった。
割れる音がどこか遠くに聞こえる。

「嫌よ！ 嫌！ 絶対嫌！ やっぱりあなたの自殺はおかしい！」
アシユレイは恥も外聞もなく、アシユタロスの胸に顔を埋め、手で彼の体を叩いた。

そんな彼女に彼は苦笑し、その頭に手を乗せ、ゆっくりと撫でる。
そういえばこういう風にしたことはこれが初めてだな、と彼は気づいた。

そして、自分の娘にはこうしてあげよう、と心に決めた。

「有史以前に神として崇拜され、いつしか悪魔となり、ずっと守るべき存在である人間と敵対し続け、人間に貶され……」

彼はそう言いつつも、撫でる手を止めない。

「そろそろ、私を休ませてはくれないか？」

彼の問いかけに彼女は彼の胸から顔を上げた。
その目にいつぱいの涙を溜めて。

「それではあなたが救われたい！」

「仕方ないとき。君も知っている通り、光の者が闇に落ちることはあるが、その反対は無い」

「それなら私と共にいればいい！ あなたが余計なことを考えないくらいにこき使ってあげる！」

その言葉にアシュタロスは驚いたように目を丸くし、ついで穏やかな笑みを浮かべた。

「それは確かに嬉しい。君がそんなことを言うなんて……だが、先に言った通り、私は一時的に死んだ状態だ。これ以上、長引いてしまつと世界により強制的に蘇生されてしまつ」

「強制的に蘇生されると……どうなるの？」

アシュレイとしても分かっていた。

だが、それでも彼女は問いかけた。

「私はずっと暗闇の世界にいたという風にされる。つまり、君と過ごした記憶が消されてしまつ」

「コスモプロセスなら……！」

一縷の望みをかけ、彼女は問いかけた。

だが、彼は首を横に振る。

「君も知っているだろう？ システムそのものに手を加えることはできない、と。私をこちらの世界の存在にすることは世界を

直接改変するということになる。こちらの世界も私の世界も、それを容認しないだろう……必ず失敗する」

彼の言葉にアシュレイは泣きじゃくった。

いつもの妙に自信に満ちた彼女の姿は泣く、まるで子供のように。そんな彼女を見て、アシュタロスは自分も変わったな、と今更ながらに感じた。

かつての彼ならばこのような態度は取らなかっただろう。

だが、今では寂しさや不安を感じている。

自分がいなくても、アシュレイはうまくやっていけるだろうか、という不安。

そして、彼は気がついた。

「まるで親子だな……」

言葉に出し、彼は苦笑した。

彼女は相変わらず大声で泣いている。

幸いにも結界を張ってあるので、その声は洩れないし、他の者からは姿さえ見えないだろう。

アシュタロスは屈み、アシュレイと同じ視線となり、彼女の両肩を掴み、自らの目を見させる。

彼女の声が止まり、涙だけがただ流れている。

「アシュレイ、君はよく頑張った。胸を張れ。君は私の自慢の……」

アシュタロスは僅かな躊躇の後、告げた。

「生徒であり、娘だ」

彼はアシュレイの小柄な体を抱きしめた。

「あしゅ、たる……す……」

ひつくひつくとしゃくりあげながら、彼の背中に手を回す。

「お、おとうさんみたいだった。なんか、へんだけど……おとうさんみたいだった」

その言葉に彼は目を閉じ、優しく告げた。

「……そうか……ありがとう……！」

それから数分、2人は抱きしめ合っていたが、やがてゆっくりと離れた。

アシュレイはゴシゴシと服の裾で涙を拭った。
いつも紅い瞳がより紅いのは気のせいではない。

彼女はアシュタロスをまっすぐに見据えた。

「アシュタロス」

「何かね？」

「絶対にまた会いましょう」

アシユタロスは微笑んだ。

「ああ、今度は普通の人間か、弱い魔族として君の下でこき使われるのも悪くないな」

「給料は出さないから安心して」

「……安心できないな、それは」

そして2人は笑い合う。

「それでは行ってくるよ。ちょっと世界に戦いを挑んでくる」

「ええ、いつてらっしゃい。私はあなたを超えてるけど、もっと凄くなる。私の魔力だけで、世界を改変できるくらいに」

「造物主にでもなるつもりかね？」

「限定的に、修正力が働かない程度に改変するだけだから問題ないわ」

「そこは造物主になる、と言うところではないかね？」

「嫌よ。魔王っていう肩書きの方がカッコイイもの」

アシユタロスはくつくつと笑い、彼女に背を向けた。

アシユレイが見たその背中は大きかった。

「ではな。また会おう」

「ええ、またね、アシユタロス」

そして、アシユタロスはこの世界から消えた。

「アシュ様……！ アシュ様！」

その声にゆっくりと瞼を開ければリリスとリリムの心配そうな顔が飛び込んできた。

「どうかしたの？」

ゆっくりとアシュレイは体を起こす。

「涙が……」

リリムの言葉にアシュレイは涙が頬を伝っている事に気がついた。

「何か、嫌な夢でも見たの……？」

リリスの気遣いにアシュレイは首を横に振る。

「とても、楽しい夢だったわ」

アシュタロスが元の世界に帰ったとしかアシュレイはテレジア達に伝えていない。

リリスとリリムは主人の言葉に首を傾げたものの、何だかアシュレイが元気一杯なので気にしないことにしたのであった。

とある天使の墮天理由（前書き）

独自設定あり。

BASTARD準拠とか言っておきながら、あの天使が……

独自路線注意。

とある天使の墮天理由

ヘルマンは歓喜に震えていた。

つい先程、彼の下に届いたアシュレイからの叙任状。

戦争中ということもあり、とりあえず書面で、とテレジアが告げ、彼に渡していた。

そこには彼を伯爵とする旨が書かれていた。

さて、地獄政府についているアシュレイは大公爵。

その彼女は政府の要職にこそついていないが、叙任権を持っている。

すなわち、これによりヘルマンは地獄政府公認の伯爵となった。

「ああ、やっとだ。数千年掛けてやっと伯爵になれた」

ぐつと拳を握り締め、喜びをゆっくりと噛み締める。

「私も、随分強くなったものだ……」

自分で言うのもアレだが、彼は本当に強くなった。

最近のベアトリクスとのシゴキではどうにか10分保つようになっ
てきたのだ。

瞬殺されていた当初から比べれば大幅な進歩。

「だが、休暇というのはいささか頂けない。まだ、主であるアシュ
様と共に戦場を駆けていない」

意見具申をしても殺されはしないだろう、と彼はアシュレイの執務室へと向かった。

アシュレイは執務室で考え事をしていた。

すなわち、神族との戦争で使う兵器はどんなものかいいか、だ。

ガンダムを持ってきても、光速で移動できる上位神族には太刀打ちできない。

ならば、どうにか対抗できるものを作り出すしかなかった。

「やっぱりイデオンか、イデオンなのか……」

自分と同等の、馬鹿みたいな力を持つ主神クラスに対抗するには馬鹿みたいなものをぶつけるしかない。

うつむ、と悩んだところで彼女は閃いた。

「究極の魔体を量産すればいいのよ！」

資源はある。資金もある。労働力もある。

ならば、やらない手はない。

「確か、主神クラスを撃破する為に作ったって言うってたし……」

そう呟きつつ、彼女は柵に置いてある資料を漁り、目的のものを見つけ出す。

彼女は机の上にそれを広げ、さらっと流し読みしていく。

「移動速度がネックね。まあ、移動できる砲台と考えればいけなくもないか」

要は数を揃えて面で制圧すればいいのだ。
たとえ光速で動けたとしても、隙間なく降り注ぐ砲弾を全て避けることはできない。

1 発当たれば物理法則に従い、ほんの僅かに動きが止まる。
そこに追撃を加えればいいのだ。

「早速ベルフェゴールに造らせましょう」

ああ、部下に押し付けるって気持ちいい！

そんな気分でアシュレイはベルフェゴールに念話を送り、一緒に資料を彼女の下へ転移させた。

そのとき、ドアがノックされた。

アシュレイが許可を出せば、入ってきたのはヘルマン。
彼は帽子を取り、一礼する。

「アシュ様、実はお願いがあつて参上いたしました」

「ん？ 伯爵より勲章の方がよかった？」

「いえ、伯爵の件は実に有り難く存じます」

「じゃあ、何？」

「実はあなた様と共に戦場を駆けたい、と」

アシュレイはその言葉になるほど、と頷いた。

彼女は自分の部下と共に戦場で戦ったことはない。

というよりか、彼女が戦つと弱い連中が余波で消し飛んでしまう。

「そうね……あなたも強くなったし、今から暇だし、ちよつと2人でそこの神族をボコしてきましようか」

「は……?」

思わず、ヘルマンは目を丸くした。

2人でつて、さすがにそれは危険なのは、と彼は言いたかった。だが、よくよく考えれば自分の主を倒せるような主神が出てきたら、こちらからも魔神や魔王がすぐに出てくる。

ならば、別に問題はなかった。

「アペプに今、念話で連絡したら許可を貰えたわ。それじゃ行きましようか。ついでだから海王星を見に行きましようか」

そんなわけで海王星見物も兼ねて神族をボコすことになった。

「宇宙に浮かぶブルーダイヤモンドみたいで綺麗ねー」

「はい、実に綺麗です」

宇宙空間なのに言葉が通じる2人。

魔族や神族はその声を空気の振動によって伝えるのではなく、自らの発する魔力を揺らして声を伝え合っているからだ。

「そういえば海王星の最大風速は2000kmなんですって。表面温度はマイナス218度でとても涼しそうね」

「そうですね……我々魔族にとってはリゾート地には持ってこいかもしれません」

「それに海王星の奥深くにはダイヤモンドがあるって聞いたことがあるわ」

「……リゾート地兼採掘場を作りますか？」

「作らない理由はないわ。夏の避暑地には持ってこいの場所。ただ、風速がちよっとアレだから、スカートが常時捲れちゃうわね……もうちよっと落とさせるか」

するとアシュレイは自らの手元に魔法陣を描いた。

そして、それを海王星目がけて放り投げた。

魔法陣はぐんぐん大きくなり、やがて海王星そのものを覆った。

「風よおさまれ」

彼女がちよっと気合を込めて、念じればそれは結果として現れる。自然現象すらもねじ曲げてしまっ、それこそが魔族にとっての魔法。

ヘルマンは敵である神族が神霊力を使い、奇跡を起こしたのは目の当たりにしている。

だが、自分の主が魔法を使っているところを見たのはこれが初めてだ。

基本、神族の奇跡も魔族の魔法も同じものであり、呼び方が違うだけだが……魔王クラスのアシュレイの魔法はまさに圧巻であった。

「さすがはアシュ様です」

心からの賛辞を彼は述べた。

「ま、これくらい軽い軽い。さて、そろそろ来るころかしら」

彼女はそう呟き、後ろを振り返った。

ヘルマンも同じように後ろを向く。

待っていたかのように空間が避け、神々しい光と共に彼らはやってきた。

「正義！ 正義！ 神ノ正義ヲオオオオ！」

逝っちゃった目をした天使達がわらわらと湧き出してきた。

「大天使と天使……雑魚ですな」

「マトモな頭を持ってないのよね。大天使の中で上位になるとマトモになるんだけど……」

「ただの哨戒部隊でしょう」

「まあ、軽くやりましょうか」

2人に向かってくる天使の軍勢。

その数400体ほど。

人間であれば絶望的な戦いを強いられるレベルだが、アシュレイにとっては蟻を踏み潰すのと対して変わりはない。

アシュレイは腕を振るう。

巻き起こる衝撃波。

それは容赦なく天使に襲いかかり、先頭にいた数十体の天使達が永久原子ごと輪切りとなった。

「お見事。では、私も」

彼は拳を前に突き出した。

光の速さで……というようなレベルではさすがにないが、それでも結構な速さで数体の天使を撃ちぬいた。

撃ちぬかれた天使は粒子となって消えていく。

「悪魔パンチ？ だっ たっ け？」

「よくご存知で」

「ベアトリクスがネーミングセンスないって言った」

鋭い一撃にヘルマンは崩れ落ちそうになった。

思わぬ伏兵だが、彼はへこたれない。

「私も何か技開発しようかなー」

ヘルマンの悪魔パンチを真似てアシュレイが拳を前に突き出した。彼のパンチによって出るのが魔力の弾丸なら、アシュレイのそれはもはや巨大なレーザー砲であった。

残っていた天使達を一瞬で全て包みこみ、光が消えた後には塵一つ残っていないかった。

「強すぎるのも問題ですな……」

ヘルマンは呆れた顔で告げた。

「まあね。私とタメ張れるのは主神クラスだし」

「さすがはアシュ様」

もはやヘルマンは強さの次元が違い過ぎてそう言うしかなかった。主神クラスとは言うまでもなく、それぞれの神話に出てくる神々のことだ。

つまり、将来的には人間達の中で話題となるような有名どころとガチンコバトルができちゃうレベルなのであった。

「む」

ヘルマンは感じ取った。

先ほどとは比較にならない程の強大な力を。今の自分を以てしても、一筋縄ではいかないことを直感した。しかし、その力の持ち主をアシュレイは知っていた。

「あー、来たわね。金髪褐色翠眼巨乳娘」

「……えらい具体的ですな」

「一応、知り合いだもの」

「はあ……アシュ様も意外と謎な方ですなあ……」

「女は秘密があればあるほどいいって誰かが言ってた」

そんな雑談をしている間に、彼女はやってきた。

先ほどの天使が降臨したときよりも神々しい光。

周囲に溢れる神聖な気。

3対6枚の白翼を持ち、腰に神剣を吊り。
その凜々しい眼差しは2人の魔族をじっと見つめていた。

「み、ミカエル!？」

思わぬ大物にヘルマンが動揺する。

さしもの彼も、開戦以降、数多の魔族を屠っているミカエルの登場に驚かないわけがなかった。

そんな彼とは裏腹にアシュレイは親しげに手を上げる。

「やあ、久しぶりね」

「……ああ、久しぶりだな。魔神アシュタロス……そう呼べばよかったかな？」

「あら、覚えていてくれたのね」

わーい、と喜ぶアシュレイにヘルマンはミカエルとアシュレイへ視線を交互にやる。

彼にはどんな繋がりがあるのか、さっぱりわからなかった。

「アシュタロスの名は一応広めてある。ちなみに私は今日が有給休暇明けの初出勤だ」

「……何年休んでるのよ」

ジト目で見つめるアシュレイにミカエルはふっと笑う。

「溜まりに溜まっていたものを消化したまでだ。ついでに何故かガブリエルも休んだせいで、ウリエルが怒髪天を衝く勢いであったのだが、まあそこはいい」

「ウリエルって男？」

「男だ。真面目で妹思いのな」

「妹について詳しく」

「アムラエル……と言ったかな。力天使だ」

「神界に行って天使全部お持ち帰りしていい？」

「駄目だ。というか、あなたは性格が若干変わっていないか？ 前に会ったときはもつところ、真面目というか凛々しいというか、そういう感じであったのだが」

「ああ、それはソドムとゴモラに関してのみよ。こっちが普段の私」
なるほど、と頷くミカエル。

話が途切れたのを見計らい、ヘルマンは恐る恐る口を開いた。

「アシュ様、いったいどういう関係なのですか？」

「ソドムとゴモラを焼き払った張本人よ」

瞬間、ヘルマンは魔力を全身に漲らせ、戦闘体勢を取る。

彼もまたアシュレイがソドムとゴモラをどれだけ大切にしていたかを知っていた。

例え勝てずとも、主の仇であるミカエルに一矢報いねばならなかった。

しかし、その決意はアシュレイによって止められることになった。

「落ち着きなさい。一応、和解しているから」

アシュレイの言葉にヘルマンはミカエルを睨みつつも、戦闘体勢を解いた。

それを見、ミカエルは感心したように告げた。

「良い部下を持っているのだな。羨ましい限りだ」

「あなたの部下はもうちょっとお勉強した方がいいんじゃないの？」

「……まあ、天使も様々なのでな。一応、私は大天使の長だが、大天使の中でマトモに会話ができるのは半分程度だ」

「そっちも大変なのね」

「ああ……特に好色な神が……ああ、ゼウスじゃないぞ。それ以外にもいてな……私を事あるごとに呼び出してはセクハラをしてきて……休暇中だというのに全く……」

「その神の名前、教えなさいよ。私が潰してあげる」

アシユレイでも、他人の部下に手を出してはいない。

将来的に出す可能性はあるが、ともあれ、それでもそれなりに雰囲気とかを考える。

ミカエルはアシユレイに対して告げる。

「牧羊神パーンというクソジジイ……失礼。ともあれ、そういう名だ」

「了解したわ。戦場に出してくれれば殺る」

そんな物騒な会話にヘルマンはおずおずと口を出した。

「一応、敵同士なのだが……それは利敵行為にあたるのでは？」

そんな彼にミカエルは答えた。

「無能な味方は有能な敵よりも恐ろしい。こっちで処理できないからな」

「……そちらも大変なのだな」

思わず同情してしまうヘルマンであった。

「魔族のように力こそ正義。強いものが偉い、というシンプルな構造ではなく、面倒くさい政争とかがあってな……」

長い溜息を吐くミカエル。

そんな彼女にアシュレイは提案してみる。

「ねえ、私んところにこない？ あなたみたいな可愛い子だったら大歓迎なのだけでも」

ミカエルはまじまじとアシュレイの顔を見つめた。

「……堂々と熾天使に墮天を勧める魔神なんぞ、初めて見たぞ」

「だって、ミカエル欲しいんだもんー」

「いや、それは嬉しいが、私が抜けたら……」

抜けたらどうなるだろう、と彼女は考えた。

彼女にもルシフェルから、あの計画について聞いている。

しばらく考えさせて欲しい、と保留にしているが……

ミカエルは思考する。

メリットとしては煩わしい政争や口うるさい他の神々、セクハラに振り回されなくなる。

デメリットとしては墮天したことで主の加護を失い、神界の戦力がちょっとだけ低下する。

精神衛生上から考えるとメリットの方が大きい……

今まで散々色々我慢したのだから、もういい加減自由にしてもいいだろう。

主には悪いが、そもそも主も「自分のやりたいようにやったらえ

えでー」と常日頃から言っていたではないか。
ガブリエル達には悪いが、他に問題はない。

「後継者を作っておけば問題ないか……」

「そうよ。後継者がいればいいのよ。あ、でもその白い翼が黒く染まるのはちょっと勿体無いわ」

「まあ、そこはしょうがないな。ところで待遇は？」

「仕事は軍団の指揮くらい。衣食住付き。給料欲しいならあげるし、事務仕事がいいならそっちに回す……まあ、かなり自由よ」

「天国に思えてきたな。神界も事務と現場に分かれているが、偉くなるどつちもやらないといけなくて……」

「ちなみに休みたいときに休んでいいわよ？ 今日仕事めんどくせーって思ったら、私に直接連絡すれば休んでいいもの」

「墮天する。絶対する。もう少し待ってくれ。後継者を速攻で育てる」

「天使の制度は知らないのだけど、あなたが墮天したら熾天使としてのミカエルはどうなるの？」

「ああ、その点は問題ない。ミカエルも一種の役職名なのだ。私の本当の名は別にあつてな。後継者にミカエルを継がせればいい。ああ、ようやく私ものんびりとした生活を送ることができるのか……」

「……そんなに労働条件悪いの？」

アシュレイの問いにミカエルは頷いた。

そして、彼女は語りだした。

その酷さを。

「天使は主の召使に過ぎない。それはまだいい。主は尊い御方だ。だが、我々は同時に神界における全ての神に使いつつ走りにさせられ

る。なぜなら、我々天使が最も数が多いからだ」

「有給休暇とかあるんじゃない。あなた、取ったでしょ？」

「数百万年程、休みなく働き、力をつけて熾天使となってようやく有給休暇が取れるようになるのがいいのならばな」

さすがのアシュレイも黙ってしまった。

そして、ヘルマンは労働条件の悪さに頭を抱えてしまった。

彼がアシュレイの軍に入った当初でも、毎日8時間労働であった。

「おまけに肉体的疲労もなく、食事もいらさないから、休み時間すらないのだぞ？ 毎日24時間全て働きつばなしだ」

「給料がいいとかそういうオチが……」

アシュレイの言葉にミカエルは自嘲的な笑みを浮かべた。

「私の給料ではとてもではないが、何もすることができない」

そういう彼女にアシュレイは具体的に聞いてみた。

そして、聞かなければよかった、と後悔した。

現代日本の通貨に換算して、ミカエルの手取りは3万円。

それも寿命の無い種族であるから年俸制。そう、1年で3万円だ。何もできないから、働くしかない。

数百万年働いてようやく数千万円貯まるのだ。

「神界も予算があつてな。一番数が多く、使い捨てにできる我々天使の給料にしわ寄せがきている」

他にも、とミカエルは語る。

自分よりも力が弱いのにやたらとプライドが高い神の機嫌をとら

ないといけないとか、セクハラしてくる神がいたりとか、機嫌が悪いからと気晴らしに攻撃してくる神がいるとか。

「神々にレイプされたりとかは……?」

「それはまだない。だが、危なかったことは何度も」

「アシュレイはあなたを必要としている。いくらでも好きなだけ給料を払おう! だから、是非来てください」

ペこり、と彼女はミカエルに頭を下げた。

それを見て、ミカエルは思う。

彼女ならきつとストレスのない生活を送れそうだ、と。

そして、彼女はルシフェル様の計画にも乗ろう、と決めたのであった。

アシュレイはとんでもない偉業を達成しつつあるのだが、それはまだヘルマンしか知らない。

彼はさりげなく歴史の転換点を目撃した重要な証人となった。

その後、地獄に帰還したヘルマンは同僚にこう言って回った。

アシュ様は偉大な御方だ。ついていけば絶対に間違いはない、と。

加速する物語（前書き）

タイトル通り、加速しています。
展開早し。
微工口あり。

加速する物語

海王星見物兼ミカエルに墮天を勧めたアシュレイは地獄に戻ってきていた。

しばらくくつろいでいた彼女であるが、あることを思い出し、ベルフェゴールを執務室に呼んだ。

そして、彼女は告げた。

「究極の魔体の弱点は移動速度と接近戦に弱いことなの」

アシュレイの言葉にベルフェゴールは頷く。

彼女も設計図を見た段階でそれは分かった。

「で、移動速度は単なる砲台として使う予定だからいいとして、問題は接近戦に弱いこと」

「専用の護衛を？」

「それがいいと思う。けど、あなたは究極の魔体に掛かり切りになると思うから、護衛の方は私が全部やろうかなと」

「それは助かります。私としても次元転移シールドをどうやって再現しようか、悩んでいたところですよ」

「あ、それはオミットしちゃっていいわよ？ 数が欲しいから量産性を上げないと」

「純粋な装甲と防御結界のみでよろしいですか？」

ベルフェゴールの問いにアシュレイは頷き、言葉を紡ぐ。

「操作に関してだけど、逆天号にコントロールルームを置いて、そ

「これから全ての個体を操作しようと思う。そうすれば煩雑にならずに済むし」

「そうですね。ですが、一応、逆天号無しでも個体ごとに操作できるようにしておきます」

「そうして頂戴。あとコントロールを奪われたときの為に別系統で自爆装置を」

「了解しました」

うんうん、とアシュレイは頷き、不敵な笑みをその顔に浮かべた。

「久しぶりで腕が鳴るわ……マトモに何か造るのはこれが初めてだけれども」

「アシュ様と一緒にの空間で作業できるなんて……体が疼きます……」

そんなことを言いながら、2人は加速空間に入ったのであった。

そして、およそ1000年の時が経過した。

「ふふふふ」

怪しく笑う茶髪の女性。

白衣姿が妙に似合う彼女はベルフェゴール。

彼女は眼下に広がる巨大なスペースにご満悦だ。

そこには究極の魔体と呼ばれたモノが、無数に並んでいた。

必要なものを集め、試行錯誤し、試作機を作り上げ……ようやく
量産にこぎつけた。

ここまで掛かった時間、現実時間でおよそ1000年。

試作機を造るまでは加速空間で行えたので大幅な時間の短縮が可能であったのだが、そこからが大変であった。

生産ラインは2000年程で一応立ち上げたものの、何分、大きい・
複雑・危険という量産性を下げるものが三拍子揃っているので思う

ように生産は進まない。

事故が起きるなんぞ日常茶飯事で、出てくる問題を全て解決するのに700年という時間を費やしていた。

そして、この1000年で戦況は神族側に傾いている。

とある熾天使がまるで誰かにアピールするかの如く、鬼神の如き強さで上級魔族を蹴ちらしまくった為だ。

そのおかげで彼女はそれなりに待遇改善されたものの、強い女を征服したいとかそういう欲望に駆られた神々からのアプローチが酷くなる一方であった。

そして、その熾天使に軍の主力ともいえる上級魔族を潰されて、アペプをはじめとする他の魔王や魔神の軍勢はガタガタ。

唯一、アシュレイの軍団はこれまで何度も行われた戦闘で、常に膨大な損害を被っていることから、しばらく練度を上げるように、と前線に出ていなかったのが幸いした。

40個軍団、2000万余りがフル編成で残っており、予備戦力として3000万を確保している。

一応、練度の向上を図っているが、元々死ぬことを前提とした鉄砲玉であるのでそこまで重要視されていない。

その合計5000万の鉄砲玉に女性型魔族が1人もいないことが、アシュレイの性格を如実にあらわしていた。

また、41番目の、史実のアシュタロスには存在しない軍団もまた存在した。

死ぬことが確実の戦闘を乗り越え、レベルアップしたことで上級魔族となった者のみで構成された軍団だ。

その軍団の構成員は熾天使よりやや劣るか同等であり、アシュレ

イの虎の子の軍団であった。

ともあれ、アシュレイはそっくりそのまま自分の軍団を残していることから、地獄政府での発言力も結構上がっていた。

ただ、一部の口さがない魔神達からは軍を出さず、彼女自身も1000年の間、前線に出なかつたので腰抜け呼ばわりされたりしている。

そういつた連中は無駄に声が大きいので、彼女の軍に所属していない一部の中級・下級魔族達からも「実は大したことないんじゃない？」という疑惑がかけられていた。

「究極の魔体だと呼びにくいから、エヴァンゲリオンでいいかしら？」

横から聞こえた声。

ベルフェゴールが視線を向ければ、目を輝かせ、並ぶ魔体を見つめるアシュレイの姿。

何体も並んでいるところを見るのは彼女も初めてだ。

「福音……ですか？」

その問いに彼女は視線をベルフェゴールへ向ける。

「駄目かしら？」

「もう少し悪魔らしいものの方が……」

「それもそうね。じゃあ、フリーダムガンダムとか」

「それもちよつと……」

度重なる駄目出しにアシュレイは可愛らしく頬を膨らませる。

ベルフェゴールは恐る恐るその膨らんだほつぺたを指で突っついてみた。

ぷしゅーとアシュレイは空気を抜く。

ベルフェゴールは抱きしめたくなった。

「じゃあ……巨神兵とか」

「むしろ、魔神兵の方がいいのでは？」

「それでいいわね……で、もう一つの方はどんな具合？」

究極の魔体改め、魔神兵とペアになって行動するもう一つの巨大人型兵鬼。

接近戦に弱いなら、接近戦に強い機種も造ればいいじゃない、というとてもシンプルな理論で、アシュレイが加速空間に数千年籠って設計・試作したモノ。

「別の格納庫にございます」

「行きましよう行きましよう」

アシュレイは我先にと転移した。

その後を慌てて追うように、ベルフェゴールもまた転移した。

「うわぁ……爽快ね」

アシユレイは眼下に広がる光景に感嘆の声を上げた。

たとえ自分で造ったものだとしても、隊列を組んだ状態で並ぶこの兵鬼を見れば彼女も感嘆せざるを得なかった。

魔神兵が大砲を背負っている為、やや不恰好な姿であるのに対し、こちらは直立不動し、その身には頑丈そうな鎧を纏っている。さながら重装歩兵だ。

「この兵鬼の名前は何と？」

いつの間にか傍にいたベルフェゴール。

その問いかけにアシユレイは答える。

「鬼神兵でいいと思うの。東洋の鬼をイメージして造りました」

ストライクガンダムとか名付けられるよりはよっぽど良かった。

「アシユ様、魔神兵は年産3000、鬼神兵は年産5000を目指します」

うむ、と満足そうに頷くアシユレイ。

そんな彼女にベルフェゴールは聞いてみた。

「ところでアシユ様。闇の福音計画はどうなりましたか？ かなり

前に寝物語として聞いたのですが……」

アシユレイはベルフェゴールの言葉に思わず手を叩いた。

「鬼神兵を造るので手一杯で忘れてた。思い出させてくれて感謝」

闇の福音計画を思い出したのと同時にアシユレイはエナベラ子孫の搜索もまた思い出した。

一応、そちらの搜索は忠誠心のあるヘルマンを筆頭に使える少数の魔族でもって、行われている。

だが、やはり進捗状況は芳しくない。

エナベラのデータなんぞ存在しないので、問答無用で探し出す例のアレを使うしかなかった。

「ま、おいおいやってくわ」

魔族に寿命など無いので、別に5000年くらい遅れても、何も問題はなかった。

ただ、アシユレイはあることを忘れていた。

搜索しているエナベラの子孫は人間。

途中でその血筋が途絶えてしまうかもしれない、ということ。

もつとも……これから数時間後に起こる、神界での出来事が、彼

女を2つの意味で狂喜乱舞させることになった。

「ミカエルよ。そろそろどうだ？　ワシと一夜を共にせんか？」

下半身が四足獣、上半身が人間、その頭にはヤギのような角。

牧羊神パーンだ。

ここは神界の片隅にある彼の神殿。

彼の前に片膝をつき、頭を下けているのは今日も呼び出されたミカエル。

彼女は内心うんざりとしながらも、表面上はいつも通りに振舞った。

「パーン様、私は一天使に過ぎません。貴方様のような高貴な御方と一夜を過ごすということは恐れ多く……」

相手を煽って、煙にまいてしまうのは既に彼女の常套手段。

彼女としてはできるものなら炎の神剣でもって、目の前のケダモノを天の火で焼いてしまいたいのだが、それはさすがにできない。今はまだ。

さて、ミカエルはこの1000年で多数の上級魔族を撃破した為、ルシフェルやメタトロンが予算審議会で陳情したこともあり、一応待遇の改善がなされた。

ただ、それはあくまで給料のみで1年で30万に上がった。

10倍に上がっても、全く彼女は嬉しくなかった。

無論、彼女としても上司であるメタトロンやルシフェルにセクハラに対する抗議を何百回もしている。

だが、同じ熾天使で女のガブリエルからセクハラに対する抗議が全くないことと神界の足並みを乱すことに繋がるとしてメタトロンから我慢するように、と言われていた。

彼としても気苦労が多いのは彼女も知っている。

もし、神界にいるのがヤツさん関連の宗教のみであつたなら、ミカエルへのセクハラはなかつただろう。

何しろ、セクハラをするような相手がいないのだから。

だが、現実はこちらやませ状態であるが故に、彼女は大きな苦勞をしていた。

ミカエルはそろそろ我慢の限界に達していた。

数千年も我慢していた彼女は驚嘆に値する我慢強さだが、その分、キレたとき、恐ろしいことは想像に難くない。

「よいよい。ワシはそなたが良いのだ。全ての天使の中で最も強く、気高く、美しい」

「恐悦至極でございます。ですが、あくまで私は一天使ですので…」

そう言う彼女にパーンはその体を寄せ、その手でミカエルの顔を上げさせた。

「エメラルドのように美しい瞳だ。そなたのような女は1万年に1度いるかないかだろう」

「ありがとうございます。ですが、あなたのような高貴な御方なら、きっと私よりも相応しい方がいらっしやる筈です」

「いやいや、その謙虚なところもまた……戦場では恐ろしい強さで悪魔共を斬り払い、神界では可憐なその容姿で神々を魅了する……」

パーンはミカエルの横に腰を下ろし、その美しい黄金色の髪を撫でる。

「黄金のような髪だ。まさにそなたに相応しい」

そう言い、彼はゆっくりとミカエルの胸元に手を伸ばす。

彼女は拳を握りしめる。

まだ、後継者は育っていない。事を起こすにはまだ早い。

そう自分に言い聞かせる。

「ほお……見事な胸……実に良い感触だ」

胸を揉みしだかれるミカエルは屈辱に震える。

「天使は皆、処女と聞く。下の方も、さぞ心地良からう」

パーンは何も言わないミカエルを同意した、と都合良く解釈し、彼女を押し倒した。

そして、素早く立ち上がり、自らの4本の足で彼女の体を押さえつける。

いやらしい笑みを浮かべたパーン、ミカエルの瞳に恐怖が走る。

「さすがのミカエルといえど、こちらの戦は初めてだろう。ワシがリードしてやるから安心せよ」

「嫌っ！」

ミカエルは咄嗟にパーンを振り払おうとするが、自らの神霊力を全て注いでいるのか、彼は小揺るぎもしない。

「恐怖に怯えるそなたもまた良い。では、頂くとしよう」

ゆっくりとパーンの手がミカエルの衣服へと伸びていく。

そして、彼がそれを破ろうとした瞬間……！

ミカエルは己の神霊力を全て使い、衝撃波を巻き起こした。

たまらず吹き飛ぶパーン。

だが、彼も神。

空中で体勢を立て直し、床に着地した。

そして、憤怒の形相で叫んだ。

「おのれミカエル！ 神であるワシに刃向かうのか！」

その言葉でミカエルの堪忍袋はブチ切れた。

積もり積もった不満が、その口から一気に噴出した。

「いい加減にしろ！ このクソジジイ！ だいたい何で主の天使で

ある私が他の神々の面倒までみなければならんのだ！ お前達神々

にとつては神界は天国かもしれんが、我々天使にとつては地獄だ！」

「なんだと……！ 貴様は光を否定するというのか！」

「黙れ！ 自らの地位を私利私欲に使うお前なんぞに言われたくない！

そもそも今回の戦争も主とは関係ない武神達が引き起こした

もの！ お前達なぞ消えてしまえ！ 疫病神め！」

パーンの顔がこれ以上ない程、真っ赤に染まる。

彼はどこからともなく、シュリンクスと呼ばれる笛を取り出し、それを吹き鳴らした。

そして、彼は大声で叫び、念話を全方位に向けて発信する。

「天使ミカエルの反乱なり！ であえ！ であえ！」

「とりあえず貴様の首は頂いていく」

戦士として最高の冷静さを保ち、ミカエルが振るった剣は過たず、パーンの首をはね飛ばす。

それだけでは我慢ならん、と彼女は彼の体を自らの炎で持って焼いた。

これにより彼は呆気無く死んでしまった。

単なる牧羊神ではない彼は他の神々と違い、神魔のバランスを保つ為の、魂の牢獄に入っていなかったのだ。

「豚が……というよりかヤギか。ようやく死んだか。同じヤギの角を持つアシュタロスの方が万倍マシとはどういうことか……」

そして、彼女は考える。どうしたものか、と。

もう神界にはいられない。

あと5分もしないうちに警備の天使が駆けつけてくるだろう。

……とりあえず地球に行き、そこからアシュタロスに助けを求めよう。

即断即決。

どうせなら手土産に、と彼女は神殿内にあるパーンの宝物庫へ赴き、そこからいくつかの金品を頂いていく。

彼女が神殿から出たとき、そこには既に無数の天使が蠢いていた。

「ミカエル様！？ 先程、パーン様から反乱がどつとかの緊急通信が……」

一人の天使の言葉にミカエルはとても不思議そうな顔を作ってみせる。

そして、問いかけた。

「この私が引くと思うか？ そういうプレイとやららしいぞ」

ミカエルとして彼女が築いたものは大きい。

その一言であっさりと天使の軍勢は引いてしまった。

パーンの好色はそれなりに有名であったからだ。

「……もう彼らは私の部下ではないのだな」

ぼつり、と呟いた彼女。

「まさか君が一番最初に堕ちるとは思ってもみなかったよ」

直後、横から聞こえた言葉に彼女はすぐさま神剣を抜き放ち、その声の主へと向ける。

向けられた方は両手を上げ、敵意が無いことをアピールする。

「まあ、パーンの好色については君からうんざりするほど愚痴を聞かされたからね。いいんじゃないかな？」

「……バアルゼブル、一応、それは問題発言だぞ。私が言うのも何だが」

そうだね、と朗らかに笑うバアルゼブル。

一転、彼は真面目な顔となり、彼女に告げる。

「逃走経路はここに。それとこっちはルシフェル様からアシユタロスへの手紙だ」

経路の書かれた紙と封筒を受け取り、彼女は軽く頷く。

そのとき、全身に痛みを感じた。

まるで体の中から引き裂かれていくような、強烈な痛みが。

「墮天が始まった。急ぐんだ」

バアルゼブルの言葉にミカエルは頷き、その痛みを無理矢理我慢し、走りだした。

空を飛べば簡単に見つかってしまう。

おまけに神殿周辺には警備上の理由から転移を妨害する結界が張られている。

故に、地を行くしかなかった。

結界の外に出してしまえばそこから一気に転移し、地球へ行ける。

墮天が終わった瞬間、神界にいる全ての者に魔族と認識されてしまう。

時間との戦いであった。

「さて、後始末は僕がしないとね。主に事の顛末を話して、神界の大粛清をしなくては」

彼女にちよっかいを出していた神々のリストは既に出来上がっている。

彼らも自分達が原因で戦争で武勲を上げ、熾天使の中でも有数の実力者であったミカエルが墮天してしまうという大失点となるとは思ってもみなかっただろう。

「最近の他の神々の暴走は目に余るよ。こつこつのを腐敗した権力者と言っただよね」

やれやれだ、と彼は溜息を吐き、その場を後にした。

彼女は火の化身なり

「くっ……」

ミカエルは苦痛に喘ぎながらも、どうにか地球へと降り立った。降り立った場所はアシュタロスにとっても、ミカエルにとっても因縁のあるところ。

巨大なクレーターの傍に彼女はその身を横たえた。

「全ての始まりはここか……」

そう呟き、彼女はアシュタロスへと念話を飛ばす。

アシュタロス　アシュレイはその念話に驚き、ついで狂喜し、すぐに迎えに行くこと返事した。

「これで……」

終わった、と彼女が言いかけたそのとき、強大な神霊力の圧力……霊圧を感じた。

彼女はどうか起き上がり、その瞳を向ける。

その主はいた。

「まさかお主が墮天するとは思ってもみなかったぞ……」

人民服をその身に纏った1匹の猿。

その手には巨大な棍。

「齊天大聖……！」

厄介な、と彼女は心の中で呟いた。

猿神とも呼ばれる齊天大聖は上級神族に分類されるが、その力は主神クラスに近い。

万全の状態ならともかく、今のミカエルではとてもではないが戦闘にもならない。

あっという間に殺される。

「お主に神々が行ったことは噂に聞いているが……墮天する程までに酷かったのか……」

彼は悲痛な表情でミカエルを見つめる。

彼女はアシュレイが来るまでの間、僅かでも時間を稼ごうと痛みに苛まれながらも、口を開いた。

「我々天使は元々は主の……ヤーウエ様の使い。なぜ、我々天使が他の神々の面倒まで見なければならぬのか？」

齊天大聖はその問いに答える術を持たない。

否、彼をはじめとして全ての神族はその問いに答えることができないだろう。

「自らの地位を濫用し、私をモノにしようとした。神は魔族よりも性質が悪い」

「……無理矢理力で屈服させられるのがいいののか？」

「まだ、それなら諦めもつく。自分が死力を尽くした結果そうなるならばな」

「ふむ……お主はある意味、魔族が性に合っているのかもしれないな」

じゃが、と彼は棍を彼女へと向けた。

「今は一応戦争中じゃ。お主が墮天すれば魔神か、下手をすれば魔王クラスの悪魔が誕生することになる。お主の言い分も理解できる。確かに天使は不遇じゃ。じゃが、もう少しやり方があった筈じゃろう？」

「私を消しにきたのか。主……いや、ヤーウエ様に尽くすだけでなく、神界の為に、他の神々に散々尽くしてやった私を」

ぎり、と歯を食いしばり、彼女は立ち上がる。

そして、剣を抜き放つ。

たとえ彼女が墮ちたとしても、この剣は砕けず、主である彼女と同じように黒く染まる。

この剣はミカエルの一部であるのだ。

「立つのも辛いのにわしと戦う気が……」

苦渋の表情の斉天大聖にミカエルは笑ってみせる。

「最後に聞かせる。誰がお前に消せと命じた？」

「……聞けばお主はこれ以上ない苦痛を味わうことになるぞ？」

ミカエルはその言葉で既に誰が命じたのか想像がついた。だが、彼女は聞かねばならなかった。光への、主への未練を断つ為に。

「構わない」

彼女の言葉に斉天大聖はゆっくりとその名を告げる。

「最高指導者……ヤーウエ様じゃ。あの御方とて断腸の思いだったじゃろう。あの御方はお主も知るとおり、優しい御方だ」

「……そうか」

予想はできていただけに彼女に悲しみはない。

ただ僅かな寂しさがあった。

しかし、それをも断つべく、彼女は言葉を紡ぐ。

「伝えてくれ。迷惑をかけました、と」

覚悟を決めたかのような、ミカエルの言葉に斉天大聖は静かに頷いた。

「動くでないぞ」

そう告げ、斉天大聖はミカエルの左胸を狙い、棍を構える。

瞬間、ミカエルは叫んだ。

おそらくは見ているだろう彼女に向けて。

「我が全てを大公爵アシユタロス様に捧げます！ 我が名はフェネクス！」

瞬間、斉天大聖は棍を伸ばした。

彼の持つ棍、如意棒は彼の意思を受け、ミカエル　フェネクス
へと一直線に迫る。

その速さたるや疾風の如し。

「あらあらあら。どっかで聞いた名前だこと」

いつの間にか現れていた少女に、その棍は片手で受け止められていた。

齊天大聖の顔に焦りが浮かぶ。

熟練の戦士である彼は一目でわかった。

目の前の少女がとんでもない力の持ち主であることを。

「フェネクス、そう、フェニックスね。なるほど、ミカエルは火の象徴。それが堕ちると……」

何度か頷き彼女……アシュレイはやがて齊天大聖へと視線を向けた。

「さて、あなたはもう見てすぐにわかったわ。猿に如意棒とくれば孫悟空しかない。まだ地球で大暴れはしないのかしら？」

「戦争中じゃからな」

「それもそうね」

くすくすと笑い、彼女は如意棒を手放す。

彼は如意棒を戻し、油断無く構える。

「ところでお主はアシュタロス……アシュレイでよかったかの？」

「いかにも」

「わしが言えることではないが、迷惑をかけた。お主をどうにか救ってやりたかったが……」

そう言いつつも、彼は構えを解かない。

だからといって、彼が上辺だけそう言っているようには見えない。

「あら、終わったことはもういいわ。そうあれかし、と叫んでおけば世界はするりと片付き申すって言うらしいわよ？」

「どこの言葉じゃ……ともあれ、わしは墮天する前にミカエルを消さねばならん」

その言葉にアシュレイは不敵に笑ってみせる。

「残念だけど、彼女はもう私のもの。私の許可なく手を出すことは何人も許されない」

「では頼もう。殺させてくれんかの？」

その頼みに彼女はにっこりと素敵な笑顔を向け、答える。

「寝言は寝て言え猿」

「結局断られるんじやろうが……」

溜息一つ、彼は最後通牒を発した。

「お主を傷つけたくはない……という欺瞞は言わん。だが、お主がこの戦争で被害者であることは間違いない。引けば今回に限り穩便に収めることができる」

その問いにアシュレイはフェネクスを抱き寄せる。

彼女は抵抗することなく、アシュレイの胸に収まる……と言っても、アシュレイは少女形態なので体格差でどうしても不恰好となってしまうが。

何をやる気だ、と齊天大聖は訝しげな視線を向ける。

如何に魔王クラスの実力者といえど、戦闘において片手を塞ぐなど自殺行為に等しいものだ。

彼の視線にアシュレイは悪戯に成功した子供のような笑みを浮かべた。

そして、叫んだ。

「あばよ！ とつつあん！」

瞬間、齊天大聖が前へと出た。

数mの距離をコンマ数秒以下の時間で詰め、ほぼタイムラグ無しで彼はアシュレイの目の前に現れた。

振るわれた棍。

それは空を切った。

彼は渋い顔で2人がいた場所を見つめる。

「まさか、魔神ともあろう者が戦闘もせずに逃げるとは……」

そこまで呟き、彼はあることに気がついた。

アシュレイが戦闘をしなかった理由、その答えは彼の真横にあった。

「そうか……ここはあやつにとって……」

齊天大聖の視界に広がるのは巨大なクレーター、そこはソドムとゴモラの跡地。

アシュレイにとって、この場所は血で穢してはならない、特別な場所であった。

「……あの」

テレジアが言いにくそうに声を出した。

「アシユ様……」

ベアトリクスが何とも言えない表情で名を呼んだ。

「その……」

シルヴィアが困惑したような表情で自らの主の横にいる者を見つめる。

「……アシユ様が色々と偉大というか規格外なのは知っていたが……」

エシユタルは呆れ顔。

「何でミカエルがいるのですか？ それも翼が真っ黒で」

ディアナがズバツと問いかけた。

齊天大聖から逃げて数時間後、ミカエルの墮天は終わり、体の調子を整えたところでようやく、お披露目となった。

一同に不敵に笑うアシュレイ。

彼女は告げる。

「今回、私の新しい部下となった元熾天使のミカエル。フェネクスって呼んであげてね」

「よろしく頼む」

「いや、そんなノリで言われても……」

問いかけたディアナがそう答えた。

今まで敵として戦ってきた彼女が突然味方になりました、という状況なのだ。

その困惑具合は推して知るべし。

「セクハラしてくる神にはもう愛想が尽きた。これからは悪魔として精一杯だらけるのでよろしく」

当の本人は何だか妙に軽いノリであった。

彼女としてはスッキリと気分爽快だ。

セクハラしてくる神はいないし、仕事は好きなききに休んでいいし、何よりアシュレイから給料は言い値で払うと言われている。

労働条件は最高であった。

「アシュ様、彼女の仕事は？」

主が決めたことならしょうがない、と一番最初に割り切ったベアトリクスは問いかけた。

「軍団の指揮を考えていたのだけど、今のままでも十分やれているから城の警護が主かしら……ぶっちゃけ、今、城に警備員を仕事とする強い魔族っていないし……」

アシユレイの言葉にフェネクスは豊満な胸を張って答える。

「お任せください。立派な自宅警備員となりましょう」

「何か今、発音がおかしくなかったか？」

テレジアが思わず問うた。

彼女の耳には自宅警備員の部分がニートと聞こえたからだ。

他の者も同じように聞こえたらしく、ベアトリクス達もじっとフェネクスを見つめている。

「気のせいだろう」

ぷいっとそっぽを向くフェネクス。

随分とはっちゃけてしまったらしい。

「あ、あと今は力を抑えているけど、この子、墮天したら力が上がって魔神と同じくらいの魔力あるから」

アシユレイの補足説明には誰も驚かない。

あのミカエルが墮天したなら、それくらいの力を持つことは容易に想像ができるからだ。

「あー、疲れた。疲れたから私はちよつと寝る。じゃーね」

手をひらひらさせてアシュレイはその場を後にした。

残された彼女達はお互いに視線を交わし、やがてテレジアが口を開く。

「何だかよくわからないが、一応歓迎しよう。ようこそ地獄へ」

「ああ、ありがとう。地獄は初めてなんだ。ところで、地獄には女しかないのか？　ここに来るまで、すれ違った魔族は全て女性型なのだが」

「アシュ様の趣味でな。男がいたほうがよかったか？」

「いや、いなくて安心した。見知らぬ男には悪いイメージしかない」

そう告げたフェネクスにディアナが問いかけた。

「どうして墮天を？　戦場で何度か見たけど、物凄く頑張ってたじゃないの」

「聞いてくれるか？　私の苦労話を……」

暗い影を背負い、暗い表情となった彼女にディアナは気圧されながらも頷いた。

他の者達も興味があつたので異論はない。

「始まりは大昔にあつた神々のパーティーでな……そこで好色な神に目をつけられて……」

語り出すフェネクスにその場にいた全員が直感した。

とんでもなく長くなりそうだと。

楽しむ者と苦悩する者（前書き）

グロ表現あり。

独自設定あり。

演出や分かりやすさの為に神や天使の階級などを変えている……と前に感想で答えただけでも、ミカエルに関しては都合のいい言い訳を考えついでしまった。

ミカエルについては例外ということでお願いします。

楽しむ者と苦悩する者

アシュレイは自室でソファに座り、新聞を読んでいた。
三面記事にでかでかと載っている記事を読み、彼女は呟く。

「神界で大粛清……ね」

日刊地獄新聞。

政府発行のこの新聞によればつい最近、神界で色々な神が粛清され、永久封印されたとのこと。

「にしても、どうやって知ったのかしら？」

言うまでもなく、スパイが神界に潜り込んで……なんてことはできない。

故に彼女は幾つか予想し、その中で最も確率の高そうなものを選び出す。

「戦場に出てくる天使の数とかから推測したのかしらね」

大規模に粛清すればその分、神界の治安維持に天使を回さねばなるまい。

圧倒的に天使の数が多いが、他の神々も自らの使い走りを持っていないわけではないからだ。

粛清された神の使いが不満を抱いて反乱を起こす、なんてこともありえる。

「肅清する際、ルシフェルの指揮下にあつたある大天使が多大な功績を上げた？ 何でこんなことまで分かるのよ」

呆れたようにアシュレイは呟く。

そして、ふと思ひ出した。

フェネクス　ミカエルから渡されたルシフェルからの手紙を。

「……最高指導者になる際に協力して欲しい、と書いてあつたけども……まあ、情報提供をしてくれたから協力しないと」

ルシフェルからアシュレイへの手紙。

そこには地獄で最高指導者となる為に協力して欲しい旨ともう一つ、エナベラの子孫の情報が書かれていた。

それによればエナベラの子孫は陸伝いに欧州方面に逃げたらしかった。

この時代、欧州といえはまだまだ未開の地。隠れるにはうつつけの場所だ。

「捜索班は欧州を中心に捜索するように言つたし、まあ、とりあえずは問題ない筈」

どうやってルシフェルに協力することを伝えればいいのだろうか、と彼女は疑問に思いつつ、新聞の次のページを捲る。

「お、載ってる載ってる」

アシュレイは広告欄に自分が書いた募集が載っているのを見つけ、ちよつとだけ気分が良くなる。

言つまでもないが、女魔族募集の広告だ。

「淫魔達の数をもっと増やさねばならない。その為には種付けの相手がたくさん必要なの」

別に男の魔族でもいいが、そこはアシュレイの嗜好である。繰り返しになるが、神魔族は両性が無性のどちらかだ。

例え見た目が男であっても、女になれるし、その逆もまた然り。ただアシュレイ的にはやっぱり最初から女のほうがよかった。

「淫魔の孕ませ方なんて、人間で知ってるヤツなんていないでしょうね」

一般に自らの体内に精を取り込むことを主とする淫魔……早い話がやりまくりの淫魔が孕む、というのは聞かない話だろう。

「淫魔にはスイッチみたいのがあって、それで体の機能を切り替えるのよねえ」

精を吸収する機能と精をそのまま溜める機能が淫魔にはある。前者が食事で後者が子を成す為の機能だ。

「私にもあるのよねえ……一応、私、吸血鬼で淫魔だし……そういうえば最近、吸ってないなあ」

リリースやリリムのような最上級の淫魔であっても、アシュレイが本気で精を吸収したら1時間と経たずに力尽きてしまう。

もしアシュレイが人間達から精を吸うなんてことをしたら、夥しい数のミイラの出来上がりだ。

何も精気は体を交わらねば吸収できないなんてことはない。

交わった方が一番効率が良く、気持ち良いからそうしているだけで、人間が空気を吸うかの如く人間をはじめとした動物が発してい

る精気を吸うことができる。

長々と書いたが、そんなわけで彼女は滅多に他者の精気を吸わない。
い。

というよりか、彼女は突っ込むことが多く、突っ込まれることは滅多にない。

「フェネクスの精気って美味しそう……」

思い立ったら即実行とばかりにフェネクスを呼ぼうとしてアシュレイは思いとどまる。

フェネクスは上司のセクハラが嫌でこっちに来た。

そんな矢先に自分がそんなことしたら、出ていってしまってもいいな。

リリースとリリースにもフェネクスに対しては彼女から求めて来ない限り、淫魔達に手を出させないよう命じてあった。

自分がいきなり破ってはさすがに色々とアレだし、何よりフェネクスを失いたくない。彼女はそう思った。

「我慢我慢……鬱憤晴らしにあそこに行こう」

アシュレイはそう言いながら立ち上がった。

でもやっぱりフェネクスの肉感的な体に心が引かれないわけではない。
ない。

それでもアシュレイは無理矢理気分を変える。

これから行く、とある女魔族が経営している娯楽施設のことを頭に浮かべながら。

アシユレイの城から転移で1秒の場所にあるその娯楽施設は、見た目はどこにでもありそうな酒場だ。

建物自体は大きい、観覧車が建物から生えたりしているという奇怪なこともなく、建物自体が実は魔族で、というオチもない。

極々普通の建物だ。

入り口の横には看板があり、そこには魔族が使う文字でコースと料金が書かれていた。

分かりやすく日本語に訳し、かつ料金を現代日本の通貨に換算すれば以下のようなになる。

VIPコース 無制限殺し放題 何でもあり お持ち帰り可能
666万円

通常コース 1000人まで殺し放題 拷問器具まで使用可
66万6千円

お試しコース 20人まで殺し放題 道具はご自分でお持ちください
6万6千6百円

物騒な単語が幾つも並び、料金に至っては獣の数字になっている。アシュレイはこの店に初めて行ったとき、サービスの良さと価格の安さ、そして人間の質の良さから虜になった。今ではすっかり常連客である。

アシュレイはフェネクスのことを一時的に忘れることに成功し、これから始まる狂乱の宴に思いを馳せる。そして、彼女は躊躇いなく店の中へと入った。

入り口をくぐった彼女を待ち受けていたのは受付嬢の女の魔族。彼女はアシュレイを見るなり、カウンターから飛び出し、アシュレイに頭を下げた。

「ようこそおいでくださいました、アシュレイ様」

「うん。今日もいつものVIPコースで」

「畏まりました。ご指名されますか？」

「今日はどんな子が？」

「こちらに……」

受付嬢が差し出したアルバム。
そこにある無数の顔写真。

「んー……この子で」

アシュレイが選んだのは金髪でつり目の、気が強そうな10代前半の少女。

備考欄にお嬢様と書かれていたことが決め手であった。

「はい、少々お待ちを」

受付嬢は待機しているその子に念話を送る。
数秒程でその子はやってきた。

「え、エリシア……と、も、申します」

彼女は白いドレスを纏っている体を震わせ、そう名乗った。

「案内しなさい」

受付嬢はエリシアにそう言い、アシュレイに笑顔を向ける。

「どうぞごゆっくり」

「うん。料金はいつも通りに城に請求して頂戴」

「はい、畏まりました」

会話が済んだのを見、エリシアは震える声でアシュレイを奥へと案内した。

それなりに長い廊下を歩き、2人が出たのは広いホール。

そこには幾つものソファとテーブルがあり、多くの魔族と人間がいた。

ただ、仲良く宴会というのでは当然ない。
人間の少女や女性、あるいは幼女が魔族にお酒を出すなどの奉仕
をしている。

ただそれだけならばキャバクラと同じだ。
だが、それだけではない故にエリシアは恐怖している。
彼女もまた奉仕する側で遊ばれる側なのだ。
ホール全体に漂う血の臭いが、その答えだ。

「こ、こちらです……」

そう言っただけで彼女が誘導したとき、べちゃり、と彼女の足元に何か
が飛んできた。

可愛らしい少女の頭だ。

当然、頭のみでその胴体はない。

エリシアはそれを見ても恐怖に竦んだりもしない。
なぜなら、次にそうなるのは自分であってもおおかしくはないから
だ。

「飛ばすなら方向を考えなさいよー」

ぶー垂れたアシユレイ。

そんな彼女の声に気がついたのか、飛ばしたであろう女魔族が両
手を合わせて軽く頭を下げた。

エリシアはその間に少女の頭を横に退かす。

お客に……それも最上級のお客であり、地獄全土にその名が轟い
ている大公爵に人間の頭を越えさせるなんてことをさせたら、恐ろ
しいことになる。

地獄において人間は家畜に等しい存在だ。

家畜は飼い主に抗うことはできない。

「あ、アシユ様……個室がよろしいですか？」

「そうして頂戴」

「は、はい。畏まりました。こちらです……」

ホールから歩くこと5分で個室に到着した。

個室は12畳程の広さで、ソファとテーブルが中央に置かれ、それらの横には冷蔵庫とグラスが入った小さな棚が置かれている。

そして、この部屋からは拷問器具や大人の玩具が置いてある器具庫に行くことができる。

勿論、共有の器具庫ではなく、この部屋専用の器具庫だ。

「さて、どうしようか」

アシユレイはソファにどかっと腰を下ろし、呟いた。

エリシアは落ち着かない様子で視線をあちこちに彷徨わせる。

「とりあえずはそうね……何か飲もう」

「は、はい。何をお飲みになりますか？」

「んーそうねえ……適当に女の子を何人か呼んで、その子の心臓入りのお酒で。あなたが取り出してね」

「か、畏まりました」

彼女は持っていた通信機を使い、連絡を入れる。
1分と経たずに10人程の少女達がやってきた。
彼女達もまた恐怖に体を震わせている。

「じゃ、あの黒髪の子で」

アシュレイが選んだ少女は黒髪をショートカットにし、胸がそれなりに大きな子であった。

彼女の端正な顔は恐怖に歪んでいる。

この店のシステムを知っていても、彼女はその様子に興奮する。
システムとはサービス係の人間の女達は全て死んでも、その場で蘇ることだ。

無論、老いも病もない……不老不死であり不死身であった。

そうすれば長く楽しめる。

死ぬことや恐ろしい痛みに慣れれば楽しめるのだろうが、慣れるという方が酷であった。

無論、何度も酷いことを体験すれば精神的に人間が壊れてしまうということについても抜かりはない。

壊れないように狂わないように、精神強化魔法とでも言うべきものが掛けられている。

そして、これらの効果はお持ち帰りした後も続く。

彼女達は人間であって人間ではない。

強いて言うならば、魔族がお遊び用に改良した強化人間といったところだ。

さて、これは魔族にとってもいいシステムであった。

人間を絶望や恐怖させることは魔族にとって快樂の一つ。

また、人間を食べる際、これらは最高のスパイスとなるからだ。

なお、店に出てくる人間の女達は経営主である女魔族が加速空間を作って、そこに地球から攫った人間達を住まわせ、数を増やさせることで店に供給している。

無論、人が増えれば文明も発達することから、彼女の加速空間中の人類は早くも中世時代となっている。

故に、エリシアのような金髪のお嬢様が店に出てくるのだ。

「い、いきます」

エリシアはナイフを手に持ち、黒髪の子に切っ先を向ける。

彼女は嫌々と首を横に振るが、外の少女達に取り押さえられていた。

「なるべくゆっくりとやって頂戴。そっちの方が味が良くなるから」

アシユレイは嗜虐的な笑みを浮かべ、そう言ったのであった。

一方その頃、アペプは頭を抱えていた。

「ミカエルを墮天させるなんて……」

アシュレイが疑問に思った新聞に書かれていた神界での出来事。それは他ならぬルシフェルを通じて、地獄に情報が流れている。彼もまたルシフェルが墮天したいということを知っていたからだ。

戦争をしよう、と最初に決めたのはアペプだが、今では後悔している。

彼は最高指導者であるから、未来を　より正確には人類の知らない本当の歴史を知っている。

それによれば、この戦争で人類は一度滅び、戦争に勝利した神族によって再び人類は創られることになる。

それが辿る筈であった本来の歴史。

だが、アシュレイの思いもよらない行動でその予定は外れ、本来ならば墮天しなかったミカエルが墮天してしまった。

これに加えて、ルシフェル達もまた墮天するのであるから、パワーバランスは魔族に一気に傾いてしまう。

「まあ、ミカエルが墮天したということは隠されるだろうな」

アペプはそう呟く。

彼はルシフェルから聞いていた。

大天使の中で素質のある者がおり、新たなミカエルとなるだろう、と。

そしてそれは世界の後押しがあることを意味していた。

「世界がうまくやってくれたのか……」

元々、ミカエルは大天使だ。

ミカエルが熾天使となる為の功績をどこであげるか、といえはルシフェルが起こす反乱だ。

そこでミカエルはルシフェルを討つという功績を上げ、熾天使となった。

これが人間達の知る宗教的歴史。

しかし、フェネクスは遙か太古から神界の為に多く働き、その力を十分につけていたが為に大天使から熾天使となっていた。

つまり、元々熾天使であったミカエル　フェネクスがそのままいけばルシフェルを討てば問題はなかったが、墮天してしまい、パワーバランスが一気に崩れた。

魔族に傾いた天秤を戻す為に元々熾天使であったミカエルは表面きはいなかったことにされ、大天使であるミカエルとなりうる資格を持った者が討つことで熾天使ミカエルとなる。

しかし、たまたまミカエルとなりうる資格を持った大天使がおり、その天使が遙かに格上のルシフェルを討つなんぞ普通ならば天地がひっくり返っても有り得ないことだ。

言うまでもなく、世界による後押しであった。

一見、世界が人間達の宗教的歴史に合わせた形になるが、実際は神魔族のパワーバランスを取る為だ。

フェネクスがいなかったことにされるのも、熾天使ミカエルがセクハラが嫌で墮天しました、なんてことはとてもではないが人間には言えないし、神界の恥であるので隠すことに誰も異論はない。

「世界的に見れば問題はないのだろう。人類が減びなかったことに対して、世界がアクションを起こしていないのならばそれは容認さ

れたということ。問題はアシュレイだ」

勿論、彼女が戦争をサボっていたことではない。その逆で、戦果を上げ過ぎてしまったことだ。基本、上の者に下の者は逆らわず、絶対服従。だが、同格同士であるならば話は違ってくる。早い話、アシュレイの戦果に嫉妬した連中がうるさいのだ。

前線で神族をこれだけ倒した、ということは誇るべきものの一つであるのだが、アシュレイの戦果はそんなものを吹き飛ばす程にインパクトがある。

ルシフェルに間接的に墮天を勧め、ミカエルを墮天させ、自軍をすり潰してでも敵を完膚なきまでに殲滅するその戦争のやり方。

他の魔王や魔神の戦争のやり方はある程度数が減ったら撤退していたが、アシュレイは敵を殲滅するまで兵隊を注ぎこむ。

他の魔王や魔神達は神族を撤退に追い込んだりすればそれは勝利であり誇るべきものだが、アシュレイは神族を殲滅したこのみ勝利としてカウントする。

撤退と殲滅ではどちらがより良いかは言うまでもない。

「こればかりはしょうがないなあ。うるさい連中を肅清するか……だが、それでは戦線に穴が空く……どうしたものか」

アペプの苦悩は続くのであった。

墮落のすすめ（前書き）

微工口あり。

墮落のすすめ

ある日、アシュレイはフェネクスを自室に呼び出した。
美味しく頂く……というわけではない。

フェネクスが墮天して早数ヶ月。

地獄の空気や城の内部に慣れたかどうかの確認であった。

「そろそろ慣れたかしら？」

「はい、アシュ様」

熾天使であった頃の癖が抜けないのか、彼女は直立不動で八キ八キと答える。

軍人のようだ。

「城についてはどう？」

「城の内部についてはどうにか迷子にならない程度には……」

「城下町は？」

「お手上げです」

素直に告げるフェネクスにアシュレイは頷く。

彼女も自分の城で迷ったことが何百回もあった。

バカみたいに広いのだからそれもしょうがない。

「最近だとベアトリクスやシルヴィアと手合わせをしているみたいだけど？」

「彼女達が味方に回ったのはとても心強いことです」

「暴れてもいいけど、城の周りを更地にしたりしないでね」

そう言った直後、遠くで轟音。

2人が近くにあった窓から外へ視線をやれば遠くでキノコ雲が。城の周りが更地になりつつあるのは言うまでもない。

「……今はディアナとベアトリクスが戦っている筈です」

「見なかったことにするわ……」

アシュレイの言葉にフェネクスもまた異論はない。

「で、神界がゴタゴタしている今のうちに、一大決戦を仕掛けようとそういう話が持ち上がってるのよ」

「私に参加を？」

「駄目？」

アシュレイの言葉にフェネクスは逡巡する。

友人であった他の熾天使と戦うことになるだろう。

だが、とフェネクスは思い直す。

「私はもはや天使ではありません。あなた様の部下です。どうしても異存がありませんか」

「そう……それならいいわ。それとフェネクス、もう一つ聞きたいのだけでも……」

アシュレイは若干不安げな顔で彼女を見つめ、問いかける。

「私って、そのアレよ。結構やらしいのよ」

そう言いつつ、アシュレイは手をもじもじとさせ、顔を俯かせる。

「その、どう？ 嫌じゃない？」

ちらっと上目遣いに尋ねる。

フェネクスには彼女が何を言いたいのか、よく分かった。

「悪魔とは背德的であり、背信的なことを行わねばならない存在です。少なくとも、私はアシユ様の性癖等については不快などというようには感じておりません」

何よりも、とフェネクスは続ける。

「アシユ様は吸血鬼であり、淫魔でもあるのでしょうか？ ならば、何も遠慮なさることはないかと……」

「ほ、ホントにそう思う？」

嬉しそうな顔でそう聞いてくるアシユレイにフェネクスは頷く。

「あのね……あなたを抱きたいの」

唐突な言葉。

フェネクスは目を見開き、まじまじとアシユレイを見つめる。

「そのね、それも……ただ私が快楽を貪りたいから……」

でも、と彼女は続ける。

「あなたはセクハラが嫌で私のところに来てくれたから、そうしない。我慢する」

そう言い、アシユレイは我慢我慢と念仏のように呟く。

フェネクスは思わず笑ってしまふ。

そして、彼女は思う。

アシュレイのところに来てよかった、と。

故にフェネクスは答える。

「私は別に構いませんが？ 私も背徳的なことをしないと悪魔っぽくならないですし……」

彼女としてはあくまでセクハラやレイプ紛いのことをされるのが嫌であつて、決して性行為自体を嫌悪しているわけではない。

こういう風に素直に言ってくれるなら 熾天使であつたときはそれでも立場上断らざるを得ないが、悪魔の今では別に何も問題はない。

「駄目なの。そういう義務感に駆られてやるのは駄目。私が楽しくない」

「そういうものですか？」

「うん。できればあなたが私のことが好きで愛しくて堪らないって状態になってくれると嬉しいの」

その言葉にフェネクスは難しい顔となる。

そういう感情はもっと長い年月を掛けて養っていくものだ。

確かにアシュレイはいい上司だとは思つが、今のフェネクスにとつてはそれだけであつた。

「まあ……リリスとかリリムとかの淫魔達とはそんなの関係無しだつただのけどね」

アシュレイは更に言葉を続ける。

「やっぱり、元天使であるあなたは慎重に扱わざるを得ないのよ。不満を持ったら出ていっちゃうかもって思ってる」

本来、トップであるアシュレイがこんなことを部下に、それも当の本人に言うのはよろしくない。

彼女は唯一の存在であるが故に自分で全てを決めねばならない。だが、敢えて彼女は賭けに出た。

フェネクスは不思議そうな顔で答える。

「先ほども言いましたが……私はあなたの部下ですから、別にどうとも。テレジア達と同じように扱ってくだされば」

「わかった。じゃあ、もつと扱き使っていいのね」

フェネクスはその言葉に不吉なもの……無理難題を吹っかけられそうな、そんな予感がした。

「実は今日、議事堂に行かないといけないの。さっき言った一大決戦の会議ね」

「それに私も同行を？」

「そう。あなたのお披露目。でも、ただ一緒に行くだけじゃ駄目なの。私は他の魔神よりもずば抜けているぞって見せる為に……早い話が見栄を張りに行くの」

魔族には魔族で色々と面倒くさいことがあるらしい、とフェネクスは思いつつ尋ねる。

「具体的には？」

「あなたが私に忠誠を誓っているっていうのを見せてもらう」

「何をやるかは私に任せていただけですか？」

フェネクスの方にアシユレイは一瞬悩むが、頷く。彼女がどういう行動を取るか、アシユレイとしても気になるところ。

まず自分の面子を潰したりするようなことはしないだろう、と彼女はフェネクスを信じることにした。

「2時間後に出発だから、それまでに支度しておいて頂戴」

出発までの間、アシユレイはこの前、お持ち帰りしたエリシア達の様子を見ることにした。

その頃、城内部にあるサロンにて、ヘルマンは優雅に紅茶を飲んでいた。

彼に1人の少女が自らの過去を話している。

彼の話し相手は金髪でつり目で気の強そうな子だ。

ヘルマンは人間でありながら、悪魔の城にやってきた少女達に興味を引かれ、ちょうど見つけた彼女に話を聞いていた。

「いつの間にか地獄にいて、そこで店に出されて……」

「あの店はアシユ様もお気に入りだからね。まあ、君は運が良かったのだよ」

ヘルマンの言葉に少女 エリシアは答える。

「アシユ様はとても素敵な御方です……」

うつとりとした表情だ。

あの恐怖に震えていた彼女とは大違い。

彼女は語る。あのときのことを。

「心臓入りのお酒をお飲みになり、戯れに他の子達と殺し合いをするよう命じられました。皆死んで、そして皆が蘇った後、アシユ様は気分を良くされたのか、私を犯しながら食べていただいて……」

この世のものとは思えない、人外の快樂にエリシアは溺れた。

彼女は狂えないが故に真っ向からその快樂を全て受け止めてしまったからだ。

そして、それは彼女の体と精神に決して忘れられぬ快樂を刻みつけた。

「アシユ様は他の皆にも同じようにし、全てが終わった後、私達に問いかけられました。私のところにくるか、と。誰もが皆頷いたのです。アシユ様の御慈悲を無下にはできませんし、何よりアシユ様に抱いていただけるチャンスがある……」

エリシアは上気した表情で告げる。

体が快樂を求めるのだろう。

「私にはそういう感情がないので分からないが、君がそう思うのならいいものだろう」

ヘルマンはさらに言葉を続ける。

「アシュ様もちょうど来られたところだ。邪魔者は消えろとしよう」
彼はそう告げ、その場から消えた。
そして、エリシアは彼女の声を間近で聞く。

「嬉しいこと言ってくれるじゃないの……」

いつの間にか彼女の後ろにいたアシュレイだ。

彼女は囁くだけに飽きたらず、その耳たぶを軽く噛み、彼女の白い首筋に赤い舌を這わせる。

エリシアは体を震わせ、その息遣いが荒くなる。

「快樂に呑み込まれ、私無しでいられないなんて……とても可愛らしい」

アシュレイはそう言いつつ、両手を前に回し、その胸を触る。

「いいの？ お父さんやお母さん、いるんでしょう？ あなたの家に戻してあげるわよ？」

「い、いや……アシュ様と一緒に……」

喘ぎ喘ぎ、エリシアはそう答える。

彼女はもはやアシュレイが近くにいるというだけでこれ以上ない程に興奮する体になってしまっている。

「いけない子ね……いけない子にはお仕置きをしないと……あなた
のいやらしい体になつぷりとお仕置きをね」

アシュレイはその牙をエリシアの首筋に突き立てる。

彼女はそれで達してしまった。
だが、彼女の体は満足しない。
エリシアは欲望の赴くままに言葉を紡いだ。

「わ、私を壊してください……壊れる程に気持ち良くしてください
……」

「勿論、そうさせてもらおうわ」

アシュレイは残り時間を計算しつつ、エリシアを抱き抱えた。
そして、最後に耳元で囁く。

「あなたの全てを頂くわ……」

そして、アシュレイはエリシアを美味しく頂いた。
エリシアは何回も失神するという限界を超えた快樂に溺れ、もはや完全に狂った状態となった。

無論、魔法の影響で彼女は狂ってはいない。

ちゃんと受け答えはできるし、五体満足の状態だ。

どこが狂ったかというところ……彼女の体だ。その体は常に火照りっぱなしとなってしまうた。

そんなこんなでアシュレイは悪魔らしく1人の人間を墮落させ、気分爽快で彼女はフェネクスと共に議事堂へと赴いたのだった。

決戦に向けて（前書き）

微グロあり。

微工口あり。

決戦に向けて

誰もが皆、2人に視線をやっている。

居並ぶ魔王や魔神達、そして最高指導者のアペプすらも、声を発さず2人をただ見ている。

アシュレイに嫉妬していた魔神達も、何も言わない。彼らとて馬鹿ではない。

頭ではアシュレイに逆立ちしても敵わないことを理解しているのだ。

畏怖や羨望など、様々な感情の籠った視線を一身に受け、アシュレイはフェネクスと共に悠々と議場に一番最後に入った。

彼女は空いていた席に座り、フェネクスを後ろに控えさせると一同を見渡し、告げる。

「皆さんお揃いのように、よかつたわ。待つのは嫌いなもの」
「従者を連れてくるとは何事か？ それもあのミカエルを」

1人の魔神の問いにアシュレイは微笑んだ。

「この中で私が熾天使ミカエルを墮天させると予想した者はいるかしら？」

「予想できる筈がないだろう」

その問いに答えたのは大柄な魔族、スルトであった。

彼としては開戦当時の、子供のようなアシュレイを知っているだけにその成長度合いに寂しさを感じている。

もはやアシュレイは誰が見ても魔王として相応しい実力と功績を

備えている。

今、この場で新たな魔王としても誰も異を唱えないだろう。

だが、彼女が魔王になるのはあくまで戦争終了後だ。

アシュレイとアペプとの間でそういう取り決めがなされているので、彼女は自分を魔王にしる、とは言わない。

「それが答えよ。ミカエル……フェネクスが私にしっかりと忠誠を誓い、じつは神界のスパイとか、そういう余計な疑惑を持たれないようにする為でもある」

要はアシュレイがフェネクスを連れてきたのは見栄を張るのと同じ時にしっかりと自分が手綱を握っているという意味合いでもあった。アシュレイの言葉になるほど、と頷くスルトをはじめとした居並ぶ面々。

そんな面々に満足気に頷きつつ、アシュレイはフェネクスがどういうことをやってくれるのか、とても興味があった。

何をするかは彼女ですら知らない。

「私は……」

フェネクスが口を開いた。

彼女は居並ぶ大物達に気圧されることなく、凜々しい顔で告げる。

「アシュ様に忠誠を誓っている。その証拠をここに見せよう」

彼女は腰にさした剣を抜き放ち、その切っ先を自らの左胸に突き刺した。

溢れる鮮血。

彼女は痛みに僅かに顔を歪めつつ、剣を床に置き、両手で無理矢理左胸をこじ開け、自らの心臓を取り出す。

「アシュ様、我が忠誠の証です。どうぞお食べください」

彼女はそう言い、心臓を差し出した。

アシュレイは鷹揚に頷き、それにかぶりつく。ぐちゃぐちゃと肉を咀嚼する音が木霊する。

あっという間にアシュレイは心臓を食べ終えた。

「ああ、美味しかった。フェネクス、さっさと復元しときなさい。あと、最初に言って欲しかった」

フェネクスはその言葉に気がついた。溢れた血、その行方に。

「……かかった。髪の毛に」

「も、申し訳ありません！」

これ以上ないくらいの素早さでフェネクスはハンカチを取り出し、アシュレイの髪の毛についた血を拭う。

アペプ達はとりあえず見なかったことにした。

彼らとしても、まさかあのミカエルがこんなうっかりさんだとは思いたくなかった。

「ごほん！」

わざとらしく咳払いをし、アシュレイは仕切り直すことにした。既にその髪に血はついていない。

「で、決戦をやるの？」

アシュレイの問いにアペプは頷き、答える。

「日時については未定だが、少なくとも数年以内にはやる予定だ。銀河系の中心で全ての戦力を動員する……だが、主力となるのはお前の軍だ」

「どこかの誰かさんに軍の主力を潰されたのだ」

アペプに続き、ジャツカルの頭を持つセトが言葉を発した。

彼の言葉にその誰かさんに一斉に視線が集中する。

「それが仕事だったのな。屠った数については数えていない」

誰かさんはそう答え、そっぽを向いた。

「フェネクスはあなた方の軍団1個分の働きを1人でしてくれろと私は確信している」

アシユレイはそう答えておいた。
さすがに熾天使時代にやったことまでは擁護できない。

「ともあれ、私の軍に任せて頂戴な。半分くらいは削ってあげるから」

魔神兵と鬼神兵のはじめての実戦投入にアシユレイはわくわくどきどきである。

「ところで、数年以内と言ったけど、そんなに悠長でいいの？」

「ああ、大丈夫だ。まだゴタゴタしているらしくてな。10年くらいは混乱しそうだ」と

どこが情報源なのか、アシユレイとしては新聞で見たときから気になったが、彼女とて馬鹿ではない。

内通してもバレない程の実力者で地獄に来ようとしているヤツなんぞ、1人しかいない。

「それ、どこ情報が聞いていいかしら？ とても知っていそうな気がするの」

「構わんよ。というよりか、彼に間接的に墮天をすすめたのはお前じゃないか……」

「あら、私は盲目的に従っているだけでいいのか、と言っただけよ」
ルシフェルであることは確定であった。

議事堂から城へと帰還したアシュレイとフェネクス。

アシュレイはフェネクスと別れ、ベルフェゴールの下へ向かった。魔神兵と鬼神兵についての打ち合わせだ。

アシュレイがベルフェゴールのラボの前にやってくると、何だか部屋の中から喘ぎ声が聞こえてきた。

思わず彼女は耳をすまして、その声を聞く。

そして、アシュレイはごくりと唾を飲み込んだ。

ベルフェゴールは好き者である。

アシュレイは最近、ベルフェゴールを抱いていない。

欲求不満な彼女は淫魔のデリバリーサービスを利用していたのだ。言うまでもなく、性的な意味でのデリバリーだ。

「まーぜてっ」

アシュレイはノックせずに扉を開けた。

彼女が見たもの、それは数人の淫魔がベルフェゴールに集ってい

る光景だった。

彼女達の手はベルフェゴールの白衣の下に吸い込まれている。

「アシュ様……」

ベルフェゴールはその紅い瞳を潤ませ、主の名を呼んだ。
その様がアシュレイには堪らない。

「いいことしてるじゃないの……最近、抱いてなかったものね」

素早く、アシュレイは服を脱いだ。

打ち合わせが後回しになったことが確定した瞬間であった。

そして、数時間後、アシュレイとベルフェゴールは2人で向き合っていた。

来ていた淫魔達は既にその姿はない。

彼女達もアシュレイとやれたことで大満足で帰っていった。

「で、数年の内に大決戦をすることになったのだけど、魔神兵と鬼神兵の数は？」

アシユレイの問いにベルフェゴールは答える。

その顔は先程まで快楽に溺れていたとは到底思えない程に真面目なものであった。

「魔神兵が現在500体、鬼神兵が700体です。全て逆天号を用いての動作実験を終えています」

「量産ペースを上げることは？」

「極めて難しいかと。ご存知の通り、部品ごとに別の工場で作り、それらを組み立て工場に集めて一気に組み立てております。何分、各部品が精密なものですので、急激な拡張は難しいのです」

「新規に立ち上げた方が早いかしら？」

「おそらくは……ただ、あくまで現実空間でのことです。アシユ様が工場ごと取り込んだ加速空間を創れば……」

ふむ、とアシユレイは顎に手を当て、思索する。

彼女とてアシユタロスが置いていった加速と同程度のものならば造ることができる。

だが、それはある程度の準備が必要だ。

お手軽に造るとなればアレよりも性能は落ちてしまう。

「数が必要なら、そこまで高性能なものはない……いけるわね」
「工場ごと加速空間に移させる必要がありますので、そちらは私が」

ベルフェゴールの言葉にアシユレイは頷く。

「私は加速空間作成に専念しましょう。内部のスペースも出来る限り広大にしておくわ」

「お願いします」

「あと、火星の異界に念の為、鬼神兵を回すわ。前、あなたに教えたとと思うけど、アレの守護の為よ」

「初めて聞いたときは耳を疑いましたが……アレは反則もいいところですよ」

「アレだけど、三界全てに影響を及ぼせるよう、大出力のものをここに造るうと思うの」

ベルフェゴールは目を見開く。

彼女からしてもアレ　コスモプロセスは未知の塊だ。

それを完全に理解しているらしいアシュレイを彼女は頼もしく思う反面、恐ろしくもあった。

「エネルギーは人間の魂。ま、将来的に人間界で何回も戦争が起きるから、これは問題ないわ」

「完成までには何年を予定されておりますか？」

「2000年くらい。まあ設計図もあるし、エネルギーとなる魂が集まればもっと短くなる」

うんうん、と頷くアシュレイ。

ベルフェゴールは思わず冷や汗が出た。

「とりあえず加速空間を作ってくるわ。あなたは転移と加速空間内に新規に工場を立ち上げる方をやって頂戴」

「新規の立ち上げは加速空間といえど、時間が掛かりますが……」
「やらないよりはやっておいた方がいいわ」

アシュレイはそう告げ、その場を後にする。

残されたベルフェゴールは思わず呟いた。

「アシユ様は何でもやってしまいそうね……捨てられるのだけは嫌
だわ……」

成果を上げられなかったら、お払い箱とされてしまつかもしれない
という予感にベルフェゴールはその身を震わせる。

「ベッドの上で私と同じか、それ以上のアシユ様にだけは捨てられ
たくない……体の相性は凄くいいし、どんなプレイもできるし……」

不純な動機だが、彼女は悪魔なので何も問題はない。
ともあれ、決戦の準備が進められようとしていた。

アウゴエイテス

暗黒体と光体

(前書き)

独自設定あり。
短め。

アウゴエイデス 暗黒体と光体

「綺麗……」

アシュレイは目の前に悠然と立っているその巨大な鳥に思わず、そう呟いた。

地獄の荒野には少々似つかわしくない容姿であるこの鳥は全長約400m。

ペットとして飼うには少々大きすぎるサイズだ。

また、その鳥は体全体が紅く燃え盛っており、その熱は近くにある岩石を溶解してしまう程。

もともと、目の前の鳥をペットにしようなんてアシュレイは微塵も考えていない。

「あのごっつい人型光体が、墮天したらこんなに綺麗になるなんて……」

アシュレイの言葉に目の前の鳥はしよぼん、と頭を垂れた。

綺麗な尾羽根も、その言葉に垂れてしまう。

「フェネクス、もういいわ」

アシュレイの言葉に火の鳥は黒い靄に包まれていく。

靄は体全体を覆った直後に霧散した。

そこには見慣れたフェネクスの姿があった。

言うまでもないが、先程の火の鳥はフェネクスのアウゴエイデス

暗黒体であった。

恐ろしいというよりかはむしろ神聖さすら感じるのだが、それでも熾天使であったときの光体はあのごつい人型なのだから仕方がない。

基本、神族のアウゴエイデスは人型であり、とりわけ主神クラスは人間の姿のときの体がそのまま大きくなったようなアウゴエイデスである。

対する魔族は多種多様で人型もあれば獣もあつたり、異形の姿であつたりする。

「熾天使であつたときよりも、より速く動けそうです」

「そりゃ鳥だからね……」

フェネクスの感想にアシュレイはそう答え、あることを思いついた。

「フェネクス、あなたの炎で今度焼肉でも……」

「……さすがにそれは勘弁していただけませんか。熾天使のときもガブリエルにやらされて……」

何だか影を背負ってしまったフェネクス。

色々トラウマがあるらしい、とアシュレイはあたりをつけ、話題転換を図った。

「ここで聞いておきたいのだけでも」

アシュレイはそう前置きし、フェネクスに問いかけた。

「アウゴエイデス……魔族の場合は暗黒体だけでも、魔力が自らの体を覆うように物質化し、鎧となる。まあ、鎧というか、正確に言えばこの暗黒体が本体で人間っぽい姿は単なる端末というか……」

でも、とアシユレイは疑問を告げる。

「本体である筈の暗黒体を持っているヤツが極めて少ないのよ。魔神クラスは当然持っているけども、上級魔族で持っているヤツは少ない。それより下は持っていないわ」

「そのことについては前々から神族でも疑問に思われ、調査されました」

「詳しく教えて」

フェネクスは頷き、答えた。

「その結果、下位の者は本体自体が人間と同じような姿である、ということが判明しました」

何とも単純な答えにアシユレイは溜息を吐く。

そんな主にフェネクスはさらに告げる。

「おそらく、アウゴエイデスの認識が間違っていたのかもしれない。本体ではなく、単純な鎧と考えれば辻褃が合います」

「つまり、一定以上の力を持った者のみが、自らの魔力で形成できる最強の鎧？」

「おそらくは。その姿形は魂や精神に影響されるのかと」

「というか、悪魔はともかくとして神々が間違えちゃったりしていないの？」

「全知全能の神はおりませんので……」

「まあね。宗教や神話で全知全能とされていても、それはあくまで

人間視点からのもの。確かに人間からすれば全知全能に見えるかもしれないけど、実際は違う。ヤッさんが全知全能なら、戦争なんぞ起きない」

「全知全能なものはおそらく宇宙意思でしょうね」

聞き慣れない単語だが、アシュレイはすぐに分かった。

この世界を好きにできるのはこの世界のみ。

「そつちだとそつ呼んでるの？ 私は世界システムと呼んでいるのだけども」

「神族では基本、宇宙意思です。私も詳しいことは知りませんが…

…」

「ま、そこらはどうでもいいわ。とりあえず、アウゴエイデスが実は鎧だったということが分かっただけでも収穫ね」

そうすると私の本体はどっちになるんだろう、とアシュレイは思ったが気にしないことにした。

城に戻ったアシュレイ。

彼女は自室でソファに座り、リリスに血のジュースを持ってこさ

せ、リリムにその翼をブラッシングさせた。
そして、唐突に決めた。

「そろそろ世界中の女の子を集めるとしよう。その為には……」

ちらり、とリリスとリリムに視線を向ける。

2人共、はてなと首を傾げる。

「あなた達、ちょっと地球へ行って世界中の女の子を集めてきなさい。不老不死にしてあげるから、その全てを捧げろって言ってきた」

基本、淫魔達には戦闘力は皆無に等しい。

勿論、人間と戦うなら支障はないレベルであるが、主神とか熾天使とガチンコバトルするような力はない。

「別に構わないけど……私達に不老不死にするような力なんてないわよ？」

リリスの言葉にアシュレイは不敵に微笑む。

「ちょっとアシュタロスの置き土産の加速空間に籠ってくる。でもって、不老不死の薬作ってくる。3時間程待って」

加速空間換算だとたった3年で人類の夢の一つを作ってしまうアシュレイ。

とは言っても、不老不死の薬なんぞ彼女にとっては……というよりか、上位魔族にしてみればちょっと勉強すればできてしまう程度に簡単なものに過ぎない。

要は肉体の劣化と魂の劣化を食い止めればいいだけなのだ。

人間の肉体・魂の劣化とは神魔族にしてみれば線香花火が燃え尽

きるようなもの。

線香花火が燃え尽きないようにする為には幾つもの方法がある。その方法のうち、1つを使えばいいだけだ。

「アシユ様、集めた女の子はどこに？」

リリムの問いにアシユレイは数秒思索して、すぐに答えを出す。

「私が別の空間を創るからいいわ。工場取り込む加速空間も創るし……腕が鳴るわあ」

怪しい笑みを浮かべ、アシユレイは2人を残して加速空間に転移していった。

残された2人は顔を見合わせ、とりあえず他の淫魔達に知らせにいくべく、アシユレイの後を追った。

淫魔達は防犯上の理由と淫魔の数を増やすという目的の為に、リスとリリムを除けば基本、加速空間から出てこないのだ。

「ああもつ目の回る忙しさポヨヨ！ 誰か助けてポヨ！」

ニジは忙しかった。

魔神兵と鬼神兵の生産責任者であるからだ。

彼女の執務室で飛び散る書類、踊るハニワ兵、優雅にソファで紅茶を飲むヘルマン……

「待つポヨ。最後に変なのいたポヨ」

踊るハニワ兵はまだいいとして、変なのに気がついたニジ。

彼女はじーっとその変なのを見つめる。

その視線に気づいた変なの　ヘルマンはゆっくりと口を開く。

「ようやく気がついてくれたのか……」

「いつからいたポヨ？」

「君が書類の山と格闘して、助けてって叫んだときあたりから」

「最初からいたポヨか……で、伯爵が何の用ポヨか？」

ニジの言葉にヘルマンは紅茶のカップをどこかへとしまい、ゆっくりと立ち上がった。

「魔神兵と鬼神兵のスペックを聞きたくてね」

「あなたは搜索班に回されていないなかったポヨか？　地獄で遊んでていいポヨヨ？」

「今回の戦争で勝負が決まる。ちょっと前に呼び戻されたのだよ」

なるほど、とニジは頷き、問いかける。

「スペックだったポヨか？」

「うむ」

頷いたヘルマンにニジはちょいっと指を振る。

すると壁際にあつた本棚から1つのバインダーが彼の手元へとやってくる。

「それに書いてあるポヨ。適当に読んでおくポヨヨ」

「ああ、ありがとう。読ませてもらおう」

ヘルマンはページを捲り目的のものを見つけ出した。

そして、そこに書かれた数値や予想などに思わず感嘆の声を漏らした。

「戦争も変わったな……もはや殴り合いで決着がつく時代は終わったのか……」

寂しそくに呟く彼にニジは書類を処理しながら答える。

「あくまで撃破可能なだけであつて、実際にできるかはわからないポヨヨ。主神は勿論、魔王の強さも未知数ポヨ。過去の戦闘データを見ても、お互いに全力を出した戦闘はまだないポヨ」

それに、と彼女は続ける。

「おそらくそれなりの戦果は上げる筈ポヨ。でも、最終的には今までの通りの殴り合いポヨ」

「そうか……それはよかつた」

ヘルマンは嬉しそくにその顔を綻ばせる。

「用が済んだならさっさと出て行くポヨヨ。私は忙しいポヨー！」

「ああ、そうするとしよっ」

ヘルマンは部屋を辞した。

ニジは溜息一つ、バインダーを再び本棚に戻し、書類処理の速度を上げたのだった。

シンプル・イズ・ベスト(前書き)

短め。

シンプル・イズ・ベスト

工場用の加速空間やら不老不死の薬やら人間専用の空間を作り終えたアシュレイは英気を養う為に加速空間にいた。

彼女が造ったものではなく、アシュタロスが置いて行った方だ。

「アシュ様あ……」

甘い声を出してアシュレイに擦り寄るのはリリースでもリリムでもない。

2人は地球に赴いて、人間を契約によって地獄へ連れてくる任務についている。

契約を結んだ人間は不老不死の薬を与え、そのまま地獄にあるアシュレイの創った人間専用の加速空間に入ることになっている。

無論、契約相手は人間の女のみだ。

そんな理由でアシュレイの周りには2人を除いた無数の淫魔達が蠢いていた。

英気を養うという名目で、アシュレイは久しぶりに全力で膨大な数の淫魔達の相手をすることに決め、ここにいた。

加速空間内で数百年程かかったが、そこは別に問題はない。

右を見ても左を見ても女体しかない天国にアシュレイはその身を埋めながら、どうしたものか、と考える。

アシュレイは自らその軍団の指揮を取ったことがない。

今回の決戦では彼女の軍団が主力となることから、さすがに自らが指揮を取らざるを得ない。

「まあ何とかなるか。もう少しここにいよう」

そう呟き、アシュレイはちょうど目の前にあった大きな乳にかぶりついた。

アシュレイがのんびりしている間、ニジはフラフラしながらも、ベルフェゴールにその成果を披露していた。

「ふ、ふふふ……これでどうポヨ！」

ニジは目の前に並ぶ無数の魔神兵、鬼神兵を指さした。ベルフェゴールは感心したようにそれらを見つめる。

決戦予定日……Xdayまであと僅か。

生産責任者であるニジは効率性を極限まで重視し、事故を何度か起こしながらも、魔神兵6100体、鬼神兵9400体を揃えることに成功した。

魔神兵が年産3000、鬼神兵が5000を目指していたことを

考えれば決戦が決まっただけからおよそ2年分の生産に成功したことになる。

まあ、決戦から今日まで3年の期間があっただが、通常は数年かけて目標に近づけていくのだが、それを短縮していることは驚くべき成果であることは間違いない。

これらに加え、先行量産やら何やらで作った分も含めて魔神兵7200、鬼神兵12500体。

その性能を考えれば余程の事態が起きなければ魔族の勝利は約束されたようなものだ。

「これで勝てるポヨ！ 例え主神達の力が予想より上回っていたとしても、兵力差で勝ちポヨ！」

「あとは運んで設置するだけね……具体的な作戦とか聞いてる？」

「……聞いていないポヨヨ。アシユ様が立てているとは思ってポヨ」「一応、問い合わせをしておくべきかしら……」

そう言いつつ、ベルフェゴールはアシユレイと会う口実ができたことに感謝する。

おねだりすれば彼女がやってくれることをベルフェゴールは知っていた。

「私は休むポヨヨ。ベルフェゴール様、お疲れ様でしたポヨ」

フラフラした足取りでニジはその場を後にした。

もう転移する気力も残っていないらしい。

そんな彼女にベルフェゴールは思わず苦笑してしまった。

そして数時間後、加速空間から戻ってきたアシュレイは自室に必要なメンバーを集めていた。

テレジア、ベアトリクス、シルヴィア、ベルフェゴール、ディアナ、エシユタルそしてフェネクスとそうそうたる面子だ。

「で、ベルフェゴールから問い合わせがあったんだけど、具体的な作戦について説明するわ」

彼女はそう前置きし、告げる。

ちなみに作戦は加速空間で彼女が3日で考えたものだ。

「囿を使って神族をおびき寄せて、のこのこ出てきた連中を乱戦に持ち込んだところで囿ごと魔神兵で吹っ飛ばす。囿はなるべく下級魔族を使う。以上」

シンプルイズベストを地でいくような作戦だ。

まあ、マトモな作戦行動ができない程に練度が低い軍団が大半なのだから仕方がない。

唯一、虎の子といえる41番目の軍団はなるだけ温存しておきたいのがアシュレイの本音だ。

「下級魔族ですが、予備兵力から編成しますか？」

「そうして頂戴。とりあえず200万もいれば囿として十分でしょう。で、うちが露払いした後にアペプ達が戦場に降臨する。そしてら向こうも主神連中が出てくるだろうから、そうなたらもう魔神

兵は使えないと思っ正しい」

「スペック的には魔神兵は主神クラスを撃破できる威力の攻撃を、そして鬼神兵は主神クラスの攻撃を3回なら耐えられる程度にはなっております。また、数の面でも圧倒的に上回っておりますが？」

ベルフェゴールの問いにアシュレイは肯定するかのように頷く。

「だけど、それはあくまでこれまでの戦闘データを元にしたものよ。主神連中が全力で戦ったことはまだないわ。全力を出したらどうなるか、言うまでもないわね」

なるほど、と頷くベルフェゴール。

「ベアトリクス、シルヴィア、ディアナ、エシユタルは主神連中が出てきたら出撃よ。一応、一緒に41の軍団を全て出すけども、正直アテにならないと思っ正しい」

4人が頷いたのを確認し、アシュレイはテレジアに視線を向ける。

「テレジアとフェネクスは4人が出撃して、30分後に出撃よ。その頃には程良く乱戦になってるでしょう。ベルフェゴールは逆天号で適当に指揮を取っ正しい頂戴。魔神兵と鬼神兵を使っ正しい、主神以外の雑魚連中を掃討して頂戴」

主神と魔王や魔神との戦いにそれ以下の神族は割っ正しい入ることはできないから、と彼女は付け加えた。

無論、これは魔族側にも同じことが言える。

故に比較的弱い魔族は同じように蚊帳の外にいる神族と戦っ正しいことになる。

「私は主神か魔王か、上位の連中が誰か1人でも倒れた瞬間に参戦するわ。倒れた瞬間は誰もが一瞬呆然とする。その隙を突く」

漁夫の利を狙う、と宣言するアシュレイ。

彼女の行動はある意味最高のものだ。

主神が1人でも倒され、その直後にアシュレイが奇襲をかければおそろくもう1人、主神を食べる。

たとえ、魔王の1人が倒されようともアシュレイが奇襲をかけて主神を食べばトントンド。

一石二鳥な作戦だが、うまくいくかどうかは未知数だ。

「で、あとリリスとリリム、その他全ての城にいる者達には決戦が始まったら加速空間に入って閉じこもるように言っておく。ありえないけど、泥棒が城に入ってくるかもしれないし」

泥棒が侵入できぬよう強固な結界に覆われ、様々な魔法式・機械式を問わない凶悪なトラップがひしめいている。

そして、それらを掻い潜って侵入したとしても、帰ってくるアシュレイにより悲惨な目に遭うことになる。

よほどの物好きでなければ侵入しようとは思わないだろう。

「あとは……そうね。その下級魔族の囹軍団に名前でもつけましょうか。士気を上げる為の軍団名よ」

「どんな名前ですか？」

フェネクスという言葉にアシュレイは不敵に笑う。

「特別打撃軍よ！ 特別攻撃軍と迷ったけど！」

「シンプルですね」

そう返すフェネクスにえへん、とアシュレイは胸を張る。
そんな彼女が妙に微笑ましく思い、フェネクスは頬が緩みそうになるのを必死で堪える。

そんな彼女の苦勞を知らず、アシュレイは高々と宣言した。

「私がイイと思ったらそれはイイものなの。つまり、この名前はイイものなの」

物凄い論理だが、この場には誰も彼女を止める人物がいなかった。

「で、私、今からどうしようかと思うんだけど……暇だからドレミと遊ぼうかな」

そんなアシュレイに1人の例外を除き、視線が集中する。
彼女はその視線に気づかない振りをして、フェネクスへと視線を向ける。

彼女は唯一、アシュレイに視線を送ってなかった人物だ。

「フェネクス、抱き枕になって欲しいな」

「……はい？」

瞬間、フェネクスに向けられる殺意の籠った視線。
彼女は背筋に寒気が走った。

「この鳥が……」

「焼鳥にしてやるつかしら……」

何やら不吉な言葉まで聞こえてきた。

だが、ここでアシュレイが睨んでいる彼女達に一言告げた。

「あなた達、私の決定に不服があるの？」

確信犯的な顔の彼女に対して、殺意の籠った視線を向けていた面々は押し黙る。

バツの悪そうな顔になった面々　テレジア達にアシュレイはフオローの一言を告げる。

「安心なさいよ。決戦の後、私、たぶん、すごく昂ってるから、あなた達全員を抱くから。あ、フェネクスは逃げときなさいね」

「はあ……あの、アシュ様、そもそも抱き枕って何ですか？」

おずおずとフェネクスが問いかける。

「フェネクスは火の鳥だから暖かい。そしてその翼はもふもふで程よい感触。これはもう一緒に普通に寝るしかないと思った」

「確かに私の体温は少々高めですが……私でいいのですか？」

「あなたがいいの。安心して。何にもやらしいことはしません。私の名に誓って」

無駄なところで名に誓っているが、フェネクスとしてはこれ以上ない言葉だ。

名に誓う、ということとは自身の存在に誓ってということ。

一般的に契約を何よりも重視する悪魔がそう言ったということは絶対にやらしいことをアシュレイはしない。

「わかりました。そこまで言うのなら……」

了承するフェネクスに万歳するアシュレイ。

そんな彼女を可愛らしい、と思ってしまうフェネクスであった。

そして、テレジア達は将来的に起こる狂乱の宴に胸を高鳴らせていた。

その宴のことを思えば、今の抱き枕の件なんぞ些末なことに過ぎなかったのだ。

ともあれ、決戦は秒読み段階に達していた。

決戦の幕開け

アシュレイは逆天号のブリッジに設けられた席にぼーっと座っていた。

彼女と同じくテレジア達もまた手持ち無沙汰だった。

また、魔神兵と鬼神兵の指揮を取るベルフェゴールもオペレータ席に座って、暇そうにしている。

彼女達の目の前には巨大なスクリーン。

そこに映しだされているのは囙達の様子だ。

囙達が展開してから早数時間。

神族は中々やってこなかった。

やがて、アシュレイはあまりにも暇過ぎるので、寝ようかなと思っただけであった。

「高エネルギー反応多数！」

オペレータの1人が緊張した面持ちで声を発した。

「空間歪曲を確認！ 来ます！」

別のオペレータがそう告げた瞬間、幾つもの箇所空間が割れ、そこから無数のフネが同じく数えきれない程の天使達と共に出てき

た。

「神界の艦隊だが……どうやら繰り出せる艦を全て出してきたらしい。おそらく、ゴタゴタのために一気に勝負をつけたい筈だ。ウリエルがラファエルが指揮を取っているだろう」

フェネクスの言葉にアシュレイは軽く頷き、次の展開を待つ。出現した神界の艦隊は囷達に対して一斉に攻撃を加える。

数多のレーザーの如き艦載砲が空間を蹂躪していく。掠れば上級魔族ですらも一瞬で蒸発するだろうエネルギーの乱舞。囷達は大幅に数を減らされながらも、遮二無二突撃していく。その突撃している間にも敵艦隊の攻撃に櫛の歯が欠けるように数を減らしていく。

「我が軍の一部が敵艦隊に取りつきます」

オペレータの声。

アシュレイならずとも、すぐにその後の展開は予想がついた。直掩の天使達が艦隊の弾幕を突破した魔族に集り、あつという間に落としていく。

その光景に頃合いよし、とみたアシュレイは両目を閉じ、その魔力を集中させる。

彼女が使うのは召喚魔法。

ただ、その規模が違うのは言うまでもない。

やがて逆天号前方数百kmのところ召喚陣が幾つも描かれる。

そして、その陣から淡い光と共に魔神兵が、鬼神兵がその威容を顕にする。

地獄から直接召喚された彼らは現れるや否や、ただちに逆天号とリンクを形成し、最終チェックが行われる。

そのチェックをしている間にも新たな召喚陣が形成され魔神兵が、鬼神兵が続々と現れる。

如何にアシユレイといえど、およそ2万体の大質量の物体を一度に召喚するのは難しかった。

ただ、それでも召喚される速度は凄まじく、さながらコンピューターによるプログラムの並列処理だ。

1つのプログラムが開始された瞬間、次のプログラムが開始され、開始された瞬間にまた別のプログラムが開始される……そのような有り得ない速度。

なお、転移魔法を使わなかったのは、転移魔法を使うときに術者がその物体の傍にいないとできない為だ。

10分足らずでアシユレイは全ての兵隊を召喚し終えた。

囷達も初撃で4割近くが落とされたにも関わらず、今や敵艦隊外縁部で天使達と殴り合っている。

囷の数が多いことが幸いしていた。

「敵艦数概算1200、天使数は50万」

オペレータの声にフェネクスは告げる。

「やはり神界の全てのフネを繰り出しています」

「こちらとしては好都合だわ。しかし……神界のフネは流線形で洗練されていて綺麗ね」

アシュレイはそう答えた。

鳥もしくはイルカのような洗練されたフォルムに彼女は羨ましかった。

何分、自分が乗っているフネはでっかいカブトムシである。

それも比喩的な意味ではなく、誰がどう見てもカブトムシにしか見えない程にあからさまだ。

「カブトムシはさすがの私も予想できませんでした」

フェネクスがそう言った瞬間、傍にいたシルヴィアが彼女の脇を小突いた。

その行為に失言だったかな、とフェネクスが思ったとき、アシュレイは盛大に溜息を吐いた。

「だから宇宙戦艦ヤマトにしろ、とあれほど言ったのに……」

何やら地雷を踏んでしまったらしい、とフェネクスは口を閉じることにした。

同時に彼女は思う。

今度、アシュレイの歩んできた道……すなわち、過去を聞いてみよう、と。

地雷をこれ以上踏まない為にも、聞いておいたほうがいい、と彼女は判断した。

何だかんだでアシュレイ程親しみやすい上司をフェネクスは聞いたことがない。

きつと教えてくれるだろう、とそういう予感があった。

「チェック完了！ 砲撃準備完了！」

スクリーンに映しだされた敵艦隊を包みこむように半円状に展開した魔神兵達。

その射線に入らぬようにいる鬼神兵達。

その大きさと数から圧巻の光景だ。

「神仏照覧……いよいよ桧舞台ですね」

エシユタルが告げた。

比喩でも何でもなく、神も仏もこの光景を見ているだろう。

そして、最初で最後の神魔族が全力を出す戦闘となるだろう。

また、これ以前にただ1箇所にて全ての神々と悪魔が集ったことはなく、これ以後もおそらくないだろう。

その開幕を告げる号砲を鳴らすのは他ならぬアシユレイであった。アシユレイは自らがありとあらゆる歴史に残るだろうことを確信し、その身を震わせる。

歴史の最先端を歩み、歴史を紡いでいることを、今、彼女は実感する。

彼女の前に歴史は無く、彼女の後に歴史が残る。

高揚感に包まれながら、アシユレイは短く声を発した。

「撃て」

瞬間、スクリーンに映し出されていた魔神兵達はその火筒から光を放つ。

それらは光速の数割という恐ろしい速さで敵艦隊へと迫り、その半数以上を飲み込んだ。

天使も魔族も等しく消えてなくなった。

「敵艦総数320隻、天使総数およそ12万」

若干天使の数が多いが、大きな艦艇と比べれば機動力に雲泥の差があるので、致し方ない。

「アレが旗艦です。艦名はサンダルフォン」

フェネクスはスクリーンの一部に小さく映っていた艦を指さす。

「天使の名前を艦名にしているの？」

ディアナの問いにフェネクスは頷く。

それにベアトリクスは思う。

「……もし、艦艇を造るなら私の名前も艦名になったりするのだからか」

「いや、私の名前だな」

対抗心丸出しでシルヴィアが告げた。

む、と彼女を睨むベアトリクス。

「何を言っている。私に決まっているだろう」

子供形態時はぺったんこに等しい胸を張ってそう言うエシユタル。

そんな様子を微笑ましく見守るアシュレイ。

テレジアはその論争には参加せず、アシュレイに血のジュースを差し出す。

ちやつかり点数を稼いでいるテレジアであった。

「ともかく、そのサンダルフォンでは何が起きたかと混乱に包まれ

ているだろう。魔神兵の発するエネルギーは砲撃間近にならねば驚くほどに小さい。鬼神兵も同じように」

ベアトリクスは話題を変えた。

さすがにこの状況で痴話喧嘩をするつもりはない。

「再充填完了」

そうこうしているうちにベルフェゴールが告げた。

「撃て。以後、斉射ではなく、装填完了したものから順次撃ちなさい」

アシユレイの指示にベルフェゴールは了解、と返し、コンソールを操作していく。

2度目の砲撃。

だが、今度は不意打ちではなかった為か、命中率はあまりよろしくない。

「敵艦艇266、天使数およそ11万」

そのオペレータの報告にアシユレイが口を開きかけたそのとき。

「右翼に展開した魔神兵30、鬼神兵20が撃破されました！」

ベルフェゴールの叫びに誰もが皆スクリーンに目をやった。

「何よアレは……」

ディアナの眩きはその場にいる全員の心を代弁していた。

光に包まれた何かが、恐ろしい速さで飛び回っていた。
光速をも捉える彼女達の知覚を持ってしても、その何かは有り得ない速さで動いていた。

そうこうしている間にベルフェゴールのコンソールにはリンクから脱落していく魔神兵、鬼神兵達が次々と現れていく。

その時、待機しているアペプからアシュレイに念話が入った。

『向こうのお偉いさんが来たぞ』

ただ一言。

それで事足りた。

やがてその光の物体は方向転換し、ある地点に向けて向かっていき、目的地にたどり着くと停止した。

それは1本の巨大な槍であった。

そして、その空間が割れた。

瞬間、逆天号にいる全ての者が今まで感じたことのない大きな圧力を感じた。

神聖さに満ち溢れ、宇宙全てを覆い尽くすかのような、膨大な神気。

光と共に、彼は現れた。

8本脚の白い馬に跨り、その身に甲冑を纏い、青いマントを羽織った老人。

その片目はなく、長い白いヒゲがあり、その手は先程の槍を握った。

「巨大な人型光体……主神オーディン……」

アシュレイが呟いた。

スクリーンに映ったオーディンは再びその槍　グングニルを投擲する。

瞬間、魔神兵が鬼神兵が次々と撃破されていく。

「ベルフェゴール！　反撃！」

呆けていたベルフェゴールをアシュレイは叱咤。

その声に彼女は素晴らしい速さでコンソールを叩き、魔神兵達の射線にオーディンを捉える。

鬼神兵達はオプシオンである長大な盾を構え、防御体勢に入り、魔神兵達の周囲を固める。

オーディンはグングニルを手元に戻し、面白いとばかりに笑みを浮かべ、再び投擲した。

瞬間、全ての魔神兵達が反撃の光を発した。

膨大なエネルギーがオーディンに集中する。

回避すら行わない彼にアシュレイ含め、直撃を確信した瞬間、彼の周りの空間が輝いた。

現れる無数のルーン文字。

それらにより、その全ての光の矢は彼に当たらずにあらぬ方向へと逸らされる。

「ルーン魔術……あんなデタラメだったかしら……」

アシュレイの言葉も当然だ。

如何に反射や歪曲、その他様々な防御のルーンを組み合わせようとも並大抵であれば押し潰される。

だが、他ならぬルーンの発見者である彼の魔術が並大抵である筈がない。

「鬼神兵が、防御体勢に入った鬼神兵が盾ごと潰されています！」
ベルフェゴールが信じられない光景に叫んだ。

「まあ、当然かしら……」

対するアシュレイはそこまで失望はしていない。
元々想定できた事態だからだ。

「ちなみにグングニルはどのくらいの速さで飛んでるのかしら？」

オペレータに問いかけると、呆然とした声で解答が返ってきた。

「光速の1・47倍です」

「見た感じ、まだ全力で投擲してるってわけじゃないみたいね……」

アシュレイは困った表情でそう呟く。

本気で投げてはいるが、全力を出してはいない。

そういう風に見えた。

そのとき、アシュレイに再びアペプから念話が入った。

『そろそろ出る』

『了解。武運長久をお祈りするわ』

アシュレイはそう返し、告げた。

「テレジア、ココアを持ってきて頂戴。砂糖とミルクアリアリで」
「畏まりました」

主の言葉にテレジアはすぐに反応し、ブリッジを後にする。

「ベアトリクス達は他の主神が出てくるまで待つことにしましょう。
彼だけじゃないわ」

その後、アペプが軍勢を引き連れて降臨した。
対するオーデインも自らの軍勢を召喚する。

「ほう……」

アシユレイは思わず身を乗り出した。

オーデインが召喚した軍勢の先頭にいるのはペガサスに乗り、鎧
と羽根のついた兜を身に纏った見目麗しい女性達。

その手には剣や槍などの武器と盾を持っている。

そして、その後続くのは甲冑を纏い、様々な武器を持ち、馬に
乗った勇壮なる戦士達。

ヴァルキューレ、そしてエインヘリヤルであった。

瞬く間に両軍は激突し、熾烈な戦闘が繰り広げられる。

その軍勢同士の戦いから少し離れて、オーデインとアペプもまた
戦闘を開始した。

愛馬スレイプニルで縦横無尽に駆けまわり、槍を投擲し、足止め
の為に魔術を投げかけるオーデイン。

対するアペプは自らの鎧である大蛇の姿で光すら飲み込んでしま
う闇を辺りにまき散らし、自らの姿を隠すと同時にスレイプニルに
一撃を加えようとする。

まずは機動力を奪おうというのだろう。

また、その闇はグングニルからも身を隠す深淵のようだ。
でなければ必ず命中するその槍が、外れるわけがない。

「神話の戦いだわ……」

アシュレイはぼつりと呟いた。

そして、かつてない程に気分が高揚するのを感じる。

自らもまた、あの場に出ることができ………そういうものであった。

しかし、テレジアが持ってきたココアのマグカップ片手ではどうにも締まらなかった。

「超高エネルギー反応！ 主神クラスです！」

「ベアトリクス、シルヴィア、ディアナ、エシユタル」

オペレータの声にアシュレイは名を呼ぶ。

「他の魔王がすぐに出てくる。もう少し待って」

その言葉に彼女達は頷く。

スクリーンは出現地点と思われる空間を映しだし、それから数秒と経たずにそこが割れた。

同時に襲ってくる先ほどと同じ大きな圧力。
現れたのは巨大な白い象に乗り、頭には冠、その身には甲冑。

「インドラ……いえ、帝釈天と言った方がいいのかしらね」

もうごちゃまぜ、神話のクロスオーバーね、と彼女は呟いた。
オーデインと帝釈天が肩を並べて戦うなど人間ならば誰も想像で
きないだろう。

そして、現れた帝釈天の背後から更に何人も神が現れる。
うち、アシュレイの目を引いたのは阿修羅、そして毘沙門天だ。

「思っただけど、帝釈天一派が今回の戦争の発起人じゃないのかし
ら……」

アシュレイの予想は正解であった。

帝釈天達を中心となって魔族討つべし、の機運を盛り上げ、事に
及んでいたのだ。

ともあれ、帝釈天達が現れてすぐにセトやスルトをはじめとした
魔王や魔神が軍勢を引き連れて降臨する。

それからさらに数分間にホルスなどのエジプト系神族が降臨し
たり、建御雷神などの日本系神族が降臨した。

神族側も魔族側も既にアシュレイの一派など知らぬとばかりにお
互いを攻撃し合っている。

「そろそろよ。準備しなさい」

アシュレイは短くそう告げたのであった。

戦後の発言力を見据えて（前書き）

微工口あり。

独自設定・解釈あり。

戦後の発言力を見据えて

「ベアトリクス、シルヴィア、ディアナ、エシユタル」

アシュレイは4人の名を呼んだ後、1人1人に抱きついていく。まあ、彼女達も既にその力の強さから魂の牢獄に囚われている為に死んでも蘇るのだが。

「存分に暴れてきなさい」

アシュレイはそう告げた。

4人は言葉なく、ただ頷き、一斉にその場から転移した。スクリーンに映った4人。

彼女達はそれぞれ扇状に広がると、自らの鎧　暗黒体をその身に纏う。

ベアトリクスは黒い獅子にその姿を変え、その背中にはコウモリの如き翼がある。

彼女をはじめ、シルヴィア、テレジアは人間形態のときは翼も角もないが、アウゴエイデス時には悪魔らしい特徴的な翼や角があった。

シルヴィアはその身を黒い竜へと変化させる。

一見、極々普通の、よくある竜だが、その尻尾は蛇となっている。また、彼女の鱗からは神聖な者のみを汚染する暗黒物質を放出している。

ディアナはその身を黒いマンティコアへと変化させる。
その尾には無数の毒針があり、その口からは猛毒の吐息が零れ出る。

エシユタルはその身を黒い羊へと変化させる。

その体を覆う体毛は攻撃を跳ね返す為に弾力性・伸縮性等に富んだものであり、またの体毛1本1本を毒針と蛇に変化させることができる。

それぞれの暗黒体の大きさは数百mにも達する。

彼女達は手近な獲物に狙いを定めると、躊躇なく突っ込んでいった。

戦場は混沌の坩堝と化し、秩序だった戦闘などは既に望めない状況だ。

主神や魔王、魔神が戦っているフィールドから少し離れて、下位の神魔族が熾烈な戦闘を繰り広げている。

そして、ベアトリクス達が主神達との殴り合いに参加した直後、アシュレイは41の軍団に下位神族への攻撃を指示した。

「テレジア」

指示を出し終えた彼女はテレジアを呼ぶ。

「ちょっと屈んで」

アシュレイの指示にテレジアは跪く。

「ああ、ちょうどいい感触だわ」

彼女はテレジアの頭に手を載せ、その柔らかな金髪の感触を堪能する。

フェネクスはそれを見て、ちょっとだけ羨ましく思ったが口には出さない。

ベルフェゴールはベルフェゴールで、下位神族に魔神兵をけしけるので忙しく、アシュレイが何をしているかなどに気を配る暇がない。

しばらくアシュレイは撫でていたが、その手を止め、フェネクスに告げた。

「ちょっと席を外すわ。テレジア、ついてきなさい」

アシュレイはそう告げ、テレジアと共にブリッジを後にした。

やがて2人はアシュレイの部屋にたどり着いた。
艦内とは思えない程の広さのそこには豪華な調度品の数々と共に
大きなベッド。

とはいえ、さすがのアシュレイといえど今から抱く気にはなら
ない。

「テレジア」

アシュレイはテレジアをまつすぐにその翠の瞳を見据える。
エメラルドのような綺麗な瞳だ。

「あなたとは一番長い付き合いね」

「はい、今でも鮮明にあの時のことを覚えております」

テレジアは穏やかな表情でそう答える。

「テレジアには私の初めてを全部あげたわね……」

アシュレイは恥ずかしそうにやや視線を逸らす。

彼女はテレジアを作って数日後に今まで溜まった鬱憤を全部彼女
で晴らした。

それがアシュレイの初めてであった。

「私はとても嬉しかったです。私もまたあなたに全ての初めてを捧
げることができて……」

うつとりとした表情でテレジアはそう返した。

彼女にしてみればこれ以上ない幸福だ。

「テレジア、おそらくこの戦争は負けるわ」

アシュレイは真摯な顔で告げた。
対するテレジアもまたその顔を引き締める。

「私もおそらく封印されるか、それとも長い時間を掛けて蘇生ということになるかもしれない。私がない間、任せたわ」

「……それはもう決定なのですか？ あなたがそうなることは」

テレジアはその瞳に悲しみに満ちし、そう問いかけた。

「決定よ。何しろ、まだヤツさんも竜神王も仏陀も、それに帝釈天と並ぶ梵天も出てきてない。残念だけど、彼らが出てくるのはこっちが消耗したとき。今は魔族と神族は互角に戦ってるけども、彼らが出てきたら神族に天秤は傾く」

「アシュ様が出ない、という選択肢はないのですか？」

「それはない。だって、私は戦ってみたいの。私の全力がどこまで通じるか……まあ、人間だった頃はまさか自分がヤツさんとか仏陀とかと戦うとは思ひもしなかつたけども」

アシュレイの言葉をテレジアは全て理解できる。

すなわち、彼女は知っていた。

アシュレイの経緯を。

テレジア以外にもシルヴィア、ベアトリクス、エシュタル、ディアナ、そしてリリスとリリムが知っている。

つまり、フェネクスを除いた側近達は全員知っていた。

「アシュ様が人間であった、ということを知ったときは驚きました」
「でも、全然気にしないのよね、皆」

「はい、何よりも今が大事です。今、あなたは魔神であり、私達の

主である。ならばあなたの過去なんぞ些末事に過ぎません」

そう言っただけのけるテレジア。

主の過去を些末事と片付けるあたり、中々に肝が据わっている。

「リリスとかは大喜びしてたわねえ……無限の欲望だーって」

人間の欲望には限りがない。

それは性欲にも言えること。

リリスやリリムにとってはそれは大歓迎であった。

「アシュ様、私も戦場に出ます。もしかしたらやられてしまうかもしれないませんが……私に頼んでよろしいのですか？」

「本当ならあなたには城の保全とか領土の保全とかに回って欲しいかつただけど……この戦いで全ての戦力を出しておかないと、戦後、地獄で発言力が低下しちゃう可能性があるのよ」

「……政治ですか？」

その問いにアシュレイは頷く。

「高度に政治的な判断というヤツよ。それに、ここで小さな汚点を残すのは嫌だしね」

アシュレイの言葉は自分の為であることを示しているが、テレジアは何も不快に思わない。

彼女にとってアシュレイの判断こそが何よりも優先されるからだ。

「もしやられそうになったら、どさくさに紛れて逃げていいわ。むしろ、戦後の発言力向上の為にはある程度の軍団は残しておかないと駄目」

「畏まりました。では、適当に戦ったら全ての軍団を私の判断で引き上げます」

「そうして頂戴。あなたに委任するわ。で、私はあなた以外の子達と一緒に主神と戦って武勇伝を残しておく」

「私も武勇伝を残したいのですが……」

「じゃあ適当な上級神族と戦っておきなさいよ」

「そうさせて頂きます……あの、アシュ様」

テレジアはもじもじしながら、アシュレイへと視線を送る。

「その……最後にキスしていただいてもよろしいですか？」

そのおねだりにアシュレイは笑みを浮かべ、頷いた。

彼女はテレジアの腰に手を回す。

テレジアはゆっくりとその両目を閉じ、その時を待つ。

アシュレイは少し背伸びをして彼女の唇に自らのものを重ねあわせた。

触れるだけの軽いキスに終わらせない、とテレジアは自らの舌でアシュレイの唇をこじ開け、口内へと侵入させた。

そして、アシュレイもまたその舌を受け入れ、自らの舌と絡ませる。

広い部屋に響く水音が木霊した。

それからアシュレイはテレジアにその場で作成した封緘命令書を手渡した。

無論、内容は既に伝えてあり、簡単にいえばこの命令書はアリバイ工作だ。

テレジアが残った軍団を纏める為の。

そして、2人はブリッジへと戻った。

ブリッジではフェネクスが2人を出迎えた。

彼女は特に何も言うことなく、いなかった間に起きた状況を手短かに伝える。

状況を把握したアシュレイは呆れたように告げた。

「つまり、何にも変わってないのね」

「簡単に言えばそうです。当初の予定より早いですが、出まじょうか？」

フェネクスの言葉にアシュレイはスクリーンに目をやる。

両軍が赤と青で示された駒が表示されており、それらは目まぐるしく変化している。

赤が魔族で青が神族だ。

それを見る限りでは程良く乱戦どころか、戦場は混沌となってい

ることがよくわかった。

「いいわ。出なさい」

そう告げたアシュレイはベアトリクス達4人にしたように、フェネクスを抱きしめ、そしてテレジアを抱きしめた。

そして、2人はその場から転移した。

フェネクスは宇宙空間に飛び出すなり、その身を炎の鳥へと変化させる。

一際目立つその容姿に早速神族達が集まってくるが、体全体から熱線を発し、一瞬で焼き尽くす。

テレジアはそんなフェネクスを隠れ蓑にし、より進んだところでその身を変化させた。

その姿は黒い大蛇だ。ただ、その背中にはは金色の翼、頭には2本の角が生えている。

彼女はそのまま光速に等しい速度で戦場を疾駆していく。

「久しぶりにテレジアの暗黒体を見たわ」

席に座り、観戦していたアシュレイは満足そう呟いた。

「さて、いよいよ私の出番が近くなった……真打はラストに登場と
はよくいったものね」

彼女は若干の不安、そして圧倒的に大きな興奮を感じていた。

未だにヤーウエ、仏陀、竜神王、梵天などが降臨していない。

もし、彼らがアシュレイが出ると同時に降臨したら、さすがの彼女といえど敵わない。

彼女が使う次元転移シールドといえど、致命的な弱点がある。

別世界へと逸らすというのは確かに恐ろしい防御だ。

天使や主神の攻撃すらも逸らしてしまう。

次元転移シールドは極論すれば極薄の膜だ。

その膜は質量のない攻撃を取り込み、逸らしてしまう。

逆に言えば質量のある攻撃には非常に弱い。

故にオリジナルの究極の魔体も、次元転移シールドを突破される可能性を考慮して、膨大な数の近接砲を備えていた。

もし次元転移シールドが弱点のないものであるならばそれらは必要なかった筈だ。

無論、アシュレイもこの弱点を埋めるべく、非常に嫌らしい防御魔法を既に構築している。

しかし、戦争は数だ。

数の暴力の前には敵わない。

そのことをアシュレイはよく知っていた。

それでも彼女は不敵に笑う。

なぜならば近距離に飛び込んでくれば相手に文字通り喰らいつくことができるからだ。

彼女は相手の血を吸い、肉を喰らえばその力を得ることができる。

戦争の行方がどうなるにせよ、主神の力が手に入るのならば悪くはなかった。

「まったりと待つとしましょ……そのときを」

背もたれに体を預け、のんびりとすることに決めたのであった。

戦後の発言力を見据えて（後書き）

1ヶ月連続更新祝ッ

我が名はアシユタロス(前書き)

独自設定あり。

会話文ほぼなし。

我が名はアシユタロス

戦況はほぼ互角であった。

神族魔族、両者共一步も譲らず、死力の限りを尽くして戦っている。

テレジア達もまた主神や上級神族相手に一步も引かずに殴り合いを演じている。

その様子をアシユレイはまったりと観戦していた。

今はまだ彼女にとっては他人事。

しかし、次の瞬間、アシユレイは身を乗り出した。

スクリーン上にある一際大きな赤い駒。

それは魔王クラスを示しているが……それが唐突に消えた。

魔王の1人が敗れたという報告を聞き、彼女はゆっくりと席から立ち上がった。

「征く」

短く告げ、アシユレイは暗黒の宇宙へと転移した。

宇宙空間を進みながら、彼女は逆天号からの報告を聞く。
それによれば神族・魔族共に魔王が敗れたことに気を取られてい
るとのこと。

遠見魔法でもって、適当な神族達を見てみれば、バカみたいに全
員が全員、敗れた魔王がいたところを見つめている。

あと1分もしないうちに戦場は凧をやめ、荒れ狂うだろう。やる
ならば今しかない。

アシユレイはすぐさまその身に暗黒体を纏う。

三つ首七尾の巨大な竜。

新たに現れた膨大なエネルギーを放つ魔王クラスの暗黒体に、神
族魔族問わず、誰もがアシユレイの方向へと目を向けた。

しかし、そのとき既に彼女の攻撃は開始されていた。

三つの口から放たれる全力のプレス。

その速さは光よりも速い。

彼女が狙ったのは今回のきっかけをつくった怨敵、帝釈天。

しかし、プレスは彼の周囲を守っていた仏教系神族を焼き払った
に過ぎなかった。

それをきっかけに凧は終わった。

アシユレイ目がけてすぐさま天使達が動く。

数えるのもバカらしい程に膨大な数の天使達がアシユレイ目がけ
て飛んでくる。

神々しいその軍勢から放たれる神霊力を圧縮した光線 神霊砲。

天使達と同じ数だけ撃たれた膨大な破壊エネルギー。

惑星1つ消し飛ばしてしまう程の威力だが、アシュレイには通じない。

全ての神霊砲はアシュレイに当たる手前で次元転移シールドに逸らされる。

お返しとばかりにアシュレイはプレスを放つ。

3つの首から放たれるプレスはより広範囲を薙ぎ払おうと首をあちこちに動かす。

向かってきた天使の半数以上は回避が間に合わずに蒸発し、また流れ弾として結構な数の魔族にも当たり、同じく蒸発した。

それに慌てて魔神未満の魔族達が離れていく。

その圧倒的な威力の攻撃、そして無敵に等しい防御を前にしてな

お、天使達は挫けない。

次元転移シールドのことは彼らもまた知っている。

だが、より接近して放てばダメージを与えられるかもしれない…

…そう判断し、散開しつつ、高速で接近してくる。

だが、その向かってくる天使達の中の最高位は智天使。

熾天使ですら敵わないアシュレイに、それ以下の天使がどれだけ集まろうと敵う筈がない。

アシュレイは魔法を使う。

この状態の彼女はもはや呪文名を告げる必要すらない。

瞬間、彼女を中心に積層型の立体魔法陣が高速で構成されていく。何事だ、と天使達は進軍をやめた。

その魔法陣は半径数kmにまで達したところでようやく、完成する。

天使の軍勢は魔法陣の外側で様子を窺っていたが、彼らは感知した。

急速に空間が歪んでいくことを。まずい、と離脱しようとしたときには既に遅かった。

魔法陣の内外が一気に爆発した。

その爆発により、天使達以外にもアシュレイに群がろうとしていた上級神族達は巻き込まれ、命を散らす。

空間を歪ませ、一気に元に戻せば反動でもって大爆発が起きる。

通常の爆発ではない故に広範囲に対して高威力を誇るこの魔法にアシュレイはイベポレーションと名付けた。

近場の雑魚を一掃したアシュレイはその巨体を光速で動かす。

転移は使えない。

出現時に空間の歪みが生じるといふ決定的弱点があるからだ。

アシュレイは自らに近寄ってくる雑魚を跳ね飛ばしながら、一直線に帝釈天一派の下へ向かう。

乱戦となつては手近な敵を攻撃するしかないのだが、敢えて彼女は帝釈天一派を狙いに定めた。

とりあえず、殴っておかなければ彼女の気が済まなかった。

向こうもまたアシュレイに気づいたのか、名だたる仏教の守護神達……すなわち、武神や鬼神達が立ち塞がる。

彼らの戦闘スタイルは近接戦闘。

槍や剣などの武器を手に手に、一直線にアシュレイ目掛けて突っ込んでくる。

その顔に臆した様子は微塵もなく、むしろ楽しそうに笑みを浮かべて。

アシュレイは飛び掛ってくる彼らに嘲りを込め、全方位の念話で告げた。

『かかったなアホが！』

瞬間、アシュレイの四方に展開される金色の盾。それらはくるくると彼女の周囲を回転している。

突っ込んできた彼らは不思議に思ったが、躊躇なく攻撃を仕掛けた。

当たれば致命傷となるだろう、それらの攻撃にアシュレイは何もしない。

彼女はただ挑発する為に先程の言葉を言ったわけではない。

次元転移シールドの弱点を埋める、いやらしい魔法が既に仕掛けてあった。

『このまま滅びるがいい!』

何もしないアシュレイに斬りかかってきた鬼神の1人が告げ、金色の盾とその剣の切っ先が接触した瞬間、彼の体は砕け散った。

同じように斬りかかった、あるいは槍で突いた者全ての体が砕け散っていた。

復元する様子はなく、永久原子まで砕かれてしまったことが分かる。

アシュレイの仕掛けたいやらしい魔法は反射。

彼女全体を覆う一種の結界により、その効果は引き起こされる。

金色の盾はその結界を発生させているものに過ぎず、この盾に触れようが触れまいが、攻撃を仕掛けた者全てにその攻撃の威力が跳ね返る。

彼らは全力で攻撃したが故に跳ね返った自らの全力の攻撃で虚しく命を散らしたのだ。

アシュレイは一体何が起こったか理解できていない仏教系神族にそのプレスを見舞う。

帝釈天をはじめとした上位者達はどうにか反応できたか、それ以外の下位の鬼神や武神達は回避もままならず、光に消えていく。

これはまずい、と誰もが　帝釈天すらも思った。
彼らは理解した。

遠距離攻撃は無効化され、近距離攻撃は跳ね返されるということを。

そんな彼らに対し、アシュレイは咆哮を上げる。

衝撃波となつてそれは周辺に広がり、下位神族達を潰していく。

彼女はそれだけに留まらず、回避した帝釈天をはじめとした武神達目がけてブレスを連続して放つ。

彼らはそれを軽々と回避していくが、一方的に攻撃されるという状況は精神的に非常に悪い。

数分が経過した頃、1人の武神が飛び出した。

三面六臂のその姿にアシュレイは一度、攻撃の手を止めた。

攻撃が無くなったことを好機と見た彼……阿修羅はその手にもつ様々な武器を使わずに突進する。

自分の攻撃が反射するのならば、動きを封じ、その首を潰せばいい、と彼は考えた。

確かにこれならばアシュレイに直接触れているのだから、反射はない。

だが、アシュレイが阿修羅のような輩にその身を許すわけがなかった。

彼女は阿修羅に取り付かれる寸前にその21の眼を光らせる。するとたちまちのうちに阿修羅の体が腐っていく。

予想外の攻撃に彼の動きが鈍ったその瞬間、アシュレイは全ての首を伸ばし、彼の体に噛み付いた。

肉を抉り、骨を砕き、血を啜る。

宇宙空間故に音こそ無いが、凄惨極まる光景であった。

阿修羅を助けようと、様々な神族が上下左右前後から攻撃を仕掛ける。

しかし、反射が怖いのでそれは全て神霊砲などの飛び道具だ。

全ての攻撃が次元転移シールドにより逸らされてしまう。

ここで帝釈天は博打に出た。

それは槍を投げたらどうなるか、というもの。

投げられた槍の威力は持ち手に跳ね返るのか、それとも跳ね返らずに槍が砕け散るだけか。

前者ならばアシュレイに手を出す術は無くなる……だが、後者ならば？

試す価値は十分にあり、早速彼は毘沙門天に指示を下した。

彼はその命を受け、その手に持つ三叉戟　いわゆるトライデントをアシュレイ目掛けて全力でもって投げた。

それは光速の数倍の速さで彼女目掛けてまっすぐに飛んでいく。

しかし、アシュレイは回避もせず阿修羅の咀嚼を続ける。

阿修羅の肉を食べ、血を啜ることに彼女は自身の魔力が上昇していることを感じ取っていた。

そんな最中、毘沙門天の投げた三叉戟が飛来するが、それは反射結界に当たり、木つ端微塵に砕け散る。

しかし、毘沙門天にその威力は跳ね返らなかった。

すぐさま、帝釈天は実体のある武器を投擲するよう命じる。

彼の命を受け、配下の武神や鬼神達がその得物を次々と投擲していく。

これらの武器は彼らの一部であるので、すぐに新しいものをその場で作り出すことが可能だ。

故に制限などなく、夥しい数の武器が投擲される。

それらは全て反射により武器自体は砕け散り、アシュレイには何の影響もないように見える。

だが、膨大な数をぶつけられたことで金色の盾は消耗していた。

この盾はアシュレイの膨大な魔力により構成されているとはいえ、その耐久度は有限。

一度壊れたら再び発生させなければいけない。

アシュレイもまたそれを承知で阿修羅を咀嚼し続け、そして食べ終えた。

盾には既にヒビが入り、すぐにでも壊れそうだ。

彼女は自らの不利を演出すべく、飛来する武器の軍勢に腐食の魔眼を使い、溶かしていく。

しかし、膨大な数の軍勢を、1つの頭につき7つ、合計21の魔眼で全て腐らせるには無理があった。

数百個単位で反射結界に着弾し、その耐久度が削られていく。

やがて、限界がきた盾は結界と共に砕け散った。

瞬間、帝釈天は自ら先陣を切つてアシュレイ目がけて突撃を開始した。

乱戦となったことで彼は象には乗っていないので身軽だ。

彼女とは距離にして100km程度であり、彼のいる位置がアシュレイに最も近い。

光速よりも速く動ける彼にとって、反射のないアシュレイはもはやただの獲物に過ぎない。

次元転移シールドは過去、墮天する前のミカエルにより報告され、解析の結果、質量のある攻撃に極めて弱いことが判明していたからだ。

傍目から見れば、アシュレイは危機的状況にあるといえるだろう。しかし、当の本人は極めて冷静であった。

彼女はアシュタロスに数学を叩き込まれている。

最も近い帝釈天が反射が切れた瞬間に攻撃する確率が最も高い、と割り出した。

そして、彼が自分より素早いと仮定し、攻撃を仕掛ける位置までのくらの時間が掛かるか割り出していた。

そして、新しく反射結界を張るとどちらが速いかを比較した。

その結果、1マイクロ秒の差で自分の方が速い、と出た。

『闇に滅びを！』

そう叫びながら帝釈天は斬りかかる。

次元転移シールドを切り裂き、アシュレイの巨体にその刃が食い込もうとしたその瞬間。

輝かしい金色の盾がアシュレイを守護せんと再び現れる。

そして、その効果はただちに発揮された。

帝釈天は体のあちこちから勢い良く鮮血を吹き出し、その動きを止めた。

好機と見たアシュレイはその体に食らいつき、阿修羅と同じようにその身を喰らい始めた。

阿修羅などとは比較にならない程の神霊力に満ち溢れたその肉を喰らう度に、彼女の魔力は幾何級数的に増えていく。

自分達の大将がやられている状況に毘沙門天達は黙っていられなかった。

彼らはどうにか助けようと遮二無二突撃し、自滅覚悟で斬りかかってくる。

帝釈天は喰われながら、自分を助けようとして自滅していく部下達を見、悲痛な思いに駆られた。

そして、同時に彼はアシュタロスの狡猾さを称えざるを得なかった。

彼は確かに過激な武神ではあるが、相手が自分よりも上手であったとき、それを認めないような暗愚ではない。

故に彼は自らを喰らうアシュレイに念話を送った。

『汝の戦、見事なり』

彼女は思わぬ言葉に驚きながらも、それに返す。

『あまねく我が名を広めよ』

そこで一度言葉を切り、帝釈天に自らの名を永遠に覚えさせるよう、アシュレイはゆっくりと告げる。

『我が名はアシュタロス。地獄の大公爵なり』

神々の黄昏（前書き）

独自設定・解釈あり。
会話文ほぼなし。

神々の黄昏

帝釈天一派が敗れ去った頃、別の宙域ではそのようなことは知らぬとばかりに熾烈な戦闘が繰り広げられていた。

『ミカエル、どうして墮天した!』

ウリエルがその光体から光線を発し、火の鳥……フェネクスを撃ち落とそうとする。

光速で迫る破壊光線を優雅に回避し、彼女は答える。

『もううんざりだったからだ。他の神々の面倒もセクハラも全部な』

ウリエルとしてはそれに反論する術を持たない。
むしろ、彼は自らの非力を悔やむ。

彼は勿論のこと、ラファエルや脳天気なガブリエルすらもミカエルの愚痴はよく聞いていたからだ。

『だが……なぜアシタロスの下についている!』

『別にどこでも構わんだらう』

そう言いつつ、フェネクスは口から黒い炎を吐き出した。

地獄にて燃え盛る相手を焼き尽くすまで消えない暗黒の炎だ。
しかし、それは光に満ちた水の壁により防がれる。

『ミカエル、寂しいの』

間延びした独特の声。

久しぶりのその声にフェネクスは思わず苦笑してしまう。

『ガブリエル……汝は相変わらず脳天気なのだ……』
『ええ〜ひどいひどい〜』

人間形態なら可愛らしいガブリエルも、光体姿ではごつい人型である。

『ミカエル、かつての同胞とはいえ、もはや敵同士。残念ですが、全力でやらせていただきます』

ラファエルはそう告げた。

そんな彼にフェネクスは毅然と返す。

『元より覚悟の上。それと今の私はフェネクスだ』

『ミカエル〜！』

そう言った直後にミカエルと呼ぶガブリエル。

場の空気をおもいつきりブチ壊す彼女に全員が頭を抱える。

悪気はないのが分かっているだけに余計性質が悪い。

『ともあれ、いくぞ』

瞬間、フェネクスは翼をはためかせた。

彼女の体全体から迸る熱線。

レーザーの如く四方八方に飛び散る。

その熱線をすかさずガブリエルが水の盾を張ることでガードする。
彼女の属性は水。

対するフェネクスの属性は言うまでもなく火。

相性がいいとは言えない。

彼女に加えてウリエル、ラファエルもいる。

『相手に不足なし……汝らと私、どちらが強いか、力比べといこうではないか！』

帝釈天一派なんぞ知らぬとばかりに戦うフェネクス達とは裏腹に他の宙域に展開していた全ての神魔族は驚きに動きを止めていた。アペプとオーデインなどの主神や魔王達も互いに攻撃の手を休め、ある方向に すなわち、アシュレイへと視線を向けている。それは数秒程度の極めて僅かな時間。

だが、その中で動く者がいた。

好機とばかりにテレジアが、ベアトリクスが、シルヴィアが、エシユタルが、ディアナが、動きを止めた神族を次々と屠り去っていく。

彼女達は自らの主の強さを信仰しているが故に別に帝釈天一派を倒したとしても驚きはない。

そんな彼女達の動きにおっとり刀で反応し、応戦する神族達。

また、帝釈天一派を屠ったアシュレイに向けて、一際巨大な天使の光体が2つ、向かっていく。

その背後には数百万を超える天使の軍勢。

メタトロンが、そしてルシフェルがアシュレイを抑えるべく、動

き出したのだ。

この2人は予備戦力として後方に待機していた。

本来、熾天使は魔王クラスのアシュレイには敵わない。

だが、この2人は別格であり、主神に匹敵する強大な力を持っている。

そして、その進軍を阻む者が存在した。

巨大なジャツカルに姿を変えたセト、そして巨人となったスルトだ。

彼らはメタトロンとルシフェルの前に立ちはだかり、スルトが巨大な炎に包まれた剣を振るう。

膨大な魔力の込められたその一撃をメタトロンは自らの剣でもって防ぎきる。

ルシフェルがスルトの横からその神剣でもって斬りかかろうとするが、セトがその爪でもって刃を受け止める。

その間に天使の軍勢は2人に対して攻撃を仕掛ける。
下位天使が使う攻撃でもっとも威力のある神霊砲を。

無数の光線がセトとスルトに放たれ、それらは狙い過たず命中し、彼らの防衛結界を削っていく。

セトが咆哮を発する。

魔力の込められたその雄叫びは下位天使達を一瞬で肉片へと変えていく。

セトとスルトにより、予備戦力であったメタトロンとルシフェルが抑えられた。

これはアシュレイが自由に動ける状況を現出することとなった。

アシユレイは戦場を駆ける。

膨大な魔力にモノを言わせ、破壊光線を乱射し、下位神族を数千単位でこの世から消し飛ばしていく。

あるいは逃げ遅れた下位神族達をその口でもって咀嚼していく。その際、彼女は女性型の天使や神族も多数食べたり消し飛ばしてしまっただが、それは致し方ない。

捕まえる余裕はさすがになかった。

やがて一時停止し、ブレスを放とうとしたアシユレイは傍にいた下級神族に気がついた。

その神族は美しい女であるが、頭に2本の角が生えており、鬼神であることが容易に分かった。

彼女はその黒い瞳をじっとアシユレイに向けている。

彼女の腰には1本の刀があったが、それは鞘から抜かれていない。帝釈天一派の残党だろう彼女の行動にアシユレイは不思議に思ったものの、とりあえずブレスを放った。

射線上にいた上級神族達が複数消滅していく。

他の主神達は彼女以外の魔王や魔神の相手に忙しく、アシユレイを止めることはできない。

彼女はその場から魔王と殴り合いをしている隼の頭を持つ主神

ホルスの下へと向かう。

横合いから殴りつける為だ。

いくらエジプト神話において最も偉大な神とされるホルスといえど、魔王と魔王クラスの2人を同時に相手にしては到底勝てない。

このまま何もなければ魔族側が逆転し、そのまま勝利することは間違いないだろう。

だが……遂に彼らはやってきた。

今まで以上により強大な神気が周囲を包みこむ。

神々しい光に満ち溢れ、それだけで下級魔族達が浄化されていく。

白いローブを纏った巨大な人型光体が数体。その巨大な光体のうち、1人は美しい女性であった。

彼らの顔には憂いや悲しみの表情。

また彼らに続き、幾分小さな人型光体が多数降臨する。

そして、彼らの後ろから全長数百mはありそうな巨大な龍が現れた。

その龍の後から夥しい数の比較的小さな龍が現れる。

それらは全て西洋の竜ではなく、蛇のような東洋の龍だ。

ヤーウエ、仏陀、太陽神ラー、天照大御神、そして竜神王。

ヤーウエを除いた彼らは自らの眷属や部下を全て引き連れ、戦場に参戦した。

全ての魔族が アシュレイも含め、震撼した。

ついにヤツさんが……ヤーウエをはじめ、最も強大な主神達が参戦したことに。

降臨した主神達は黙して語らず、今、この戦場で自由となっている強大な悪魔 すなわち、アシュレイへと狙いを定めた。

仏陀の側近であり、部下達のまとめ役である梵天が全ての八部衆 ただし壊滅した帝釈天一派を除き に命じ、彼自身もまた唱え始めた。

唱えているものは釈迦が説いた教えを記録し、纏めた経典……い

わゆる、お経だ。

アシユレイの周りに無数の梵字が浮かび上がる。

まずい、と直感した彼女は光速でその場から離れるが、梵字は逃げても逃げても彼女の周囲に浮かび上がり、やがてそれは見えない鎖となり、彼女の体を縛り、その自由を奪った。

この拘束は対象となる者を捕らえるまで永遠と追いかけて続けるものの。

別次元に逸らそうとも、その次元を超えて彼女に届き、また反射結界であっても、攻撃ではないので反射することはできなかった。

邪悪な存在である彼女は光の拘束であるそれから逃れることはできない。

主の危機を悟ったベアトリクス達がお経を邪魔しようとして八部衆達に襲いかかろうとするが、竜神王をはじめとした龍族が立ちふさがる。

他の魔王や魔神達はヤーウエ達が降臨する前から戦っていた目の前にいる主神の相手で精一杯だ。

そんな中、唯一テレジアはアシユレイに言われた通りに41の軍団全てに戦闘停止と地獄への撤退を指示した。

アシユ様を見捨てるのか、と問いただしてきたヘルマンにアシユレイの封緘命令書がある、と告げ、彼にそれを託した。

そのようなことが行われている中、新たに降臨した主神のうち、唯一の女神である天照大御神はラーと共に念じ、浄化の炎を作り出す。

白く燃え盛るその炎は神々しさに満ち溢れ、触れた者が邪悪な者であればその存在全てを焼き尽くしてしまうだろう。

無論、魂の牢獄に囚われている限り、完全な消滅はないが、それでも一度死ぬことは間違いない。

アシュレイはブレスを放つ。

しかし、そのブレスはヤーウエの隣にいた茨の冠を被り、緋色の衣を纏った男性がその手をかざせば逸れてしまった。

『キリストツ……！』

アシュレイは憎々しげにその名を告げた。

そして、彼女に向けて浄化の炎が放たれる。

それは進路上にいた魔族を焼きつつ、アシュレイへと迫る。

『誰かその炎を止める！』

セトが叫んだ。

彼の叫びを受け、すぐさま数多の魔族がその炎を押しとどめようと攻撃を加える。

空間を歪め、光線が放たれ……

しかし、如何なる術をもっても、その炎は消えずアシュレイ目指し突き進む。

アシュレイは周囲の時間の進行を遅らせることで炎の到達を遅め、わずかでも時間を稼ごうとする。

だが、時間の影響を受けないのか、その炎の速度は変わらず、間

近に迫ったそのときであった。

『アシュ様、最初で最後の命令違反です。申し訳ありません』

唐突にテレジアからその念話が入った。

アシュレイが理由を問いたただす暇もなく、彼女は何者かにより横へと弾かれる。

そして、彼女は見た。

大蛇がその白い炎に包まれ、悶え苦しむ姿を。

身を左右にくねらせて炎から逃れようとするが、炎はまるで意思があるかのように、纏わり付いて離れない。

『……蘇ったらおしおきね』

アシュレイはぼつり、と呟いた。

悲しみが無いといえば嘘になるが、自らもまた危機的状況にある中で泣いたりするような余裕はない。

彼女は自らを締め上げる戒めをどうにか解除しようともがく。

近くにいた魔族達もまたその戒めを解こうと解呪を試みているが、如何せん闇の存在である彼らに光の封印はどうにもできなかった。

『今から3秒後、その戒めを13ミリ秒だけ緩める。そのときに脱出し、喰らいつけ』

唐突なルシフェルからの念話。

誰に喰らいつけとは彼は告げない。

それを言うのはさすがに彼とてできなかった。

無論、こうして神界を裏切る真似をしている彼の心は悲鳴を上げ

続けている。

だが、それでもアシュレイに大きな貸しを作っておかなければならなかった。

将来、彼が魔界の最高指導者となる為に。

アシュレイはそれに返答することもなく、そのときに備えて、そのときがきた。

僅かに緩む拘束。

それが緩んだのは瞬きよりも短い時間。

だが、人間形態であったときと比べれば数億倍も知覚領域が広がっている今の彼女にはそれで十分過ぎた。

余計な小細工などいらぬ、とアシュレイは自らの膨大な魔力をそのまま放出し、戒めそのものを無理矢理掻き消した。

術を破られた反動により、八部衆の大部分がその体から血を流し、身動き取れぬ状況となった。

人数を動員して行う術は強力な効果をもたらすが、破られたとき、その反動もまた凄まじい。

アシュレイは咆哮し、ヤーウエ目がけて一直線に突進していく。

その速さたるや光を超えている。

数百kmはあった距離はあっという間に縮まっていくが、彼女の前に立ち塞がる者があった。

彼女と同じか、彼女よりも大きい龍 竜神王。

彼はその突進を止めるべく、その口からブレスを放つ。

光速を超えた速度で突進するアシュレイはそのブレスをひょいと軽業師のように軽々と避ける。

慣性すらも制御してしまうアウゴエイデス形態においてはこれは当然のこと。

彼女は次元転移シールドと反射結界を展開しているが、さすがの

次元転移シールドといえど、竜神王のブレスを食らってはシールド自体が保たない。

逸らすこと自体には成功し、威力も減衰させることができるだろうが、それでもダメージを負ってしまう上に、再びシールドを張るまでの僅かなタイムラグを主神達が見逃す筈がない。

だが、彼の狙いはブレスではなかった。

彼女は回避したことでその速度が低下してしまう。

そこを狙い、彼は長大な胴体でもって彼女を締め上げんと迫る。

すかさずアシュレイは先ほどと同じように魔力そのものを放出し、彼を弾き飛ばす。

その瞬間、彼女は僅かに硬直。

そこへ飛来する茨に包まれた槍。

キリストにより投擲されたものだ。

反射をせぬよう、茨そのものが長く伸び、彼女を包み込もうと迫る。

これもまた拘束の一種。

茨に包み込まれた者は永遠の苦痛を受け続けることになる。

そして、彼女は再び弾き飛ばされた。

彼女の代わりに茨に包まれたのはコウモリの翼を持った獅子ベアトリクス。

アシュレイはすかさず体勢を立て直し、突進を再開する。

弾き飛ばされた竜神王もまた体勢を立て直し、彼女目がけてブレスを放つ。

アシュレイは進撃を誰も邪魔できぬことを悟っていた。

故に彼女は回避せずにそのまま突進し続ける。

アシュレイの予想通りにプレスと彼女の間に割って入る姿があった。

それは黒い竜　シルヴィアだ。

彼女は全力で結界を張り、主の邪魔をするそのプレスを代わりに受ける。

その間にアシュレイは射線上から離れてしまう。

それにより役目は果たしたとばかりに、シルヴィアは光の中に消えていった。

アシュレイは突進する。

すぐにでも辿りつける筈の距離が果てしなく遠く彼女には感じられた。

そんな彼女の前に次に立ち塞がったのは隼の頭を持った太陽神ラー、そして天照大御神。

普段のアシュレイなら女神である天照大御神を全力で口説きにかかるところだが、今の彼女は眼前の女神をただの障害物としてしか認識していない。

しかし、彼女は彼らを相手にしない。

なぜならば、アシュレイには忠実な部下がまだ3人いるからだ。

彼女の期待に答えるかのように、彼女達はラーと天照大御神の前に立ちはだかる。

火の鳥、黒い羊、黒いマンティコア。

フェネクス、エシユタル、ディアナであった。

このうち、熾天使3人を相手取っていたフェネクスはその速度を生かし、どうにか離脱して馳せ参じていた。

彼女達は1秒でも時間を稼ぐべく、ラーと天照大御神に飛びかかった。

そして、アシユレイは立った。

彼女の目の前にはヤーウエが、キリストが、仏陀がいる。

彼らは3人共悲しみに満ちた瞳でアシユレイを見つめている。

そのとき、アシユレイは自らの忠実な部下達の反応が消えたことを悟った。

また、彼女は戦闘が終わりにかけていることに気がついた。

降臨した竜神王配下の龍族には上級神族にも匹敵する精鋭達がまるまる温存されていたのだ。

彼らの援護を受け、セトやスルトなどの魔神や魔王が倒され、アペプもたった今、その反応が消えた。

そして、逆天号はテレジアの指示により、既に戦場から姿を消しており、残存していた僅かな魔神兵、鬼神兵もまた撤退していた。

最後まで残っていた下位魔族達は余勢を駆る神族に討ち取られるか、そそくさと地獄へと撤退していく。

やがて、この戦場にいる魔族はアシュレイ独りとなっていた。

『あんさんには迷惑掛けた……だが、手を緩めるわけにはいかへん』

ヤーウエはアシュレイに念話でそう告げた。

彼女は別に謝罪を望んでいるわけではない。

ソドムとゴモラに関しては一応、彼女の心の中では決着がついている。

ならばこそ、ここでの語り合いは不要であった。

アシュレイは全方位に向けて念話を発する。それはその場にいる全ての神族に届くように。

『敗北の足音が聞こえる。けれど、それもまたよし。勝者に致命傷を与えてから、今回は負けるとしよう』

瞬間、アシュレイはブレスを放つ。

溜め無しで放たれた破壊の閃光が暗黒の宇宙に煌く。

ヤーウエ達は軽々とそれを回避し、反撃の神霊砲を撃ち放つ。

彼らクラスの神霊砲ともなると、竜神王のブレスと同じく当たるとまずい。

故にアシュレイは回避に専念しつつ、その魔眼でもって腐食させようとする。

だが、彼女の敵は前方だけではなかった。

前後左右上下ありとあらゆる場所から神霊砲やブレス、あるいは武器が飛んでくる。

当たるとまずいものだけは回避し、あとは次元転移シールドと反射結界に任せていく。

当たつても支障のないものであつても、その数は圧倒的であり、みるみる反射結界の耐久度が削られていく。

彼女は全方位に向けて衝撃波を放ち、一時的に纏わり付く神族達を弾き飛ばす。

そのとき、1本の槍が飛来した。

その槍は反射結界に当たつた瞬間に砕け散るが、即座にその場で復元し、反射結界を突き抜け、次元転移シールドを食い破る。

アシュレイがその槍の正体に気づくと同時に全力で結界を構築する。

だが、それらの結界をまるで紙のように貫き、彼女の体を貫いた。

狙つた者に必ず命中するというグングニル。それがその槍の正体であつた。

彼女は初めて感じる痛みに呻き声を上げつつも、その傷はすぐさま復元されていく。

しかし、この致命的な隙を他の主神達が見逃す筈がなかった。

竜神王がその巨体でもつてアシュレイにぶつかった瞬間、反射結界が砕けた。

耐久度を超えてしまつたのだ。

そして、大きくよろめいた彼女に彼はその身でもつて彼女の体を締め上げる。

だが、アシュレイは諦めない。

その三つ首のうち、1つは竜神王に噛み付き、残る2つの口と7つの尻尾にある口のそれぞれからプレスを放つ。

好機とみて近寄つていた天使や神族達が纏めて吹き飛ばされる。

仏陀は暴れる竜を抑えるべく、祈り始めた。

再び彼女の周囲に現れる梵字。

彼単独であるが故に先ほどと比べれば遙かに効果は劣る。

だが、度重なる戦闘で消耗したアシュレイは先ほどと同じようにそれを跳ね除けることができない。

そして、神聖な存在である竜神王にはその戒めは発揮されない。物理的に、そして霊的に拘束されたアシュレイ。

彼女を覆っていた次元転移シールドも解けてしまった。

また竜神王に噛み付いていた口は彼の鱗に阻まれ、未だ肉を食すことができない。

龍族は単純な防御力は普通の神族よりも上となる。

竜神王の防御はヤーウエよりも硬いだろうことは想像に難くない。

その竜神王はもはや役目を果たしたと彼女の口を振り払い、その傍を離れた。

そして、アシュレイ目がけて総攻撃が開始される。

降り注ぐ主神や天使達の神霊砲。

言うまでもなく、次元転移シールドという脅威の防御がなければ、これらは通じる。

彼女の巨体に放たれたエネルギーは着弾し、その肉を抉り、苦痛を与えていく。

だが、アシュレイは諦めない。

残った魔力を最低限の復元に回し、形勢逆転の一手を狙う。

もしかしたらこのまま何もできずに終わるかもしれない、という思いがアシュレイの思考を掠める。

その考えを振り払い、彼女は集中し、チャンスを待つ。

勝利の女神は　アシュレイからしたら神族なので敵であるが諦めない者に対して微笑む。

数分か、数時間か、それとも数日か。
元々鈍くなっていた時間の感覚はさらに鈍くなり、アシュレイは
ひたすらに耐える。

もはや光学的な視界は望めない。

戦争は魔族の負けが確定している。

もはやこれは戦闘とも呼べないものだろう。

だが、神族達は未だにアシュレイへの攻撃をやめない。

これは彼女にとって自業自得であった。

アシュレイはその強大な力を振るい、数多の神族を殺している。
また、熾天使であったミカエルを墮天させてしまったことから、
多くの恨みを買っていたのだ。

無論、ここにはミカエルにセクハラをしていた神々はいない。

だが、それでもアシュレイがやったことは神族からしてみれば目
に余った。

逆に言えば、神々からもそれだけ恐れられる存在となっていた。

アシュレイは未だ止まぬ攻撃にもういい加減にして欲しい、と言
いたくなった。

彼女としては最後の最後に神族達の度肝を抜いて、さっさと死ん
で蘇りたいのだ。

蘇った後にやることはいっぱいある。

テレジア達にオシオキをしたり、今回の戦争の反省会をしたり、
と。

もう復元するのをやめてしまおうか、と彼女が思いかけたそのと
き、唐突に攻撃が止んだ。

そして、戒めもまた解かれた。

彼女が目を一つだけ復元してみれば周囲には名だたる神々が無数にいた。

メジャーな神もマイナーな神も様々であり、さながら神様の展覧会であった。

彼女はついでに聴覚も復元してみた。

もはや残り僅かな魔力。

ブレスを放つこともできないだろうが、最後の一撃をするにはそれだけでも十分過ぎる。

彼らはもはやアシュレイがどうにもできない、とたかをくくって念話ではなく、そのまま会話していた。

神族も魔族と同じようにその神霊力を使って声を伝えているのでどこであるのが普通に会話ができるのだ。

「このまま倒してしまつては蘇り、再び神界の脅威となります」

「ここは封印すべきでしょう」

そんな声がアシュレイに聞こえてきた。

彼女としては逃げる力も残っていないので、封印されようが別に構いはしなかった。

「ここに巨大なブラックホールを作り、その奈落に閉じ込めましょう」

ルシフェルの声だ。

彼の提案に賛同する声が聞こえる。

「ここ、射手座A*にブラックホールを作って、そこの中を閉空間にして閉じ込めるっちゅーことで決定や」

ヤーウエの声。

アシュレイは目をもう一つ復元し、彼の位置を確認する。
しかし、それは徒労に終わった。
なぜなら彼は彼女に近づいてきたのだから。

「すまんなあ……ほんま、あんさんには幾ら謝っても足らん。ワシ
がすっかりせんかったから、あんさんをはじめ、多くのもんが完全
に悪魔となつてしまった……」

その謝罪を聞いてなお、アシュレイの心は変わらない。
なぜなら彼女は悪魔だからだ。
もはや彼との距離は目前。
既に彼女の射程内であつた。

瞬間、彼女は残っていた全ての魔力を振り絞り、その三つ首のう
ち真ん中の1つだけを動かした。
失敗せぬよう、動かすのを1つに絞つたのだ。
動く力もないだろう、と判断していたが故に誰も警戒していなか
つた。

人間風に言うならば死体が動いたに等しい。

その口はヤーウエの右腕を食いちぎつた。
既に戦闘は終わったもの、と戦闘体勢を解いていたことが仇とな
つた。

彼はよろめき、崩れ落ちそうになるが、慌ててメタトロンに支え
られる。

アシュレイはそれを見ながら、彼の右腕を咀嚼し飲み込んだ。
そして、ただちに苛烈な報復が行われる。

二度と動けぬよう、彼女の頭全てが叩き潰され、その巨体に何本もの杭が突き刺される。

仏陀もまた自らのミスを恥じると同時に彼女の憎悪に心を痛めながら、再び祈り始めた。

「ヤツさん、大丈夫か？」

心配そうに声を掛けてくる竜神王。

彼の問いにヤーウエは頷き、宣言した。

「アシユタロスの憎悪は深い。ワシは彼女を封印した後、その封印を監視する専門の部署を創設する。ワシの天使達のみで構成するので、安心して欲しい」

意識すれば余計な手出しをするな、ということであるが、ヤーウエに異を唱える者は誰もいなかった。

そして、アシユレイはブラックホールに封印された。

そして、彼女は帰還した（前書き）

独自設定・解釈あり

そして、彼女は帰還した

銀河系中心での一大決戦の結果は瞬く間に広まった。

そして、この戦いで魔族の敗北は決定的となった為、神界は講和を提案。

地獄はこれを承諾し、ここにハルマゲドンとは終結した。

ただ、双方共に損害は甚大であり、また多くの惑星が戦争開始から流れ弾などで消滅していた。

地球をはじめとした太陽系にこそ目立った被害は出ていないが、そこから一步外へ出れば、あつた筈の惑星が10個単位で消えていたりする。

さて、講和条約の内容であるが、魔族全体にとってはそこまで不利なものではなかった。

ただし、ヤーウエに手を出したアシュレイに対しては非常に不利なものが含まれていた。

彼女の使い魔や部下及び今回の戦争に参加した軍団全てをコキユートスに永久封印せよ、というのが最たるものだ。

アシュレイは魔族にとってはゼウスをはじめ、数多の神族を屠つた英雄。

幾ら彼女が封印されているとしても、その復活を確信する魔族は多く、親アシュタロス派と呼ばれるようになる彼らの手助けで僅かな数だが、アシュレイの部下達は凍結から逃れることができた。

なお、決戦で戦死したテレジア達は戦争終結後、数年で全員が蘇り、そのまま封印と相成った。

彼女達はその力の強大さから、さすがに逃がすことができなかつ

た。

また、アペプをはじめとした魔王や魔神達は蘇った後、コキユートスに永久封印となった。

地獄政府は実質的に崩壊し、地獄は無政府状態と化した。

実力者達が軒並み消えた地獄では彼らの領地や城などの略奪が蔓延り、それはアシュレイの城や領地もまた例外ではない。

多くの魔族によりその領地は切り取られ、城は凶悪なトラップに多くの犠牲を出しながらも、その宝物庫などを荒らした。

幸いにもリリスやリムなどの淫魔族や他の女魔族達はアシュレイの命により、加速空間に閉じこもっていた為に手を出されることはなかった。

封印を逃れたアシュレイの部下達は荒らされる主の領地や城を防御しよう、と動くには動いたものの数が圧倒的に少ない為に全てを防御するわけにもいかず、憎悪の火をたぎらせながらその時を待つこととなった。

そして、光の如く時間は過ぎていった。

アシユレイは落ち続けていた。

周囲は一面の闇。

その闇の中を下へ　彼女の感覚からすれば下へと落ち続けていた。

潮汐力は弱いのか、スパゲッティ化現象はまだ起きてはいない。

『……………どうしたものか』

アシユレイは落ち続けながら考える。

既に時間の感覚は消えている。

あの決戦からどれくらい経ったのか、見当もつかない。

目が覚めたら空に等しかった魔力が全開し、また今もお纏っている暗黒体の傷なども消えていたことから数百年単位で眠っていたことは間違いはない。

ヤーウエの右腕を喰らったり、帝釈天を喰らったりした彼女は決戦前と比べてその魔力が数百倍にも上昇している。

もはやアペプと同等かやや劣る程度のレベルにまで彼女はなっていた。

『このブラックホールは私を封印する為に作られた一種の結界……おそらく、私が死なぬように重力の特異点に達する直前で最初に巻き戻るよう閉空間となっている筈』

重力の特異点……すなわち、重力が無限大となる地点ではさすがのアシユレイも生きていられるかどうか怪しかった。

たぶん全力で結界展開して耐えて、でかいの一発ぶち込めば特異点ごと破壊できるような気がする……という曖昧なものでしかない。

ともあれ、特異点に達してアシユレイが死ねば神魔族のバランスは極めて短時間であるが、彼女の蘇生まで崩れてしまう。

無用な世界秩序の混乱は神族とて望まない。
ならばこそ、生かさず殺さずにする必要があった。

『ヤツさんから頂いた血に何かなかったかしらね……いざとなった
らブレスぶっぱなしてみよう』

アシュレイは胸のうちにそう呟き、思考の海に潜り、ヤーウエの
記憶や知識を探っていく。

その間も彼女は落ち続ける。

どれほどの時間が経ったのだろうか。

アシュレイは一筋の光明をヤーウエの知識から見出した。

それは神族において使われる結界の術式であった。

さらに探り、彼女は結界に関連する知識をピックアップしていき、
やがて思考を現実へと戻す。

その顔は比較的晴れやかだ。

ブラックホールを使った結界という解答そのものはなかったが、
手がかりはあった。

手がかり無しの状態と比べれば雲泥の差だ。

アシュレイは落ち続けながらも両手を動かし、一見何もない空間
に少し魔力を流してみる。

すると浮かび上がる無数の魔法陣。

それは魔族のものではなく、神聖さ漂う五芒星陣だ。ただし、それらは恐ろしい勢いで変化している。

アシュレイは心の中で笑った。

解除するには彼女にとってもはや十分過ぎるくらいにヒントが出ている。

どんなに難解なパズルであっても、解けないものは存在しない。

なぜならば作った輩が万能ではないから。

神々といえど、全知全能ではない。それは不完全な存在であるといえる。

ならば、相克であるが故に解けない光の封印以外ならば、全てが解けてもおかしくはない。

アシュレイはできる限り多くの陣を視野に収めるべく、その暗黒体の至るところを目へと変化させた。

無論、これらの目には魔眼作用などはない。

あえてこうしたのは、万全を期す為に視覚を頼った方がいい、と彼女が判断したからだ。

そして、彼女は観察を始めた。

落ちる
落ちる
落ちる

観察を開始してどれほど落ち続けたか、アシュレイには分からない。

その多くの魔法陣の変化をただ追いつけるのみだ。

また、変化する時間もまたランダムであることに彼女は気がついていた。

その時間の幅もまた彼女は観察対象に加えていた。

落ちる
落ちる
落ちる

人間ならばとつくに気が狂って自殺してももおかしくはない程の長い時間、アシュレイはひたすら観察し続けた。

そして、彼女は遂に突き止めた。

魔法陣の変化する速さと規則性を。

魔法陣は基本的に1.8ヨクト秒プラスマイナス0.02ヨクト秒から9.8アト秒プラスマイナス0.24アト秒で変化する。

ちなみにヨクト秒は10のマイナス24乗秒、アト秒は10のマイナスイナス18乗秒だ。

人間では変化したことにすら気付けない時間であっても、魔神である彼女には気づける時間。

そして、魔法陣の変化の法則性は宇宙の星々の運行に時定数を掛け、それを微分し、伝達関数を足したものと同じように変化していた。

彼女がこれらの法則を導きだすことができたのは統計学を用いたからであった。

統計学とは経験的に得られたバラツキのあるデータから、応用数学の手法を用いて数値上の性質や規則性あるいは不規則性を見いだすもの。

この大前提にアレンジを加え、魔法的变化や世界的変化をも加えたものによって導きだすことが可能となった。

これはアシュタロスの教えの一つであった。

さて、とアシュレイは再び思案する。

法則が分かったとしても、解除の為にはその変化を止めねばならない。

さすがの彼女も、こんな落ち続けている状態でヨクト秒からアト秒単位で変化する魔法陣を弄れる程、器用ではない。

幸いにも魔法陣は全て連動しているらしく、1つの変化を止めれば全ての魔法陣が停止する。

どれか1つだけでも魔法陣を止めればいい。

アシュレイはどの魔法陣を止めるのが一番楽かを今度は観察し始めた。

これは試験の問題の中でどれが一番簡単な問題かを探す作業に等しい。

落ちる

落ちる

落ちる

彼女は落ち続けたが、今度は先ほどよりも比較的速く、どの魔法陣を解けばいいか発見した。

変化が1つだけ他の魔法陣と比べて非常に遅いものがあったのだ。その変化する時間も常に同じで10・1アト秒。

その魔法陣はきつとルシフェルが自分に貸しを作る為にわざとそうしたものだろう、とアシュレイはあたりをつける。

『最高指導者にならせてあげないとねえ……』

そう彼女は心の中でぼやきつつ、変化の遅い魔法陣に解除の術式を手のひらに込めて、叩き込んだ。

解除の術式はヤーウエの知識から構築したものだ。

神族特有の術式であっても、それ自体が神聖なものではないので、アシュレイにも扱える。

瞬間、全ての魔法陣の変化が止まった。

彼女は心の中で喝采を叫び、本格的な解除作業に乗り出すのだが、ここから先はアシュレイにとってもはや積み木で作った城を崩すくらいに簡単な作業だ。

中身が見えれば長時間掛けて観察しなくても済む。

アシュレイはヤーウエから頂いた知識と自分が持っている知識を

組み合わせ、鼻歌混じりで作業を進めていく。

その中で彼女は反射の術式を見つけ、思わずその巨体を震わせた。何も反射はアシュレイの専売特許というわけではない。

実戦に使うか使わないかは別として、神魔族問わず、それなりに知られている概念だ。

ただ、アシュレイのみが何の補助もいらずに扱える次元転移シールドと反射が組み合わせると凶悪な防御となるだけであった。

先の決戦においても、次元転移シールドなんてとんでもないモノを使うヤツが、ただの反射を使うわけがない、という先入観が邪魔をして、甚大な被害を神族に与えていたりする。

ともあれ、アシュレイがもし力任せにぶち破ろうとしていたら自らの発したエネルギーでもって自滅することになっただろう。

神族側は確かに神魔族のバランスが僅かでも崩れるのは良くないと考えるが、それとアシュレイが自由になることを天秤に掛けた結果、まだ崩れた方がいい、と判断したのであった。

アシュレイは物騒な反射術式を解除し、さらに作業を進めようとしたところで手を止める。

彼女は考える。

自分がヤツさんだったら……というか、神族だったら絶対に自分の監視をさせる為に専門の軍団を創設して四六時中見張らせる、と。

『もう力任せにぶち破っても、何の問題もないわね……』

ブラックホール内に張り巡らされていた反射も解除された今、永久に特異点に辿りつかない単なる超巨大ブラックホールに過ぎない。

『それじゃ、帰るとしましょか。ああ、でも講和がなされているなら、見張っている連中が死んだらまずいわね』

だが、とアシユレイは思う。

『事故ってことでいいか。事故で死んだならしょうがないもの』

力任せにぶち破った際に神族が死んだというのが事故に入るかどうか、甚だ怪しい。

ともあれ、そうなたたとしても彼女にはもうハルマゲドンは起きないだろう、という妙な確信があった。

神族達も永遠にアシユレイを封じ込めているとは思っていない。

ならば復活する際の多少の犠牲は目を瞑る……というよりか、下手に揉めてアシユレイが暴れたらシャレにならない被害が出るので目を瞑らざるをえない。

アシユレイは全身に魔力を漲らせ、そして、それをそのまま放出した。

彼女の巨体から放たれる膨大な魔力。

それはブラックホールを軋ませ……やがて圧力に耐え切れずに割れた。

まるでガラスが砕け散るかのようにあっさりと。

通常の宇宙空間にでたアシユレイは久しぶりに視界に入ってくる様々な星々の輝きに胸を高鳴らせつつ、予想通りに展開していた神族の軍勢……というよりか艦隊をじーっと見つめる。

天使が主体で構成されているのか、艦隊の直掩として無数の天使達が舞っている。

その艦隊の中でアシユレイはどこかで見たような艦があることに気がついた。

そして、その艦……サンダルフォンは重い空気に包まれていた。

「……幾ら何でも早過ぎる」

ウリエルは巨大スクリーンに映るアシュタロスの巨大な暗黒体を見、そう呟いた。

彼はヤーウエから150億の天使達からなる銀河中心守護艦隊の司令長官……すなわち、銀河中心核に作られたアシュタロスを封じるブラックホールを監視する役目を任されていた。

あの決戦からたった3000年しか経過していない。

地球では降臨したキリストの分霊が処刑された辺りであり、神界ではルシフェルは未だ反乱を起こしていなかった。

先の決戦に既にキリストがいたように、人類の歴史に出てくるのは分霊　いわゆる分身体だ。

本体は太古の昔から神界に存在している。

もともと、ギリシヤ系神族のように地球に降臨して好き勝手やっちやう輩もいるのだが。

「どうしますか？　ウリエル様」

そう尋ねるのは彼の副官であり、妹でもある力天使アムラエル。神界には既に通報済みであるとはいえ、向こうも混乱しているらしく、何も言っていない。

「……艦隊全艦及び直掩の天使達に通達。向こうが攻撃しない限り、攻撃するな。功を焦つての先制攻撃だけは絶対に仕掛けるな」

彼の命令はただちに伝えられた。

3000年で神族魔族問わず、新しい世代が育ってきている。

戦争を体験した者は比率的に見れば減少しつつあった。

新しい世代……すなわち、若い世代は種族を問わず血の気が多い。アシユタロスの恐ろしさを知っていてなお、攻撃を仕掛ける可能性があった。

「アシユタロス、長距離転移に入ります。地獄へ帰還するものと思われます」

オペレータからそんな報告が入る。

ウリエルが目をやれば巨大な魔法陣がアシユレイの暗黒体の上下に構築されていた。

「あ、アシユタロスより通信！」

オペレータの声にブリッジ内に緊張が走る。

「見送りご苦労……とのことですよ……」

重い空気は一気に霧散し、何とも言えない空気がブリッジに漂う。

「やれやれだ」

ウリエルは溜息を吐いた。

交戦やむなし、と覚悟を決めていただけにアシユレイの言葉はその緊張の糸を断ち切るには十分過ぎた。

精神的ダメージをウリエルに与えたアシュレイはその場から粒子となって消えていった。

この復活により、アシュタロスの名は神族達にとって恐怖の権化となった。

彼女は神界において様々な異名がつけられることになった。

「黒翼公」「勇壮にして強大な地獄の大公爵」「邪悪で狡猾な竜」などであるが、最も広まった異名はそれらではなく、とてもシンプルなものであった。

それは「恐怖公」であった。

アシュレイは帰ってきた。

彼女は地獄の土に足をつけ、懐かしい風景に思わず全ての首を高く上げ、咆哮した。

それは地獄の最上層から最下層まで響き渡り、ありとあらゆる者を震撼させる。

同時にその咆哮はコキュートスの封印をも解いてしまう。

神族が地獄に乗り込むわけにもいかず、封印を施したのは魔族達。彼らは元々乗り気ではなかったが故に、結構いい加減に封印していたのだ。

封印されているという事実が重要であって、何かの拍子に封印が解けてもそれは事故だからしょうがない、という感じである。もっとも、さすがにアペプ達の封印が解けたりすると言いつきがないので、こちらはそれなりにしつかりとされていた。

たちまちのうちにコキュートスより溢れ出るアシュレイの軍勢。彼らは主の反応を見つけ出し、すぐさまその下へ向かう。

数分と経たずに彼らは集結を完了する。

地獄の大地を覆いつくさんばかりの大軍勢。

アシュレイの戦術は下級・中級魔族をとにかく大量に投入するという物量戦術であったが故にその軍団は下級・中級魔族がほとんどだが、今、彼女の前にいるのは先の決戦を生き残った連中だ。彼らは皆、レベルアップを果たし、その力を大いに増大させていた。

生き残ったといえど、元々の総数が予備も含めれば5000万という凄まじい数だ。

先の決戦では予備も軍団に編入し、全てを投入した結果、およそ5分の2の2000万が戦死した。残った数は3000万。これだけでも十分に膨大な数であった。

いつの間にか、アシュレイの目の前に片膝をつき、頭を下げる6人の姿があった。

テレジア、ベアトリクス、シルヴィア、エシュタル、ディアナ、そしてフェネクス。

彼女達のやや後ろにベルフェゴールやニジの姿もある。

ニジは加速空間の留守組であったが、アシュレイの魔力を察知して加速空間から出てきたのだ。

やがてアシュレイはその暗黒体を解き、人間形態となった。

そのとき、彼女の横合いに現れたとある人物。

彼は片膝をつき、頭を下げ報告した。

「アシュ様、ご帰還なされたばかりで申し訳ありません」

「ヘルマンじゃないの。どうかしたの？」

彼　ヘルマンは頭を下げたまま告げた。

「テレジア殿より領地や城を保全せよ、というアシュ様の封緘命令書を受け取りましたが、私の力及ばず城や領地をならず者共に……私と同じく封印処置を逃れた者達を率いてたった数%の領地をならず者共から防衛するのが精一杯でありました」

如何なる処罰も受ける所存です、と彼はそう付け加え、口を閉ざした。

「どれくらい経ったかわからないけども、どうやらテレジア達も封印されていたみたいだし……そうね、ヘルマンには罰を受けてもらおうわ」

アシュレイは悪戯を思いついた子供のような笑みを浮かべた。

ヘルマンは覚悟を決め、その時を待つ。

「ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマンを私の領土を守護した功績を称え、侯爵に任じる」

ヘルマンは思わず顔を上げた。
信じられないといった表情だ。

「侯爵となったからにはより一層私にこき使われてもらう。それが罰よ」

ヘルマンはアシュレイの言葉に頭を下げ、叫ぶ。

「粉骨碎身、尽くさせていただきます！」

そんな彼にアシュレイは満足気に頷き、告げた。

「さて、ならず者共を叩きのめすとしよう。リリース達も加速空間で首を長くして待っているに違いない。サクッと終わらせましょう」
「アシュ様、逆天号及び魔神兵、鬼神兵はいつでも可動できます。うまく隠しておきましたので……」

ベルフェゴールが頭を下げたまま告げた。

アシュレイは相手が可哀想、と思いつつも、容赦なく勅命を下す。

「我が領土を全て回復せよ。立ち塞がる者全てを征伐せよ。アシュタロスの名を地獄に再び広めよ」

後に征伐戦争と呼ばれることになるこの戦いで、アシュレイは短期間で全ての領土を回復し、居城をならず者達から解放した。

凄惨極まる一方的な虐殺が行われ、若い世代達はアシュタロスの名を恐怖と共に知ることになった。

ともあれ、アシュレイは全てに決着がついたことに満足し、ようやくゆっくりと休めることに手放して喜んだ。

それからしばらくの間、アシュレイは地獄でのんびり過ごすことになった。

ルシフェル達が墮天して、彼女のところに挨拶しに来て、ルシフェル サタンが最高指導者となったことや、ヤッさんが隠居宣言をして、キーやんに最高指導者の座を譲ったことなど色々あったが、それら全てにアシュレイは関わらなかった。

アシュレイが再び表舞台に出てくるのは西暦1300年代、百年戦争が始まる頃のことであった。

そして、彼女は帰還した（後書き）

第二章完ッ！

彼女の悪巧み（前書き）

独自設定・解釈あり。

彼女の悪巧み

かつん、かつんという音が広い部屋に木霊する。
硬質なものが触れ合う音だ。

その音の正体は2人の悪魔がやっているチェスであった。
その様子を横から観戦している1人の悪魔。
ここは万魔殿にある魔王専用のサロン。
7人いる魔王のうち、3人がここに集っていた。

「チェックメイトよ」

そう宣言したのはアシュレイ。
対戦していた方は肩を竦める。

「やれやれ、君には勝てないね」

そう返す悪魔の名はベルゼブブ。

「おい、アシュタロス。次は俺と勝負だ」

観戦していた悪魔がそう言ったが、アシュレイは鼻で笑う。

「負けそうになったら盤をひっくり返して、直接戦った方が早いと
か言っちゃう方はお断り」

「過去は過去。今は今だ」

開き直る彼の名はベリアル。

ルシフェルと共に墮天してきた天使の1人であった。

「やめておきなよ、ベリアル。どうせまた同じ結果だ。僕やサタン様でも勝てないんだからね」

ぐぬぬ、と言葉に詰まるベリアル。

そんな彼にアシュレイは胸をはってみせる。

「これで552戦552連勝……圧倒的強さ。さすが私」

高笑いするアシュレイを憎々しげに見つめるベリアル。

気性が激しく、そして負けず嫌いの彼としてはアシュレイ相手であつても、負けるのは嫌であつた。

そんなアシュレイは今や押しも押されもせぬ魔王の1柱。

サタンを首班とした新生地獄政府の運営が開始されたのはおよそ1300年前。

そこで正式に魔王となつたアシュレイはアシュタロスとして、ベルゼブブと並ぶ地獄のNo2として地獄政府の要職に就いていた。

「何や、3人しかおらへんのか」

そんな関西弁と同時にサタン……サツちゃんが現れた。

彼は七大魔王のうち、3人しかいないことに落胆してしまつ。

墮天した当時は標準語であつた彼は最高指導者となつてから、ヤツさんを見習つて関西弁を喋り始めた。

そういうところは見習わなくていい、と誰もが皆言つたのだが、サツちゃんの決意は固く、今に至るまで関西弁が続いている。

「サタン様、決まつたのですか？ 神魔交流会の日程が」

「せや。1ヶ月後、神族側の地上の拠点である妙神山でやることになった」

先の戦争のゴタゴタは最近になってようやく片付き、デタントの一環として神魔族で集まり、色々話し合おうというもの。

もつと碎けていえば、もう戦争のことは忘れて仲良く宴会でもしようぜ、という会である。

「女神は？ 女神はくるのっ!？」

「来るとちやうかー」

興奮気味なアシュレイに答えるサツちゃん。

彼としてはアシュレイは一応部下ではあるものの、頭が上がりなという非常に扱い難い存在であった。

何しろ、アシュレイがサツちゃんが最高指導者になることに対して支持を表明したおかげで、元天使ということで反対していた連中が一斉に黙ったからだ。

「あと帝釈天とかも来るらしいから、一応こっちから手を出さないようにな」

微妙な表情になるアシュレイ達。

その場で宣戦布告なんて最悪な事態も考えられるだけに色々な意味で怖かった。

「ところでそろそろ私も身を固めたいと思うのだけでも」

唐突にそんなことを言い出したアシュレイに全員の視線が集中する。

「女神と結婚したい。フレイヤとかフレイヤとかフレイヤとか」
「フレイヤが地獄に来るとか……神話を書き換えんとアカンやる」

そう言ったものの、サツちゃんはふと思い出した。

ベルゼブブとベリアルもまた神界にいた頃、何度か会ったフレイヤについて思い出したのか、何とも言えない表情となる。

「……ある意味、お似合いかもしれへん……アカン、やばいわ。戦争んなる」

フレイヤはアース神族とは敵対していたヴァン神族に属し、美・愛・戦い・豊饒・死・魔法を守護する女神であり、美しい女性だ。その性格は自由奔放であり、欲望のまま行動し、性的に奔放であった。

性格がどこかのアシュなんとかという魔王と非常に似通っていることがよくわかる。

サツちゃんが戦争になる、と言ったのはもしフレイヤが来たのなら、アシュレイが口説いて、妙神山でイタしてしまう可能性が高かった。

フレイヤは夫のオーズとはとうの昔に離縁しており、愛人も過去にはいたが、人間であった為にもういない。

つまり、何の問題もないのだ。

ただ、それを神魔交流会でやるというのがとても問題がある。

フレイヤの父親のニョルズや兄のフレイが黙っていないだろう。

「やるなよ！ 絶対にやるなよ！」

思わず標準語になってしまうサツちゃん。

デタントを初っ端からをぶち壊しかねないからしょうがない。

アシユレイは一応了承したものの、頭の中ではフレイヤをどう口説こうか熱心にシミュレーションしていた。

どうせ魂の牢獄に囚われているのだから、地球にさえ影響が出なければアシユレイとしてはハルマゲドンを何回やっても別に構わなかった。

「ところでアシユタロス。てめえ、何か火星で色々やってるそうじやねえか」

「ええ。それが何か？」

「俺も暇だから参加させる」

「やだ」

「なんだと、と激昂するベリアルにアシユレイは臆することなく返す。

「だって、あそこは私の世界だもの。あと、世界システムの観測実験もやり始めたから、ベリアルとペイモンだけは入れたくない」

「俺はあの脳天気女と同レベルなのか……」

「ずーん、と落ち込む彼。」

アシユレイとしては妙なことをされて、実験をぶち壊されたくないかった。

ともあれ、アシユレイが言った観測実験はサツちゃんの了承を得た上で当然行なっている。

サツちゃん自身としても、興味があったのだ。

火星にある異界はもはや一つの世界とっていいレベルに達している。

ならばこそ、世界の中に世界があるという状態で、火星にある世界が滅びに向かうとき、その滅びを抑止する為に世界システムすなわち、宇宙意思が動くのかどうか。

それを観測する為にコスモプロセスを使い、火星異界の大気中に存在する魔力素を徐々に減らしていつている。

これにより、近い将来　とはいっても、魔族の時間感覚での近い将来　魔力枯渇という問題に火星の異界は直面することになる。

「そういえば君はその為にわざわざ新しい組織まで立ち上げていたよね」

ベルゼブブの言葉にアシュレイは頷く。

「完全なる世界って名前よ。これで引つ掻き回して、適度に戦争も起こして、一致団結しないようにしてもらわないと、世界システムが現れてこないの」

つまり、異界住民達が一致団結して解決に当たれば世界の後押しというものが表に出てこないのだ。

より見える形にする為に、そうならないようにする必要がある。

その為にアシュレイはわざわざ地球から魔力を持つなどの素質ある人間達を異界に強制的に移住させていた。

現地住民と彼らが摩擦を起こさない筈がない、という確信を持つて。

無論、実験が終了すれば魔力枯渇なんぞコスモプロセスで瞬時に解決し、また問題を起こしている地球人達も火星異界内であるからコスモプロセスでもって因果律そのものから消去できる。

因果律からの消去とはすなわち、元から存在しなかったという状態になる。

火星異界住民たちのあらゆる記録・記憶から消えてなくなり、地

球人が作った都市すらも消えてなくなる。

存在しない存在が作った都市は存在しないのは当然のことだ。

「ちゅーか、アシユタロス。あんさん、最近使い魔作りすぎとちやうか？」

「完全なる世界の上層部は全部私の使い魔にしたから、まあ、いいじゃないの」

「アーウェルンクスシリーズやったか？ それとデュナミスとかちゅーヤツ」

「私のお気に入りは3番目と6番目。デュナミスは彼らの助言者みたいなものね」

とはいっても、とアシユレイは続ける。

「私がマジで使い魔作ったら、上級魔族の上位とかになって神族にいらんちよっかいをかけられるから、かなり手抜きなんだけどもね」

「一応デタント考慮してくれとるようすで有り難いわ」

「そういうこと。あと闇の福音計画もようやくスタートしたわ……ただ、素質のある子が中々いないの」

そう言ったアシユレイにベルゼブブが提案する。

「もうそろそろヨーロッパで1000年程戦争が始まる。そのときの混乱に紛れて適当な人間を攫ってきてはどうかかな？」

アシユレイはピンときた。

百年戦争、オルレアンの乙女、異端審問、処刑……

彼女は満面の笑みを浮かべ、何度も頷いた。

「神に裏切られた可哀想な少女を助けるのはやっぱり悪魔の役目よね」

「……神魔交流会の件、忘れんといてなー」

こうと決めたら一直線なアシュレイは神魔交流会をすっぽかすという大変な事態を引き起こしそれでサツちゃんは気が気ではなかった。

神魔交流会に出席するのは魔族側からはサツちゃん含め、8人。アシュレイを除けば全員が墮天使だ。

対する神族側は隠居したヤツさん含め、大勢の主神達。

元々はヤツさんとキリスト……キーヤンなどの数名の主神のみであったが、アシュタロスの顔を見たい、と大勢の主神達が参加を表明したのだ。

いわゆる怖いもの見たさであった。

「サタン様、他の連中にも？」

「ああ、ベリアル、伝えといてくれんかー」

御意、と頷くベリアル。

さすがの彼も天使であったときから上司であるサタンには頭が上がない。

「ところでエナベラの子孫搜索だけでも」

アシュレイは切り出した。

「神魔交流会で私は自分の軍団全てを投入して探すって言うから」「それくらいならええんとちゃう？ わいからあらかじめキーヤんに伝えとくわ」

「そうして頂戴」

アシユレイは満足気に頷いたのであった。

神魔交流会（前書き）

独自設定・解釈あり。

フレイヤは神界のアシユレイ。

神魔交流会

妙神山にある神族の拠点　書院造の屋敷と道場は非常に険しい場所にある。

そこは人間が容易に立ち入らぬように人跡未踏の山奥にあり、また地球の霊的なエネルギーが集まる場所……いわゆる、霊脈の上にあった。

普段は静かなそこは今日、慌ただしかった。

「御膳やお酒は大丈夫ですか!？」

厨房に駆けこんでそう叫ぶのは赤い髪をショートカットにしている小竜姫。

彼女は数百年程前からこの妙神山の管理人を任されるようになったのだ。

また、齊天大聖も妙神山の守護者という役目を任され、日々、小竜姫を鍛えている。

図らずも戦争終結後、彼女を鍛えてもいいかもしれない、とっていた彼の言葉が実現した形だ。

ともあれ、そんな管理人の小竜姫は非常に忙しかった。

彼女は厨房を任されている神族から返ってきた答えに安堵の息を吐く。

大酒飲み、大食いが主神には多くいる。

また、やってくるサツちゃん含め、8人の魔王達も同じようなもの。

それを見越して、神族のコック達は有り余るだろう量を神界から

持ってきていた。

神界の酒や食べ物といつても、特に悪魔を祓う効果などはない。多く出席する神族側が料理その他を出すことになったのだ。

「小竜姫、大変そうなのねー」

呑気な声が小竜姫の傍から聞こえてきた。

すると彼女の傍の空間からトランクをもった女性が現れた。

目玉のようなイヤリングをしているあたり、趣味の悪さが出ているような気もするが、これらは千里眼であり、ありとあらゆるものを見通してしまう。

彼女の名はヒヤクメ。神族の調査官であり、いい腕をもっているのだが……如何せん、不真面目過ぎるのが玉に瑕であった。

「ああもうヒヤクメ！ ちょうどいいところに！」

ガシツとヒヤクメの首根っこを掴み、小竜姫はとてもイイ笑顔になった。

一応、彼女とヒヤクメは友達である。

不真面目なヒヤクメと真面目な小竜姫は馬が合いそうにないのだが、あにはからんや、意外と息が合っていた。

「な、何にかしら？」

目の前にある小竜姫の顔にヒヤクメは冷や汗を流しながら問う。

「手伝ってくれるわよね？」

「は、はい……手伝うわ」

基本的に小竜姫に逆らえないヒヤクメ。

本当に彼女達が友人関係にあるのか、周囲からは疑問に思われていたりする。

そんな小竜姫とその犠牲者1名の奮闘もあり、どうにか受付開始までには全ての準備が整った。

そして、午前9時、受付開始時間を過ぎ、続々と降臨する主神達。彼らは皆、拠点内に直接やってくる。

神族であるが故に張られている結界を素通りできるからだ。

受付もやらなければならぬ小竜姫はヒヤクメと共に名だたる神々に恐縮しつつ、名簿に出席の印をつけてもらっていく。

帝釈天やら仏陀やら竜神王やらオーデインやらキーヤんが熾天使達と共にやってきたときはあまりの緊張に小竜姫はヒヤクメと共に意識が遠のきかけたりしたものの、どうにか神族側の出席者は全員揃った。

そして、あらかじめ時間を2時間ズラしてあった、魔族側の受付開始時間となった。

言うまでもなく、神族側と同じ時間に受付を開始してしまえば、その場で第二次ハルマゲドンが起きかねないからであった。

魔族側は拠点に直接やってこれないので、拠点の外側に現れてそこからやってくることになる。

拠点の扉には鬼門という2体の鬼が門番をしており、彼らが受付まで案内することとなっていた。

そんな彼らは可哀想なくらいに震えながら、サツちゃんを筆頭に続々とやってくる魔王達を案内していく。

「……あと、1柱ですか……」

小竜姫は魂の抜けたような表情でそう呟いた。

「こ、怖かった……」

小竜姫と同じような表情のヒヤクメ。

彼女も小竜姫も主神や魔王と比べればただの雑魚に過ぎない。

というよりか、ヒヤクメに至っては千里眼を扱う調査官であり、単なる文官だ。

小竜姫よりも余計に恐怖を感じてもおかしくはなかった。

「最後は……」

小竜姫は名簿を見て固まった。

そんな彼女の様子にヒヤクメは不思議に思いながらも名簿を見て固まった。

残っているのはアシタロス。

神族魔族問わず、知らぬ者はいない地獄の魔王であり、先の戦争での魔族側の英雄だ。

かつてのミカエルを墮天させ、神々が施した封印を食い破って地

獄に帰ったなどエピソードには事欠かない。

「しょ、小竜姫……逃げていいかしら？」

ヒヤクメは涙目でそう言った。

しかし、小竜姫はにっこりと微笑んだ。

彼女は恐怖が限界を突破し、逆に怖くなくなってしまった。
早い話、感覚が麻痺したのだ。

「ヒヤクメ……私達、友達よね？」

「と、友達でも逃げるときは逃げるのよ！」

逃げようとするヒヤクメを素早く羽交い絞めにする小竜姫。

「ご、後生ね！ 私は神界に戻って自分の家のベッドでガタガタ震えるわ！」

「ええい往生際が悪い！ それでも武神ですか！？」

「私は文官よー！」

ぎゃーぎゃー騒ぐ彼女達は唐突に動きを止めた。

底知れぬ膨大な魔力を持った存在が門を通過したのを確認したからだ。

あらゆるものを恐怖に凍りつかせるかのような、そんな魔力の持ち主は誰か言うまでもない。

そして、彼女がやってきた。

「……女の子？」

小竜姫とヒヤクメは取っ組み合った状態のまま、やってきた彼女

を見て思わず呟いた。

どんなおぞましい姿をしているかと思いきや、小竜姫やヒヤクメと見た目は同じくらいの少女であった。

2人が知らないのも無理はなく、一般に神界に広まっているアシユタロスの姿は暗黒体のものであった。

これは少女形態時よりは暗黒体の時のほうがそれっぽいという単純な理由だ。

光がより強く輝くには闇が強大であればあるほどいいのは言うまでもない。

その為にアシユタロス「巨大な邪竜というイメージが神族に根付くことになった。

先ほどから感じていた魔力を放ってはいるものの、正体を見た人は僅かに安堵の息を漏らした。

幽霊の正体見たり枯れ尾花といった感じであった。

そして、小竜姫とヒヤクメは少女……アシユレイの後ろにいる人物にようやく気が付き、まじまじとその人物を見つめてしまった。

「……あまり見ないでもらいたいのだが」

そう返したのはフェネクス……元ミカエルであった。

彼女はウリエル達と色々と積もる話をするように、と此度の会にアシユレイに強制的に参加させられてしまったのだ。

「ねーねー、受付まだー？」

そんな小竜姫達に問いかけるアシユレイ。

問いかけられた方はその軽い感じに気が抜けてしまった。

「ええと、ここに印を……あ、でもレ点でも何でもいいです」

小竜姫が名簿と共に筆を差し出せば、アシュレイは自分の名前のところに 印……ではなく、二重丸をつけた。

ついで、彼女は空いているスペースに「私つてば最強ね!」と書いて、自分の名前のところとその文を棒線で結んだ。

フリーダムなアシュレイに思わず目が点になる小竜姫とヒヤクメ。

「これでいいの、これでね」

高笑いをしつつ、彼女は宴会場と書かれた矢印に従い、そちらへフェネクスを連れて歩いて行った。

後に残された小竜姫とヒヤクメはどっと疲れが押し寄せるのがわかった。

「しばらく休暇をとりたい……」

「同感だわ……」

もう100年分くらいは仕事をしたような達成感が2人にはあったのだった。

しかし、小竜姫にはまだ仕事があった。

それは宴会場で何か問題が発生した場合、すぐに対処するという非常に胃にダメージを与えるシロモノ。

「ヒヤクメ……これで最後です……」

「もう、生きることを諦めたわ……」

「諦めたらそこで終了ですよ……」

小竜姫はヒヤクメと共に宴会場へと向かった。

宴会場は数十畳はありそうな大広間であった。

そこに大勢の主神達と魔王達で左右に分かれていた。

上座にはサツちゃん、ヤツさん、キーヤんの3人が座っている。

あと1人を除いて、既に全員が揃っており、その1人……正確には従者を含めて2人を全員が待つている状況だ。

既にその2人が拠点内にいることはその魔力から確かであるが、中々宴会場に来なかった。

なお、ベルゼブブ以下、6人の魔王達は対面する主神達と睨み合っており、一触即発の状況でもあった。

まあ、最初に睨んできたのは主神達であったのだが。

そんな最中、襖が開け放たれた。

底冷えのするかのような魔力が宴会場を一瞬で満たす。

上級神族であつても震えてしまうような魔力であるが、さすがに主神クラスはビクともしなかった。

現れたのはアシュレイ。背後にはフェネクスを従えている。

「これだけは言っておく」

アシュレイはそう告げ、ビシッとオーディンを指さす。

指さされた彼はというと興味深げにその長いヒゲを手で撫で、彼

女の言葉を待つ。

「フレイヤは私の嫁」

天使が通り過ぎたかのような沈黙が舞い降りた。

「いや、ワシはフレイヤの父親ではないんじゃないの……」

そう言いつつ、彼はあっちじゃあっち、と指さす。

アシュレイがそっちへ視線を向ければ金髪の初老の男性と青年がいた。

「……本当にうちのフレイヤを嫁にしたいのか？」

初老の男性 ニョルズが問いかけた。

「勿論だわ。ハルマゲドンもいとわない。ここであなた達全員をぶつ殺してでも奪い取る」

サツちゃんがあちゃーと手で顔を覆い、天を仰ぐ。

ヤツさんは複雑な顔となり、キーヤンは苦笑する。

「私の妹を、本当の本当にもらってくれるのか？」

青年 フレイが虚偽は許さない、と言わんばかりの真摯な表情で問いかけた。

「魔王は嘘をつかない。さっさとフレイヤを寄越しなさい」

高圧的なアシュレイの物言いに力チンとくる神族達……かと思いきや、誰もが皆、救世主を見つけたと言いたげな表情であった。あの帝釈天すらも助かった、と言いたげな顔だ。

先ほどまではデタントが始まる前から終わったかもしれない、と絶望していたサツちゃんも何だか場の雰囲気がおかしいことに気がつく、

彼はベルゼブブ達に視線を向けるが、彼らも知らない、と首を横に振る。

「うむ！ 父として喜んでフレイヤをお前の嫁にしよう！ アシュタロス！」

「兄である私も心から祝福しよう！ おめでとう！」

一転して喜ぶ2人にアシュレイは思わず呆気に取られてしまう。他の神族達からも祝福の声上がる。

「ど、どうなってるの！？ 説明を要求するわ！」

さすがのアシュレイも気味が悪かった。

そんな彼女に帝釈天が告げた。

「フレイヤは……その、なんだ。とんでもない好き者でな……既婚者の神族をたぶらかしたり、男の天使をレイプしたり……」

「……神界の私か」

アシュレイは思わず呟いてしまった。

彼女の主食は女であるが、そこら辺を差っ引いても、神界版のアシュレイであることは間違いない。

「元夫のオーズも、あっちこっちで男をたぶらかすフレイヤに愛想が尽きた、と言ってきてな……」

ニヨルズの疲れた顔に思わずアシュレイは同情してしまう。

彼女にはフレイヤの行動が手に取るように分かるだけに、ニヨルズやフレイの苦労は計り知れない。

とはいっても、あくまで同情するだけでアシュレイは自分の行動を改めたりはしない。

彼女にとって優先すべきものは自分の欲求である。

アシュレイは悪魔であるからしょうがない。

「というか……いいの？ 私の嫁ってことは墮天するってことだけでも」

「……あちらこちらで男をたぶらかす妹が神族であるのは不思議でならない」

アシュレイの疑問にフレイが答え、神族は彼の言葉に同意とばかりに皆頷く。

勿論、ここにいる主神達の中には下半身がそれなりにだらしのな
い者もいたりするのだが、それでも過去に肅清された神々のように
あからさまではない。

バレないようにうまくやっていたり、相手が納得できるようにや
っていたりするのだ。

ちなみに、ここにいる神々で、一番好色な神が帝釈天であったり
する。

「ともかく、今日は良き日だ！ 飲もう！ 踊ろう！ 歌おう！
神魔族の緊張緩和に向けて！」

ニヨルズが音頭を取り、なし崩し的に宴会が始まってしまった。

「不思議な子やな」

ヤツさんはアシュレイに視線をやりながらそう呟いた。

視線の先にいるアシュレイはこれから義父・義兄となるニヨルズ・フレイと楽しそうに酒を飲んでいる。

「ええ、そうですね。平行世界の私達から聞いてはいますが……」

キーやんの言葉にサツちゃんが同調する。

「せやなあ……ほんま、向こうのアシユタロスはええ子を選び出したもんや」

サツちゃん、キーやん、そしてヤツさんは平行世界の自分達からアシュレイの経緯については既に聞いていた。

聞いた当時こそ驚いたものの、見ていれば確かに元人間であるということが分かる面も多々ある。

無限の性欲であったり、何だかんだ言いながら側近連中に優しかったり、自分を崇めるといふ条件はつくものの、人間に優しかったり。

この場に本来なら呼ばれていなかったフェネクスを無理矢理ねじ込んだのも、アシュレイが元同胞達とフェネクスが話し合う機会を設けて欲しい、とサツちゃんに言ったからだ。

そのフェネクスは新しくミカエルとなった金髪の美しい女天使やガブリエル、ウリエル、ラファエルなどの旧友達と何やら話し込んでいる。

「彼女だけ特別……というわけではありませんが、それでもこの世界に来て以来、一番苦労したのは彼女ですし、何かしてあげたいですな」

「ワシは右腕を食いちぎられたけどな……いや、アレは痛かったわ……」

そう言って右腕をさするヤツさん。

「初めてでっしやる？ 傷を負うなんて」

サツちゃんの言葉にヤツさんは頷く。

「ワシら神族……いや、もっと限定すれば主神連中は痛みを知らんからな……今回のことはいいい薬となったと思うんや。首謀者の帝釈天なんぞ喰われたしな……」

「さすがの彼らもしばらくは大人しくしているでしょう」

キーやんの言葉にヤツさんは頷く。

「ワシは隠居した。けども、神魔のデタントの為に裏から色々やらせてもらう。表はそっちに任せたで」

ヤッさんの言葉にサツちゃんときーやんは力強く頷く。
その様子にヤッさんは顔を綻ばせたのだった。

宴会は夜になってもまだ続く。

もはや神も悪魔もゴチャ混ぜであり、ベリアルと毘沙門天が飲み比べをしたり、ベルゼブブがウリエルの愚痴を聞き、墮天を勧めていたり、とカオスな状況であった。

そんな中、アシュレイは宴会場を抜け出し、1人、縁側から庭へと出る。

綺麗に整った庭園は管理人の几帳面さが如実に表れており、雑草はどこにも生えていない。

夜空には満月が地上を明るく照らし、吹く夜風はやや冷たい。
アシュレイに、その風は心地良かった。

「少しいいか？」

その声にアシュレイは振り返る。
縁側には帝釈天が座っていた。
彼の傍には徳利とお猪口が2つずつ。

「いいわよ」

アシュレイは了承し、帝釈天の横に腰を下ろす。彼女に彼はお猪口を1つ渡し、それに酒を注ぐ。

「あなたにお酌してもらえるなんて、光荣だわ」

アシュレイの言葉に帝釈天はくつくつと笑う。

「まあ飲め」

彼の言葉にアシュレイは一気に呷る。

その酒の苦味と込み上げてくる熱さに思わず彼女は溜息を吐く。

「うまい。いい酒だわ」

「神界で造った鬼殺しという酒だ。お前でも勝てんかな？」

彼の言葉に今度はアシュレイが笑った。

アシュレイは吸血鬼。いわゆる西洋の鬼だ。

「ところでいいの？ 悪魔を滅ぼしたくて堪らないんじゃないの？」

そう言いつつ、アシュレイは彼のお猪口に酒を注ぐ。

「今は戦ではないからな」

そう言い、彼はぐつと呷る。

「悪魔を滅ぼしたくて戦争を起こした癖に？」

「それも確かにあるが、わしや阿修羅、あるいは毘沙門天なんかの

武神や軍神はそれ以外の目的もあった」

「その目的は？」

「強い敵と死力を尽くして戦うことだ」

「己の欲望の為に戦争を起こしていいのかとか人間が聞いたら言うわよ？」

「人間はいい輩も確かにいるが、基本的には陰湿で陰惨な連中だ。わしらはそういうのが何よりも許せん。そんな連中が正義を語るなんて滑稽だ」

アシュレイは帝釈天の評価を改める。

ただの脳筋戦争馬鹿から、それなりに話の分かるヤツへと。

「お前の民を滅ぼしたことはわしが戦争を起こしたことが原因だ。生き残った民はおそらく、悪魔信仰者として人間共から迫害を受けているだろう。連中は異端を嫌うからな……」

だが、と彼は続ける。

「わしはお前に謝らん。わしを存分に憎め。それでわしと戦え。この前は無様な姿を晒したが、次はそうはいかん」

闘志を燃やす帝釈天にアシュレイは再び評価を改める。

話の分かる脳筋へと。

「つまり、あなたはどこまでいっても力の神なのね。力比べをしたくてしょうがない……根っからの戦士」

「そうとも。お前には敬意を払おう。わしを倒した悪魔はお前が初めてだ」

アシュレイはくすり、と笑う。

彼女としてもここまで堂々とされるとかえって清々しくなってしまう。

「ところでお前は武術とかは習っているのか？」

「いつか習おうとは思ってみたけど、今のところは習ったことはないわ」

「ならわしのところにしばらく来るか？ そうすればお前いつでも戦える。ついでに武術を教えてやろう」

帝釈天が使う武術……これ以上ないくらいに正統なものだろう。

何だか話が妙な方向へ進んでいるが、ともあれアシュレイは帝釈天の屋敷に女つ気がなさそう、とあたりをつける。

体育会系というか無駄に暑苦しそうなイメージだ。

「いや、私は遠慮しておくわ……悪いけど、あなたの屋敷には女つ気がなさそうなもの」

「……そういう断り方をされるとは思ってもみなかった」

「帝釈天の予想を上回るなんて、さすが私ね」

「ちなみにだが、わしの嫁は神界でも美女と評判だぞ？ フレイヤといい勝負だ」

「……寝とつていい？」

「それは勘弁しろ」

そう言つて帝釈天は豪快に笑う。

アシュレイもまたつられて笑う。

2人の声が庭に木霊する。

「ああ、そういえば……ある羅刹女がお前に一目惚れしていたぞ？」

「……羅刹女？」

「美しい人間の女の姿をした鬼神だ。毘沙門天の眷属でな」

「すぐ紹介して！」

目の色を変えたアシュレイに帝釈天は笑う。

「そうくると思って、もう呼んである」

帝釈天がそう告げれば、ふっと現れる1人の女。
美しい女だ。

艶やかな長い黒髪、2本の角、着物を纏い、その腰には刀。

アシュレイはその女に見覚えがあった。

彼女の疑問を見透かしたように、女が答えた。

「アシュタロス様とは一度、先の決戦でお会いしております」

「ああ……あのときの」

戦場でアシュレイが一度止まったとき、その傍にいた刀を抜いて
いなかったあの女であった。

「でも何で？」

「降臨して以来、圧倒的な強さを振るうアシュタロス様に……」

その白い頬を朱に染めて、恥ずかしげに視線を逸らす彼女。

「基本的にわしら武神や軍神は強いヤツが好きだ。それは相手が悪
魔であっても例外ではない。で、そのこの羅刹女……陣風は下級鬼神
であるが、見ての通り、お前も満足できる容姿だろう？」

「お持ち帰りしていいですか？ 帝釈天様」

「うむ、よからう」

へりくだるアシユレイと鷹揚に頷く帝釈天。

先の戦争で敵同士で戦ったとは到底思えない様相であった。

この辺、人間ならば感情的なしこりで色々と気まずさなどが残るが、基本神々や悪魔にとって、戦った後にそのようなしこりは残らない。

中にはより憎悪をたぎらせたりする連中もいるが、そういうのは極めて少数であった。

分かりやすくいえば、番長同士が喧嘩した後には相手の実力を認め合って仲良くなる……そういう感じであった。

「で、陣風」

「はい、アシユタロス様」

「長いからアシユ様でいいわ。で、私と地獄に来る？ あとその胸揉ませて」

着物を着ているにも関わらず、主張しているその胸。

ディアナや大人形態時のエシユタル程ではないが、それなりに大きいことは間違いない。

「喜んで……」

承諾した陣風にアシユレイは喜色満面。

「それじゃ私はちょっと用事があるから」

そう言つて、彼女は陣風と共に何処かへと消えていった。

小竜姫に空いている部屋に案内してもらおうのだろう。

そこで何が行われるかは言うまでもない。

「中々面白い娘だ」

後に残った帝釈天はそう呟き、徳利ごと酒を呷った。

そして、翌日。

二日酔いで死屍累々……となっっているかと思いきや、人間ではないのでそんなことにはならなかった。

そして、開かれた会議でもって神族と魔族の間で幾つかのことが決定した。

それは以下の通りだ。

魔族は人間を墮落させるべく、悪事を働く。

神族は人間に対して行う魔族の悪事を余程のことでない限り見逃す。

神族は墮落した人間の数が一定数に達した段階で地球に降臨し、墮落した人間達を更生させる。

魔族は神族が人間の更生時に降臨する際、手出しをしない。

基本的に神魔族は地球上では全力で戦わない。ただし、自らの存在に関わるような緊急事態となった場合はこの限りではない。

以上の5点に加えて、アシュレイが探しているエナベラの子孫や他にいるかもしれないソドムとゴモラの末裔達の捜索について、全ての軍団を捜索に投入することも合意に至った。

さらに蛇足として、アシュレイとフレイヤの結婚式の日程については後日改めて決めるということにもなった。

これらの決まりごとを見れば、光である神族をより引き立たせる為に敢えて魔族の好きにさせるということがよく分かる。

神族は確かに光の存在であるが、常に人間の味方というわけではなかった。

サツちゃんにとって、やんちゃんなアシュレイも少しは落ち着いてくれるだろう、という願望があった。

彼からすれば一夜開けてみれば、見慣れぬ美女がフェネクスと共にアシュレイの傍にいたり、帝釈天が妙に親しげにアシュレイに挨拶したり、と訳がわからない状態であった。

その様子に、帝釈天とアシュレイが共謀してハルマゲドンを起こしたりしそうでサツちゃんとしては非常に怖かったのだ。

ともあれ、神魔交流会はどうにか無事に幕を閉じたのであった。

望まれぬ者達（前書き）

独自設定・解釈あり。

微エロ・微グロあり。

エヴァンジェリン「私の父母が優しい人ってどこ情報よー？ つら
いわー私が一番つらいわー」

望まれぬ者達

彼女は望まれていなかった。

古くから続く魔法使いの家系であり、かつ貴族である名家にとつて、世継ぎとして望まれたのは男子。

しかし、生まれてきたのは女の子。

おまけに、その娘が魔法使いとして高い資質を持っていたのだからたまらなかつた。

魔法とは大昔に誰かが編み出したもので、その洗練された術は魔力があり、呪文詠唱さえできれば誰にでも使えるお手軽なものである。

無論、多少は勉強を必要とするが、簡単な魔法ならば感覚だけでもできるのは確かだ。

だが、彼女は魔法を勉強することさえ許されず、城にほとんど軟禁された生活を送っていた。

父親も母親も彼女を疎ましく思い、何故男子でなかつたのか、と事あるごとに彼女を罵倒した。

嫁に出すにしても、跡継ぎがいなければ最終的に他家により吸収されてしまう。

生き馬の目を抜くこの時代、油断すればすぐに家は消えてなくなる。

家の為に全てを使う、というのはこの時代を生きる貴族達にとって当然のことであつた。

しかし、少女はそれでも信じていた。

いい子にしていればきつといつか父も母も自分を見てくれる、と。彼女は必死に勉強した。

読み書きは無論、城にあった様々な魔法関連以外の本を読みあさり、あらゆることを学んでいった。

ただし、魔法関連の本は読むことを禁止されていた為、一切読むことができなかった。

そして、彼女が8歳の誕生日を迎えたときであった。

「よく頑張ったね」

優しい表情の父。

「ええ、本当によくできた子だね。お誕生日おめでとう」

嬉しそうな表情の母。

そんな2人に少女は自分の努力が報われたことを悟った。

これまで誕生日に会いにきて、そして祝ってくれるなんてことはなかった。

感動の余り思わず涙ぐむ少女であったが、ふと母親のお腹が膨らんでいることに気がついた。

「お母様……そのお腹……」

「魔法で調べてもらったところ、立派な男の子ですって!」

声を張り上げた母親に少女は僅かに怯える。

もう自分はいらぬ、と捨てられやしないか不安であった。

「さて、誕生日プレゼントに専属のメイドをつけよう」

父親はそう言い、ドアの外にいる者を呼んだ。
ドアが開き、入ってきたのはメイド服を着た少女。
その髪の色は灰色であり、後ろで三つ編み団子にしている。
彼女は少女の前にやってくると、頭を下げた。

「レイチエルと申します」

再び頭を上げたとき、レイチエルと少女の視線がかち合う。
レイチエルの瞳は灰色であった。

「これからは彼女がお前の面倒を全てみる。ああ、城の外に出ることも許可しよう。存分に……遊んできたまえ」

妙な間があったが、少女は特に気にならなかった。
彼女は生まれて初めて城の外に出られるようになったことで、胸がいっぱいだ。

「では私達は用事があるのでな……」

父親はそう告げて、母親と共に部屋から出て行った。
後に残された少女はどうしたものか、と考える。
何となく気まずい雰囲気であった。

「お嬢様、どうなさいますか？」

「えっと……とりあえず、外に出たい」

「畏まりました」

恭しく頭を下げ、レイチエルは少女を先導する。
そして、2人は城外へと出たのであった。

「……行つたか」

父親は書斎の窓からレイチエルと娘が城から出たことを確認し、溜息を吐く。

「教会の司祭とは既に話をつけてあるわ。たまたま魔女が潜り込んで、うちの娘を墮落させた、というシナリオよ」

母親が革張りのソファに座り、そのお腹を優しく撫でながらそう告げた。

「やれやれ、高い処分代だ。司祭も足元見た値段を提示して……いらん出費は勘弁して欲しいのだがね」

「しょうがないわ。合法的に誰もが納得できる方法で処分できるなら、これほどいいことはないもの」

娘を他家に嫁に出してもよかつたのだが、その高い魔法資質により、将来的に敵対関係となった場合、非常に面倒くさい事態となる。それならばさっさと殺してしまつた方が後腐れがなく良い、と彼らは判断した。

「ともあれ、まさかあの魔女が手に入るとは思つてもみなかった」

彼は思い出す。

魔女……レイチエルを商人が売りに来たときのことを。

「どっかの貴族が手放したんですって？ 飽きたとかで」

「ああ。それで押し付けられた商人が泣きついてきたんだ。あんな傷物の体では商品にならない、と」

その言葉に母親ははてな、と首を傾げる。

見たところ、レイチエルの体に傷はなかったからだ。

そんな彼女に彼は言い難そうな表情で告げる。

「下の口がゆる過ぎて駄目という意味だ」

一瞬で母親の顔が朱に染まる。

「まあ、そういうわけだ。あんな魔女とやりたがる物好きがいるとはなあ……」

世の中広いものだ、と彼は呟いた。

「わぁ！」

少女は辺り一面に広がる花畑に思わず声を上げた。
「こんなにたくさんのお花を間近で見たのは初めてであった。
彼女は深呼吸して、お花の香りを胸いっぱい吸い込む。

「いい匂い……」

そう呟いた少女にレイチエルは微笑んでいる。

「えっと、その、レイチエル……このお花が何か分かる？」

「これはラベンダーですよ」

うんうん、と少女は頷きつつ、次々にお花の名前をレイチエルに聞いていく。

聞かれた彼女は嫌がるなどということは当然せず、お花の名前を答えしていく。

やがて少女は花畑の端っこにある木に紫色のお花が咲いているのを見つけた。

「こっち！　こっちへ来て！」

彼女はレイチエルの手を引っ張ってその木の根元まで連れていく。
そして、彼女はそのお花を指さして尋ねた。

「あれは何？」

「あれはライラックです。紫色だけでなく白色のお花もありますよ」

「ライラック……綺麗でいい香り……」

気に入ったらしい少女にレイチエルはその小さな体を抱っこした。わわわ、と慌てる少女。

彼女が抱っこされた経験は物心ついてから一度もなかった。

「うわぁ……」

間近で見るライラックに少女は感嘆の息を漏らした。

そのとき、羽音が彼女の耳に入ってきた。

気がついたときには目の前に蜂が。

「蜂！ 蜂！」

混乱し、じたばたと暴れる少女。

しかし、レイチエルは動じず、ゆっくりと彼女を地面に下ろした。

「ああ……びっくりしたぁ……」

へたり込んだ少女をレイチエルはくすくすと笑う。

「むー」

恥ずかしさに頬を膨らませる少女であったが、それがまた返って可愛らしかった。

レイチエルはそんな少女の頭を優しく撫でる。

その感触は少女にとって新鮮であった。

「レイチエル」

「はい、お嬢様」

「そういえば私ってあなたに名前を言ってなかったと思うの」
「はい、聞いておりません」

撫でられながら、少女は告げる。
自らの名を。

「私はエヴァンジェリンよ。よろしくね」

城へ戻ったのはすっかり日が暮れてからだだった。
夕食を済ませた後、エヴァンジェリンを自室に送り、レイチエルもまたエヴァンジェリンの部屋の傍に設けられた自室へと戻った。

そして、彼女は懐から木彫りの人形を窓辺に置き、床に両膝をつき、祈り始めた。

「アシユ様……一時の平穏を今、私は得ております……ですが、私の平穏はあなた様のお傍以外にありえませんが……」

木彫りの人形を見つめる灰色の瞳には狂気の光。

彼女はこれまでの全てを改めてお話致します、と切り出した。

「私は母と共に忌々しい人間達に捕まりました。そして、私は母と共に人間共の慰み者となり、ある日、母はもう緩くて使い物にならない、と言われ私の前で生きたままお腹を引き裂かれ、死にました」
そして、と彼女は更に続ける。

「人間達は私に母の死体を食べるように言いました。私は母からアシユ様がご教授された多くの魔法を教えてくださいましたが、私には魔力を封じる手錠が掛けられており、抵抗する術がありませんでした」

レイチエルは深呼吸し、続ける。

「アシユ様、私は告白致します……あのとき、なぜ助けられなかったのか、とあなた様を疑ってしまいました」

彼女は苦痛に満ちた表情でその言葉を告げた。

彼女にとつて、アシユレイを疑ってしまったことは何よりも大きな罪であった。

「私はある日、噂を聞いたのです。多くの魔族達が何かを探している、と。彼らは自らをアシユタロスの配下である、と名乗ったと……」

彼女は両目に涙を溜め、更に言葉を紡ぐ。

「あなた様は私を、私達を見捨ててはいなかったと……必死に探したださっていたと……」

彼女はエナベラの記憶から知っていた。
アシュレイは彼女に将来的にアシュタロスとなる、と言ったことを。

「それなのに私はあなた様を疑ってしまい……如何なる罰もお受けいたします。これより先に私へ振りかかる災いは全て罰なのでしよう。あなた様の御心を傷つけてしまった罰……」

唐突に扉が開いたのはそのときであった。

レイチエルは素早く人形を懐に隠し、その人物へと視線をやった。

「……旦那様」

「話は全部聞かせてもらった。如何なる罰も受けるそうだな」

嘲笑を浮かべ、彼は告げた。

「ちょうど下男共は鬱憤が溜まっていてな。彼らの性欲を処理しろ。如何に緩くてもどうにかなるだろう」

「……畏まりました」

レイチエルは了承し、頭を下げた。

彼女は攻撃魔法を知らないが、それでも脈々と受け継がれた治癒魔法を応用し、生物であるなら必殺できる魔法を扱える。

だが、マトモな格闘術を知らない彼女には不意打ちができる状況でしかその魔法は効果を発揮しない。

何よりも、先ほどアシュレイへこれから振りかかる災いは罰である、と宣言したばかりだ。

「それとエヴァンジェリンに魔法を教えろ」

思わぬ言葉にレイチェルは思わず顔を上げる。

「お前の扱う魔法でも、この城にある魔術書を使ったものでも何でも構わん」

「……畏まりました」

一拍の間を置き、彼女は了承した。

翌日から早速レイチェルはエヴァンジェリンに魔法についての講義を開始した。

彼女は深夜遅くまで行われた下男達との行為の疲れも見せず、元気に振る舞う。

エヴァンジェリンは今まで存在は知っていたものの、それでも手を出すことができなかった魔法を学ぶことができ、非常に嬉しかった。

しかし、2人はまだ知らない。

これがエヴァンジェリンの運命を決定的に分かつこととなったことを……

地球崩壊の危機……か？（前書き）

微工口あり。
ネタ技あり。

地球崩壊の危機……か？

「筋がいい……のは当たり前かのお」

そう言いつつ、斉天大聖はキセルを吹かす。

彼の視線の先には教えられた通りに体を動かしている1人の少女の姿。

ただの少女では勿論ない。

「次はもうちつと複雑な型じゃ。さっき教えた24番目のヤツじゃ」「はい」

気の抜けた返事をするアシユタロスこと、アシユレイであるが、斉天大聖は咎めもしない。

なぜならば、立場的には彼女の方が上であるからだ。

本来なら神族の拠点である妙神山にアシユレイがいるのには勿論理由があった。

表向きの理由としては神族と魔族のデタントの象徴兼妙神山にいた方が結婚式の日程などについて詰めやすい為。

本当の理由は新たにアシユレイの下に加わった下級鬼神、陣風が原因であった。

彼女は刀を扱う。

それを振るい、フェネクスと鍛錬しているところを目撃したアシユレイはカツコイイ、と一目惚れし、そのまま妙神山にやってきていたのだ。

勿論、アポ無しであり、神界・魔界を色々な意味で大混乱に陥れたのだが、最終的には表向きの理由がでっち上げられ、滞在許可が下りていた。

アシユタロス怒らせたら怖いもん、というのが神界・魔界上層部の共通見解だ。

恐怖公の異名は伊達ではない。

「老師」

その声と共に小竜姫が現れた。

「あの娘はどうじゃった？」

老師　齊天大聖はアシユレイから目を離さずに問いかける。

「はい。さすがは羅刹なだけあってその剣は非常に巧みです」

「じゃろうな」

ここに来ていたのはアシユレイだけではなかった。

陣風もまた一緒についてきていたのだ。

これはテレジア達の配慮であり、アシユレイと多く触れ合ってその偉大さを一身に感じてもらいたいというもの。

もともと、肉体的な意味での偉大さを陣風は既に知っているのだが。

「しかし、老師。アシユタロス様は何と云うか……凄いですね」

小竜姫もまた齊天大聖と同じようにアシユレイへと視線をやっていた。

彼女の目から見ても、アシユレイの動きは既に熟練した者のそれであった。

「あやつは頭の良さが半端ではないからのう。でなければ魔神兵に

鬼神兵などの凶悪なシロモノを作ったりはできん」

神族たちは先の大戦で最後の最後に出てきて膨大な出血を強いた魔神兵とその護衛の鬼神兵を数体、神界へと運んでいた。

そして詳しく調査し、その性能のとんでもなさや量産性の良さに調査官は驚愕した。

何しろ、不意を突けば理論的に主神を撃破できるだけの攻撃力を備えているからだ。

神界にもそれだけの攻撃力を出せる兵器は存在するが、それは艦船搭載の主砲などであり、魔神兵のようにリモートコントロールができるものではない。

「ですが、あそこまで簡単にやられるとこちらの立つ瀬がないですよ……」

小竜姫は虚しいものを感じていた。

彼女が膨大な時間を掛けて積み上げてきたものをあっという間に超えてしまうアシユレイに。

「お主はお主のペースで頑張ればそれでいいんじゃないよ。というか、魔王クラスと張り合おうというのが間違っるとるんじゃない」

志は高く持った方がいいが、さすがに魔王や主神は少々高すぎる。小竜姫としてもさすがにそこら辺は思っていたのか、以後、この件については特に何も言わなかった。

彼女は賢い。

高望みするよりも、目の前のことを着実にやった方が自らの力となることを知っていた。

「ところで老師、アシユタロス様は得物に何を？」

「刀がいいと言っておったが……ぶっちゃければアヤツが自分の魔力を手刀にでも込めればそれが世界最強クラスの剣となるじゃろう」

その声が聞こえたのか、2人の視線の先でアシユレイが右手に膨大な魔力を込め、前へと駆けた。

そして、右手を振り上げ、全体重を掛け一気に振り下ろした。

「カラミティエンドッ！」

知る人ぞ知る、某大魔王の技そのまんまであった。

小竜姫と斉天大聖はその結果を見なかったことにした。

空間が切れてしまったのだ。

まるでカッターで切れ目をいれたかのように。

数秒と経たずに直った空間をアシユレイは見つめ、ついで自分の右手を見つめる。

「……これだ。天地魔闘の構えをやらずして何が魔王か！」

妙なスイッチが入ってしまったらしい。

「あー、アシユレイや」

斉天大聖は敢えて呼び捨てにした。

立場的にはアシユレイの方が上であるのだが、かつて神界で大立ち回りを演じた彼にそういった常識は通じない。

「やっぱり何か得物を使うんじゃ。お主の手刀は強すぎる」

「えー」

不満そうな声を上げるアシュレイ。

「他の魔王とかサツちゃんもこれくらいはできるし、帝釈天だってこれくらいできると思うんだけど」

「比較する相手がおかしいじゃろう……」

そうツツコミを入れる斉天大聖だが、アシュレイとしては自分の周りにいる人物や比較的仲の良い輩が全員、宇宙レベルで見ても上から数えた方が早い連中なのだから仕方がない。

「そういえば最近、アペプ達がコキユートスから出てきたわね……確かスルトが……」

何やら良からぬことを呟くアシュレイ。

最高指導者も決まったことだし、かつての偉いさんには納得して隠居してもらおう、という配慮からサツちゃんによる凍結解除命令。それにより、アペプ達はコキユートスから出ていた。

アシュレイの結末や神魔のデタントなどに彼らが驚愕したり、と色々あったのだが、そこら辺は割愛する。

ともあれ、小竜姫と斉天大聖の耳にはレーヴァティンを譲ってもらおうとか聞こえたが、聞こえなかったことにした。

「アシュレイ、剣術でいいかのう？」

「それでいいやー」

アシュレイにとって、武術は娯楽の一つに過ぎない。

例え人間形態であっても、彼女が軽く走るだけでその速さは音速を簡単に超えてしまう。

デタラメの極致であり、彼女をはじめ、魔王や主神と張り合おうなんて輩はまずいないだろう。

故に武術は娯楽なのであった。

「とりあえず基本的な体術も教えておくぞ。どうせ暇じゃろ？」

「そうして頂戴……ところで、フレイヤはまだ？」

アシュレイの問いに齊天大聖は首を横に振る。

フレイヤの父も兄も交際どころか結婚を認めているのに、アシュレイは未だに本人と会ったことがなかったりする。

それもその筈で、どうにか性的に奔放なところを直そう、とニョルズやフレイが奮闘しているからであった。

一般的に……というか、神界全体にアシュレイが地獄では多数の淫魔を侍らせていることは知られていない。

もっと言えばアシュレイが性的に奔放であったりすること自体が知られていない。

それもその筈で居城でのんびりしているときにどんなことをやっているか、ということまで知るのはさすがに無理がある。

アシュレイに粗相がないように、という配慮からの性格矯正であった。

「というか、私は性的に奔放なフレイヤがいいの。とにかく会わせなさいって言うつといて」

そう告げたアシュレイであった。

地獄にあるアシュレイの居城。

妙神山に主が修行に行っている間、留守を預かるのはテレジア。

彼女は自らの執務室である報告書を前に悩んでいた。

この報告書は人間界にエナベラの子孫捜索に出ている者達から上がってきたもの。

本来の目的とは外れて、いらぬ情報が引っかけってしまった。

勿論、エナベラの子孫は未だに見つかっていない。

アシュレイの信頼する従者の1人である彼女はアシュレイの機嫌を損ねない術を知っている。

しかし、さすがのテレジアも今回は損ねないようにするのは無理だ、と判断した。

悩むテレジア。

そのときノックされるドア。

彼女が許可を出せば入ってきたのはフェネクス。

「何か用か？」

「何も言わずにこれを見て欲しい」

差し出された報告書を受け取り、フェネクスは目を走らせる。
彼女は数秒と経たずに紙面から目を上げた。

「……アシユ様はこれを？」

「知っているわけがないだろう。もし知っていたら、今頃は人間界に侵攻している」

「だろうな……」

フェネクスは溜息を吐き、近くにあったソファに腰を下ろした。

「人間が吸血鬼を作り出そうとは……元天使としては複雑だ」

フェネクスは再び溜息を吐いた。

「神界・魔界の調査で吸血鬼は人間界も含めてアシユ様唯一人。確かにそういう伝承は太古から存在したが……」

テレジアの言葉にフェネクスもまた同意するかのよう頷いた。
彼女も天使時代を含め、人間界に吸血鬼が誕生した、というのは聞いたことがなかった。

「私はアシユ様が眷属を作った、あるいは人間を吸血鬼化させたということ聞いていない」

そう続けたテレジアにフェネクスはどうして彼女が自分と呼んだのか、臆気ながらわかった。

かつて天使として面倒くさい役割を任されていた経験が生きた。
つまり、彼女が行って処理してこい、ということだ。

本来ならヘルマン辺りでも十分に処理できる案件だが、念には念を入れたいテレジアであった。

「アシユ様は吸血鬼の始祖である。ならばこそ、全ての吸血鬼はアシユ様の配下であらねばならん」

「1人しかないのなら、始祖でも何でもないんじゃないか……」

テレジアは咳払いをして、フェネクスに告げた。

「アシユ様の許諾なく、勝手に人間が吸血鬼を作るとはけしからん。アシユ様もお怒りになることは間違いない。どうにかしてこい」

「了解した。暇をしているヤツを何人か連れていこう。さすがに作っているという情報だけでは無理がある。誰が、どこでやっているのかを調べる為にも人数が欲しい」

「そうしてくれ。このことは私からサタンに伝えておく」

にわかには慌ただしくなりつつあった。

そんな話が地獄で行われていた頃、その主は本日の修行を終えて横になっていた。

無論、ただ横になるのではなく、陣風の膝枕である。

「ところで陣風」

アシュレイは彼女の膝に頬ずりしながら、口を開いた。

「何で陣風って名前なの？」

アシュレイが密かに思っていた疑問であった。

もっと女らしい名前が幾つもあるだろうに、とそういう意味もその問いには含まれている。

「風のように素早く、仇なすものを斬る……そういう意味だそうです」

「斬るよりも、あなたは斬られる方が得意でしょう？」

アシュレイの言葉に彼女は頬を朱に染める。

「感じやすくて、すぐにいっちゃう子だものねえ……」

その言葉に陣風はあまりの羞恥にそっぽを向いてしまう。

その様子にくすくすと笑うアシュレイ。

そして、ひとしきり笑うと彼女は起き上がり、陣風の顔を自分の方へと向かせる。

西洋的な顔立ちが多いアシュレイの従者や淫魔達とは違う、東洋的な顔立ちだ。

「陣風。イマイチ、私のところに来た理由が弱いんだけど、本当のことを教えてくれないかしら？」

その言葉に陣風は躊躇したが、もう話してしまってもいいだろう、と判断し、告げることにした。

「戦場でアシュ様に見惚れたのは確かです。ですが、それだけではありません」

瞬間、陣風は傍に置いてあった自らの刀を神速でもって抜刀。その刀身は狙い過たず、アシュレイの首に向かい……

「たとえ敵わなくても、あなたと戦ってみたい」

「もう敵わないことが判明しているわね」

アシュレイの言葉に陣風は肩を落とす。

彼女の刃はアシュレイの首に命中している。

だが、それだけだ。

その刃はアシュレイの肌に食い込むことすらできない。

神界にいた頃からの付き合いである刀がまるで模造刀であった。

アシュレイに攻撃した場合、本来なら斬りつけた側にダメージがあるのだが、伊達に羅刹ではない。

その技量は凄まじく、自らにくる反動を最小限に抑えていた。

「さて、これでもう圧倒的実力差がわかってくれたと思うし、主に刃向けたからにはオシオキしなくちゃねえ……？」

嗜虐的な笑みを浮かべたアシュレイに陣風は刀を鞘に戻し、床に置く。

そして、その着物を脱いでいく。

やがて、その素肌が露になったところで彼女は告げた。

「アシュ様、私におしおきをしてください……」

「あなたはDMだから、オシオキがオシオキにならない気がするけど、まあいいや……」

猟奇的なプレイも結構好きなアシュレイであった。

彼女は陣風の白い肌に爪を立て、血を流させる。

やられている陣風の息は既に荒く、潤んだ瞳で流れ出る血を見つめている。

それがアシュレイには堪らない。

神族の拠点で淫らな行いをすれば天罰が当たりそうなものだが、彼女に怖いものはなかった。

天災と天才（前書き）

独自設定・解釈あり。
微工口あり。

天災と天才

「これが殺生石かー」

じーっと見つめるアシュレイ。

彼女の視線の先には巨大な岩が鎮座している。

その岩からは有毒な瘴気が吹き出し、生物や植物の命を容赦なく奪うのだが、アシュレイにはそんなもの関係ない。

なんで彼女がここまでやってきたかというところ……その理由は言うまでもないが、白面金毛九尾の狐をペットとして飼おうと思ったからだ。

また、その狐は人の姿になれば絶世の美女であるらしいのでアシュレイ的にはまさに一石二鳥。

「んー」

アシュレイが殺生石をぺたぺたと触り、どうしてこうなっているのかを軽く解析魔法をかけてみる。

数秒と経たずに結果が出た。

それによれば失った魔力　妖怪であることから正確には妖力を取り戻す為に大地や大気中から細々と魔力を吸い取っているようだ。

その吸収速度はアシュレイですら解析魔法を使わねば感知できない程に僅かなものだ。

史実によればこれから数年後に玄翁和尚によって破壊されることになる。

「これなら単純に私の魔力を注げばいいわね」

一気に注ぐと壊れかねないので、それなりに加減してアシュレイは魔力を注ぎ始めた。

気分はまさに赤ちゃんに離乳食をミルクを飲ませているようなものの。

ちなみにだが、彼女には人間であったときも、魔族となった後も子供はいない。

魔族となった後は相手は山ほどいる。

だが、子供ができてしまうと、生まれるまでとある場所を子供に占有されてしまい、アシュレイ自身が楽しめない。

そんな理由で彼女には子供がいなかった。

そんなこんなで注ぐこと約5分。

殺生石にヒビが入った。

それから急速にヒビは殺生石全体に広がり、やがて完全に割れた。

割れた後、そこにいたのは大きな狐であった。

黄金のような体毛、純白の顔、その瞳は紅く、尾は九つ。

「……でか」

アシュレイは綺麗とか何よりもまずその大きさに驚いた。

だいたい狐の体長は1m前後。

だが、目の前にいる九尾狐は5mは優に超えている。

『何者じゃ』

アシュレイの頭に響いた声は若い女のもの。

「白面金毛九尾狐で間違いないかしら？」

「如何にも。見たところ、そなたは妖……それも、西洋のものよ
うだが……？」

「そうよ。で、私はあなたをペットにしたいと思ったの。蘇らせて
あげたんだからペットになりなさい」

瞬間、狐が晒った。

『何を馬鹿なことを。妾をそなたのような小物がペットにするじゃ
と？』

予想通りの展開にアシユレイはほくそ笑む。

彼女は敢えて自らの魔力を抑えこみ、最低限のレベルにしている。
その理由はとても簡単だ。

弱いと思っていた輩が実は強かったとき、手を出した相手に与え
る精神的衝撃たるや凄まじい。

それにより人間界では最強クラスの妖怪である九尾を精神的に落
としてしまおう、という魂胆だ。

三文芝居もいいところだが、九尾としてもプライドというものが
ある。

そのプライドを打ち砕く為に仕方がないことであった。

「そうよ。とりあえず、お手」

『死にたいらしいな、小娘』

「そういう口を聞けるのは今のうちよ。そら、もっと言うっておきな
さい」

『ふざけるな！ 我が術の前に滅ぶがいい！』

瞬間、九尾の尻尾に魔力が集まる。

収束したそれは白い炎となってアシュレイ目掛けてとんできた。アシュレイはその炎を見て、そういえば天照大御神とラーが使ってきたのも似たような色の炎だったな、と呑気に思う。

勿論、九尾の……言ってしまったか九尾の炎がそんな馬鹿げた威力があつたりはしない。

白い炎に包まれたアシュレイを見、九尾は踵を返す。

魔力は全開だとはいえ、蘇ったことを知られ、人間達に余計な手出しをされるのもつまらん。

しばらくはどこか静かな場所でのんびりしよう……

そう彼女は考えた。

「飼い主を置いてどこに行くのかしら？」

その声に思わず九尾は振り返った。

そして、驚愕した。

アシュレイは無傷で……それも服に煤すらもついていなかった。

「あなた程度の炎で私を燃やそうとするなんて……」

くすくすと笑うアシュレイ。

そこに九尾は再び炎を放つ。

今度は先ほどとは違い、その魔力の大半を込めた全力の一撃。巨大な白い火球がアシュレイに放たれる。

「もうそれは見飽きたわ」

アシユレイがそう告げれば、その火球は彼女の目前で停止する。そして、急速に萎んでいき、やがて消えた。

『なん、じゃと……』

九尾は今、起こった事象が信じられなかった。

一見、何もされていないように見えるが、彼女には感知できた。

『馬鹿な！ そんなことは妾にもできません！ 時間を停止するだけではなく、進めるなど！』

アシユレイは再び笑う。

そして、九尾へと駆けた。

九尾の視界からアシユレイの姿が掻き消えた瞬間、彼女の体は巨大なハンマーで殴られたかのように吹き飛ばされていた。

周囲にあった岩石に突っ込むが、それを破壊し、彼女は更に飛んでいく。

そして、数十の岩石を砕いたところで九尾はようやく止まった。

『あ、ぐ……』

彼女は痛みを堪え、横たえた自分の体に視線をやる。

やられた箇所から体がちぎれてもおかしくはなかった衝撃であり、骨は完全に砕けているが、どうにか体は繋がっていた。

それだけで済んだのは幸いかもしいない。

それをやった輩はいつのまにか彼女の前に立っていた。

九尾はアシユレイへと視線を向ける。

その視線にアシュレイは眩く。

「まだちょっと反抗的ね。ペットを飼うときに大切なのは、舐められないようにする為に上下関係を教えることよね」

『そなたは何者じゃ！』

九尾は叫んだ。

自分をこんな風到手玉に取る輩は多くはない。

「ん？ ああそういえば言っていなかったっけ」

瞬間、アシュレイは抑えていた魔力を解放した。

魔力の巨大さに地響きが起こり、強風が吹き荒れる。

世界が戦慄した。

その様に満足しつつ、アシュレイは告げた。

「私はアシュタロス。地獄の魔王よ」

九尾は目を見開くと同時に体をガタガタと震わせる。

洋の東西を問わず、数々の神話や宗教に登場している強大な悪魔であり、地獄の大幹部。

九尾などの妖怪達だけではなく、人間達すらも知っていた。

そんな存在に、九尾でしかない彼女が勝てるわけがなかった。

故に彼女はとりあえず謝ることにする。

『あ、あの……その……ごめんなさい……』

痛む体を我慢して、姿勢を正し、頭を下げた。

「駄目、許してあげない。この私に楯突いたことに敬意を称して…
…ペットになりたいって言うまで殴るのを止めない」

『ペットにしてください！　お願いします！』

「駄目、誠意が無い」

無慈悲にアシュレイはそう返した。

手加減が難しいので彼女は九尾を回復させてから殴った。

そして、九尾は泣きながらペットにしてください、と告げるも、
反抗的だから、という理由で再び回復させられた後に殴られた。

アシュレイの目的が九尾をペットにするというものであるから、
こういう風になっているが、これがもし人間であつたらどうなるか
想像に難くない。

性格が悪い彼女のことであるから、敢えてか弱な少女の振りをして男を惑わし、拒否して男がしつこくしたり、乱暴しようとした瞬間に全力でぶちのめしに掛かるだろう。

勿論、男の命なんてものはアシュレイにとっては考慮外である。

両性具有で、おまけに女に生やせるから男なんていらぬし、という考えの彼女。

生物としてとても正しいが、排斥される男達からすればたまったものではない。

アシュレイが将来、人類から男を消し去ろうとかそういう目的で動かないという保障はないのだ。

『お、お願いします……妾は哀れな狐です……あなたのペットにしてください……寂しいのじゃ……』

「そんなに私のペットになりたいならならせてあげるわ」

戦闘ともいえない一方的なイジメが始まって20分。

ようやく九尾はアシュレイにペットとなることを許された。

色々やっておいて随分とアレな言い方であるが、魔王であるから仕方がない。

「とりあえず、人間になりなさい」

アシュレイの指示に九尾は変化する。

そして、アシュレイは喜色満面となった。

美しい金色の髪、シミひとつない白い肌、大きな胸、端正な顔……

「ど、どうじゃ？ 満足してくれたかの？」

敬語ではないが、そんなことを気に留めなくらいにアシュレイは目の前の裸体に集中していた。

アシュレイからの返事がなく、ただ見つめられている九尾はさすがに恥ずかしいのは顔を俯かせる。

しかし、自らの体を隠したりはしない。

そんなことをすればどんなことをされるかわかったものではなかった。

「名前は玉藻でいいわね。よし、玉藻。早速やるわ」

アシュレイの決定に逆らえない九尾……玉藻は頷くしかなかった。だが、これで玉藻は完全に落ちてしまうことになる。

その理由はアシユレイのテクニックと、強い雄に精をもらい、子をなそうとする雌としての本能だ。

結果を見ればアシユレイのところにもまた1人、女が加わったというだけであった。

一方その頃

「お嬢様は天才です」

レイチエルはエヴァンジェリンを絶賛した。

彼女がエヴァンジェリンに魔法を教え始めてはや2年。

たった2年でもう中級魔法を使えるレベルに達してしまったのだ。エヴァンジェリンは誕生日を間近に控えているので、年齢的にはわずか9歳でそのレベルであった。それを知り、彼女の父親や母親はこれ以上ないくらいに嘆いた。生まれた弟もそれなりの資質を持っているのだが、エヴァンジェリンの存在があまりにも大きすぎた。

「えへへ」

人に褒められるという経験がないエヴァンジェリンははにかんでしまう。

その様子にレイチエルは微笑み、新たな課題を告げる。エヴァンジェリンはすぐさまその課題に取り掛かった。彼女は魔法の勉強が何よりも楽しかった。

エヴァンジェリンが課題に取り組んでいるのを見守りつつ、レイチエルは考える。

最近のきな臭い雰囲気。

ここ数ヶ月、教会の司祭だが、エヴァンジェリンの父に会いに結構な頻度でやってきているのだ。

また、最近ではエヴァンジェリンの叔父だが教会の者と共にやってきた。

性欲処理をしているときに下男に聞けば、何でもエヴァンジェリンの叔父は高名な魔法使いらしく、吸血鬼について研究しているらしい。

伝承の存在でしかない吸血鬼だが、もしそれになれるのならば誰でもなるうとする。

日光などに弱いなど弱点もあるが、それらを補っても不老不死は魅力的だ。

レイチエルはある結論を出していた。

教会の一部が叔父と結託して、吸血鬼を研究している。

そして、その被験者としてエヴァンジェリンと自分を欲している。

絶体絶命であるが、レイチエルは諦めていない。

彼女は下男共から色々と聞き出していた。

その中に遠方の街が悪魔に滅ぼされたというものがあつた。

その街はレイチエルも知っていた。

魔法使いのギルドのようなものがあり、また教会の独自戦力である聖堂騎士団の駐屯地もあつた。

そんなところを潰せるのは上位悪魔であることは確定だろう。

つまり、アシュレイである可能性があつた。

「アシュ様……私はここです」

レイチエルは小声で呟いた。

エヴァンジェリンはその声に何か言った、と視線を向けてくるが、レイチエルは首を横に振る。

彼女は自分がいわゆる悪魔信仰者である、とエヴァンジェリンには告げていない。

だが、もしレイチエルが出した結論が正しかったならば、彼女はアシュレイに頼んでエヴァンジェリンを助けてもらうつもりだ。

その際に発覚してしまう。

ならば早いうちから教えておいた方がショックが少ない……

だが、今教えて、エヴァンジェリンが自分とはいられない、と言われる可能性もあった。

レイチエルとしてはこの可愛らしい妹みたいな存在にそう言われたくはない。

エヴァンジェリンに情が湧いてしまったのだ。

そんなレイチエルの葛藤を知らず、エヴァンジェリンは黙々と課題に取り組んでいたのだった。

終わりの始まり（前書き）

独自設定・解釈あり。
微工口？あり。

終わりの始まり

「で、妙神山に連れてきたというわけか」

齊天大聖は呆れた顔で告げた。

彼の前にはアシュレイと玉藻。

ただし、玉藻は狐形態で横たわり、その腹にアシュレイが寄りかかっている。

本来なら玉藻を妙神山に連れ帰ったのは1ヶ月前なのだが、齊天大聖が神界に用事があり、出かけていたので遅れての報告となった。

「本当はもう1匹、西にいるモロっていう山犬も欲しかったんだけど、断られちゃった」

その言葉に玉藻は耳をぴくりと動かす。

「…………断った？」

頭に響く玉藻の声にアシュレイは頷く。

「森の守護をしないといけないから無理だって言われた」

「…………そなたなら力づくで引張ってくると思うんじゃないが」

「失礼しちゃうわ。私は嫌って言うてる子を無理矢理引張ってきたりはしないもの。モロは私の提案を聞き、しっかり考えた上で断ったのよ」

「妾の扱いが…………」

「あなた、問答無用で私に攻撃仕掛けてきたじゃないの。それでこの有様」

玉藻は沈黙してしまった。

「まあ、いいじゃないの。嘘か本当か知らないけど、一説によれば九尾は孤独に恐れ、愛情が欲しいとか何とか。私の溢れ出るラヴを受け取りなさい」

『……嬉しいような悲しいような……複雑じゃ』
「ちなみに私の愛はシベリア的優しさなのだわ」

シベリアはどう考えても駄目だろう、と齊天大聖はツツコミを入れたかったがやめておいた。

気を取り直し、彼は話題を変える。

「それはそうと、つい最近、お主の部下がこっちで暴れたようじゃぞ？」

「え？ 何も聞いてないんだけど」

「神界の観測データによればフェネクスだそうじゃが？」

「フェネクスが？ 何で？ っていうか、どこで暴れたのよ？」

「ヨーロッパじゃ」

「テレジアに問い合せてみるわ。あ、それとフレイヤはまだ？」

「まだだそうじゃ。性格矯正は諦めたそうじゃが、今度はフレイヤが恥ずかしがっているとかでな……」

「ちよっと何を言ってるかわかんないわね……」

何で自分と会っただけなのにそんなに恥ずかしがってるんだ、というのがアシュレイの素直な疑問だ。

「まあ、色々あるのじゃろう。おそらくじゃが、悪魔と……それもお主のような魔王クラスと会うのは初めてじゃから、大方、魔王のアレはどれくらいかとかそういうことを妄想して恥ずかしがってるんじゃろう」

「やだ可愛い。早く会いたい」
「ともあれ、さっさと問い合せてみたほうがええじゃろう。フェネクス是件じゃ」

齊天大聖の言葉にアシユレイは頷き、懐から通信機を取り出した。その見た目は21世紀の日本で売っていきそうな携帯電話だ。

彼女が掛ける相手はテレジア。

基本、雑務は全て彼女がこなしている。

フェネクスの件を知っている可能性は高かった。

「もしもし？ テレジア？ フェネクスが地上で暴れたと聞いたんだけども」

アシユレイの言葉にテレジアは内密に処理することが失敗に終わったことを悟った。

彼女はアシユレイに聞かれたらありのままに答えねばならない。

『アシユ様、落ち着いて聞いてください。実は……』

そのとき、ドアが勢い良く開く音が聞こえてきた。

テレジアはアシユレイに少し待つよう告げ、やってきた魔族に要件を尋ねた。

彼女は叫んだ。

それはアシユレイにも聞こえた。

『エナベラの子孫を発見しました！ 髪の色、瞳の色などが記録と同じです！ ただ酷い虐待を受けたようです！』

テレジアは完全に終わったことを悟った。

内密に処理することは失敗どころか、これでもう地上侵攻は確定となった。

だが、テレジアは知らない。

アシユレイの傍にストッパー役となりうる斉天大聖がいることを。

「テレジア？ 総動員を掛けなさい。私は直接現地に行くわ」
「待った」

アシユレイに斉天大聖がストップを掛けた。

「アシユレイや、別に軍はいらんじゃろう？ お主が1人で行ってカタをつければ済むことじゃ」

もつともな言葉だ。

そもそもアシユレイの全ての軍団とアシユレイでは彼女の方が強かったりする。

斉天大聖の言葉にアシユレイは数秒思案し、頷いた。
通信機越しにテレジアが問いかける。

『アシユ様が御1人で行かれるということでしょうか？』
「それでいいわ。場所を教えて頂戴」

テレジアから場所を聞いたアシユレイは通信機をしまい、立ち上がった。

「ちょっと行ってくるわ」

「くれぐれもユーラシア大陸を消さんようにな」

齊天大聖の言葉を耳にアシユレイは転移していった。

後に残された玉藻は何だかよくわからないが、とりあえず縁側でお昼寝しよう、とのそのそと立ち上がったのだった。

エヴァンジェリンは魂の抜けたような、虚ろな表情であった。彼女は魔力封じの縄で後ろ手に縛られ、大勢の民衆の前にいた。彼女の近くには屈強な男達が手に武器を持ち、彼女を威嚇している。

淡々とその罪状を読み上げるのは教会の神父でも司祭でもなく、この街の町長だ。

教会関係者は周辺にはいない。いわゆる、魔女裁判で一般的な民衆法廷であった。

「魔女レイチエルに悪魔の術を教わったエヴァンジェリン・マクダウェルは魔女となった可能性が高く、検査するのは妥当である」

エヴァンジェリンの日常が崩れたのはつい3時間前のことだ。

10歳の誕生日の朝、彼女は街の自警団によってレイチエルと共に拘束された。

彼女の父母はそれを助けず、ただ娘が魔女となったことを残念がっていた。

その内心はどうであれ。

「あ……」

エヴァンジェリンは間の抜けた声を出した。

自分の着ていた服が無理矢理破かれたからだ。

「悪魔とみだらな行為に及んでいなければ処女である筈だ」

町長は何もエヴァンジェリンを強姦しようとかそういうわけではない。

これは純粋な魔女裁判の形式の一種であるのだ。

しかし、この検査で実際に処女であるかどうかを確かめるのは当然男性ではない。

彼女は裸体こそ晒しているが、10歳の少女の裸に欲情する駄目な大人は民衆の中にはいなかった。

「領主様の娘ということを加味し、母親であるソフィア様にやっていただく」

町長の言葉にエヴァンジェリンはハッと我に返った。

人垣の中から彼女と同じ美しい金髪のソフィアがドレス姿で出てきた。

彼女はゆつくりとエヴァンジェリンに歩み寄り、やがて目の前にやってきた。

そして、彼女はエヴァンジェリンの耳元で囁いた。

「さようなら。あなたは昔の私みたいで大嫌いだったわ」

エヴァンジェリンがそれを聞いただすよりも、ソフィアが叫ぶ方が早かった。

「処女ではありません！ 私は今、解析の魔法で調べました！」

魔法と公に言ってしまったているが、民衆は誰も動揺しない。

なぜならば、魔女とされている者が使う魔法は黒魔法……いわゆる汚い魔法であり、人間達が扱う魔法は白魔法……綺麗な魔法とされているからだ。

教会において、魔女とは主以外のものを信仰し、かつ、魔法を使う者とされていた。

『剃毛検査だけは無くしてあげるわ。どっちにしろ、あなたはもう生きられないもの』

唐突にエヴァンジェリンの頭に響いた言葉。

その言葉通りにソフィアは行動した。

「剃毛検査をする必要はありません。解析魔法で調べましたので」

「ご協力感謝致します。私としてもご息女が魔女となってしまうた

ことに残念でなりません」

町長は悲痛な表情でそう言うが、ソフィアは首を横に振る。

「終わってしまったことは仕方ありません。如何に娘であっても、心を鬼にしなければ……」

ソフィアはそう言い、そそくさとその場から去っていった。

「では針検査を始めよう」

数人の女性がエヴァンジェリンの下へやってきた。

彼女達の手には小さな針。

エヴァンジェリンは恐怖に怯える。

針検査とは全身を針で刺し、痛みの無い箇所を探すことだ。

魔女は悪魔と契約を結んだ際、印などが体に残るとされていた。

魔女であるという決定的な証拠にはならないが、そんな箇所が見つかれば不利なものであることに間違いはない。

多くの魔族が聞いたら何で契約者にそんな証拠を残すんだと疑問に思うが、この時代の人間の間ではそういうものとされていたから仕方がなかった。

何故ならば彼らは契約者の魔力の波長を記憶し、その魂に印をつける。

肉体に印をつけたとしても、もし願いを叶える前に契約者が死んでしまったら悪魔側の契約不履行で魂を得られないからだ。

「待った！」

しかし、寸前で助けが入った。

人垣を押し分けてやってきたのは教会の司祭。

町長は突然のことに驚きつつも声を掛けた。

「司祭様、どうされたのですか？」

「その者を罰することは罷りならん。彼女の身柄は教会が預かる」

民衆の間でどよめきが起こった。

民衆法廷に教会が介入することは極めて稀であったからだ。

「魔女レイチエルは既に刑が執行された。だが、崇拜していた悪魔について分からなかったのだ。その弟子である者ならばあるいは知っているやもしれん。教会は主の御力を借り、その悪魔を滅するつもりだ」

司祭はそう言い放った。

その言葉にエヴァンジェリンは放心してしまった。

レイチエルが死んだ、という重い事実が彼女にのしかかる。

町長としても教会に逆らうつもりは全然無く、また民衆にも異を唱える者はいない。

教会の教えは正しい、と信じきっているからだ。

エヴァンジェリンは放心状態のまま、教会の聖堂騎士団によってその身柄を別の場所へと移されることになった。

その際、彼女は魔力封じの縄を解かれ、代わりに魔力封じの腕輪

をすることとなった。

エヴァンジェリンはマクダウエル家領内にある教会から転移魔法陣によって、一瞬で遠く離れたとある城に来ていた。

初めての転移魔法に感動する暇もなく、城の地下に設けられた広大な実験場に連れていかれた。

司祭は城に着くなりどこかへと行ってしまい、彼女を案内したのは屈強な兵士達だ。

そして、エヴァンジェリンは見た。

「レイチエル!？」

裸にされたレイチエルがベッドのような台の上に横たわっていた。その四肢は手錠でもって台に固定されている。薬か何かで彼女は眠っているようだ。

「やあ、初めましてかな？ エヴァンジェリン」

にこやかに挨拶してきた男がいた。

やや痩せ、頭髪には白いものが混じっているその男をエヴァンジェリンは見たことがなかった。

「……誰？」

「こうして会うのは初めてだったね。私はグレゴール・マクダウエルだ。君の叔父にあたる」

「その叔父が何で？」

「私は吸血鬼について研究をしていてね。あそこにいる魔女の体に何かヒントはないかと調べていたのだよ。ああ、彼女は君も知っている通りに公式には死亡しているので安心してくれ」

何をどう安心すればいいのか、エヴァンジェリンにはさっぱりだったが、聡明な彼女には先ほどの教会の司祭がどうして自分を助けたのか、想像がついた。

「教会が協力しているの？」

「如何にも。主の教えに反してはいるが、これは致し方ないことでもある」

「どちらにせよ、吸血鬼を作り出そうなんて不可能だわ」

エヴァンジェリンの言葉にグレゴールは薄気味の悪い笑みを浮かべる。

「だが、術式は完成してしまったのだよ。光や闇などの属性精霊ではなく、時の精霊の力を借りることだね」

「時の精霊……？」

「色々問題はあったが、それら全ては解決した。というわけで、吸血鬼の第一号として君になってもらいたい」

「待って。最後に一つだけ……あなたの目的は何？ 教会が私利私欲で動く輩に協力するわけがないわ」

エヴァンジェリンの問いにグレゴールは思わず感心する。
そして、彼女ならばきつとわかってくれる筈だ、と確信した。

「これは教会上層部しか知らないことだが……人類を悪魔から守る為だ。遙か太古に主と悪魔の間で戦争が起こり、それに神が勝利した。だが、悪魔は諦めてはいない。人間を惑わし、再び主へ牙を向くだろう。私は君がその原因となっている悪魔を退治してくれることを願う」

毒をもって毒を制す、そのやり方であった。

しかし、その毒となる人物からすればたまったものではない。

「でも私はその大勢の人間に魔女にされた！ 教会はあの場で身柄を預かるとは言ったけど、私が魔女ではないと言わなかった！ 私は魔女のままだ！」

「必要悪なのだ。分かって欲しい」

「嫌よ！ レイチエルと私をここから出して！」

暴れるエヴァンジェリンを兵士達が押さえつける。

「エヴァンジェリン、これはしょうがないことだ。君は私よりも魔力がある。君がなれば強大な悪魔に対抗できるだろう」

「なんで私が見ず知らずの人間を助けないといけないの！？ 会ったこともない人を！」

「では君は人間が悪魔により惑わされ、その結果、ヨハネ黙示録のようなことになってもいいのかね？」

エヴァンジェリンはさすがに黙らざるを得なかった。

人類の未来と自分の身、大人であっても判断に困ることを、わず

か10歳の彼女が判断できる筈がない。

「……残酷な話だが」

グレゴールは沈黙するエヴァンジェリンにそう切り出した。

「君は私に売られたのだよ。はした金でな。君の父親も母親も君が生きていることを望んではいない。1歳になったばかりの君の弟にその愛情を全て注ぐだろう」

そこで一度言葉を切り、彼は彼女の反応を見つつ、更に言葉を続ける。

「君は人間のままで居場所がない。だが、吸血鬼になれば私は勿論、教会全体が君に協力する。そして、君は悪魔退治に奔走することになるだろう」

エヴァンジェリンは顔を俯かせ、肩を震わせる。
そして、彼女は尋ねた。

「レイチエルは……結局魔女だったの？」

「魔女だ。彼女がどういう悪魔を崇拜しているかは知らないが……
もつとも、彼女には同情すべき点が多い」
「どういふこと？」

エヴァンジェリンの問いにグレゴールは頷き、彼が調べた限りで
わかったことを話した。

残酷なことも含めて全てを。

全てを聞いた後、エヴァンジェリンはただ一言、グレゴールに告げた。

レイチエルと2人つきりで話をさせて欲しい、と。

彼はその要望を承諾し、実験場から出て行った。

エヴァンジェリンはレイチエルに駆け寄り、彼女の体を揺さぶる。数秒と経たずに彼女は目を覚まし、エヴァンジェリンをその瞳に捉えた。

「…………お嬢様」

レイチエルの声にエヴァンジェリンはホッと胸をなで下ろす。

「レイチエル、私の叔父のグレゴールからあなたのことは全部聞いたの」

その言葉にレイチエルは目を見開く。

彼女が何かを言うよりも早く、エヴァンジェリンは更に言葉を続けた。

「正直、ショックだった。でも、あなたが悪魔信仰者であったことよりも、過去、あなたがされたことのほうがよっぽどショックだったわ」

エヴァンジェリンは優しくレイチエルの頬を撫でる。

その感触に彼女は心地良さを感じてしまう。

「私はもう人間なんて信じられない。同じように彼らが崇拝する神も信じられない。だから教えて欲しいの。あなたが信仰している悪

魔はそうするに値するの?」

エヴァンジェリンの問いにレイチェルは逡巡せずに答えた。

「そうするに値します。私は……ソドムとゴモラの末裔なのです」

今度はエヴァンジェリンが驚く番であった。

ソドムとゴモラがどうして滅びたかは彼女も知っている。

全知全能である神の制裁を受け、生き残っている者がいるとは夢にも思わなかった。

「私達が信仰している御方は今でこそ悪魔とされていますが、元々は女神でした」

エヴァンジェリンは息を飲む。

彼女は今、自分が歴史の真実を知ろうとしていることに気がついていた。

「その名は……?」

「イシュタル様……今はアシュタロスと呼ばれている御方です」

「アシュタロス!? あの恐怖公が!？」

思わず叫んでしまった。

「あの方はとてもお優しい方です。ソドムとゴモラに恵みをもたらし、争いはなく、皆笑顔でした」

レイチェルの言葉にエヴァンジェリンは驚きつつも、疑問を口にする。

「なぜ、あなたが優しいと知っているの？ ソドムとゴモラがあったのはもう数千年も昔よ？」

「私の一族に伝わる記憶再生魔法です。これにより、母から子へ脈々とソドムとゴモラの記憶、そしてアシュ様の記憶が受け継がれています」

「待つて。ということは聖書とかに出てくる悪魔や神は実在するの？ 低級の悪魔ならいるって聞いているけど……」

エヴァンジェリンの問いは人類の誰もが知りたがること。

レイチエルは静かに、告げた。

「実在します。アシュ様はキリスト教の神と天使だけではなく、様々な神話や宗教に出てくる神や悪魔は全て実在する、と仰っています」

「……人間って結構危ういところにいるような……」

そのとき、扉が開いた。

グレゴールが鬼気迫る顔でこちらへと歩み寄ってくる。

エヴァンジェリンはレイチエルを庇おうとするが、彼は彼女を振り払い、レイチエルに怒鳴った。

彼は盗み聞きをしていたのだ。

「そんな馬鹿な話があるか！」

「馬鹿な話も何も事実です」

冷静にそう言ったグレゴールは唸り声を上げ、エヴァンジェリンに目を向ける。

「予定が多少早まったが構わん。そんな危ういバランスならば今すぐにもお前を吸血鬼とし、人類の戦力とせねば」

「こい、とエヴァンジェリンを引っ張り、グレゴールは実験場を後にしようとする。」

そんな彼にレイチエルは告げた。

「気をつけることです。もうあの御方はすぐ傍に。私を助け、人間に破滅をもたらしにやってきました」

「この城はただの城ではない。準備は万端だ……何も問題はない」

彼はまるで自分に言い聞かせるようにそう返した。

そして、部屋の外にいた兵士達にレイチエルを台から外し、とある場所まで連れてくるよう命じた。

「ちょっと探したけど、ここがそうっぱいわね」

アシュレイは天空よりその城を見下ろしていた。

彼女はマクダウエル家領内の教会に転移魔法陣があることを発見し、目的地に出現する際に起こる空間の歪みを目印として、四方八

方に解析魔法を飛ばすことでそれを感知。
ようやく探し当てることに成功した。

城を取り囲んでいるのは上から見てようやく分かる五芒星の形をした城壁。

それが五重あり、さらに城壁内には教会とおぼしき尖塔が5つ見える。

「人間も考えたわね。五芒星陣の重ねがけによる多重結界なんて…並の悪魔なら結界に当たった瞬間に浄化されちゃう」

だが、とアシュレイは続ける。

「この私からすれば何の問題もない」

彼女はその手に魔力を圧縮し、数cm程の弾丸を形成する。そして、それを眼下の城壁へと投げつけた。

高速でそれは落ちていき、やがてケシ粒よりも小さくなり……瞬間、膨大な閃光が生じた。

巨大な火球が眼下の城壁とそして、城壁内にあつた街の一部を飲み込んでいく。

アシュレイに衝撃波が届くが、彼女の張り巡らせる結界により、ただのそよ風程度にまで威力が減衰される。

「よしよし、狙い通り城は大丈夫ね」

中央に位置している城は衝撃波により、幾分崩れてはいるものの、

原型は十分に残っている。

アシュレイの言った通り、城は地震のような揺れこそ感じたが、内部に被害は殆ど無かった。

対する城下町と城壁の被害は甚大であり、およそ3割が更地と化していた。

そして、アシュレイはゆっくりと翼をはためかせ、城へ向かって飛び始める。

時に1378年6月6日。

この日、人類の前に初めて魔王が姿を現したとして歴史に刻まれることとなった。

激しい温度差（前書き）

独自設定・解釈あり。
微グロあり。

激しい温度差

「馬鹿な……五芒星多重結界が抜かれるなど！」

グレゴールは窓から外を眺め、遠くに見える惨状に思わず怒鳴った。

想定されていた悪魔達では彼が教会と協力し、構築した五芒星多重結界を破ることはできない。

だが、現実はその結界は脆くも破れ、その中にあつた城壁と城下町に多大な損害を与えている。

エヴァンジェリンもまた窓から同じように外を見ていた。

そして、その惨状からどういふ魔法が使われたのか推測する。

「燃える天空？」

「いや、違うな……おそらくは貫通した後に爆発する火系統魔法であろうが……」

同じ魔法使いということでもちよつとした議論を始める2人。

そんな2人は底冷えのするような魔力を感じ、再び窓の外を見つめた。

そして、彼らは見た。見てしまった。

優雅に翼を広げ、空を飛ぶ翼の生えた人影を。

その人影は城へと迫っている。

「悪魔だ！」

グレゴールが叫んだ瞬間、その人影目がけて地上から、あるいは

城壁や見張り台から数多の攻撃魔法が、矢が集中する。

彼らは先の攻撃を辛くも逃れた傭兵や魔法使い、あるいは教会の聖堂騎士団だ。

着弾地点にいた人間は蒸発したのは言うまでもなく、また広範囲を衝撃波が襲ったが、彼らは結界の呪が込められた魔法符や危険と感じた魔法使いたちが張った結界によりどうにか生き残っていた。

澄み渡った空に色とりどりの花が咲き乱れ、轟音が響き渡る。

その花々は人間をたやすくミンチに変えてしまう死の花だ。

濛々たる煙に包まれた目標に対して、攻撃が一時的に止む。

やがて煙から人影が飛び出してきた。

だが、先ほどと全く変わらない様子だ。

まるで見せつけるように先ほどよりも速度を落として城へと近付いている。

「無傷!? そんな……あれだけの魔法を食らって!」

「我々の常識を覆す上位悪魔がやってきたのか……」

グレゴールとエヴァンジェリンの脳裏に過ぎる名前があった。

アシユタロス

地獄の大公爵、あるいは王とされる強大な悪魔。

人間がマトモに戦って敵うような相手ではない。

「来い! 一刻も早くなくなってもらわねばならん!」

グレゴールは無言を言わず、エヴァンジェリンを引っ張り、城に5つある尖塔のうち、1つへと向かった。

城から500mの地点に設けられた最終防衛ライン……すなわち、5つ目の城壁。

そこには、この日の為に創設された魔法使いの精鋭部隊が展開していた。

老若男女問わず、実力者のみで構成されたその部隊はグレゴールにとっての切り札だ。

その総数122名。

僅か122名と侮ってはいけない。

彼らがイギリス・フランスのどちらかの側に加担すれば百年戦争の勝敗を決めてしまう。

そんな戦略レベルで動ける連中であった。

無論、彼らの他にも多数の魔法使いの部隊がこの城と城下町に展開している。

「来るぞ！」

誰かが叫んだ。

その声に彼らの指揮官はただ慌てずに念話で指示を下し、またこの部隊所属以外の魔法使いにも連絡する。

『予定通り例の合成魔法で一撃で決める。参加者以外の魔法使いは全力で結界の展開を頼む』

部隊の全員がたった一つの魔法を唱え始めた。

熟練者であっても、その詠唱速度には多少バラつきがあるが、訓練の賜物で彼らの詠唱速度はほぼ同じ。

合成魔法にとって致命的なタイムラグは無視できるレベルにまで達していた。

「契約に従い、我に従え、炎の霸王。来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣」

膨大な魔力と共に火の精霊が活性化し、周囲の温度を上げていく。彼らの顔からは汗が吹き出す、それは熱気により僅かな時間で蒸発してしまう。

練習では脱水症状で倒れる者も多くいたが、各種結界をあらかじめ張っておくことでその問題は解決した。

今や、彼らは122人で1人であった。

「ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を、死の塵に」

夥しい数の火の精霊達は今や光となって現れ、今か今かと引き絞られた弓から放たれる矢の如く、待っている。

アシュレイが聞いたら憤慨する詠唱だ。

だが、人類にとっては旧約聖書に出てくる神の火と見紛う程に、この魔法は殺傷範囲・威力共に桁違いであった。

「燃える天空」

瞬間、世界から音は消え、全てが白く染まった。

太陽の如き輝きを持った全高数百mにも達する超巨大な白い火球が出現し、ついで圧倒的な衝撃波が襲いかかる。

だが、これすらも予期されていた事態。

衝撃波はこの魔法に参加しなかった他の魔法使いたちが張った結

界にぶち当たり、逸らされていく。

複数の術者が同時に同じ魔法を唱えることにより、その効果を数倍から数十倍に高めることができる。

ただ、問題は詠唱速度や発動タイミングまでもほとんど同じにせねばならないこと。

もし、ズレてしまえば威力が通常のものが複数、発射される。

だが、このやり方は格上の存在を倒しうる現状では唯一の手段であった。

それから数秒程で火球は消え、あとには巨大なキノコ雲が残る。空中爆発であったこと、そして城下町等にいた魔法使いたちが結界を展開したことで地上の被害は最小限に食い止められた。

「なん、だと……」

指揮官は、否、その場にいた全ての人間は信じられなかった。何事もなかったかのように、飛んでいた。

これにより、事実上、魔法使い達にその存在を倒せないということが証明されてしまった。

もっと人数を集めてやればあるいは彼女の防御結界を貫けるかもしれない。

だが、それはもはや不可能なことだ。

「悪魔め……」

誰かが忌々しげに呟いたその瞬間、その悪魔が腕を振った。

瞬間、巨大なハンマーに殴られたかのような衝撃が彼らに襲いかかり、その肉体を一瞬で挽き肉に変えていく。

結界は城壁の周囲にも張り巡らされていたが、そんなものは紙程の効果も発揮せず、一瞬で崩壊し、威力を減衰することすらできなかった。

一瞬で彼らを含め、悪魔の正面にあった城壁ごと破壊された。

瓦礫と肉片が転がる城壁であったところに悪魔は敢えて地上に降り立った。

より恐怖を味合わせてやろう。より絶望を味合わせてやろう。そういう魂胆だ。

だが、ここにいるのは魔法使いだけではない。

悪魔退治を専門とする連中がここにはいた。

彼ら是对魔法処理の施された法衣や鎧を身に纏い、片手には祝福の施された剣やメイスやフレイル。

そして、もう一方の手には盾を持ち、整然と列をなし、聖書を暗唱しながらやってくる。

彼らは死を恐れていない。

例え死んだとしても主の下へ逝けるのだと信仰しているからだ。

悪魔　アシュレイはそんな連中を物珍しそうにじーっと見ていた。

ああいう信仰者が、私にももっと欲しい……そんな風に思ってしまう。

彼女のいる場所から城までは僅か500mしかない。
そして、戦闘も考慮されているらしく、通りが広い。

アシュレイは不敵な笑みを浮かべ、彼らに突っ込んだ。
人間の動体視力では到底負えぬ高速。

彼らは面白いように宙を舞う。

装備も含めれば100kgを超える大人が少女に跳ね飛ばされて、
空を舞う光景はシュールであつた。

勿論、跳ね飛ばされた人間は全員死亡している。

当てられた衝撃によって一瞬で首の骨などの様々な骨が折れてしま
うのだ。

比較的軽装な、法衣にメイスを持っている者もそれは例外ではな
い。

そして、彼らはアシュレイの姿を捉えることもなく全滅してしま
った。

例え捉えたとしても、彼女に攻撃を当てることは極めて困難だっ
ただろう。

邪魔者と呼ぶにもおこがましい……敢えて言えば、虫を排除した
彼女はゆっくりと歩き出した。

やがてアシュレイは広場に出た。

そこは城と城壁の中間くらいにあった。

広場にあったモノを見て、彼女は思わず目を細めた。

エナベラの子孫　レイチエルが気を失ってそこにいた。

ただし、彼女は全裸で逆さまの十字架に逆磔にされ、両手の甲と両足の甲には杭が打ち付けられ、止めどなく血が流れている。

アシュレイは数多の魔法使いと思しき者が広場の周辺にある建物にいるのを感じつつ、近寄った。

瞬間、彼女の上下左右展開される召喚陣。

召喚陣から大量に出てきたのは無色透明で油のような液体であった。

それらは彼女に容赦なくふりかかる。

隠れていた魔法使い達は喝采を叫んだ。

幾ら悪魔でも濃硫酸を大量にかけられては無傷で済む筈がない。

だが、それはあくまで人間の先入観に過ぎない。

アシュレイは何事もなかったかのように、全ての硫酸を大気中に存在する膨大な水分子と強制的に結合させ、生じる発熱などを結界で包みこみ、強引に希釈してしまった。

呆気にとられたのは魔法使い達だ。

彼らは目の前で起こった現象を信じることができなかった。

如何に魔法使いといえど、大氣中に存在する水分子そのものと硫酸を結合させることなどできない。

そうこうしているうちにアシュレイはレイチエルの束縛を全て外し、彼女に治癒魔法を掛けた。

それは人間の魔法使いの常識を覆す魔法であった。

彼女の傷は数秒と経たずに全て消えて無くなってしまふ。

高位の治癒術師であれば可能かもしれないことを、アシュレイは呪文すら唱えることなくやってしまった。

やがて、レイチエルがその瞼を開けた。

灰色の瞳とアシュレイの紅い瞳が交差する。

「アシュ様……ですね……？」

レイチエルの問いかけにアシュレイは頷いた。

「ようやく、お会いできた。私の、私達の旅はたった今、終わりました」

彼女はその瞳に涙を溜め、アシュレイに抱きついた。

抱きつかれたアシュレイは彼女の背中に片手を回し、もう一方の手で彼女の頭を抱く。

「ごめんなさい。時間が掛かりすぎてしまったわ」

アシュレイから出たのは謝罪の言葉。

悪魔や神からすれば数千年などちよつと長い程度でしかないが、人間からみれば途方もない年月だ。

「だから、私は謝罪の意味も込めて、あなたの願いを叶えましょう。どんな願いであっても。あなたが望むなら、あなたとその一族を傷つけた全ての人間達……人類そのものを例外なくこの世から消し去りましょう」

レイチエルの願いは決まっていた。

彼女が何よりも望むこと、それは……アシュレイの傍にいたいことだ。

「私は永遠にあなたの傍にいたい。それが私の願いです」

レイチエルはその瞳から涙を零れ落ちさせながら、アシュレイの耳元でそう告げた。

「それだけでいいの？」

「……できるならば、もう一つ。エヴァンジェリンという子をお助けください」

その言葉にアシュレイは記憶を覗かせてもらう、と断り、レイチエルの記憶を読む。

そして、読み終えた彼女は告げた。

「エヴァンジェリンを犠牲者にはしないというのはいいけども、彼

らのやっていることは間違いではない」

アシユレイとしてもグレゴールや教会上層部の気持ちはよく分かる。

彼女が元人間であつたからこそ理解できた。

人間は自分よりも強い者……腕力だけに限らず、頭の良さや経済力などを持った者に嫉妬する。

人間で誰かに嫉妬したことがないという者は存在しないだろう。

だが、余りにも強大な力を持った者に対して、嫉妬はせずに逆に恐れる。

そして、そのときは強大な力を持った者に対して人間は団結し、対抗しようとする。

これは人間だけでなく、生物ならば必ず持っている生存の為の防衛本能だ。

それには犠牲というものが付いて回る。

例えば圧政に苦しむ民衆が、膨大な犠牲者を出しながらも革命を成し遂げるように、目的の前には全てが肯定されてしまう。

もし、革命を望み、犠牲者を出しながらも戦い続ける民衆に部外者がそれはやり方が間違っていると云つても効果などないのは火を見るより明らかだ。

所詮、そうやって言える輩はただ首を突っ込みただけの輩であり、自己満足に過ぎない。

誰だって死ぬのは怖いし、殺し合いなんぞしたくはない。

だが、そうせねばならない時はやらねばならない。

やらねば未来が黒いものとなってしまうからだ。

アシュレイの言葉にレイチエルは告げた。

「私もそう思います。アシュ様は悪魔で私はその信者ですから」
「ええ、どう言い繕っても私は悪魔。それは厳然たる事実よ。そして悪魔は闇、影の存在。そんなものをあなたは信仰している。異端
だわ」

その言葉にレイチエルは頷き、肯定する。

「まあ、彼らが悪魔を倒すために悪魔を作るといふ解答は正解よ。神々では悪魔を完全に倒すことはできないもの。それが相剋」

だけど、とアシュレイは続ける。

「それは彼らが完全なる光の存在であるからで、不完全な光であったり、同じ闇のものであるならば悪魔を倒すことができる」

「不完全な光……人間……ですか？」

「そうよ。人間は光と闇、両方の性質を持っているから悪魔を倒すことができるの」

アシュレイが言った瞬間、周囲から手に剣を持った者達が飛び出してきた。

彼らは皆、魔力でもって身体強化を施した魔法剣士達。

彼らはアシュレイ自身が人間が悪魔を打ち倒せると言った言葉を信じたのだ。

悪魔の言葉を信じるとは何とも皮肉である。

アシュレイと、ついでにレイチエルの首を獲らんと猛然と迫り……一瞬で彼らは溶けて消えた。

「え……」

レイチエルはまじまじと魔法剣士達がいたところを見つめるが、そこには何も無い。

「腐食の魔眼よ。私が睨みつけただけで人間なら骨も残さずに腐らせ、溶かすことができるの」

アシユレイはそう説明し、さらに続ける。

「こういう感じで、人間だとどんなに鍛えても弱すぎるから実質的に上位の悪魔を倒すことはできないの。だから、人間から悪魔になって悪魔を打ち倒すというのが最も現実的なやり方ね」

なるほど、と頷くレイチエルにアシユレイは「もつとも」と続けた。

「例え悪魔になったとしても、戦う相手が私クラスになると、余程の手抜きを私がしていないと攻撃を当てることもできないから……まあ、無理ね」

「つまり、結局無理ってことですか？」

「うん。ぶつちやけて言えば無駄な足掻き。時間と金と労力の無駄」

ハッキリと言われてしまった。

グレゴールが聞いていれば顔を真っ赤にして怒っただろう。

「で、まあこんな風に時間を潰しているとエヴァンジェリンが吸血鬼化しちゃうんだけど、治せるから別にいいわね」

人間達の伝承によれば吸血鬼となった者は二度と人間には戻れな

いとされている。

だが、それは単純に人間達に力がないからであって、主神や魔王ともなれば時間遡行を行い、魂レベルで人間であった頃に時間を戻せば簡単に治せてしまう。

そんなレベルであるから、聖書をはじめとした色々な神話で神々は全知全能とされてしまうのだ。

「アシユ様、何だか私はとても虚しくなってきました……人間では想像もつかない世界なのですね」

「ま、そういう世界なの。私の傍にいたいなら慣れておきなさい。片手で星を壊せちゃうような連中がゴロゴロいるし、あなたも知ってるベルゼブブとかサタンとかとも知り合いだし」

レイチエルは自分の常識が全部破壊されたことを感じた。

狂信的な彼女であっても、もう次元が違い過ぎてどう反応しているかわからなかった。

「で、レイチエル。あなた、私の眷属にしている？ 簡単にいえば吸血鬼。あ、これ闇の福音っていう計画の一環なんだけど」

「あ、はい。どうぞ」

軽い口調で言われたのでレイチエルは簡単に答えてしまった。

ハツと我に返って、アシユレイをまじまじと見つめる。

見つめられた方はニヤニヤと笑っている。

「だって、人間じゃ寿命がすぐだし、私はあなたの願いを叶える為に最善を尽くさねばならないの」

「えっと、その、できれば……」

レイチエルは頬を朱に染め、顔を逸らしつつ、ごによごによと小

さな声でアシュレイに告げた。

「人間のときにアシュ様に抱いて欲しい……です……そ、その後なら吸血鬼に……」

健気であった。

その健気さがアシュレイには堪らない。

「勿論それでいい。むしろそれがいい」

「あ、あの！ わ、私、その……レイプとかされて……その、とても緩いですけど……」

「大丈夫、悪魔の快楽を味合わせてあげる」

とても呑気な2人であった。

レイチエルとしてはアシュレイがエヴァンジェリンを助けてくれることは確定している。

ならばこそ、もう何も心配はいらなかった。

一方その頃

「どうにか間に合ったな……」

尖塔の最上階でグレゴールはポツリと呟いた。

伝令が餌として広場に逆礫にしたレイチエルに対し、アシユタロスは足を止め、その隙に硫酸をかけたが、効果なしと言ってきたときは彼はもう間に合わないと観念した。

だが、それから10分以上、アシユタロスはその場でレイチエルと会話し、一步も動いていないという報告がやってきたときは喝采を叫んだ。

「……だが」

グレゴールはベッドで眠っているエヴァンジェリンに目をやる。

「もうそろそろの筈なんだが……」

解析魔法で探っても、極めて覚醒に近いと出ている。だが、中々彼女は起きてこない。

「うーむ……どうしたものか……」

彼がエヴァンジェリンから目を背けたその瞬間。

ずぶり、と肉に何かが突き刺さる音。

彼はゆっくりと後ろに視線をやった。

そこにはエヴァンジェリンがいた。
血のように紅い瞳を爛々と輝かせ、彼女はグレゴールの背中に手
刀を突き刺していた。

「き、さ……！」

憤怒の形相となったグレゴールにエヴァンジェリンは何も語らず、
ただ彼の肉体内部で手を動かし、その心臓を掴んだ。

「死んでも許さない。絶対に」

そう告げ、エヴァンジェリンはそれを潰し、手を抜いた。

ゆっくりと彼の体は床に倒れ、空いた穴から血がとめどなく流れ
出る。

そして彼女は……

「どっしょ……」

困っていた。

グレゴールの死体を敢えて踏みつけながら。

「レイチエルは助けないと……でも、寝た振りをしているときに聞
いた話だと、何だかアシユタロスといいムードになっているみたい
だし……」

どうしたものか、と考えながら、グレゴールの死体をぐりぐりと
踏みつける。

彼女は自らが吸血鬼となったことに対しては特に感慨はない。どちらにしろ、あの状況ではどう足掻いても無駄であったからだ。魔力を封じられては彼女は単なる10歳の子供でしかない。ならば受け入れてしまおう……そういう一種の諦めであった。

「あら、もう終わっちゃったの」

そのとき響いた聞き慣れぬ声。

声の方向を振り返ればベッドの上にいるの間にか見慣れぬ少女が座っていた。

その顔は可愛らしいが、少女の頭にはヤギの角、背中には黒い翼があり、悪魔であることが一目瞭然であった。

エヴァンジェリンは問いかける。

「あなたは……アシュタロス？」

「うん。私がアシュタロス。気軽にアツちゃんって呼んでもいいわよ？」

「謹んで遠慮しておくわ……」

妙に軽いアシュタロスことアシュレイ。

言っまでもないが、彼女は長年探していたエナベラの子孫が見つかって、非常に機嫌が良かった。

「レイチエルはもうここにはいないわ。私が転移させたの。安全なところに」

エヴァンジェリンが何か言うよりも早く、アシュレイはそう告げた。

機先を制されたエヴァンジェリンに彼女は更に告げる。

「あなた、吸血鬼になっちゃったみたいだけど……人間に戻りたい？」

エヴァンジェリンはまじまじとアシュレイの顔を見つめた。

「できるの？ そんなこと」

「うん。簡単に。5秒で終わる」

そう言われてもエヴァンジェリンは悩んでしまっ。

もはや彼女に人間としての居場所はない。

この地を離れて暮らすにしても、10歳の子供では生活費を稼ぐのもままならない。

魔法を使って稼げないこともないが、それではすぐに足がついてしまっだろう。

エヴァンジェリンはそれだけ優れた資質を持っていた。

ならばこそ、とエヴァンジェリンは決断した。

「あなたの庇護を受けたい。部下になってもいい」

アシュレイはその答えを予想していたかのように微笑んだ。

「人間殺せる？ 悪いことできる？」

「もう1人殺した。それに……私は人間が嫌いよ」

エヴァンジェリンは吐き捨てるようにそう告げた。

彼女からすればもう人間なんて到底信じられなかった。

アシュレイは頷きつつ、エヴァンジェリンの体を魔法で解析する。肉体だけに留まらず、その魂までも。

そして、彼女は見つけた。

「んー……微妙に不完全な吸血鬼ね。たぶん、肉体的に成長しないけど……」

「……それはさすがに嫌なんだけど」

永遠に10歳のままとするのは誰だって嫌だろう。

アシュレイはどうしたものかと悩む。

彼女がエヴァンジェリンに自らの血を与えれば術式が上書きされて、完全な吸血鬼となるだろう。

いわゆる真祖といわれる存在に。

だが、それは闇の福音計画に直結する。

闇の福音計画はアシュレイの力を人間に与え、吸血鬼とするというものだ。

その為に彼女は数百年前からリリスやリムを含めた全ての淫魔に命じ、人間界から様々な女を墮落させ地獄に連れてこさせている。彼女達の中で特に優秀で向上心があり、アシュレイに絶対の忠誠を誓う者を選び出し、人間界を裏から支配させる。

その支配の方法は経済とマスメディアを抑え、ついで食料を抑えるというもの。

これで人間界は意のままに操ることができるだろう。

アシュレイはその人数を7人と決めていた。

7は魔術的に見た場合、完全なる数字であるからだ。

その候補は既に1人いる。

それは言うまでもなく、レイチエルだ。

ともあれ、アシュレイはエヴァンジェリンに力を与え、もし反乱でも起こされたら自分の株が下がってしまうことを恐れた。故に彼女は提案する。

「100年くらいあなたをテストさせて欲しい。私を裏切らないという保障はどこにもないもの」

「当然ね。私としても見ず知らずの輩をすぐに信じたりはできないもの……ところで、あなたって力を抑えているよね？」

エヴァンジェリンの問いにアシュレイは頷く。

「やっぱりね。もし全開だったら、私は喋ることすらできなかったと思う」

「魔王だもの。ぽつと出なんかイチコロだわ……でも、あなたはその言葉遣いでも許してあげる。だって、10歳だもんね」

その言葉にエヴァンジェリンはむっと頬を膨らませる。

「何よ。あなただって見た目、私よりちょっと年上くらいじゃない」

「だって体なんて好きに変えられるんだもの。14歳ボデイが一番気に入ってるの」

うーうー、と唸るエヴァンジェリンにアシュレイは不敵に笑う。

やがて、エヴァンジェリンは思い出したように彼女に告げる。

「私、個人的に復讐したいヤツがあと2人いるんだけど」

「両親？」

「うん。どんな理由があるにせよ、許せないわ。目には目を歯には歯をって言うし」

「復讐はどんどんやりなさい。やられた相手はぶっ飛ばしておかないと駄目よ」

人間なら止めるところだろうが、逆に推奨しちゃうのが悪魔であった。

「あと、私のことは好きに呼びなさい。さて、行きましようか」「地獄？」

「うん。ようこそ、悪魔の世界へ。我々はあなたを歓迎するわ」

アシュレイが両手を広げて満面の笑みでそう言った。

嬉しいような悲しいような、複雑なエヴァンジェリンであった。

そんな彼女を見つつ、アシュレイは念話でもってテレジアに命じる。

『ここに何も残すな。全てを灰塵とかせ』

テレジアはその命を受け、待機させていた41番目の軍団を出撃させる。

上級魔族でもって構成されたその軍勢は1時間と経たずにこの地を覆い尽くし、全ての人間をこの世から消すだろう。

そして、アシュレイはエヴァンジェリンの手を取り、その場から転移したのだった。

彼女は悪魔である(前書き)

独自設定・解釈あり。

彼女は悪魔である

2匹の獣がお互いに睨み合っていた。

片やケルベロス、片や白面金毛九尾の狐。

東西妖怪をある意味代表している両者は一步も譲らない。

2匹の間で念話による聞くに耐えない罵詈雑言の応酬が繰り広げられる。

そんな2匹の横で、アシュレイはエヴァンジェリンに地獄について説明をしていた。

説明を受ける彼女は聞きながらも、飾られている様々な調度品に見入っている。

彼女達は今、アシュレイの城の玄関ホールにいた。

エヴァンジェリンと共に地獄にやってきたアシュレイはすぐさま妙神山に取って返し、玉藻と陣風を回収していた。

なお、先に転移魔法で送られたレイチエルは外傷こそないが、精神的な疲労を癒すために用意された客室のベッドでゆっくりと眠っていた。

「何と言うか、本当に地獄なのね……」

エヴァンジェリンは一通りの説明を聞き、そう呟いた。

「生身で、かつ自分の意志で地獄に落ちた第一号ね。レイチエルは

私と関係があつたから除外するの」

「全然嬉しくない……」

そんな彼女にアシュレイは告げる。

「で、早速だけど……あなたには加速空間に入ってもらつたの。教師を用意したから、とりあえず勉強してね」

アシュレイの言葉にエヴァンジェリンは目を丸くした。

テストするとは聞いたが、何でそんなことをするのかさっぱり分からなかった。

その疑問を見透かしたかのように、アシュレイが告げる。

「私のところにずっといるかどうかわからないし、最低限、生きていくだけの力は与えるわ」

エヴァンジェリンはまじまじとアシュレイの顔を見つめてしまう。彼女からすればあのアシュタロスがこんなに親切にしてくれるなんて、思ってもみなかったからだ。

「あなたは自分の容姿に感謝すべきだわ。子猫みたいに可愛い

……そうね、不死の子猫ってミドルネームをつけるべきだわ」

「えっと、それって皮肉？」

エヴァンジェリン的にはアシュレイの方がよっぽど可愛らしかった。

そんな彼女にアシュレイは溜息を吐いてみせる。

「まあ、自分のことはわりと見えないものだしね……ともあれ、行こうか。あ、もう不死の子猫……アタナシア・キティで決定だから」

「アタナシア・キティ……悪くはないけど……」

歯切れの悪い彼女にアシュレイはにっこりと笑った。

「何か文句ある？」

そう言われてはエヴァンジェリンとしては頷くしかなかった。
断ったら怖かった。

そして、2人は加速空間に入った。

この加速空間はアシュタロスの置き土産を参考に、アシュレイが
暇を見つけてつくった1時間が1年となるものであった。

なお、これはリゾートも兼ねており、山あり谷あり海あり砂漠あ
り、と色々なワールドが存在した。

澄み渡った空。

広がる草原。

駆け抜ける爽やかな風。

エヴァンジェリンは風景のあまりの変わり様に呆然としてしまう。

彼女は前もってアシユレイから加速空間に行くということは聞かされていたが、彼女が当初想像していたものと正反対であった。

「私がお前の家庭教師のエシユタルだ」

呆然としていた彼女にそう告げるのはべったんこな胸を張ってみせる子供形態のエシユタル。

今の彼女はエヴァンジェリンと同じか1、2歳年上にしか見えな
い。

何か言いたそうな視線をエヴァンジェリンはアシユレイに送るが、
彼女はにこにここと笑っているだけだ。

「さて、アシユ様から粗方聞いている。資質は優れていると聞くが
……ハッキリ言ってお前が学んだ人間魔法は我々にとっては子供の
玩具に等しい」

そりゃそうだろうなあ、とエヴァンジェリンは思う。

エシユタルは更に続ける。

「そもそもお前達人間の使うラテン語を主体とした魔法は我々魔族
と神族が協力して作ったものだ」

その言葉にエヴァンジェリンは呆気に取られる。

彼女としてはまさか本物の神々や悪魔が人間用に魔法を作るなん
ぞ思いもしなかったからだ。

「ちなみに私は関わってないの。私が作るとちよつと威力がありす
ぎるとかだね。そんな理由で私の弟子のエシユタルとかも……魔族
側はベルゼブブが中心となってたわ」

出てくる大物の名前にエヴァンジェリンは思わず息を飲む。

「で、うちのエシユタルやフェネクスとかの力やその他諸々を呪文の核に使いたって話があったから、使わせてあげたのよ」

そう言うアシュレイにエシユタルは恐る恐る彼女に告げる。

「あの、アシュ様。フェネクスのものですが……その呪文に燃える天空というのがあります……」

「うん」

「その詠唱が……契約に従い、我に従え、炎の霸王。来たれ、浄化の炎、燃え盛る大剣。ほとばしれよ、ソドムを焼きし火と硫黄。罪ありし者を、死の塵に……というものなんです……」

アシュレイは固まった。

思いつきり彼女に喧嘩売ってる詠唱に。

「ちょっとベルゼブブ殴ってその後、神界潰してくる。ついでにフレイヤ攫ってくる」

音もなくアシュレイはその場から転移していった。

呆然と彼女を見送ったエヴァンジェリンにエシユタルが告げる。

「さて、アシュ様のことは置いておいて、さっさと始めるぞ」

「え、いいの？」

「いいんだ、アシュ様だから。あとでアシュ様の逸話も聞かせてやる。どれだけ凄いかを思い知るがいい」

そう告げるエシユタル。

彼女に尊敬されているのか、侮られているのか、今一つエヴァン

ジェリンには判断がつかなかった。

「ところでアシュ様から聞いていると思うが、現実時間で100年、この加速空間だとおよそ87万6000年がテスト期間だ。その間に私が駄目だ、と判断したら人間界に放り出すのでよろしく」

「87万って……桁がおかしくない……？」

「寿命がないから何も問題はない」

「いや、そういう問題じゃなくて……」

言い募るエヴァンジェリンに問答無用とばかりにエシユタルは魔力を全身に漲らせる。

今の実力を見るためには軽く模擬戦をするのが手っ取り早かった。

エシユタルの魔力だけで心臓を鷲掴みにされたようなプレッシャーを感じたエヴァンジェリンはまずい、と口を開こうとするが遅かった。

「お前の実力を私に見せるがいい！」

エヴァンジェリンの絶叫が響き渡った。

幾ら優れた資質があり、かつ吸血鬼であったとしても、いきなり魔神と戦えるレベルでないのは当然であった。

そして、数分後

ジト目で見つめるエシユタルにエヴァンジェリンは仰向けになつて空を見上げていた。

流れる白い雲を見、彼女は穏やかな気持ちになつてしまふ。

先ほど、エシユタルは敢えて付与される靈魂破壊効果を無くし、肉体のみを破壊するよう制限した。

その上でエヴァンジェリンを攻撃したのだが……その結果は言うまでもなかった。

だが、敢えて言うなら、エヴァンジェリンは自分の体が木っ端微塵になるという極めて貴重な体験をしていた。

ジト目のエシユタルにエヴァンジェリンは告げる。

「私は成り立てで、まだ10歳よ」

「ともかく、お前の実力は分かった。魔族としての戦闘や知識を叩き込んでやる」

燃えるエシユタルにエヴァンジェリンは内心溜息を吐いた。

そして、彼女は思う。

きつとこの修行兼テスト期間が終わつた後、自分は人間界最強になつている、と。

世界最強ではないところがミソであった。

エヴァンジェリンにはどう頑張つても、アシュレイどころかエシユタルより強くなれる自信がなかった。

そして、エヴァンジェリンの勉強地獄が幕を開けたのだった。

その頃、激怒して出て行ったアシュレイはベルゼブブに食ってかかっていた。

彼女は彼の城に転移するなり、そのまま執務室に直行。

その際、止めようとする彼の部下達を一睨みで 無論、魔眼が発動しないように調節して 黙らせていた。

「ベルゼブブ！ どういうことなの！」

「騒々しいね、アシュタロス。いつもの君はどこにいったんだい？」

それと、扉を壊して入ってくるのはやめてほしい」

「そんなのはどうでもいいの！」

バン、と彼の執務机を叩く。

「フェネクスの力を核とした燃える天空という人間用の呪文についてよ！」

「ああ、アレかい。確かにあの呪文は君にとっては古傷を抉られるようなものだが……それを言うなら、君は人間達に広まっている旧約聖書を根こそぎ無くすのかい？」

たとえ怒っていたとしても、アシュレイの頭は鈍っていない。

彼の言わんとすることがよくわかった。

ソドムとゴモラが神によって滅んだことは事実だ。

誰が何と言おうとそれは覆せない。

「……どうであれ、事実は事実だわ。客観的に見れば正しい」
「そういうことさ。ま、分からないでもないよ。君はあれで完全に悪魔になったのだから、君が何と言おうとあの事は君のトラウマになっっている」

アシュレイとしては既に終わったこととしているが、たかが呪文詠唱で怒ってしまうのでは、まだまだ彼女の心の中で決着がついていない。

そして、これからもつくことはないだろう。

アシュレイがもし、ソドムとゴモラの民が他の誰かに貶されたならばやはり同じように激怒するだろう。

激怒された方は何故、怒っているのか理解ができない。

なぜならば彼らは神によって滅ぼされたとしか知らない。

もし、ソドムとゴモラの件を訂正しようとするならば先の戦争の背景から人類に説明せねばならない。

だが、大多数の人間は神々や上位の悪魔は伝説の中にしかいないものと認識している。

教会上層部やグレゴールなどは例外だ。

そして、彼らは伝説の存在が実在することを知った人類が取るだろう行動を暗示している。

すなわち、人間が一致団結し、知恵を振り絞って立ち向かってくるのだ。

自分達の生存の為に。

そうなれば泥沼だ。

人間は地球諸共滅んでしまうだろう。

神魔共にそれは望んでいない。

無論、時代が進めば人間達の間でソドムとゴモラの事実は旧約聖書にあるものとは少し違うのではないか、という論争が起こる可能性はある。

だが、神魔族が訂正の為に動くというのはできないことであつた。

「怒るなどと言わないけど、もう少し冷静でもいいんじゃないかな？　ただ事実をありのままに受け止め、余計な感情を削ぎ落とすんだ」

むう、と唸るアシユレイ。

そして、彼女は頭の中でその呪文を反芻してみる。
教科書の文を読むかの如く。

「……よく考えれば別にどうということはないわ」

ぼつりと呟いた彼女にベルゼブブは告げる。

「そういうものさ。事実だけを見つめ、余計なものを削ぎ落とす。というか、君って意外と人間思いなんだね。人間牧場をつくっていいのに」

「私を崇める人間に対しては私は優しいのよ。ソドムとゴモラの民は全員例外なく私を崇めた。だから助けるし、彼らへの仕打ちに怒りもした」

「どうして君は悪魔になつた後、人間達を助けて信仰を得ようと考えたなかつたのかな？」

「簡単よ。助けてくれたのが悪魔だって知ったら、人間なんて簡単に手のひらを返すでしょう？」

ベルゼブブはなるほど、と頷いた。
彼としても人間の愚かなところはよく知っている。

「だからもう決めたの。人間に対して徹底的に恐怖を振りまいてやるってね」

もっとも、とアシュレイは続ける。

「悪魔と知ってなお、上辺だけでなく、私を崇める者や教えを請う者には優しくするわ」

そして、彼女は踵を返す。

「言いたいことだけ言って帰るのかい？」

彼の言葉に彼女は振り返らずに告げる。

「当然。だって悪魔だもの。他人の都合なんぞ知ったことじゃないわ」

その答えにベルゼブブはくつくつと笑いながら、彼女を見送ったのだった。

人間達の存在理由（前書き）

「超」独自設定・解釈あり。

人間達の存在理由

「人間について？」

エシユタルの言葉にエヴァンジェリンは頷く。

加速空間で早1000年、ようやく基礎が終わった彼女はある日、教師役のエシユタルにとあることについて尋ねてみた。

それは人間とは何か。

聖書にある通りに本当に神が造ったのかどうかという、エヴァンジェリンの純粋な興味からだ。

「人間はいわゆる神によって土塊から造られたとされているな？」

エシユタルの確認の意味を込めた問いにエヴァンジェリンは頷く。

「アレは正しいが、間違っている。なぜなら、神が作ったものならば人間が悪の心を持つ筈がない。どんな神であれ、その属性は光だからな。闇を吹き込むことはできん」

「悪魔も携わっている、と？」

エヴァンジェリンの問いにエシユタルは頷き、肯定する。

「悪魔も神々も信仰を得ることにより強大な力を得ることができる。ただ、悪魔の場合は個人としてはどれだけ恐怖されるか、ということでも力を得ることができるがな」

エシユタルは一度そこで言葉を切り、エヴァンジェリンの反応を見ながら更に続ける。

「また人間達がどういう感情を持つかによっても左右される。この場合は個々人ではなく神族全体、魔族全体に影響する。人間達が正の感情を持つなら神族が強化され、負の感情なら魔族が強化される。無論、光と闇を持つ人間であるから、どちらか一方に偏るといふことはない。そういう風に人間を核として、神魔族どちらにもプラスとなるシステムが構築されているのだ」

なるほど、とエヴァンジェリンは頷きだからアシユタロスは強大なのか、と納得した。

エシユタルによれば先のハルマゲドンにおいて、神々すらも恐怖させたという。

エヴァンジェリンは自分の決断が正しかったと実感する。力のない自分ではあそこで断り、人間界を放浪したとしてもあつという間に捕まって大変なことになっていただろう。

「人間はそういう神魔族の理由から造られた。勿論、アシユ様も私も生まれる前の話だ。もつとも、加速空間にいるおかげで実際の年齢と現実空間での時間経過の関係はイコールではないがな」

エシユタルの答えにエヴァンジェリンは気が遠くなる話だ、と思つた。

そして、自分が人類の秘密をまた一つ、解き明かしたことを悟るが、誰も信じちゃくれないだろうな、と感じた。

「ま、そういうわけで人間は我々の家畜に過ぎん。それに魔法を人間達に教えたのも、同じような理由だ」

「ということは何？」

「人間達が力を持てば争いが増える。争いが増えれば神に勝利を祈る者が、戦場で瀕死となつた際に天国に逝けるよう、あるいは傷が

治るよう祈る者が増える。そして、争いが生まれれば憎悪が生まれる。ほれ、神魔族の両方に恩恵があるだろう?」

エヴァンジェリンは黙りこむ。

悪魔は勿論、神々もまるで人間を争わせるようにしているが、先ほどのことも考えればそれはとても納得のいくことだ。

「確かに神族の中には弱き人間を守るべきだ、という者はいる。いわゆる穏健派だな。今は連中が主流だ。だが、中には我々魔族と同じように人間なんぞ家畜に過ぎんとする神族もいる」

エシユタルは一度言葉を切り、エヴァンジェリンの様子を見つつ、更に続ける。

「ともあれ、穏健派であっても、人間を核としたシステムについては何も言わないし、人間達に魔法を教えることについても形ばかりの反対があつた程度だ。マッチポンプというか、そういうものだな」

エヴァンジェリンは与えられる情報に溜息を吐きたくなった。

善の存在である筈の神も実は悪魔とあまり変わらないということに。

「穏健派が人間を守ろうとするのは信仰のこともあるが、単純に人間は非力だからだ。要は哀れみとかそういうものからきていると私は思う」

最後にエシユタルはそう言って締めた。

ちなみにアシュレイはこれらのことを全て知っている。

だが、彼女は彼女自身が何度も口に行っているように、自分を崇め

る者に対してはとても友好的に接する。

信仰とかそういうことを度外視して、だ。

これは彼女が人間をただの造りもの、と考えていない証拠であった。

また神族・魔族問わず、人間を家畜と思っている輩は多いが、ただの人形や造りものと思っている輩は皆無に等しい。

人間は自らの意志を持ち、行動することができるからだ。

造った側でありながら、神魔族共にある程度、人間を認めている証拠であった。

エヴァンジェリンは全てを聞き終え、ポツリと呟く。

「……神も悪魔も行動とかはあんまり人間と変わらないのね」

「逆だ。そういうことをやっている神々と悪魔が造ったからこそ、人間もそうなった。本来なら先のハルマゲドンで人間は一度滅び、その後戦争に勝利した神々が完全な人間を造る予定だったらしいが、滅びなかったから今のままきている」

「完全な人間って何？ それができる悪魔はどうなるの？」

エシユタルはエヴァンジェリンが悪魔にまで考えが及んだことに感心した。

神によって造られた人間は光にしかないのだから。

「完全な人間は神々が造ったから光の存在となる。そうであるが故に何も悪いことをせず、そして光の上位存在である神々の言う事しか聞かない操り人形。そんなのが誕生すれば全ての悪魔が大幅に弱体化し、地獄から出ることすらできなくなるだろう」

「もしかして私もいなかったかもしれない？ そうなった世界だと」

「おそらく今、生きている人類はその世界には誰もいないだろうな。人間達は罪に塗れている。原罪と言われるヤツだ」

エヴァンジェリンはピンときた。

エシユタルが敢えて伏せたであろう、完全な人間のある特徴に。

「……完全な人間は永遠の命を持ち、自然との調和が完璧に取れるのね？」

「正解だ。もう一つ補足するなら、その完全な人間は白痴のように日々笑って過ごせるらしいぞ」

「……そんな世界にならなくてよかった」

「アシユ様から聞いた話によればそうなった場合、世界が滅びるらしい。最終的に悪魔が存在できず、光のみとなってしまった。結局神族も滅びてしまつらしい。まあ、世界の滅びを回避するのは神族としても優先されることだが、彼らも戦争において多大な犠牲を払って勝つたのだから、怨敵である悪魔を消してしまおうという感情が優先されてしまったかもしれない」

「コインの裏表だものね。どちらか一つでは存在できない」

そういうことだ、とエシユタルは頷き、最後の最後で彼女は爆弾を投下する。

「ちなみにそれを回避する直接的な原因となつたのはアシユ様だぞ？」

過去、アシユレイが戦争に参加する際の条件として、ソドムとゴモラを害しなければ参加する、とアペプに告げている。

彼はこの条件により、地球上では戦わず、宇宙空間で戦つことに決めた。

これによって人類が滅びる理由が無くなり、この世界はその滅び

を回避することに成功した。

キーヤんとサツちゃんの下に届いた報告書では神族は完全な人間を造った後、しばらくして魔族だけでなく、神族も共倒れとなってしまうことを悟り、慌てて完全な人間を全て滅ぼし、残っていた魔族達と協力して不完全な人間を造り出すことで再び悪をある程度蔓延らせようとしたが、その前に神族と生き残りの魔族達が滅んでしまふというものであった。

無論、神魔族のバランスが崩れてしまえば世界が天秤の浮いた方に対して味方するのだが、余りにも神族側に傾いてしまった為、その滅びは回避できない。

一見万能に見える世界であるが、真に万能であるなら世界が滅亡するという概念自体が出てこない。

世界の修復システム　いわゆる、修正力と呼ばれるものにも限界があり、それを越えてしまったときが世界の滅亡だ。

ともあれ、キーヤんとサツちゃんが彼女……いや、彼を送り込んだ目的は既に達成されていた。

役目を終えたアシュレイであるが、キーヤんもサツちゃんも今更元の世界に戻れとかそういうことを言うつもりはさらさらない。

彼女はもはや世界にとっついていなくてはならない存在であり、かつ、彼女を観察していると楽しいからという理由であった。

エヴァンジェリンは思う。

本当にアシュタロスが悪魔なのか、と。

故に彼女は尋ねる。

「アシュタロスって本当に恐怖公なの？　話を聞く限りでは英雄みたいなんだけど……」

世界を滅びから救ったという事実だけを聞けば確かにアシュレイは英雄だ。

だが、彼女は悪魔であった。

「人間牧場を作ったり、人間界を裏から支配しようとしているが、それでも人間達の間では英雄となるのか？ 我々悪魔にとってアシユ様はそういうところを含めても英雄だが」

「……やっぱり悪魔なのね」

「それと、アシユ様と呼ぶかアシユタロス様と呼べ」

「前向きに善処するわ……私、砕けた口調で話しているから、様付けは違和感があるの」

そう言うエヴァンジェリンにエシユタルは叫んだ。

それは彼女の心の叫びだった。

「私だってアシユ様とタメ口で話したいのを我慢しているんだ！ 私だってアシユ様にミドルネームをつけてもらいたいのに！」

そんな彼女をフォローすべく、エヴァンジェリンは告げる。

だが、それは特大の地雷となってしまうた。

「私はあんまり好きじゃないんだけど……アタナシア・キティって」「ちよつとこつち来い。この形態での私の全力を見せてやる」

この日、エヴァンジェリンは数えきれない程、星になった。死んでも生き返るということを彼女は今日ほど後悔したことはなかった。

エシユタルとエヴァンジェリンが色々な意味で仲良く遊んでいる頃、アシュレイは執務室で決断を迫られていた。

彼女の傍にはレイチェルが不安そうな顔で見守っている。

未だに人間の彼女は昨夜、アシュレイに美味しく頂かされていたりするが、そこはどうでもいい。

「アシュ様……」

リリスが緊張した面持ちでその名を呼ぶ。

その横にはリリムがじつとアシュレイの顔を見つめている。

「……わかった。私も魔王。心を鬼にして、勇気を振り絞って決断するわ」

アシュレイはそう前置きし、数秒の間をおいて告げた。

「淫魔達を教会の隅々まで送り込み、全ての聖職者を墮落させなさ

い

「リスとリリムは重々しく頷き、そそくさと部屋から出て行った。

「ああ、私の淫魔達……」

ずーん、と落ち込むアシュレイ。

彼女からすれば全ての淫魔は自分のものなのだ。

顔も知らない人間共には指一本触れさせたくない。

「あのアシュ様、その淫魔達は何人いるのですか？」

レイチエルの素朴な疑問。

彼女は教会という組織の巨大さを知っている。

中途半端な数では逆に被われてしまう可能性が高かった。

「んーと、この前の調査だと1500万人くらいいたわ」

レイチエルは黙ってしまった。

彼女も教会にいる聖職者の数は知らないが、おそらく、教会の聖職者全員に10人の淫魔を送り込んでもおそらく、余る人数であった。

また、彼女は知らないことだが、アシュレイは定期的にこの1500万の淫魔達全員と加速空間で数千年費やして抱いていたりする。色々な意味でアシュレイは桁が違った。

「ま、それはともあれ、レイチエル。もっとあなたの体を味わいたいのだけど？」

アシュレイの言葉にレイチエルは頬を朱に染める。

彼女は昨夜の痴態を思い出し、更に顔を俯かせてしまう。

アシュレイはレイチエルが人間達にレイプされたことなど関係ないとはかりにガンガンいってしまったのだ。

どんな人間とやったときよりもレイチエルは快楽に溺れ、最後は失神してしまっていたりする。

「嫌って言わないってことは問題ないってことね」

アシュレイの言葉にレイチエルは微かに頷いた。

彼女が歳相応の少女となるのが、魔王の前だけというのが何ともシユールであった。

人間達の存在理由（後書き）

今回の話、とある人物登場の為の伏線だったり。

色々と駄目な話(前書き)

微工口あり。

色々駄目な話

「地上侵攻？ 駄目や」

サツちゃんはアシュレイの言葉に即答した。

むーっと膨れる彼女。

だが、サツちゃんとしても譲れない部分はある。

「サツちゃん、最後まで聞いてよ」

そう言うアシュレイに聞くだけ聞くことにするサツちゃん。

「何も私達が出張る訳じゃないのよ。私のところにいるエヴァンジェリンが父母に復讐したいっていうから、心優しい私は吸血鬼の軍勢を与えて、ついでに地上も征服させてみようかなと」

「あー、確かにそれなら言い訳できるなあ……ちなみにその軍勢うちゅーのは、あんさんの血を与えたヤツなんか？」

「違うわ。もうちょっとでお手軽に吸血鬼を造れるようになるから、その連中を彼女に与えるの」

少し前、エヴァンジェリンの記憶を本人の許可を取った上でアシュレイは読ませてもらっている。

そこにあつた吸血鬼化の魔法をより簡略化し、魔法陣に入っただけで吸血鬼化できるものをアシュレイは鋭意開発中だ。

予定では、できあがる吸血鬼は日光にこそ強いものの、他の弱点を持ったもの。

使い捨ての兵隊にするには十分過ぎる。

「吸血鬼化させる人間達……勿論、使い捨てだから男だけど、それ

はもう確保してあるのよ。洗脳済みなの」

「手際がええつちゅーか、わいの許可が無くても事後承諾でやるつもりやったんやろ？」

ジト目でそう尋ねるサツちゃんに悪びれもせずアシユレイは頷く。

溜息を彼は吐いた。

「まあ、ええやろ。ただし、人間全部滅ぼすまでやったらアカンで？ それと、神族側にもこれは伝える」

「連中の……特に主神クラスの直接的介入は禁止よ」

「下級神族辺りは介入させるかもしれへんが、まあそこら辺は許してやってくれへんか？」

サツちゃんのお願いにアシユレイは数秒思索し、承諾する。

そろそろエヴァンジェリンにも神族と戦わせてみよう、とそう思った次第だ。

「代理戦争やけど人間達も頑張ってくれるやろ」

「ま、それなりに頑張るでしょう。それじゃ私は帰るわね。あとはよろしく」

手をひらひらさせてアシユレイは彼の執務室を後にしたのだった。

城に戻ったアシュレイは完全なる世界との連絡役を呼んだ。

数秒と経たずに彼女の自室に参上する彼女　セクストウム。

6番目と単純に呼ばれていた彼女だが、色々な意味で情が移ったアシュレイにより今ではセレステと呼ばれていた。

言うまでもないが、既にアシュレイは彼女を何度も美味しく頂いている。

「アシュ様、お呼びですか？」

アシュレイはセレステの問いに何も答えず、彼女へと近づき、その白い頬を撫でる。

撫でられるセレステは為されるがまま。

使い魔として生み出されたアーウェルンクスシリーズ。

彼らは創造主であるアシュレイに絶対に逆らわない。

「心地いい？」

アシュレイの問いにセレステは頷く。

「あなたはどうして欲しい？」

その問いにセレステは躊躇なく告げる。

「この前のようにキスをして欲しいです」

彼女は何ら表情を変えずにそう告げた。

アシユレイにはこういう人形っぽいところが堪らない。

彼女が彼らを造った際、手を抜いたと言ったが、その手を抜いた結果、感情を外に出さない個体が幾つか見受けられた。

「どうしてそうして欲しいの？」

「心地良いからです」

「この前のように、その先に進まなくていいの？」

セレステはそのことを思い出し、僅かに頬を赤く染めるが、頷いた。

「どうして？」

「行為後、アシユ様のお役に立てなくなってしまいます」

セレステの答えにアシユレイはそのまま押し倒してしまいたい気持ちに襲われる。

セレステが彼女に気に入られている理由は我慢してでも、アシユレイの役に立とうと健気に頑張る姿を見せてくれるからだ。

言っまでもないが、アシユレイと致すことは非常に体力を消耗する。

かつてはテレジアをはじめとした従者達にも見られたことだが、今ではもう見れなかった。

あまりにも彼女達が力をつけすぎたおかげで、アシユレイが大ハッスルでもしななければ彼女達は行為後も極普通に仕事に戻ってしまう。

敢えて我慢する、ということをしてくれなかった。

新しくきた陣風なら見せてくれるかとアシユレイは期待したが、

彼女は彼女で役立たずと罵られることに快感を覚えてしまうので我慢するというのは見せてくれなかった。

もつとも、陣風は役立たずと罵られて快感を感じても、次はそう言われないように、と頑張っているところが健気ではあったのだが。

「セレステ、気持ちいいことはもうしなくていいの？」

「……嫌です」

「じゃあするの？」

「……アシュ様のお役に立てないのは、私にとってとても苦痛です」

意地悪な質問にセレステはそう答える。

敢えてこういう質問をしているアシュレイはセレステもまた陣風と同じくマゾの素質があると見抜いていた。

「セレステ、私のことが好き？」

アシュレイの問いに彼女は頷く。

「それってどういう感情か説明できる？」

「とてもおかしいものです」

彼女は頷き、そう前置きした後に告げる。

「私はあなた様に尽くすことが存在意義である筈なのに、あなた様に尽くしたい、私の全てを捧げたいと思ってしまうのです」

うんうん、とアシュレイは満足気に頷く。

彼女がセレステにしたことはゆっくりと数年掛けて快楽を味合わせたに過ぎない。

言ってしまうえば調教だが、今更アシュレイはそういうことに罪悪

感を感じるわけがなかった。

「セレステ、私はあなたを抱きたいわ。駄目かしら？」

主の言葉にセレステは何故、自分を呼んだのか理解できた。アシュレイが自分を抱きたいが為に呼んだということだ。それはセレステの心を喜びで満ち溢れさせるものであった。

「アシュ様が抱いてくださるのなら……」

先ほどよりも頬を朱に染め、それでもアシュレイをまつすぐに見据えながらセレステは告げたのだった。

数時間後、アシュレイはセレステを部屋から送り出し、リリムが持ってきた人間牧場に関する報告書をソファに座りながら読んでいた。

加速空間に作られた人間牧場は一応は街であるが、不老不死で不死身となった人間の女しか存在しない。

彼女達は日々、美味しいものを食べ、美しいドレスを着飾り、そして、淫らなことを繰り返している。

アシュレイもそこに混ざって全員とやったりしているが、そこは

些細なことだ。

「まだ候補者なし、か。まあ、気長にやればいいんだけどね」

報告書を読み終え、アシュレイはそう呟く。

いざとなつたらもう使い魔でいいや、とそういうことを考えてしまつ彼女だ。

そもそも闇の福音計画自体が彼女の思いつきであり、マトモにやっていないことから単なる暇つぶしに過ぎないことが分かる。

「ディアナ」

アシュレイが名を呼べばすぐに参上するディアナ。

彼女はアシュレイの前に膝まずき、頭を垂れている。

「暇なだけど？」

あんまりといえはあんまりなアシュレイの言葉だが、ディアナは何とも思わずに告げる。

「畏れながらアシュ様……最近、ご無沙汰なのですが……」

その言葉にアシュレイはハッと気がついた。

最近ではエヴァンジェリンに構ってばかりで、テレジアをはじめとした従者達とやってないな、と。

「アシュ様、フェネクスですが……最近では自らの手で体を慰めています。そろそろ食べ頃かと」

アシュレイの城では大抵、どこかで誰かと誰かが致している。

女魔族と淫魔であったり、淫魔同士であったり。

アシュレイが奨励していることもあって、わりとオープンな場所でも行われていた。

フェネクスはその現場を数えきれない程に目撃しており、体が疼いてしまうのだ。

アシュレイによるフェネクスへの性的行為禁止令が未だ解かれていないこともあり、誰も彼女をそういうことに誘ったりはしない。必然的にフェネクスは疼いた体は自分で鎮めるしかなく、結果としてそれは一種の放置プレイに繋がっていた。

その光景を想像したのか、アシュレイは好色な笑みを浮かべる。

「ディアナ、私は敢えて食べない。まだ食べないわ。だから、あなたがフェネクスの体を鎮めるのに協力してあげなさい」

ただし、と彼女は付け加える。

「フェネクスの体に触るのはいいけど、キスとか舌で舐めたりとかは駄目よ。あなたは生やしてもいいけど、彼女が生やしては駄目。あなたのモノを触らせることも駄目ね」

細かな注文だが、ディアナに異論はない。

「で、そういうこと考えてたらやりたくなかったの。とりあえず……」

アシュレイはすつと右足を差し出した。

靴も靴下も履いておらず素足だ。

頭を下げたままのディアナの視界にその足が入る。

彼女はその意味を悟り、ゆっくりとアシュレイの右足を両手で優

しく包みこみ、ゆっくりと口づけた。

「そのまま舐めなさい」

やや興奮した声でアシュレイは告げる。

彼女はこうやって足を舐めさせるのが大好きであった。

そして、彼女は決意した。

この後、テレジア達も呼んでやらせよう、と。

アシュレイがディアナとよろしくやっている頃、エヴァンジェリンは難題を突きつけられていた。

彼女の前には腕を組んだエシユタル。

相変わらず子供形態なのでその胸はぺったんこである。

「ほら、子猫なら言っしかないだろう？」

「だ、だけど、語尾に『にゃ』をつけるなんて……」

嫌々と首を左右に振るエヴァンジェリン。

事の始まりは数分前、ミドルネームが不死の子猫というところから始まった。

最初はエシユタルが前にもあったように私もアシユ様にミドルネームをつけて欲しい、と言ったりしていたが、途中から猫ならそれっぽくした方がいいんじゃないか、と雲行きが怪しくなった。

そして、今に至り、語尾ににやをつけるようエヴァンジェリンは無理強いをされていた。

「いいから言え。言わないと四肢をちぎってダルマにする」

それは嫌なのでエヴァンジェリンは仕方がなく言ってみた。

「こ、これでいいにや？」

「口調を『です』に変えてもう一回」

「こ、これでいいですにや？ 恥ずかしいですにやあ……」

エシユタルは思わず体を震わせる。

彼女はエヴァンジェリンの両肩をガシツと掴んだ。

「しばらくそれでいる……にや、か……私もやればアシユ様に……」

自分の欲望を満たすと同時に更に欲望を叶えようとするエシユタルは悪魔の鑑であった。

「エシユタルもやるんですにや？ お揃いですにや？」

「お揃いにや。これでいいにや？」

「お揃いですにやあ」

それから2人はにやーにやー言い合う。

誰かがいたなら、にやーにやーうるさい、ときつと言ったことだ

らう。

しばらくしてエシユタルはハッと我に返った。

「にゃ、エヴァンジェリン。勉強するにゃ」

「そうですねにゃ。こんなことしてる場合じゃないですにゃ」

「でもこれは続けるにゃ。命令にゃあ」

「にゃふ……もうやめさせてにゃ……」

そう言うエヴァンジェリンにエシユタルは笑って告げる。

「にゃししし。駄目にゃあ、命令にゃあ」

何かもう色々駄目だった。

色々駄目な話(後書き)

アシュレイがエロいこととして、エシユタルのカリスマがブレイクするだけの話だった。

どついたことじゃ(迫真)

それぞれの前進（前書き）

独自設定・解釈あり。
微工口あり。

それぞれの前進

ある日、アシュレイは悩んでいた。

エヴァンジェリンの修行は順調で、現実空間でもうすぐ1年、加速空間だと8760年が経過する。

エシユタルから特別に悪い点は見つからない、という報告がきているので、このままエヴァンジェリンはアシュレイの部下となるだろう。

そこは問題がなかった。

問題はレイチエルだ。

彼女自身に悪い点は見つからない。逆に良すぎるが故に問題となる点がたった一つあった。

「レイチエルの血、これ以上無いくらいに濃厚で美味しいのよね」

数千年にも渡ってアシュレイのことだけを思い続けてきた彼女の一族。

そんな一族の末裔であるレイチエルの血がアシュレイにとって不味いわけがないのだ。

「予想だと吸血鬼化したら味が落ちるのよね。若干酸味が強くなる筈……」

勿体無かった。

最高級のワインに等しいレイチエルの血が。

故にアシュレイは悩む。

レイチエルに闇の福音計画のことを教えて承諾を取った手前、実行せねばアシュレイの沽券に関わる。

かといって、彼女の血を捨てるのは惜しい。

「……素直に言ったら許してくれるわよね？」

つまり、吸血鬼にせず、人間のまま不老不死かつ不死身となつてもらうのだ。

不老不死で不死身な人間はもはや純粋な人間ではないが、それでも一応人間である。

詳しいことは計算せねば分からないが、吸血鬼化よりは味が落ちないだろう、とアシュレイは考える。

「闇の福音計画を多少変えればいいか」

吸血鬼にするだけでなく、幅広い術を用いて力を与える、という風にすれば問題は特にない。

闇の福音計画がどれだけ行き当たりばつたりのものか、よくわかる証拠だ。

そんなこんなで、アシュレイは早速レイチェルを自室に呼び出した。

「アシユ様、何か御用ですか？」

「闇の福音計画についてなんだけど……吸血鬼化するとあなたの血が不味くなるから、別の方法で不老不死とかになつてもらうことにするわ」

「あ、はい……私は別に構いませんが……」

あつさりとレイチエルは承諾した。
そもそもアシュレイの決定にレイチエルが異を唱える筈がない。

「で、早速だけど人間のまま不老不死で不死身になってもらうから。
で、耐久的には吸血鬼と同じくらいだけど、身体能力はやっぱり
吸血鬼より落ちると思う……」

瞬間、アシュレイは閃いた。

吸血鬼も元は人間。

なぜ、吸血鬼の身体能力が高いかと考えると……

「……吸血鬼は霊基構造の変異……幸い、サンプルには自分とエヴァンジェリンがいる。ならばこそ、いいとこどりできるかしら？」

要は吸血鬼にしたことでレイチエルの血の味が落ちるのが問題だ。
その味の落ちる原因を突き止め、そうならないようにすれば全く
問題はなくなる。

アシュレイ自身の霊基構造とエヴァンジェリンの霊基構造、そして
レイチエルのものを比較研究すれば問題点が突き止められる。

解消できればそれでよし、解消できなければ代案として人間のま
ま不老不死で不死身となってもらえばいい。

「レイチエル、ちょっと研究に付き合ってもらおうね。ああ、あま
りにもいい加減過ぎたわね、私……」

原因を調べる努力もせずに安易な方向へ流れてしまうのは魔王と
していかなものか。

「私は構いません。アシュ様の御心のままに」

そう告げるレイチエルであった。

「このくらいかしら……」

リリスはぐつたりと豪華なベッドに横たわり、幸せそうな寝顔の中年男性を見つつ、そう呟く。

現在、彼女は教会墮落計画の一環として時の教皇と一戦致した後だ。

「ああ、薄いし不味いし下手だし……早くアシュ様と寝たいわ」

そうぼやくリリスだが、それはこの計画の為に出勤している全ての淫魔の心を代弁していた。

アシュレイの味を知ってしまった彼女達からすれば、人間は到底満足できるシロモノではなかった。

「お母様、終わった？」

やってきたリリムにリリスは溜息混じりに頷く。
なお、リリムもまた枢機卿と寝ていたりする。

「もういいんじゃないの？ 十分、こっちの言うことは聞くようになったでしょ？」

「駄目よ。まだアシユ様が満足するレベルには達していないわ」

「アシユ様もとんでもないことを考えたわ……さすがというか何と
いうか……」

アシユレイによる教会墮落計画。

神界は勿論、サツちゃんをはじめとした多くの魔王達も知らぬ中
でこっそりと進められている。

神族といえど、四六時中教会を見張っているわけではないので非
常にバレにくい。

その計画の内容は神界が聞けば震撼するものだ。

「まさか信仰をそっくりそのまま盗むなんて」

リリムの言葉にリリスは同意と頷く。

信仰を盗むというのは分かりにくい表現だが、信仰対象をアシユ
レイへとするよう広めるのだから、盗むという表現は間違っていない。
い。

無論、そのままアシユタロスやイシュタルを崇拝するように、な
んてすれば誰が黒幕か丸分かりなので、名前を出さずにアシユレイ
の像を造り、最新の神学ではこれが神の姿だとかなんとかでっちら
げなのだ。

この時代、教会の権力は絶大なのでその影響力は言うまでもない。

何も知らぬ一般庶民は有り難がって、アシュレイを信仰するようになるだろう。

そうすればアシュレイの力が上がる。

例えばバレルまでの一時的なものだとしても、バレルときにアシュタロスがやった、と広めれば何と恐ろしい悪魔だ、として人間達から恐怖の対象となる。

そうなればやっぱりアシュレイの力が上がる。

どちらに転んでも一石二鳥という素晴らしい計画なのだ。

他にもアシュレイ個人を崇拜するように教育する修道女学校を造らせたり、戦争孤児を保護・教育する為の孤児院をこしらえたり、教会にお布施として寄付されたものを地獄へ送ったり、魔女裁判で酷い目に遭う女性を救ったり、と副目的は多くあった。

言うまでもないが、修道女学校は神とは誰か、ということを知らないマトモな教育を受けられない孤児達を優先的に入学させ、神アシュレイのイメージを植えつける。

無論、孤児院も同じことだ。

読み書きすらマトモにできない子供がこの時代では遙かに多いからこそできること。

聖書を読めなければ神様がいるとは知っていても、誰が神様なのかは分からない。

また、子供はあっさり信じてしまうことからとても楽であった。孤児院や修道女学校では別の魔族が人間に化けて読み書き計算、そしてアシュレイの素晴らしさを教えることになっている。

そういうわけで、全ての目的が達成されるか、神族にバレルまでリスヤリリムなどの淫魔達は言うことをきかせる為に教会の聖職者達と寝る必要があったのだ。

「でも、多すぎないかしら？」

リリスが問いかける。

「何が？」

「聖職者1人に平均12人の淫魔がいることよ。私はよく指名されるけど、他の子だと数日に1回の頻度でしょ？」

「そこら辺はしょうがないわね。暇なら女の子を探して墮落させてくれば？」

「無理じゃないの？ 教会に多く来ているとはいえ、残りの子が捜索に従事しているから、いい子はもう皆地獄へ行ってるわ」

淫魔が人間の女を墮落させて地獄へ連れて行く……普通なら人間の女も抵抗するところだが、まず淫魔が快楽を味合わせ、思考力を奪った上で不老不死にならないか、と問いかけてくるのだから、まず抵抗は難しい。

そこで拒否すれば淫魔は一応は引き下がるが、次の日には徒党を組んでやってくる。

どんな人間も複数の淫魔に集られれば堕ちる。

その快楽を味わいたいなら、地獄へおいで、と誘うのだ。

対象が魔法使いであろうとも、老化は最も恐れる事態だ。

たとえ自分の外見に頓着しない魔法使いであったとしても、老化すればそれだけ力が衰える。

避けたくても避けられない老いは恐怖だ。

そこに与えられる不老不死という甘い誘惑……拒否するのは難しい。

敢えて承諾し、不老不死となったら暴れて悪魔を退治するというのも難しい。

地獄に連れて行かれたとしても、そこで待ち受けているのは凄惨な拷問などではなく、墮落した毎日だ。

好きなドレスや装飾品を身につけ、最高の料理とワインを好きなだけ味わい、日々のんびりと過ごす。

働く必要はなく、また争いもない。

どろどろとした権力闘争も、魔物が襲ってくることも、魔女裁判に掛けられることもない。

そんな生活を体験して、墮落しない人間はいない。

贅沢に慣れると収入が激減しても贅沢をしまっように。

「しばらくは我慢するしかないわね」

リリムの言葉にリリスは再び溜息を吐いたのだった。

一方その頃、神界にあるフォールクヴァングと呼ばれる宮殿では

「……アシュタロス様」

そう名前を呟いてはごろごろとベッドを転がる美しい女性。

見た目、10代後半の彼女はこの宮殿の主、フレイヤであった。

彼女は1日の大半を自室で引き籠っていた。

性格矯正が諦められた後から……というか、矯正しようと周りが頑張っているときもずーっとこの調子であった。

彼女はアシュレイの写真を手に入れており、愛らしい彼女がどういふモノを生やしているか、とても興味があった。

フレイヤは神族の男を片っ端から口説いているが、勿論、神族の女もまた口説いている。

ただ男の方がよりバレやすいというだけであった。

フレイヤからすれば別に人の形をしていなくともいいのだ。

過去、彼女にはオツタルという人間の愛人がおり、彼を猪に変化させてその背に跨り、散歩していた。

無論、猪のまま致したことも何回もある。

ともあれ、彼女は自分がアシュレイに抱かれている姿を妄想してはごろごろと転がる日々。

齊天大聖が言ったことは当たりであった。

さっさと結婚しろよ、と父からも兄からも言われているが、恥ずかしい、とフレイヤは会うことすらしていなかった。

会ったらもうその場で子作りをしてしまう可能性が高いが故に。

さすがのフレイヤも、父と兄がいる前での子作りは控えたい。

「……ああ、アシユタロス様……私、あなたが素敵過ぎるが故に近づけませんわ……」

そう呟き、彼女はハッと気がついた。

会えないなら、手紙を出せばいいのだ、と。

「ああ、私としたことが……これなら誰にも見られずに色々聞けますわ」

そういうわけで早速、フレイヤは机に向かった。

そして、つらつらと書いていく。

彼女の気持ちから始まり、自分の性癖などなど。

後半は完全に女神が書いたとは到底思えない卑猥なものとなっていったが、フレイヤは気にしない。

なぜなら彼女はつい最近、会いに来た斉天大聖からあることを聞いていた。

彼はアシユレイが会いたがっているとわざわざ直接伝えにきたのだ。

そのとき、彼は言った。

アシユレイが部下の女を抱き、かなり特殊なプレイをしている、ということ。

彼が妙神山に滞在している間に行われたアシユレイと陣風のプレイを知らないわけがなかった。

それによりフレイヤはアシユレイにより親近感を覚えてしまったのだ。

「ふう……できましたわ。あとはこれを……斉天大聖に届けてもらえばいいですわ」

破天荒だが、信頼・信用ができる齊天大聖であった。
そして、この手紙により、アシュレイとの関係が一気に進展する
ことになるとは書いたフレイヤ自身も思っていなかったのだった。

暇な連中の集い(前書き)

独自設定・解釈あり。

暇な連中の集い

「……最近暇だな」

「ああ……」

シルヴィアとベアトリクスはサロンで紅茶を飲みつつ、暇を持て余していた。

基本的にこの2人は戦闘要員なので、ハルマゲドンが終わった今、やることはない。

アシュレイが余りにも突出した力を持っているので喧嘩を売ってくる輩なんぞおらず、鍛錬と書類仕事の日々であった。

「アシュ様が色々やっているが……私にも仕事が回ってこないものか」

「いや、私の方がお前よりも役に立つ」

ベアトリクスの言葉にシルヴィアがそう言い、その豊満な胸を強調するかのようポーズを取る。

昔のベアトリクスなら怒るところだが、彼女はもはや達観していた。

「貧乳はステータスという言葉があるらしい」

「負け犬の遠吠えだな」

シルヴィアの返し。

だが、ベアトリクスは動じない。

「別に構わないだろう？ 小中大、どれでも」

そういう風に返されると困るのはシルヴィアだ。
彼女としては少しでも暇を潰す為にベアトリクスをからかおうと
いう魂胆。

「もう私は胸の大きさを気にしない。アシユ様が喜んでくれるなら、
それでいい」

そう言い、敢えて胸を強調するポーズをベアトリクスはとった。
シルヴィアのものとは比べたら非常に貧弱であるが、アシユレイを
出されたらシルヴィアは沈黙せざるを得ない。

彼女としても主が喜んでくれることが何よりも優先される。

「何をやっているんだ？」

その声と共にフェネクスがやってきた。

彼女もどちらかといえば武闘派なので、やることなく暇であっ
た。

「暇潰しに雑談していただけだ」

ベアトリクスの言葉になるほど、とフェネクスは頷き、空いてい
る椅子に座る。

そして、メイドを呼び、彼女も紅茶を頼んだ。

「ところで最近、ディアナが妙な目で見てくるんだが」

「妙な目？」

「何と言うか……好色な感じなんだが……」

フェネクスの言葉にベアトリクスとシルヴィアが顔を見合わせる。
何故、ディアナがフェネクスにそういう視線を送るのか分からない

かった。

「もう言っても構わないと思うから言わせてもらおうが……フェネクス、あなたには一切性的なことをせぬよう、アシユ様から勅命が出されています」

「……だから淫魔とかも何もしなかったわけか」

納得がいった、と頷くフェネクス。

彼女は淫魔あたりが自分にアプローチしてくるか、と思っていたのだが、こちらにやってきてから何もそうということがなかった。

「アシユ様に問い合せてみるのが一番いいんじゃないか？」

シルヴィアの言葉にそれもそうだ、と頷くフェネクス。

「アシユ様が彼女に許可を出したなら、納得もいくが……」

そう言うベアトリクスにフェネクスはまさか、と思う。

「ディアナが手を出すよりも、アシユ様が直接手を出される方が可能性が高いと思うんだが」

フェネクスの言葉にそれもそうだ、と頷くベアトリクスとシルヴィア。

「何じゃ何じゃ、何の話じゃ？」

そこへやってきた人間形態の玉藻。

彼女に尻尾は無く、耳は人間のものだ。

「なんだ、ペットその2か」

シルヴィアの言葉にむっと頬を膨らませる玉藻。

「妾には玉藻というアシユ様から賜った名がある！ 謝罪と訂正を要求する！」

「まあ、それはどうでもいいとして……新米のお前にも分かるようにアシユ様について色々教えてやろう。暇だし」

シルヴィアの提案に玉藻は逡巡する。

名前は訂正はされていないが、色々知りたいのは事実。

地獄については粗方学んだものの、アシユレイについては表面的なことしか知らない。

故に玉藻は決断した。

ここは九尾のプライドを敢えて捨てて、教えてもらおう、と。

「教えて欲しいのじゃ」

「わかった。とは言っても、簡単に纏めれば、アシユ様が元人間で、その後女神として崇められて、魔王になっただくらいだな」

「……何じゃそのいい加減な説明は。というか、元は人間じゃったのか……」

玉藻は何やら合点がいったらしく、何度も頷いている。

「私も聞いたときは驚いて、ついで納得したものだ」

懐かしそうにそう言うフェネクス。

彼女はアシユレイが復活し、征伐戦争が終わった後にこっそりと聞いていたのだ。

「妾も色々な物の怪や人間を見ているが、あそこまで欲望一直線の輩は初めてじゃ」

玉藻の言葉に何にも言えない3人。

彼女達からすれば褒められているような貶されているような、複雑なものであった。

「というかの、妾が人間形態のときに誰かに抱かれたことは幾らもあるが……妾が本来の狐のときに抱かれたのは初めてじゃ。しかも無駄に気持ちよかった……」

「アシュ様はケルベロスともやれる御方だ」

シルヴィアの言葉に玉藻は苦虫を噛み潰したかのような顔となった。

「あの犬畜生め……」

「何かあったのか？」

ベアトリクスの方に玉藻は重々しく頷く。

「アレは妾を見て、笑ったのじゃ。アシュ様のペットは自分、妾の席はない、と」

「ドレミは長いことアシュ様のペットだから仕方がないだろう」

そう告げるベアトリクス。

彼女はドレミのお世話係だから擁護してしまうのも無理はない。

「じゃが、それでもわざわざアシュ様は妾の封印を解き、抱いてくたさったのじゃぞー！」

「アシュ様だからな」

シルヴィアの言葉にうんうん、と頷くベアトリクスとフェネクス。

「何がアシュ様だからポヨ？」

更にやってきたのは白衣姿のニジ。

彼女は気分転換に散歩でも、と歩いていたら話し声が聞こえ、入ってきたのだ。

「アシュ様がいつも通りということだ。ところでニジ。あなたはいいのか？ アシュ様、ベルフェゴールと共にレイチエルの吸血鬼化に関して研究していた筈では？」

「気分転換ポヨ。というか、あの2人がいれば私は実質的に何もやらなくていいポヨ。凄過ぎるポヨヨ」

そこへ運ばれてくるフェネクスの紅茶。

彼女が紅茶を頼んでからまだ3分と経っていない。

一気に人が集まってきたのは皆暇をしている証であった。

運んできた魔族のメイドは増えた人数に驚きつつも、再び転移で消えた。

更に紅茶を運んでくる為だ。

ニジは空いている椅子に腰を下ろし、やれやれ、と溜息を吐く。

「レイチエルの吸血鬼化での欠点はもう解消されるポヨ。アシュ様が拘って、灰色の瞳も残したいと言ったときはどうなるかと思っただポヨが……もう彼女はほとんど人間のまま吸血鬼としての能力を得るポヨ。アシュ様が霊基構造での差異を発見し、弄りまわした結果ポヨヨ」

「ふむ……彼女はどんな部署に配属になるのか、些か楽しみだ」

ベアトリクス言葉にフェネクスが答えた。

「テレジアの下でメイドではないか？　彼女はエヴァンジェリンのメイドを務めていたと聞く」

「だが、吸血鬼であるなら我々の下ではないか？　彼女は治癒魔法を用いた攻撃技を持つと聞いたが」

シルヴィアの言葉に他の面々が興味深げな視線を送る。

「ああ、確かに治癒の応用でならできるポヨね」

唯一人、ニジだけはわかったらしく、頷いている。

「簡単に言うただ」

シルヴィアはそう前置きし、続ける。

「過ぎた治癒は毒になる。強力過ぎると逆に細胞を破壊してしまうのだ」

「そういうことポヨ。我々魔族や神族にとっては肉体が致命的なダメージを被っても別に問題ないポヨが、人間界にいる生物にとっては掠っただけで回復不可能のダメージを負うことになるポヨ」

「確か、アシュ様が閃華裂光拳だ、と言ってた記憶がある。そういう技なんだろう」

ニジが補足し、最後にシルヴィアが締めた。

「ただの人間じゃなかったということか？　そんな術が使えるな

ど……」

「いや、それは当然だ。レイチエルの一族は遙かな昔、アシユ様から魔法を教えてもらっている」

「魔法？ あの西洋の連中が唱えているアレかの？」

ベアトリクスはかぶりを振る。

「あんなのはただの子供の遊びだ。レイチエルが扱うのはアシユ様が直々に考案なさったもの。ラテン語などではなく、原カナン文字が使われている」

「……チンプンカンプンじゃ」

さすがの玉藻といえど、大昔に存在した原カナン文字なんぞ知るわけがなかった。

「我々悪魔が使う魔法には劣るが、それでも人間から見ればとんでもない魔法を扱えると思っておけばいい」

そう告げたベアトリクスに玉藻は問う。

「妾の術とどちらが上かの？」

「同じくらいではないか？ というか、私としては未だに妖怪というものが悪魔なのか、それとも悪魔の亜種なのかわからん。吸血鬼は亜種だとアシユ様が言っておられたが」

ベアトリクスの疑問に今度は玉藻が答える。

「妾の意見じゃが、全ての妖怪は悪魔の亜種じゃと思う。妾などのただの狐から成った者もおれば、元々妖怪として生まれた者もある。ただ、いずれの場合も長い年月を掛け、怨念や瘴気に浸らねばなら

ん。では、その怨念や瘴気を作り出したのは誰か、ということになる」

「基本、人間同士の争いからそういったものは生まれるポヨが、それでは弱いポヨヨ。それらを増幅させるもの……すなわち、悪魔がいなければならぬポヨ」

ニジの言葉に玉藻は頷いた。

そして、元天使としての立場からフェネクスが口を開く。

「私は元天使であったのだが、光であれば闇の流れがよく見える。悪魔が現れたとき、その場に漂っていた極僅かな怨念やら瘴気は急激に増加し、またそういったものがないところであったとしても一瞬で湧き出した。玉藻の意見は合っていると思う」

なるほど、一同頷く。

そのときに運ばれてくる紅茶。

もう増えてはいないことにメイドは安堵しつつ、去っていった。

「かなり逸れたが、レイチエルについてだ」

シルヴィアの言葉にそういえば、と皆が思った。

「まあ、アシユ様がお決めになることだろう。我々が関与すべきことではない。きたらきたで鍛えればいい」

フェネクスの結論といえるものにシルヴィアもまた頷く。

「何をしているのですか？」

そこへやってきたのは刀を持った陣風。

今日は黒い着物を着ている。

「暇潰しに雑談をしていた。陣風、あなたも加わりますか？」

ベアトリクス of の誘いに陣風は数秒思案し、頷いた。

彼女は鍛錬する相手が欲しかったので、ベアトリクス達を探していた。

だが、別に今すぐやらなければならないわけではない。故に彼女もまた話の輪に加わることにした。

「しかし、この面子で一番異端なのは陣風だな。アシュ様と戦いたなんて」

シルヴィアの言葉に同調するようにベアトリクスが口を開く。

「アシュ様の御力は帝釈天に匹敵するか、それ以上。そんな御方と戦いたいなど……」

そんな2人に陣風が答える。

「例え敵わずとも戦ってみたい。この欲求は抑えられませんでした」
「気持ちはわかるな」

フェネクスが同意と頷く。

「しかし、私は未だにあなたが墮天したことが不思議でなりません。天使にも色々事情はあったと思うのですが……」

陣風はフェネクスにそう言いつつ、視線を向ける。

元々下級の鬼神に過ぎない彼女はそうした事情を知る術がなかつ

た。

時間も経っているし、本人に聞いても問題ないだろう、と彼女は思ったのだ。

「天使の待遇の悪さは笑ってしまう程でな。おまけに好色な神々にセクハラされて……天使はヤツさんの部下なんだぞ……」

遠い目をしてそう答えるフェネクスに陣風は聞かない方がいいことももある、ということ悟った。

陣風からすれば帝釈天はともかくとして、セクハラなんぞは想像もできなかった。

自分に厳しく、他人を慈しみ、罪を犯した者に試練を与え、救済する……そういった神々しか彼女は知らなかった。

「まあ、お前はまだ若い。色々知っていけばいいさ」

フェネクスの言葉にこくり、と頷く陣風。

「ところで、エヴァンジェリンはどこまでいったポヨ？ 誰か進捗状況を教えて欲しいポヨヨ」

基本、研究室に籠りっぱなしのニジは情報に疎い。

そんな彼女の問いにベアトリクスが答える。

「エシユタルが加速空間で教えている。最新の報告だと中級魔族程度にはなったらしい」

「ふむふむ……魔族と関わりがなかった人間がどこまでいけるか興味があるポヨ」

「レイチエルはあくまで人間だったしな。教えたとはいえ、エヴァンジェリンが魔族について詳しく知ったのは最近だ」

シルヴィアの言葉に玉藻とフェネクス、そして陣風も興味を示す。

「エヴァンジェリンは見たことしかないのじゃが、何でも不死の子猫というらしいではないか。それに相応しく可愛らしかったのう」

そう言う玉藻にベアトリクスが爆弾を投下する。

「その名……ミドルネームというものだが、それはアシユ様がつけたらしいぞ。エシユタルがこの前、自分も欲しいと愚痴っていた」

その爆弾に沈黙する一同。

彼女達の心は言わずとも分かる。

アシユレイにそういうものをつけてほしい、と。

「そのミドルネームはとりあえず置いておいて、エヴァンジェリンは結局、どんな魔法を使うポヨ？ レイチエルが扱うものと同じポヨヨ？」

ニジの問いにシルヴィアが答える。

「今の人間達が使っているのと同じ魔法だ。レイチエルのと同じものを学ぶのはタイムロスが大きいそうだ。もつとも、時間は腐るほどあるから、とりあえずという形だ」

なるほど、と頷くニジ。

「エヴァンジェリンは戦闘要員だろう。おそろく」

フェネクスの言葉に誰もが頷く。

素質が高いが故に事務仕事で腐らせるのは勿体無かった。
フェネクスは更に続ける。

「今、彼女は中級魔族程度の力。神族にもマークされ難い。人間界での戦闘要員には最適だろう」

「アシユ様の進めているものには彼女を総司令官とした地上侵攻計画があるらしい」

フェネクスに続き、ベアトリクスがそう言い、更に続けた。

「我々はしばらく出番なしだろう。地球上で戦うと地球が壊れてしまっからな」

その言葉に多くの者が溜息を吐く。
誰でも出番は欲しかった。

好き者同士(前書き)

独自設定・解釈あり。
微工口あり。

好き者同士

アシュレイは自室で怪しげな笑みを浮かべていた。

彼女のスカートの中ではシルヴィアが顔を埋めて怪しげなことをしているが、アシュレイは気にしない。

彼女の手元にある一通の手紙。

勿論、フレイヤからのものだ。

およそ4年間の文通により、お互いに深いところまで明かし合っており、全体写真や顔写真、はては全裸の写真を送り合ったりしている。

そんなことまでしているのに実際に会っていなかったのだが……ついにフレイヤからアシュレイの提案にOKが出たのだ。

それは5月12日、妙神山からほど近い樹海の中で会おうというもの。

今日から数えてちょうど1週間後だ。

「よじやく、よじやく……」

そう言いつつ、アシュレイはスカートの中にいるシルヴィアの頭をがっちりと両手で押さえた。

「うっ……ふう……」

とりあえずスッキリとしたアシュレイであったが、まだまだ物足りない。

「もう少しやりなさい」

シルヴィアにそう指示して、アシュレイはフレイヤからの手紙を再びじっくりと読みなおすのだった。

そして、時間は瞬く間に過ぎ去った。

「……あつという間だったような、長かったような」

加速空間から出たエヴァンジェリンは思わず呟いた。

彼女は当初、現実時間で100年、加速空間でおよそ87万年という予定であったが、彼女が現実時間で僅か1年という短期間でアシュレイの部下となった。

彼女はアシュレイの血を与えられ、完全な吸血鬼となった後、4年間加速空間で過ごしたのだ。

それ以後も彼女は恐ろしい速度で成長し、現実時間で合わせて5年、まるまる加速空間で すなわち、43800年という途方もない時間 エシユタルに、ときには暇を持て余したベアトリクスやシルヴィアなどに鍛えられたエヴァンジェリンは非常に遅しくな

った。
具体的には、どんな状況になっても泣き言すら言わずに楽しめるような。

今の彼女なら、きっとハルマゲドンの最終決戦の場にしたとしても、笑いながら敵を殺せるだろう。

やがて規則正しい足音が聞こえてきた。

エヴァンジェリンが視線を向ければレイチエルがゆっくりとこちらに向かつてきていた。

やがて彼女はエヴァンジェリンの目の前で止まる。

「……レイチエル、私と同じ吸血鬼になったのか？」

エヴァンジェリンは一目で見抜いたが故に開口一番そう尋ねた。その問いにレイチエルは頷き、ついで困惑した顔となった。

「私はあなたを何と呼べば良いでしょうか？ お嬢様ではおかしいです」

「エヴァと呼び捨てで構わない。アシユ様もそう呼んでいるからな」

エシユタルの教育の成果か、エヴァンジェリンもアシユ様と呼んでいる。
ただ、タメ口であり、リリースと似たようなものだが。

「まあ、お前がそうなくても不思議ではない」

「……エヴァ、あなたも口調がかなり変わりましたね」

「エシユタルのものが伝染った。4万年くらい一緒にいたからなるほど、と頷くレイチエル。
もう桁がおかしいことに彼女は驚いたりしない。
彼女もまた別の加速空間でテレジアにメイドとして色々と鍛えられていたからだ。」

「ちょうどいいわ」

唐突に響く第三者の声。

2人が視線をやればいつの間にかアシュレイが立っていた。
彼女は落ち着かない様子でそわそわしている。

「エヴァ、レイチエル。あなた達はちょっと体術とかそういうところも学んだ方がいいと思うの」
「魔法が効かない相手の為に？」

エヴァンジェリンの問いに頷くアシュレイ。

人間の扱う魔法の場合、上級魔族、上級神族ともなれば何もしなくても呪圈により威力が2割程度にまで減らされてしまう。
アシュレイなどの魔王クラス、帝釈天などの主神クラスにいたっては完全に無効化され、ダメージを与えることすらできない。
理論的には呪圈は言ってしまうえば多重結界であるから、魔王クラスや主神クラスの呪圈を突破することも不可能ではない。
主神クラスの神霊砲やプレスなどがその典型例であり、それらはアシュレイの呪圈を以てしても防げなかった。

ともあれ、そういうのを抜きで考えれば呪圈を素通りできるのが肉體。

魔法が効かないなら、殴って殺せばいい、というとてもシンプル

な理論だ。

しかし、エヴァンジェリンは上級神魔族にも通用しうる魔法を幾つか習得していた。

彼女が扱う魔法はほとんどが人間用の、ラテン語を用いたものだ。人間相手に戦うにはそれだけで十分過ぎるので、お披露目の機会は滅多にないだろう。

「しかし、そういうことができるヤツは誰だ？」

エヴァンジェリンは考えても、体術を教えられるような達人が思い浮かばない。

アシュレイの従者達は誰もそんなものがないレベルだ。

なぜなら、接近する前に軽く魔力を放って衝撃波を起こしただけで大抵の相手は吹き飛んでしまうのだから。

「ちょうどいい師匠を見つけてあるの。というわけで早速行きましよう。あ、陣風がもついるから、仲良くしてね」

アシュレイは有無を言わずそう言い、2人を連れて転移したのだった。

齊天大聖にエヴァとレイチエルを押し付けたアシュレイは小竜姫と斬り合っている陣風の様子を見つつ、妙神山から下山し、樹海でじっと待っていた。

柄にもなく心臓が　あってもなくても同じようなものだが、一応神魔族にも心臓がある　早鐘を打つ。

やがて、変化が訪れた。

アシュレイの目の前の空間に僅かな歪みができ　ついに、現れた。

美しい金色の長い髪、雪のように白い肌はやや火照り、その瞳はサファイアのような青。

彼女の容姿によく似合っている青いドレス、そして……その首元にあるブリーシंगाメン。

炎の如き黄金で作られた精緻な首飾りは彼女の美しさと相乗効果を発揮し、その魅力を極大にまで引き上げている。

アシュレイは何も言わずに彼女　フレイヤに近づき、その体を抱きしめた。

良い香りがアシュレイの鼻をくすぐる。

抱きしめられたフレイヤは驚くことなくアシュレイの体を抱きしめ、胸などを彼女へ擦りつける。

アシュレイはそれをOKと解釈した。

「フレイヤ、抱くわ」

「はい……抱いてくださいます……」

この後、何が行われたかは2人しか知らないことであつた。

テレジアは自室でお茶を啜っていた。

最近、日本というところから仕入れている緑茶が彼女のお気に入りに。

騒ぎもなく、何事もない日々は退屈ではあるが楽ではあつた。

「……静かだ」

そう呟き、テレジアは再び湯呑みを傾ける。

淫魔達が色々と動いているが、それはテレジアを通していない、アシュレイの勅命。

故にテレジアの出番はない。

「……闇の福音計画の候補者でも探すか。手伝いくらいはできるだろっ」

お茶を飲み終えた彼女は椅子から立ち上がった。

そのとき、扉がノックされる。

彼女が許可を出せば入ってきたのはディアナとエシユタル。

「何か用か？」

「暇だからきたんだけど……あなたも暇そうね」

「生憎、仕事は一般業務しかない。それももう片付いた」

なるほど、と頷くディアナに対し、エシユタルが問いかけた。

「アシュ様を知らないか？ どこにもいないんだが」

「アシュ様なら先ほど、エヴァンジェリンとレイチエルを連れて妙神山に行ったぞ。齊天大聖に武術を教えてもらうとか」

エシユタルは納得したように頷く。

彼女はエヴァンジェリンに色々教えたが、武術とかそういうところはノータッチであった。

「ところでフェネクスもいないんだけど、知らない？」

「彼女ならベアトリクス、シルヴィアと一緒に武者修行とかで地獄を巡ってくるそうだ。フェネクスの要望で最初はスルトのところに行く」と聞いている

スルトは炎を操る。

同じ火を使う者としてフェネクスは前々から興味があったのだ。

「私さ、フェネクスに色々やっていいってアシユ様から許可をもらってるんだけど……中々、捕まらないのよね」

「何の許可だ？」

テレジアが何か言う前に、エシユタルが問いかけた。

彼女にもそれは初耳だったらしい。

「フェネクスの疼く体を鎮めてもいい権利よ。色々制限あるけど、あの真面目な彼女の痴態が見れるなら安いものだわ」

「フェネクスか……そういえば最近、アシユ様は陣風やレイチエルばかり構っていて……」

テレジアのボヤキに同意とばかりに頷く2人。

エヴァンジェリンに色々教えていたエシユタルはしょうがないにしても、最近は明らかに陣風とレイチエル以外の者に手を出すことが減っていた。

「陣風はともかくとして、レイチエルは仕方がないだろう。我々も大目に見なければならん」

テレジアの言葉に再び頷く2人。

「彼女の忠誠心は我々も見習わねばならない。ただの人間があそこまでアシユ様を慕っているなど……」

エシユタルの言葉にディアナが続ける。

「知り合いの淫魔から聞いたんだけど、こっちに連れてきた人間達はアシユ様をそれなりに信仰しているけど、彼女みたいにはなっていないわ」

「まあ、人間牧場にはアシユ様はあんまり顔を出さないからな。毎日とは言わないが、1週間に3回くらいはいけばそうなるかもしれない」

「アシユ様のテクニックに皆虜になるだろうからな」

テレジアが言い、その後エシユタルが口を開いた。

彼女の言葉に再びテレジアが言葉を紡ぐ。

「私はアシユ様の初めてを頂いたのだが、あの頃と比べて今は隔絶した上手さだ」

「詳しく聞きたいわね」

「お前に奪われたときのアシユ様の反応について特に詳しく」

興味津々のディアナとエシユタル。

テレジアは昔話も偶にはいいか、と2人に馴れ初めを話し始めたのであった。

好き者同士（後書き）

エヴァンジェリンの対神魔族用魔法……迷っていたり。
いいのを考えつかなかったら、BASTARDの魔法を彼女が使っ
たりするかもしれない……

そのとき歴史が動いた（前書き）

独自設定・解釈あり。

感想で表向きは我々の歴史と同じように、と書いたのだけど、アシユレイが第二次大戦に介入しないわけがない……もうしわけないです。

そのとき歴史が動いた

フレイヤとの一件以後、アシュレイは週に数回は彼女と密会しつつ、これまで放ったらかしであった従者達との時間を増やすことにした。

基本、自分のやることには文句一つ言わない彼女達であるが、やはり結婚となるとフレイヤに対して色々と不満が出る可能性がある。アシュレイが黙れ、と言えば黙るのだが、なるべく仲良くしてもらいたいのが彼女の本音。
ならばこそその根回しであった。

ぎゅっとアシュレイはテレジアに抱きついた。

抱きつかれた方は突然のことに驚きつつも、アシュレイの背中に手を回す。

突然呼び出されたテレジアであったが、そういうのからこういうことに発展するのは既に慣れっこだった。

「最近、構ってなかった子をゆっくりと味わっていいこうと思つたの」

アシュレイの言葉にテレジアは納得すると同時に嬉しくなる。

彼女が何か言う前にアシュレイは彼女の頬に舌を這わせた後、その首筋に噛み付いた。

「んっ」

与えられる感覚は痛みではなく快楽。
こみ上げるそれに抵抗せず、ただ受け入れるテレジア。

しばらく吸っていたアシュレイは最後に首筋を丁寧に舐め、そこから顔を離す。

「美味しかった」

その一言にテレジアは満面の笑みを浮かべる。

「で、テレジア。ちょっと翼の手入れとかして欲しいんだけど。たまにはエロいこと無しでもいいと思うの」「
「畏まりました」

そういうわけで翼と角の手入れとなった。

最近はレイチェルが練習としてやっていたので、テレジアが手入れをするのは久しぶりのこと。

彼女は流れるような手さばきでアシュレイの翼を櫛でとき、余分な毛をハサミで切っていく。

「懐かしい」

唐突にアシュレイが呟いた。

「レイチェルには悪いけど、やっぱり億年単位でやってもらってるあなたの方がいいわね」

その言葉にテレジアは手を動かしつつも、昔を思い出しつつ返す。

「もうそんなに時間が経ってしまいましたか。私があなた様に生み出されたのがつい昨日のように思えます」

「時間は腐る程あるとはいえ、時の流れは早いわね」

アシユレイの言葉を肯定しつつ、テレジアは告げる。

「アシユ様、本来なら使い捨てである使い魔を、私を今も変わらず使ってください、ありがとございます」

「あなたもベアトリクスもシルヴィアも、普通に強いし、優秀だからね。それに夜の方もいい。処分する理由がないわ。ま、たとえ無能であっても、それはそれで愛すべきことであるもの。私がオシオキしたりして遊べるし。私って甘いかしらね？」

「甘いというよりか、お優しいのです」

「そんな私の渾名が恐怖公ですって。どう思う？」

「アシユ様、お言葉ですが……その渾名はとても良いものだとは思いますが」

テレジアは恐怖公と呼ばれていることはむしろ誇らしかった。

魔族だけに留まらず、神族にも、そして人間にも恐れられていることに。

「あなた様のご威光が天地魔界全てに轟いていること、それは従者として何より喜ばしいです」

「ま、私が優しいのは身内限定なもの。そういう意味では私もまだ人間らしいわ」

「常々、あなた様は自分を崇める人間には友好的と仰っておりますからね」

そういうこと、とアシユレイは頷く。

彼女としてはわざわざ自分の味方をしてくれる人間を拒む理由がない。

「今思いついたんだけど、日本を世界に冠たる国にしようと思うんだけど、どう思う？」

「良いのではないのでしょうか？ 人間であつた頃のあなた様の祖国ならば、恩返しという形で」

「そうしましょうか。あ、でも、今なら合法的に若い娘を安く買えるから先に買っておこうかしらね」

淫魔達が人間の娘を墮落させに行っているのは欧州だけであり、他の地域は手付かずであつたりする。

さすがに地球全土に淫魔を派遣しようと思つたら、今の最低10倍の人数は必要であつたからだ。

「ともあれ、ある程度女の子を確保したら、色々入れ知恵してあげましょうかね。東洋のスイスを目指させば二度の大戦を避けられる」

テレジアにはよく分からない単語が幾つか出てきたが、何も言わない。

未来を見通せるアシユレイだ。

きつと未来での事象なのだろう、とテレジアは納得する。

「あ、でも、ドイツとかソ連とかにも肩入れしたいわねえ……ネタ的に美味しいし……うーん、アルゲマイネと武装SSの制服、どっちも部下に着せたいし……ハウニブー造らせてあげたいし……列車砲は浪漫だし……」

そう言いつつ、アシユレイは後ろを向き、テレジアをじーっと見つめる。

見つめられた方は首を傾げつつも、手を動かす。

「……軍服とか制服、似合いそうね。やっぱり肩入れしよう」

アシユレイは満足気に頷く。

こうして史実とは大幅に乖離してしまうことが決定した。

テレジアに手入れをしてもらったアシユレイはその後、ベルフェゴールとニジがいる地下実験場へと向かう。

大戦終了後、幾つもの計画がスタートしたが、中でも特に秘匿されているものがある。

発案者のアシユレイ、ベルフェゴール、そしてニジしか知らない計画。

その計画は、かつてアシユレイがベルフェゴールに言っている。三界全てに影響を及ぼせるような、大出力のコスモプロセッサの

こと。

その為に必要な魂は億を超えるが、その調達の見込みはある。人間界で起こる戦争だ。

死神とかに連れ去られたり、輪廻の輪に入ったりする前にサクッと魂を掃除機で吸い取るかの如く、アシュレイは頂戴するつもりであつた。

関係各所から文句が出るかもしれないが、そこはそれ。

死にかけている連中に楽になりたいか、と頭の中で問いかけて、契約してしまえばいい。

楽にさせてやるから魂を寄越せ、と悪徳商法よりも性質が悪いが、彼女は悪魔なので問題ない。

「大分進んだわね」

アシュレイは出来上がりつつある、コスモプロセスサの外観を見つつそう告げた。

その言葉にベルフェゴールとニジが頷く。

「アシュ様、現在工程の58%を終えております。なお、エネルギー源として魂が必要ですが……まだ全然数が足りません」

「ま、全然集めていなかっただしね。本命は20世紀に入ってから戦争よ。100万単位で人が死ぬから問題ないわ」

ベルフェゴールにそう答えるアシュレイに対し、ニジが口を開く。

「アシュ様、魂集めに関しては軍を使うポヨ？」

「いや、女の魔族を使うつもりよ。見るからにヤバいのが多い軍のヤツだと、かえって警戒されるでしょ。百年戦争ではそんなに死なないから魂集めはしないわ。その後、エヴァンジェリンがちょっと地上でドンパチ起こすから、そこから集め始める予定」

アシュレイの言葉に対しニジは頷きつつ、更に言葉を紡ぐ。

「計画名は何か意味があるポヨか？ ツイタデレ 皆って何の関連性もないと思うポヨが？」

「これは最後の砦なのよ。私をどうにかしようという連中に対してのね」

「アシュ様に手を出すなんて、ただのバカか自殺志願者と思えないポヨ……」

ニジの言葉に同意するかのようニベルフェゴールも頷く。

彼女はかつてアシュレイもそうであったように、その力は魔神クラスではあるが、基本は頭脳労働だ。

だが、それでも今のアシュレイがどれだけ規格外なのかは分かる。

「ま、それはともかくとしてこの後、2人は暇？ 偶にはお茶でもしましょうか」

アシュレイに誘われることはここ最近なかった2人に異論がある筈がなかった。

「チェック。これでどうかね？」

ヘルマンは自室でチェスを打っていた。

その対戦相手は数十年前に知り合い、妙に気が合ってそれ以来、身分の差を超えて友人関係にある元天使。

「ふむ……ではこういう風にしよう」

彼の打った手にヘルマンはほう、と感心しつつも駒を動かす。

「ところでどうかね？ 私と共にアシユ様の下についてみては？」

その言葉に彼は駒を動かしつつ、告げる。

「かなり悩むところではある。私としても、彼の恐怖公には憧れている。だが、サタン様を裏切ることではきんのだよ、侯爵」

「サタン、か……墮天する前から強大ではあったが、墮天して以後はますますその力を増大させていると聞く」

かつん、かつん、と駒を打つ音が部屋に木霊する。

「アシユ様は君を気に入ると思うのだがね。地獄の社交界で紳士と名高い君を」

「侯爵にそう言われるのは光栄だ」

「お世辞は構わんよ。事実を述べただけだ……もつとも、アシユ様は社交界とかには余り興味がないらしくな……いや、これは他の魔王達にも言えることなのだが」

「あの方々は我々のように見栄を張る必要がないのだよ。何もしなくても目立ち、誰もが頭を下げる。そういう絶対的な強者。いや、実に羨ましいものだ」

ヘルマンは頷きつつも、駒を打つ。

「それは悪手だ、侯爵」

そう彼は言い、駒を動かした。

すぐにヘルマンの顔色が変わる。

「君の言う通りだったな。ところで、社交界だが……アシユ様は好色な方だ。そういった場所で魔族のお嬢さん方や墮天使のお嬢さん方とお近づきになるいい機会ではないか、と私は思うのだ」

「アシユ様程の方であれば女から寄ってくるだろう」

「それもそうだな……」

そう言い、ヘルマンは盤面を睨み、その後の手を考える。

だが、どう足掻いても詰んでしまうことがすぐにわかった。

彼は苦笑し、告げた。

「やれやれ、どうやら私の負けのようだ。もう一戦、お願いできるかな？　コンロン子爵」

その提案に彼　　コンロンは笑みを浮かべ承諾したのだった。

目覚めるエヴァンジェリン(前書き)

独自設定・解釈あり。

微工口あり。

目覚めるエヴァンジェリン

エヴァンジェリンとレイチエルはぐったりと床に倒れていた。
2人の前には棍を持った斉天大聖の姿。

「今日はこれくらいかのう……しっかりと休むのじゃ」

そう言っただけは、その場を後にした。

そそくさと観戦していた小竜姫が2人に駆け寄る。

「生きてますかー？」

「……3回くらい死んだと思う」

「……私は5回です」

「盛大に心臓ぶち抜かれたりしてましたからね」

そうこうしているうちにエヴァンジェリンが、ついでレイチエルが起き上がる。

吸血鬼……それもアシュレイの血をもらった彼女達はいわゆる真祖に分類される。

かなり手加減されているとはいえ、斉天大聖の攻撃を派手に喰らっても、それなりの速さで回復できるのだ。

「さて、夕餉の前に温泉にどうぞ……しかし、前々から気になっていたのですが、吸血鬼は流水が苦手と聞きましたけど、意外と大丈夫なんですね」

「私もレイチエルも真祖で、伝承にあるものとは格が違うのではな」

エヴァンジェリンの言葉にレイチエルが続ける。

「アシユ様の直属の眷属ですので、並大抵のことではビクともしません」

なるほど、と小竜姫は頷く。

エヴァンジェリンとレイチエルがやってきて早数ヶ月。

2人共、その成長は目覚しく、この分なら僅か数年でそれなりの使い手となることは間違いない。

「あ、そういえば、そのアシユタロス様から手紙が届いていましたよ」

小竜姫の言葉に約1名の態度は一変した。

「どこですか！？ どこに！」

詰め寄るレイチエルと特に何とも思っていないエヴァンジェリン。

「そつくると思ってたってきました」

小竜姫は慌てることなく懐から2通の手紙を取り出し、2人に手渡した。

レイチエルは食い入るように、対するエヴァンジェリンはただ流し読みする。

レイチエルの手紙にはアシユレイから彼女の体調だとか色々と長ったらしく書いてあり、読んでいる彼女は感激に体を震わせていた。

対するエヴァンジェリンにはそこまで長々と前置きはなく、ただ励ましの言葉と共に斉天大聖をボコせるくらいに強くなるように、と中々ハードなことが書かれていた。

「……いや、どう考えても無理だろ……」

思わずそう呟いてしまふエヴァンジェリンを誰も責めることはできまい。

「さて、私は夕餉の支度をしてきますので、汗を流しておいてくださいね」

小竜姫は2人を置いて、さっさと道場から出て行った。

「エヴァ、頑張りましょう!」

レイチエルは手紙を最後まで読み終え、そう言った。

「……ああ、まあ、テキトーにな」

対するエヴァンジェリンはそう返した。
温度差が激しい2人。

「とにかく、行くか……汗が気持ち悪い」

エヴァンジェリンはそう言って立ち上がり、レイチエルもまた頷いて立ち上がった。

そして、2人は妙神山にある温泉へと向かった。

妙神山にある温泉は露天風呂だ。

霊験あらたかであるのは間違いなく、その効能は万病に効き、美容にもいい。

「……相変わらず敗北感しかないんだが」

じーっとエヴァンジェリンはレイチエルの裸体を見つめる。

成長するようになったとはいえ、それは数千年単位でのこと。

今のエヴァンジェリンは永遠に10歳のまま、という最悪な状態こそ脱していたものの、まだ14歳程度。

対するレイチエルは18歳程度。

エヴァンジェリンが嫉妬しても何ら不思議ではなかった。

「そうですか？ 私はアシユ様が好んでくださる体ならば何でもいいですが」

「ちよつとよく見せてみる」

そう言いつつ、エヴァンジェリンはレイチエルに近づき、その胸や白い肌をまじまじと見つめる。

レイチエルは彼女が見やすいように、と体を動かす。

アシユレイに抱かれるだけでなく、歓迎会と称した大人数での肉欲の宴が開催されたこともあり、同性に見せるのは何の抵抗もなかった。

勿論、エヴァンジェリンはその歓迎会に呼ばれておらず、またアシユレイが美味しく頂いてもいない。

これはエヴァンジェリンがアシュレイのことを単なる上司兼庇護者とは思っていないに尽きる。

レイチェルのように崇めてくれたり、あるいは他の従者達のように狂信的な忠誠を誓っているというわけでもない。

そういう意味で、エヴァンジェリンはアシュレイの部下としては極めて稀な存在であった。

さすがのアシュレイもそういう存在であるエヴァンジェリンに手を出すことは躊躇われる。

彼女としては勿論、エヴァンジェリンも美味しく頂きたいところであるが、中々親密になる機会がなかった。

「触るぞ」

エヴァンジェリンはそう告げ、返事を聞かずに波間に浮かぶ2つの白い桃を両手で掴む。

「んっ……あまり、強く握っては……」

「ふふふ、中々いい感触だぞ？ アシュ様が女好きと聞いたときはありえん、と思ったが……気持ち分かる気がする……」

ぐにぐに、とエヴァンジェリンはレイチェルの胸を揉みしだく。

時折、彼女はその先端部を弄る。

与えられる感触にレイチェルは吐息を零し、体を僅かに震わせる。

「お前のそういう顔は初めて見たが……実にいい顔をするじゃないか。アシュ様にもこういうことされてるのか？」

はあはあ、と息を荒げるレイチェル。

彼女は答えれない。

「人でなしな私はどうせいい男なんぞ捕まえられんだろうから、女に走るのもいいかもしれんなあ……？　女なら選り取り見取りだ」
「あ、エヴァ……その、アシユ様が……女が男の役割もできるから、男はいらないと……」

レイチエルの言葉にエヴァンジェリンはピンときた。

エシユタルの授業で体を変化させるものがあつたからだ。

そのとき、エシユタルは女でありながら、男のモノを生やしていた。

「なるほど……人間の常識で考えてはいかんのか……いや、色々学んだつもりではあつたが、まだまだ人間の常識に囚われていたようだ。やはり数万年では足りん。より多くの年月を掛けねばならんか」

そう言いつつ、エヴァンジェリンは右手をレイチエルの胸からゆつくりと下へと下ろしていく。

へその辺りを撫で、更に下へ。

そして、辿り着いた。

「濡れているのか、それとも温泉のせいか……はてさて、どっちなのか……？」

意地悪にもそう問いかけるエヴァンジェリンは嗜虐的な笑みを浮かべている。

「え、エヴァ……これ以上はやめて……」

喘ぐようにそう告げるレイチエルだが、その言葉はエヴァンジェ

リンを高ぶらせるだけだ。

「いいではないか。別に減るものではあるまい……」

そう言いつつ、エヴァンジェリンはレイチエルの首筋に顔を埋め、牙を突き立てる。

ん、という声を零し、レイチエルは吸血の快楽にその身を震わせた。

エヴァンジェリンの喉に流れこむレイチエルの血液。

ごくごく、と彼女は濃厚なそれを嚥下していく。

「ああ、美味い。アシュ様がお前の血液は最高だと言っているのを聞いたことがあるが、本当に美味しいな」

エヴァンジェリンはそう告げた後、レイチエルの首筋に残った吸血痕を舌で舐めて消していく。

「駄目……お願い……もうやめて……」

「お前は吸血鬼となった後にアシュ様に治療されて処女に戻った。だが、その後アシュ様に抱かれた。お前は吸血鬼の復元能力で再び処女に戻ったが、処女ではない。つまり、私が頂いても問題ないわけだな？」

エヴァンジェリンのтонでも理論にレイチエルは反論する術を持たない。

なぜならば彼女もまた溜まっていたのだ。

アシュレイにここに送り出されて数ヶ月、ずーっと修行の日々であった。

「え、エヴァ……お願い……」

故にレイチエルは実質的なOKを出してしまった。
その言葉にエヴァンジェリンは笑みを深め、答える。

「ああ、そうしよう……せつかくの温泉が汚れてしまつからな……」

エヴァンジェリンはその後レイチエルにぴったりと張り付き、
時には言葉で、時にはその手で彼女を責めたのだった。

一方その頃、台所では

「あ、お味噌取ってください」

「はい」

小竜姫と陣風が仲良く並んで夕飯の支度をしていた。既に仕込みは済んでいたの、あとは調理するだけだ。

本日の献立はイワナの塩焼き、白菜の漬物、豆腐と玉ねぎの味噌汁、白米である。

「いい味です」

小竜姫が味噌汁の味見をし、満足気に頷く。

対する陣風は白菜の漬物を食べやすいように包丁で切っている。

小竜姫も陣風も共に剣を扱う者であり、何度も鍛錬で剣を交えていたことから、今では大変仲が良い。

小竜姫は神族から魔族へと堕ちた陣風であるにも関わらず、極普通に接していた。

「小竜姫、できました」

「あ、はい。それじゃ、イワナもいい具合ですし、そろそろ盛り付けに移りましょうか」

露天風呂でエヴァンジェリンとレイチエルがにやんにやんしていることなど露知らず、とても穏やかな空気であった。

乖離する史実（前書き）

独自設定・解釈あり。

乖離する史実

アシユレイは珍しく人間と関わろうとしていた。

妙神山でレイチエルとエヴァンジェリンの顔を見つつ、フレイヤと密会。

その後気分がいいから、ちょっと今の日本を見ておこう、とやってきたのだ。

基本、日本は何でもかんでも他所のものを取り入れてしまう。

それは宗教にも言えることで、元々仏教は中国・朝鮮から伝わったものだ。

異教の悪魔であるアシユレイが関わっても、人間に対して良い行いをすれば八百万の神の一つに数えられる程度で特にペナルティはない。

そればかりか、僅かながら信仰を得ることすらできるかもしれない。

今、この時代、日本は南北朝時代の末期であり、あと十数年もすれば統一される。

さて、そんな時代であったが、アシユレイとしては全く関係がない。

南北の都にあるだろう神器を盗みにいく、というのもあんまり興味を惹かれない。

そんなわけで天皇などの皇室関係者や貴族などではなく、彼女は田舎の人間と関わることにした。

適当に探索魔法を展開し、発見したちっばけな集落。

川の東岸にある山地の中にそれはあった。

アシユレイは近くの森の中に降り立ち、少女形態のまま、その集落へと向かう。

「なんじゃ、えろう別嬪さんがきたのう」

集落の近くで木を切っていたきこりの中年男性がアシユレイを見てそう言った。

この時代、アシユレイの外見年齢では既に立派な大人である。

「あ、どうも。私、赤朱令と言います」

「ほう、変わった名前じゃなあ。暇ならうちの村に寄ってんか？」
「では遠慮なく」

わりとあっさりとアシユレイは村に招かれた。

小さな村であり、その人口は2000人足らず。

そのほとんどが近所さんであり、きこりの男はアシュレイを紹介して回った。

見るからに異国の服装をしている彼女に村人達は興味津々。

とりあえず、と案内された広場でゴザを敷かれ、そこでアシュレイへの質問会が催された。

老若男女から様々な質問を受けるアシュレイは華麗に答えを返していく。

30分もすれば皆聞きたいことを聞き終えたのか、質問者もいなくなつた。

そのときであつた。

「空はどうして青いのか、知ってん？」

そんな声が聞こえてきた。

村の大人達はやれやれ、といった感じの顔となる。

「夕吉！ お前はまた変なことを言って！」

誰かが言った。

「知りたいからしょうがないじゃん」

アシュレイは視線を向けた。

そこには紫に黒を混ぜたのような髪色の青年がいた。

「なあ、赤朱や。教えて」

そう言う彼　夕吉にきこりの男が怒鳴った。

「赤朱ちゃんに何をぬかしおる！　孤児だからと働きもせんで年がら年中、変なこと考えて！」

そつだそつだ、という声上がる。

そんな彼らを見無視して、じーっとアシュレイは夕吉を見つめる。

その視線に気づいた彼は再び言った。

「教えてや。俺の勘が言ってるん。赤朱は知ってるって」

「しつこいぞ！　赤朱ちゃんが困るだろ！」

きこりの男はそう言った直後、アシュレイはゆっくりと口を開いた。

「空が青いのは空気による光の散乱よ」

「空気って何？」

「主に窒素と酸素で構成される地球の大气のこと。人間が生きるのに必要とされるものよ。水の中でずっといれば空気がないから溺れて死んでしまうの」

「地球は？」

「私達が今、立っているところのことよ。日の本だけじゃなく、海を超えた先にある土地なんかも全部地球よ。ここは1つの星なの」

「星？　お月さんとかと同じ？」

「ええ。私達は丸い星の上に乗っているの。だけど、落ちないのは重力とか引力があるからよ」

「赤朱ちゃん、分かるのか？ そいつの答えが」

きこりの問いにアシュレイは頷く。

「彼、中々いいと思うの。だから、私がしばらく借りる。学問を教えようと思うの」

貪欲な生徒というのは中々得難いものである。

アシュレイのちよつとした興味と暇つぶしから、彼に色々叩き込もうと思ったのだ。

「それと、ちよつと畑や水田とか川を見せて欲しいの」

有無を言わさない妙な迫力に村人達は頷かざるを得なかった。

そして、月日は流れる。

夏が過ぎ、秋がきたとき、村に異変が起こった。

それはいい意味での異変。

豊作であった。

アシユレイは滞在料として兼ねて畑や水田の土壌そのものを魔法で改良し、また川の治水も魔法で行った。

土壌改良は目に見えないが、治水に関しては別であった。

村人達からすれば魔法陣も何も現れておらず、ただ勝手に土がむくむくと盛り上がり、あつという間に堤防が完成してしまったのだ。不思議なこともあるもんじゃ、仏様の御慈悲か、とそれで納得していた彼らだつたりする。

そんな村人達は夕吉のことを気にも留めなくなっていた。

彼はアシユレイのお世話係兼生徒となつて以来、村人達からすればおかしなことを口に出さなくなったのだ。

また、アシユレイと一緒に新しい農具を作つたり、怪我人の手当をしたり、と精力的に働いた。

それにより村人達との間にあつた確執も消えてなくなるどころか、夕吉は頼れる存在となつていた。

昼間は働き、夜になれば夕吉はアシユレイに様々な質問をぶつける生活であつた。

そして、アシユレイはというと、1ヶ月が過ぎた辺りでこの村の領主 名目上は領主だが実質的な村長 である松平親氏に屋敷へ呼ばれた。

異国のことについて聞かれたり、ついで村の発展に貢献してくれていることに感謝されたりした。

人の良い彼はアシュレイの為に、と彼が陣頭指揮を取り、村人総出で一軒家を造り、譲渡した。

女の身でありながら様々なことに精通し、怪我の手当や病気の治療もできるアシュレイは薬師もいない小さな村にとっては得難い存在であった。

そして、ある日の夜

「赤朱、人間は何か？」

「表向きには猿が進化したということになってるけど、実際は神々と悪魔が造ったのよ」

「神さんは仏さんのことか？」

「似たようなもんね。他に異教の神や天照大御神とかも関わってる」
「造った理由は？」

「信仰を得る為よ。信仰を得れば神々の力は増す。勿論、悪魔が信仰を得ることができれば悪魔も力を増す。だけど、普通悪魔を信仰する人間はいないでしょ？」

アシュレイの問いかけに頷く夕吉。

「そこで悪魔には特典がついてるの。どれだけ恐怖されるか、で悪魔は力を増すことができる。他にも人間達は正の感情か、負の感情かでも神族や魔族は力を得るわ」

なるほど、と頷く夕吉。

彼はすかさずアシユレイからもらった万年筆で同じくもらったノートに書いていく。

まだこの時代にはどちらも存在しないどころか、魔法が掛かっており、万年筆は永久にインクが尽きない。

そして、ノートは見た目こそ数cm程だが、そのページ数は無限。また、どちらも防水防火その他諸々考えられる全てのことから防護される。

勉強したり、記録するには最適のものだ。

「他にも聞きたいことは？　もうかなり答えたと思うけども」

アシユレイが村にきてから数ヶ月。

彼女はその間、夕吉の質問に答えていたのだ。

「なら……赤朱は何者か？」

「やっとその質問ね……普通は最初に聞くもんだと思うんだけど」

「それよりも優先されることがあったからな。俺が思うに……仏ではない……そうだら？」

その問いにアシユレイは頷く。

「私、異教の悪魔だもの。向こうでの名前は……」

言いかけて彼女は止まった。

「どづした？」

「言霊。私が私の名前を言うと、たぶん常人は耐えられないわ」

力あるものの名前には力が宿る。

人間が扱う魔法や術にもそういった上位存在の名前を使い、その存在が持つ力の極一部を借りて攻撃したりする。

地獄屈指の魔王であるアシュレイが自分で自分の名前を神族や魔族、人間なら魔法使いや陰陽師などそういった者以外に名乗ればそれだけで相手がダメージを受けてしまう可能性があった。

「書くわ。ま、それでも力が残ってしまうけど」

アシュレイはカタカナで自らの名を彼のノートに書き記す。

ついでに彼女の紋章も描いておく。

上級魔族以上であるなら誰でも持っている、最も自分と関わり深いものを示したものだ。

これだけでもはや彼のノートは一級の魔導書と化した。

彼女自身が記した名前と紋章に魔力を流し、彼女に願うことで人間の扱う魔法よりも大きな効果を引き起こすことができるだろう。

「……凄い」

夕吉はそう呟いた。

魔力をほとんど持たない彼からしても、ノートから放たれる力に気がついたのだ。

「あ、私の名前をなるべく声に出しちゃ駄目よ。面倒くさいことが起こるかもしれない」

「今だけ、出してみても？」

色々と聞いてきた彼は好奇心の塊。

抑えられる筈がない。

そこら辺、彼女もよく知っていたので、頷き許可を出した。

「アシュタロス」

瞬間、灯りが消え、まだ秋だというのにまるで冬のような冷気が部屋を包みこんだ。

「わかった？」

数秒後、アシュレイはそう尋ねつつ、もはや隠す必要も無くなったので指先を燭台にあるろうそくへと向け、火をつける。

夕吉の顔は興奮に染まり、その体は震えている。

「あ、私がいることがバレたら、うるさい連中がいるから気をつけてね」

彼はその言葉に生返事を返す。

「ま、その反応も当然か、とアシュレイは思い、別に何も言わない。

迷信などは日本各地にあり、また妖怪なども実際に出現したりしているが、本物の神様や悪魔が実際に降臨した、というのは中々ない。

例えばそれがアシュレイという異教の悪魔であっても、そういう存在に会うということはちょっととした感動を巻き起こすのかもしれないだろう。

これがヨーロッパだったら、すぐにエクソシストが飛んで来るわ

ね、とアシユレイは思わず苦笑いしてしまつ。

色々な意味で寛容な日本だからこそその反応だろう。

やがてアシユレイは夕吉の興奮が収まるのを待つて告げる。

「もうそのノートと万年筆、あなたの家系の家宝にでもしちやいなさい」

「わかつた……赤朱、俺はお前とのことを絶対に忘れない。お前は
いずれここから去るだろうが、俺は忘れない。子々孫々、これらと
共にお前のことを伝えていく」

じつと真剣な顔で見つめてる夕吉にアシユレイは素直に告げた。

「ありがとう……でも、私はあくまで悪魔よ」

「……何じゃそれは。言葉遊びか？」

夕吉のツツコミにアシユレイはハツとし、首をぶんぶん左右に振り、咳払いを一つ。

「とにかく、私は私を崇める人間以外は虫けらと思つてる。実際に
そういう風に行動している。人間を殺しもするし、食べもするし、
攫いもする」

「お前を信仰すればいいんだな」

「……そういう軽く言われると、何だかなあ………というか、私がそ
ういう存在だって知つても、お前呼ばわりとか………」

「細かいことは気にしないのが大物だら！」

きつぱり言い切られるとアシユレイとしては追求する気も失せて
しまつ。

「村の皆は赤朱のことを仏の使いか何かと違ってん。どうしよけ？」

何しろ、アシュレイが来て以後、急に村は活気に満ちたのだ。

怪我や病は治り、実り豊か、熊や狼は森の奥深くにでも入らなければ遭うことが無くなった。

まさに世界が一変したに等しい。

「……そうね、そのままにしておきましょう。一芝居打って妙なことになるよりは余程マシ……ま、一応、私がここを去るときは手紙でも残しておきましょう」

「松平様には伝えておくれ。あの人はいい方だ。俺の質問をしっかり考えた上で、分からないと言ってくれた」

夕吉からすれば真面目に問答に付き合ってくれる親氏は煙たがられていた過去において、有り難い存在であった。

「わかったわ。そうね……あまり長くいると成長しないのがバレてしまうから、1年か2年後には出て行くわ。あなたに分かりやすく言うなら、地獄に帰る」

「地獄に家があるのか？ さすがというか何と言っか……」

呆れたような感心したような彼にアシュレイはくすくすと笑ったのだった。

そして、2年後、アシュレイは帰ることにした。

夕吉は名残り惜しかったが、それでも引き止めたりはしなかった。彼女は親氏に自らの正体を告げ、これから日の本を導くことになるだろう彼の子孫へ幾つかの書物を残した。

それらの書物もまた夕吉のノートと同じく無限のページ数を誇り、様々なことが書かれていた。

国家の構築からはじまり、非常事態における対処法、農業や工業などの発展のさせ方、果ては農具の作り方からロケットの作り方で非常に事細かに。

アシュレイは気になって親氏の子孫達が辿るだろう人生を夢で覗いたのだ。

ちっぽけな集落の村長の子孫達はやがて三河地方を持ち、最後には日本を持つ。

彼女は見て、思わず笑ってしまった。

松平親氏の子孫は徳川家康であったのだから。

我が名は……明日菜？（前書き）

独自設定・解釈あり。

我が名は……明日菜？

松平郷を後にしたアシュレイはそのまま地獄に帰ることはせず、どうせならと日本観光を敢行した。

地獄に帰ったところで暇だからしょうがない。

この時代の京都に行ってみるのもいい、と思ったアシュレイは早速向かったのだが……

「私、何か悪いことした？」

目の前にいる見るからに友好的ではない6人の男達にさすがのアシュレイも困惑する。

彼女はただ京に　それも嵐山付近の目立たぬ森に入ったただけだ。その際、京都を覆う巨大な結界を抜けて入ったのだが、どうやらそれがまずかったようだ。

結界を無力化してからのの方がよかったかしら、とアシュレイは思うが既に後の祭り。

そんなことを考えている彼女に1人の男が怒鳴った。

「その出で立ち……物の怪か！」

化物退治を生業とし、陰陽寮とも関係が深い彼らをして、見たこともない輩であった。

「失敬な。こうすればいいでしょ」

角と翼を引っ込めるアシュレイ。

勿論、そういう問題ではない。

「このっ！」

1人の男が一瞬でアシュレイの目の前に移動した。ほう、と思わず彼女は感心する。

「斬岩剣！」

振るわれた太刀は狙い過たず彼女の首に当たり……そして、飛んだ。

「へ……？」

呆気にとられたのは太刀を振るった方、そして彼の仲間。

何しろ、彼の腕が太刀を持ったまま宙を舞いつつ、そして太刀と共に砕け散った。

勿論、アシュレイは何もしていない。

ただ立っていたただけだ。

彼らは人間として見れば凄腕の剣士に分類されるが、そうであるが故にその反動でこういう状況に陥った。

「散開！」

誰かの言葉に弾かれたように彼らは四方に散り、アシュレイの様子を窺う。

腕を潰された男はそそくさと退避していったのを彼女は感知した。

「んー……どこからでもかかって来い？」

彼女の言葉を挑発と受け取った彼らは気を瞬時に練り上げ、その刃に帯電させる。

その集まるエネルギーにアシュレイは再び感心する。

「さっきの技は瞬動というヤツね。斉天大聖に教えてもらったわ」

そう言った彼女に答えず、彼らは動いた。

四方八方から瞬動でもって一気に距離を詰め、その帯電した剣先を勢い良く彼女目がけて振り下ろす。

膨大なエネルギーがたた1点に集中し、眩い光が周囲を包み込んだ。

そして光が収まった後、彼らは絶望を目の当たりにした。

「真・雷光剣が効かない……だと……」

誰かが全員のことを代弁した。誰か。

アシュレイは傷一つ負わず、変わらずにその場に立っていた。

「中々面白い見世物だったわ」

思わず彼女は拍手してしまう。

「でも、もう無理ね」

アシュレイがそう告げた瞬間、ピシピシという音。

彼らの持っていた太刀には無数のヒビが入り、やがて砕け散った。それだけには留まらず、彼らの両腕から血しぶきが吹き出す。

彼らはあまりの苦痛に顔を歪ませ、呻き声を上げる。

「骨も木っ端微塵でしょうから、剣はもう握れないんだけど、面白い物を見せてくれたお礼をしてあげる」

彼女がそう告げた瞬間、彼らは目を瞬かせた。

痛みが唐突に消えた。

彼らはまさか、と思い、手を動かし腕を回してみせるが、全く異常はない。

「治してあげたわ。あと、撤退した彼にはこれを」

アシュレイは懐から小瓶を取り出し、それを一人の男に投げ渡した。

無色透明の液体がその中には入っている。

「それはエリクサーっていう万能薬よ。飲めば彼の傷も治る」

「……嘘か？」

男は小瓶を訝しげに見つつ、アシュレイに問いかける。

「あら、あなた方は知らないのかしら？ 人外は嘘をつかない」

彼は小瓶を懐にしまい、そしてアシュレイを真っ直ぐに見据えて告げる。

「高位の妖とお見受けするが、それでも京に入れるわけにはいかない。早々に立ち去れたし」

彼らの仕事は京の安寧の為、結界を超えて侵入してきた妖魔を退治することだ。

これまで全て問答無用で殲滅してきたのだが、さすがに今回はやはり勝手が違った。

故に言葉でお帰り願おうという判断だ。

順序が逆な気がするが、アシュレイがその魔力を極限にまで抑えこんでいるのが原因だ。

それでも威圧感などはあるが、攻撃を躊躇する程のものでもない。

また彼女としても、彼らの仕事が妖怪退治であることは容易に想像がついたので、いきなり攻撃を仕掛けてきたことについては何も言わない。

彼らはいくまで自らの仕事をこなしたただけで非難される言われは何もない。

「どうしても駄目？」

「駄目だ。例えば貴殿が自らは無害だ、と主張しても何が起こるか」

からない」

「それじゃ帰るわ」

あっさりとアシュレイは引いた。

無闇にゴネては松平郷の村人達に迷惑が掛かる可能性があるからだ。

その背に翼、頭に角を生やし、彼女は飛び立ったのだが……

ここで引き下がるのは魔王としての名が廃る。

そういうわけでアシュレイは一度結界の外に出た後、自らの知識をフル活用し、自分を侵入者と認識しないよう京都全土を覆う結界を細工した。

そんなこんなで彼女は京の街に入った。

「何と言つか……あんまり変わらないわね」

アシュレイは思わず呟いた。

彼女の記憶にある京都から、現代的な建築物を差っ引いたものがこの時代の京都であった。

活気に溢れ、人々の顔は明るい。

アシュレイはふらふらと歩き、やがて市場にやってきた。

ゴザを敷き、藁の屋根の簡易な店舗がいくつも立ち並んでおり、様々な山菜や作物が並んでいる。

そして彼女は匂いにつれられて、1つの店の前にやってくる。

釜で炊かれたご飯のいい匂い。

並ぶ茶碗の中にはご飯が盛りつけられ、そこに湯が注がれ、その上には梅干が1つ乗っかっている。

「ちょっとこれ頂くわ。お代はこれで」

アシュレイはどこからともなく金の延べ棒を取り出し、それを店主に渡した。

渡された方はまさかの代金に吃驚したが、それも僅かな時間。

すぐに盛りつけられている茶碗と箸をアシュレイへと手渡した。

「いただきます」

彼女はそう言い、お茶漬けの原形である湯漬けをゆっくりと食べ始めた。

10分後、お腹もそれなりに膨れたところでアシュレイは散策を再開した。

のんびりと京都の街を歩き、神社や仏閣を見て回る。

本来なら悪魔にとって、そういうところは危険なのだが、彼女のような力を持てばそういった悪影響はほとんど無視できる。

彼女は金閣寺がまだないことに悔しがったり、お稲荷さんの総本山である伏見稲荷大社を見学し、玉藻に稲荷寿司を食べさせてあげようと思ってみたり。

彼女は当初の目的通りに京都を満喫していた。

そんな風にあちこち歩いていると、やがて？ 毘古社という神社の前に出た。

石の階段を登った先には無数の鳥居が続いている。

「……何かこの先からたくさん力の持った人間の気配がするわ。ここが陰陽寮なのかしら」

アシュレイは嫌な予感がしたので、そそくさとその場を後にした。

そして、そこから程近い場所で彼女は呼び止められた。
着物を着た若い女に。

「あんさん、異国の方かいな？　こんな辺鄙なところによう来はりましたな」

艶やかな長い黒髪を一つに纏めており、その顔は十分に美人と呼べるものであった。

「ええ、そうよ。ちょっと観光にね」

アシユレイの言葉になるほど、と女は頷く。
瞬間、眼光を鋭くし告げた。

「なら、その角と翼は何や？　異国のモンであっても、角や翼は生えておらんはずや」

アシユレイは感心した。

今の彼女は翼も角もしまった状態であり、見た目はただの14歳の少女にしか見えない。

女は魔王であるアシユレイの隠蔽を見破ったのだ。

「うちの家系は陰陽師の中でも優秀でなあ……バケモンを見破る術は京で一番や」

「そう、それは凄いわ。さっきの退魔師達といい、この時代の日本

は凄いヤツが多いのね」

「退魔師……？　もしかしてそれは太刀を使う連中やったか？」

「真・雷光剣とか斬岩剣とか言ってたけど」

女は僅かに後ずさりした。

「もしかして……あんさん、結界を無理矢理破って、その後出てった妖か？」

「そうよ」

「……逃げてええか？」

女は数時間前、結界を無理矢理こじ開けて入ってきた妖怪が、水際に食い止められなかった場合に備え、街の警邏をしていたのだ。

どうにか追い返したという伝令を聞き、陰陽寮に戻ってきた矢先にアシュレイを発見し、今に至っていた。

「知らないのかしら？　魔王からは逃げられない」

「魔王って何やねん……ちゅーか、真・雷光剣を喰らって生きとる妖魔って……」

「で、もう行っていいかしら？」

アシュレイの言葉に「駄目や」と告げる女。

だが、ここで応援を呼んでも目の前の化物を倒せるとは到底思えない。

故に彼女は駄目元で、ある提案をすることにした。

「なあ、あんさんの目的は人間を殺したり食べに来たんか？」

「違うわ。ただの観光よ。人外は嘘をつかない」

「観光なら案内が必要やと思うねん」

アシュレイは話の展開が読めた。
見張り役として自分を同行させる、とそういうものだ、と。

だが、女の提案はその斜め上を行った。

「ウチは陰陽師で鬼とかそういうのを使役するんやけど……あんさん、ウチに使役されへんか？」

「……は？」

アシュレイは間の抜けた顔を披露した。

「いやな、どう見ても人間に倒せそうにあらへん。ウチはさっきも言ったように、見破ることに關しては京で一番や。神鳴流劍士もそのことに関してにはウチには敵わへん。ともかく、あんさんと戦うのは愚の骨頂やと思うねん」

そう言う女にアシュレイはどうしたものか、と考える。
別に彼女としては使役されるのもやぶさかではない。
暇つぶしにそういうのも悪くはない。

「ウチの使役鬼……式神って言うねんけど、それになってもらえば陰陽師も神鳴流も手を出せへん。ゆっくりと京を観光できると思うんよ」

「なってもいいけど、条件があるわ」

「何でも言うてみ。ウチにできることなら何でもするわ」

「あなたを抱かせなさい。もっと直接的に言えば夜伽」

途端に女の顔が真っ赤になった。

随分と初心なのね、とアシュレイはくすくすと笑う。

「あんさん女やる!？」

「人外だもの。何でもあり。私は女でもあり男でもあるわ」

「……両性具有っちゅーやつか」

そうよ、とアシユレイは頷き、ついで問いかける。

「私を使役したいならそれが条件よ。私が好きなきにあなたを抱く権利。あとはおまけとして衣食住も用意してくれると嬉しいわね」

「……実質的に2つの条件やないか」

「そうよ。何か問題でも？」

何食わぬ顔でそう言うアシユレイに盛大な溜息を吐く女。

彼女は拒否することなんぞできない。

ここでアシユレイを見逃せばどんなことになるか、想像もつかな
いからだ。

「それでええわ……やけど、その、初めてやから……そうするとき
は優しくしてな……?」

伏し目がちでそう言うてくる女にアシユレイは満面の笑みで頷く。

そして、彼女は女に尋ねる。

「さつさとやりましょう。どつやるの?」

「簡単や」

女は地面に陣を描き、ついでその中心部に血を垂らす。

「あんさんの名前とウチの名前を言い合って、あんさんがウチに使
役される言うてくれたらもう終わりや」

「本当に簡単ね」

せやろ、と女は言い、そして自らの名前を告げた。

「我が名は天ヶ崎千奈。彼の者を我が式神とせん」

陣が淡く発光する。

アシュレイは意識的に張り巡らせている呪圈を全て解除し、女千奈に警告した。

「私の名前、言霊がいくかもしれないから注意してね。陰陽師とかなら大丈夫だとは思うけど」

その警告に千奈は頷く。

それを確認したアシュレイは告げた。

「我が名はアシュタロス。地獄の魔王なり。天ヶ崎千奈に我が力を貸すことをここに誓おう」

瞬間、アシュレイは自らの魂が鎖で拘束されたのを感じた。

それは彼女からすれば非常に弱々しいものであり、その気になれば一瞬で解けてしまう程度のものだ。

だが、彼女は破ったりはしない。

自分で条件付きで従うと決めたのに、それを自分で破るのは魔王の沽券に関わる。

「あしゅたるす？ 知らん名前や……地獄にそんなヤツおったかな

……」

千奈が首を傾げてしまうのも無理はない。

この時代の日本にはキリスト教はまだ伝わっていないからだ。

「ま、とにかく凄く強いつて思ってたてくれればいいわ。改めてよろしくね、千奈」

「よろしゅうな、明日菜」

「……何それ」

全く違う名前にアシユレイはジト目で彼女を見つめる。

「あしゆたろすやと言いだんや。やから、頭文字とって、ついで女の子らしく可愛い文字を加えたんやけど」

「あしゆな、アスナ、明日菜ね……まあ、好きにすればいいんじゃないかしら」

「ほな明日菜。早速、陰陽頭に報告や。あと神鳴流にも伝えなあかんな……」

やることがいっぱいでげんなりする千奈とこういうのも悪くないか、と思うアシユレイであった。

忍びの里にて（前書き）

独自設定・解釈あり。
微工口？あり。

忍びの里にて

天ヶ崎千奈の朝は早い。

彼女は鶏が鳴くより早く起きだし、身を清め、瞑想を行う。

頑張る彼女とは裏腹に、我らがアシュレイは布団でぐーすか寝ていた。

そして数時間後の午前7時過ぎ。

お腹を空かせた野良猫ならぬアシュレイはそのそと布団から這いでて、ふらふらと居間へ向かう。

居間では2人分の朝食が用意されていた。

そこで寝ぼけ眼のアシュレイと千奈が対面。

相変わらずのぐうたらぶりに千奈はため息一つ。

「明日菜、もうちょっとしゃきつとせんか」

「いーのいーの問題ないー」

そう言うアシュレイに再び溜息を吐く千奈。

彼女がアシュレイを式神にして早1ヶ月。

あまりのぐうたらぶりにもう誰かに押し付けたい気分であった。

ただ、アシュレイは生活費だけはしっかりと金塊で支払っている
ので千奈は文句も言えない。

朝食を食べ始めて数分、アシュレイは唐突に口を開いた。

「今日は忍者に会ってみたい気分なので、ちょっと忍者探してくる」
「……あんさん、この前は鵜を探してくるとか言ってたか？」
「そういうこともあったわね」

千奈は何度目になるか分からない溜息を吐く。

結局、アシュレイは鵜を見つけてこなかったのだが、千奈の手を離れて勝手気ままに振舞う様はとでもではないが、使役しているとは言えない。

「ウチの言う事、聞いてくれるんやろな……？」

「代価の一つをもらってないもの。まだ完全には聞いてあげない」

ぶいっとそっぽを向くアシュレイ。

千奈はその顔を真っ赤に染める。

「あ、朝から何言ってるんや！」

「朝からそういうこともいいんじゃないかしら」

「アホ！」

千奈はそう怒鳴ってみたものの、このままではいけないのは確かだ。

彼女の家は両親がいた頃は陰陽の大手であり、公家でもある近衛家に勝るとも劣らない勢いであったが、その両親が妖怪に食い殺されて死亡した後、天ヶ崎は大したことがない、という風評が広まってしまった。

実力で黙らせていた天ヶ崎にとって、その力が通じない妖怪が出てきたことは致命的であった。

その妖怪は近衛によって退治された為に、天ヶ崎の株は下がり、近衛の株は大幅に上がっていた。

「……なあ、本当にウチの体をやればウチの言う事を全部聞いて、しっかりと実行してくれるんか？」

「約束は守る」

そう言うアシュレイに千奈は顔を赤く染めたまま、俯き告げる。

「ほなら……今夜、抱いてや……」

その言葉にアシュレイは待つてましたと言わんばかりの表情となる。

目を爛々と輝かせる様は色々な意味で危ない。

「じゃ、今夜は湯浴みせずに戻ってきて。汗ばんだ肌、蒸れた匂いって最高にいいわ」

「そ、そういうもんなんか？」

「そういうもんよ」

間違った知識を植えつけるアシュレイだが、彼女としてはそれが一番興奮するので仕方がない。

「じゃ、夜を楽しみにして忍者探してくる」

「……結局、行くんか」

「まだ代価の一つをもらってないもの」

アシュレイは縁側から翼をはためかせ、空へ舞い上がっていった。後に残された千奈は再び溜息を吐きつつ、卓袱台を見ると……

「……いつの間にか無くなってる」

まだ3分の1は残っていた筈のアシュレイの朝食。
それらはいつの間にか綺麗に無くなっていた。

「早食いは体に毒やる……」

そう呟き、すぐにアシュレイが人間じゃないことを思い出し、苦笑する。

「本当に物の怪なんか……人間臭すぎるやろ」

千奈の言葉ももつともであった。

「甲賀と伊賀で迷ったけども、敢えて甲賀にしてみたり」

そんなことを言うアシュレイは近江国にやってきていた。

京都のすぐ横で、現代日本で言うならば滋賀県にあたる場所だ。

大雑把な場所が分かれば、あとは彼女の探索魔法をフルに使えば容易に位置を特定できる。

集団で力を持った人間達を見つけ出せばいいだけなのだから。

「何か魔力っぽいような、でも違うものを見つけた」

数分と経たずにアシュレイはそれを特定した。

彼女が感じた力は魔力ではなく、いわゆる気と呼ばれるものだ。その気配を頼りに彼女は向かった。

「うーん……やっぱり無力化した方がよかったかしら。でも、これが手っ取り早いといえ手っ取り早いよね」

アシュレイはそう呟いた。

彼女の状況を端的に説明するなら……真後ろからクナイを首に突きつけられていた。

なお、彼女は侵入する際に角と翼はしまっていたので、見た目はただの少女である。

「何奴でござるか？」

緊張した声で尋ねるのは突きつけている輩。

その声色は若い女であった。

彼女はアシュレイが怪しげなことをしないようにぴったりと体を密着させている。

そう、密着しているのだ。

あのアシュレイに女が密着している。
胸が当然当たるわけで。

「中々いい胸を持つてるわね。是非、揉ませていただきたい」

「……この状況でそういうことを言えるのは余程のうつけか、もしくは大物……そのどちらかでございますよ」

「私は超大物だわ」

「自分で言うものではないでございます」

呆れた女はクナイを下ろし、アシュレイから離れた。

アシュレイは女の方を見ずに問いかける。

「いいの？ 甲賀を探して、結界あったから、とりあえず破って入ったんだけど」

「拙者、未熟なれど、お主はこちらが手を出さねば、何もしない……

…そう思ったでございます」

「侵入者なの？」

「里全体を覆う結界は強固なもの。それを破って入ってくる妖は人間でどうこうできるものではないでございます」

「京都に同じように入ったら、神鳴流とかの剣士に取り囲まれたんだけど」

「……たとえ敵わなくても、立ち向かわねばならないときもあるでございますよ」

アシュレイはそこでゆっくりと女の方へ顔を向けた。

口元を布で覆っているが、その顔立ちは把握できた。

「糸目なのはまあいいとして、その尻尾みたいに長い髪は忍者とし

てどうなのよ」

「はて、何のことでござるか？ 拙者、忍者ではござらんのだが」

その女の格好は忍装束であり、背中には巨大な手裏剣がある。

「その格好で否定できるの？」

「どうにかなるものでござる……とござるで……」

女は目をしっかりと開き、その切れ長の瞳でまっすぐにアシユレイを見据え、問いかけた。

「拙者、長瀬桔梗と申す。我が里に何用か？」

「忍者に会いに来た。もう会えたから満足だわ。あ、私は明日菜ね」

笑顔で告げる彼女に桔梗は眼光鋭く問いかける。

「それだけでござるか？」

「うん。ついでに里を観光したいな」

「……そう言われたのは初めてなのでござるが……」

困惑する桔梗。

一見、ただの少女にしか見えないが、その気配は人のものではない。

「とりあえず里まで案内はするでござる」

長に決めてもらおう、と桔梗は判断を丸投げすることにした。

道中、アシユレイに寝技掛けて、とせがまれた桔梗であったが、のらりくらりと時間稼ぎし、里に到着した。

そのまま長の屋敷に直行した2人。

桔梗が長に事情を説明する最中、アシユレイは懐から金の延べ棒を出し、それを無言で長へと差し出した。

長はそれを無言で受け取り、村人に危害を加えないという条件付きでアシユレイの滞在を許可した。

桔梗は汚い政治的駆け引きを目撃したが、何も見なかったことにした。

彼女とて忍び。そういう汚い場面は仕事で何度も目撃していたからだ。

「まさか仕事以外でああいう場面を目撃するとは思わなかったぞね……」

そう言いながら、ジト目でアシユレイを見つめる桔梗。

2人は現在、桔梗の案内で村を見て回っている最中だ。

「誰でもお金は欲しいのよ。世の中をうまく動かすにはまずお金だわ。愛とか友情とか絆とかじゃ、世界を動かせない」

「壮大な話でござるなあ……拙者は自分の周囲だけでいいでござる

「よ」

「普通の人間は自分の周囲だけで問題ないから、考えなくていいわ」
「そう言われると何だか馬鹿にされているようでござる……」

そんな桔梗にくすくすと笑うアシュレイ。

「しかし、何にもないでござるよ？ 忍びの里といっても、実態はただの農村でござる。鍛錬をしているくらいで、特にこれといったものは……」

「そういつのがいいじゃない」

アシュレイはそう答えて、目に付く水田や畑に土壤改良魔法をかけていく。

「何かしているでござるか？ 先ほどから妙な気配を感じるのでござるが……」

「豊作になるおまじないをしてるの」

「おまじないでござるか……」

「そうよ」

アシュレイはそう答え、近くの田んぼの土手に腰を下ろした。

桔梗もつられて彼女の横に座る。

「のどかでもいいじゃない。こういつところはずっと残っていくべきだわ」

アシュレイは青い空を見上げ、そう告げる。

その言葉に桔梗は首を傾げる。

「明日菜殿の言い方ではまるで消えてしまうような感じがするので

「ござるが……」

「消えちゃうわ。今からだいたい600年くらい先にね」

「……途方もない時間でござるな。拙者もそんな未来を見てみたいでござるよ」

「あなたの子孫が見るんじゃないかしらね。運が良ければ」

「それもそうでござるな……」

それから少しの間、沈黙が訪れた。

やがて鳶の鳴き声が響き、空に2匹の鳶が現れた。

空を行く鳶の姿を見つつ、桔梗が口を開く。

「明日菜殿はこれから先も、ずっと変わらずに生きていくのでござるか？」

「そうよ」

そう答えたアシュレイに桔梗は物悲しい気持ちになった。

永遠を生きるというのは確かに魅力的ではある。

だが、それは永遠の孤独を味わうということでもあった。

「寂しくはないでござるか？」

「私、こう見えても何千万という部下と心を許せる従者達がいるの。私と永遠に生きる子達がね」

桔梗の気持ちを見透かしたかのようにアシュレイは笑って答える。その顔は無理矢理作ったものではないことが桔梗には容易に分かった。

「恵まれているのでござるな」

「色々大変なこともあったけど、どんな人間や神魔族よりも恵まれていると思うわ」

でも、とアシュレイは続ける。

「あなたの子孫は未来にもいるかもしれない。けど、あなたはこの時代でしか生きられないわ。今、私は気まぐれで人間と関わっているけど、私の関わった人物が100年後にはいない。それがとても寂しい」

桔梗は告げるべき言葉を持たない。

彼女はアシュレイのように、永遠を生きる者ではないからだ。

「桔梗……あなた、私と永遠を生きてみる？」

唐突にアシュレイは問いかけた。

その言葉に桔梗は目を見開く。

「寂しいなら、永遠の命を与えてしまえばいい。それを片手間で
きる力が私にはある」

「明日菜殿は何者でござるか？」

切れ長の瞳をまっすぐにアシュレイに向け、桔梗は問いかけた。
そんな彼女に不敵に笑い、アシュレイは答える。

「私の名はアシュタロス。地獄の魔王よ」

瞬間、桔梗は悪寒が背筋を走った。

冷や汗が体中から吹き出し、その顔は青く染まる。

「……言霊忘れてた」

うつかりしてた、とアシュレイは桔梗に治癒魔法を掛けてやる。みるみるうちに彼女は血色が良くなった。

「こ、怖かった……死ぬかと思った……」

汗を拭いながら、そう言う彼女はござる口調ではなかった。

余裕がなかったことが窺える。

「ま、明日菜でいいわ。で、さっきの答えは？」

桔梗は躊躇なく告げる。

「拙者は人間のままでいいでござるよ。明日菜殿を寂しがらせてしまつかもしれぬが……人間が物の怪になるのは自然の摂理に逆らうことではござる。そうなつては拙者の周囲が悲しむ。自分のことも確かに大切でござるが、それと同じくらいに周りの皆も大切なのである」

ほう、とアシュレイは感心した。

欧州から美しさを保つ為に墮落する者達に聞かせてやりたいくらいに。

「あなたは心が強いのね」

称えるアシュレイに桔梗は首を横に振る。

「拙者は未熟者でござる。拙者からすれば明日菜殿の方が余程強い。拙者は永遠を生きる自信がないでござるが、明日菜殿はそれを実践している。自分にできないことをできる者は素直に尊敬する……拙者の信条の一つでござる」

「いいことだわ……私よりできる輩はあんまりいないから、私はそういう状況には滅多にならないわね」

「それはそれで凄いでござる……」

「ちなみに世界で一番頭がいい、と言われていたりする」

桔梗は無言でアシユレイの両肩を掴み、顔を迫らせ告げる。

「拙者に勉強を教えて欲しいでござる」

「男を虜にする布団での技で手を打とう」

「いいでござるよ。仕事で何度もやっていることとてござる」

「今から早速やりましょう！ 幾らでも教えてあげましょう！ この世の成り立ちから魔神兵の作り方まで！」

「何かよく分からないでござるが……これで拙者の弱点が埋められるでござる」

両者両得であった。

それから数時間後の夜の帳が下りる頃、アシユレイは非常に満足した様子で、千奈との情事を期待しつつ、京都へ帰還したのだった。

狗族の里にて（前書き）

独自設定・解釈あり。
微工口？あり。

狗族の里にて

「あーだるー……歩くのめんどくさー」

だらけきった顔のアシュレイはふよふよと宙を浮かびながら、ゆつくりと進んでいた。

彼女の後ろからは千奈が歩いている。

「宙に浮かんでる癖によう言っわ……」

季節は初夏。

6月も終わりに近づいた本日、晴れてはいるものの、湿気が多く、非常に蒸し暑い。

纏わり付くような暑さに千奈は珠のような汗を額に浮かべている。

「というか、耐熱結界とかそういうのを使えばいいのに」

「そういうことをすると体が慣れてまって、やめたときにだるくなるんやで」

「じゃあ着物やめればいいのに」

「陰陽師の正装や」

「で、それはいいとして……何で狗族とか烏族とかそういうのに挨拶しないといけないの？」

「どっちも陰陽寮に協力的やからな。ご機嫌取りや」

そういう千奈にアシュレイはこれみよがしに溜息を吐いてみせる。

「弱いつて罪ね。私みたいに超強くなれば相手が勝手に従うのに」

「いや、明日菜は規格外過ぎるから。誰もそんな強くなれへんから」

「5000万年くらい修行すれば誰でもそれなりにはなるわ」

「時間の単位が明らかにおかしいやろ」

「ちなみに私はたぶん3億年くらい生きてるわ」

その言葉にもう何も言わないことにした千奈。

アシュレイに構うと余計暑くなる。

「思うんだけど、誰かを守ろうとかそういうので自分が強くなるうって思うでしょ？」

唐突なアシュレイの言葉。

千奈は無視してもよかったが、無視すると今度はうるさくなる。仕方がないので彼女は構うことにした。

「せやな」

「でも、そうなくても自分の大切な人が傷つけられるとかそういうこともあるでしょ？」

アシュレイの言葉に千奈は再び肯定する。

「それってさ、結局強くなってるなと思うの。で、誰かを守る強さが本当の強さとかそういうのは存在しないわ。要は泣く子も黙る圧倒的な力を身につければ、誰もその身内には手を出してこないわ。手を出した場合の危険度が高すぎるから。私、数千年前に一回だけあったけど、それから戦争中を除けば今まで誰も手を出してこないわ」

「いや、明日菜みたいに人間はなれへんから」

至極最もな答えにアシュレイはブー垂れる。

「まあ、あんさんの尺度は人間とはえろっ違うからしょうがないかもしれないけどな」

一応フォローする千奈だが、それでもアシュレイは膨れっ面だ。

「夜はあんなに乱れるのに……」

ポツリと呟いたアシュレイに千奈は顔を真っ赤に染める。

「昼間っから何言ってるんや!？」

「昼間からもいいと思うの」

くすくすと笑うアシュレイ。

彼女はちょうど2週間前、千奈を美味しく頂いている。

そこで初めて女の快楽を知った千奈は以後、アシュレイに抱かれる度に痴態を披露していた。

「と、ともかく、もうつくで!」

誤魔化すようにそう言う千奈だったが、アシュレイは笑い続けた。
いた。

山間にある狗族の里はやはり小規模であった。

総人口は500人にも満たない。

千奈は里に着くや否や、アシユレイを引っ張って狗族の長に挨拶を行った。

その後、政治的な話が展開されたのでアシユレイはそそくさとその場を後にしていた。

「……犬耳か」

あちらこちらにいる狗族を見てアシユレイはポツリと呟いた。

彼女の視界に入っているのは真っ黒な耳と尻尾の獣人。

老若男女様々であるが、やはり一番目がいくのが女の子だった。

「女の子でも持って帰ろうかしら」

じーっと10代前半くらいの女の子達を眺めつつ、そう呟く。

その子達は珍しい出で立ちのアシユレイに好奇の視線を送っている。

今の彼女は服装こそ、千奈の用意した着物だが翼と角が生えてい

る。翼は背中の部分にわざわざ穴が空け、そこから出していた。

「なあなあ、あんさん誰や？」

やがて1人の女の子が話しかけてきた。
くりくりとした目が印象的だ。

「私は明日菜よ。今さっき、長老だかの家に入ってつた人間の式神」
「式神なん！？ 式神って人間に負けたヤツがなるんとちゃう！？」
「いや、それはあくまで1つの場合でしかないと思うんだけど……」

契約で力を貸すとかそういう場合もある。

しかし、まだまだ子供の彼女達には分からなかったらしく、人間に負けたということが一人歩きしていつてしまう。

無闇に魔力を垂れ流す、ということのアシュレイはしない。

そんなことをすれば周囲にどんな影響があるか、わかったものではないからだ。

故に今の彼女はただの角と翼がある変わった妖にしか見えない為に、妖怪として……というよりか、化物としての格の違いが彼女達には理解できない。

「何や何や、人間に負けたんか。情けないヤツやなあ」

騒ぎを聞きつけた男の子がやってきた。

その第一声から腕白小僧であることが容易に窺える。

「いや、負けてないから。というか、契約で力を貸しているだけだから」

「ほう……そないに言うなら、俺と勝負しようや。俺は犬上小次郎や！」

構えを取る少年 小次郎にアシュレイは盛大な溜息を吐く。

「じゃ、一瞬で勝負をつけるわね」

そう前置きし、アシュレイは告げる。

「我が名はアシュタロス」

一瞬の間を置いて、小次郎が、周囲の女の子達が地面に倒れ伏す。その体は小刻みに震え、恐怖の表情を浮かべている。

面白いことに彼らはまるで犬が服従のポーズを見せるかのように、腹を見せている。

「これで分かってくれると平和的なんだけど、分かってくれないなら、その腸を美味しく頂くしかないわ」

その鋭い牙を見せつけければ彼らの震えは更に大きくなる。

「……明日菜、何してるん？」

後ろからそんな声。

アシュレイが振り返ればそこには千奈の姿が。

彼女はこの状況がどんなものか分からないらしく、首を傾げている。

「ちょっと遊んでたのよ。そこの犬達とね」

そう告げ、アシュレイはにこやかな笑みを浮かべ、ゆっくりと小次郎に近づき、その腹を撫でてやる。

やがて彼女は男を撫でるよりも、と近くにいた女の子のお腹を撫で始めた。

「あんさんがすると卑猥な光景にしか見えへんわ……」
「ここだけの話、私は犬を飼ってるわ」
「その犬はどんな犬や？」
「頭が3つあるケルベロスっていう犬ね」
「普通の犬やないことは確かやな。どう見ても妖怪やろ……」
「まあ、ちよーっと大きくて、走ると風よりも速いことは確かね。
あと、口から火とか氷とか雷とか毒とか吐いたりする」
「……そんなのが日の本におらんでよかつたわ」

想像した千奈は体を震わせる。

「で、もう終わったの？」
「せやで。あとは烏族の里や」
「もう空飛んでく？」
「駄目や。歩いていかんと侵入者と間違われる」

そう言われるとアシュレイは何も言えない。
似たような経験があったからだ。

「な、なあ……」

下から聞こえた声にアシュレイと千奈は思わず視線を下げる。
小次郎が片膝をつきながらもどうにか立ち上がるうとしていた。

「俺をあんたの弟子にしてくれ！」
「……ほんまに何してたん？」

小次郎の言葉にジト目でアシュレイを見つめる千奈。
その視線を気にせず彼女は告げる。

「小次郎とやら。あなたを女として調教していいなら、その提案を受けよう」

「お、女として調教やと……?」

あんまりといえはあんまりな条件に小次郎は目を剥く。

「そうよ。髪を伸ばして女の服を着て、男のまま女としての快楽を味合わせて、女の言葉遣いで、体は男のまま、心が女になるの」

「……さすがにそれは無理や」

「じゃ、駄目ね」

これ以上では面倒くさいことになる、と千奈は悟った。

そして、彼女はアシユレイが、あるいは小次郎が次の行動を起こすより早く告げる。

「ともあれ、行くで。ほなな」

千奈はアシユレイの手を引っ張り、そそくさとその場から立ち去ったのだった。

「こんのアホッ！ 何手え出しとるんや!」

「向こうから喧嘩売ってきたんだからしょうがないじゃない。それ

に私があなたに負けて使役されてるって話になってね」

千奈はその言葉に何も言えない。

彼女とアシュレイは対等な関係などではない。

天秤はアシュレイの方に常に傾いている。

それは代価を全て得た状態である今も同じことだ。

千奈にできることは唯一つ。

アシュレイをお願いすることだけだ。

「明日菜……これはお願いや。ウチの為にもあまり騒ぎを起こさんで欲しい」

「じゃあ、あまりにもイラツときたら千奈を攫って地獄に連れてけばいいのね」

アシュレイとしては何も地上に留まる必要はない。

別に地獄で千奈とよろしくやってても全く問題がなかった。

「そついつの抜きでお願いや……」

千奈は深々とアシュレイに頭を下げる。

その様子にアシュレイは数秒思索し、口を開く。

「そこまでするならしょうがないわ。ほら、私って優しい魔王で通ってるし?」

言つまでもなく、彼女に優しい魔王などという通り名はない。

ともあれ、アシュレイとしても女の子を悲しませるのは本意ではない。

故に千奈のお願いを受けることにしたのだ。

「ホンマか……?」

「魔王は嘘つかないわ。だけど、あまりにもイライラする場合は別よ?」

「おおきに……ほんまおおきに……」

「だけど、とりあえず鬱憤晴らしたい。そう思つアシュレイちゃんです。程良く汗をかいた千奈の素肌を頂きたい」

「へ……?」

千奈が顔を上げたときにはもう遅かった。

結界でいつのまにか周囲からは隔離され、アシュレイは好色な笑みを浮かべ、告げる。

「いただきます」

そして、2時間後

「昼間は嫌や言つたのに……」

僅かに頬を朱に染めて、俯き歩く千奈。

その横を満足気なアシュレイが歩く。

2人は手を繋いで仲良く烏族の里へと向かっていた。

「いいじゃないの。涼しくはなつたでしょ？」

そう問うアシュレイに千奈は僅かに頷く。

情事が始まる前に結界内の湿度と温度を弄り、過ごしやすい環境をアシュレイは構築していた。

それでも汗は出、また体が汚れたりしたが、アシュレイが情事後に水を出し、2人で仲良く水浴びをすることでさっぱりとできた。

「あそこかしら……」

アシュレイの言葉に千奈は顔を上げた。

2人から数十m先には道を挟むように烏の像が2体立っている。

「あそこや。あそこの像の間は結界が張られておらへんのや。あと、里に入った瞬間に当番の烏族が出てきて用件を尋ねられるから、反射的に攻撃せんでな」

「わかつたわ」

そんなこんなで2人は烏族の里にたどり着いたのであった。

とある思み子の理不尽な話（前書き）

独自設定・解釈あり。

原作キャラの先祖ではないですが、似た境遇の子であったり。

とある忌み子の理不尽な話

「暇なんだけども」

そう呟くアシュレイ。

彼女の周りにはちよつとした人ばかりができている。
狗族の里の時と同じように、彼女は好奇の視線に晒されていた。

じーつとアシュレイは取り囲む連中　主に同い年かそれより年
下の子供を見つめる。

「がー！　食べちゃうぞー！」

そんなことを言って近寄ればきゃーきゃー悲鳴を上げて蜘蛛の子
を散らすようにあつという間に人だかりは消えてなくなった。

「チヨロイもんね……さすが地上の妖怪とは格が違った」

しかし、とアシュレイは背後を振り返る。

そこにはそれなりに立派な屋敷。

屋敷の中で待つよりかは、という千奈の配慮でアシュレイは外で
待たされていた。

彼女はじつとしているよりも、きつと鳥族の里をあちこち回るだ
ろう、とそういう千奈の予想だ。

「……千奈が戻ってきたときにここにいればいいのね」

基本的に悪魔は約束を守るし、嘘はつかない。

だが、こついう風に言葉の穴を見つけて自分にとって都合の良いように解釈してしまうのだ。

千奈の予想通りであった。

そんなわけでアシュレイは烏族の里をあちこち回る。

とはいっても、然程大きくなく、大した娯楽施設があるわけでもない。

狗族の里と住民が違うだけで、取り立てて変化があるというわけではない。

これが人間の里だったなら、アシュレイは関わろうとしたのだろうか、住んでいるのは亜人。

ならばこそ、彼女は積極的に関わろうとはしなかった。

だが、しばらくするとアシュレイの感覚に引っかかるものがあった。

その感覚に従い、探査魔法を行使してみれば、何やら里の外れには里を覆う結界とは別の、小規模な結界が張られていることを発見した。

「鳥族のお宝……なワケないか」

そう言いつつも、暇なのでそちらへと向かうアシュレイ。騒ぎを起こすな、と千奈には言われている。ならばこそ、騒ぎを起こさなければ何をしてもいいのだ。

死人に口なし

そういうことわざがあった。

騒ぎ立てる輩がいなければ騒ぎは起こらない。

そして大抵の場合、騒ぐのは被害者の方である。

被害者が即死すれば何も問題はなかった。

死体なんぞアシュレイは幾らでも処理の仕方があるし、いざとなれば食べてしまえばいい。

「鳥族は鳥……唐揚げにすると美味しいのかしら……」

「ごくり、と思わず喉を鳴らすアシュレイであった。

それから20分程歩き、彼女はたどり着いた。目の前にある結界は小規模ながら中々に強固。並の者ならば入ることすらできない。

しかし、アシュレイはただ軽く手をかざしただけで結界を改竄する。

これでこの結界は彼女以外の誰かを通したときに反応するようになつた。

アシユレイは悠々と結界内に侵入し、更に歩くこと5分で彼女は小屋を見つけた。

その中からは今まで見た烏族よりも強い魔力を放つ者がいる。

「封印するしかない強力な妖怪……胸が躍るわ。ペットにしようかしら」

そう呟きつつ、アシユレイは小屋の扉を開けた。

小屋の内部は酷く簡素であった。

扉を開けた先には鉄格子で区切られた座敷牢となっており、その中にいるのはアシユレイと見た目が同い年くらいの少女。

彼女は座敷牢の隅で膝を抱え、蹲っていた。

その背にある翼は穢れ無き純白。

少女は思わぬ来客に顔を上げ……すぐに恐怖の表情を浮かべた。

その様子にアシユレイは感心する。

今の彼女は千奈が気合を入れて探ってもただの人間の少女にしか見えない程に高度な隠蔽を施している。

烏族や狗族などは気配に敏感であり、しっかりと隠蔽しないとアシユレイがとんでもない化物だと気づかれてしまう可能性があった。そうなってしまうえば陰陽寮がとんでもない輩を引き連れて戦争を仕掛けに来た、と間違われてしまい、挨拶どころではなくなってしまうからだ。

ともあれ、その隠蔽を見破った少女にアシユレイが興味を抱かない筈がなかった。

その翼といい、この境遇といい、聞きたいことは山ほどある。

勿論、小屋にいたのが少女であるということもアシュレイが興味を抱くには重要な要素であるのは言うまでもない。

「あなた、綺麗な翼ね。それに妖力も高いみたいだし」

魔力も妖力も同じものだが、アシュレイは少女に分かるようにする。

彼女の言葉に少女は答えねば命がない、とても思ったのか、ポツリポツリと語り出す。

少女が語ったことは2つ。

白い翼が鳥族にとって禁忌であること、物心ついたときからずっとここにいること。

「みにくいアヒルの子ってヤツかしらね」

アシュレイは思わず呟いた。

その言葉に少女は首を傾げる。

「この時代にはまだ無かったかしら……」

そう言いながら、アシュレイは簡単に少女に説明する。すると、彼女は暗い表情となってしまう。

「ウチは……そんな都合良く……ならへん……」

少女の言葉を聞きつつ、アシュレイは魔力を察知した。

彼女からすればその反応は羽虫以下であったが故に無視することに決め、言葉を紡ぐ。

「んー、そうでもないかも」

そんな彼女にアシュレイはそう告げ、その鉄格子を睨んで溶かす。突然のことに少女は目を白黒させる。

アシュレイはそんな彼女の様子など気にもせず。ずかずかと座敷牢の中に入り、少女へと手を差し出した。

「あなた、私と来ない？」

「でも、ウチは忌み子で……」

「忌み子って言うヤツがいなくなれば来てくれるのね。じゃあ烏族を皆殺しにしよう」

くるりと背を向けるアシュレイに慌てて少女はしがみついて留める。

「それは駄目や！」

「なら、どうすればいいの？」

アシュレイは少女へと顔を向け、問いかけた。

その言葉に彼女はアシュレイから離れ、顔を俯かせて小さな声で尋ねる。

「ほんまに、ウチがいつでもええの？」

その問いに対し、アシュレイは再びその手を差し出した。少女はその答えに微かに笑みを浮かべ、彼女の手を握る。

「で、あなたの名前は？」

「須臾や……です」

付け足したように訂正する少女 須臾。

彼女は自分とアシュレイの格の違いを正しく把握していた。

ついていくと決めた以上、失礼のないよう敬語を使うのは当然のこと。

「私は今は明日菜と呼ばれてるわ。そう呼んで頂戴。本当の名前だと言霊であなたが死んじゃうかもしれないし」

「明日菜……お嬢様？」

「……いや、お嬢様というか王様なんだけど……まあ、好きに呼んで頂戴」

「はいっ」

笑顔で須臾は頷いた、そのとき。

見知らぬ烏族の男達が数人、小屋に入ってきた。

彼らは須臾に対して、定期的な様子見と食事の差し入れを行う世話係。

忌み子であり、通常の烏族よりも力の強い須臾の世話係ともなれば相応の力が要求される。

「万が一という場合がありうるからだ。」

「そこで何をしている？」

「須臾というデコ広ツリ目の少女を連れ出そうとしている」

デコ広ツリ目と言われた須臾はまさかの言葉に目をパチクリとさせている。

対する烏族の男達は苛立たしげな様子。

おちよくられたように感じて仕方がない。

「その者が忌み子と知った上でのことか？」

「たぶん、その忌み子よりも怖い存在である私だから問題ないわ」

恐怖の代名詞として神魔界、地上では欧州などに知られているアシュレイである。

少なくとも極東の烏族の忌み子なんぞよりは余程怖い存在であるのは間違いない。

「不吉の象徴である白い翼をここより出すことは罷りならん！ どうしても、というなら……」

言いかけて彼は、否、彼らは止まった。

「で？」

アシュレイは続きを促した。

彼女は室内を結界で覆うと同時に更に須臾を保護する為に結界を問答している間に張った。

今、彼女は極僅かであるが、抑えていた魔力を解放している。

相對する彼らは顔は真っ青、息もできないのか、口をパクパクと魚のように閉じたり開いたりし、その膝は震えている。

「どうしても、というなら斬り捨てるとでも言うのかしらね？ この、私を、あなた方みたいな虫けらが？」

嘲笑を浮かべ、確認するように問いかける。
彼らは何も言えない。言えるはずもない。

「虫は虫らしく、地べたを這い蹲るのがお似合いよ。でも、騒ぎを
起こしちや駄目だから、平和的に解決しましょう」

一転、につこりと笑顔を浮かべるアシュレイ。

「長にこれを渡しなさい」

アシュレイはどこからともなく金の延べ棒を取り出した。

その数は10本。

彼らの誰かが唾を飲み込む音が聞こえる。

「で、これがあなた達の口止め料ね」

さらにどこからともなく金の延べ棒を取り出し、2本ずつ彼らに
渡した。

「大物は太っ腹なのよ。あなた達みたいな雑魚虫さん……鳥だから、
雑魚鳥さんね。雑魚鳥さんにもこういうことをしてあげるくらいに」

高笑い。

底冷えのする魔力を放ちながら。

もはや誰がどう見ても立派な魔王であった。

断じて正義の使者とかには見えない。

数分後、アシュレイは魔力を再び全て抑えこみ、ただ告げる。

「と……で、こつこつ忌み子とやらはよく出るものなの？」

アシユレイの問いに男の1人が頷き、口を開く。

「数十年から数百年に数度あります。中には烏族と人間とのハーフで、かつ忌み子という者もあり、そういった者は里から放逐されるのが習わしです。ちなみに、その者はハーフではありません」

いつの間にか敬語であったが、誰も気にはしない。

「そう……ともあれ、須臾。行くわよ」

そう言い、アシユレイはさっさと小屋から出てしまい、慌てて須臾はその後を追った。

「女連れてきおった」

それが千奈の第一声であった。

待ち合わせ場所と化していた長の屋敷前に立っていた彼女はアシュレイと須臾を見るなりに盛大な溜息を吐き、そう告げたのだ。

「この子、今日から私のペット兼従者兼もふもふ役になったわ」
「……白い翼は禁忌がどうか聞いた記憶があるんやが……まあ、あんさんの方が怖いからええか」

自分達の常識が全く通用しないことは千奈は既に学習済みだ。

また、アシュレイはなんだかんだで自分の起こしたことは自分で始末をつけている。

先の忍者探しのときも、先方から苦情が来るどころか何故か陰陽寮に感謝状が届いた。

何でも明日菜が中忍に勉強を教えてくれているお礼とのこと。
疎遠な関係にあつた甲賀であつたが、その一件以来、比較的陰陽寮には好意的であつた。

千奈には何をやったのかさっぱりだったが、今回もきつと場を収めた上で連れてきたんだろう、と千奈はあたりをつける。

「須臾……です。よろしゅ……よろしくお願いします」

頑張つて敬語を使う少女に千奈は思わず笑つてしまう。

「千奈、そういうわけで今日から1人同居人増えるから。彼女の生活費も私が支払うからいいわ」

「ウチは別にかまへんよ。ただ、とりあえずは敬語の勉強やな」

須臾は恥ずかしさにその白い肌を真っ赤に染め、縮こまってしま
う。

そんな彼女に頬を緩ませるアシュレイと千奈。

「ウチは天ヶ崎千奈や。よろしゅうな」

こうして天ヶ崎家に同居人が、同時にアシユレイのペット兼従者兼もふもふ役として1人増えたのであった。

静かな一時（前書き）

独自設定・解釈あり。

静かな一時

7月初旬のある日の、太陽が沈みかけた夕暮れ時。
天ヶ崎家の庭に鞠をつく音と共に歌声が響く。

「まるたけえびすにおしおいけ」

「あねさんろつかくたこにしき」

「しあやぶつたかまつまんごじょう」

「せきだちやらちやらうおのたな」

「ろくじょうさんてつとおりすぎ」

「ひつちょうこえればはちくじょう」

「じゅうじょうとつじでとどめさす」

最後まで歌い終わると同時に千奈は鞠をつくのをやめた。

「どや？」

「これなら覚えられるわ。ありがとう！」

そう言い、須臾が千奈に抱きついた。

そんな彼女の頭を千奈は優しく撫でてやる。

「何事かしら？ 何か涼しげな声が聞こえたのだけでも」

縁側からアシュレイがやってきた。

翼と角はしまわれており、浴衣姿だ。

彼女は既にお風呂に入った後であった。

「須臾がな、京の通りを覚えれんちゅうから教えてたんや。手毬唄

にあるんよ。今が東西の通りでさっき教えた南北の通りと合わせて使えば迷うことはなくなるで」

へー、と思わずアシュレイも感心。

「明日菜お嬢様も一緒にどうですか？」

須臾がそう尋ねた。

彼女はこの1ヶ月でみっちり勉強しており、その敬語や標準語は完璧だ。

須臾の提案に特に断る意味もないのでアシュレイは頷き、草履を履いて庭に出た。

「ほな、いきますえ」

千奈の言葉にアシュレイと須臾が鞠をつきはじめる。それを確認し、千奈もまた鞠をつき始めた。

そして、3人は声を合わせて歌い始める。

「まるたけえびすにおしおいけ」

夕暮れの空に3人の声が響く。

風鈴が風に揺られて鈴を鳴らす。

どこかで鳥が鳴いている。

魔王も陰陽師も烏族の忌み子など、各々の立場や出自は関係なく、彼女達は今、対等であった。

そして、そんな3人を見守る連中がいた。

「……楽しそうだな」

数百m先で展開されている光景にフェネクスはポツリと呟いた。それに同意するかのように彼女の左にいたテレジアが口を開く。

「アシユ様は今、とてもリラックスしていらっしやる。我々の前でもしてはいたが、種類は違うと思っ」

その言葉にフェネクスは頷きつつ、ちらりと右側へ視線を送る。

「妾も混ざりたいのじゃ」

しょんぼりとしている玉藻がいたり。

「アシユ様……私にも是非……」

うずうずとしているベアトリクスがいたり。

他にもディアナとかエシユタルとかシルヴィアとかがいたりする。中でも極めつけは……

「ああ、童心に返っているアシユ様も素敵ですわ……」

目が危ないフレイヤがいた。

言うまでもないが、彼女達は皆、アシユレイの様子を見に来たのだ。

数ヶ月に1度くらいしかアシユレイは地獄やフレイヤに連絡をしていない。

そもそも、神魔族にとつての数ヶ月は人間にとつての1週間に等しいのだが、待たされている側にとつては数千年にも感じられる。

「……どうすればいいのかな」

彼女達に混ざって、困惑する白髪の少年の姿があった。

彼もまたアシユレイを見ている。

「日を改めればいい。お前の用事は明日の午前中に行っても問題はないだろう？」

「それもそうだね」

そう言いながらも、彼はアシュレイから視線を外さない。

「このまま地獄に帰るのも嫌だから、妙神山に寄って行く？」

ディアナの提案に誰も異論を唱えない。

彼女達は何だか騒ぎたい気分であった。

「お前も来るか？」

エシユタルは少年に問う。

「僕が行ってもいいのかい？」

どんなことがあっても、大抵は無表情な彼だが、今回はかりはその顔には僅かだが、驚きが表れている。

「構わんだろう。お前も同僚なのだからな」

エシユタルの言葉にうんうん、と頷くテレジア達。

「……セクストウム……セステを呼んでも？」

「構わん。どうせなら他の連中も呼んでしまえばいい」

エシユタルの言葉に彼は僅かに頷いたのだった。

一方その頃、アシュレイの城では

「……幾ら何でも無用心過ぎやしないかね」

ヘルマンは自らの執務室で途方に暮れていた。

アシュレイの様子を見に行ってくる、と主力メンバーが続々と地上に行ってしまったのだ。

代理として、ヘルマンを置いて。

そして、まるで図ったように湧いて出てくる様々な問題。

自分の権限で処理できるものは処理し、できないものはテレジアの執務室に届け、と普段はのんびりとしていた彼の生活は一変していた。

食事を摂る暇もなく　まあ、悪魔だから摂らなくても大丈夫だ

が　彼は仕事に忙殺されていた。

ようやく一息ついて出てきたのが先ほどの言葉だ。

もし、今、どっかの魔神にでも攻められたら、城はあっさりと陥落してしまうだろう。

何しろ、ヘルマンは上級魔族ではない。

そのとき、扉がノックされた。

彼が許可を出せば入ってきたのは

「やあ、子爵。ちょうどいいところに来てくれた」

ヘルマンはにこやかな笑みを浮かべて入ってきたコンロンを出迎えた。

「ヘルマン侯爵……ここが採用試験会場でいいのかね？」

「採用試験？」

コンロンの言葉にヘルマンははてな、と首を傾げた。

「あれから考えた結果、サタン様に正直に告げたら暇をもらったのだよ」

ヘルマンはその言葉に思わず笑みを浮かべた。

「では子爵。君はアシユ様の下で働きたいのかね？」

「ああ、私はアシユタロス様の下で働きたい」

「よろしい、では採用だ」

そう言った直後、扉がノックされ、ヘルマンが許可を出す前に扉が開く。

そして、ベルフェゴールが大量のダンボールを宙に浮かしながら入ってきた。

「これ、お願いね。技術部の予算とかその他諸々」

「……ニジ君は元気かね？」

ヘルマンは技術部門の長として頑張っている筈のニジについて尋ねる。

「さっき倒れて死んだように寝てるわ。だらしないわね。たった10年程、不眠不休で研究してただけなのに」

ヘルマンはツツコミたいがやめた。

コンロンはどう反応していいか分からずただ傍観するだけ。

「じゃあね」

ベルフェゴールはさっさと出て行った。

後に残されたコンロンとヘルマンはお互いに顔を見合わせる。

「……侯爵、アレをどうするのかね？」

「……子爵、君を私の秘書に任命しよう。そして、今からアレを処理するぞ」

ヘルマンの言葉にコンロンは冷や汗を流す。

サタンところで気楽に公務員やってた方が楽だったかな、と彼は思ってしまった。

そして、死んだように寝ている筈のニジの部屋では

「姉さん……大丈夫ですか？」

ニジと瓜二つの少女が甲斐甲斐しく看病していた。

「うう……ザジ……私が死んだら……冷蔵庫にあるプリンは墓前に供えて欲しいポヨ……」

苦しげな表情を見せているニジだが、まだまだ余裕がありそうだった。

「あ、さっき食べました」

「な、なんだってえええ！」

ニジはがばつとベッドから起き上がり、ザジの胸ぐらを掴んだ。

「ど、どういうことポヨ!? アレは私が楽しみにとっておいた熟成プリン! アシユ様の威光でもって1週間待ちのところを無理矢理手に入れたのに!」

ちなみにアシユレイはそのことを知らない。

これが彼女の耳に入ればきつとニジをおしおきするだろう。

「とても美味しかったから安心して」

親指を立てるザジに頭を抱えるニジ。

「で、姉さん。アシユ様を紹介してくれるんじゃないの?」

「アシユ様は今、地上でバカンス中ポヨ……しばらくすれば帰ってくる筈ポヨ……」

「じゃあ、しばらくは姉さんのお世話をしてあげるね」

「嬉しいような悲しいような複雑ポヨ……とりあえず、プリンは同じ物を買ってきて欲しいポヨヨ……」

「わかった。明日買ってくる」

「……ところで何で食べたポヨ？」

「そこにプリンがあったから」

ニジはそれなら仕方がない、と認めてしまった。

彼女もまたプリンを愛する者としてその気持ちは痛いほどよくわかる。

「ところで姉さん、まだポヨポヨ言ってるの？ もう実家じゃ、誰も使っていないのに」

「た、確かに私は滅多に帰っていない……というか、こつち来てから一度も実家に帰っていないポヨ……手紙は出していたのだけどポヨ……」

落ち込むニジの背中をさするザジ。

しかし、ニジはあることに気がついた。

「……キャラ作りでウマウマポヨ！」

そんなニジにザジはどうしたものか、困った顔となるのであった。

やってきた者、去る者（前書き）

独自設定・解釈あり

やってきた者、去る者

7月も終わりに迫ったある日、天ヶ崎家に1人の少年がやってきた。

彼の気配を感じ取ったアシュレイが応対に出、彼を客室に通す。

その際、須臾と千奈には絶対に覗くな、と言いつ聞かせた上で、客室全体に結界を張る。

そしてアシュレイは問いかける。

「異界で何か問題が？」

彼女の前には少年が正座して座っている。

彼は白髪を短く切っており、また、学生服というこの時代では存在しないものを身に纏っていた。

「ウエスペルティアの政治家連中が鬼神兵の劣化コピーを他国に輸出してしまい……」

「アマテルは何をしているのかしら？ 彼女に与えた国であった筈よ」

「彼女はその権力を維持することができず、隠居させられてしまいました」

思わずアシュレイは無言になった。

「アシュ様、此度の一件、僕達の不始末です」

そう言い、少年は頭を下げた。

「フェイト」

アシュレイが彼の名を呼んだ。

情が移った6番目と同じように、彼女は3番目にも情が移っていたが故につけた名前だ。

「後始末、あなたならどうする？」

試すように彼女は問いかける。

その問いにフェイトは頭を下げたまま答える。

「アシュレイの目的に沿うよう、戦争を始めさせます」

「いい答えだわ。で？」

「ウエスペルタティアが滅びぬよう裏で動きます」

アシュレイはその答えに満足気に頷いた。

「私はあなたを実働班のリーダーとして、誰よりも信頼し、信用しているの。頑張って頂戴ね」

「ご期待に答えます」

そう言い、彼は頭をあげた。

それを見たアシュレイはゆっくりと立ち上がり、襖を勢い良くあけた。

そこには結界をどうにか解除しようとする千奈と応援する須臾の姿があった。

結界は透明なタイプなのでお互いに丸見えなのだ。
アシュレイと目が合う2人。

「あ、あははは……明日菜の夫やと思つて……」

頭をかきながらそう言う千奈。

「お、お嬢様、これはその、出来心で……」

冷や汗を流しながらそう言う須臾。
にっこりとアシュレイは笑った。

「弁明は聞かないわ」

「聞いてえな！」

「やだ」

にこやかなに拒否して、アシュレイは更に告げる。

「ちょっと修行しようか。あなた達2人と私1人。ほら、余裕でしょっ？」

須臾と千奈はぶんぶんと首を横に振る。

手練の神鳴流剣士の真・雷光剣が効かない相手に、どう戦えとい
うのだろうか。

「あ、そういえば須臾。あなた、神鳴流を習えばいいんじゃないかしら？ 私って剣術とか基本的なことしか知らないし。それに、あの雷光剣とかあなたに似合うと思うの」

「こ、光栄です……。そ、その、それは今すぐでしょうか？」

「私と模擬戦をして真の絶望を味わってからのほうが、きっと怖いものが無くなると思うの」

須臾はがっくりと頂垂れた。

アシユレイが戦っている姿を見たことがないが、それでも須臾には本能で理解できた。

絶対に勝てない、と。

「よ、よーし！ やったる！ あんさんと戦えばもうどんな妖怪を相手にしても笑って戦えそうや！」

千奈はそう自らを叱咤し、折れそうになる心をどうにか堪える。

「ま、私と戦えば地上の妖怪程度じゃ、何とも思わなくなるわ。仏陀とか帝釈天とかその辺クラスでようやく怖くなる程度」

千奈と須臾は耳を疑った。

異教の悪魔であるアシユレイから有り得ない単語が出てきたからだ。

「何でそこで仏さんや帝釈天が出てくるんや？」

「数千年前、彼らと戦ったからよ。あれ、出てない？ 仏教の歴史書とか神話とかそういうのに。三つ首七尾の竜とかって感じで出てるって帝釈天から聞いたんだけども」

千奈と須臾は思わず固まった。

千奈は勿論のこと、須臾すらも知っている。

彼女は暇つぶしに、と幾つもの書物を与えられていたからだ。

その中にはアシュレイの言う、仏教関連の神話や逸話があった。

「えっと、毘沙門天を倒し、阿修羅と帝釈天を食い殺した大きな竜

……ですか？」

「そうよ」

須臾の問いかけにあっさりと肯定したアシュレイに2人は驚愕の
余り叫んでしまう。

その声は家の外に響く程。

「勝てるか！ ボケ！」

思わず逆上する千奈。

「お嬢様、さすがです……！」

対する須臾は何故か目を輝かせてしまう。

彼女にとってはアシュレイが救世主であることは間違いない。

そして、そんな救世主が邪悪な存在であろうが彼女には関係はな
かった。

なぜなら、須臾もまた忌み子とされていたから。

「ともあれ、さっさとやるわよ」

アシュレイはそう告げ、2人を鍛練場である裏庭へと強制転移さ
せる。

「……あなたは少し、丸くなられました」

後ろからそんな声が聞こえた。

アシュレイが振り返ればそこにはほんの僅かに笑みを浮かべたフェイトの姿。

「そういうあなたも、少し変わったんじゃないかしら？ 作った当時なら、そんなことは言わなかった」

「……そうかもしれませんが」

くすくすとアシュレイは笑う。

「でも、いい変化じゃないかしら？ 無口で無表情な前のあなたより、私は好きよ」

邪気のない笑みを彼女はフェイトに向ける。

思わず彼はその白い頬を僅かに朱に染めてしまう。

「ま、フェイト。よろしく頼むわ」

「お任せください」

その声に含まれる僅かな動揺を悟ったアシュレイは再び笑うのだった。

「ふ、ふふふ……！」

妙神山修行場にて、エヴァンジェリンは笑っていた。

苦節数年、齊天大聖に何度も叩きのめされながら彼女は自分に適した技を身につけたのだ。

「まあ、及第点じゃろう」

キセルを吸いながら、そう言う齊天大聖。

彼の及第点は神族にも通用し得るレベルに達したという意味。

それを人間界に限定すればエヴァンジェリンは最高の使い手であった。

「しかし……操系術なんぞ、酷くマイナーなものを選んだのう」

「一度にたくさん敵を殺すにはちょうどいい。チマチマ斬ったり突いたりするのは性に合わん。それにコレが出せないときでも合気術やらその他諸々の武術をお前に学ばされたしな」

そう言いつつ、エヴァンジェリンは指を僅かに動かす。

齊天大聖は飛んできた極細の魔力糸をキセルで叩き落した。

「何じゃ、まだ戦い足りんのか」

「何、ちよっとした悪戯だ。問題はないだろう？」

「お主のそういうところがアシユタロスと似てきておるのう。アヤツの場合は防げない攻撃を仕掛けてきたから性質が悪い……」
「ほう、詳しく教えてくれ」

昔話をねだるエヴァンジェリンに斉天大聖はしょうがないのう、と前置きし、話し始める。

そして、そんな2人から少し離れたところにレイチエルがいた。彼女は坐禅を組み、ただ静かに精神を統一していた。彼女の前には小竜姫がおり、その様子を見守る。

レイチエルもまた自分に適したものを身につけていた。

坐禅をしているレイチエルの背後から、ゆっくりと陣風が忍び寄る。

彼女は自らの間合いにレイチエルを捉えるなり、抜刀した。神速でもって抜き放たれた白刃は猛速で座る彼女に迫り……

鈍い金属音が響き渡る。

「やりますね」

陣風は素直に称賛した。

彼女の刃はナイフ1本で受け止められており、更に彼女の喉元にはナイフが突きつけられている。

そして、それだけに留まらない。

陣風を取り囲むよう、無数のナイフが浮かんでいる。

魔法であった。

彼女が使った魔法は物体を喚び出し、好きな場所に設置する一種の召喚魔法。

この魔法もまた、アシュレイがエナベラに教えたものであった。

「もう問題ない実力です。あとは自己鍛錬に励んでください。そうすればもっと強くなることができるでしょう」

小竜姫の言葉にレイチエルは笑みを浮かべ、全てのナイフを消す。

「コレに加えてあの魔法を組み合わせた体術……恐ろしいです」

陣風は納刀しつつ、そう告げた。

「これでようやくアシュ様のお役に立てる……もはや私は非力ではないのです」

レイチエルは呟いた。

彼女は胸元で手を握る。

今まで、庇護されるだけであったレイチエルは遂に牙を持ったのだ。

もはや彼女に人間は手を出せないだろう。

「あなた方はここを去られますが、またいつでも来てくださいね……
…勿論、そのときは事前に言ってくださいね……」

小竜姫はそう言いながら、つい最近のあの一件を思い出し、コメカミを押さえる。

アシュレイの側近連中やフレイヤが押しかけて上へ下への大騒ぎ。結局、朝まで続く大宴会となつて、しまいにはキーちゃんやサツちやんまでやつてくる始末であった。

「今夜はささやかな送別会でも開くでしょう。妙神山最後の夜じゃ。

ゆっくりと過ぎすがいい」

齊天大聖はそう言い、キセルを吹かしたのであった。

魔王退治への片道切符(前書き)

独自設定・解釈あり。

微工口?あり。

魔王退治への片道切符

「うーん……」

アシュレイは悩んでいた。
何か足りない、と。

天ヶ崎家の居間に寝転がり、彼女はひたすら足りない何かを探していた。

時折、風が風鈴を揺らし、涼しげな音を響かせる。

少し前から須臾はゴリ押しで入門させた神鳴流の道場に通い、千奈は陰陽寮にて仕事をしている中、唯一人、アシュレイは家でのんびりと過ごしていた。

ただ、前述した通りに彼女は足りない何かを探している為に暇ではなかった。

「金……実力……土地……」

ぶつぶつと呟き始めるアシュレイ。

彼女には金も実力も土地もある。

「ベアトリクス……騎士……！」

そのとき、ハツとして彼女は起き上がった。

「そうだ！ 騎士が足りない！ 人間界でも使える兵隊が足りない

！」

叫んだ彼女に塀に止まっていた鳥が「アホー」と鳴く。

「私に忠誠を誓う見た目人間の騎士団が欲しい！」

願望を叫んだ彼女はすぐさま最適なものを模索する。

「オーデインのワルキューレと似たようなのを作ろう。使い魔を作る要領で新しい種族を創っても問題ない。あ、でもアマゾネスも捨てがたいし……どっちも創ればいいか」

というわけで早速アシュレイはどこからともなくノートと羽ペンを取り出し、カリカリと設計図を描いていく。

この設計図とは魂の設計図だ。

これによりその種族が持つ特徴や容姿などの詳細な設定が可能となる。

一般に生命の設計図と呼ばれるDNAよりもより強力に、かつ、永久に変化しないようにすることが可能だ。

アシュレイはワルキューレを金髪碧眼白い肌、高い魔力、狂信的なアシュレイへの忠誠と設定する。

使い魔との大きな違いは種族として創ることで簡単に数を揃えることができる。

アシュレイは更にアマゾネスの設定にとりかかる。

長身、筋肉質、野性的、高い身体能力……そこまで設定して彼女はふと気がついた。

「……両性具有者と女、その2つにしよう」

これまで描いた設計図に多少の変更を加えたところでアシュレイは再び思案する。

「……メイドが数が足りなかったから、奉仕する種族もついでに創ろう。あ、それと数がいっぱい欲しいから……」

アシュレイは再びワルキューレとアマゾネスの設計図に多産となるよう変更を加えた上でメイド種族の設計図を描いていく。

「んー、アマゾネスの亜種としてオークも創ろう。アマゾネスよりももっと筋肉質で……」

鼻歌混じりにアシュレイは魂の設計図を描いていく。

こういった種族の創造ができる彼女は文字通り、造物主であった。

「あ、ワルキューレだとパクりって訴えられるから、戦乙女族ってことにしておこう」

ただ単に漢字に変えただけであるが、アシュレイ的にはそれで押し通せると判断できたので何も問題なかった。

そして30分後、アシュレイはまさに「わたしのかんがえたすこ

い（性的にも）しゅぞく」の設計図を全て完成させ、それをテレジアの下へと送った。

あとは彼女が暇をしている連中と共に勝手に創ってくれるだろう。やり方は彼女達も知っているので何も問題はなかった。

これからしばらくして、アシュレイは出来上がったこれらの種族と肉欲の宴を繰り広げるのだが、それはまた別のお話であった。

「あー、暇だわー」

一仕事やり終え、再び畳に仰向けに寝転がってアシュレイは天井のシミを見つめる。

京の街はアシュレイが来てからというもの、平穏そのもの。

どんな妖怪も、急に現れたアシュレイの強大な気配を感じ取り、人間を食べようと京の街にやってこなくなった。

須臾の例を見れば分かるように、強い人外は隠蔽していたとしても、他の人外の気配に対して非常に敏感だ。

頭ではなく本能で危険を感じ取ってしまう。

そして、何よりも京の街に入るまではアシュレイはその隠蔽を最低レベルにしていた。

妖怪がビビってしまったても無理はない。

おかげで京都警邏の神鳴流剣士や陰陽師は暇を持て余している、と千奈はボヤいていた。

「……そうだ、東へ行こう」

唐突にアシュレイは閃いた。

彼女は再びがばっと起き上がると、どこからともなく便箋と羽ペンを取り出し、それにさらさらさら、と書き置きをしたためる。

『ちよつと東へ行ってくる。夕飯までには帰る』

非常に心配になる文章だが、アシュレイだから大丈夫であった。

そんなわけで彼女は縁側から庭に出、そこから一気に空へと舞い上がったのであった。

ぐんぐんと空を東へ飛び、箱根の山を超えたところでアシュレイ

は思わず目を疑った。

彼女の前にはただ広い関東平野が広がっている。

それはいい。

だが、その関東平野で一本、突き出ている巨大な木があった。

アシュレイの前世の記憶には関東に天を衝く神木があるなんて聞いたこともない。

興味津々で彼女はその大木へと向かった。

「……これは凄い」

アシュレイは思わず呟いてしまう。

彼女がいるのは大木のすぐ傍。

成人男性が数人両手を広げてもなお、収まりきらない程にその幹は太い。

そして、そこから放たれる魔力もまた。

「神族がよくこんなものを放って置いたものね……」

と言いつつ、彼女は解析魔法を使用して気がついた。

この木は地球の霊脈から直接、魔力を吸い上げ自らの養分としている。

そして、木の生存本能でも言うべき、外敵から自身を守る為に、自身の内包する強大な魔力でもって強固な結界を構築してしまっていることに。

「結界の効果は認識阻害……なるほど、これじゃ生半可な連中じゃ存在に気づけもしないわ」

基本、地上の様子を見守るのは下っ端の役目である。

主神や魔王といった連中は滅多に地上に姿を現さないどころか、その様子を見ることもしない。

ならばこそ、発見できなくてもしょうがない。

さてどうしたものか、とアシュレイは思索し……すぐに結論が出た。

「いざという時の為に隠しトンネルがあってもいいわ」

彼女の考えは簡単だ。

この木にある魔力を使い、いつでも地上に簡単に悪魔が出ることができるよう、ここにゲートを開き、地獄と繋げてしまうこと。

勿論、木には一切の傷をつけたりはしないというよりも、そうする必要がない。

しかしここで誰かに通信でもすれば神界に察知されてしまうかもしれない。

ならばこそ、今は時期を待つべきであった。

「念の為、人間が悪戯しないようにトラップを仕掛けておきましょうか」

そして、アシュレイは木の周辺に幾つもの強制転移陣を描いていく。

踏んだ瞬間に発動し、1秒後には地獄にあるアシュレイの城に到着している。

魔法使いをはじめ、色んな輩にとってこの木はお宝であるが、彼らは喜び勇んで走っていき、その結果、魔王の居城にいるという笑えない事態に陥るだろう。

悪魔^{II} 邪悪としている連中 言うまでもないが、これが普通に、アシュレイは自分を退治できる機会を与えるというとても素晴らしい善行であった。

2時間掛けて隙間なく強制転移陣を描いたアシュレイは最後にその木に世界樹と名付けると、その場を後にした。

彼女が飛び去った後、僅かに世界樹が発光したが、誰もそれを知る者はいなかった。

そして、アシュレイは京都に戻ってきた。

時刻は午後3時過ぎであり、まだまだ時間はある。

やはり暇になった彼女は久しぶりに鍛錬でもしよう、と京都郊外の森へと繰り出した。

「えい」

いい加減に振った刀からは真空波が巻き起こり、木々を切り裂いていく。

「おりゃ」

やっぱりいい加減に振り下ろした刀からは真空波が巻き起こり、地面を切り裂いていく。

適当にやってこの威力であった。

ちなみにこの刀、そこらの鍛冶屋で二束三文で売っていたものであり、その品質はよろしくない。

彼女は壊れないよう刀の時間を止めた上で慎重に扱っていた。

「私って爪楊枝一本持っただけでも最強だから……」

そう言うアシュレイはちょっとだけ寂しかった。

彼女は長い年月を勉強に修行に、と過ごしてきた。

例え、齊天大聖に少しだけ教えてもらった武術であったとしても、いい加減にやるだけで有り得ない威力を出せてしまう。

強くなる喜びというのを、彼女はもはや感じる事ができないのだ。

「確か……」

アシュレイは神鳴流剣士と対峙したときのことを思い出す。

あのとき、使っていた剣士の技に斬岩剣というものがあった。

「気づってヤツを刀に纏って攻撃するのよね」

精神生命体であるアシュレイをはじめとした神魔族に気を使うこ

とができるかどうか怪しかった。

「……分からないなら聞けばいいじゃない」

ちよつどいいことにアシュレイは武術の神様と知り合いであった。どうせなら、と斉天大聖ではなくもう1人の知り合いに発信した。

『おお、アシュタロスか。久しぶりだなあ』

通話相手は帝釈天。

神魔交流会の時、密かに連絡先を交換していたのであった。

「ちよつと聞きたいんだけど、神魔族って気って使えるの？」

『気？ 人間が使っているヤツか。使えるぞ。あれは生命エネルギーの燃焼であるからな。精神生命体である我々も使える』

「魔力とか神霊力とかと反発はしないの？」

『反発するが、ちよつとしたコツで合成させて使うこともできる……というか、先の大戦で使っていたんだが……むしろ』

「そうなの？ 気にならなかったんだけど……というよりか、今、あなたのところから聞こえてくる喘ぎ声の方が私としてはとても気になる」

『今、ちよつど妾とやっていたのだ。無理を言うな。陣風の体はどうだった？ やったんだらう？』

「よかったわ。受け体質で、あんなに乱れるなんて……」

『羅刹女は美女が多い。気に入ったのがいれば口説いて構わんぞ』

「それは有り難いわ」

『あと、お前は魔力だけの方が強いと思うぞ。先の大戦は魔力だけしか使ってなかっただらう？』

「使ってなかったわ」

『今のお前はわしよりも魔力を持つてる。宇宙全てを覆い尽くすくらいだな。そこに多少の気が加わったところで大して変わらん』
「それもそうね。教えてくれてありがとう」

アシュレイは通話を切り、気の代わりに魔力を刀に乗せてみよう
と思い立った。

「……でもこんな刀で私の魔力に耐え切れるかしら？」

そう思ったが、彼女は物は試し、とやってみた。

時間を止めてあるから耐えられる筈だ、という希望的観測のもと
に。

そして、魔力を込めた瞬間に刀は砕け散った。

込める魔力量が多すぎたのだ。

というよりか、ただの刀に魔王である彼女の魔力に耐えるという
のが酷な話。

「壊れないように扱うなんて武器にならないじゃないの」

アシュレイの言葉ももつともだ。

「色々あって忘れてたけど、もう隠居したヤツから武器をもらって
もいいわね」

彼女にとって、スルトのレーヴァティンは非常に魅力的に感じた。
剣の形をしているが、持ち主の意思に応じて様々な武器に変化で

き、魔力を炎に変換できるというオプションもついている。

だが、いきなり頼んでもさすがにもらえない。

地道に交渉するとして、当面はどうしようか、と彼女は考え……
再び帝釈天に通信を繋いだ。

『どうした？』

「鍛冶の神に私の魔力とかに耐えられる刀を造って欲しいの」

『何だ、地獄にはまともな鍛冶屋もないのか？』

「科学者はいるけど、鍛冶屋は聞いたことがないわ。それに得物を使った私との戦闘はあなたもしたいんじゃないか？」

アシユレイの言葉に帝釈天の心は決まった。

『わかった。知り合いに頼んでおこう』

「よろしくね」

アシユレイは通信を切った。

これから数年後、一振りの刀が彼女の下に送られることになる。
それは黒い刀身をした「ひな」という銘の刀であった。

復讐の始まり（前書き）

独自設定・解釈あり。

微工口と近親相姦あり。

復讐の始まり

「ふはははは！」

エヴァンジェリンは笑っていた。

そんな彼女にやれやれ、と溜息を吐く緑髪の小柄な少女がいた。

時はあっという間に過ぎ去り、年が明けた1390年の初春。彼女とレイチエルは再び加速空間で鍛えられた。

その際、2人共、部下の扱い方や指揮官として必要な心得なども叩き込まれた。

そして、ついにアッシュレイがGOサインを出した。

6月22日をもって、地上侵攻作戦　バルバロッサ　が発動される。

総兵力20万。その全てが吸血鬼だ。

アッシュレイはエヴァンジェリンが出てくる前から地上侵攻をやってみよう、と考えていたのでちよこちよここと集めていたのだ。

全員を短時間で吸血鬼にするにはどうすればいいか、という問題はエヴァンジェリンの記憶にあったグレゴールの魔法を改良することで簡単に解決している。

彼らは全員男であり、女は一切いない。

アッシュレイからすればちょうどいい使い捨ての駒であった。

バルバロッサの前哨戦としてマクダウエル家を滅ぼす。

20万の吸血鬼でもって。

エヴァンジェリンの家系は元々はアイルランドであったのだが、そこでの勢力争いに破れ、1200年代にドイツへと逃げてきたのだ。

ドイツでそれなりの勢力を誇っている彼女の家を潰すことは復讐を果たすだけでなく、地上侵攻の狼煙にちょうどいい。

まあ、せいぜい人口20000人程度のちっぽけな城下町とちっぽけな城しか持たないマクダウエル領に20万の大軍は物理的に入りきらない可能性があるが。

「どうした、我が従者レイよ」

「いや、もういい……」

笑い続けていたエヴァンジェリンはようやく近くにいる自分の従者が妙な視線を送っていることに気がついた。

緑髪の少女の名はレイ。

自分の身の回りの世話する者が欲しい、とエヴァンジェリンが創り上げた使い魔だ。

チャチャゼロとアシュレイからとったレイのどちらかで悩んだエヴァンジェリンであったが、最終的にレイということに決めた。

女の子にチャチャゼロという名前はないだろう、とエシユタルからツッコまれたこともある。

「……ふむ、ちょうどいい余興を思いついたぞ」

エヴァンジェリンは唐突に閃いた。
その閃いたことをアシュレイに告げる。
彼女は須臾に地獄を見せよう、とこちらに戻ってきているのだ。

数秒と経たずに返事があり、アシュレイは問題ない、とエヴァンジェリンの思いつきを許可した。

「レイ、私、結婚するんだ」

「ご主人、脈絡が無さ過ぎてわけわかんないぞ」

「ふふふ……何、アシュ様も身を固めることだ。ならば私もちようどいい……」

くっくっく、と笑う様はまさに悪。

順調に成長しているようだ。

「というわけで結婚相手に挨拶してくる」

「ちよ、まっ」

レイが止めるよりも早く、エヴァンジェリンはゲートを開いて地上へと転移してしまった。

そして、エヴァンジェリンはやってきた……否、戻ってきた。
彼女の故郷に。

認識障害魔法を自身に掛け、エヴァンジェリンは城へと忍びこむ。城には様々な結界が張られているが、今の彼女からすればそんなのは子供騙しも同然だ。

簡単に改竄し、悠々と城の中を闊歩しつつ、情報収集に努める。下女も下男も兵士も誰も彼女に気づかず、様々な話をしている。そこで彼女は幾つかの気になる情報を2つ得た。

弟が生まれて以来、父と母が性行為をしていないことと、最近、母が老いを気にしていることだ。

やがてエヴァンジェリンは自分の部屋はどうなっているか気になる、見に行けばそこは物置と化していた。

彼女はやれやれ、と溜息一つ、目的である花嫁の下へと向かう。

花嫁は自室で鏡と向き合っていた。

彼女は目元にできた皺を見、溜息を吐いていた。

12年前は皺一つなく、またその美しかった金色の髪はところどころ傷んでいた。

老いは魔法使いであっても逃れ得ぬものなのだ。

エヴァンジェリンはそんな花嫁にくつくつと笑うと、部屋全体に強固な結界を張った。

だというのに花嫁はまだ気づかない。

魔法使いである筈なのに、だ。

それもその筈、エヴァンジェリンの技量が人間と比べるのも愚かな遙かな高みにあるからだ。

一流は魔法を使ったことを他者に気づかせない。

「やあ、久しぶりだな。母様？」

エヴァンジェリンは認識障害を解き、親しげにその声を掛けた。

瞬間、花嫁　ソフィアは後ろを振り返り、驚愕の表情を浮かべた。

「私を死んだと思っていたのか？　悪いが、私はこの通りピンピンしているぞ？」

そう言い、エヴァンジェリンは笑う。

「あなたは悪魔共に……！」

ソフィアの言葉にエヴァンジェリンはあざ笑う。

「グレゴールの城を襲ったのは誰だと思っ？　レイチェルの信仰していたアシュタロスだ」

エヴァンジェリンがその名を言った瞬間、室内だというのに底冷えのする冷気が漂い始めた。

「そんな……そんな馬鹿な！　聖書や神話に出てくる上位悪魔や神は有史以来確認されていないわ！」

「悪いが、事実だ。まあ、その他にも色々あったが、もはや些末なことだ」

エヴァンジェリンが一步近づく。

瞬間、ソフィアは魔法の射手を彼女目がけて放った。

そして、ソフィアは絶望を目の当たりにした。

「ん？ 何かしたか？」

獲物を蹶るように嗜虐的な笑みを浮かべ、エヴァンジェリンは問いかける。

確かに魔法の射手は彼女に直撃した。

だが、それだけであった。

彼女の皮膚を傷つけることすらできなかったのだ。

「さて、母様……いや、ソフィア。今日、お前に会いに来たのは他でもない……」

エヴァンジェリンはそう言いながら、ソフィアの目の前までやってくる。

「父様とは私の弟が生まれて以来、やっていないのだろうか？」

「な、何を……」

怯えるソフィアの頬にエヴァンジェリンはその手を当てる。

「それに、お前は最近、老化を気にしているようだな。可哀想だ。そのドレスの下で雌の体を腐らせていく……だが、私ならお前を満

足させられるだろう。両性具有にもなれるのでな……」

そう言ったエヴァンジェリンは今度はソフィアの耳に口を寄せ、囁いた。

「吸血鬼にならないか？ 老いも病もない。私は今、恐怖公の下にいるのだ。財産もお前の夫よりは余程ある。お前にもっと上等な絹のドレスを着せ、美しい宝石を纏わせることができる」

エヴァンジェリンはアシュレイからテレジア達と同じように給料が支払われている。

これは他の女魔族　淫魔を除く　も同じことだ。

エヴァンジェリンの月給を現代の日本円に換算すれば350万円にもなる。

これに夏と冬のボーナスが1200万程支払われる。

ちなみに、待遇の悪さに墮天してきたフェネクスの月給は4300万円だったりする。

ソフィアはまさに悪魔の囁きに心が揺れていた。

吸血鬼になるなんて穢らわしい、と思う反面、自分の悩みを全て解決できるとも彼女は理解できた。

エヴァンジェリンはその心の揺れを見透かしたように更に言葉を紡ぐ。

「よく考えてみる。吸血鬼になったことで短所はどこにある？ アシユ様の血には劣るが、私の血をお前に与えれば日光も流水も銀も十字架も効かない吸血鬼となれるだろう」

「で、でも……」

なお言い募るうとするソフィアにエヴァンジェリンはただ告げた。

「お前のそれはただの感情的な嫌悪でしかない。別に構わないだろう？ 何を躊躇するのか？」

そう言い、エヴァンジェリンはソフィアの反応を見るべく、耳元から顔を離れた。

ソフィアの碧い瞳とエヴァンジェリンの紅い瞳が交差する。そして、エヴァンジェリンはゆっくりと顔を近づけていく。

ソフィアは何をされるか悟った。

だが、彼女は拒否をしない。そう、彼女は決断したのだ。

やがてエヴァンジェリンは実の母親であるソフィアに口づけた。

それだけに留まらず、エヴァンジェリンは彼女の口内へと舌を侵入させ、蹂躪する。

その情熱的なキスに久しく忘れていた雌としての昂ぶりをソフィアは感じ、エヴァンジェリンの舌に自らのものを絡みあわせる。

室内に水音が木霊した。

そして数分後、2人はどちらからともなく離れた。

「……一つだけ聞かせて欲しい」

ソフィアの言葉にエヴァンジェリンは頷き、肯定する。

「何故、私を殺さずにそうするの?」

エヴァンジェリンはある意味予想通りの問いに笑みを浮かべて答える。

「これが私の復讐になる。お前は自分の欲望の為に嫌った私と同じところに堕ちたのだ」

そこで言葉を切り、ソフィアの反応を見つつエヴァンジェリンは更に続ける。

「精神的に屈服させるのは肉体的にそうするよりも遙かに気持ちが良い。ソフィア、お前は最後に父様の前で私のものとなったことを宣言してもらおう……いや、私の上で腰を振るのを見せるのもいいかもしれない」

エヴァンジェリンはくつくつと笑い、そして問いかけた。

「お前は私のものとなることを誓うか?」

最終確認だ。

だが、エヴァンジェリンは確信していた。
もうソフィアの心は決まっている、と。

それは見事に的中していた。

ソフィアは数秒の間をおいて、ゆっくりと告げる。

「私、ソフィア・マクダウエルはエヴァンジェリン・マクダウエルの永遠の伴侶となることを誓います……」

エヴァンジェリンはあまりの愉快さに思わず大きな声で笑ってしまふ。

自分をあれだけ嫌悪し、叔父に売った相手が自分に尻尾を振って伴侶となることを誓ったのだ。

こんな痛快なことは滅多にない。

やがて笑いが収まったエヴァンジェリンは手近な椅子に座り、靴と靴下を脱ぎ、その白い足を露にする。

「私の足を舐めろ」

その言葉にソフィアはゆっくりとエヴァンジェリンの前に座った。そして、彼女は両手で両足を抱えるように持ち、ゆっくりと口をつけ、舐め始めた。

「今、お前は何歳だったか……12年経っているから……ああ、40歳か。なら、お前を若返らせなければならぬ。18歳……い

や、16歳程度でいいか」

ソフィアは思わず舐めるのを止め、顔をあげた。
その表情は不安と喜びが入り交じったものだ。

「心配するな。若返り薬というものがあってな……ああ、そういえば不老不死の薬もあるな。ふむ……そうすると別にお前が吸血鬼になる必要もないか。ソフィアの碧い瞳が紅く染まるのも中々いいが、勿体無くもある」

どっちがいい、とエヴァンジェリンは問いかけた。

「あなたのお好きなようにしてください」

ソフィアの言葉にエヴァンジェリンは満足気に頷く。

「吸血鬼になると若干味が落ちると聞いた。ならば不老不死で人間のままでいいか」

そんなエヴァンジェリンの声を聞きながら、ソフィアは再び奉仕を再開したのだった。

我慢できなかった彼女（前書き）

独自設定・解釈あり。

微工口あり。

地上侵攻後までお預け……だった筈なのに、アシュレイは我慢できなかつたようです。

我慢できなかった彼女

ある日、アシュレイはエヴァンジェリンを呼び出した。

彼女が呼び出した場所は天ヶ崎家……ではなく、地獄にある城の彼女の寝室だ。

エヴァンジェリンはソフィアにはマクダウエル領攻撃の際までは何事も無かったかのように振舞うよう指示し、地獄に戻ってきていたのでちよつどよかった。

エヴァンジェリンが部屋に入るとアシュレイはノースリーブ姿で下は何も履いていなかった。
色々丸見えである。

「何か用か？ 用事は分かっているが」

エヴァンジェリンの言葉にアシュレイはくすくすと笑う。

彼女は地上侵攻後までとっておこうかと思つたが、何が起こるかわからないのが世の中。

故に今のうちに美味しく頂いてしまおうという魂胆だ。

我慢が足りないと言えるが、アシュレイだから仕方がない。

エヴァンジェリンも手を出されない筈がない、と覚悟していただけに動揺はない。

「レイチエルとやったのは本人から聞いてるわ。かなり喘がせたみ

たいじゃないの」

「ああ。中々、女の体もいいものだな」

そう言うエヴァンジェリンにアシュレイはすすす、と音もなく近寄り、その頬を舌で舐める。

「でも、女の快楽を味わったことはないでしょう?」

「あいにくな……レイチエルに処女をやるうかと思っただが、敢えてお前の為にとっておいた。お前が私を狙っていることは修行しているとき、エシユタルから聞いた」

「ちゃんとつておいてくれるエヴァはいい子じゃないの」

そう言うアシュレイにエヴァンジェリンは笑みを浮かべる。

「初めては痛いと思うが……お前ならそんなものを感じることもなく、極上の快楽を味わわせてくれるんだろう?」

「私にかかれば処女は1分で痴女に化ける。あなたがその小さな体で精一杯喘ぐ姿は……」

好色な笑みを浮かべるアシュレイにエヴァンジェリンはゆっくりと衣服を脱いでいく。

一糸纏わぬ姿となった彼女を見、アシュレイは感嘆の息を吐いた。

「上等な人形ね。本当に可愛らしい」

「その可愛らしい体を貪り食うのか?」

「あら、期待しているんじゃない?」

「期待していない、と言えば嘘になるな」

アシュレイはエヴァンジェリンを抱き寄せ、その背中に手を回す。交差する紅い瞳。

「どろいづのが好み？」

「最初は優しく、その後は激しく獣のように」

その言葉にアシユレイはエヴァンジェリンの可愛らしい口に自らのものをつけた。

そして、数秒と経たずにそのまま互いに貪るように激しいキスをしつつ、ベッドへ倒れこんだのだった。

「あー、斬りてー」

レイは城内をぶらついていた。

エヴァンジェリンに身の回りの世話という目的で創られた彼女。

その身の回り世話には主人が出るまでもない戦闘も含まれるが故に、レイはそれなりに危ない使い魔に仕上がっていた。

具体的には肉を切り裂き、血を浴びることに快感を覚えるのだ。

そんな彼女の視界にフェネクスが入ってきた。

レイは極自然な動作で剣を抜き放ち、瞬動で間合いを詰め……

「……そりゃねえぜ」

鎖の形をした炎にレイは拘束されてしまった。

彼女の肉が焼ける匂いが周囲に漂う。

「今は気分ではない。また今度な」

フェネクスはそう言い、レイの頭を撫でるとさっさとその場を後にしてしまった。

彼女が見えなくなってから数秒後、レイを拘束していた炎は掻き消えた。

自由になった彼女は焼けた箇所を復元しつつ、再びぶらつき始めたのだった。

「アシユ様……」

レイチエルは自室でアシユレイに祈りを捧げていた。

朝昼晩の礼拝は彼女の日課だ。

やがて祈り終えたレイチエルはあることに気がついた。

「……アシユ様の為の教会があってもいいような」

思い立ったが吉日とばかりにレイチエルは早速、テレジアの下へ向かった。

執務室ではテレジアがカリカリとペンを動かしていた。

書類仕事かと思いきや、そうではない。

彼女の事務処理能力はサツちゃんが羨む程に凄まじい。

「……ふふ」

テレジアは手を一度止め、できつつあるものを見て微笑む。
あと数ページで完成する。

彼女が作成しているのはいわゆる同人誌といわれるものだ。

題材はアシユレイを調教しようというもの。

嫌がるアシユレイを快楽で虜にし、最後には奴隷にってしまうまでを描いた数百ページに及ぶ、もはや同人誌の枠を超えたものであったりする。

だが、非公式なので同人誌である。あくまでも。

勿論、奴隷となったアシユレイとの生活を描いた第二弾もテレジアは構想中である。

少し溜まったので、適当な淫魔でも呼んで発散させようか、と彼女は思い始める。

非常に濃厚なものを描いている彼女にとって、性欲が溜まるのもまた速い。

彼女の執務室の扉がノックされたのはそんなときであった。

「何か用か？」

入ってきたレイチエルにテレジアは問いかけた。

彼女は重々しく頷き、用件を告げる。

「テレジア様、アシユ様を祀る教会とか神殿があってもいいのではないのでしょうか？」

その言葉にテレジアは確かに、と思わず頷いていた。

先の戦争の英雄として地獄全土にその名が轟いているアシユレイである。

その功績や逸話などから彼女を崇拜する者は多い。

神社とか神殿とかそういうのを造って、お布施を頂けば新たな財源となる。

「わかった。早速関係各所に連絡しておこう……ところで、淫魔をついでに呼んできてくれないか？ できればアシユ様と似た子をな」

ただやるだけでなく、構想中の第二弾の取材も兼ねているテレジ

アであった。

エヴァンジェリンとの情事を終えたアシュレイはベッドでぼーっとしていた。

彼女の横にはエヴァンジェリンがその首筋に顔を埋め、彼女の血を吸っている。

「……エヴァ」

呼ぶ声にエヴァンジェリンは首筋から顔を離した。
その紅い瞳がアシュレイを見つめる。

「ソフィア、私にも貸してくれない？」

「私の妻を寝取るつもりか？」

そう言うエヴァにアシュレイはくつくつと笑う。

「元々あなたが最初に寝取ったんでしょ。まあ、気が向いたらでいいわ」

「気が向いたらな」

「ところでエヴァ。私って友達が極めて少ないんだけど、どう思う？」

「お前に友達はあるまいないが、部下と女はいっぱいいるな」

「魔王に対してお前呼ばわりとか……」

「今更だろっ」

そう言い、エヴァンジェリンはゆっくりと顔を動かして、アシュレイの頬をその赤い舌で蛇のように舐める。

「私もあなたも誰かに勝手にそうされ、そうなった後に開き直ったというところまで同じ」

エヴァンジェリンはアシュレイがどうしてそうなったのかを未だ知らないが、その言葉でだいたいの推測がたった。

だが、彼女は問うことをしない。
必要とあらば……いや、アシュレイなら気まぐれで話してくれるだろうし、何より知ったところで関係が変わるわけでもない。

エヴァンジェリンはアシュレイの部下であり、ついさつき、妾の1人となった。

「というか、お前、今、何人の女がいるんだ？」

「……淫魔が1500万で、その他諸々で……2500万人くらい？ もっといるかも」

「無限の性欲だな」

呆れ顔のエヴァンジェリン。

おそらくこんなたくさんの女をモノにしているヤツは歴史上初めてだろう。

「ああ、そうだ。ニジの妹と新しく入った子爵に会わないといけな
いんだっただ」

「私を置いていくのか？」

「来たいの？ ニジの妹はともかく、子爵の方はヘルマンの友人だからでむさ苦しいおっさんよ？」

エヴァンジェリンは数秒迷い

「やめておく。暇だから地上探索でもしてくる」

そんな彼女にアシュレイはくすくすと笑い、その唇を奪つ。

突然のことにもエヴァンジェリンは驚かずにその求めに応じる。

暫しの間、部屋に水音が木霊する。

そして数分後、2人は離れた。

887

「ところでいいの？ お前の花嫁が嫉妬するんじゃない？」

「フレイヤならいいわ。あの子、こういうことを教えたら、怒るどころか混ぜてって言ってたし」

「あの美しさで浮気も構わない……最高じゃないか」

アシュレイは胸を張り、告げる。

「おまけに義父や義兄によれば彼女は尽くすタイプと聞くわ。甲斐甲斐しく色々だね」

「……今、私は後悔している。私も女神を嫁にすれば……」

「というか、私の部下で結婚する予定があるのってあなたくらいなものなんだけどね」

そう言うアシュレイにジト目でエヴァンジェリンは告げる。

「女は全部お前のものなんだろう?」

「そうよ。でもね、結婚はしないけど、ヤッてる子はいっぱいよ? エシユタルとテレジアだったり、ディアナとシルヴィアだったり

……」

「風紀の乱れ甚だしいな。城にいるだけで相手には苦勞せん。お前の部屋に来る前に私は4人の淫魔と5人の女魔族に誘われたぞ。断つたら別のヤツを誘ってその場でやり始めた」

「そういうのを推奨しているもの」

アシュレイはゆっくりとベッドから起き上がろうとするが、それをエヴァンジェリンは押し留める。

「お前の用事は緊急の用事か?」

行動とその言葉でアシュレイにはエヴァンジェリンが何を欲しているか理解できた。

初めて地獄に来たばかりのあの少女が今やこんなにも淫らな存在になっている、とアシュレイはより興奮する。

アシュレイは告げる。

「別にいつでもいいわ」

「なら、飽きるまでしよう。女の快樂をもっと私に教えて欲しい」

挑戦的な視線を向けるエヴァンジェリンに、アシュレイは不敵に笑って返す。

「激しくいくわ……」

それから数分後、部屋に嬌声が響き渡るのだった。

変わらない彼女達(前書き)

独自設定・解釈あり。

微エロ・マニアックなものあり。

変わらない彼女達

アシュレイがエヴァンジェリンを食べた後、2人の関係に変化があった。

彼女達は妙に仲が良くなったのだ。

それも当然なのかもしれない。

彼女達の境遇は非常に似通っているからだ。

どちらも自分の意志とは関係なしに人外となり、その後に関き直った。

同じ境遇のものに対して、親近感を抱くのは極自然なこと。

そんなわけで、いつのまにかアシュレイとエヴァンジェリンは親密な関係となっていた。

だが、アシュレイは相変わらずアシュレイであり、エヴァンジェリンは相変わらずエヴァンジェリンであった。

そして、そのアシュレイはフレイヤの膝枕にご満悦であった。彼女はその膝に頬ずりし、フレイヤの匂いを胸いっぱい吸い込む。

そんなアシュレイにフレイヤは微笑を浮かべつつ、その翼や頭を優しく撫でる。

地獄……ではなく、地上のどこかで2人は穏やかな時を過ごして

いた。

2人の結婚式は100年後、人界で行うことが決定したのが昨日の話。

そして、2人の婚約を正式発表したのが昨日のこと。

地獄では祝福する者がほとんどであったが、神界では祝福する者よりも嫌悪する者が多かった。

神界で祝福する者は主にフレイヤにちよっかいを出された輩であり、嫌悪する者はフレイヤの本性を知らない若い神族達。

若い連中からすれば女神フレイヤとは高嶺の花でありつつも、憧れの存在。

そんな存在が地獄の魔王の嫁になるなんてけしからん、とそういうわけであった。

ちなみにキーヤンやサツちゃんがデタントの象徴などについて今回の話をそういう風に宣伝していたりする。

利用できるなら何でも利用してしまえ、という魂胆だ。

勿論、アシュレイもやられっぱなしではなく、しっかりと婚約祝いとして2人から太陽系内で地球と月以外の惑星の永久私有地とすることを約束させた。

火星の異界への余計なちよっかいをかけられぬよう、そして海王星などの資源採掘を邪魔されぬようにする為だ。

神魔族としては重要なのはエデンである地球、そして魔力を無尽蔵に発している月と生命の源たる太陽なので他の惑星は特別重要という程ではない。

基本的に神魔族共に通常次元（Ⅱ地球があったり、人類が存在す

る次元）に領土を持つとはしない。

領土を持ったところでそういうことができる存在である魔神や魔王、主神などは意味がないのだ。

基本的に彼らは金も力も有り余っている存在。

ならば別にそんな面倒くさいことをしなくても、とそういう風に思うのが普通。

それ以下の神魔族ではやろうとしても領土を維持できる戦力が足りない。

何も攻撃してくる相手は人間に限らず、神族や魔族が攻撃してくることもありえるからだ。

さて、アシュレイは普通とは逆であり、リゾート地として、また人類への干渉の一環として、そしてさらなる金儲けの為に領土を持つとうとしている。

この辺は人間から成った存在であるが故の思考だ。

「フレイヤ……」

アシュレイが名を呼べばフレイヤはにこやかな笑みを浮かべる。

手を伸ばし、アシュレイは彼女の白い頬に優しく触れ、その感触を楽しむ。

シミひとつ、すべすべとした綺麗な肌だ。

「あなたが私の妻なのね」

その言葉にフレイヤはゆっくりと頷く。
アシュレイは深く息を吐いて、そしてがばっと彼女に抱きついた。
そして、彼女の体温と匂いを感じつつ、咳くようにアシュレイは
言う。

「私の嫁……私のもの……誰にも渡さない……」

その言葉はフレイヤの耳にもしっかりと聞こえた。
こんなことを言われて嬉しくならない女はいない。
それはフレイヤも同じで……

「アシュ様……可愛い……」

フレイヤはアシュレイの背中に手を回しつつ、その白い首筋につ
いばむように口づけをしていく。

彼女が口をつけたところには赤い痕。

自分のものだ、とマークするかのようにつレイヤは次々とその印
をつけていく。

彼女に対抗するかのようにつ、アシュレイもまたフレイヤの首筋に
印をつけていく。

しばらくそんなことをしていると、お互いに昂ぶってきてしまい
……いつも通りの展開に発展するのであった。

お気楽なバカップルとは裏腹に、エヴァンジェリンは執務室で真剣に悩んでいた。

彼女の目の前には世界地図。

現代でいうならばドイツのザルツブルク近郊にあるマクダウエル領からどういふ風に侵攻するか。

地上侵攻の総司令官であるエヴァンジェリンは決めねばならなかった。

「……というか参謀の1人や2人、つけてくれてもバチは当たらんだろう」

「ご主人、私がいるじゃないか」

「斬ればそれでいいだけの脳筋は戦争にいらん」

そう言うエヴァンジェリンに笑うレイ。

「愛しき故郷を滅ぼした後は東を攻めよう。30年くらい掛けて東を平定した後はフランスを攻めて、その後はイギリスだな」

「30年も掛かるのか？ めんどくせーな」

「アシユ様からの要望でな。このカフカス山脈にあるバクーとかいうところを絶対に抑えろ、と。転移魔法も駆使するから実質的には数年もあれば東の人間の国は全て終わるだろう」

エヴァンジェリンは一度言葉を切った後、レイに視線をやりつつ

告げた。

「とりあえず、お前は掃除でもしてろ」

「はいはい」

レイはモップとバケツをどこからともなく取り出して、掃除し始めた。

「東を効率的に攻めるにはモスクワ大公国を潰してから南下するのが手っ取り早い。その後、バクーを落とし、山を超えてアラビア人を潰せばいい」

食料などは現地調達できるのが吸血鬼の強みだ。

またいざとなれば地獄から直接必要な物資を転移魔法で送ってもらえばいい。

補給線を考えないで済むのは非常に楽であった。

ブツブツとエヴァンジェリンは呟く。

彼女の呟きを聞きつつ、レイは黙々と掃除を続けた。

「……あの、テレジア様」

「ん？」

「どうして私が総責任者になっているのでしょうか？」

レイチエルは少し前、テレジアに神殿などを造っては、と提案した。

そんな彼女はいつの間にか神殿建設の総責任者になっていた。

突然辞令が届けられたレイチエルは困惑しつつ、テレジアに疑問をぶつけにきたわけである。

「お前のやりたいようにやればいい」

そう返し、テレジアは自身のスカートの中にいる淫魔の頭を両手でしっかりと固定する。

そして彼女は数秒程、僅かに身を震わせる。

レイチエルは何をしているのか容易に理解できるが、特に何も言わない。

それが日常であったからだ。

「私は新参者なのですが……」

「だが、アシユ様を慕う心は確かだ。誰も文句は言わないし、言わせない」

水音がスカートの中から聞こえてくる。

淫魔の頭が上下しているのが傍目に分かった。

「そうですね……分かりました。やらせていただきます」

レイチエルは重々しく頷く。

そんな彼女にテレジアもまた頷き返す。

「ところでテレジア様……」

じーっとテレジアの動いているスカートを見つめるレイチエル。

目の前でそんな光景を見せられたら、彼女としても昂らざるを得ない。

彼女はアシュレイとの情事にもっとも興奮するが、別にそれ以外では全く興奮しない、という特異体質ではないのだ。

アシュレイが構ってくれないときは淫魔をナンパしたりすることもある。

さすがアシュレイの信者というべきか、そこら辺は結構凄かった。

「構わん。そうだな……お前には私の足でも舐めてもらおう……」

テレジアは意地悪な笑みを浮かべる。

彼女はレイチエルがアシュレイの足を舐めるのが好きだということを知っていた。

レイチエルはごくり、と唾を飲み込む。

彼女には容易に想像がついた。

アシュレイ以外の足を舐めているのに興奮するのか、と罵られることが。

そして、それに彼女は期待してしまう。

アシュレイを裏切っているかのような背徳感。

「どうした？ 早く来い」

テレジアに促され、レイチエルはゆっくりと近寄っていった。

一方その頃

「妾じゃ」

「私達がペットなの」

「そうそう」

「狐はお呼びじゃない」

玉藻とドレミが双方人間形態で口論していた。

彼女達も飽きないもので、顔を合わせる度にやりあっている。

ちなみに数の不利にも関わらず、今のところ玉藻が勝利を重ねていたりする。

「見よ、妾の美しい四肢を」

あつという間に全裸となった玉藻は自らの体をドレミに見せつける。

フレイヤなどにはさすがに劣るものの、それでも玉藻は極上の女であることは間違いない。

「どうじゃ？ この体でアシュ様もイチコロじゃ」

対するドレミもまた全裸となる。

彼女達は少々特殊だ。

人間形態でも頭が三つある。

「狐風情が」

「アシュ様の飼い犬に」

「手を出そうなんて」

そう言うドレミに玉藻は溜息一つ。

「その喋り方は何とかならんかの……聞いてる方が疲れるんじゃないが」

「私達の体の方がアシュ様のようなマニアには受けるのよ」

玉藻の言葉を無視してレナが言った。

「普通の体なんていまどき流行らないわ。これからは三つ首とか複乳とかの時代よ」

そう言うドローラに続いて、ミアもまた告げる。

「アシュ様、今度は複乳とか奇形とかの種族を創ろうとしているみたい」

ドレミの攻撃に玉藻は怯まずに答える。

「だが、妾が雌として優れているのは確かじゃ。色んなものを見てきた妾にはそなたにはない、雄を虜にするテクニクがある」

ドレミは押し黙る。

彼女達にはそういうテクニクは存在しない。

好きだから交尾する、という至極単純な思考なのだ。

そこに至るまでの雰囲気作りとかそういうったものは全くやったことがない。

「今回も妾の勝ちじゃな。黙ったそなたの負けじゃ」

ドレミが頬を膨らませて睨みつけるが、今の玉藻にはそれすらも可愛いものに過ぎなかった。

もつとも、彼女達の喧嘩がどう転ぼうと、アシュレイがどちらかを放逐しない限りは何も変化はしない。

故に一連の口論は暇潰しの娯楽と化していたのだった。

新たなる者達（前書き）

独自設定・解釈あり

新たなる者達

ニジは応接室でそわそわしていた。

そんな姉とは裏腹に妹のザジは平然としている。

ニジはこれからザジをアシュレイに紹介する。

いきなり大変な事態にならないかどうか、彼女としては冷や汗も
のだ。

やがて、彼女がやってきた。

堂々と部屋に入ってくるアシュレイ。

彼女は10分程、レイニーデイ姉妹を待たせたが、彼女に文句を
言うことは誰にもできない。

たとえ、どっかの国の元復興担当大臣であっても。

「アシュ様、こっちが私の妹のザジポヨ。今回は見学に来たポヨ」

「はじめまして、ザジです」

ペこり、と頭を下げるザジにアシュレイはニジとザジに交互に視
線をやっている。

「……双子？」

「はいポヨ。ちなみに私と契約しているポヨヨ。そして、私は妹と
契約しているポヨ」

「契約……？ ああ、あの魔法使いの従者とかそういうのね。なんでそんなことしてるの？」

アシュレイの純粹な疑問。

彼女からすればそんなことをする必要性が理解できなかった。

「どんなアーティファクトが出るか、気になったポヨ。実験ポヨ」「こんなのが出ました」

ニジの言葉にザジが一枚のカードをアシュレイに差し出す。ピエロのような衣装を纏ったザジの姿が描かれている。

「幻灯のサーカスが我々のアーティファクトポヨ。姉妹揃って同じものが出たポヨ」

「幻灯？ 幻術でも見せるの？」

途端、アシュレイが不敵な笑みを浮かべた。

魔王である自分に掛けられるものならやってみろ、と言いたげである。

「いや、さすがにアシュ様クラスになると無理ポヨ。掛かったとしても、一瞬で解除されるポヨ」

降参とばかりに両手を挙げるニジ。

その様子にアシュレイは満足気な笑みを浮かべる。

一見、強さとか力とかに固執していないように見えるアシュレイだが、地獄において強さ＝権力であるので、表には出さないものの、結構執着していたりする。

力が無ければ大きな勢力に呑み込まれてしまうのは必然。好き勝手やるには力が無ければ駄目なのだ。

「で、ニジ……」

アシユレイはザジに視線をやりつつ、ニジに声を掛ける。
彼女が言わんとすることはニジには十分理解できた。

「アシユ様、ちょっとだけザジに席を外してもらっていいですポヨ
？」

その言葉にアシユレイは頷く。

ニジはそそくさとザジを部屋の外に連れ出した後、すぐに戻り、
扉に鍵を掛けた。

「お願いしますポヨ！ 妹には手を出さないでくださいポヨ！」

深く頭を下げ、ニジはそう告げた。

アシユレイはニジの行動から、その言葉が出てくることは予想が
ついてた。

「姉妹井って素敵じゃない。しかも双子なんて」

笑みを浮かべるアシユレイにニジは頭を下げたままだ。

そんな彼女に嗜虐心をくすぐられるアシユレイ。

「妹の為にそういうことするなんて、泣かせるじゃないの」

うんうん、と腕を組んで頷くアシユレイ。

一見、分かってくれたように思えるが、そうは問屋がおろさない。

「で、私から手を出さないと約束したところで、穴があるわ。ザジが自ら私を求めたら、その約束は意味がない。そして、私にはそうさせるだけの術が幾つもある」

アシユレイの言葉にニジは何も言わない。

言葉の穴を見つけ、自分に都合の良いように解釈するのは悪魔の常套手段だからだ。

「そうなった場合、あなたは私に裏切られたと感じ、私に牙を向く。あなたの妹思いの性格から考えて、それはとても確率が高い」

思わずニジは顔を上げた。

まじまじと彼女はアシユレイを見つめる。

そんな彼女にアシユレイは歌うように言葉を紡ぐ。

「だけど、私を倒すことは魂の牢獄抜きに考えても実力差から不可能。故にあなたは私を永久に封印する術を模索することになる。魔王になりたい魔神や、私のことが嫌いで堪らない神族、そして人間の手を借りて」

ニジは何も言わない。

じつとアシユレイを見つめている。

アシユレイは更に言葉を続ける。

「勿論、私が納得できるだけの理由をつけて、私の許可をもらってあなたはきつと堂々と研究するわ。主神や魔王を永久封印する術は私としても知的好奇心がくすぐられる。私が許可を出さない筈がない」

一度言葉をそこで切り、ニジの反応を窺いつつ、アシユレイは再

び口を開く。

「あなたはその術が完成するまで私に尻尾を振り続ける。私さえ倒せば妹は戻ってくる、と信じてね」

確信に満ちたアシュレイの言葉。

それも当然だ。

ニジがザジを大事にしていることはわざわざアシュレイに直談判していることから容易に知れる。

圧倒的格上の存在に、その場で殺されるかもしれない危険を冒して。

「妹思いなあなたはきつと視野狭窄に陥り、そうなってしまつ。でも、ここで面白いシヨールが展開される。私を倒そうとするあなたに對し、妹が反抗する。ジレンマに悩みながらも、あなたは私へ謀反を起こす。そして最後は妹に討たれて死ぬ」

いい話ね、と楽しみにアシュレイは言った。

「ま、最後のあたりは事態を察知した私がザジを焚きつけ、力を与えるんだけども」

くすくすとアシュレイは笑う。

ニジの頬から一滴の汗が床に滴り落ちる。

アシュレイがザジに手を出した場合、非常にありうる未来であったからだ。

「全て……お見通しポヨか……？」

喘ぐようにニジが尋ねる。

「いえ、統計学に基づいてありうる未来を割り出し、最も確率の高いものを言ったただけよ。長年、付き合いのあるあなただから短時間で割り出せたわ」

何でもないように告げるアシュレイにニジは戦慄する。

確かに統計学に基づけばありうる未来を割り出すことは可能だ。

だが、それには膨大なデータと計算を必要とする。

それをたった数十秒で割り出してしまふ、しかもニジ本人が大雑把に考えていたものと 妹に討たれる云々を除けば 全く同じものであった。

「私は過去と未来を見通す者よ。完全な未来予知や他人の過去を知るには寝ないと駄目だけど、ほぼ正確な未来や過去でいいなら、計算で割り出せるわ」

ニジはごくり、と唾を飲み込んだ。

今、彼女の目の前にいるのは紛れもなく魔王アシュタロスであった。

「ただ、そうなった場合、私にはとてもデメリットがあるわ」

アシュレイはそう前置きし、ゆっくりと告げる。

「ニジという優秀な技術者を失うことと、部下に謀反を起こされたとして私の株が下がること。それらとザジを天秤に掛ければ、私はザジに手を出すという選択肢を放棄せざるを得ないわ」

ニジは懐からハンカチを取り出し、汗を拭う。
緊張からか彼女の体は僅かに震えている。

「で、ニジ。ザジにちよっかいを掛けない代わりに、あなたにより
手を出すことにする。それが妥協点よ」

「あ、ありがとうございますポヨ……妹に手を出さないなら何でも
しますポヨ……」

深々とニジは頭を下げつつ、思う。

この方には勝てない、と。

「それじゃ、私は新しく入った子爵に会いに行くから。姉妹同士仲
良くね」

手をひらひらさせて、アシュレイは転移していった。

彼女を見送り、ニジは深呼吸を数度し、呼吸を整える。

「恐ろしい方ポヨ……」

そんな言葉が口から零れ出たのだった。

そして、アシュレイはヘルマンの執務室にやってきた。

ここで新しく入った子爵が秘書をしている、と聞いているからだ。彼女がノックをして入れれば、そこにはヘルマンと彼より1回りは大きい男が立っていた。

「アシュ様、こちらが新しく入ったコンロン子爵です」

そう紹介するヘルマンに対し、アシュレイはコンロンを品定めする。

そして、彼女は告げる。

「中々見所があるじゃない。上級魔族の中堅といったところかしら」
「恐悦至極でございます。アシュ様の為に粉骨碎身、頑張らせていただきますので、どうぞよろしくお願いいたします」

アシュレイの言葉に深々と頭を下げるコンロン。

そんな彼に彼女は満足気に頷く。

「アシュ様、事後承諾で大変申し訳ないのですが、彼を私の秘書としてよろしいでしょうか？」

「問題ないわ。あ、でも戦闘訓練はしっかりしておくように」

勿論です、と頷くヘルマンとコンロン。

「墮天使かしら？」

アシュレイの問いにコンロンは頷き、口を開く。

「サタン様のところで事務と現場で働いておりました。あなた様のことは常々気になっており、また親交があったヘルマン侯爵から是

非に、と」

「何だか馬が合いそうね。見た目からして紳士っぽいし」

アシユレイの言葉にヘルマンが口を開く。

「アシユ様、子爵は地獄の社交界では知らぬ者がいない、という紳士です」

本物だったのか、とアシユレイは納得しつつ、告げる。

「ま、私としてはそういうのは一向に構わないわ。楽しくやって頂戴」

ヘルマンとコンロンが頭を下げる。

そんな2人を見つつ、アシユレイはそれじゃーね、と部屋を後にしたのだった。

これから数年後、彼らにもう1人加わり、アシユタロス陣営の男の実力者三羽鳥と呼ばれることになるとは、このとき誰も思っていなかった。

忙しい彼女と陰陽師（前書き）

独自設定・解釈あり。
微工口あり。

忙しい彼女と陰陽師

「……おお」

アシユレイはあるものを見つけ、思わず声を上げてしまう。里帰りしていた彼女はつい数日前に地上に戻ってきたが、京都にそのまま向かわずに、あちらこちらをふらふらとしていた。

台湾バナナを食べたいと思った彼女は台湾に行ったが、この時代、台湾でバナナがまだ栽培されていないことに絶望した。

仕方がないので現地で土壌改良やら治水やらを魔法で行った後、南米からバナナを持ってきて住民達に栽培するように指示した。

ついでだから、と一部地域だけでなく、台湾全土で土壌改良やら治水やらを行い、農学と医学を広めた。

またその際、彼らに日本と台湾は友達である、と教えて。

東南アジアで頼りになるのは台湾やタイである、ということを知っていた。女は知っていた。

台湾を去った後、油田とか鉱山を今のうちに独占しよう、とボルネオ島を探索していたとき。

海岸で彼女はそれを見つけたのだ。

「……タツノオトシゴかしら？」

砂浜で波に揉まれながら、ぐったりとしている奇っ怪な姿。

その姿はタツノオトシゴのようで微妙に違う。

体のところどころに突起があった。

さすがの彼女といえど、海洋生物まで詳しくはない。ともあれ、彼女はそのままツノオトシゴっぽいものを拾いあげてみる。

ぴくぴくと体を痙攣させる様はどう見ても瀕死であった。

「人助け……いえ、魚類助けも偶にはいいか」

アシュレイは自分の指をその牙で僅かに傷つけ、血を流す。そして、その血をツノオトシゴっぽいものに与えた。

数分程して、そのツノオトシゴっぽいものは元気になったのか、ふわりと彼女の手の中で起き上がった。

水中ならいざ知らず、足もないのに地上で。

やがて、そのツノオトシゴっぽいものの背中に黒い小さな翼が生えてきた。

「……あれ、新種誕生？」

アシュレイの言葉に「きゅー」と鳴く。

勿論、ツノオトシゴはそんな風に鳴かない。完全に新種の生物であった。

「……新種の生物は発見者が名前をつけれるのよね」

発見というより作り出したが正しいが、アシュレイはそんなことは気にしない。

「じゃ、フェルナールで」

そう名づけつつ、彼女はタツノオトシゴっぽいもの
フェルナールを海へと放す。

「大きくなったら飼ってあげるわ。それまで達者に暮らさない」

その言葉が理解できるのか、フェルナールは一声大きく鳴くと波に逆らいながらぐんぐんと沖へ向かっていった。

「さて、京都へ行こう」

そして、アシュレイは転移魔法を発動したのだった。

アシュレイが久しぶりに千奈と須臾に会っている頃

地獄にあるアシュレイの城ではディアナがアシュレイから与えられた任務を精力的にこなしていた。

すなわち、フェネクスに対するソフトな調教である。

ディアナはアシユレイから与えられた制限の範囲内で程良くフェネクスを快樂漬けにしていた。

ベッドの上でフェネクスは普段は見せない姿を披露する。嬌声を上げ、ディアナを求めるその様はもはや天使であった面影はない。

ディアナはその様に興奮し、責めを徐々に激しくしていった。

「ディアナ……」

情事を終えた後、フェネクスは名を呼ぶ。

ディアナは微笑を浮かべ、彼女の次の言葉を待つ。もはや恒例となったその言葉を。

「私は……女であったか？」

第三者にはさっぱり意味が分からないその問いかけ。それに対し、ディアナは答える。

「ええ……いい女よ。アシユ様もさぞお喜びになるわ」

凜々しいとか生真面目とかそういった言葉がよく似合うフェネクス。

そんな彼女の心配事は中々手を出してくれないアシュレイへの不安。

フェネクスは自分への性的行為禁止令を出したアシュレイに対し、最初は尊敬した。

自分の事情を理解し、配慮してくれた、と。

だが、それは時を経るごとに不安に変化した。

フェネクスに多くの好色な神々が手を出したことから、彼女は自ら男にとって魅力的である、と理解していた。

しかし、そんな神々をも超える好色な魔王であるアシュレイは禁止令発令後、一切そういうことを自分に対して行わず、また部下にも禁止令を徹底させた。

アシュレイの命でディアナに積極的なアプローチをされるまで、フェネクスは誰にも手を出されなかった。

当然といえば当然だが、それが彼女の不安に繋がった。

自分には女としての魅力がないのでは、という不安に。

誰々とアシュレイがやった、という話を耳にする度にその不安は高まり、火照った体を自分で慰める日々。

誰かに頼もうにも、フェネクスの性格が災いしてそういったことを口には出せず。

そしてある日、しつこくアプローチをしてきていたディアナと寝

てしまった。

フェネクスは初めて他人に身を委ね、その快楽に溺れてしまった。それ以後、彼女はディアナと何度も関係をもった。

やがてディアナがアシユレイから与えられた任務と、その時の状況を話し、フェネクスは歓喜した。

敢えて自分に手を出さないのはより良い女にする為、ということ。を彼女は気づいたのだ。

それからフェネクスはより真面目に振舞うようになり、対してディアナとの密会ではその姿からは想像もできない程の姿を披露し始めたのだ。

そして、今日で322回目の密会。

調教は十分とディアナは判断し、フェネクスに対して提案する。

「ねえ、フェネクス……アシユ様に抱いてもらいましょうか？」

その言葉にフェネクスは驚き、ついで不安げな表情を見せる。

それはかつて神界の輝ける星であったミカエルでも、魔神フェネクスとしてのものでもない、ただの女としての顔だ。

「大丈夫だろうか……アシユ様が敢えて我慢していたのは分かるが……」

その言葉もディアナは予想済みであった。

故に彼女は最高のアドバイスを行う。

「アシユ様は汗や匂いに興奮される。だから、シャワーは浴びない方がいいわ」

フェネクスが僅かに頷いたことを確認し、ディアナは更に告げる。

「部屋に入ったら、アシユ様の前に跪いて、そのおみ足を丹念に舐めなさい。それで掴みは万全よ。アシユ様は足を舐めさせるのが大好きだから」

そう言いつつも、ディアナはアシユレイが足を舐めるのも大好きということは伝えない。

アシユレイは責めのみだ、と思われがちであるが、意外にも彼女はMプレイも好きだったりする。

まあ、気持ち良ければ何でもいい、というのがアシユレイのスタンスなので、それも当然なのかもしれない。

「わかった。そうする」

「じゃ、アシユ様に連絡しておくわね」

ディアナはアシユレイへと念話を飛ばす。

たとえ地獄と地上、次元が違えども魔神クラスになると連絡は容易かった。

その連絡から2時間後、トンボ帰りしてきたアシュレイはフェネクスを大変美味しく頂いた。

その後、アシュレイはディアナにご褒美として、1時間が1年になる加速空間で10時間、2人つきりで過ごした。

その10年間、何をしていたのかは2人だけの秘密であったが、加速空間から出てきたディアナはこれ以上ない程に満足そうな顔で、そのお肌は輝いていた。

そして翌日、アシュレイは再び地上に戻った。

「何や、えろう久しぶりやと思うたら、また帰ってすぐ戻って。忙しいないやつぢやなあ」

千奈は呆れ顔でそう言った。

対する須臾は口には出さないものの。何か言いたそうな表情だ。

そんな2人にアシュレイはくすくすと笑う。

「だいたい数ヶ月くらいでしょ？ 私が地獄にいたの。寂しかったの？ 私のが好きなの？」

「アホか。あんさんが帰ったおかげで、今まで大人しかった物の怪がわんさか湧いてきたんや。訓練生の須臾まで駆り出されたんやで？」

その言葉にアシュレイはなるほど、と手を叩いた。

「じゃ、ちょっと悪さしないように言う事聞かせればいいのね？」

「明日菜……何を企んどるんや？」

ジト目の千奈にアシュレイはにっこり笑う。

「超絶無敵の大魔王であるこの私に、雑魚連中が敵う筈がない。私をどうにかしたければ天照や建御雷を呼んでくることね」

「どこからツツコめばええんや……」

頭を抱える千奈。

そんな彼女を尻目に、須臾が口を開いた。

「お嬢様にも色々のご事情があると思います。ですが、私は……寂しかったです」

そう言った彼女は顔をやや俯かせる。

今はしまっている翼が出ていれば、きっと垂れてしまっているだろう。

アシュレイはそんな須臾に思わず唾を飲み込んだ。

可愛かった。

テレジアなどの使い魔や玉藻やドレミなどのペットとはまた違う、言ってしまうえば忠犬的な須臾が。

抱きしめて頬ずりしたい、という保護欲に訴えかけてくる輩は残

念ながらこれまで、アシュレイの近くにはいなかった。

免疫が無いところにコレは強烈に効いた。さすがのアシュレイも。

「須臾が可愛すぎて生きるのが楽しい」

そんなことを呟きつつ、アシュレイは目にも留まらぬ速さで須臾の背後に回りこみ、ぎゅっと抱きしめていた。

唐突な感触に須臾は体を震わせるが、彼女は何も抵抗しない。

「須臾、ずっと一緒よ。永遠に、ずっと」

耳元で囁かれるその言葉はまさに愛の告白。

須臾は顔が真っ赤になるのを感じつつも、蚊の鳴くような声で答える。

「おねがい、します……」

そんな2人の様子を千奈は物凄い目で見ている。いきなり目の前で愛の告白である。

結婚どころか恋人もいない千奈にとってはまさに拷問であった。

勿論、アシュレイが千奈を放置しておく筈がない。

彼女は須臾から離れ、千奈の目の前へと行き、問いかける。

「千奈、あなたも私とくる？」

「……陰陽師に魔物になれ言うところんか」

千奈の言葉は最もであった。

本来なら魔物を退治する側の陰陽師が魔物に魅入られて魔に堕ちる。

ミイラ取りがミイラになってしまふ典型だ。

そして、そうなった陰陽師は陰陽寮が全力で退治しにやってくる。何しろ、ただの人間がそうなったならばまだ弱い。元々のある陰陽師がそうなら手に負えない。

魔物の強力な身体能力や再生能力や魔力に加え、陰陽師としての術まで扱ってしまう。

「いいじゃない。そんなもの、人間の法でしょう？ 魔物になった瞬間に人間の法も倫理も守る必要がなくなるわ。だって、人間じゃないんだから。人間を律する法で、人外を律するなんて馬鹿な話だわ」

もつとも、とアシュレイは言葉を続ける。

「私達にも法律は存在するわ。地獄に置いての法律は今の日の本の法律より余程詳細でよく出来ている。けども、何よりも優先される暗黙の慣習法があるの」

そして、彼女は自らの顔の前で拳を握ってみせ、その顔に不敵な笑みを浮かべる。

「力こそ正義。弱いヤツは強いヤツに何をされても文句は言えない。それで私は天地魔界全てに名を轟かせ、地獄の王となった」

いつになく凜々しいアシュレイに千奈と須臾は思わず目を瞬かせ

る。いつもいい加減でエロな彼女はそこにはなく、魔王としての彼女がそこにいた。

暫しの間の後、千奈は告げた。

「……せやけど、私はそうしない。それだけは決して」

彼女の声は大きくはない。

だが、それは力強い声であった。

「確かに、あんさんの言うことは最もや。ウチにもそれはよう分かる。力があれば、と思うたことは何百回もある」

やけど、と千奈は続ける。

「人間で生まれたからには人間として死にたい。たとえそれが妖怪に喰われて死んだとしてもや」

「そういうの、犬死とか自己満足って言うんじゃないかしら？ 陳腐な言葉だけど、死んだら終わりよ？ 特殊な術を使わない限り、たとえ転生しても、あなたはもう二度とあなたにはなれない。天ヶ崎千奈という人間は永遠に失われてしまうわ。それは何よりも悲しく、寂しく、辛いことではなくて？」

悪魔の癖に、アシユレイの言葉はどうしようも無い程に正論であった。

その言葉は千奈も予期していたこと。

故に彼女は頷き、肯定する。

「それは反論しようがない。ウチが寿命で死んでも、あんさんや須臾は生きとるやろう。きつとウチの為に何だかんだで泣いてくれると思うし、そもそもあんさんがこんな誘いしてんのも、ウチのことを気に入ってくれてるからやと思う」

千奈の言葉にアシユレイは視線を逸らす。
その様子に須臾はくすくすと笑い、千奈は穏やかな笑みを浮かべる。

「ウチと一緒にいてくれるというのはウチも嬉しい。何だかんだで楽しいからな。やけど、魔物になることはできへん。短いからこそ楽しいこともあるんやで？」

千奈の決意が堅いとみたアシユレイはやれやれ、とため息を吐く。
そんな彼女に千奈は更に言葉が続ける。

「よかつたら、ウチの家系の面倒みてくれへんか？ 勿論、ずっと傍にいて欲しいとかやなくて、召喚できる術を教えて欲しいんや」

アシユレイはむーっと頬を膨らませるが、やがて頷いた。

「おおきに。まあ、ウチの子孫が私とは違った答えを出すかもしれへん。そんなときはその子の意志、尊重したってな。考え方なんて人それぞれや。ウチの考え方が正しいなんて思わへん」

その言葉にアシユレイは頷き、口を開く。

「召喚する術だけど、私を地獄から召喚するなんていったら、とんでもない魔力が必要よ？ 私が自分でこっちに来る分には何もいらないけど、人間が自力でとなったらそうはいかない」

「それなら心配無用や。無いなら余所から持ってくればええ。生贄を使う」

「生贄？」

胡散臭そうな視線を向けるアシユレイに千奈は不敵に笑う。

「両面宿儺っちゅー封印された荒神がおるんや。それを生贄に捧げれば大丈夫やろ」

捨てられた者達の復讐劇（前書き）

独自設定・解釈あり。

微グロあり。

捨てられた者達の復讐劇

エヴァンジェリンは見つめる。

天空にある紅い満月を。

エヴァンジェリンは見つめる。

眼下にいる自らの軍勢を。

月明かりに照らされる、反射する鉄兜。

滑らかな曲線を描く、耳まで保護するようなタイプの鉄兜はこの時代の人間には到底作り得ない。

彼女は口元を歪め、そして、発した。

「諸君、万願成就の夜がきた！ これより地上侵攻を、バルバロッサを開始する！ 思う存分に殺し、食い散らかせ！」

地を唸らせるような雄叫びが響き渡る。

これより彼らは進撃する。

向かう先はマクダウエル領。

ここよりたった数kmのところに存在する。

時は1390年、6月22日午前0時。

表も裏も関係なく、人類の歴史に刻まれる暗黒時代の幕開けであった。

ソフィアは今か今か、と自室でそわそわしていた。

エヴァンジェリンから6月22日に事を起こす、と聞いている。

もはや彼女の心は完全にエヴァンジェリンに移っており、夫も息子も、もはや眼中になかった。

勿論、バレないように表面上はうまく取り繕っている。

そのときであった。

轟音が響いたのは。

ソフィアは窓に飛びつき、外を眺めた。

外に見えるのは巨大な氷柱。

それが地面から生えていた。

ソフィアは遠見の魔法を使い、城下町の様子をつぶさに観察して

……後悔した。

大勢の見慣れぬ服を纏った集団が、恐ろしい速さで人間を食い殺しているのだ。

氷柱が落ちたときの音で住民は嫌でも起きる。

何事だ、と家から飛び出した彼らを出迎えたのは化物の大群であった。

「ソフィア！」

ノックもせずに血相を変えて駆けこんできたのはグレイス。そんな彼にゆっくりとソフィアは振り返る。

「化物の大群だ。おそらくアシュタロスの手の者だろう。先ほど騎士団と魔導騎士団に出撃命令を下した。お前は戦闘に参加せずに怪我人を手当てしてくれ」

戦闘から後方支援までソフィアはこなすことができる。

故に有事には非常に有り難い存在だ。

だが、それも今日で終わる。

「残念だけど、それはもうできないわ」

微笑み、そう彼女は告げた。

「ソフィア……？」

様子がおかしい彼女にグレイスは訝しげな視線を送る。

「もう終わりなの。私は嫌っていたあの子に全てを捧げることにしたの」

ソフィアの言葉にグレイスは首を傾げる。

彼からすれば何が何だかさっぱりであった。

瞬間、彼は感じる。

巨大な魔力を。

ゆっくりと背後を振り返れば、そこには……

「エヴァンジェリン……だと……」

12、3歳程度にまで成長したエヴァンジェリンの姿があった。彼女はところどころ宝石が散りばめられた美しいドレスを身に纏っており、その紅い瞳はグレイスではなくソフィアを見ていた。

「ソフィア」

エヴァンジェリンが名を呼べば、ソフィアは懐から一通の手紙を取り出し、それをグレイスへと渡す。

状況が飲み込めないまま、彼はその手紙を受け取り、目を通し……

「離縁状だと！ どういうことだ！」

エヴァンジェリンに、ソフィアに彼は怒鳴った。

そんな彼を無視し、エヴァンジェリンはさっさとソフィアに若返り薬を飲ませてしまう。

みるみる若返り、18歳程度になったソフィアは実に美しかった。エヴァンジェリンと同じ金色の髪は傷んだところはまるでなく、その肌に皺やシミも一つとしてない。

そして、ソフィアは不老不死の薬を呷った後、ゆっくりとエヴァンジェリンの下へ。

「グレイス……あなた、男として最悪だったわ。息子ができてから抱いてもくれない」

そんな彼の顔は既にトマトのように真っ赤である。

「でも、エヴァは違うわ……私の愛しいエヴァ……ああ、過去の私はなんて愚かだったんでしょ……」

そう言いながらソフィアはエヴァンジェリンを抱きしめ、その頬に口づけする。

「ま、そういうことだ。オトウサマ？　これが私の復讐だ」

そして、グレイスが何かするよりも早く、エヴァンジェリンは遅延させてあった魔法を発動した。

グレイスの魔法障壁をあっさりと貫通し、その体を無数の氷柱が貫く。

彼は苦痛に顔を歪めつつも、エヴァンジェリンを見る。

そんな彼にエヴァンジェリンはにっこりと笑った。

「売ってくれてありがとう。おかげで私は人間的な苦痛の全てから解放された。アシュタロスという強大な魔王の庇護下に入ることもできた。ちっぽけな領地しかないここよりも、遙かに贅沢ができた。ここまで娘の幸せを考えるなんて、大した親だ！」

エヴァンジェリンはくつくつと笑う。
痛烈な皮肉であった。

そして、彼女は新たな余興を思いつく。

「ソフィア、その男はお前が殺せ」

「はい、エヴァ……私の愛しい人……」

エヴァンジェリンの唇に自身のものを重ねた後、ソフィアはゆっくりとグレイスに近づいた。

「ソフィア……！」

恐怖でもなく、怯えでもなく、ただ怒りを向けるグレイス。

彼からすれば酷い裏切りであった。

魔法使いが、魔物に魅了されるなど、あつてはならないことなのだから。

「さようなら」

だが、彼がいくらそう思ったところで、今の状況を好転させることはできない。

ソフィアは聖母のように微笑み、彼の頭を魔法でもって潰した。

エヴァンジェリンはその様子をニヤニヤと笑いながら見ていた。彼女は一仕事終えたソフィアに告げる。

「私の弟はどこに？」

「おそらく、魔導騎士団を率いて戦っている筈です」

「そうか……若返り薬は記憶などの一部を除き、全てを当時のままに戻す。今、お前は処女だな？」

唐突な問いにも関わらずソフィアは頷く。

「魔法でいつでも処女に戻せる。ならばこそ、楽しまねば損。弟の前で、お前の息子の前でお前の処女を奪ってやるつ。そして、言え。」

私のものとなったことをな」

ソフィアはそのことを想像したのか、瞳を潤ませる。

その息は少し荒い。

それを見たエヴァンジェリンは軽蔑の視線を彼女にプレゼントし、さらに告げる。

「ふん、とんだ変態だ。こんなものが私の母親で、そして伴侶だとはな」

「エヴァ……もっと……もっと言ってください……」

お願いしてきたソフィアにエヴァンジェリンは盛大に溜息を吐く。本気で言ったのだが、どうやらそういった類は通用しないらしいかった。

気を取り直し、エヴァンジェリンは告げる。

「ともかく、さっさと行くぞ」

彼女はソフィアをお姫様抱っこすると、その場から転移したのだった。

そして、これから数十分後、エヴァンジェリンは当初の目標を達成した。

弟の前で母を抱き、領民全てを皆殺しにしマクダウェル領を完全に手中に収めたのだった。

エヴァンジェリンが恐怖と絶望を振りまいている頃、レイチエルはあるものを睨んでいた。

彼女が睨んでいるのは名簿。

厚さ数cmにも達するそれには無数の名前と共に顔写真が貼られている。

レイチエルはエヴァンジェリンと同じように全く違う部隊を持つこととなった。

アシュレイのいつもの思いつき……ではなく、ちゃんとした考えがある。

21世紀の人間社会ともなれば、おおっぴらにドンパチはできない。

ならばこそ、迅速正確に目標を制圧することができる部隊が必要となる。

人間社会を裏から支配しようとするアシュレイにとって、こつそりと行動できる部隊は必須だ。

「……数人は決まったのだけだ」

レイチエルは溜息を吐いた。

人間牧場から、あるいは地獄中央市場から、そして、教会墮落計

画によって造られた数多の孤児院や修道女学校から引き抜いていた。数十人は既に確定している。勿論、全て女性だ。だが、それだけの人数では到底足りない。

「よお、何悩んでるんだ？」

そんな声がレイチエルに聞こえた。

彼女は名簿から、その声の主へと視線を移す。

そこには小麦色の肌にクリーム色の髪をした10代後半程度の少女が立っていた。

彼女は確定した数十人のうちの1人だ。

「ライカ、部屋に入るときはノックをするように、と言った筈ですよっ？」

コメカミを押さえつつ、そう注意するレイチエル。

気にしない気にしない、と言い、ライカはレイチエルの名簿を勝手に奪ってしまう。

「……一応、私はあなたの上司なのですけど」

「ああ、そうらしいな。で、悩める上司を助けてやろう、と暇をしている私がやってきたわけだ」

「カレンは？」

「姉さんなら訓練してるよ」

そう答えてつつもライカは名簿から視線を離さない。

「無口で無表情で生真面目な姉とは違って、双子の妹のあなたは何でそうも……」

「アシユ様の自由なところを真似た。アシユ様は心から尊敬するし

感謝するよ」

にかつと笑ってみせるライカ。

彼女は姉のカレンと共に餓死寸前のところをアシユレイの孤児院に入れられ、そこでたっぷりとアシユレイの素晴らしさを教わった結果、ここにいます。

最も、未だに彼女達姉妹とアシユレイに面識はなかったりする。

「アシユ様は確かに偉大な御方ですが、それはあの方だから許されることであって……」

「固いことは言いつこなし……このメリーとかいう子はどうだ？
可愛い少女じゃないか」

ライカの目に止まったのは満面の笑みを浮かべている少女。

だが、その表情はどこかおかしい。

「その子はアシユ様が暗殺者に育てるから駄目ですよ。私メリーさん、あなたの後ろにいるの……とかアシユ様が仰ってました」

ライカは訳がわからないと首を傾げる。

「この子は経歴を見る限りだと、いい親に恵まれなかったようです。ね。両親は魔法使いで貴族。他界した父親の後を継いで、領主となった母親が彼女の行動を全てコントロールし、お人形扱いしていたそうです」

うげ、とライカは嫌な表情をみせる。

「アレも駄目、コレをしるとかで、できなかつたら暴行を加える、と」

「親とか面倒くさくていかな。私らは親の顔も知らないけど」

うんうんと頷くライカ。

彼女達姉妹は物心ついたときには既に浮浪児となっていたからだ。

「で、ある日、下男が花壇で雑草を刈っているところを見て閃いたのか、考えついたのか知りませんが、鎌で寝ている母親を惨殺し、さらに屋敷にいた下男下女全員を皆殺しにしたそうです」
「そんなことできるのか？」

ライカの疑問は最もだ。

幾ら武器を持っているからとはいえ、何人かで束になってかかれは取り押さえることは可能である。

「魔法も習っていたそうで、身体能力を強化して根こそぎ首を狩ったそうです」

「あー、それなら仕方がないな」

「まだ続きがありました……地獄にやってきた彼女はアシュ様と会って、色々した結果、特殊な能力を身につけ、今に至ります」

「いつ会ったんだ？ 私ですらアシュ様と会ったことがないのに」

「3月だったと思います。私もその現場におりましたので」

そう言うレイチエルをジト目でライカは見つめる。

「……私もアシュ様に会いたい」

「駄目です。正式に発足してからです」

取り付く島もないレイチエルに溜息を吐くライカだった。

似たもの同士(前書き)

独自設定・解釈あり

似たもの同士

エヴァンジェリンが地上侵攻を開始して早数年。

彼女は予定通りに東を攻め、ロシアの大地に乱立していた諸王国を滅ぼした後、バクーを完全に占領した。

その後、カフカス山脈を越え、ペルシア地方へと進出し、アラビア人を薙ぎ倒しつつ、ソドムとゴモラ……ではなく、エルサレムの完全破壊を目指して動いていた。

人類は無論、多くの神魔族が欧州に突如として現れた吸血鬼に興味津々のとき。

日本の関東平野にある世界樹には数人の人影があった。

「とんでもないポヨ」

精密調査を終えたニジは思わずそんなことを呟いた。

世界樹にある魔力を使えば、地球のあらゆる場所に影響を及ぼすこともできる。

そんなとんでもないものが自らの生存本能のみで、神魔族や人間からひっそり隠れていたこともまたとんでもない。

「こんなものがあつたなんて」

現物を見ても信じられないベルフェゴール。

言うまでもないが、彼女達は少数の部下と共に、世界樹地下にゲートを建設すべくやってきたのだ。

アシユレイの目的は世界樹の魔力を使い、ここと 正確には世界樹地下 地獄を繋げてしまうこと。

そうすれば神族に見つからず、こっそりと地球に魔族を送り込むことができる。

なお、利用するのがアシユレイの身内とは限らないので、凶悪な強制転移陣は既に解除されていた。

地上部分の調査後は魔法で掘るだけである。

重機などで掘るわけでもないので一瞬だ。

ベルフェゴールが念じれば巨大な魔法陣が世界樹を中心に描かれ

……そして消えた。

「できたわ。行きましょう」

そして彼女達は転移した。

世界樹地下にベルフェゴールがこしらえた広大な空間。

無論、世界樹が枯れてしまわぬよう、根っこがむき出しになつたりはしていない。

空間の真ん中に巨大な土の柱のようなものがあり、それは天井と床を繋いでいる。

ここに根っこが入っていた。

ベルフェゴールは更に地下空間全体に強固な結界を張り、余計な邪魔者が入ってこれないようにする。

それを見てとつたニジは行動を開始する。

「もう遠慮はいらないポヨ」

彼女はそう言うつと召喚魔法を発動し、多くの機材や部下を召喚し始める。

元々ある世界樹の結界に加え、ベルフェゴールの結界ともなれば簡単には抜けない。

「ここは良い基地となりそうね」

ベルフェゴールはポツリと呟いた。

そして、ここに鬼神兵と魔神兵を配備することを決意する。

戦闘態勢に入るまでは非常に気づかれにくく、量産性も良いそれらは戦争から数千年経つた今も、アシユタロス陣営の切り札的兵器であつた。

「時代が進めばそれだけ隠蔽は難しくなる。アシユ様はどうするかしら……」

強固な結界とはいえど、破ろうとすればいつかは破られてしまう。ならばこそ、そのときの対策もまた必要であつた。

「何やってるポヨ！ さつさと仕事するポヨ！」

ぶんすか怒るニジ。

両手を挙げて怒ってる様は何だか微笑ましい。

かつては部下であるにもかかわらず、ベルフェゴールに様付けをしていたニジだが今ではもうしていなかった。

慣れた、というのが一番の原因だろう。

「はいはい」

そう答え、ベルフェゴールもまた機材の召喚を始めたのだった。

一方、アシュレイはというと……

「ああ、綺麗」

うつとりと自分に贈られた刀を見つめていた。

真っ黒な刀身はまさに闇の存在が振るうに相応しい。

妖艶さと危険さを併せ持ったその刀の銘は「ひな」と冠されたも

の。

「そないに見つめられると……うち、うち、いってまいそうやわあ」
きゃー、と両手で顔を押しさえ、首を左右に振る金髪ゴスロリっ子がいた。

付喪神というのをご存知だろうか。

長い年月を経た道具に宿る神様である。

ひなは長い年月を経た……というわけではないが、アシュレイという霊格及び魔力が極めて高い存在が扱い始めたことで付喪神のよくなものが宿ってしまったのだ。

なお、彼女の容姿は持ち主であるアシュレイの嗜好が極めて影響し、彼女の名前はやはりアシュレイが決めた。

勿論、月詠の存在は千奈にまた面倒なものを、という目で見られたが、そんなことは気にしないアシュレイだ。

対する須臾は金髪っ子を珍しそうに見ているだけだった。

その後、千奈は月詠を名目上は自分の式神ということにして、陰陽寮に報告していた。

アシュレイを含め、千奈は式神使いとしての名が広まり始めていた。

「月詠も見つめていたっていうか、どっちも綺麗っていうか……」
そんな風にアシュレイは言いつつ、手招きして月詠を傍に寄せさせる。

近くにきた彼女を片手で抱いて、もう一方には彼女の本体のひなを握る。

「ああ、アシュ様のお体やわっこいー」

「月詠の体もやわっこいー」

しかし、月詠がぐりぐりと体を寄せ付けてきたので、アシュレイは一も二もなくそれに応じ、2人でぎゅっと抱きしめ合う。

ひなは勿論畳の上に。

「なーなーアシュ様、うちをもつと使つてーな。はよう斬りたいわー」

刀であるから斬らなければ意味がない。

故に月詠が非常に危険な性格であるのは致し方がない。

「使う相手がいないじゃないの」

ひなはアシュレイの力にも耐えられるだけの強度を持っている。

そして、その斬れ味は他の刀の刀身を斬ってしまう程に抜群だ。

しかし、アシュレイの言うように使う相手がいない。

人間形態で帝釈天とか斉天大聖とかのそういった連中と戦う場合なら使うかもしれないが、まずそういった事態が起きない。

アシュレイが自分から頼まない限りは。

「殺生なあ……うちの存在意義……」

しよぼーん、と肩を落とす月詠にアシュレイはぞくぞくとした。

ちなみに彼女は既に月詠を頂いている。

長年の経験と勘からアシュレイは月詠が陣風と同じくDMだということを見抜いていた。

故にそのときも結構無理矢理であった。

「そんなに斬りたいなら、神鳴流でも入ったらどう？」
「アシユ様と一緒にがええ」

ぎゅっと抱きついてくる月詠にアシユレイはだらしなく頬を緩める。

「じゃ、私も神鳴流やろうかしら。暇だし」
「やりまひよやりまひよ」

やってる人間達からすれば憤慨ものだが、アシユレイにとってはそんな程度であった。

しかし、と彼女は想像する。

刀で戦っている自分の姿を。

「……いい」
「ほえ？」

何やら怪しげな笑みを浮かべるアシユレイに月詠は首を傾げた。
そんな彼女にアシユレイは告げる。

「月詠、早速行きましょうか」
「わーい」

神鳴流道場は京の街から離れ、陰陽寮に程近い場所にあった。ありがちな長い石段を登り切った先には立派な門と共に京都神鳴流という大きな看板。

そこまできてアシユレイは勝手に入っているのかしら、と思ったが、まあいいか、と判断した。

須臾の保護者だと言えば万事解決だ。

門の中に入り、声が聞こえる方へと行けば……

「何者か」

凜とした声が響く。

眼光鋭く睨むのは黒髪を一房に結った袴姿の女性。

「魔王だ」

躊躇なくそう返すアシユレイ。

対する月詠は強そうなのができてうずうずと体を震わせている。

「ここは部外者は立ち入り禁止だ」

「須臾の保護者で天ヶ崎千奈の式神もやってて、真・雷光剣を受け止めた明日菜だけだ」

女性の顔色が変わった。

そして、剣呑な空気を彼女は漂わせる。

「うちの刃が通じるかどうか、試してみたい」
「やらせてあげるから、この子を入門させてあげて。そして、通じなかつたらあなたの体を頂きたい」

体と言われその頬を朱に染めるが、ややあつて彼女は頷いた。
通じなかつたら訪れる死の代わりと考えればそれは納得がいく。
死ぬ危険のない中で上位の妖と戦える機会は滅多に無かつた。

「月詠、離れてなさい」
「はい」

アシュレイに言われた月詠は適度に距離を空け、すっかり観客気分であつた。

それを見てとつた袴の女性は腰にある刀を抜き放ち、それをゆつくりと振り上げる。

そして、膨大な気がその刀身に集中し始める。

気については疎いアシュレイもその膨大な流れを感じ取り、思わず感心してしまう。

やがて刀身は帯電し始めた。

「よく人間の身でここまで至つた。名を聞いておこう」
「青山鶴江や……！」

瞬間、鶴江は動いた。

縮地の域にまで達した速さでアシュレイの内懐に潜り込み、その刃を振り下ろす。

神速の刃は斜めにアシュレイの体を斬り裂かんとし……

驚愕に鶴江は目を見開いた。

全力の一撃はアシュレイの着物を斬り裂き、彼女の美しい肢体を

露にする。

だが、それだけであった。

アシュレイは鶴江に対し、にっこりと笑った。

そして、鶴江の体に異変が訪れた。

ピシピシという音が彼女の両腕から鳴り始め、やがて刀と共にその骨が完全に砕け散った。

「あ、ぐ……」

痛みに耐えかね、彼女は両膝をつき崩れ落ちた。

「硬いものを殴ったら拳を痛める。それと同じことよ」

そう言うアシュレイはいつのまにか着物を纏っていた。

先ほど着ていたのも、今着ているのも千奈が用意してくれたものだ。

何だかんだ言いながら、彼女は世話焼きであった。

アシュレイは鶴江の腕の時間を巻き戻し、ついでに刀も巻き戻して元に戻す。

「で、いいかしら？」

不思議そうに両腕を摩る鶴江にアシュレイは問いかける。

「ええでっしゃる。約束は約束おす……」

そう言いつつ、その白い頬を朱に染める。

「う、うちは嫁入り前で……その、婚約者とかもおらんで……は、初めてやから……」

そんな彼女にアシュレイはもうここで美味しく頂こうか、と真剣に悩む。

人間に関わり始めてから彼女の女運は上昇傾向であった。

「あのー、うちの入門ー」

そう言う月詠は息が荒かった。

こっちも色々和我慢ができないらしく、ある意味、アシュレイとは似たもの同士であった。

彼の名は……！（前書き）

独自設定・解釈あり。

彼の名は……！

外から聞こえる蝉の声。

風に吹かれ、涼しげな音を奏でる風鈴。

初夏の日差しを簾が遮り、アシュレイは天ヶ崎家の居間にてエヴァンジェリンからの報告書を読んでいた。

中東地方へ侵攻を開始したエヴァンジェリンは侵攻開始から半年足らずでエルサレムを確保し、そこにあった聖遺物をはじめとしたその他諸々をアシュレイへと送った。

その後、エヴァンジェリンはエジプトへと進み、本格的なアフリカ侵攻を開始した。

勿論、元々彼女に与えた軍勢だけでは到底数が足りないのので、万単位の援軍が追加されている。

その援軍は勿論、洗脳済みの吸血鬼兵士だ。

ともあれ、ヨーロッパを叩いた方が後ろが安全になるが、そうしなかったのはアシュレイの事情だ。

突如として現れた吸血鬼の恐怖はヨーロッパにも広まり、また、先の教会墮落計画により、無知な庶民達はキリストなどではなく、アシュタロス……すなわち、アシュレイに祈り始めていた。

神々アシュタロスという図式が十分に浸透したことにより、そうなった。

そのおかげでアシュレイはその力がより増しつつあった。

可能な限り力をつけてから、というアシュレイの要請をエヴァン

ジェリンが呑んだ形だ。

ヨーロッパを攻撃すれば当然死者が出る。その分、信仰が減るのは今の段階では頂けなかった。

正直、アシュレイはもう十分過ぎる程に強大なのだが……

「ふむ……問題ないわ」

アシュレイは報告書の束を地獄へと送還する。

彼女からすれば満足のいく成果をエヴァンジェリンは上げている。そろそろお昼かしら、とアシュレイが思ったそのとき、千奈がやってきた。

お盆にはそうめんの入った器が。

「明日菜、今日はそうめんやで」

「またそうめん……もっとうまいもんくわせろー」

ブー垂れるアシュレイに千奈は溜息一つ。

「わがまま言わない。毎日いいもん食ってたら体に毒やわ」

「私は王様だからいいの」

「駄目や。ここはウチの家、せやから魔王だろうが閻魔だろうが仏だろうが家主には従ってもらうで」

「生活費入れてるのにー」

「それでも駄目や。須臾と月詠呼んできてな」

「へいへいほー」

適当な返事を返して、アシュレイはふわりと浮かび上がった。

ふよふよと空中を漂いながら、アシュレイは裏庭にある鍛錬場へ。道場に行っていないとき、須臾と月詠は大抵ここで斬り合っていた。

それは木刀などではなく真剣を使った殺し合い。

何しろ、アシュレイというとんでもない存在がいるおかげで死んでも蘇らせることができってしまうからだ。

ただ問題点が一つ。

「ああ、ええわあ……先輩、うち、いつてまいそう……」

月詠である。

何かを斬ることに至上の快楽を感じるこの困ったちゃんは強くなる為に、自分を殺す気がかかってきてくれる須臾に非常に好意を抱いていた。

神鳴流の先輩であるから先輩と呼び始めた月詠であったが、今ではそこに色々な感情が混じっているのは言うまでもない。

「……いい修行相手なんだけど、なんだけど……」

嫌そうな顔の須臾。

彼女は一応、ノーマルである。

だが、アシュレイに求められたら須臾はほいほい応じてしまう。
月詠は女でアシュレイは両性具有。

微妙な点だが、須臾にとっては譲れない一線だったりする。

「はい、ここでアシュ様登場。はい、死んだー！」

唐突な声と共に須臾と月詠が地面にめり込んだ。

びきびき、とそんな音と共に更に深くめり込んでいく。

「ちょっと重力40倍くらいにしてみたんだけど、やっぱり私が最強ってことで」

高笑い。

弱い者イジメ甚だしいが、アシュレイは弱いヤツを蹴るのも好きだから全く問題なかった。

そして、アシュレイは重力を元に戻し、ついでに複雑骨折しただろう須臾を治癒する。

月詠はひなが消滅しない限り勝手に復元するので問題がない。

「お嬢様、今度からは月詠だけにしてください」

「須臾をイジメてみたい。そんな気分があります」

そう言われた須臾はしばし戸惑った。

そして、彼女の頭の中で展開される桃色空間。

よいではないかよいではないか、あーれー

「……いい」

「ごくり、と思わず唾を飲み込んだ須臾。

朱に交われれば何とやら、アシュレイの影響を存分に受けている彼女である。

「あーん、アシュ様」

そんな甘ったるい声と共にアシュレイに擦り寄る月詠。

須臾も好きだが、持ち主であるアシュレイはもっと大好きな彼女だ。

犬みたいに懐いてくる月詠をアシュレイが可愛いがるのは言うまでもない。

擦り寄ってきた月詠の頭を撫でつつ、アシュレイは用件を告げる。

「昼ご飯ですって。そうめんですって」

「偶にはお肉が食べたいです」

「血の滴るお肉がええです」

烏族の須臾は勿論、月詠もお肉大好きであった。

「何だかんだ言いつつ、全部食べたやないか」

呆れ顔の千奈。

卓袱台に置かれていたそうめんの大皿はすっかり空だ。

「食後の何かちようだい。ナウク言っちゃつとでざーとぶりーず」

明日菜の要望に千奈は溜息一つ。

「何やそれ……ちよう待つとき」

彼女はそう答えると食器を持ち、居間から出て行った。

それを見送るとアシュレイは月詠に抱きついた。

柔らかい感触にその頬を緩ませる。

そんな彼女に不満気な視線を送る須臾。

愛する先輩の為に、と月詠が念話でアドバイス。

そのアドバイスに従い、須臾はアシュレイに抱きつき、その感触を堪能する。

抱きつかれたアシュレイは嫌がるどころかむしろ喜び、片手で月詠を、片手で須臾を抱き寄せた。

「……そういえばそろそろエヴァを……」

アシュレイはふとあることを思い出した。

悲惨な目に遭わされたエヴァンジェリン。

そんな彼女は既に両親に復讐を果たしているが、もう一つ、果たさねばならない組織がある。

「デザートの後でいいか」

アシュレイはそう呟くと須臾と月詠の感触を楽しむことにしたのだった。

エヴァンジェリンは安楽椅子に腰掛けていた。
彼女の横手には大きなベッドがあり、そこには全裸のソフィアが
すやすやと寝息をたてて眠っている。

エヴァンジェリンは彼女とベッドの上で戦った後、ゆっくりとワ
インを飲みつつ月夜を眺めるのが好きであった。

エヴァンジェリンが今、いるのは中東の砂漠……ではなく、東欧
に造った彼女の城だ。

魔法による通信機という非常に便利なものがあるので、何も彼女
が最前線で指揮を取らねばならない、ということはない。

アシュレイはエヴァンジェリンに兵隊だけを与えたのではなく、
必要な装備や機材の面倒までみていた。

金持ちは太っ腹なのである。

今のエヴァンジェリンの生活は優雅の一言に尽きる。

必要なときだけ兵隊に指示を出し、アシュレイへの報告書を書く

だけだ。

余った時間、エヴァンジェリンは趣味の人形作りに精を出したり、ソフィアを抱いたり、鍛錬したり、読書したりしていた。

「しかし、順調に過ぎる」

エヴァンジェリンは呟く。

魔法使い達や傭兵達などは組織だって抵抗しているものの、それは儚い抵抗に過ぎない。

所詮は人間。

過酷な環境でも生き抜ける吸血鬼とは違い、酷く脆弱な上に寿命も短い。

また、英仏は相変わらず戦争をしており、吸血鬼のことは耳に入っているものの、お互いが遠い世界の話、と思っている。

そうでなければ即座に一時的に休戦し、対吸血鬼同盟でも結んでいる筈だ。

「つまらんな……やはり人間は愚かであったか……」

そう言い、エヴァンジェリンはグラスを呷る。

空になったグラスを傍のテーブルに置き、彼女は同意を求めるかのように告げた。

「そうは思わないか？ 夜に淑女の部屋に忍びこむ変態さん？」

彼女の声に僅かに空気が揺れた。

そして現れる大柄な男。

その顔には奇妙なメイクが。

「……さすがの私もその化粧はどうかと思うぞ」

ピエロというよりか、どっかの秘密結社のヤラレ役とでもいった方がしっくりくるメイクを男はしていた。

「これは失礼を……何分、同輩に会ったのは初めてでして……」

そう言いつつ、その男は頭を下げた。

「で、お前は誰だ？ 吸血鬼のようではあるが……」

エヴァンジェリンの問いに彼は頭を上げ、告げる。

「私はダイ・アモン。あなたについてはそれなりに知ってはいますよ、エヴァンジェリン・マクダウェル」

その言葉にエヴァンジェリンはピンとくる。

「グレゴールの知り合いか？」

「彼とは良き友でしたが……少々、道が違いましてな」

エヴァンジェリンは目を細めつつ、指を動かそうとすると……

「私はあなたの敵ではありません。むしろ、あなたのお仕える方にお仕えしたい、と思ひまして……」

エヴァンジェリンは自らの指を動かすのをやめた。

もし、彼が言うのが僅かでも遅かったなら、彼女の糸でもって輪切りにされていただろう。

エヴァンジェリンは敢えてタイミングを図っていただろうダイ・

アモンのお茶目さにくつくつと笑ってしまっ。

「私は自らがより強く、美しくなりたい為に吸血鬼となる術を模索しましたが、グレゴールは人類の為というくだらないことの為に模索しました。そんな馬鹿げたことの為に金と労力を費やすなど無駄に過ぎません。たとえ神魔族に滅ぼされずとも、自分達で殺し合うでしょう」

「なるほど……だが、疑問はある。なぜ、私が仕えていると分かったのか？」

その問いに彼は答える。

「簡単なことです。あそこには悪魔崇拝者として有名なレイチエルがいた。そこにあなたもいた。そして、そこを襲ったのはアシユタロス配下の、数百万を超える上級魔族」

「そして、そこで消えた私が、今になって出てきたからピンときた、と」

彼の言葉に続くようにエヴァンジェリンはそう呟く。

彼女の言葉に彼は頷き、肯定する。

「グレゴールと道を違えたのはあなたが吸血鬼となる5年前の話。その後、私は真祖となる術を見つけました」

その言葉にエヴァンジェリンは数秒の間を置いて告げる。

「お前の件については私からアシユ様へ連絡しておこう」

「よろしく頼みましたよ」

今までに出てきたアシユタロス一派のまとめ(前書き)

要望があったものとはちょっと違った感じになっているかも。
Rainさんに描いてもらったイラスト追加ッ！

今までに出てきたアシユタロス一派のまとめ

アシユレイ

本作の主人公。

元人間で世界の滅亡を防ぐ為にキーやんとサツちゃんにより半ば強制的に別世界に送り込まれた。

今はもうその滅亡も回避されて、立派な魔王となっている。

イシュタル、イレーシユア、明日菜など色々な名前があるが、よく知られているのはアシユタロス。

彼女は送られた世界で神話や宗教などに出てくる、あのアシユタロスとなった。

吸血鬼であり淫魔である為、純粋な魔族ではない。

恐怖公、黒翼公、勇壮にして強大な地獄の大公爵、邪悪で狡猾な竜などが異名として存在する。

性格は元々は極々普通であったが、今ではもう完全に悪魔。

自分を崇める人間に対しては非常に友好的だが、それ以外は表面上は優しくふるまっても、実際は家畜としか思っていない。

従者や淫魔、部下にはそれなりに優しいが、超猟奇プレイをすることもあるので微妙である。

顔は非常に可愛いらしいが、その頭にはヤギの角、背中には真っ黒な翼があり、そして両性具有である。

髪は黒色で背中の中半ば辺りまで伸ばし、その瞳は紅。

また、体は好きに変えることができる為、14歳程の少女形態から20歳程度の大人形態まで幅広い。

地獄にある彼女の城は万魔殿と同じくらいの広さを誇る。

41の軍団を持ち、8000万を超える部下（淫魔や創りだした種族含）を従えるベルゼブブと並ぶ地獄のNo.2。

その力はサタンよりも僅かに劣る程度であり、彼女が全力出したら地球どころか太陽系が危ない。

また、その頭脳は三界一と謳われており、新しい種族を創りだしたりしている。

> i 3 0 3 1 1 — 2 2 9 6 <

アシユタロス

平行世界のアシユタロス。

アシユレイの先生兼保護者。

アシユレイが一応女の子？であるのに対し、こちらは一応男性。

基本神魔族に性別はないか、両性具有である。

体そのものを变化できるので、彼もまた女になったりもできるので両性具有といえるかもしれない。

コスモプロセスを作ったり、究極の魔体を作ったりとハルマゲドンを起こす、もしくは世界を創造しようと頑張っていた。

その目的は完全な自己の消滅。

大きな力を持つ者は神魔族のバランスを保つ為、魂の牢獄に囚われ、永遠に生き続けなければならぬ。

その状態ではたとえ死んだとしてもすぐに蘇る。

元々はイシュタルと呼ばれる女神（＝神族）であった彼はキリスト教の広まりにより、悪魔とされ墮天使、アシュタロスとなった。永遠に悪であり続けなければならない魔族（＝悪魔）であることに耐え切れず、そこから逃れようとした為に彼は最も邪悪な存在となった。

彼はアシュレイに自らの知識を教えていくうちに彼女を生徒だけでなく、娘のように思い始め、当初は1000年であった家庭教師期間を大幅に延長し、彼女と共に過ごした。

最後にアシュレイへのプレゼントとして城を造り、彼女の世界を後にした。

その後、彼は自分の世界で魔神大戦、もしくは核ジャック事件と呼ばれる大騒動を引き起こし、当初の予定通りコスモプロセスを使い、全ての次元でアシュタロスはアシュレイである、と宇宙意思を誤認させ、更に彼の世界とアシュレイの世界は平行世界であると関連づけさせた。

それにより彼は魂の牢獄から解放され、安息を得た。

テレジア

アシュレイの初めての使い魔。
金髪を三つ編み団子にしており、その瞳は翠。

わりと胸は大きく、両性具有。

ゴスロリチックなメイド服を着ている。

全ての情報・報告は彼女の下に届けられた上でアシュレイに報告される。

アシュレイの初めての相手であり、彼女が処女をあげた相手でもある。

あまり戦闘の場には立たないが、その実力はベアトリクスやシルヴィアに並ぶ。

ベアトリクス

アシュレイの2番目の使い魔。

テレジアと同じく金髪を三つ編み団子にしており、瞳は翠。

ベアトリクスは少年のような顔立ちであり、その胸もまた貧しい。軍のトップであり、人間形態においては剣を扱う。

どんなに損害を出しても、最後に勝てばいい、というアシュレイの方針に則って作戦を立て、勝利を幾つも納めている。

シルヴィア

アシュレイの3番目の使い魔。

銀髪紅眼の長身で爆乳。

いわゆるクールビューティーであるが、アシュレイの前ではデレデレ。

近衛 親衛隊 軍と所属が二転三転した可哀想な使い魔。

結局、アシュレイがめんどくさくなつたので近衛やら親衛隊やらは廃止された。

ベアトリクスが軍全体のトップであるのに対し、シルヴィアは現場のトップ。

人間形態ではベアトリクスと同じく剣を扱う。

ディアナ

黒髪をロングにし、背中にコウモリのような翼がある。

肉感的な女性。

何よりも凄いのはその胸。

悪魔なのに神秘的かつ神聖的な胸を誇る。

シルヴィアよりもそのサイズは大きい。

アシュレイが半殺しにして隷属を迫って、あっさりと部下になつた。

エシユタル

金髪を背中の中半ば辺りまで伸ばし、頭には渦巻状のアモン角、その耳は尖っており、背中からは小さな翼が生えている。

地獄の最下層生まれ。

強い魔族に媚を売って生きていたが、その媚を売っていた魔族がアシュレイに喧嘩を売って瞬殺され、命が助かるなら、とアシュレイの部下となつた。

当時僅か100歳でアシュレイに美味しく頂かれる。

また、アシュレイの要望もあって成長した今もその当時のままの、子供形態でいることが多い。

大人形態ではシルヴィアに並ぶ爆乳。

比較的真面目であり、からかわれることを嫌う。

フェネクス

墮天する前の名はミカエル。

金髪を長く伸ばし、翠の瞳に褐色肌。

やっぱり胸は大きい。

元々は敵同士であったが、奇妙な縁、そして天使の待遇の悪さとセクハラが嫌で墮天し、アシュレイの下へやってきた。

その実力は神界・魔界に知れ渡っている。

長いことアシュレイによる放置プレイを食らっていたが、最近ようやくアシュレイに美味しく頂かれた。

性格は真面目であるが、お茶目な部分も。

レイチエル

灰色髪を三つ編み団子にし、灰色の瞳をしている。

ソドムとゴモラの住民であり、アシュレイの崇拝者であるエナベラの末裔。

各地を流浪し、悪魔崇拝者ということから追われたり、と散々な目に遭ってきたが、最後に報われた。

アシュレイと共に永遠を生きることを望み、人間であることをやめる。

彼女もまた齊天大聖孫悟空に師事し、その腕を上げた。

また、彼女だけが使えるアシユレイが教えた魔法は治癒や補助魔法がほとんどだが、治癒魔法を応用した対人に関しては万能の技を扱える。

エヴァンジェリン・アタナシア・キティ・マクダウエル

元人間の現真祖。

人類を神魔族から守護する為に、と生贄にされた悲劇の少女……だったのだが、別に人間でなくてもいいんじゃないかね？と開き直って毎日楽しく過ごしている。

彼女を吸血鬼にした叔父のグレゴールは彼女自身の手で殺し、また両親や弟も復讐を果たした。

母親を若返らせて不老不死にした後、嫁として迎えた。

人間のラテン語の魔法に熟練する他、対神魔族用にとんでもない魔法を編み出している。

エシユタルと齊天大聖孫悟空を師匠にし、その強さは中級魔族を超える。

レイ

エヴァンジェリンが創りだした使い魔。

人形ではなく、見た目は普通の人間の少女。

ただ、言葉遣いが少々荒っぽい。

身の回りの世話とエヴァンジェリンが出るまでもない戦闘を行わせる為に、その性格はそれなりに危険。

ニジ・レイニーデイ

辺境で公爵を名乗っていた悪魔の娘。

双子の妹にザジがいる。

語尾にポヨとつけるのは方言。

人身御供としてアシュレイに差し出された。

頭が良く、非常に優秀。

妹と同じくプリン大好き。

ベルフェゴール

元々は神であったが、ハルマゲドンにより悪魔とされた。

絶望し、洞窟で失意の日々を過ごしていたところをアシュレイに発見され、配下となった。

極めて優秀であり、技術部門の要。

わりと好色であり、淫魔をラボに呼んで発散することも。

茶髪を長く伸ばし、紅い瞳をしている。

陣風

艶やかな長い黒髪、2本の角がある。

元々は帝釈天配下の下級鬼神であり、羅刹女。

一般的に羅刹男は醜く、羅刹女は美しいとされるが、その例に洩れず彼女もまた美しい。

ハルマゲドンの最終決戦場においてアシュレイを間近で見、色々な意味で一目惚れ。

ドMである。

リリス

淫魔。スレンダー系美女。

背中にあるコウモリの如き翼、セミロングの美しい銀色の髪に紅い瞳が特徴的。

実は子持ちで、リリムという娘がいる。

アシュレイのお気に入り淫魔だが、今は出番が少ない。かつて、でしゃばり過ぎた為に大変なことになった。

現在は淫魔の取り纏め役であり、教会墮落計画の一環として教皇に媚を売っている。

リリム

淫魔。母親と同じく銀髪で紅い瞳。

アシュレイのお気に入りとなりリリスを妬み、放逐したものの、バテて大変なことに。

その後、母親とは一応和解し、親子関係は修復されている。

リリスと同じく、教会墮落計画の一環として教皇に媚を売っている。

月詠

妖刀ひなの化身。

斬るのが大好きな困ったちゃん。
彼女の容姿は持ち主であるアシュレイの嗜好が多大に影響している。

ドM。

須臾

烏族の忌み子。

純白の翼と純白の髪を持つ。

幽閉されていたところをアシュレイが発見して拉致した。

何だかんだで助けてくれたアシュレイのことをお嬢様と呼ぶ。

そんな彼女は一応ノーマルだが、両性具有のアシュレイはOKであることから、微妙なところである。

天ヶ崎千奈

陰陽の大家、天ヶ崎家の現当主。

かつては巨大派閥であったが、彼女の両親が妖魔に殺されてからその派閥も瓦解し、近衛家がハバをきかせている。

とはいえ、近衛家との関係は険悪なものではない。

符術や儀式術など全ての分野で超一流であるが、最近では式神使いとしての名が広まったりしている。

アシュレイを使役する条件として処女を差し出した。

口が悪いときもあるが、何だかんだで優しい。

フレイヤ

北欧神話に出てくる女神フレイヤ。

金髪碧眼白い肌で巨乳のお嬢様。

アシュレイがハルマゲドン終わった後、そろそろ結婚したいということで神魔交流会の開幕で嫁にする、と宣言した。

性的に奔放な性格であり、神界のアシュレイ。

元々結婚していたが、夫は耐え切れずに離婚。

それ以後、神族の男女問わずに口説き、ちょっとした騒動を引き起こしていた。

彼女の容姿がいいことから拒む輩は極めて少なく、浮気したことがバレないように、と当事者達が口を閉ざした為に公には知られていない。

若い神族達は高嶺の花であり、憧れの存在。

アシュレイとの結婚話に色々妄想して長い間、会うこともしないという偉業を成し遂げた。

アシュレイと密会するときは非常にマニアックなプレイをしているらしい。

ヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマン

辺境で伯爵を名乗っていた悪魔だが、アシュレイの陣営に加わる際、そう名乗るのをやめた。

かつては中級程度の実力であったが、ハルマゲドンで常に最前線に派遣された為に伯爵の位をアシュレイから与えられ、さらに最終決戦時には上級魔族程度の実力となっている。

その力は座天使に匹敵する。

ハルマゲドン後、最終決戦の場において軍団を引き上げる纏め役となる、領地防衛などの功績により侯爵となった。

何だかんだで一番重要な場面に登場してくる悪魔で、わりと穏やかな性格をしている。

後述するコンロンとは地獄の社交界で知り合った仲で地位を超えた友人。

コンロン

子爵の位を持つ墮天使。

元々はサタン率いる地獄政府で公務員として働いていたが、アシユレイに興味があり、意を決して辞表を提出。

ヘルマンによる採用試験？の後にめでたく彼の秘書として採用された。

地獄の社交界にこの悪魔あり、と謳われる紳士であり、ヘルマンとは地位を超えた友人。

テリアナ

紫髪の下級魔族の少女。

酒場で働いていたところをシルヴィアに拉致された。

以後、アシユレイの城でメイドとして働くことに。

話には出てこないが、今ではメイド100人を従え、それなりの地位にいるようである。

エリシア

金髪ツリ目の気の強そうな少女。

魔族専用の娯楽施設でアシュレイがお持ち帰りした。

その後、調教され、完全にアシュレイに服従してしまった。

超バランスブレイカー（前書き）

独自設定・解釈あり。

超バランスブレイカー

エヴァンジェリンは教皇領　　現在でいうバチカン市国にやってきていた。

アヴィニヨン捕囚により、権威を失ったかに見えたが、それも昔のこと。

アシュレイが裏から支援したことにより教皇領は再び輝きを……否、かつてよりも輝いていた。

聖職者であるにも関わらず、その領内にある高位の聖職者達の屋敷は絢爛豪華であった。

そして、その中でも一際大きな屋敷がエヴァンジェリンの目的地であった。

彼女は警備の騎士に案内され、屋敷の中へと通された。

応接室で待つこと数分。

「これはこれは……よくぞいらっしやられました」

やや小太りの煌びやかな法衣を纏った男が現れた。

その背後には銀髪紅眼の女性が2人、従っている。

エヴァンジェリンにはすぐにその女の正体が淫魔である、と分かった。

「教皇猊下、私はさる方からここに来るよう言われたのだが」

一応、エヴァンジェリンは敬語である。

たとえ、目の前の男の命が残り数時間であるとしても、今はまだ教皇である。

「おお！」

男 教皇は大げさに両手を広げ、そして背後を振り返った。

「お前達！ あとで存分に愛でてやろう！ よく願いを叶えてくれた！」

その言葉に銀髪の淫魔2人……リリスとリリムは愛想笑いを浮かべるだけであった。

彼女達からすればようやくお役御免となるので嬉しい限り。

「で、私は何をすればいいのか？」

エヴァンジェリンは爆笑したが、それを何とか堪えつつも尋ねる。

彼女からすれば自分を吸血鬼とし人類の守護者にしようとした連中のボスが目の前で、欲望の為に自分に対して願うのだ。

これほど痛快なことはない。

「私をはじめとした希望する者を不老不死にして欲しいのです」

エヴァンジェリンは笑い転げたくなるのを気合で抑えこみつつ、険しい表情となって問いかける。

「不老不死となるには苦行を乗り越える必要がある……死の危険があるものだ……それでもいいか？」

「構いません。多少のことは仕方ありません」

「そうか……ならば早速やるとしよう……」

そう言いつつ、エヴァンジェリンは淫魔2人にウィンクしてみせる。

そんな仕草に2人はくすくすと笑う。

「ここよりもなるべく人が来ないところがいい」

「ならば地下室を提供しましょう」

教皇はこちらへ、とエヴァンジェリンを案内したのだった。

そして、数時間にも及ぶ苦行と称した拷問が加えられ、この日、彼は死亡した。

明けて翌日。

エヴァンジェリンは接待を受けていた。

彼女は豪華な椅子に座り、目の前の愛想笑いを浮かべる煌びやか法衣を纏った男達を見ていた。

彼らは枢機卿であった。

「真に遺憾にございます。先代の猊下はどうかやらない不老不死となる資格がなかったようで……」

そう言いつつ、へこへこしている枢機卿の1人。

「前置きは構わん。用件は手短かに、だ」

エヴァンジェリンの言葉にその枢機卿が改まって告げる。

「あなたが我々を不老不死にしやすいよう、ここに滞在できる理由を作る必要があります」

「確かに。それで、私にどういう地位を用意してくれるのかな？」

試すようにそう言うエヴァンジェリンに枢機卿は告げる。

「あなたには教皇となっていたいただきたい。そうすれば我々を呼んでも何ら不自然ではありません」

「女教皇なんぞ聞いたことがないが？」

「そこらへんは心配がないと思います。あなたは両性具有の筈です。見た目が女であっても実は男であれば何ら問題は……」

悪魔「両性具有というのは決して特殊なイメージではない。

エヴァンジェリンはなるほど、と頷きつつ、気になっていたことを問いかける。

「私の容姿や名を知って何か思うところはるか？」

その言葉に枢機卿達はそれぞれ顔を見合わす。

その反応を訝しく思い、彼女は更に問いかける。

「結構前、神魔族から人類を守る為に吸血鬼を作ろうというのを耳にしたことがあるのだが……」

それで彼らは納得がいったらしい。

「あの計画は失敗に終わりました。我々を恐れた恐怖公に察知されて」

エヴァンジェリンは思わずくつくつと笑う。

そうなっているのは彼女にとっても都合がいい。

つまり、エヴァンジェリン・マクダウエルが生贄にされたということは表に知られていない。

名前と容姿を知っているのは彼女の両親とグレゴール、他にあの城にいた連中のみ。

そして、彼らは全員死亡している。

目の前にいる計画に協力した連中は顔どころか名前も知っていない。

エヴァンジェリンが好きに動いたところで吸血鬼と結びつけるのは中々に難しいだろう。

何しろ、彼女は日光の下を歩き、川で泳ぎ、銀の食器を使うのだから。

「ああ、ところで教皇になるなら姿を変えておいた方がいいかな？
このままでいいなら構わないが」

なんだかんだでエヴァンジェリンは13、4歳程度にまでなっている。
その胸はもはやぺったんこではなくそれなりに大きなものだ。
髪は腰辺りまで伸ばしており、顔の良さも相まって非常に美しかった。

「どちらでも構いません。民衆は我々の制御下にありますので」

エヴァンジェリンは再び笑う。

人間そのものが、神魔族の制御下にあるということを知っている者からすれば滑稽にしか見えない。

たとえ人間がどういきがったところで神魔族には敵わない。

エヴァンジェリンは神族はともかく、魔族のとんでもなさには十分に理解していた。

「ではこのままの格好で堂々といこう……」

こうしてエヴァンジェリンは最高権力者となった。

アシユレイの支援による十分に腐敗した教会の象徴といえよう。

どこの誰とも知らぬ者を、自分達のトップに据えるなんぞ正気の沙汰ではない。

ともあれ、こうしてエヴァンジェリンの復讐は全て完全に達成された。

生贖にされた少女がそうした教会のトップに君臨する……これほど最高の復讐は存在しなかった。

その頃、ダイ・アモンは地獄にあるアシュレイの城にいた。
そこで彼は運命的な出会いを果たしていた。

無言で彼は見つめる。

その視線の先にいるのは老紳士と筋肉質な紳士。

「同志よ！」

ほぼタイムラグなしで彼らは手を握り合っていた。

何かもう魂的なレベルで彼らは互いに互いを友だと感じ取っていた。

「私はダイ・アモンです。以後、よろしく頼みます」

新参者であり、実力的に最も下であるが故に彼は最初にそう名乗り、頭を下げる。

「私はコンロンだ。一応、子爵であるが……そういうのは抜きにしてくれたまえ」

こちらもまた軽く頭を下げ、再び握手を求める。

その求めに応じ、ダイ・アモンはぎゅっと手を握る。

「そして、私はヴィルヘルム・ヨーゼフ・フォン・ヘルマンだ。侯爵だが……立場を抜きにした友人になりたいと思う」

こちらも握手を求め、それにダイ・アモンは応じる。

「しかし、地獄とは聞いていたものとは少々違う。このような紳士がいるとは……」

「いや、ここが特殊なだけさ。何しろ、アシユタロス様は地獄の魔王にして先の戦争の英雄なのだよ」

ヘルマンの言葉にダイ・アモンは興味深い単語に反応を示す。

「どういうことですか？ 先の戦争？」

「ああ、ハルマゲドンが数千年程前に起こってな。その際にアシユ様は数々の武功や偉業を成し遂げ、地獄の英雄として称えられているのだよ」

ヘルマンの言葉にダイ・アモンは目を剥いた。

「もしかしてハルマゲドンは既に起こったのですか？」

「起こったとも。私は元々は天使であったが、その戦争の後、サタン様についてここにやってきた」

ダイ・アモンは思わず体を震わせる。

それは歓喜と興奮であった。

自分が、より高みの存在と出会えたこと、そして自分もまたその高みに至れるかもしれない、というもの。

まさに彼からすれば神話に遭遇しているようなものだ。

そうならないわけがない。

「アシユ様は偉大な御方だ。ただあまりに偉大過ぎてよくわからないところもあるが……あの御方の御心は我々如き下位の者では計り知れない」

なるほど、とダイ・アモンは頷きつつ、問いかける。

「ところで私は採用なのですか？ エヴァンジェリンからとりあえず地獄に行けと送られたのですが」

その言葉にヘルマンが答える。

「採用だとも。基本的にアシユ様は来る者を拒まない。それが魔の者であれば尚更だ。ただ、アシユ様に謁見するのは今は極めて難しい」

彼の言葉に続き、コンロンが告げる。

「今、アシユ様は人間界でバカンスの最中だ。とても面白いことに一時的に人間の配下となっている。ああ、あと、人間の子守も始めたらしい」

ダイ・アモンは思わず耳を疑う。

終末の竜とも称されるあのアシユタロスが人間が従えるなんて、性質の悪い冗談にしか聞こえなかった。

そのアシュレイは京都でのんびり過ごしていた。彼女は現在、近衛家に遊びにきている。

天ヶ崎家と近衛家は仲が悪いように思われているが、実はそんなことはなく、共に陰陽師のライバルとして、また仲間として仲は良いのだ。

「なあ、明日菜。これ、どうや？」

その声を掛けるのは近衛家の一人娘、近衛紅葉。今年で14歳となる彼女の手には彼岸花が。

「綺麗な花じゃない」

そう言う彼女に紅葉はえへへ、と笑い、自らの頭に彼岸花を添えてみせる。

それにアシュレイはほう、と感嘆の声を洩らした。

彼女の黒髪にその彼岸花は非常によく似合っていた。

紅葉の白い肌に相まって、まるで彼女が死人のように見える。そして、それは紅葉の境遇を示している。

アシュレイは知っている。

紅葉が近衛本家の1人娘であるにも関わらず、その魔力が極めて少ないことに家族以外の連中からよろしくない目で見られていることを。

そんな紅葉に遊び相手を、と千奈がアシュレイを派遣したことが交流のきっかけであった。

アシュレイからすればそんなことは全く気に掛ける必要もないので、極々普通に紅葉の遊び相手となっていた。

さすがのアシュレイもそんな紅葉をいきなり頂くようなことはしなかった。

今のアシュレイは一応千奈の式神。

ならばこそ、ある程度は弁えなければならなかった。

「明日菜はええ子やなあ」

唐突な言葉にアシュレイは首を傾げる。

「ウチによつ付き合ってくれて……いろんなこと教えてくれて……これが友達っていうのかな……」

照れたように顔を俯かせる紅葉。

そんな仕草にアシュレイはごくり、と唾を飲み込むがグツと我慢する。

「あんな、ウチな……もしかしたら殺されるかもしれへん」

「……何かとんでもない言葉が出てきたわね」

軽い口調でそう言う紅葉にさすがのアシュレイも呆れてしまう。

「分家の過激なんが、これじゃ面目が立たないって言うてるみたいんよ」

「普通なら幽閉とかで済む話じゃないの？」

「自分の家の格を上げたいんやる。そうなるにはウチを殺した方が早い。ウチの子供が、優れた才能を持つとは限らん」

紅葉はそこまで言った後、数秒の間をあけてからさらに告げる。

「近衛は一枚岩とは言えへん。現当主の排除派はさすがにおらんけど、それでも過激なんは仰山おる。次の当主になりたいのは掃いて捨てるほどおるんや」

「で、それを私に言ってどうするの？」

「明日菜に迷惑はかけとうない。明日菜が強いんはウチにも分かるけど……無関係な権力争いに巻き込みとうない」

「まあ、私が本気出したら日本統一どころか世界統一しちゃうしね」

その言葉に紅葉はくすくすと笑う。

「ウチ、明日菜のそういうところ好きや。何か自分のことがちっぽけに思えてくる」

「じゃ、妾になる？」

「嫁やないんか？」

「もう婚約者がいるの。わりと本気で」

紅葉は驚くどころか納得したように数度頷く。

「男のアレもあるんやったな。そういえば。ウチ、父様の以外で初

めて見たで……」

近衛家に泊まる時は一緒にお風呂に入って一緒に寝ていたりする。

「まあ、私くらいになると妾の100万や1000万は当然なの」

「それやと密度が低そうやなあ」

「加速空間で時間伸ばすから大丈夫よ……ところで、あなたも相当アクドイわね」

アシュレイの言葉に首を傾げる紅葉。

そんな彼女にアシュレイは溜息一つ。

「わざわざそんなことを言っつてことは私に助けて欲しいってことなんでしょ？」

「そりゃウチかて死にたくあらへんよ。やから、助けれたら助けて欲しいなって」

ただなあ、と紅葉は続ける。

「明日菜がどのくらい強いかわちは勿論、千奈さんもよう分からへんねん。分家いっても、腕利きはいっぱいある」

そういえば、とアシュレイは思い返す。

千奈に使役されて以来、真・雷光剣を防ぐくらいで実力を全く発揮していないことに。

式神の本業である戦闘を全くしていないことに。

「それじゃ私の実力を示す為にちよつと空を変えるわ」

おお、と紅葉は驚きの声。

そして、わくわくした顔をアシュレイに向ける。

「天気っていうか、皆既日食よ」

そう告げ、彼女は両手を天にかざす……などということもせず
ただ己の魔力を使い、念じた。

するとどうしたことが。

真昼間なのに徐々に空が暗くなっていく。

紅葉は目の前で起きた超常現象に目を見開いた。

太陽が徐々に黒い影 月に侵食され、光が消えていく。

やがて日光は完全に月に遮断されてしまった。

地上を闇が覆う。

そして、アシュレイは普段は隠しているヤギの角と黒い翼を出し、
着物からワンピースに瞬時に着替えた。

空を見ていた紅葉をアシュレイは呼ぶ。

その声に彼女はゆっくりと視線をアシュレイへと向け、思わず唾
を飲み込んだ。

「我が名はアシュタロス」

紅葉はその名を聞いた瞬間、体の震えが起こった。

ガクガクと揺れ、立っていられない程に。

冷や汗が流れ落ち、呼吸は荒くなっていく。

そんな彼女にアシュレイはヒーリングをし、体調を整える。

「う、可愛い……」

涙目の紅葉にアシユレイは胸を張る。

「恐怖公って呼ばれてますっ」

普通、人間から魔物へとなった者は他者に怖がられたら、落ち込んだり悲しくなったりするところだが、アシユレイからすればそう思われるのは誇らしいことであった。

彼女のように思えることが完全な魔族となる為の必須条件の一つといえる。

何しろ、人間に怖がられて悲しいという気持ちは人間的感情であるからだ。

「明日菜って実は凄かったんやね」

涙を拭いつつ、そう言う紅葉にアシユレイは問いかける。

「紅葉、上げて落とした方がショックで死ぬるからそうするね」

「せやな。ウチ、わりと穏やかやと思うけど、我慢の限界あるし。特等席で見せてもらっわ」

深刻な状況も一瞬で好転させる、バランスブレイカー甚だしいアシユレイだからこそ可能な芸当であった。

ともあれ、これで紅葉はもはや安泰であった。

番外編 やってきた彼ら（前書き）

Hate・revolveさんとのコラボです。
本編とは全く関係ないのでご注意ください。

番外編 やつてきた彼ら

「地獄に一旦戻る？」

「ええ。どうなってるか見ておきたいし」

「見ておくも何も、何もないじゃないか……」

あー、だるいとベッドの上でぐったりとその体を横たえている。
美しい銀髪も若干色あせているように見えた。

その見た目は女、だが、実際は男な彼はいわゆる男の娘であった。
ともあれ、自分の愛しい人に彼女はやれやれ、と溜息を吐く。

「それに……あの場所に行くとか何か碌でも無いことが起こりそうで
ならねえ……前、天使共に戦いを挑んだときも閉じ込められたし」

「大丈夫よ。もう邪魔する者なんていないわ」

それでも横たわる彼女の愛しい人は乗り気ではない。

彼の勘が告げるのだ。

行けば、似非天使共よりももっとおっかない者に出遭うぞ、と。

「……なあ、ノワール。お前って魔王だったよな？」

唐突な質問にノワールと呼ばれた女性はきよとんとした顔をする
が、すぐに肯定する。

「お前よりもヤバいのって他の世界にはいるのか？」

「んーと……私の知る限りだと、他の世界には私よりもヤバいの
はいるわね。ほら、この世界の神って単なる天使だったでしょ？」

「ああ、単なる勘違いだったな。アリアに至ってはただの幼女だっ

たし……そういえば、アリアは仲良くなる為にエヴァと旅行に行ってるんだっただな。アリカの引率で」

旅先で苦勞しているだろうアリカに思わずほろりときてしまう。見た目が近いせいなのか、妙に喧嘩する2人。

そんな2人に仲良くして欲しい、という親心からアリカに引率を頼み、今回の旅行となった。

「で、話を戻していいかしら？ シュウ」

「ああ、頼む。で？ アスモデウスもあんなのだったんだが」

あんなの呼ばわりされたアスモデウスだが、彼女の駄目っぷりを見ればしょうがなかった。

「まあ……アレは致し方ないけども……で、戻すけど、あなたの記憶にあった漫画でいうならばBASTARDね。アレとよく似た世界があるわ。アレはガチでヤバいわね」

「……マジでか」

「マジよ。大昔、勘違いしたこの世界の天使達が戦争仕掛けたんだけど……」

「ごくり、とシュウと呼ばれた彼は唾を飲み込んだ。

「一蹴されたわ。あっちの力天使達にいいように振り回されてたの」

「あの連中、力天使以下だったのか……」

BASTARDっぽい世界の天使が凄いのか、それともこっちの世界の天使達が弱いのか、判断に困るところだ。

「まあ、狙って行こうと思わない限り行けないわよ。確率的には野

原で寝ていたなら飛行機が落ちてきて、更にその上に小錦が100人くらい落ちてくるレベル」

「例えば今一よく分からないが、確率が低いことは理解した」

「肝心なことが伝われば言葉なんて適当でいいと思うの」

「……全世界の敬語に喧嘩売るような発言は慎もうぜ」

「あら、私は魔王だから問題ないわ。悪魔だもの」

最近、明るくなった……というか、はっちゃけている彼女に彼は苦笑する。

いい傾向だが、彼には少し寂しい気もした。

「ともあれ、さっさと行くわよ。問答無用って素敵な言葉ね」

「ちよっ！」

彼が何かする前に彼女は転移魔法を発動した。

そして、これが2人の珍道中の幕開けであった。

アシュレイは暇であった。

どのくらい暇かというと、暇すぎて死んでみよーかなーと思ってしまうくらいに暇であった。

死んでもすぐに蘇る、永遠の存在であるアシュレイ。
彼女だけでなく、多くの力ある者達は同じように魂の牢獄と呼ば
れるものに囚われている。

それはさておき、ここで肝心なのは彼女がとてつもなく暇である
ということであった。

「ん……」

ふと彼女の知覚に引つかかった空間の歪み。
そこからぼとつと出てきた何か。

「ディアナ」

アシュレイが呼べばたちまち現れるディアナ。

最近、彼女は同僚のテレジアなどから爆乳大元帥とか呼ばれてい
たりするが、そこはどうでもいい。

「何か地獄にやってきたみたいだから、拉致つてきて。死体でもい
いから」

「畏まりました」

転移していったディアナにアシュレイは両手を上にし、背筋を伸
ばす。

同時に翼もピンと伸びる。

それがたまらなく心地いい。

「ああ、暇だわー暇だからハルマゲドンしよーかしらね」

ベッドに寝転がり、アシュレイはテーブルに乗っている携帯

魔力を使った通信機であり、電話ではない　　を取り、とあるところ
るに掛けた。

「もしもしー？ 私だけどさー たっちゃん最近どーよー？」

『わしは暇じゃー暇過ぎてハルマゲドンやるかー？ あとたっちゃんはやめるーわしは帝釈天じゃー』

「もうたっちゃんでもいいじゃないー」

『帝釈天としての威厳がぶっ壊れるだろうがー』

「んでんで、暇なんだけど？」

『話変えるな……まあ、暇だ。今度、神界魔界巻き込んでガス抜きで模擬戦でもやるか？』

「それいいわね。場所は太陽系の外かしら？ 行くのが面倒ねー」

『太陽系内でドンパチしたら地球が消し飛ばからしょうがないな』

「まったく、脆いわねーもっと強くつくりなさいよ」

『わしらが強すぎるんじゃないー』

そして、はっはっは、と笑いあうアシュレイと受話器の向こうの
帝釈天。

かつて敵同士であったのだが、番長同士が喧嘩した後に仲良くなる
という現象が起こり、仲良くなっている2人だったりする。

「あと、そっちの羅刹女、食べたいんだけどー」

『お前は好色過ぎるわ。陣風で我慢しとけ』

「陣風はいい子よー和服美人って素敵」

そこからアシュレイと帝釈天はどういう子が好みか、という話になっ
ていく。

それだけに留まらず、どういうシチュエーションが好きか、とか
どういうところに興奮を覚えるか、などへと発展していく。

分かる者にしか分からない会話であった。

一方その頃

「……うーん」

ノワールは困った顔であった。
その横にいるシユウこと愁磨はじーっと横にいる彼女を見つめる。

「……ここ、どう見ても俺たちの世界の地獄じゃねえよな？」

「さっき言った低確率を引いちゃったみたい」

てへ、と舌を出すノワールに盛大な溜息を吐く愁磨。
彼としてはもう厄介事の気配しかない。

「さっさと帰るぞ。幾ら何でも上位悪魔神族とかとガチンコバトルは御免被る。疲れるし」

「ちよっと力を試してみたいと思ってみたり」

「だめ、絶対。戦争いくない」

愁磨の本心は帰ってごろごろしていたい、これに尽きる。
しかし、彼の願いは儂く消えることとなった。

「……人間……いや、ハーフか？ それと魔族？」

そんな声が聞こえてきた。

ゆっくりと愁磨とノワールが振り返ればそこには乳があった。

おっぱい革命と言うに相応しい立派な爆乳。

男なら誰も見惚れてしまうものだが、愁磨は心の中で血の涙を流して堪えた。

見惚れてしまえばノワールが怒って大変なことになるからだ。

そして、彼は気がついた。

その立派なお乳の持ち主の顔が、ある方にそっくりであることに。

「ば、爆乳大元帥！？」

ノワールがキツと愁磨を睨む。

「……殺す」

爆乳大元帥と呼ばれたディアナが魔力を全身から吹き出している。見知らぬ輩からそう呼ばれるのは我慢ならなかった。

「これだけは言うておく」

だが、ディアナはかろうじて理性を保ち、あることを告げる。

「私の乳はアシユ様のものだ」

何かダメダメであった。

「とりあえず、手伝うわ……ちょっとオシオキが必要ね……」

ノワールの目が怖かった。

愁磨は確信した。

自分はきつとここで死ぬ、ということ。

それから10分の間、大変なオシオキを受けた愁磨だったが、最後にディアナが魔法で回復させた。

それにより、彼は精神を除いて復活した。

「ところであなた達、誰なの？」

何かよく分からなかったけど、とりあえずシバいたディアナ。

そんな彼女に嫉妬から協力したノワール。

ようやく本来の目的？を思い出したディアナである。

「えーっと、平行世界……じゃない異世界ね。異世界からやってきた者よ。もう魔力量とかで分かると思うけど、私はかつてルシファールと呼ばれていたわ」

「……悪いことは言わないわ。さっさと帰りなさい」

ディアナはあることを危惧した。

それはこの世界のサツちゃんが多大な精神的ダメージを受けてしまったこと。

また、女のルシファーもいいかも、と誤ってしまっただろう主が、サツちゃんを女にする為にありとあらゆる手を尽くしてしまう可能性があった。

しかし、そのときディアナの頭に響くアシュレイの声。

『ディアナ？ 命令が聞けないなんて、悪い子ねえ……？』

ディアナは体を震わせる。

ついでにぶるんと揺れる乳。

『あとでオシオキしてあげるから、とりあえずその連中を連れてきなさい』

アシュレイからの念話はそれで切れてしまった。

「……何か目付きおかしいぞ」

「顔色も何か変ね……赤くなってる」

そんなことを言っている愁磨とノワール。

ディアナはディアナで色々なオシオキを妄想してしまい、それが顔に出てしまったようだ。

何分、悪魔であるからして僅かコンマ何秒単位で多くの妄想ができる。

ともあれ、彼女は告げる。

「ちょっとこっちへついてきなさい。アシユ様がお前達に会いたいらしい」

「アシユ様って……アシユタロスのことか？」

愁磨の問いにディアナは睨む。

「アシユタロス様よ。地獄の魔王であるあの御方を呼び捨てにするなんて……これだからハーフは……人間の常識なんて持つてるから……」

「いや、俺ハーフじゃねえぞ？ 魔人だ」

「魔人？ ああ、アシユ様の闇の福音計画かしら？」

「……待て、闇の福音計画ってなんだ」

「こつちのことよ。で、さっさと行くわよ。アシユ様を怒らせると怖い……いえ、怒ったあの方も……」

最後の方でディアナは怒ったアシユレイにベッドの上で責められる様を想像してしまった。

先ほどよりも顔が赤くなった彼女にノワールと愁磨は首を傾げる。

「と、とにかく行くわ」

ディアナは2人を連れて転移したのだった。

そんなわけでもやってきましたアシュレイの城。

あまりのデカさに客人の2人が呆然としてしまったが、そこは些細なこと。

ディアナに案内されるがまま、アシュレイの下へ2人はやってきた。

そして、やってきた2人はアシュレイをガン見である。

何故ならば……銀髪の女性が2人、アシュレイと思われる少女の足を舐めているからだ。

愁磨はネギま原作において、エヴァンジェリンがネギに足を舐めるよう迫るシーンを知っている。

そして、ノワールも彼との記憶というか知識の共有によりそれを知っている。

で、実際似たようなことが目の前に展開され……それはエロさが限界突破していた。

ああ、少年誌じゃ到底描けねーな、とそんな風に思ってしまうくらいに。

「で」

アシュレイは奉仕させつつ口を開いた。

「私が地獄少女アシュちゃんですけども」

「どこから突っ込めばいいんだ」

愁磨は頭を抱えなくなった。

彼が想像していたのとは187度くらい違う。

こっぴどい軽いというか、精神的に疲れそうな相手だとは全く想定していなかった。

「リリース、リリムもういいわよ」

一応、お客なのでアシュレイは2人を下げることにする。

というか、やってくる気配を察知した時点で下げておけばいいものだが、そこは魔王として相手に舐められないようにする為という意味合いもある。

主導権を握るにはこういうインパクト溢れることをすればいい、とアシュレイは色々な意味で勘違いしていた。

しかし、リリースとリリムは名残惜しそうな目でアシュレイを見つめる。

そんな様子にムラムラときた彼女は思わず唾を飲み込む。

「……あの」

ノワールが声を掛けたことでハッと我に返ったアシュレイは咳払い一つ、あとでするから、とそう言い2人を部屋から出した。

普段は結構押しが強いノワールであるが、さすがの彼女もこういう場面ではどういう風に声を掛けるべきか、悩んでしまう。

故に遠慮がちな声掛けとなってしまうた。

「で」

アシユレイは何事も無かったように2人へと視線を向ける。

「私がアシユタロスだけでも……とりあえず、やらないか？」
「お断りしておくわ」

ノワールはすぐに断った。

彼女の女としての勤が告げている。

それはヤバイ、と。

「で、覗いていたから知ってるので、名前は聞かない！」

「いや、そこは普通聞くとこらだろ」

「地獄の魔王が人間の常識で推し量れると思ったら大間違いですよ」
「」

語尾の「にや」に首を傾げるまもなく、ただ「あっそう」という感想しか抱けない2人。

それくらいに常識とかそういう色々なものがズレていた。

「まあ……特にこれといった用事もないんだけど、何かある？」

呼んでおいてこれである。

我が道を往くアシユレイにとって、他人の都合なんぞ知ったことじゃない。

とりあえず愁磨は問いかけてみる。

「本当に魔王なのか？ 傲岸不遜さはもう魔王クラスっていうのは分かった」

「そんな些細な疑問をこの私に問いかけるなんて……あ、私魔王です。あと魔法少女です」

魔法が使える少女だから魔法少女というならば合っていることになるが、色々と無理がある。

しかし、そんなことを気にするアシュレイではない。

「とろろで……とろろ昆布食べたい……じゃなかった、とろろで、愁磨って誘ってるの?」

「……一応言っておくが、俺は男だからな。この格好でも」

「男の娘を調教するのも大好きだから大丈夫よ。私の前だけ女の子になって欲しいっていうか、そういう戦いしてるんで」

「どっという戦いだ」

「まあ、アレよ、アレ。私ってほら、恐怖公で通ってるから、無理矢理っていうのもいいと思うの」

ずいっと一歩近寄るアシュレイ。

こういう意味での恐怖はあんまり味わったことがない愁磨は思わず一歩下がる。

更にアシュレイが一歩近づいたとき、ノワールが彼女の前に立ち塞がった。

「あなたも纏めて美味しく頂きますの。恐怖公ですの」

「とりあえず、これだけは言っておくわ」

ピシッとアシュレイを指さしてノワールは告げた。

「愁磨は私の嫁」

「嫁!?!」

まさかの発言に愁磨は愕然とする。

あ、あれー、何か性格変わってませんか、とかそんなことを思っ
てしまう程に。

「略奪って素敵ね。するのもいいし、されて惨めな気持ちになるの
もいい」

「この変態……！ 愁磨は渡さない！」

「失礼な。より格調高く淫らと言って」

「いやそれ格調高いのか……」

愁磨のツツコミは残念ながら聞こえておらず。

「一応言っておくけど、私はルシファーよ！」

魔力全開にしてみせるノワール。

ビシビシと部屋が軋む。

だが、アシュレイは平然としている。

本当に魔王だったんだなあ、と思ってしまう愁磨。

「ぬるい。私をどうにかしたければこの100兆倍は持ってこい」

「実はアシュタロスって馬鹿なんじゃ……いや、子供？ アスモデ

ウスも似たよーなもんだったし……」

愁磨のそんな発言も聞こえていないようだ。

というよりか、彼の存在自体が2人から消えているらしい。

「立場的には私の下になるのに、逆らうのかしら？」

「力こそ正義。それが地獄のルール。下克上って素敵ね。特に相手
が女だとテンション上がるわあ」

そんなこんなでバトル開始。

2人は窓を突き破って外に出て行ってしまった。

「……俺ってこんな影薄かったっけ」

遠くでチカチカと光っているのを見つつ、愁磨は呟いた。
光っているのは言うまでもなくアシュレイとノワール。
光速と同じか、それを超えた速度で殴り合っているようだ。
さすがの愁磨も全力状態のノワールを捉えることは難しかった。

そんな愁磨は肩を叩かれた。

気配無く急にそうされた彼はビクッと体を震わせ、顔を後ろに向ける。

そこには見目麗しい銀髪の女性が立っていた。

こちらにも凄い乳であった。

「ようこそ、影薄き世界へ」

「嫌だあああ！俺は主人公なんだあああ！」

壊れた窓から愁磨は光の速さで飛び出していった。

後に残された女性　シルヴィアは盛大な溜息を吐いた。

「……私はどうして影が薄いんだろうか。もっと出番が欲しい……」

豊富な胸と肉感的な体。

見えないところでアシュレイに色々致されているのだが、もうちよっと表に出たいシルヴィアだった。

そして数時間後、彼らは帰還した。

妙にスッキリとした顔のアシユレイ。

対するノワールも似たようなものだった。

2人は着ていた服がボロボロになっているものの、特に傷はない。

一番被害を被ったのは言うまでもなく……

「花畑が見えた……」

ちょうど2人の真ん中に飛び込んで、双方から攻撃もらった愁磨であった。

彼も結構な実力なのだが……さすがに魔王2人からの結構本気の攻撃はどうにもならなかった。

復元能力により、彼は五体満足であるものの……その服は完全に消滅しており、裸体をさらけ出していた。

「さて、アシユちゃんとしてはそろそろ愁磨くんを調教してもいい頃合いだと思います。私に突っ込ませてあげるからやらせろ」

「だめ、愁磨は渡さない」

そして始まる口論。

愁磨は思った。

今日は厄日だと……

元の世界にいるアリカやアリアやエヴァンジェリンを恋しく思う
彼であった。

さらに彼はこうも思う。

「帰ってベッドでノワールとゴロゴロイチャイチャしたい。もうや
だこんな世界……」

それから2人は1週間ほど、アシュレイの城に滞在することとな
る。

そこで起きた騒動で被害を被ったのは愁磨であり、彼は元の世界
に戻るなりすぐ龍宮神社に厄祓いと悪魔祓いをしに行ったのは言う
までもなかった。

彼女達は二丁剣士ですか？（前書き）

独自設定・解釈あり。

彼女達は二ト剣士ですか？

アシュレイは不満であった。

何が不満かというと、闇の福音計画が一向に進まないことに。

仕方がないのでテコ入れの為に彼女は紅葉の護衛を暇をしていた
ベアトリクスとシルヴィアに押し付け、地獄に戻っていた。

そして人間牧場を視察していた。

加速空間に造られたそこは元々は小さな街であったのだが、人口
が増え続けた為に、もはや一つの国と化していた。

さすがに火星異界程の大きさはないが、それでも結構に大きい。

「……うーん」

アシュレイはそんな声を上げつつ、考える。

闇の福音計画の候補者選びは監視役の淫魔達に任せられていた。

彼女達が送ってきた最新の報告書によれば狂信的な者は多くいる
が、豊かな才能ある者は皆無というもの。

どうしたものか、と考えつつ、視線を下に向ければ綺麗な金髪が
ある。

与えられる感触にアシュレイは僅かに声を漏らしつつ、その頭の
上に手を置き、優しく撫でてやる。

アシュレイは加速空間内に入り、道を歩いて数分で金髪娘にナン

パされたので、路地裏で致している最中であつた。

アシユレイが視線を横に向ければ他にも多くの者達が致している最中であつた。

その中には淫魔の姿もある。

淫魔達は監視ついでに牧場内の人間を美味しく頂いている。

アシユレイとしてはそこら辺は問題なかった。

男と女がやるのが彼女的には許せないのであつて、女同士ならば大歓迎なのである。

ともあれ、金髪娘を堪能することにした彼女であつた。

そして2時間後。

金髪娘と存分に楽しんだアシユレイはふと気になって聞いてみた。

「私が誰だか分かる？」

その問いに首を傾げる彼女。

これはもしや、と思いつつ念話でもって監視の淫魔に問いかける。牧場内で自分の顔を知っている者はいるか、と。

するといない、と返ってきた。

アシュレイは閃いた。

知られれば敬われ勝手に寄ってくる……だが、知られていなければ好きなように楽しめる、と。

要するにアシュレイはナンパしてきやつきやつきたいのである。

長い人生……というか、永遠の中で、いつもいつも相手から尽くされていると偶には自分からやってみたくなるもの。

「もう自分で造った方が早いかもわからんね」

種族として吸血鬼を造った方が確実に強い、そういう風にアシュレイは思えてきた。

そういえば、と彼女は思い出す。

地上の孤児院から才能ある者達を地獄に連れてきていたことに。彼女達を候補者にしようかしら……そう考えつつ、アシュレイが金髪娘から離れようとしたところで手を握られる。

潤んだ瞳に見つめられたアシュレイはほいほいと再び彼女を抱くことにしたのであった。

その少女に起こったことはよくあることであつた。

彼女が生まれて早々に他界した父親、残つた母親はいわゆる教育ママであり、自分の意に沿わないことをすると少女に苛烈な罰を与えた。

彼女に味方はおらず、毎日毎日礼儀作法や教養、そして魔法の勉強であつた。

そんな生活を送つていればたとえ成人であつても壊れる。

幼い彼女が壊れるのは当然のこと。

母親からの仕打ちにより、巻き起こる怒りや悲しみはやがて憎悪へと変化する。

心の中でどす黒く溜まるヘドロのようなその感情を少女は肯定するものの、どうすればいいかは分からなかつた。

しかし、転機が訪れる。

下男が花壇で草刈りをしていたのを少女は目撃した。

彼女が下男に話を聞いてみれば花に栄養がいく為に雑草を刈つている、と。

そこで少女は閃いた。

自分という花を咲かせる為に雑草を刈ろう、と。

思い立ったが吉日。

彼女はその日、実行した。

「……ふふ」

金髪の少女、メリーは鎌を手に持ち微笑む。

今でもはつきりと彼女は草刈りをしたときのことを覚えている。
母親の体に何度も鎌を突き刺し、腹を開いて自分が生まれた場所
を握りつぶしたときは感動してしまった。

メリーは視線を柵にやればそこには古びた草刈鎌。

あのときの鎌だ。

今、彼女が手にしている鎌は彼女と同じかそれよりも大きい、ま
さに死神の鎌だ。

「メリーメリー！ いるのー！」

そんな声が扉の向こうから聞こえてくる。

「いるけど、何か用？」

そう問いかければ扉の向こうから言葉が投げかけられる。

「今から出かけるけど、行くー？」
「行くから少し待って」

メリーはそう言って、姿見の前に立ち、髪を整え衣服が乱れていないかをチェックする。

彼女は淫魔に連れられて地獄へとやってきた。

そして、ここで多くの友人を得た。

アシュレイは不遇な子供を集めている。

それは主に地上での孤児院だが、その中から才能ある者は地獄へ連れ帰ってきている。

メリーと似たような境遇の少女達も多くおり、彼女達と打ち解けることができたのだ。

もうその少女達を闇の福音計画の候補者にすればいいんじゃないか、と誰もが思うところだが、アシュレイの奇妙な拘りによって未だにそれは実施されていなかった。

ただ、このまま進まなかったら候補者となる可能性は大いにある。彼女達はアシュレイを崇拜しており、それぞれが特殊な能力を持っている。

地上支配の為にはうってつけであった。

ともあれ、アシュレイのやっていることはある意味、人を救っているといえる。

現代なら各種行政サービスやNGO、NPO団体によりこういった不幸な少女達の多くは救われる。

だが、14世紀後半にそんなものは存在しない。

彼女達の行き着く先は多くが路地裏の娼婦だろう。

そんな悲惨な彼女達はアシユタロスという絶対的な恐怖の庇護を受け、いかなる暴力からも護られ、教育を受け、三食美味しいものを食べ、自室で暖かいベッドで眠れ、更に月のお小遣いまでもらっている。

この時代に教育を受けることができるのは金持ちや貴族、王族といった上流階級のみ。
それを考えれば破格の待遇だ。

まあ、アシユレイの動機を考えればかなりアレではあるが、自分の意思でアシユレイと寝ると、生きる為に誰とも知らない男と寝るのではその気持ちに差があるのは明白だ。

そういうわけでメリーは日々が楽しかった。
勉学に励み、こうして友達と遊びに行く。
母親を殺して本当によかった、と彼女は常々思う。

「お待たせー」

やがて身支度を終えたメリーは扉を開き、自室を後にしようとした瞬間であった。

ポトツと何かが彼女の目の前に落ちてきた。
半ば反射的にメリーは大鎌を振るい、その物体を真っ二つにする。
噴き出る鮮血。
汚れる衣服。

そのことにむっとしながらも、その物体を確認する。

東洋風の顔立ちの男であった。
上半身と下半身が泣き別れしているが、そこはどつでもいい。

そんな彼を見て彼女はピンときた。

「そついえばアシユ様が罫を仕掛けたとか……」

ともあれ、彼女は友達との約束を優先すべく、魔法で痕跡を全て消去して部屋を出たのだった。

アシユレイが地獄に帰っている間、京都では動きがあった。

分家の過激な連中、その中のリーダーともいうべきとある人物が甲賀に依頼したのだ。

明日菜のいない今ならば処理するのに最適、と。

紅葉の周囲にはベアトリクスとシルヴィアが張り付いているのだが、明日菜よりは手練ではないだろう、と判断されていた。

それは確かに正しいが、残念ながら、どの程度の差があるのかを感知できるような人間は存在しない。

手練は自分の実力を隠すというのはよくあることだ。

それによってどのくらい強いのかを読めなくする。

そうしている輩が人間であればまだどのくらいかを推測すること

はできる。

だが、そうしているのが魔神ともなればもはやそれすら難しい。

ともあれ、この2人とて雑魚を斬るのは面倒くさいだけであるの
でなるべく動きたくはない。

そういうわけでアシュレイの許可を取った上で、とある罫を仕掛
けることにした。

「あー、また引つかかったわー」

紅葉の呑気な声。

彼女の視線の先には現れた魔法陣と共に強制転移させられる一見
普通の下男。

彼は化けた忍者であつたようだ。

「やけど、ほんまにこんなんでええのん？」

問いかける先に饅頭を食べ、お茶を啜っているベアトリクスとシ
ルヴィアの姿が。

「それでいいのです。我々としても雑魚を斬ったところでつまらな
いだけですし」

もぐもぐ

「ちようどいい旅行だな」

もぐもぐ

明日菜　アシユレイの代わりにやってきた2人はぐうたらっ
ぱなしであった。

紅葉はアシユレイから色んな本を借りてそれを読んでいる。
蓄えた知識の中にあつたものを使い、彼女は今の2人にぴった
りな渾名をプレゼントする。

「ニート剣士やね」

ベアトリクスとシルヴィアの動きが止まった。

「ににににニートとは失礼な！　無礼者！　我こそは41の軍団の
総司令官！　ベアトリクス！」

「我こそは100万の天使を斬り捨てたシルヴィア！」

「やけど、今は……」

ジト目で見つめる紅葉にベアトリクスとシルヴィアは視線を交わ
す。

魔神がたつた1人の少女に追いつめられるというまさかの事態。
わりと人間臭いというか、妙に親しみやすい2人であるが、そこ
はそれ、アシユレイの友人ともなれば妙な扱いはできない。

「と、ともかく、来るべき時……が来るかわかりませんが、雑魚相
手に我々が出る必要はありません。強制転移陣も機能していますの
で、好きに過ごしてください」

紅葉の周辺に張り巡らされた強制転移陣。

彼女に悪意を持った人間が近づいた瞬間に発動し、強制的にアシ

ユレイの城へと転移させられる。

あとは勝手に見つけた輩がおもしろ半分に殺したり拷問したりするので、転移させられた暗殺者は一度と地上には帰ってこれない。

「こんな楽でええん？」

「手を抜いてもいいところは手を抜くのが円滑に仕事を進めるコツです。まあ、私もシルヴィアも先の戦争以来、やることなく暇なのですが」

「やっぱりニート剣士や」

にっこり笑顔でそう言われたベアトリクスとシルヴィアは眉毛をハの字にし、しょんぼりしてしまうのであった。

露になった恐るべき計画(前書き)

独自設定・解釈あり。

露になった恐るべき計画

「犯人は彼女だ」

ウリエルは険しい表情でそう告げた。

その言葉にラファエルは僅かに眉をひそめる。

信仰とは神族にとって力である。

だが、最近になって神族でいつもの力が発揮できない者が出てきたのだ。

当初は少数であったが、今では最高指導者であるキーヤンも何だかおかしいと気づく程に。

そこでウリエルが調査に乗り出したのだが、面白くもない事実が判明してしまった。

人間界に隠密に降り立ち、幾つかの大きな教会を調査し、発見した。

そこで祀られていた像はどっかで見えた悪魔であった。

それも神界において恐怖の象徴ともいうべき存在。

どうしたものか、と困った彼が相談した相手が長い付き合いであるラファエルというわけだ。

さすがに相手が地獄の七大魔王の1人となれば熾天使程度ではどうにもならない。

これがただの魔族の悪戯ならウリエルが即殲滅して終わりなのだが……

「最高指導者様とヤーウエ様にお伝えしなくてはなりません」

ラファエルの言葉に異論はない、と頷くウリエル。
だが、と彼は口を開く。

「薄々勘づいている連中もいる」

「帝釈天一派ですか？」

ラファエルの問いにウリエルは首を横に振り、告げる。

「もっと小さいグループだ。帝釈天も気づいてはいるだろうが、今のところは静観といった様子。でなければ第二次ハルマゲドンをも起こしている筈だ」

確かに、とラファエルは頷く。

好戦的な帝釈天は有名だ。

今でも彼はアシュタロスと戦いたい、と公言して憚らない。

そして、彼に連なる阿修羅やら毘沙門天やらも次こそは、とリベンジに燃えている。

まあ、そういった連中の集まりであるからそれはそれで仕方がないともいえる。

「問題はその小さな過激派がどう動くか……ですか？ フレイヤ様とアシュタロスの婚礼……そこで騒ぎを起こす、と？」

ラファエルの問いにウリエルは頷きつつも付け加える。

「そもそもフレイヤ様を今この瞬間に拉致して洗脳なり何なりするかもしれない」

「いや、それはさすがにないでしょう。彼女は戦となれば我々より

も強いですし」

「……そういえば戦の神でもあったな」

色欲の神ではなかったかな、とウリエルが思ってしまう程にフレイヤが戦う姿は想像ができなかった。

「嘘か本当かは知りませんが、フレイヤ様によればかつて万の悪魔をたつた1人で滅ぼしたとか何とか」

「何年前の話か……」

「何でも数万年以上前の話とのことです。アシユタロスもまだ出てきてない頃ですよ」

「……こういうのは不謹慎だが、アシユタロスとフレイヤ様の歳の差は万単位でありそうだな。フレイヤ様が勿論年上で」

「寿命がありませんから、我々にとって年齢は意味のないものです」

微妙な空気が漂い始める。

元々は深刻な話をしていたのだが、何かもう大丈夫そうな気分になりウリエルは襲われる。

「あのアシユタロスに手を出すような輩は血気盛んな若者くらいですし、あっさり返り討ちでošimaiですね」

「事後処理と事前予防、どちらが楽かな？」

「面倒くささ的には事後処理の方が上ですね」

「なら、事前予防をしておこう」

ウリエルは踵を返す。

そんな彼にラファエルは問う。

「あなたが警告を？」

「そうだ。何かおかしいか？」

そう問い返すウリエルにラファエルはくすりと笑い、告げる。

「あなたはかつてあれほど悪魔を嫌悪していたのに、そうするとは以外です」

「色々な意味でアシュタロスにはミカエル……フェネクスが世話になっっているからな。少なくとも、神界で天使をやるよりは生き生きとしていた」

「彼女の一件は……こう言うては何ですが、神界の膿を出すことができました。今いる過激な連中も彼らからすれば可愛いものです」

「神とて驕り高ぶればそれは神聖な悪魔に等しい。自分の立場を自覚して誰よりも悪魔であろうとするアシュタロスの方がまだマシだ」

ほう、と思わずラファエルは声を零す。

ウリエルがそこまでアシュタロスのことを評価しているとは思わなかったからだ。

そんなラファエルに気づいたのか、ウリエルは肩を竦めてみせる。

「神としての側面を持っていた多くの悪魔が、神性を失い、完全に悪魔となったのは我々の過失だ。その1番の被害者であるアシュタロスが関わっていたソドムとゴモラはメタトロン様も平和であったと仰られていた」

まあ、とウリエルは付け加える。

「性格に問題はあるが、それでもあそこまで分かりやすい悪もあまりいない」

「確かに彼女はルシフェル様よりもよっぽど悪役っぽいですし」

暫しの沈黙。

今回の一件を含め、アシュタロスの逸話には事欠かない。
神界ではアシュタロスについて纏めた本などが幾つも出ている程
に色々な意味で大人気であった。

やがてウリエルが口を開く。

「ともあれ、私が伝えておこう」

「わかりました。私はあちこちに根回しをしてきます」

そして数日後。

地獄ではアシュレイがサツちゃんから呼び出しを受けた。
彼女は面倒くさかったが茶番に付き合うことにした。

万魔殿に設けられた議場にアシュレイが入ったときには既に彼女とサツちゃん以外の全ての魔王が揃っていた。

アシュレイが入ってくるや否や、巨体のバアルが口を開いた。

「君は何をやっているかあ！」

彼に続くようにベリアルが口を開く。

「アシュタロス、てめえ何抜け駆けしてやがんだ？」

睨みつけてくるベリアルにアシュレイは何も答えない。

「あんまり調子乗ると痛い目みるんとちゃう？」

そう言うのはビレトだ。

「そーそー！ 説明をよーするモン」

彼女に続くようにペイモンがのほほんとした口調で告げた。

アスモデウスは黙して語らず、ただアシュレイを見つめる。

そして、ベルゼブブはただ微笑を浮かべているだけだ。

彼にはとても簡単に予想がついた。

アシュレイが悪魔として極めて正しい行動をすることが。

「私より弱い癖に何調子に乗ってるの？ ちょっと死んでみる？」

膨大な殺気と魔力が叩きつけられる。

部屋はビリビリと震え、今にも崩壊しそうだ。

魔王クラスの魔力と殺気、そのどちらかを人間が食らえば一瞬で塩の柱と化してしまう。

それをするのがアシュタロスともなれば同格の魔王ですらも恐怖に苛まれる。

多くの魔王が口を開くことすらままならない中、ベルゼブブが静かに告げる。

「アシュタロス、少し抑えてくれないかな。食後にコレはキツいんだ」

これがベルゼブブの凄いとこだ。

アシュレイがヒートアップしないよう、一言付け加えるところ。ある意味、意表を突く彼の言い方はアシュレイを冷ますにはちょうどいいものだ。

「ああ、揃っとるな」

そして、タイミングを見計らっていたかのように登場するサツちゃん。

不満をぶつけていたベリアル達はもはや何も言わない。

何故ならば、彼らは一種のポーズとしてそうしたに過ぎない。

つまり、アシュレイの行動が不満である、と言った事実が重要であって、本気で追求する気は全くない。

そもそも、緩やかに穏やかに敵対し続けなければならない神魔族

にとって、今回のアシュレイの行動は大金星である。

正面戦争することなく、神族にダメージを与えたという点で。

アシュレイとしてもそこら辺は当然理解しており、殺気と魔力は出したものの、本気で殺す気は全くない。

そもそも彼女が本気で殺しに掛かったら喋らずさっさと殺すか、それとも捕まえて拷問してじわじわ殺すかのどちらかだ。

前口上は余程遊んでいるときにしかない。

ともあれ、そういった不満が出た、という口実をアシュレイに与えることで彼女は信仰の横取りをやめやすくなった。

これでアシュレイは部下にもそういう不満が出たからやめた、と自分の株を落とすことなく計画の取りやめをすることができる。

「まあ、用件は言うまでもないんやけど、ウリエルから警告が届いてな。何でも過激な連中が何かしでかすかもしれないから注意しろやて。あとアシュタロスは信仰の横取りやめたげてな」

一番重要な用件の信仰横取りについてはもうサツちゃんも投げやりであった。

先ほどの茶番でもう事は終わっている。

「過激なのって帝釈天？」

アシュレイはそう言いつつ、ビレットに近寄ってその膝に座る。

座られたビレットも慣れたものでアシュレイの頭を撫で始める。

するとペイモンが近寄ってきて、アシュレイのほっぺたを触り始める。

ベリアルはベリアルでやれやれ、と腕を回しつつ、どこからともなくワインボトルとグラスを取り出して、飲み始める。

アスモデウスはどこからともなく本を取り出して読み始め、バアルはお腹を鳴らす。

実にフリーダムな魔王達である。

「帝釈天やない。何でももっと小さなグループらしいで」

「ふーん。ところでビレット、今晚どう？」

「ええよー」

「ペイモンもー」

関係ない話に発展し始める3人。

そのときベルゼブブが口を開く。

「ところでサタン様。エヴァンジェリンの地上侵攻について神界は何か言ってきましたか？」

「いや、特に何も。まあ、もう少ししたら天使でも降臨して追っ払うとかそんなんとちゃうか？」

結構な恐怖を振りまいているエヴァンジェリン率いる吸血鬼軍団。エヴァンジェリンが重要であって、他は大して思い入れもないのでアシュレイは存分に神族の餌食となってもらいたいとすら思っている。

「ま、そっちはアシュタロスが適当にやっておくやる」

そう言うつサツちゃんに唐突にアシュレイが顔を向けた。

「スルトが持つてるレーヴァティンが欲しいから一筆書いて頂戴。」

説得する為の書状とかそういうの」

「……必要あるんか？」

「小道具は必要だと思っの」

サツちゃんは溜息を吐きつつ了承した。

さて、この集まりの後、アシュレイは念話でエヴァンジェリン及び地上にいる全ての淫魔に信仰奪取計画及び教会墮落計画は終了したと、神族が降臨し、浄化を行うかもしれないことを伝えた。

またアシュレイはジャンヌ・ダルクを配下に加えたいと望んでいる。

彼女が生まれるまでまだ20年以上の時間があるが、20年などあつという間の時間だ。

アシュレイはまだ見ぬジャンヌ・ダルクに思いを巡らせつつ、種族としての吸血鬼作成に着手した。

彼女は地上から連れてきた少女達で支配するのに最適な才能をもった子を闇の福音計画に取り込みつつ、吸血鬼も作ることにしたのだ。

暇なので両方やっても問題は全くなかった。

苦勞する者達（前書き）

独自設定・解釈あり。

苦勞する者達

「……拙者、運が悪かったのでござるかな」

そう愚痴りつつ、天井にへばりついているのは長瀬桔梗。

彼女は近衛紅葉暗殺にやってきたものの、何だかよくわからないうちによくわからないところに転移させられていた。

そして、彼女は本能的に感じた危険にすかさず天井にへばりついて眼下を行き交う見慣れぬ服装の女性や、あるいは見慣れぬ妖を観察していた。

西洋の城の一言で片付けるにはあまりにも異質であり、感じる邪気は無数。

勝手に侵入してごめんなさい、で済む相手ではござらんない……そう心の中で呟きつつ、いつまでもここにいるわけにもいかない。

故に彼女はタイミングを見計らい、廊下に降り立った。

桔梗は罨を警戒しつつ、廊下の真ん中を駆け抜ける。

左右の壁に触れた瞬間どかん、とそういうオチが予想できたからだ。

しかしながら、幾ら彼女が忍びとして優れていようと、人間の数千倍以上の知覚領域を持つ上位悪魔に、彼女の隠密技術は全く役に立たなかった。

やがて桔梗は強大な魔の気配を感じ、冷や汗を掻きながら手近な柱の影に隠れた。

気配を限りなく薄くし、そして自らは影であると自分に念じる。念じたのはそうすることで気を紛らわせようとしたのだ。

かつかつかつ、と規則的な足音が響く。

桔梗の心臓はこれまでにないくらいに早鐘を打ち、緊張だけで破裂してしまうかも、と彼女自身が危惧する程であった。

呼吸は荒く、喘ぐように息をするが、そこは忍び。呼吸音を出すなどのミスはしない。

やがて足音は間近まで来、そして止まった。

「……………いけない子がいるわね」

妖艶な笑みを浮かべつつ、足音の主ディアナは視線を1つの柱に向ける。

彼女の瞳には隠れている侵入者の姿がはっきりと映っていた。

ディアナは柱に近づき、その手をゆっくりと影となっている部分に向け……………

瞬間、柱の影から高速で飛来するクナイ。

それは彼女の喉目掛けてまっすぐにやってくる。

だが、ディアナには蠅が止まる程に遅かった。それだけならば彼女はただ首をズラすだけで回避できただろうし、そもそもただのクナイならば彼女の体に当たったところでクナイが砕けて終わりだ。

そのクナイには見慣れぬ札が貼りつけてあった。

ディアナの目の前に迫った瞬間にクナイが爆発した。ただの爆発ではなく、強烈な閃光と悪臭が周囲を覆い尽くす。さすがのディアナもこれには不意を突かれ、その隙に桔梗は素早くその場から離脱した。

「……許さない。絶対に」

後に残されたディアナには怪我は全くない。

だが、彼女の肉感的な体は悪臭が漂っていた。

匂いフェチでもあるアシュレイもさすがに遠慮したくなるような、卵が腐ったような悪臭。

彼女のプライドは著しく傷ついてしまった。

狩られるだけの家畜に過ぎない人間が悪魔に対して反抗するなどあつてはならないこと。

ましてや、アシュレイの陣営でも上位に入る自分がこんな目にあうなど、アシュレイに知られたら大変な事態。

だが、ディアナは同時に聡明でもあった。

躍起になって自分だけで捕らえようとするよりは人数を動員して確実に捕らえてからオシオキするのが良い、と。

ディアナはすぐさま念話でもってテレジアに伝える。

訓練として侵入してきた人間を捕らえよう、と。

「早まったか……」

桔梗は思わず呟いてしまった。

あの妖魔に土下座でもして見逃してもらえばよかったか、とそういう意味の言葉であった。

あの一件から既に30分が経過している。

彼女を探す者は増加の一途を辿っていた。

中でも驚いたのが見慣れぬ黒い外套と鉄兜を纏い、手には鉄でできた筒のようなものを持っている。

そして驚くべきことにそんな異様な出で立ちをしているのは男ではなく、胸の膨らみや声などから桔梗と同年代か、それより年下の少女達であった。

彼女達は人間とは思えない速度で疾駆し、あちこちをしらみ潰しに搜索している。

現在、桔梗はディアナとの遭遇地点から5つの階段を下り、10分程全力疾走した先にあった小さな会議室にいた。

そこにあつた窓から外を覗いてみれば、太陽のないどんよりとした曇り空が広がっており、遠くに無数の街並みが見えた。

しばらく異郷の景色に見入っていた彼女であったが、やがて廊下が騒がしくなり、こっそりとドアを少し開けて覗いてみた。

そして、前述した少女達を目撃したのだ。

「どうしたものか……」

忍びである彼女はあくまで暗殺とか諜報とかそういったものが仕事であり、妖魔と正面切って戦うのは得意ではない。

そういうのは神鳴流や陰陽師の仕事だ。

戦えないこともないだろうが、あの妖魔が出てきたらそれだけで終わる、と彼女は確信する。

「人間同士の戦なら大将を倒せば終わるのでござるが……」

大将を倒したところで終わるかどうかは極めて怪しく、そもそもその大将を倒すことが極めて困難であることは想像に難くない。

八方塞がりの状況に桔梗は溜息を盛大に吐いてしまった。

「このままいてもどうしようもない。ならば、死中に活を見出すしかないでござるな」

そう呟いたそのとき、彼女は振り向き様に棒手裏剣を放つ。

そして、すぐさま彼女はドアから逃れようとし……

「残念ですが、あなたよりも私の方が速いです」

すつと背後から首筋にナイフを突きつけられた。

「ごくり、と桔梗は唾を飲み込む。

冷や汗が一筋、彼女の頬から流れ落ちた。

「よく逃げることができましたね。あのディアナさんから」

「いや、運が良かっただけでござるよ」

そう言いつつ、桔梗は逃走経路を思考するが……

「残念ですが、ここにはそのドアと窓以外に出入口はありません。私は転移魔法で入ってきました」

絶体絶命でござる、と心の中で呟きつつも、それはおくびにも出さずに桔梗は問う。

「どうして拙者に気づかれずに？　そもそもどうして居場所が？」

「お気づきかもしれませんが、私も人間は既にやめております。ああ、ご安心を。他の方も既にあなたを探知しています」

桔梗には全然安心できなかったが、彼女はゆっくりとナイフを突きつけている方とは反対側の首筋に顔を埋めた。

そして、その肌に舌を這わせる。

与えられる感触に桔梗は体を震わせつつ、すぐさま提案する。

唯一のチャンスであった。

「拙者、寝技も得意でござる。きっとあなたを満足させることができるでござるが……」

桔梗の提案には答えず、彼女は桔梗の首筋を舐め回し、噛み付いた。

痛みは無く、桔梗は快感に襲われる。

数分して相手は顔を離した。

「中々美味しい味です。けれど、処女ではありませんね」

そう言いつつ、彼女はナイフを下ろした。
その行動に訝しげに思いつつ、桔梗はせめて相手の顔を見てやる
うと振り返った。

灰色の髪を三つ編み団子にし、髪と同色の瞳はまっすぐに桔梗を
見つめている。

「レイチエルと申します」

微笑み、彼女は告げた。

「長瀬桔梗でござる」

「では桔梗さんと。桔梗さん、あなたには2つの道があります。こ
こで私に殺されるか、それともアシュ様のご慈悲を頂くか」

そのとき桔梗は何やら聞いたことのあるような単語を発見した。

「一つ聞きたいのでござるが……そのアシュ様という方はアシュタ
ロスという名前で日の本では明日菜と名乗ってはござらんか？」
「そうですか……」

なぜ、という顔を向けるレイチエル。

ここは突破口と桔梗は一気にまくし立てた。

「拙者、明日菜殿には勉強を覚えてもらったでござる。拙者を拘束
してもいいでござるから、その条件に明日菜殿に確認を取って欲し
いでござる」

「私は別に構いませんが、ディアナさんの怒りはあなたが責任持っ
て鎮めてください。プライドが高い方なので」

「……努力するでござる」

どうにか窮地を脱した桔梗であったが、彼女はこの後、ディアナからネチネチと性的な拷問を受けるのであった。

時間は少々遡る。

アシユタロスの信仰横取り計画に神界上層部は色めきだった。デタントに邁進する最中に起きた凶事。

だが、これはデタントには反していない。

神魔交流会によって決まった取り決めには魔族は神族に手を出してはならない、とそういう文言は組み込まれていない。

勿論、バレたときの軋轢はアシユレイにとつても簡単に予想できたが、それらは然程問題ではない、と彼女は判断した。

何しろ、アシユレイとしては地球以外の場所ならハルマゲドンを再びやってもいいのだから。

勿論、彼女としてもやりすぎて世界が滅びては本末転倒なので、本気でやるのではなく、ルールを決めた、いわゆるゲームとして戦争をやりたい。

そうすれば暇も潰せるというものだ。

それに女天使や神族を捕まえて色々致すということもできる。

そんな彼女の思惑とは別にデタントについて頭を悩ませるキーヤ

んがいた。

「どうでしょうか」

傍らにいるメタトロンにキーヤンは問いかけるが、彼はゆっくりと口を開く。

「デタントはおそらく大丈夫でしょう。若い神族達はアシユタロスに憤怒していますが、一番過激な帝釈天一派は静観、他の中立派などはあのアシユタロスならば仕方がない、と実質的に容認しています。何よりも、既に地獄からアシユタロスに釘をさした、と連絡がきております」

「そうです。そこは問題ないのですが……」

キーヤンは傍にあった斉天大聖が持ってきた緑茶を啜り、告げる。

「問題はアシユタロスがより強大化してしまったことです。彼女は我々から奪った信仰は無論のこと、今回の一件で人間達に事の顛末がバレたらより恐怖の存在として恐れられることになります」

「……バランスが崩れる、と？」

「そうです。これでは魔族側に傾いてしまっ」

そう言うキーヤんにメタトロンは告げる。

「あのアシユタロスがそこを考慮しないわけがありません。おそらく、何人かの、彼女の配下にはない魔神が消えるかと」

事もなげに言うメタトロンにキーヤンは溜息一つ。

「大方、それなりに強い女魔族を取っ捕まえて色々と淫らなことをするんでしょうね」

アシュタロスほど分かりやすい悪魔も中々いない、とキーヤンは心の中で呟く。

「ですが、真面目な話、バランスが崩れるならば世界が何かしらのアクションを起こすでしょう。アシュタロスもそれを待っているのかもしれない。さすがの彼女も実力はともかくとして、立場的に魔神クラスの輩を意味もなく討伐したりはできません」

ですね、とキーヤンは同意した。

いくら地獄といえど、さすがに魔神以上ともなればそれなりに行動を縛られる。

その反面、莫大な財と広大な領地を得られ、魔神未満の魔族には好き勝手振る舞えるのだが。

ともあれ、キーヤんの推測は正しかった。

アシュレイはもし自分の行動が世界にとって都合が悪いのならば修正システムが働く筈だ、として動いていたのだから。

つまり、世界が何かしらペナルティを与えない限りは好き勝手にやれる、とアシュレイは考えていたのだった。

「我々にできることは然程多くはありません。静観するか、それともアシュタロスに抗議するか……このどちらかです」

「フレイヤを出さない、という選択肢は？」

メタトロンは意地悪くキーヤんに聞いてみた。

彼の問いに苦笑し、キーヤンは答える。

「神界の秩序の為に、そしてデタントの象徴として彼女には嫁に行ってもらわなければ困ります」

「その為に墮天せずには？」

「ええ、そうです。公然の秘密ですが、フレイヤがアシユタロスと事を行っても、彼女は墮天しなかった。ならば墮天させるよりもこのまま神族として嫁に行った方がデタントには都合がいいのです」

メタトロンは僅かに頷きつつ、問いかける。

「静観しますか？ 抗議しますか？」

「一応抗議はしておきましょう。彼女もフレイヤが欲しいでしょうから、こっちの事情を汲んでしばらくは大人しくしてくれるでしょう」

「一部の過激派が報復すべきだ、と息を荒げていますが？」

「アシユタロスも先の戦争からより強大化しています。他の魔王も当然参戦するでしょうから、神族の半分が消える覚悟をしないと駄目でしょうね。そして、そのまま世界滅亡エンドです」

「嫌な相手ですね、アシユタロスは」

「こっちに制限を掛けた上で自分は好きに動く、と……本当に嫌な相手です」

深く溜息を吐くキーやんであった。

いつも通りの彼女(前書き)

独自設定・解釈あり。
微工口あり。

いつも通りの彼女

アシュレイは京都には戻らず、まだ地獄にいた。

彼女にはやるのが幾つかあったのだ。

桔梗をアシュレイはさっさと転移魔法で地上へと戻したこともそれらのうち。

唯一の生還者ということでも色々聞かれるだろうが、そこはそれ。

明日菜の名前を出せば里の長も依頼主である分家のリーダーも納得するというもの。

そして、アシュレイは早速準備に取り掛かった。

すなわち、自分に忠実な美女美少女吸血鬼造るうぜ計画である。

一応、闇の福音計画の為でもあるが、そこらはアシュレイだから性欲に直結するのは仕方がない。

何だかんだでアシュレイは久しぶりに加速空間に籠る。

そして、彼女は吸血鬼の設計図を描き始めた。

もっとも、神魔のバランスの観点からそこまで強力な輩は造れないのであるが、いかんせん、いい加減の手抜きで造ってもアーウエルンクスシリーズやデュナミスのように人間界では最強クラスを造れてしまうのだから性質が悪い。

「種族としての吸血鬼。だけどこの私が造るからには全員真祖。種族的特徴は……」

ブツブツと呟きながらアシュレイは戦乙女族などを造ったときと同じように設計図を描いていく。

やがて彼女はその作業を終える。

さて造るか、と思ったがアシュレイは思いとどまった。

どうせなら吸血鬼の纏め役として専用の設計図を造った方がいいのではないかと。

完全に工口要員と化している戦乙女族やアマゾネスやメイド種族。彼女達は表に出ることなく加速空間で数を大幅に増やしている。そんな彼女達とは違い、吸血鬼は表に出る可能性が高い。

「思い立ったら吉日ね」

アシュレイはおもむろに設計図を描き始める。

いつも趣味全開で自分の欲望に忠実な彼女はこれでもか、と自分の好みの要素を設計図に加えていく。

そんなこんなで加速空間で吸血鬼達をアシュレイは造っていった。その最中、彼女はもう一つ何か思いつき、その思いつきを纏めた計画書をテレジアに送りつけたのであった。

「改マル5計画？」

はて、とテレジアは首を傾げる。

マル5以下の数字の計画なんぞ彼女は聞いたこともなかった。

そもその発端は数分前、彼女の執務机の上に転移してきた書類達。

アシュレイから送られてきたそれらを流し読みし、テレジアは先程の声を上げた。

何故いきなり5なのか、しかも改。

些細なことだが彼女のボスがボスだけに何かしらの暗号があるのでは、と勘ぐってしまう。

さて、その計画の内容は簡単に言ってしまうえば、次のハルマゲドンの為に、次の次のハルマゲドンの為に戦力を維持・増強すること。要するに冷戦時のソ連やアメリカよろしく、いつでも戦争できる準備しておこうぜ、ということである。

ただし、アシュレイはダイナミックにその方針を転換し、下級・中級魔族を教育し、後方戦力としようとした。

後方戦力とはいったものの、実際は様々な経済活動や技術発展において必要な人材の育成とその数の増加だ。

神界や魔界とてやっていることは人間社会と対して変わらない。

ともあれ、もし戦争が始まったら、そのときにそういった人材ではない生まれたての下級・中級魔族を徴兵して前線で突撃させればいい、とアシュレイは考えていた。

そして、それと一緒に送られてきたもう一つの計画があった。希望の光と名付けられたその計画にテレジアは首を傾げざるを得ない。

「何故、少威力の核分裂を扱った爆弾を造る必要があるのか……」

アシユレイの領地にはウランもまた膨大に産出されている。

放射線やら何やらを気にする必要がない魔族なので、それらは装飾品などに加工され、普通に売られている。

しかし、兵器に転用しよう、と考える者は誰もいなかった。

無論、核分裂などの様々な理論は認知されている。

人間と比較すれば数千年単位で神魔の知識は先をいく。

それでも造らなかつたのは威力が低すぎるからだ。

核兵器程度では魔神や熾天使の防御を貫くことすらもできず、対する彼らの攻撃は核を超える威力を持っている。

中級以下の神魔族であるなら攻撃手段として核は有効であるが、そもそも彼らが核を持ったところで戦う相手となるだろう格上に核が通じないのならば意味がない。

そして、同格同士の争いならそんな面倒くさい準備をせずに殴り合いをした方が早い。

格上にも通用する可能性があるとするれば反物質であるが、こちらは中級以下の神魔族に扱えるシロモノではない。

だが……核を向ける相手が神魔族ではなく人間であったならどうか。

将来的に驕り高ぶるだろう人間に悪魔の恐怖を思い出させるには

十分ではなかるうか。

ともあれ、テレジアにとって主であるアシュレイの命令は絶対なのでベルフェゴールとニジに核兵器の製作に取り掛かるよう連絡し、また自らは改マル5計画の為に関係各所へ連絡した。

そして現実時間で数日後、アシュレイは加速空間から出、ディアナを自室に呼んでいた。

呼ばれたディアナは久しぶりの呼び出しに胸を高鳴らせる。

彼女が部屋に入るとアシュレイはベッドの上に腰掛けて足をぶらぶらさせていた。

アシュレイはそのままディアナに手招きし、自分の傍へと寄せさせる。

「ディアナ、私はあなたを癒す必要があると思うの」

目の前にやってきた彼女に対し、アシュレイは告げた。

ディアナはその言葉にすぐに先の一件だと気がつく。

しかし、彼女が何か言うよりも早くアシュレイは立ち上がり、彼女の唇を自らの唇で塞いだ。

それだけで終わる筈もなく、より深いものへと発展する。

部屋に反響する水音。

アシュレイはディアナの腰に手を回し、そのまま彼女をベッドへと押し倒す。

「あなたの全てを清めてあげる」

アシユレイはキスをやめるとそう告げ、ディアナの肉感的な体を舐め始めたのであった。

アシユレイがディアナを色々な意味で癒している頃、レイチエルは頭を悩ませていた。

それはアシユレイを祀る神殿について。

未だに設計図すらもできておらず、どうにかしようかと調べてみても基礎からやらなければ到底できない。

しかも彼女にとって、やることはそれだけではない。

彼女は部隊を持っている。

その部隊に所属しているのはアシユレイの血こそ受けていないものの、それでも結構に優秀な吸血鬼達。

アシユレイに狂信的な少女達によって構成されている。

当初は特殊部隊的な用途であったのだが、どうせならとアシユレイの横槍でその規模はどんどん拡大し、今では5000人を超える正面兵力を誇っている。

で、そんな兵隊達のボスであるレイチエルは当然忙しい。
ちなみに悪乗りしたアシュレイがその部隊を武装親衛隊と名づけ、
レイチエルを親衛隊長官とかそういう地位につけたのも忙しくなっ
た原因であつたりする。

「どうでしょうか……」

執務室にて悩むレイチエル。

とはいえ、既に心は決まっている。

テレジアに無理です、と正直に告げるのだ。

しかし、期待されている身としては中々に断りづらい。

それからレイチエルはどういう理由をつけて告げようか、と1時
間程悩み、ピンと彼女は閃いた。

「アシュ様に事情を話しましょう。アシュ様なら……」

きつと何とかしてくれる、とレイチエルはうんうんと頷く。

何だかんだで困ったときのアシュレイだ。

彼女は部下のことは放つたらかしているようでありと気を配って
いる。

もっとも何か困ったことはないか、と聞いたりするのはベッドの
上で戦った後のことだが。

そついうわけでレイチエルはアシュレイに面会したい旨の念話を
送る。

するとすぐに許可の返事。

レイチエルはそれだけで終わる筈も、終わらせる筈もないので髪

型や衣服の乱れを整えた上でアシュレイの部屋へと赴いた。

レイチエルがアシュレイの部屋に着くとそこにはある意味、予想通りの先客がいた。

ベッドに腰掛けて、足を投げ出しているアシュレイ。

その彼女の白い足を息遣い荒く舐め回しているディアナ。

彼女の肉感的な体がややテカテカとしてるところからレイチエルはアシュレイが舐めたと容易に想像がついた。

ディアナの傷ついたプライドを癒すためにこういうことをしたのだろう、と。

「で、何か用かしら？」

「はい、アシュ様。実は私はテレジア様からアシュ様を祀る神殿の建築を任されたのですが、何分忙しく、また私はそういったことに通じていないので……」

なるほどなるほど、と頷くアシュレイ。

彼女はレイチエルがテレジアに直接言わない理由が簡単に予測できた。

無理強いされ、関係が拗れるのを避ける為、自分にうまく収めて欲しい、と。

レイチエルはアシュレイを狂信的に敬っているのだが、中々どうして狡賢い。

とはいえ、悪魔の信者ならばそれくらいがちょうどいいのである
のも確か。

だが、敢えてアシュレイは意地悪く問いかけてみた。

「どうして私に言うの？ あなたが直接言えばいいのに」

「私はアシュ様から承った崇高なる使命があります。その遂行の為
にはテレジア様からの仕事をやめねばなりません。ならばこそ、命
じられた私ではなく、そうするよう命じたアシュ様がテレジア様に
仰られるのが妥当かと……」

アシュレイはくつくつと笑う。

レイチエルの言ったことは単純明快であり、正論であった。

アシュレイの命令はテレジアのものよりも優先される。

ならばこそ、レイチエルがテレジアからの仕事とアシュレイの仕
事が両立できないとなればどちらの仕事が優先されるかは言うまで
もない。

「あなたは私のことが好きかしら？」

アシュレイはなおも意地悪すべく、尋ねる。

「無論です。今、ここで空いているおみ足をお舐めしたいです」

「そう……そんなに大好きなら両立できるんじゃないかしら？ 加
速空間使えばいいんじゃないの？」

最もな問い。

だが、レイチエルは動じない。

彼女とて実時間ではそれほどでもないが、加速空間でのことも含

めれば結構な年月を地獄で過ごしているのだ。

「残念ですが、私もまだ未熟です。そして、建築などは私の分野ではありません。むしろそういったことはニジ様やベルフェゴール様が相応しいかと」

さらりと適任者を押しつつ、レイチエルは更に一言付け加える。

「そういえばニジ様はアシュ様のご威光を勝手に使い、1週間待ちのプリンを大量入手しているとか……」

アシュレイの眉が僅かに動く。

彼女はすかさずニジに事の次第を問いただすべく念話を送る。

数秒と経たずにごめんなさい、と言ってくるニジ。

だが、ごめんなさいで許すアシュレイではない。

彼女はニジに対してプリンを半分寄越すよう伝え、念話を切った。

「ま、別にいいわ。神殿の件。無くてももう十分に強いし……いや、観光名所として金とるのもアリか……ニジに造らせるからいいわ。今まで頑張ってくれてありがとう」

アシュレイのまさかの言葉にレイチエルは感激のあまり体を震わせる。

彼女はこういう風に言われたことは皆無に等しい。

「で、レイチエル……もう一方の足を舐めてくれないかしら？」

そんな感動をぶち壊しにするかのようなアシュレイの発言であるが、レイチエルにとってはそれはご褒美だ。

異論などある筈もなく、彼女はディアナの横に座り、アシユレイの足首を両手で優しく包みこむように持ち、ゆっくりと赤い舌をその肌につけた。

そして、ゆっくりと上下に舌を動かす。

感じるアシユレイの暖かさ、僅かな汗の匂いと体臭。

アシユタロスは人間達の間では悪臭を放つとされているが、アシユレイからすれば全くの誤解である。

彼女は毎日風呂に入り、歯磨きも欠かさない。

また、その体臭は女性特有の甘さに加え、更に淫魔としてのフェロモンも加わる為に大変にいい匂いだ。

レイチエルは息を荒げ、その匂いを存分に堪能しつつ一心不乱にアシユレイの足を舐める。

隣のディアナも負けじと舐め続ける。

そして、アシユレイは満面の笑みで犬のように舐める2人の頭を撫でたのであった。

悪魔らしい話し合い(前書き)

独自設定・解釈あり。

短め。

微工口あり。

魅了の魔眼を使うところになった回。

悪魔らしい話し合い

地獄にて必要なことを済ませたアシュレイは京都へと戻っていた。彼女はシルヴィアとベアトリクスから特に何もなかった、という報告をそこで受ける。

忍びによる暗殺も諦めたらしく、桔梗の一件以後、襲ってくる者はいなかったとのこと。

紅葉は久しぶりに会うアシュレイにはしゃいだりしたが、そこらは些細なことであった。

そんなこんなで久しぶりに天ヶ崎家に戻ったアシュレイであったが、戻って早々千奈に呼び出された。

応接間にて千奈とアシュレイは向かい合う。

千奈は何やら思いつめたような表情をしており、その顔からアシュレイは面倒事が起きたことを悟る。

部屋に入って数分程経過した頃、やがて千奈が口を開いた。

「あんさんが紅葉に入れ込んだのはようわかるし、ウチが彼女の寂しさを紛らわす為にあんさんをつけたのも事実や」

やけど、と千奈は告げる。

「残念やけど、状況が変わった。明日菜、あんさんは妖やからようわかるやる？ ウチらの世界やと力がないのは悪いことや。力がなには無能と同じや。無論、前線に出て戦うだけが陰陽師やない。書類纏めたり何だりするのも重要なことや」

そこまで言つて彼女は言葉を切り、アシュレイの様子を窺う。アシュレイは平然としている。

彼女としても千奈の言わんとすることがよく分かる。

アシュレイは強者であったが故に数多の弱者を蹂躪した。

彼女にとつて……否、魔族にとつて弱いことは何よりも許されないことであつた。

「紅葉を島流しにでも？」

「似たようなもんや。彼女は東へと行くことになった。表向きは東における妖魔退治の強化や。分家の纏め役の子が近衛本家に養子という形で入り、当主を継ぐことになった」

「ベアトリクスとシルヴィアからは何も聞いてないけども」

「そら当然や。紅葉のあずかり知らぬところで全部決まったんや。

紅葉の傍についてただけなら分からも当然」

それもそうか、とアシュレイは頷く。

「おまけに、や。ついてく陰陽師はおらへん。紅葉と僅かな下男下女だけや」

「東に着く前に野盗か獣、もしくは妖怪にでも襲われて終わりね」

「ま、当初の謀殺からは穏便にはなつたんやけど、それでも死の危険は極めて高い」

「ていうか、京都出てしばらく経った頃に適当な傭兵雇って殺させる……いや、そのまま報酬として傭兵達の慰み者になるとかそういうことになりそうだけど」

「せやる。ウチもそうだと思う」

「一度、分家の纏め役と話をしておきたいわね」

アシユレイの言葉に実は、と千奈は切り出した。

「明日菜と会いたって話が先方からきとるんよ」

「そう……会いましょう。で、その分家の纏め役は何て名前？」

「近衛明日香。やり手や」

「すぐ会いたいわ」

千奈に告げる。

アシユレイの考えはとても簡単だ。

彼女に近衛当主という地位よりももっと良いアメを与えてしまおう、とそれだけのことだ。

不老不死、様々な知識などなど。

人間に対するアシユレイの手札はほぼ無限であった。

「ま、ええやる。打診してみるからちよう待つとき」

もうこれで安心や、と安堵しつつ千奈はそう答えたのだった。

そして数時間後、アシュレイは近衛明日香の屋敷にいた。

彼女は広い応接間に通され、そこで近衛明日香を待っている。

部屋には独特なお香の匂いがあった。

それをアシュレイは魔の力を抑える為の清めのものである、と分かったが、彼女のような存在になるとその程度では全く影響を受けなくなるので何も問題がなかった。

通されて10分ほど経ったとき、アシュレイはこちらに向かってくる人間にしては大きな魔力を感じた。

なるほど、と彼女も思わず納得する魔力量だ。

魔力が皆無な紅葉とは雲泥の差だ。

千奈と比べてもまだ多い。

魔力の多寡で優劣が決まるものではないとはいえ、多いほうが有利であることは間違いない。

やがてその主は部屋の前で止まる。

そして、さらに高まる魔力。

アシュレイは感心した。

先ほどと比べて実に1.7倍は上昇している。

これが全開なのだろう。

人間がアシュレイを感心させる、というのは中々無いことだ。そして、襖が開いた。アシュレイは目を細める。

入ってきたのは10代後半の少女。

長く艶やかな黒髪、白い手、ほっそりとした顔。

そして、着物を押し上げるかのように存在を強調する大きな胸。

アシュレイは決めた。

紅葉の処遇とかそういうしたこと関係無しで決めた。

あらゆる手段を使ってでも、目の前の女を自分のものにする、と。和服美人というのもアシュレイは好きであるのは言うまでもない。

そんな不純なことを考えているうちに少女はアシュレイの対面に座った。

「近衛明日香と申しますえ。よろしゅう」

ゆっくりと頭を下げた。

対するアシュレイはいつも通りに返事をする。

勿論、頭を下げるなんてことはしない。

「明日菜よ。で、早速だけど……紅葉、殺すんでしょ？」

単刀直入な物言いに明日香は動じることなく、頭を上げ、答える。

「殺さんと駄目どすわ。権力闘争も楽やないどすえ」

「逆に」

明日香の瞳をまつすぐに見据え、アシュレイは問う。

「あなたが消えればいいんじゃないかしら？ 私としては別に陰陽寮がどうなるうが知ったことじゃないもの」

アシュレイは知っている。

数百年後、陰陽師や魔法使いなどはもはや都市伝説化してしまうことを。

オカルトの多くは科学により駆逐されてしまうことを。

「力無き人々を影から護る……それが陰陽寮どす。あんさんみたいに力の強い妖には分からへんやろうけども」

「弱さは罪よ。で、あなたはどうしてもそつするより他はないのね？」

最終警告と言わんばかりのアシュレイの言葉。

彼女は当初こそ不老不死などと引換えに紅葉に手を出させぬようと考えていた。

だが、話を聞けば千奈と同じように陰陽師としての気構えをしっかりと持っていた。

ただの欲狂いではなかった。

これでは不老不死などのアメは通用しないだろう。

「当然どすえ。私はその為に心を鬼にしてそうするんどす。孫子も戦わん方が最上やと言つとりますし」

ならしょうがないわね、とアシュレイはにっこりと笑った。

明日香は嫌な予感を感じ、術を展開しようとしたが既に遅かった。

アシュレイは明日香の後頭部に手を回し、自身の顔の目の前に強

制的に持ってくる。

そして、彼女の黒い瞳を自らの紅い瞳で見つめる。

「私の虜になれ」

強烈な魅了が明日香に襲いかかる。

無論、こういったものへの対抗策は明日香ならずとも陰陽師なら誰でもしている。

だが、魔王であるアシュレイの魅了の魔眼を防げる人間は存在しない。

「あ、ああ、あああ……」

喘ぎにも似た声が明日香の口から溢れでる。

アシュレイの魅了により彼女の精神は強制的に書き換えられている。

アシュレイを称え賛歌し、全てを肯定するかのような、犬となるように。

10分と経たずに事は終わった。

「明日菜様……」

うつとりとした表情でアシュレイを見つめる明日香。

その息は荒く、白い頬は朱に染まっている。

「明日香、あなた、中々才能あるから不老不死にして、その後、地獄に連れ帰るわ。それで、そこで子をたくさん産んであなたの一族は未来永劫私に仕えなさい」

「はい……明日菜様……」

「とりあえず紅葉に手を出したりするのはやめること。あと、紅葉の子供が魔力持つようにするからそれで我慢しときなさい」

「はい……全ては明日菜様の御心のままに……」

うんうん、と満足気に頷くアシュレイ。

ぶっちゃけた話、彼女が最初からこうやっていれば万事丸く収まったのであるが、そこはそれ、紅葉がどんな境遇に置かれようとも彼女にとって瑣末事に過ぎない。

何しろ、死人すら蘇らせることができる彼女だ。

事前に対応せずとも何かあった、と聞いてから駆けつけても十分に間に合うのである。

「まあ、とりあえずは頂くとしよう」

鶴江も何だかんだで不老不死になってくれなかったし、とアシュレイの心の中で呟く。

残念ながら心身共にしつかりとしている鶴江は人間でありたい、とアシュレイに答えていた。

アシュレイは結界を張り、邪魔が入らぬようにした上で明日香を押し倒す。

抵抗することもなくむしろ興奮した様子の明日香。

「どついう風にしましょうか……ま、とりあえずは……」

ありがちな調教でいこう、とそう決めたアシユレイであった。

「驚かんで……ウチは驚かんで……」

そう呟くのは千奈。

驚天動地、青天の霹靂。

そういった言葉が似合う状況であった。

紅葉排除の方向で動き始めていた分家連中は明日香が手のひらを返したことにより、方向を転換。

分家に明日香に逆らえるヤツはいない為にとってもあっさりしたものだ。

その出来事を引き起こした張本人は現在、須臾と、そして月詠を寝室に連れ込んでイタしている最中である。

明日香をモノにした昨日に引き続き、性欲旺盛ないつも通りの彼女だ。

確かに、千奈としては紅葉が助かって嬉しいが……アシユレイが何をしたのかは想像したくもない。

「ちゅーか……今更やけど、ウチってとんでもないポケモンを呼び込んだんかな……」

鳥肌が立ってきた千奈であった。

全ては彼女の思惑通り（前書き）

独自設定・解釈あり。
微工口あり。

全ては彼女の思惑通り

「随分と思い切ったことをされたものだ」

テレジアは上がってきた書類を見つつ、アシュレイがやったことについて素直に感想を述べた。

近衛明日香はもはや地上にはおらず。

彼女はアシュレイによって造られた専用の加速空間にて子作りに励んでいるところだ。

勿論、人間の体のままではなく繁殖に最適化されている。

強い力を持った人間を繁殖する、というのはこれまでにない試みである。

神々との戦争には弱すぎて使えないが、それでも地上で人間社会において暗躍するというのならば最適だ。

アシュレイがこれまで集めた孤児達は力を持つ者もいるが、その数は全体から見れば少ない。

また、それらはいわゆる特殊能力であり、一代限りのものであって陰陽術のように連綿と受け継がれる代物ではない。

ならばこそ今回の試みといえよう。

「とはいえ、中々に気骨がある人間であつたらしいが……また何故魅了の魔眼を使ったのだろうか」

報告は受けておらずとも、だいたいの症状でアシュレイが何をしたか分かる。

近衛紅葉が長にならなければ将来的に面倒なことになるのであるが故のアシュレイの行動。

とはいえ、それは無意識的なものであった。

彼女の表面的理由としては面倒くさかったから、というものが挙げられるが、それでもたかだか人間1人に魔眼はおかしい。

加減を誤れば一瞬で精神そのものを壊してしまう。

魔王であるアシュレイの精神へ干渉ができる者は極めて少ない。

同格か、世界か。

そのどちらかが挙げられるが、いずれにせよその干渉は強制力という形でもってアシュレイは明確に感知できる。

しかし、彼女に感知されることなく精神的干渉を行うとなればもはやそれは次元の桁が違う。

とはいえ……とある大前提がある。

それは上位の神魔族は平行世界に同時に存在する、というもの。

つまり、他世界のアシュレイからの干渉であればこの世界のアシュレイは明確に感知できない。

何しろ同一存在なのだから、ちょっと気分が変わった程度にしか感じられないのだ。

近衛紅葉が長にならず、近衛明日香が長になった場合……それを体験した世界が既があり、その世界のアシュレイが極めてまずいと判断したが故の他世界への干渉。

それがあり得る話であった。

とはいえ、ただの使い魔に過ぎないテレジアに関してはそういったことも雲の上の話。

彼女の課題はどれだけ効率的に近衛明日香の一族を増やすか、である。

「既に近衛明日香だけで1000人程度は生んでいる。また、その100人も成人し、既に繁殖を開始している」

このままいけば近いうちに万を超えるだろうことは想像に難くない。

だが、アシュレイはそれだけでは満足しない。億単位の、自分に仕える人間を彼女は欲した。

もつとも、既に近衛明日香をはじめとしたその娘達は人間とはいえない。

不老不死であり、産まれてくる子供は女か両性具有のどちらか。そして、アシュレイへ疑問を持たぬよう、魂レベルでの強固な洗脳が施されている。

これらをやったのは全てアシュレイであり、一種の呪いである。

「種付け相手は淫魔でいいとアシュ様から聞いている……淫魔はあつちこつちで引つ張りだこ。ならばもつと淫魔を増やさねば……」

淫魔はあちらこちらで重宝されている。

アシュレイが造った吸血鬼一族、近衛明日香の一族、戦乙女族やメイド族、アマゾネス族の増加の為に。

また淫魔自体の数増やしの為に淫魔は必要であり、更には地上から人間を連れてくるのも淫魔の役目。

教会墮落計画を行っていた淫魔達は既に戻ってきているとはいえ、数は常に不足していた。

「……最近、アシュ様とご無沙汰だ。とりあえず、似ている子を呼ぼう」

淫魔について考えると高ぶっていかん、とテレジアは思った。

「……アレは何かな、侯爵」

コンロンは困惑したかのような声にヘルマンは答える。

「アシュ様がお造りになられた吸血鬼の纏め役だそうだ。配下を引き連れて大名行列ではないかな」

地獄のどんよりとした空の下、カフェにてくつろいでいた2人。ダイ・アモンはもっと強くなるために、としばらく前から加速空間に入っている。

2人の視線の先には綺麗な黄金の髪を長く伸ばし、美しい装飾がなされたドレスを纏った女性が多く、少女や女性を引き連れて歩いていた。

その様は威風堂々というよりかは傲慢。通りかかる魔族に頭を下げるよう強要したりしている。

「何で彼女達はあんなに偉そうなのか？」

コンロンは問いかけた。

その問いにヘルマンは数秒の沈黙の後に答える。

「自分達はアシュ様に造られた。他の魔族とは格が違う、とそんなところではないかな」

「アレがダイアナ様辺りならやって当然であるが、あの程度でコレとは失笑もいところだ」

コンロンはうんうんと頷きつつ告げる。

ヘルマンは苦笑してしまう。

「何、若気の至りさ。アシュ様が、もしくは誰かが教育するだろう。強者は何をしても許される、そういう暗黙の了解がある地獄である。だが、弱者が分不相応なことをやっていると色々面白いことが起きる。」

その弱者よりも強い輩……それも何故か圧倒的な程に力が強い者が出てきて教育するのだ。

絶対的強者は自分のことを強いと思い込んでいる輩を叩きのめし、その絶望を見るのが好きという連中が多い。

勿論、アシュレイもその例に洩れない。

それもそうだ、とコンロンは頷き紅茶を啜る。

彼は紳士であるので音を立てるなどということは当然しない。

「最近やってきた人間は興味深い術を使うらしいな」

ヘルマンの話題にコンロンはティーカップを置き、興味深げな視線を送る。

「いや、私も人づてに聞いただけなのだが、何でも東洋の術とかで西洋系ラテン語魔法とはまた異なるものだそう。魔法が肉体的損傷を与えることに主眼を置いているのに対し、東洋のそれは精神的損傷を与えることに主眼を置いているらしい」

「我々にとっては西洋系魔法よりも東洋系の方が効果はある。肉体など我らにとつてただの付属物に過ぎない」

コンロンの言葉にヘルマンは頷き、言葉を紡ぐ。

「我らの肉体は物質を触る為だけにあるもの。ならばこそ、西洋系魔法の何と視野狭窄のことか」

「人間同士の戦いしか想定していないのだろう。元々は神魔が作ったものだ。人間はどんどん殺し合えばいい。我々も神々もそうなた方が都合がいい」

「全くだとも。良い家畜だ」

そして、暫しの沈黙が訪れる。

だが、それもすぐに破られることになった。

コンロンがふと脳裏を過ぎった、とある懸念により。

「アシユ様は妙な情を出して人間に味方したりはしないだろうか？

今のままの接し方では問題があると思う」

ヘルマンはその言葉に顎に手を当て考えこむ。長年、アシユレイを見てきた彼であるからこそ、コンロンの懸念は理解できる。

だが、彼にはその問いへの答えが既にあつた。

「アシユ様は人類全ての味方ではない。あの御方に味方した人間に味方する。アシユ様が人類全ての味方になるときは人類全てがアシユ様のみを心から信仰したときだ」

そう言いつつ、ヘルマンは裏話としてコンロンにかつて、ハルマゲドンの発端となったソドムとゴモラについて話をする。

彼は上司であるベアトリクスから聞いていた。

ヘルマンから話を聞いたコンロンはならば問題はあるまい、と判断する。

アシユレイのやっていることは神々がやっている布教と似たようなことであつた。

悪魔がやつても拒否されるのは目に見えているので誰もやっけないだけだ。

それを実行し、成果を上げていることがアシユレイの凄いところだ。

「ともあれ、我々はアシユ様についていけば問題はない。アシユ様

は男を蛇蝎の如く嫌っているというわけでもない。男が女に手を出すのを最も嫌っている。ならばこれまで通りで何も問題ない」「これまで通り仕事をして、こうして良いお茶を飲みながら語らう。それができれば私としては何も問題はない」

基本、淫魔を除けば性欲といったものが薄いのが魔族だ。

ただアシュレイの手にかかればそんな淡白な女魔族は一瞬で虜になってしまうのである。

「人類から見れば歪ではあるが、我々にとって子をなすのは性行為だけが手段ではないからな」

うむ、とコンロンは頷く。

所詮は肉体に縛られている人間の手段なのであった。

そして、そんな手段に快楽の為とはいえ縛られているアシュレイもまた、何だかんだで人間としての部分を捨て切れていなかった。

「ああ、忘れていたが彼女らの件はアシュ様に一応報告しておこう」

ヘルマンの言葉にコンロンは同意とばかりに頷いたのだった。

一方その頃、エヴァンジェリンは暇であった。

教会の主だった連中は既にこの世にはおらず、彼女の復讐は終了している。

適当に日々の業務をこなしつつ、ソフィアと寝て、人形作りや読書に励む。

東欧の城とあまり変わらない日々であった。

ただ、アシュレイからの警告により、いつでも地獄に逃げ出す準備はできている。

教会に寄付される金銀財宝などは教皇権限で自分のものとし地獄へ移動させてある。

あとは彼女とソフィアだけ転移すればいい。

さすがのエヴァンジェリンも降臨してくる無数の天使達とやりあう自信はない。

とはいえ、彼女の地上侵攻は極めて順調であり、最近では先鋒がアフリカの中央にまで達した。

インドや中国方面、シベリア方面は手を出していないが、それも時間の問題といえる。

しかし、ヨーロッパはジャンヌ・ダルクが生まれ、ある程度育つまでは手出しが禁止されているのがエヴァンジェリンには齒がゆかっただ。

唐突にエヴァンジェリンは強烈なめまい覚え、また耳鳴りがし始めた。

幸いにも彼女は椅子に座っていたが為に転倒するということにはなかつた。

数秒してめまいと耳鳴りはやってきたときのように唐突に去っていった。

立ち上がるのも億劫だが、彼女は気力でもって椅子から立ち上がり、おもむろに窓から空を見上げる。

青空がどこまでも広がっている。

だが、風が全くなく、いつもならば聞こえる動物達の鳴き声なども一切聞こえない。

「静かだ……静か過ぎる」

その声は僅かな緊張を孕んでいる。

すぐさま彼女は隣室にいるソフィアを呼ぶ。

「どうかしましたか？」

綺羅びやかなドレスを身に纏ったソフィアが現れた。

彼女は先程のめまいや耳鳴りが無かったのか、平然としている。

「逃げるぞ。嫌な予感がする」

問答は無用とばかりにエヴァンジェリンは告げる。

ソフィアとしても彼女に疑問を言えるような立場ではない。

彼女が頷いたそのときであった。

空が一面黄金に染まった。

そして、襲いかかる重圧。

エヴァンジェリンはややよろめきつつも、それに耐え、倒れそうになっているソフィアを抱きかかえる。

どこからともなく天に木霊する聖歌。

身を焼かれるような痛み。

それらなどは些細なことであった。

エヴァンジェリンは現れてくるその存在達をまっすぐに見据える。

「天使……」

呟いたその一言。

視線は空から動かない。

空一面に描かれた無数の五芒星陣と共に次々に現れる天使達。
十羽一絡とされている彼らを、エヴァンジェリンのボスはハルマ
ゲドン後ののんびりしていたとき、以下のように評価している。

全宇宙で最も強く、最も美しく、最も無慈悲な光の軍団

何をしにきたのかはもはや言うまでもない。

地球に蔓延る悪とそれに誑かされた人間共を討伐せんと降臨したのだ。

数秒もしないうちに自分のところにやってくるだろうことはエヴァンジェリンにはすでに分かった。

だが、逃げる準備は万端。

「バカな天使共め」

エヴァンジェリンは嘲りの口調で空にある彼らに言い、すぐさま転移魔法を発動。

妨害されることなく魔法は発動し、彼女は地獄へと帰還した。

だが、エヴァンジェリンは大事なことを忘れていた。

下位の天使達の知覚能力もまたエヴァンジェリンに引けをとらず、また上級三隊クラスでは実力的にも上回ることを、そして彼らの技術は地獄のそれよりもやや劣る程度であるということ。

神界にある中央司令部。

そこではウリエルが目を光らせていた。

かつてハルマゲドンにおいて中心的役割を取ったこの司令部であるが、大戦終了後からしばらくはだらけきった空気であった。

だが今は久々の対悪魔の仕事故にその空気は引き締まっている。

「ウリエル様、対象の吸血鬼が逃げ出しました」

オペレーターという言葉にウリエルは僅かに頷き、続報を静かに待つ。熾天使ですらも対象の吸血鬼 エヴァンジェリンについては知らなかった。

勿論、現れた当初から情報収集をしているとはいえ、どこの誰と繋がっているのかはさっぱり分からなかったのだ。

一応、エヴァンジェリンはかつてのレイチエル奪還作戦時にグレゴールの城にいたのだが、魔界はともかくとして神界はレイチエルとアシクタロスのみが目がいつていた為に彼女がいたことを知らない。

地球上で吸血鬼が誕生するというのは魔法を授けたときに想定された事態。

だが、その吸血鬼はあくまで人間から進化したちよつと強い程度で止まる存在であった。

それ以上となるには恐ろしい年月を修行に費やさねばならない。

しかし、蓋を開けてみれば下手をすれば上級魔族にも匹敵する強さを持っていた。

どこかの誰かが手助けしたことは間違いない。

そして、そんな手助けをすることができる存在もまた限られている。

というよりも、ウリエルとしては誰だか検討がついていた。

もっとも彼ならずとも大なり小なり、上位天使ならば誰が黒幕か

は容易に想像がついた。

先の信仰乗っ取り、アレと連動した計画であれば納得もいく。

そう、アシユタロスだ。

「転移進路判明しました。地獄の最下層、ジュデツカです」

そこまでしか分からないが、それで十分に過ぎる。

最下層に居を構える魔王は少ない。

サタン、ベルゼブブ、アシユタロス。

この3人であり、うち前者2人はわざわざこんな真似はしない。

ウリエルは頷き、踵を返す。

「地上に行っているミカエル達に連絡を。私は最高指導者様に伝える」

また彼女か、と若干うんざりしているウリエルであった。

そして、これより数時間後。

エヴァンジェリンが連れてきた吸血鬼兵士達は根こそぎ殲滅され、また悪に堕ちた人間達のうち、特に心が醜悪な者に見せしめとして罰を与え、天使達は地球から引き上げた。

これにより人類は神の存在を強く認識し、また偽りの神に祈っていたことを理解した。

本物の神を祈っていたならば、天使が罰を与えにくる筈がないのだ。

それから数日後、地上ではある噂が流れた。

それは全てを仕組んだのはアシユタロスであり、自らが信仰を得る為にやった、というものであった。

あの恐怖公が、という思いに取り憑かれた人間達は事の真贋を確認する術を持たないので、そのまま信じてしまった。

噂を流したのは他ならぬアシユレイ本人であることは言うまでもない。

そして、これによりアシユタロスの名は蛇蝎の如く忌み嫌われると同時に恐怖されることとなった。

また、神学の分野においてアシユタロスはサタンと同等であり、地獄を二分する存在、もしくはサタン＝アシユタロスと同一視され始める。

全てはアシユレイの思惑通りであり、彼女はまた勝利してしまっ

恐怖公の怖いもの(前書き)

独自設定・解釈あり。
微工口あり。

恐怖公の怖いもの

「まあ、妥当な判断かしらね」

神界からの今回の一件に対してのケジメとしての要請、それをサツちゃんは受け、アシュレイもまた受けた。

その要請とはしばらく地上に手を出さずに大人しくしてろ、とそういうものであり、また結婚式の延期であった。

おかげでアシュレイはほいほい地上に出かけることができなくなってしまう、千奈達に会えなくなってしまうた……というわけでもない。

神界からの要請は大人しくしている、というものであり、争乱を起こさねばほいほい出かけても問題ない、とそういう風に判断した人間なら遠慮するところだが、問題ない、としてしまう悪魔的判断である。

こじつけ甚だしいが、そういうのが悪魔であるから問題はないのだ。

そんなアシュレイは現在、フレイヤと連戦をベッドの上で繰り広げた後、のんびりとしていた。

千奈達には悪いが、嫁と言っても過言ではないフレイヤとたまにはのんびりしたいのである。

「……しかし本当にやることがないわね」

のんびりしたいと暇であることはイコールで結べない。

フレイヤが疲れて寝てしまった現在、アシュレイがやることといえば寝ている彼女に悪戯するか、寝ている彼女の横で他の女を抱くか。

それくらいしかなかったりする。

ふむ、とアシュレイは考え、両方行うことにした。

すなわち、悪戯しているところを他の女に見せつけつつ、その後に抱くのである。

「ジャンヌ・ダルクはまだか……」

そろそろ新しい女をもってこないか、と思うアシュレイであった。永遠の命、強大な力、人類を超越した叡智。

およそ人が欲しいと望むものを全て手に入れた彼女にとって、一番の敵は退屈であることだった。

「そっぴや、テレジアが淫魔が足りないって言ってたから、繁殖させることだけを専門とした新たな種族を作りましょうか」

淫魔に対してはあくまで天然物　すなわち、誰かの手により改良された物ではない　に拘るアシュレイだ。

妙な拘りであるが、アシュレイ的には元々忠誠を刷り込んでいない種族が敢えて自分に忠誠を誓ってくれている、という優越感とかそっぴったものに浸りたいのである。

そもそも彼女が色々な種族を作っているのは必要であったから、という理由は当然として、自然発生的に出てこないから、というものもある。

そしてどうせ作るなら最初から忠誠刷り込んでおいた方が楽である、とそっぴいうことであった。

ともあれ、アシユレイはさながら折り紙で鶴でも折るような気楽さで神の所業を行っていく。

宗教関係者が見たら卒倒すること間違いない。

どうせならと彼女は拘り、今まではマトモな人間の姿であったが、一捻りし、畸形に走ることにした。

パツと見は人間であるが、実は……という感じた。

やっていることは神の所業であるが、その内容はまさに悪魔。

数時間後、アシユレイはやっぱり暇になっていた。

フレイヤは起きたものの、何だか抱く気にはなれない。

飽きたとかそういう深刻な問題では勿論ない。

アシユレイはフレイヤの豊満な胸に頭を預けつつ、彼女に自らの胸をまさぐらせる。

フレイヤの手つきたるや凄まじく、アシユレイに容赦なく快感を与えていた。

一見すれば再び情事突入であるが、このくらいはただのじゃれあいに過ぎない。

故にテレジアが報告にやってきても何も問題はなく、やってきた

彼女にアシュレイがワガママを言うのもまた問題がなかった。

「テレジア、私の使い魔としてこの暇を解消する術を提示しなさい」

何とも無茶な要求である。

三界一の頭脳と称されるアシュレイをもつてしても、解決できない問題をただの使い魔に過ぎないテレジアがどうにかできるわけではない。

しかし、伊達に彼女の使い魔を億年単位でやっているテレジアではない。

「恒久的解決法ではなく、一時的解決法ならば幾つかございます」
「聞きましよう」

「アシュ様がどれだけ凄いか、人間界にもっと広めても良いのでは？ 直接的手段ではなく、地獄でも発行されているアシュ様について書かれたものを纏め、人間が読めるよう翻訳し、それを人間達に広めればそのご威光は地上にあまねく広まるかと」
「でも、それはあなた達がやる仕事ではなくて？」

アシュレイの問いにテレジアは動じることなく頷き、ですが、と続ける。

「それはあくまで第三者が書いたもの。アシュ様ご自身の手で手記などを書かれては……」

「……私の生を書こうと思ったら、万のページでは足りないのだけど」

「アシュタロスの生き様 全100万巻」とかそういうレベル

になつてしまつたらう。

全部読めるのは人間を止めている連中しかない。

「故に提案します。原案はアシユ様で私が絵図にするという形にすれば無知蒙昧な人間にも分かりやすくなるかと」

「漫画？」

「はい、漫画です」

「それでいいわ。枷のときにでも寝物語で聞かせてあげる」

テレジアはその言葉に嬉しそつに頷き、さらに言葉を紡ぐ。

「そろそろ闇の福音計画に本腰をいれられても良いのでは？」

「吸血鬼の準備は確かに整つたわね」

そつ言いつつ、自身の造り出した吸血鬼の纏め役を思い浮かべる。ちよつと調子に乗っているという報告にアシユレイはその彼女をぶちのめした後に性的な意味でもぶちのめしていたりする。

おかげで前よりは傲慢でなくなつて、アシユレイ的にはちよつどいい感じとなつていた。

「でも、それも私が直接やることではないわ」

「はい、全くその通りです。ですので、そこによつて生まれる副次効果を期待しては？」

テレジアの言葉でアシユレイはすぐに分かつた。

「敢えて経済的困窮を作り出し、身売りの女を大量に安く買い上げ
る」

「アシユ様によりメスとしての喜びを仕込まれることは幸福でしょ

う

「問題ないわね。新しいものが入るのはいいことよ」

他にはないか、とアシュレイが尋ねればテレジアはなおも言葉を紡ぐ。

「魔法界へ赴き、住民と戯れるのも一興かと」

「魔法界、魔法界ね」

そういえばそんなのもあったな、と。

地上侵攻作戦やらフレイヤといちゃいちゃすることやら紅葉の一件やらですっかり思考の外であった。

「定期的にセレステから報告を受けておりますが、中々に様々な種族が溢れているそうです。戦争も頻繁に起こっており……」

「適当な戦争孤児でも拾って育て、狂戦士にするのもまた一興か」

「魔法界にある王家を裏から支配するのも良いかと」

テレジアの言葉にアシュレイは頷き、すぐさまセレステを念話で呼ぶ。

彼女は久しぶりの呼び出しに即応し、転移魔法でやってきた。

「お呼びですか、アシュ様」

臣下の礼を取るセレステ　元セクストウムにアシュレイは鷹揚に頷く。

「魔法界の王家は最新の情報だとどんなもの？」

問いにセレステは打てば響くようにすぐさま答える。

「アシユ様がお作りになられたウエスペルタティア王国、亜人種の国、ヘラス帝国、地球から移住させた人間達のメセンブリーナ連合、学問を国是とするアリアドネー」

「小国は他にもたくさん？」

アシユレイの問いにセレステは頷く。

「まずはじめに言っておくけど、魔法界は私が造り、その所有権やら何やらは私にある。私以外の者が魔法界を潰したり何だりすることは許されないこと」

つまるところ、魔法界とはアシユタロスの協力を経てアシユレイが作った超巨大な箱庭に過ぎない。

「ウエスペルタティアとヘラス、そこを代々女系にしよう。私が孕ませることを認めた者以外がその王族の女を孕ませることは禁止しよう」

セレステはその言葉に疑問を抱き、思わず問いかける。

「恐れながらアシユ様。アシユ様ご自身が孕ませにならないのですか？」

セレステは一応、アシユレイが未だかつて子供をつくらない理由を知っている。

それは子供を孕んでいる間、突っ込めなくなるから。

何ともアシユレイらしい理由であるが、よくよく考えれば変な話である。

できないことを数える方が早いアシユレイがその程度の理由で躊躇

躊躇う。

母体も子供も傷つけずに最上の快感を得る方法くらい知っていないものだ。

「別段隠すことでもないけど、最近の神魔族は子供を作らないのが流行っているの。その辺はフレイヤがよく知ってると思うわ」

アシユレイに話題を振られ、フレイヤはその手を止めた。

そう、こうやってアシユレイが話している間もずっと彼女はアシユレイの胸を弄っていたのだ。

そのせいでアシユレイの下半身は凄いいことになっていたりする。

「子供による親殺しが一時期多くありましたの。それ故に多くの力ある神々は子供を作ることを忌み嫌うようになりまして」

親殺しで有名なのはゼウスです、と言葉を締めるフレイヤ。

そして、アシユレイが告げる。

「私は未来を見通すことができるからこそ、自身の破滅を回避したいと思う。ならばこそ、子供による破滅を回避する最善の手段は子供を作らないこと。もし気の迷いで孕ませたなら早急に母体ごと処理するわ」

母体ごと、と言うあたりにアシユレイの本気を垣間見ることができらるだろう。

だが、セレステは敢えて一歩踏み込んだ。

「自己保身の為……ですか？」

瞬間、テレジアもフレイヤも撤回しろ、と視線でセレステに訴え

る。

対するアシュレイは特に何も感じてはいなかった。

「それが何か問題でも？」

アシュレイは極々普通に問いかけた。

神々として腐敗するし、魔王が偽善もするそんなご時世。

自己保身に走るのもまた当然。

「いえ、特には。ただアシュ様をして怖いことがあるのか、と思いましたが」

セレステからすればアシュレイは到底辿りつけない領域にある至高の領域にいる存在。

神族からは恐怖公と恐れられ、魔族からは英雄として称賛されるそんな彼女に怖いものがあるというのはセレステからすれば十分に驚くことだ。

「私だって怖いもの一つや二つくらいあるのよ。まあ、10個もないんだけど」

それはそれで凄いとセレステは思ってしまった。

「ともあれ、テレジア。さっきの助言に感謝するわ。あと、セレステ。あなたもご苦労様。このあとは久しぶりに可愛がってあげるわ」

アシュレイは笑みを浮かべてそう言うのであった。

全ては我が欲の為に（前書き）

独自設定・解釈あり。

全ては我が欲の為に

ある日、アシュレイは居城で客を迎えていた。

客といっても、サタンやベルゼブブなどの魔王連中ではない。

その客は単純な力ではそこらの下級魔族にも劣るが、その嫌われ具合は地獄でも一、二を争う。

客は女性であり、彼女は玉座に座るアシュレイを前にして、片膝をつき、頭を垂れている。

「アシュ様、お久しぶりです」

アシュレイは鷹揚に頷きつつ、言葉を紡ぐ。

「あなたが自分の屋敷から出てくるのは珍しいわね」

「どうしてもお伝えしたいことがあります」

女性の返事にアシュレイは玉座に深く座りなおす。

「……カツサンドラ」

名を呼ばれ、女性は頭を上げた。

その際、燃えるような長い赤毛を僅かに揺れる。

「それは私の未来かしら？」

問いにカツサンドラは僅かに頷く。

彼女は見た目はまるっきり人間だ。

否、不老不死であるということとその特殊能力を除けばまったく完全に人間である。

彼女は魔族のような強大な力は持たないし、その身を自由に变化させることもできない。

だが、その予言は必ず起こる。

アシュレイの未来視などはあくまで計算に基づいた最も起こりうる確率の高いものを選択しているに過ぎない。

対するカツサンドラは相手の未来が分かっってしまう。

その未来は必ず起こる。

彼女はアポロンの恋人となる代わりに得た予言の力は誰からも信じられないというもので付与されて。

そんなものを持っているからこそ、誰からも毛嫌いされている。

だが、アシュレイは敢えて踏み入った。

カツサンドラの存在を知るや否や、ただちにその屋敷へ赴き、贈り物をし、歓談した。

そういう輩との付き合いこそスリルがあって楽しいもの、と彼女は考えた。

「今朝、見えました。明確に、明瞭に」

「聞きましょう」

何の気負いもなく、アシュレイは答える。

カツサンドラは一度、深呼吸をした後にゆっくりと言葉を紡ぐ。

「あなたは人間に倒されず。およそ600年の先に」

彼女の予言は絶対。

必ず訪れる未来。

「人間か……」

アシユレイはそう言いつつも、すぐに予想がついた。

大方、世界の後押しを受けた連中に倒されるのだろう、と。

消滅を願い、世界へ挑んだアシユタロスのように。

とはいえ……カッサンドラは消滅と言わなかった。

ならばそれは一時的な死に過ぎない。

だが、1度でも倒されてしまえばアシユタロスの名に傷がつく。

何よりも、倒されて復活までの間に地球が大変なことになりかねない。

アシユレイは自惚れるつもりはないが、地獄の多くの者から人気がある。

英雄として、そして先の領土回復の征伐戦争時の虐殺っぷりから恐怖公として。

もし、そんなアシユレイを倒したとなれば……人間は悪魔による侵攻を受けるだろう。

そして、神々もまたそれに立ち向かう為に反撃するだろう。

ならばこそ、魔王も動く。

地球を舞台に第二次ハルマゲドン。

人類は終わるだろう。

水爆をいくらぶつけても死なぬ常識外の相手なのだから。

とはいえ、それ自体に問題はない。

第二次ハルマゲドンといえど、神魔共に先の第一次の体験からお互いにやり過ぎることは自重するだろうし、何よりも上層部が穏健

派だ。

それなりに戦った後に講和するだろうことは想像がつく。

それに、地球と人類が壊れたならコスモプロセスで元に戻せば良い。

アシュレイの居城の奥深くにあるそれは既にほとんど出来上がっており、あとは膨大な人間の魂を結晶化してエネルギー源とするだけだ。

だが、前者……すなわち、アシュタロスの名に傷がつくことに関しては別だ。

コスモプロセスで改変しようにも、アシュレイ自身の記憶に倒されたというものが永遠に残る。

ならば、コスモプロセスで事前に倒されないよう改変してしまえば……というのもまた無理だ。

何故ならば、彼女の師であるアシュタロスがそうだったように、そこを改変しようとすれば必ず邪魔が入るだろうことは想像に難くない。

世界を物語と例えるならば、アシュタロスが人間によって倒されることは変えられない結末なのだろう。

だが、物語は魔王が倒されておしまいが、世界はその後も連続と続く。

倒れた魔王、それを喜ぶ倒した勇者一行。

その勇者一行の前に、倒した筈の魔王が現れたならば？

魔王は1つの存在でなければならぬ、という制約はどこにも存在しない。

物語の前提そのものを覆す反則……それを魔王が使ったならば？

魔王は倒されなかったということになる。
試してみる価値は大いにあった。

アシュレイはそこまで瞬時に考え、ゆっくりと立ち上がった。

「カッサンドラ、よく知らせてくれたわ。ありがとう」

そして彼女は心から感謝し、頭を深く下げた。

その姿にカッサンドラは予言を信じてもらえる嬉しさに涙を浮かべてしまう。

自らが倒される運命にある、と知ってなお、全く取り乱さずにその言える輩はまずいなかった。

翌日、アシュレイは京都の天ヶ崎家にいた。

「……久しぶりに会ったと思うたら、今度は地獄に帰るやて？」

居間で対面して座るアシュレイと天ヶ崎千奈。

千奈は溜息混じりにそう返した。

しばらくの間、地上を訪れていなかったアシユレイ。
随分と勝手な言い草である。

ちなみにだが、一応、アシユレイと千奈は主従関係を結んでいるが……第三者に言っても誰も信じてくれないだろう。

「私にもやることができたのよ。でも大丈夫よ。あなたの子孫に力を貸すくらいはするから」

手をひらひらとさせるアシユレイ。

その様子に千奈は再び溜息を吐いた。

「須臾と月詠も？」

「勿論。あ、でも安心して。何かあったらすぐに駆けつけるから」

「さよか……寂しくなる……ちゅーても、何や今更やなあ」

毎日顔を合わせていたのならば寂しさも湧くだろうが、何分、しばらくぶりなのである。

また地獄に帰ると言われても、千奈はピンとこなかった。

「ちよつとした実験をね。実力の隠蔽というか、誤認させるというか……」

「よう分からんけど、まあ、元気だな。ウチの子孫もよろしゅうに」

千奈の言葉にアシユレイはごそごそと懐を漁り、あるものを取り出した。

美しい装飾の施された短剣。

東洋のものとは全く違う、西洋剣に千奈はまじまじとそれを見つめてしまう。

「うちの部下がヒイロカネで造った短剣よ。儀式とか、護身用と

かに」

そう言い、アシュレイは机の上にそれを置いた。
千奈は一拍の間を置いて、思わず飛び上がった。

「な、何でそないなもんをぼんと出すんや!？」

「地獄にはヒイロカネとかミスリルとかの希少金属は大量にあるの」

「……ウチの家宝にする」

これ以上ない程に真剣な表情で千奈は言った。
それに満足し、アシュレイは鷹揚に頷く。

「2000年くらい先、松平元康という輩がここより遙か東の三河というところに生まれる筈よ。その頃には表に干渉しないことが陰陽師の掟になっているだろうけど、裏の纏めに協力してあげて」

アシュレイの言葉に千奈は努めて冷静に問いかける。

「それは予言か？」

「予言というよりか、確定的な未来よ。彼に協力すれば少なくとも天ヶ崎家は安泰よ。できれば帝との橋渡し役としても動いて欲しい」

千奈は数秒の間を置き、頷く。

近衛家とは確かに友好的関係にあるが、それでも天ヶ崎再興の夢はある。

その為には千奈が自らの力でやらねばならない。

陰陽師としての単純な実力は勿論、陰陽寮という組織内での権力闘争も。

野心家というのはどこにでもいるもので、事実陰陽寮内にも多く存在した。

独身であり、この時代からすれば結婚適齢期を過ぎつつある千奈は取り入るにはちょうどいい存在であった。

天ヶ崎のネームバリューは確かに衰えたとはいえ、それなりのものである。

とはいえ、そういった野心家達が今まで手出しできなかったのはひとえにアシュレイの存在だ。

神鳴流の決戦奥義である真・雷光剣すら効かない常識外の妖。

その妖を使役し、なおかつ、妖から気に入られている千奈に下手なことをすれば翌日には一族郎党ごとこの世から消滅していることは想像に難くない。

アシュレイの言から何かあつたら助けてはくれそうだが、使役関係は解除されることは千奈には予想がついた。

そもそもからして、夜枷と引換えとはいえ、今まで自分に大人しく従ってくれたことが奇跡に等しい。

ただ……千奈としては残念ではあつた。

アシュレイの夜の技は人間では到底到達しえない遥かな高みにあつたからだ。

もうあの快樂は味わえへんのやろか……

そんな気持ちで顔に出たのか、アシュレイはにっこりと笑う。

「やっぱり今日すぐに帰るのは止めた。1ヶ月くらい滞在する」

「ころころ変わるなあ……」

口ではそう言いつつも、若干嬉しそうな千奈であった。対するアシュレイもまた思惑が一つある。

それは将来的に彼女の子孫が自分のものとなるように、魂レベルで刷り込むことだ。

アシュレイは千奈は諦めたが、それでもその子孫までは諦めていない。

彼女の子供は無理かもしれないが、孫、曾孫と世代を経ることに取り込むつもりであった。

大和撫子というのはそれほど魅力的だ。

もつとも……もう少し時代が下り、受け入れ準備ができたときにアシュレイは買うつもりだ。

子供と女をその資金力にモノを言わせて。

勿論、その頃になれば諸外国でも大量に買い取る予定となっている。

日本以外の買取予定は主に欧州やロシアなど。

アシュレイの金髪好きは今に始まったことではないので珍しいことでもない。

元人間であった彼女からすれば人間なんぞいくら殺しても増える方が早い……そんな認識であった。

一時的に人口は世界的に大幅に減少し、文明の進歩もそれに伴って遅れるだろうが、永遠の命を持つアシュレイからすればたとえ1000年遅れようが、大して変わりはない。

また、この買取は600年先に倒されるというカッサンドラ予言

への対策でもある。

その英雄となるべき人物が生まれなければアシュレイは倒されない。
い。

勿論、こんな簡単にいくわけないだろうが、あくまでカツサンド
ラ予言への対策は副次的要素に過ぎない。

第一目標は自身の欲を満たすこと。

それに尽きた。

「それじゃ、早速……」

そう言い、立ち上がるアシュレイに千奈は一瞬惚け、すぐに頬を
真っ赤に染めた。

「こんな真昼間から!？」

「善は急げ。思い立ったが吉日。そういうことわざって私、好きよ」

笑顔を浮かべ、アシュレイは問答無用で千奈を引きずり、彼女の
部屋へと向かったのだった。

それから1ヶ月の間、アシュレイは千奈をこれまで以上の快樂の
渦に叩き込みつつ、何人かの知り合いの下を訪ね、同じように挨拶
をした。

立つ鳥跡を濁さず。

こういうところだけはきっちりしているアシュレイであった。

それから30年余りの間、アシュレイはひたすら来たるべき敗北の為に準備を進めていく。

サタンをはじめとした魔王連中にカツサンドラ予言について知らせ、そうなったときの為の対策を練る。

また、あんまり会いたくはないキーヤンなどの神界上層部、帝釈天らの神界過激派ともカツサンドラ予言について正直にうち明け、第二次ハルマゲドンの短期化の協力を取り付ける。

ハルマゲドン、どんとこい、を公言している帝釈天といえど、アシュレイのいないハルマゲドンはつまらないと思ったのか、あっさりとして協力を約束した。

対外的に活発に動くアシュレイであったが、身内……すなわち、テレジアをはじめとした使い魔やミカエルらにはカツサンドラ予言については言わなかった。

アシュレイが一時的に倒されて最も暴走し易いのは彼女らであったが、当の本人としては倒されることを防ぐのを頑張られては困るのだ。

たとえば、アシュレイが何もするな、と言ったところで予言を知れば彼女らは愛する主の為に黙って勝手に動いてしまっただろう。

世界は常に排除する者よりも少しだけ上の力を倒す者に与える。それが秩序を維持するのに最適なレベルであるからだ。

アシュレイはそのシステムを逆手に取り、倒される戦闘のときは可能な限り力を抑えるつもりであった。

そうすれば倒す相手が人間であるということからその戦力も予想し易い。

だが、テレジア達が地球破壊已む無しの精神で盛大にドンパチャればアシュレイを倒す人間はあり得ない程に強化されてしまうだろう。

それこそサイヤ人の如くとんでもないことになりかねない。

そんなことになっては元も子もなくなるが故のアシュレイの決断。また、彼女は幾つかの仕込みも人間社会で行う。

その仕込みは併行して行われた、既存計画である闇の福音計画の影に隠れ、誰にも知られなかった。

さて、長期凍結されていた闇の福音計画であったが、レイチエルの他に選抜された6人の美少女達に7つの商会を任せた。

彼女らはアシュレイから合計数万トンにも及ぶ金塊を与えられて、あつという間にヨーロッパ経済を握った。

闇の福音計画がある程度軌道に乗ったとき、ジャンヌ・ダルクが程良く育っていることをアシュレイは確認する。

まだ彼女の村は襲われてはいないが、近いうちに襲われるだろうことは予想がついた。

アシュレイはさらに自分の欲の為に歴史を変えるべく、秘密裏にジャンヌ・ダルク個人に対して介入を決めたのだった。

堕ちた乙女（前書き）

独自設定・解釈あり。

次から新章。いよいよ原作間近に……！

墮ちた乙女

夜の草原を少女は歩いていった。

今年で13となった彼女はこれが夢である、と臆気ながら気がついていった。

彼女の記憶は確かに自室のベッドで寝たところで途切れているからだ。

にも関わらず、彼女が足を動かしているのは何となく引かれるような、そんな感じがするからだ。

白く輝く月の下、黙々と歩みを進める少女はやがて草原の中に聳え立つ城を見つけた。

その城は彼女が見たこともない程に荘厳であった。

少女を招き入れるように巨大な城門が音も無く開いていく。どうせ夢だから、と好奇心旺盛に彼女は足を踏み入れた。

城の中は誰もおらず、静寂が支配している。

延々と一本道の廊下が続き、城門から1時間程歩いたところでようやく扉に突き当たった。

その扉は意匠を凝らしたものであり、少女は見蕩れてしまう。

「……？」

彼女は扉の上の方に見慣れぬ紋章を見つけた。

妙に惹きつけられるその紋章であったが、彼女は触れたりしな

った。
何故ならば、城門と同じようにその扉もまたゆっくりと開いたからだ。

少女は扉の中へと足を踏み入れる。

そこは玉座の間であった。

塵一つ無く、綺麗に磨かれた大理石の床、天井には水晶で造られた大きなシャンデリアが幾つもあり、また壁には何かの戦いを描いたものだろう、壮大な壁画があった。

しかし、少女はそれらに目を向けることはなかった。

なぜならば、玉座に座っていた存在に目を奪われていたからだっ

艶やかな黒髪は長く、雪のように白い肌、特徴的な紅い瞳。

何よりも、その背から生えている黒い翼。

玉座に座る少女が手招きすれば、ふらふらと足を踏み入れた少女は歩み寄ってしまう。

「ジャンヌ、あなたの村にイングランド軍が向かっている。あなたの村は1ヶ月後に襲撃を受け、あなたの家族が死ぬ」

「え……」

少女 ジャンヌは掛けられた言葉に啞然とした。

そんな彼女を玉座の少女は更に言葉を紡ぐ。

「逃げなさい。家族を連れて逃げなさい。私はあなたに死んで欲し

くない。神の操り人形にさせたくはない。あなたは村が襲われた後に啓示を受け、その後、フランス軍の英雄となる。だが、最後の最後で神は裏切る」

ジャンヌの視界が霞んでいく。

夢から覚めるのだ、と彼女は直感的に悟り、叫んだ。

「待つてください！ あなたはいつたい！」

「私は神の敵対者。だけど、あなたの味方。私はあなたを死なせたくない」

そこでジャンヌの意識は途絶えた。

翌朝、目が覚めたジャンヌはハッキリと夢のことを覚えていた。だが、彼女はどうにも信じる事ができなかった。

神の敵対者 すなわち、夢の中の少女は悪魔であると。

敬虔なクリスチャンである両親から教育を受けた彼女は悪魔の言葉を一方向的に信じることはできなかった。

そして、それから1ヶ月後、ジャンヌは後悔することとなった。夢の中で少女が言った通りになったのだから。

「ジャンヌ・ダルクか……使えるのか？」

空中に投影された大型スクリーン。

そこに映るのはフランス軍の旗持ちとして奮闘するジャンヌの姿。

問いかけた者はソファに寝そべり、クッキーを齧りながら紅茶を飲んでいる。

「使える……というよりも、私の個人的趣味なんだけどね」

答えた方も同じような格好であり、ソファに寝そべり、時折床で丸まっている金色の狐の背中を撫でている。

「お前が直々に行ったそうじゃないか。地獄の大魔王様が……え？ アシユ様？」

「いいじゃないのエヴァ」

「ちやかすように言うエヴァンジェリンにアシユレイはぶーっと頬を膨らませる。」

彼女の配下達が聞いたらけしからん、と怒るところだが、アシュレイ本人がエヴァンジェリンにこういう砕けた口調を許しているので文句を言えない。

「当初はフェネクスを派遣して、ミカエルも実は墮天しているんだとかやろうと思ったんだけど」

そう言うアシュレイにエヴァンジェリンは続けるよう促す。

「ジャンヌへの説明が面倒になるから止めた。私に話しかけたミカエル様が本物で、目の前のミカエルは偽物だと言われたらスムーズにいかなくなるもの」

確かに、とエヴァンジェリンは頷く。

彼女としても神界や魔界の事情は慣れたとは言い難い。

「で、ジャンヌが使えるかどうかだけど……ぶっちゃけた話、これから先、色んな連中が出てくると思うけど、私どころかあなたを派遣すれば全て事足りる」
「道理だな」

世界が介入とか神族とか上位悪魔とかそういった連中が介入しなければ魔法世界も含めて人間界で最強はエヴァンジェリンである。

正直なところ、エヴァンジェリン1人いれば大抵の戦闘に対処ができる。

アシュレイは勿論、その配下の上位悪魔連中も滅多に出番がないというのが実情だ。

勿論、デタントのおかげで人間界での戦闘行為は面倒臭いことになる、というのもある。

ちなみに、人間界へ行く際には上位神魔族は制限を設けよう、という動きがかつてあったが、それはさすがに嫌だ、とアシュレイが帝釈天と組んで叩き潰した。

妙なところで連携を発揮した2人にとっては何で自分の力をわざわざ抑えてやらねばならないのか、とそういつた理由だ。

これに同調する者は魔族は勿論、神族の武闘派にも多かった。

「しばらくは表立って動かない、と言うことだが……実際にどれくらいだ？」

「500年くらいはのんびりとするわ」

アシュレイは第一次・第二次の両大戦で人間の魂を多く得なければならぬので、この両大戦には介入する。

「500年か……短いな……あつという間だ」

エヴァンジェリンはそう呟き、紅茶を飲み干す。

「あつという間ね。日々、女の子とイチヤイチャしてるだけであつという間に100年くらい経ってるわ」

「……自堕落なのは知っているが、もう少し何とかしてもいいと思っぞぞ？」

「ハルマゲドンで頑張ったから、もう永遠に怠惰でいいと思うの」

「アシュタロスは怠惰を司っていたんだっけかな……」

「それも一説として人間界ではあるみたいね。怠惰はベルフェゴールよ。私はあくまで恐怖。誰かが恐怖を抱き続ける限り、私は滅びぬ。何度でも蘇るさ。恐怖こそが全ての根源なのだ」

随分といい加減なことを言っているアシュレイにエヴァンジェリンは溜息を吐く。

彼女としても、アシュレイがはっちゃける気持ちが最近、良く分かってきた。

永遠の命とはそれほどまでに退屈なものだ。

どれだけ勉強し、力をつけようとも時間は無限。

無限の時間をそれだけに費やすのは退屈ではないが、つまらない。

最近では神魔界の間に戦闘以外で少しでも退屈を紛らわせる為、ついでにデタント促進の為にテレビ放送みたいなものが始まり、そのある番組ではキーヤんとサツちゃんが漫才コンビとして出ていたりする。

それだけ何だかんだ言いながら、皆暇なのであった。

そんなこんなであつという間に時間は過ぎ去り、アシュレイがジャンヌに夢の中で警告してから6年余りの月日が経過した。

彼女はあれ以来、接触する、ということはずにただジャンヌを見ている。

そして、アシュレイは処刑間近となって再び動いた。

ジャン又は牢で頂垂れていた。

あの少女の姿をした悪魔の言った通りに全てが推移し、フランス軍の中では英雄と称されるようになった。

だが、次第に宮廷で孤立し、この様であった。

かつて聞こえていた啓示ももはや聞こえない。

そして、それもまたあの少女の言葉通りであった。

聖人が、天使が、神が、裏切った。

そのことは幾ら英雄と称されるとはいえ、19歳の少女には重く、彼女の心を神への敵対心で黒く染め上げるには十分過ぎる程であった。

「神は、天使は、光の存在は我々よりも時として傲慢よ」

唐突にそのような言葉が牢に響いた。

その聞き覚えのある声にジャン又はハツとし、立ち上がる。

どこだ、と視線を巡らせ……すぐ真横に立っていることに気がついた。

ジャン又は戦慄する。

幾ら旗持ちを好んだとはいえ、多くの戦場をくぐり抜けて来た彼女はそれなりに気配に敏感だ。

それなのに、彼女に察知されることなく自分の真横……そう、牢の中に立っていたその声の主。

魔法使いもジャン又は知っていたが、それでも人外である、と判断するには十分であった。

「久しぶりね、ジャン又」

「あなたは……！」

ジャンヌにっこりと微笑む少女　アシユレイ。
彼女はジャンヌが絶句している間に問いかける。

「私はあなたを救いたい。このままではあなたは殺される」

そう言い、アシユレイは手を差し伸べる。

「私と共に来なさい。あなたはここで死ぬべきではない」

ジャンヌは悟った。

きつと目の前の少女はこうしたいが為に警告をわざわざしたのだらう、と。

自分を味方に引き入れる為に、きつとこんな事態にならないよう、直接介入して自分を助けることができたのだらうに。

だが、それについてジャンヌは文句を言つつもりはない。

悪魔であっても、少女は自分を助ける為に予言をしたことに変わりはないからだ。

そして、その予言を信じなかったのは他でもない自分である、と信じ、そうしていれば目の前の少女はそれでもおそらくは満足だったのだらう。

勧誘に来たかもしれないが、それでもハッキリと断れる自信はあった。

だが、今の自分には選択肢がない。

味方であった筈の者から魔女扱いされ、神にも裏切られ、味方は目の前の少女を除けばどこにもいない。

ジャンヌは問う。

「あなたは誰なの？」

問いに短く、アシュレイは答える。

「恐怖公」

それに驚き、ジャンヌはまじまじとアシュレイの顔を見つめる。聖書などの多くの書物で書かれているアシュタロスの特徴とは似ても似つかぬ容姿なのだ。

また、耐え難い悪臭を放つとされているが、そんな悪臭はせず、むしろ何だか甘美な、甘い匂いが漂っている。

「私は英雄としてのあなたは勿論、ジャンヌという少女のあなたも欲しい」

「私に選択肢がない、というのを知っています？」

「あなたがあくまで人間のまま死にたい、というならばそれを尊重する。あなたは私の下に來たならば、後世においてこう書かれる。味方が裏切ったが故に悪魔となった悲劇の英雄、と」

アシュレイの言葉にジャンヌは告げる。

「私はフランスの為に立ち上がった。だが、味方に裏切られ、ミカエル様や聖女カトリック様、マルグリット様の啓示を受けたものの、その声も、今となってはもう聞こえない。ならば、どうして躊躇う必要があるのだろうか。私が尽くしたフランスはこの程度であった。もはや仕えるに値しない」

アシュレイは満足そうに頷きつつ、問いかける。

「ジル・ド・レイはどうするの？」

「彼が真に私のことを思い、行動するならば軍隊を率い、私を救い出してくれるだろう。あるいは多くの民衆と共に教会へ抗議するだろう。だが、私が看守から聞いた限りではそのようなことはない」

ハッキリと言い切ったジャンヌにアシュレイは再び満足そうに頷く。

そんな彼女の手をジャンヌはしっかりと握った。

「恐怖公よ、私を悪魔にして欲しい。フランスはともかくとして、全ての元凶となった者は滅ぼさねばならない」

復讐に燃えているジャンヌを止める理由はアシュレイに無く、彼女は笑顔で頷いたのだった。

アシュレイはジャンヌを魔族化させ、大陸にいたイギリス軍を彼女1人で全て皆殺しにさせた。

フランス軍や民衆は捕まっている筈のジャンヌが出現し、皆殺しにしたことに畏怖を込め、血塗れの乙女と呼んだ。

ジャンヌ出現の報を聞いたフランス王であるシャルル7世は自らの無力を嘆き、フランスの復興及びジャンヌの名誉回復を誓った。

その一方でアシュレイはジャンヌを彼女の家族と別れの挨拶を済ませるよう取り計らった。

フランスでやることを全てやり終えたジャンヌはアシュレイと共に地獄へと赴いたのであった。

反則的な人類（前書き）

独自設定・解釈あり。

反則的な人類

「よろしいのですか？」

フェイトは問いかけた。

今、彼は拠点として墓守り人の宮殿ではなく、ウエスペルタティア王国の宮殿の一角にいた。

そして、彼の目の前にいるのは彼を作り出し、一際強大なことで知られる地獄の大魔王。

「アレは鬼札よ。我々の側から敢えて人間に送り込む、獅子人中の虫」

「ですが、些か問題があるのでは？ ウエスペルタティア王家の間は差はあるとはいえ、既に魔族の魔法を扱えます」

その言葉に魔王 アシュレイは頷いた。

「勿論よ。何しろ、そうなるようにしたのだから。そうなるように女の魔族に犯させ孕ませさせてきたのだから」

ウエスペルタティアの王族は既に純粋な人間とはいえないことがアシュレイの言動から伺うことができる。

「ですが、ヘラス帝国にはそうしなかったのでは？」

「当初はただの遊びであっただけ、事情が変わったのよ」

事情というのはカッサンドラ予言のことであるが、当然アシュレイはフェイトにも言っていない。

カツサンドラ予言から、アシュレイは遊びよりも敗北の為の準備を優先し、ちよっかいを掛けたのは魔法世界ではウエスペルタティア王国のみであった。

「アスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフウシア……あなたがわざわざ自らの魔力を与えてまで作る必要があったのですか？ しかも、ウエスペルタティア王国に渡すなど……」

「必要であったからそうしたのよ。アリカ王女なんかは妹ができたとはしゃいでたじゃない。あの王女は美人になるわね」

うんうん、とアシュレイは頷きつつ、成長したら自分のモノにしよう、と決意する。

そんな彼女は既に倒される為の準備は万端であった。

第一次大戦までほとんど手を出さなかったアシュレイだが、逆に言えば僅かに手を出してもいた。

その最たるものがアメリカの支配だ。

彼女はアメリカの独立派に膨大な資金を援助し、更に南北戦争においては北部に援助を行った。

それ以後もちよこちよここと重要な局面で手を出し、今ではアメリカの裏の支配者になっていた。

とはいえ、表の支配者の大統領とは上下関係には非ず、対等な関係を彼女は結んでいる。

そのおかげで未だ排除されることなく、ホワイトハウスに堂々と出入りできるのだ。

無論、彼女はアメリカだけでなく、ソ連、ドイツ、イギリス、フランス、中国、日本と先進国は当然のこと、中東諸国やアフリカ諸国、南米諸国などの発展途上国にも金にモノを言わせ、食指を伸ばしている。

また、彼女は中世から近代にかけて多くの女子供を奴隷として購入し、不老不死とさせ、それらを殺し合わせるといったシヨールを地獄で行い、多大な収入を得ていた。

無論、元々地獄にそういったシヨールはあったが、アシュレイの場合には規模が違う。

彼女がやったのは1000人単位でのバトルロイヤルであり、魔族達に非常に受けた。

その為に人口のバランスが一時的に人間界でおかしくなったが、穴埋めの為にアシュレイ自ら人間をキーンとサツちゃんの監督の下、創造し、失った分だけ人間社会に送り込んでいたので既にその問題は解決している。

ただ、そのおかげで人間達の頭髪がカラフルなことになってしまったが、そこは神魔族共に問題なしとしていた。

ともあれ、アシュレイは自らが立てた敗北計画の通りにいかなかった場合、自分を倒した人間を人類の敵に祭り上げる為の準備をしていた。

守るべきもの達から憎悪を向けられ、狂って死ね……それがアシュレイからの心の込もった置き土産だ。

「アシュ様、10年以内に当初の予定通りにヘラス帝国と連合を争わせます」

「そうして頂戴。ああ、儲ける準備は万端よね？」

「はい、ダミー会社を幾つか作り、そこを通じて武器や兵器を……」

アシユレイはフェイトの言葉に満足にそうに頷く。
どうやら彼女は魔法世界で起こす戦争で一儲けするつもりらしい。
既に三界一の資産家である彼女だが、もはや金儲けが趣味の領域
に入っているのかもしれない。

「くれぐれも早期終結なんぞさせないで。在庫を抱えるのは嫌なの
よ」

「心得ております」

頭を下げるフェイトにアシユレイは頷く。

「それじゃ、私は地球に戻るわ。この後、アメリカで大統領や国防
長官と共に新世代の軍備について話し合わないといけないの。合衆
国大統領最高顧問なんて肩書きももらっちゃったし……」

手をひらひらさせ、アシユレイは転移していった。

残されたフェイトは暫しその場に佇んでいたが、やがて彼も転移
し、墓守り人の宮殿に帰還した。

そして10年後、辺境の小競り合いからヘラス帝国とメセンブリ
ーナ連合は全面戦争へと発展する。

後に言う、大分烈戦争の幕開けであった。

魔法世界が戦乱に包まれ、1年程が経過した頃。
地獄のアシュレイの居城では仕事に精を出す者達がいた。

「アシュ様は最近、精力的に動いているそうだな」

ちくちくとシルヴィアは布を縫いつつ、傍らにいるベアトリクスに言った。

対するベアトリクスも同じように縫い物をしつつ、答える。

「そうですね。ここ500年は我々もアシュ様も暇過ぎました。これでは腐ってしまいます」

ちくちくちく

「ああ、だがな……何で私達は縫い物をしてるんだ？」

「1ヶ月後に行われるアシュ様たぶん5億歳の誕生日記念パーティーの際に渡す、アシュ様の誕生日プレゼントです」

ベアトリクスはもう忘れたんですか、と言いたげな視線をシルヴィアに向ける。

そんな視線を向けられた彼女は溜息を吐く。

「それはわかるが、何でアシユ様はここ500年で誕生日パーティーや私達への慰労パーティーとかをやるようになったんだ？ いや、素直に後者は嬉しいが……」

「暇だったからでしょう。それにアシユ様の印象を良くする為でもあります」

2人共、口は動かしているが、手も動かしている。

その様子からはハルマゲドンにおいて、主神を相手取って戦った魔神とは到底思えない。

「取っ付きにくい、というイメージを多くの下位の者は思っている。いざというとき反抗されても困るので……」

敬語と断定が入り交じった独特の口調のベアトリクスだったが、シルヴィアも慣れたものだ。

「昔はもつと楽だったな」

懐かしむようにシルヴィアが言う。

「ヘルマンのような輩も、あの当時だから出てきたのでしょう……今の魔界は腑抜けています。何でも一部の下級魔族達は人間共に負けてしまうとか」

「デタントは確かに世界にとって安定を齎したが……魔族にとっては退廃を齎した」

「道理です。最近の魔族はやれ平和だの豊かな生活だの……まるで闘争というものを知らない」

最近の若い者は、と愚痴る2人の姿はまさに老人そのものだった

が、それでいて愛する主の為に縫い物をする姿は見た目相応の乙女に見える。

「とはいえ、我々の出番は……」

もうないだろう、そう言いかけたシルヴィアであったが、それは紡がれることはなかった。

久しく聞いていない召集を伝える甲高い音。

シルヴィアとベアトリクスはただちに縫い物を置き、転移した。
向かう先は玉座の間であった。

シルヴィアとベアトリクスが玉座の間に到着すると次々とアシュタロス陣営の実力者達が転移してやってきていた。

彼女らと同格のフェネクスやディアナ、エシユタルは勿論、ヘルマン、コンロン、ダイ・アモンら。

ヘルマン達3人は昇進し、軍団の任から解かれ、アシュレイの直属となっている。

そして、単純な力では上述した連中に劣るが、それでも人間界でなら上位に入るレイチエルと人間界限定なら最強のエヴァンジェリンと41人の軍団長達。

彼らが揃ったところでアシュレイはテレジアと共にやってきてい

た。

アシュレイは玉座に腰を下ろし、傍に控えるテレジアに視線を送る。

それを受け、テレジアは僅かに頷き、口を開いた。

「此度の召集はとある小賢しい人間を諸君らに叩いてもらう為だ」

その言葉にほぼ全ての者が首を傾げる。

小賢しい人間程度であればわざわざ自分達を集める必要がないのだ。

その疑問に答えるかのようにテレジアが更に言葉を続ける。

「その人間は人間とは思えぬ程の魔力と悪運を持っている。世界の加護を受けた者だろう」

一同に緊張が走った。

世界の後押しを受けている者には絶対に勝てない。

それは上位神魔族ともなれば常識であった。

しかし、その緊張を破るかのようにアシュレイが告げる。

「私の予想ではそいつは加護を受けているが、私の敵足り得ない。

おそらく、そいつの役割は魔法世界の戦争を終わらせること。戦争が終わればそいつの加護は無くなるが、私としてはまだ終わってもしらうては困る」

つまり、とアシュレイは続ける。

「あなた達は無敵の防御を持ったそいつを相手に時間稼ぎをして欲

しい」

アシュレイは要請しているようだが、立場を考えればそうではない。
い。

それは紛れもない命令であった。

「現地ではフェイト達が動いているが、あなた達は別行動で完全なる世界とは違う、第三勢力としてそいつと敵対をして。あと親衛隊以外は兵隊をあまり使わないように。出したところですぐにやられるわ」

「アシュ様」

ベアトリクスが呼ぶ。

アシュレイは彼女の質問をすぐに理解し、言葉を紡ぐ。

「敵の名はナギ・スプリングフィールド。そのお供に青山詠春、アルビレオ・イマ、フィリウス・ゼクト、ジャック・ラカン。何でも最近じゃウエスペルタティア王国のアリカ女王と手を結んだそうよ。アリカは私がモノにするから、なるべく手を出さないように」

その答えにベアトリクスは僅かに頷く。

「敵の詳細については後でレジアからファイルを受け取って頂戴。勿論、ナギ以外にも加護を受けている可能性もある。主神や熾天使と戦うように細心の注意を払いなさい」

「アシュ様」

エシユタルが呼ぶ。

すぐにアシュレイは彼女の質問を理解し、答える。

「暗黒体は使用不可。神族が介入してくると面倒くさい事態になるわ。また惑星規模の魔法の使用も不可。火星や魔法世界は壊さぬように」

「わかりました」

エシユタルは頷いた。

アシユレイは他に質問がないことを確認し、口を開く。

「あなた達をぶつけたところでナギは強大化するだけでしよう。でも、それはまたとないデータ取りのチャンスよ。どの程度まで強大化するか……得難いデータよ。それはいつか私にも訪れるかもしれない世界からの刺客に対抗する手段となる。気合を入れてやりなさい」

こうして紅き翼はアシユタロスの軍勢から波状攻撃を受けることとなった。

手加減しているとはいえ、攻撃する側は魔神や上級魔族。

その攻撃力たるや人間など一瞬で粉々にしてしまう程であったが、ナギ達は偶然足を取られる、風に吹かれるなどして体が攻撃の軌道から逸れてしまい、その体に致命的な攻撃が入らなかった。

衛星軌道上から魔力砲をぶっ放しても避けられるような偶然はもはや世界の加護と言っても過言ではない。

ならば、とレイチエルは親衛隊を動かし、アシユレイ経由で手に入れた米軍のアパッチやらソ連軍のMi-28などの1980年代当時としては最新鋭の攻撃ヘリを投入し、対戦車誘導ミサイルやら対空ミサイルなどを見舞った。

こちらは命中したが、ラカンの気合防御やナギのバカ魔力による強固な障壁で目標には傷一つつけられず、果ては青山詠春が石川五

右衛門並の剣技で命中前に真つ二つにするなど、地球の軍人に盛大に喧嘩を売ることをした。

このときの映像は親衛隊によってフルカラーで動画として撮影されており、アシユレイの仲介で行われた米ソ首脳秘密会談でアシユレイは米ソのお偉いさんと一緒に鑑賞したが、彼女をしても、人類を超えていると言わしめた。

またこれにより、対魔法使いの為に大幅に貫通力を強める必要性が打ち出され、冷戦で景気が良い軍需産業がまた潤うこととなる。

勿論、その軍需産業に属する会社の多くもアシユレイのもののだが……

ともあれ、そんな感じでナギ達は洒落にならない連中の猛攻を受けたが、ピンピンとしており、むしろ自分達にとってちょうどいい鍛錬相手だ、と襲ってくる上位魔族達を相手取って大立ち回りを演じた。

これにより紅き翼は急速にレベルアップを果たしてしまう。

しかし、それもアシユレイの予定のうち。

彼女はベルフェゴールやニジにデータの分析を任せつつ、そろそろ出てくるだろう自分の敵に思いを馳せるのだった。

首都の真ん中で、呪文を放つ（前書き）

独自設定・解釈あり。

首都の真ん中で、呪文を放つ

メセンブリーナ連合の首都メガロメセンブリア。

その中心街から少し離れたとあるビルの最上階に彼らは集まっていた。

「有史以来、悪魔というのは異形と相場は決まっております」

アルビレオは一同を前にそう切り出した。

この場には紅き翼の面々に加え、アリカ王女、そしてメガロメセンブリーナ連合の元老院議員マクギルがいる。

もともと、ガトウ、タカミチ、クルトの3人はおらず、彼らはこの戦争の真実を暴く為に暗躍している。

今回の会合は最近になって現れた第三勢力、エクスキューシヨナ―と名乗る勢力だ。

紅き翼を狙っているらしく、既に大小あわせて数十を超える襲撃を受けている。

「だがよ、異形つつつても、この前もその前も仕掛けてきたのはカワイコちゃんだったぜ？ それもヘラスでもメガロでもお目にかかれない程の凄腕剣士ときた」

ラカンはそのくらへんどうなんだ、とアルビレオに問いかける。

「ええ、外れてくれればと思ったのですが……異形の、姿形も見るからに魔法世界や地球上の生物ではないモノが魔族です。ですが、それは所詮は雑魚に過ぎません」

「……妾は詳しくは知らんのじゃが……魔族というのは得てして強大なものではないか？」

アリカの問いにアルビレオではなく、ゼクトが答える。

「そうじゃ。雑魚とはいえ、並の連中では手も足も出ん。このメンバーが異常なだけじゃ」

「ミサイルを真つ二つにするなんて……さすがの俺もできねーよ」

ナギはそう言いつつ、詠春に尊敬のこもった視線を向ける。

向けられた当人は恥ずかしそうにそっぽを向いて、頬をぽりぽりとかく。

「で、アルビレオ。連中は一体誰なんだ？」

ラカンの問いにアルビレオは普段の飄々としたものではなく、深刻な表情で告げる。

「上位悪魔神族……いわゆる、魔王や魔神といった神々に匹敵するレベルの輩のことです。そのクラスになると何故か人間と同じようなことをすると聞きます。襲撃をかけてきた者は全員、人型であり、かつ、一部を除けば尋常ではない魔力量を誇っていたことからおそらくは……」

アルビレオの言葉に全員ピンとこないのか、首を傾げる。

元々宗教とかそういうったものとはてんで縁がない連中であることに加え、魔法世界にはそういうった宗教は浸透していない。

唯一は実家が退魔の青山詠春であるが、彼とて多少の陰陽術を扱えるという程度であり、仏教に帰依しているとは言い難い。

そもそも仕掛けてきている悪魔は全員仏教圏ではなく、キリスト

教團出身の悪魔だ。

詠春が知らずとも無理はない。

アルビレオもそのことは分かっていたのか、いつものように笑みを浮かべる。

「まあ、早い話がとんでもなく強い悪魔です。ぶっちゃけ人間じゃ絶対勝てませんし倒せません」

「でもよ、俺達はそんな連中を相手にしても死んじやいねーぜ？」

ラカンの言葉はそれなら倒せるんじゃないか、とそういう意味合いだった。

しかし、アルビレオは首を左右に振る。

「これまでは幸運にもどうにか助かってきました。ですが、私にはあれが全力だとは到底思えない」

「全くその通りです」

アルビレオの言葉を肯定するかのように、凜とした声が響いた。

瞬時にナギ以下の戦闘がこなせる面々はマクギル議員を、アリカ王女を庇うように声のした方へと体を動かした。

そして、彼らは見た。

1人の少女を。

美しい金髪を三つ編み団子にし、その身には白銀の鎧を纏い、剣を抜き、床に突き刺している。

その眼光鋭く、雰囲気は歴戦の戦士を思わせる。

「会合の最中、申し訳ありませんが……我が剣の錆となっていただきたく」

「まあ待てや。見たところ騎士っぽいから、名乗り上げるくらいしたらどうだ？」

ラカンはそう言いつつも、自らのアーティファクト、千の顔を持つ英雄を取り出す。

「ふむ……いいでしょう」

少女は答え、一息の間を置き、裂帛の気合と共に言い放った。

「我が名はベアトリクス」

吹き出す威圧感。

鳥肌が立ち、冷や汗が出る程のそれを受けてなお、紅き翼は不敵に笑う。

「こつちの名乗りは必要かい？ お嬢ちゃん」

ラカンは冗談めかして尋ねた。

「そちらのことは既に存じております」

「そいつは……ありがてえね！」

瞬間、ラカンは千の顔を持つ英雄を使用し、斬艦剣を顕現させ、勢い良くベアトリクス目掛けて叩きつけた。

「……やれやれ、お前さんらと戦うと自信が無くなっちまうな」

ラカンは溜息混じりにそう言った。

彼の目の前ではまるでバターを切るかのように真つ二つに切断された斬艦剣。

しかし、それでもアリカ王女とマクギル議員の退避 正確には

アルビレオによる転移魔法 には十分過ぎた。

「行くぜ！」

ナギはそう告げるや否や、思いっきり突っ込んだ。

相変わらずの猪っぷりにアルビレオやゼクトは苦笑しつつも、数多の補助魔法を重ねがけしていく。

これまでの戦闘でエクスキューショナーの連中に攻撃魔法がほとんど効かないということが分かっていたからだ。

彼らにダメージを与えることができるのは物理攻撃しかない。

魔法使いの戦闘における存在意義そのものを揺るがしているとしてもない連中であつた。

ナギが、ラカンが、そして詠春がベアトリクスを取り囲んで四方八方から攻撃を仕掛けるものの、ベアトリクスは涼しい顔でそれを捌いていく。

彼女は時には避け、時には剣で受け……体に掠らせもしなかった。

普通なら絶望するところだが、あいにくと3人はそういう精神の持ち主ではなく、敵が強ければ強いほどに燃えるという困った精神の持ち主であつた。

また、彼らからすればヘラス帝国と戦争やっているよりも余程に楽しく、気分的にも楽であつた。

数分か、数十分か、それ以上か。

3人の猛攻とベアトリクスは足止めを狙ったアルビレオ、ゼクトの魔法により会場場所は見るも無残なことになっていた。

ナギ達前衛組は掠り傷こそ多いものの、致命傷は無い。

また後衛組は元々ベアトリクスが狙っていないなかったこともあり、魔力の消耗を除けば全くの無傷だ。

「頃合いですね」

そう言い、ベアトリクスは剣を鞘に収めた。

「何だ？ 今日はまだ終わりか？」

ナギが挑発するように言った。

エクスキューションーとの戦闘により、彼も含めて紅き翼は大幅なレベルアップを果たしている。

手加減しているとはいえ、ベアトリクスと一戦を交えた後であっても、彼らにはまだ若干だが余力があった。

「ええ、私は終わりです。そろそろ彼女も戦いたがっていましたので」

そう言い、ベアトリクスは転移し、消えた。

その言葉にナギ達は違和感を感じた直後 彼らの視界は白く染まった。

時間は少しばかり遡る。

ナギ達がベアトリクスと死闘を演じているとき、彼らのいるビルを別のビルの屋上から眺める存在がいた。

長い金髪が陽光を受け反射し、また風に靡く。

真つ黒なローブを纏った彼女は懐に入れた懐中時計の音をその優れた聴覚でもって聞いていた。

カチカチカチと規則正しい音が響く。

やがて、長針が一つ動いたとき、一際大きくカチリと音がした。彼女はゆっくりと口を開く。

そしてそのとき、彼女の視界の中にいたベアトリクスは戦闘を切り上げ、転移していった。

それは巻き込まれない為であった。

「リック・ラク・ラ・ラック・ライラック 契約に従い、我に従え
氷の女王 来たれ とこしえのやみ えいえんのひょうが」

瞬間、ナギ達がいたビルとその周辺の温度が絶対零度となった。

急激な温度変化は物質結合を破壊するのだが、タイムラグ無しでそうなって破壊されない。

故に擬似的な時間停止を現出する。

「全てのものを妙なる氷牢に閉じよ こおるせかい」

それだけでは足りぬと彼女は更に絶対零度となった空間を巨大な

氷でもって封印する。

メセンブリーナ連合の首都だけあつて人口密度は高く、百人単位で巻き添えが発生しているが、彼女は全く気にしない。

「我が敵に滅びの刃を　てつのおとめ」

氷の内部に無限ともいえる氷の剣が生えた。

原理としては単純であり、こおるせかいで造られた氷の内部を剣に変化させただけに過ぎない。

だが、中で封印された側には堪らない。

自分の体に密着するかのよう上下左右に突然氷が現れ、その密着している部分が全て剣と化したのだ。

まさに鉄の処女てつのおとめの名に相応しい。

氷は透き通っており、内部がよく見える。

巻き添えを食らった民間人が哀れにも全身を氷の剣で貫かれ絶命している様も見える。

親子連れ、恋人達、老夫婦など様々な人間が何が起こったか分からないままに死んでいる。

残念ながら彼らは『えいえんのひょうが』により見た目は変わらずに凍ってしまった為に血が流れ出ない。

そして、ピツチリと氷により封印されている為に貫かれた衝撃で体が崩壊してしまうということもない。

しかし、やった本人からしてみれば全く満足していない。

対生物においては最強クラスのこの魔法も、紅き翼の面々を殺すには至らなかつた為だ。

その証拠に連中がいたビルの屋上からは急激な魔力の高まりを感じていた。

「ふん……伊達に世界の加護を受けていないようだな」

そう言い、彼女はさらに唱えた。

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック 逆巻け風よ 内に秘めた
忌まわしきものを切り刻む刃となれ 竜巻裁断」

天を突かんばかりの大竜巻。

それは氷を自身の中に収めると、内側に向かって すなわち、
内部に置かれた封印の氷に向けて真空の刃を放ち始めた。

鋼をも切り裂くその刃を受けてなお、彼女の魔力によって造られ
た封印はビクともしない。

そして、彼女は唱える。

「開けよ凍てつく封印 解放の灯火」

『こおるせかい』によって造られた封印の氷が唐突に消え去った。
たちまちのうちに封印されていたものに襲い掛かる真空の刃。
内部にあったものは一瞬で切り裂かれ、粉塵に変えていく。

「……やれやれ」

そして、彼女は肩を竦めた。

彼女の目の前で竜巻は稲妻により真つ二つに切り裂かれ、消失し
てしまった。

魔力で構成されたその竜巻は例え壊されようとも修復され、一種
の結界としての役割もあるのだが……その修復力を上回る攻撃を叩
きこまれては消失してしまう。

「ナギ・スプリングフィールドは風と雷が得意であったな」

それを為した少年を彼女は見つめる。

腕を振り上げた状態で、あちこち擦り傷を作りながらも未だ致命傷はない。

彼以外の面々も擦り傷こそあるものの、同じく致命傷はない。

すると彼らはこちらに気がついたらしく、一直線に瞬動で向かってきた。

ナギが竜巻を破ってから10秒と経たずに彼女は紅き翼によって包囲された。

「また女か」

ナギが若干うんざりしたような顔で言った。

そんな彼とは裏腹にゼクトが静かな口調で尋ねる。

「お主もエクスキューショナーの者か？」

「ああ、それであってるな」

「何が目的なんじゃ？ 何故我々を狙う？」

そう言われて彼女は腕を組み、思案顔となる。

目的と言われてもただのデータ取りに過ぎない。

とはいえ、まさか自分達のボスを明かすわけにもいかない。

故に彼女は面白くしてやろう、と適当なことを言うことに決めた。

「強いて言うなら……強いと思っっているヤツを圧倒的な力で叩き潰してやりたいからだな」

「確かに圧倒的だが、今までその圧倒的な力を持った連中と戦っても俺達は生きてるぜ？」

ラカンの言葉はお前達は見下している俺達も倒せないくらいに弱い、と言っているに等しい。

安い挑発に彼女は鼻で笑う。

「悪いが、人類でいわゆる強者に分類される連中も我々から見れば子供に過ぎん。精々、狭い世界で戯れているがいい」

どこまでも上から目線な彼女に元々気が長い方ではないナギが力チンときた。

「どういうことだ？　っていつか、お前は何者だ？　俺と大差ない見た目だろ？」

「見た目は調整がきくんだ。本来の私の見た目は20歳程度だが、この14歳姿はわりとお気に入りでな」

「上位悪魔神族ですか？」

アルビレオの問いに彼女は首を左右に振る。

「私はあそこまで強くはない。その分、私は用心深くてな……まあ、それはともかく、そろそろ名乗っておくでしょう」

そこで彼女は言葉を切り、紅き翼の面々を見回す。

そして、告げる。

「我が名はエヴァンジェリン。一部の者からは闇の福音と呼ばれている」

一部の者　というよりか、実際には彼女のボスが勝手に名付けて1人でそう言っているだけだが、エヴァンジェリン本人としては

シンプルだが皮肉の効いたこの二つ名を気に入っていた。

神や教会といったものを彼女が大嫌いであるが故に。

とはいえ、魔界でそんなことを名乗る機会も無い為にすっかりとお蔵入りしていたりする。

「へっ、おもしれえ……やってやろっじゃねえか」

そう言い、獰猛な笑みを浮かべるナギにエヴァンジェリンは溜息を吐く。

「やれやれ。どこの蛮族だ？ そんなようではデートの一つもできんだろう」

「何だと!？」

いきり立つナギであったが、エヴァンジェリンは嘲笑をプレゼントしつつ、告げる。

「いいか？ デートというのはだな、スマートにやるものだ。当然、場所や雰囲気といったものを作らねばな。とどのつまり……お前達は既に私の手の内にある」

エヴァンジェリンの言葉にアルビレオとゼクトは己の持つ多種多様な探査魔法をできるだけ展開し、周囲を探査した。

すると自分達を取り囲むように無数の極細の糸がいつの間にか張られていることに気がついた。

すぐさま2人は念話でもってナギ達に伝える。

動けば体が切り裂かれる、と。

エヴァンジェリンは彼らの動きを見越したかのように告げる。

「だが、我々にも事情があつてな。今ここでお前達を倒すようなことはしない」

『できない』ではなく『しない』　これは大きな違いだ。

そして、世界の加護など知るよしもない紅き翼の面々にとっては事情を知るべくもない。

「それに軍も動いている。雑魚の相手など面倒なだけだ……では失礼する」

そう言い、エヴァンジェリンは転移していった。

その際、糸を回収するのも忘れない。

「何だアイツは！　いけ好かねー！」

エヴァンジェリンが消え、ナギは真つ先に怒りの声を上げた。

おちよくられた彼からすればその怒りも当然だ。

「ナギは否定できんじやろ」

「うむ、何しろナギだからな」

ゼクトと詠春がうんうんと頷く。

魔法使いとしての力を抜けばナギは短気なバカに過ぎないのである。

「ナギよりもこの俺様のなんとスマートなことか……！」

誇らしげに胸を張るラカンにナギは無言で正拳を叩きこもつとす
るが、あっさり回避される。

イラッときたナギは連続攻撃を仕掛けるが、ラカンは難なく回避
していく。

じゃれ合う2人を横目に見つつ、アルビレオは何だかんだで紅き
翼が必要以上に目立ち過ぎていることに溜息を吐く。

エクスキューショナーの連中は民間人をこれでもかと巻き込んで
いる時点で紳士的とはいえないが、それでも人質を取ったりするな
どはしていない。

これから先、エクスキューショナーと同じような輩が出てくるこ
とは予想されるが、そのときに人質を取られないという保証はどこ
にもなかった。

秘密会合（前書き）

独自設定・解釈あり。
微工口あり。

秘密会合

1982年6月 日本 横須賀 午後22時

日本海軍御用達料亭である魚勝。

海軍関係者からはフィッシュと呼ばれ、パインと呼ばれる小松と共に親しまれている高級料亭だ。

その駐車場に1台の黒塗りのリムジンと数台の黒塗りのベンツが止まった。

ベンツからは黒いスーツを纏った長身の見目麗しい女性達が降り、リムジンを囲み、周囲を警戒する。

脅威はない、と判断し、ドアが開けられた。

中から出てきたのは黒髪を長く伸ばした少女。

ご存知、アシュレイであった。

彼女は周囲を親衛隊の面々に囲まれながら、魚勝の門をくぐった。

「ようこそいらっしやいました。皆様、お揃いですよ」

アシュレイを三代目となる女将がにこやかな笑顔で出迎えた。

初代女将の頃から、アシュレイがここやライバルの料亭小松の常連であったことを知っている三代目はアシュレイが何者なのか、疑問に思ったりはしない。

客の詮索をしない、それがこの界隈の料亭の暗黙の了解であった。古くから軍港として栄え、今もなおそうであるここ横須賀ならではであった。

アシユレイは女将に従い、樁の間へと案内された。そこには既に本日の秘密会談の面々が集まっていた。内閣官房副長官、陸海空軍の大臣、そして麻帆良学園学園長にして元陰陽寮陰陽頭。

錚々たる面々であったが、彼らと比べてもアシユレイは圧倒的に格上であった。

故に彼女は上座に陣取った。

「随分と遅かったですな」

声を掛けたのは日本海軍の長である海軍大臣の高岡利文であった。海軍上がりの彼はユーモアに富んだ人物であり、アシユレイ相手にもジョークを飛ばす程の胆力を持っている。

「ええ、自由と正義に楯突く連中が多くてね」

アシユレイも笑顔で答える。

彼女はやれやれ、と肩を竦めてみせる。アメリカ合衆国最高顧問という肩書きをアシユレイが持っていることを知らぬ者はこの場にはいない。

そして、20世紀初頭より続く日米の蜜月を演出したのもまた彼女であることも知られていた。

「それはまた大変なことだ……さて、そろそろ始めましょう」

彼の言葉に元陰陽寮の最高権力者にして現麻帆良学園学園長の近衛近右衛門が長い顎鬚を撫でながら口を開いた。

「最近メセンブリーナ連合からは援軍を寄越せ、と矢の催促です。」

紅き翼の現れるところにエクスキューショナーが現れ、紅き翼はそちらとの戦闘にかかりきりになってしまふとのこと」

近右衛門を知る者からすれば驚きであろう。

彼が誰かに敬語を使うなど……

「まさかウチから軍を派遣しろ、何て言うんじゃないだろうな？昔はともかく、欧州諸国やソ連、中国ともデタントに向かって仲良くやっているんだ。大規模な軍事行動は第三次大戦を引き起こす可能性がある……第二次大戦の敗北からも連中は立ち直り、力を蓄え、30年近く冷戦が続いているというのに……」

早速官房副長官である山岡忠次が噛み付いた。

今日はマスコミ向けの閣僚会議が開かれており、主な議題は経済対策や福祉対策。

軍事のことは全くのノータッチな為に三軍の大臣は呼ばれていない。

「いやいや、表向きはウチも含めた各国も魔法使いに関しては知らない振りをしているんじゃない。軍ではなく、麻帆良にいる魔法先生や魔法生徒、他に詠春が参加しとるから陰陽寮からも戦力を出せと」
「馬鹿馬鹿しい」

陸軍大臣の山下元真が切って捨てた。

「麻帆良学園に関しては向こうから頭を下げてきて、アシユレイ殿の要請もあって受け入れたと記録にある。狙いは世界樹の保有に関して身代わりとする為。我が国の組織が大体的にやっっては独占している、といらん喧嘩を他所からふっかけられる恐れがある」

山下の言葉に頷く近右衛門。

「その為にわざわざ僕は陰陽師を止め、魔法使いになったんじゃ。元陰陽師の僕が魔法使いの根拠地のトップに据わることで魔法使いの日本及び極東進出を抑えた……これは骨じゃったぞ。身内からの批判も凄かった」

「とはいえ、陰陽師は日本の霊的守護の要。それを出すことは罷りならん」

空軍大臣である井ノ本景明が憤慨しながら言った。

彼の言葉に同意するかのように、アシュレイを除いた面々が頷く。そのような中、山下が告げる。

「麻帆良学園に関しては別に戦力を出しても構わんだらう。連中の戦力だ。好き勝手やればいい」

「じゃが、問題は欠員が出た場合、より露骨な向こうの犬が送り込まれてくる可能性じゃ。事故や病気で死んでもらう、といっても学園としての体裁を取っている以上、一般の生徒や先生に紹介せねばならん……」

そう言いつつ、近右衛門はアシュレイへと視線をやる。

その視線を受け、アシュレイはゆっくりと口を開いた。

「エクスキューションーに関しては止めさせるわ。もう十分に必要なものは手に入ったし……そうすれば援軍を寄越せ、というのも止むでしょう」

アシュレイの鶴の一声に面々は頷く。

「ただ、ホワイトハウスの面々はどうやら魔法界に新たなフロントエリアを見出したいみたいなのよ」

「魔法界に介入？ 米軍が？ 何の冗談ですか？」

山岡は信じられない、と言った顔で問いかけた。

「承知していると思うけど、ワルシャワ条約機構……WTOの加盟国にも製品が出回っているわ。そこに限らず、世界中で日本とアメリカの製品が競争しているのよ。どっちも品質、価格ともに同じ。日本は勢力圏内だけで製品回してもやっていけるけど、アメリカはそうはいかない。彼らの勢力圏は本土を除けば南米や南太平洋の島々程度……」

「どこかの誰かさんの入れ知恵のおかげで、日本は徳川政権時代に大きく飛躍しましたからなあ」

うんうん、と頷く高岡。

その誰かさんは彼の皮肉に口を尖らせる。

「いいじゃないの。西はビルマ、東はハワイ、南はオーストラリア、ニュージールランド。早い段階から現地住民や現地政府と友好的関係を築きながら入植したおかげで今日の日本が、大東亜共栄圏があるのよ？」

「まあ、日本人なら誰も文句は言えませんよ。世界に冠たる大日本……そう胸を張れるのはアシュレイ殿の入れ知恵のおかげです」

煽てにアシュレイは頬を膨らませながらも、矛を収める。

「しかし、魔法界に米軍が介入とは……地球側の魔法使い共が黙っていないのでは？」

山下の問いかけに答えたのは井ノ本であった。

「3時間以内に地球にある主要な魔法使いの拠点に米軍と共同で空襲をかけられる。WTO諸国も協力しようとする魔法使い連中は嫌っていると聞く」

「魔法使いの綺麗過ぎる理想は困ったもんじゃて……」

近右衛門はげんなりとした顔で言った。

そんな彼にアシュレイが告げる。

「魔法使いも好きでそうなってるんじゃないわ。魔法使いはかくあるべし、と当時の地球から移住させた魔法使い連中がコンプレックスからそう思つて、後の世代にも押し付けたというか……」

「コンプレックス……ですか？」

近右衛門のはてな、という顔。

他の面々もこの話は知らないらしく、首を傾げている。

「魔法使いとして迫害されていた連中は色々やったのよ。魔法を持たない人間達に好かれよう、とね。その為の一種。つまり、魔法使いが悪を倒せば嫌っている人達も自分達を好きになってくれる……そういう話」

「世知辛いですなあ……」

しみじみとした風に言う高岡。

「まあ、誰も魔法使い達の理想は否定できないわ。勿論、この私ですらも。彼らの理想は尊く、眩しい。誰もが皆、憧れる……いや、私はどつちかという戦争が大好きなんだけども」

ともかく、とアシュレイは更に続ける。

「平和を、平穩を、皆が幸せな世界を……こんな理想を否定できる人間は人間じゃない。否定するモノは私達と同じ輩よ。現実的に考えて無理とかそういうレベルじゃないもの。やるかやらないか。平和の為に邁進する者はそれを諦めてしまふ輩よりも強く、美しい」

うんうんと頷くアシュレイ。

破壊と死と恐怖の権化である彼女が言うと言得力があるような、ないような。

まあ、彼女も色んな政治家や企業の取締役などを見てきた。

欲に塗れた者もいれば平和の為に、社会の為にと頑張る輩もいた。欲に塗れた者の美しさはギラギラとしていてければしく、アシュレイの心を騒がせる。

対する平和の為にとかそういう者の美しさは実に清らかであり、彼女の心を落ち着かせる。

どちらもアシュレイにとっては大好物であるのは言うまでもない。特に後者はその清らかさを穢してやりたい、と彼女の嗜虐心をかきたてる。

さて、意外なことだが長い時間の中で彼女が人間と戦ったことは実は今まで一度もない。

これは多くの上級、中級神魔族に言えることだが、人間と積極的に戦おう、というヤツはまずいない。

例えるなら人間にとってのミジンコ。

ちっぽけなミジンコと戦いたい人間がいるか　そういう次元なのだ。

「まあ、平和主義とかそういうのは置いておいて……我々に必要なのは日本及び同盟国たるアメリカの利益、国民の安全」

高岡の言葉にアシュレイも含め頷く。

アシュレイは世界中のあちこちに食指を動かしているが、多くのところでは利害の一致で手を組んでいるに過ぎない。

洗脳に気づかない程に巧妙な洗脳を行い、全人類を統合し、争いのない世界を実現することもできるが、対立はあつた方が魔族全体に有利　負の感情の増大の為　なのでそうはしていない。

何よりも、そんなことをしたらアシュレイ自身がつまらない。

嫌がる相手を屈服させるのは彼女の好きなことの一つなのである。

「アメリカには新たなフロンティアとして宇宙を提供しようと思っているの。宇宙は無限だから、うまくすれば永遠の繁栄を得ることができる……勿論、私も協力する」

「ウチにも当然、協力してくださいるのでしょね？」

アシュレイの言葉に山岡は問いかける。

そんな彼に彼女は勿論、と頷き、今回の会合の決定事項を纏める。

「魔法界からの要請は蹴る、エクスキューションナーは活動停止、魔法界への米軍進出は市場獲得としては阻止」

市場獲得としては、という妙に具体的な制限であったが、誰も気にしない。

なぜなら、ここにいる面々はアシュレイに起こるかもしれない、例の予言をアシュレイ本人から聞いていたからだ。

無論、彼らだけでなく、総理や他の大臣も知っている。

また、世界を見渡せばほとんど全ての国家の政府上層部は知っている。

どこもかしこもアシュレイがいなくなってもらっては色々な意味で困るという点では敵も味方も無かった。

アシユレイが会合を終えて魚勝を出たとき、既に時刻は午前0時を過ぎていた。

わざわざ東京ではなく、横須賀まで来たのは単純にスケジュールの都合であった。

アシユレイは転移魔法があるのでいつでもどこでも好きな場所にいけるが、山岡らはそうはいかない。

彼らは明日　というよりか今日、横須賀での観艦式に出席する。東京湾で行われる日本海軍の主力艦が全て集まる観艦式と比べると幾分落ちるが、それでも十分に華やかだ。

さて、いつでもどこでも好きなところに行ける筈のアシユレイがどうして車で移動しているか、というと単なる見栄である。

彼女に付いている護衛の親衛隊員達であるが、ぶっちゃけ彼女達よりもアシユレイの方が億倍も強いのでこれまた見栄である。

そんな彼女は横須賀から横浜へと入り、とあるホテルへ向かった。

アシユレイが取った部屋は勿論、最上階のスイートルーム。

そこで彼女を待っていたのは婚約者のフレイヤであった。

彼女はアシユレイに抱きつくくなり、その顔にキスの嵐を見舞う。

「アシユ様、お帰りなさい」

「うん、ただいま」

もう何百年と婚約者をやっている2人であったが、いつまで経っても付き合い始めた頃と変わらない。

夜の営みが無い、という夫婦は人間に多いが、少なくともアシュレイとフレイヤが結婚したら、永遠にそういう悩みは来ることがないだろう。

「何になさいますか？」

「あなたに決めた」

今度はアシュレイから激しいキス。

それにフレイヤは身を委ねるが、アシュレイは数分で止めてしま

う。
普段なら20分はやっているところなのだが。

「どうかなさいましたか？」

「いやね………どういふ風なプレイをやるうかと真剣に悩んでたの」

ものすんごい真面目な顔でアシュレイは告げた。

彼女からすればかなり大きな問題だ。

紅き翼とかそういったものよりも遥かに。

そんな彼女にフレイヤはくすりと笑う。

「今までにほとんど全てやりましたけど………こういふときは気分で考えるのが良いですわ」

2人の夜はまだ始まったばかりだった。

悪魔の鑑(前書き)

独自設定・解釈あり。
微グロあり。

悪魔の鑑

「あーあーあー！」

叫びつつ、彼女は頭を掻きむしる。
するとその長い黒髪がよく揺れる。

「アシユ様の使い魔使いの荒さは何とかならないの!？」

魂から叫んだ。

彼女はアシユレイに古くから付き従っているベアトリクスらの魔神の域にまで到達した側近の使い魔などではなく、ここ数十年で新たに作られた使い魔だ。

そこらの人間に負けない程度の力はあるが、彼女は頭脳特化型。スパコンを遥かに超える処理能力を持ち、またアシユレイのように統計学を使った未来予知もどきすらできる。

そして作られたのは彼女1人だけでなく、彼女を含めて500人程いる。

妙に拘るアシユレイなので、その容姿や性格は勿論、趣味嗜好きな食べ物嫌いな食べ物などの細かいところに至るまで全く異なっている。

人材不足で困るという問題はアシユレイなどの上位神魔族においては無縁の話だ。

さて、そんな彼女達の仕事はアシユレイが誰に、どのような形で倒されるか、ということを予測することだ。

雲を掴むような話であるが、それを為すだけの能力が持たせられている。

「ユー、さっさとやりなさいよ」

横から聞こえてきた同僚の言葉に彼女　ユークロトスは口を尖らせながら、再び意識を自分の端末に埋没させる。

人間のようキーボードを叩くという必要はなく、直接電脳空間と結び、情報のやり取りを行いつつ演算する。

具体的には地球に存在する全ての人間のデータからこれまで収集した様々なデータを基にアシユレイの敵となりえる輩を割り出す。

幸いにも、神界・魔界の上層部とは話がついている為に魂のリストと呼ばれるものをアシユレイは手に入れていた。

それはこの世に存在する全ての魂ある者が書かれたリストだ。

それは問答無用で記録される世界のシステムの一端を使ったものであり、魔法世界の者といえど例外ではない。

そのリストの中から割り出すのであるが、人間ならまず間違いなく発狂する作業だ。

そんな狂気の仕事を彼女らは偶に文句を言いつつも、しっかりとこなしていた。

魔界で着々と準備が進んでいる中、魔法界でも動きが起こっていた。

エクスキューシヨナーによる襲撃が唐突に止んだことにより、紅き翼とアリカ王女はマクギル議員と協力し、本来の目的であるヘラ

ス帝国との和平工作に乗り出していた。

これはそれなりの進みを見せ、アリカ王女は友人でもあるヘラス帝国のテオドラ第三皇女と和平に向けた会談の場を持つことに成功した。

だが、そこを襲撃した妙に紳士然とした3人組の魔族によりあっさり彼女とテオドラは捕らえられ、夜の迷宮と呼ばれるアシユレイの魔法界での別荘の一つに閉じ込められてしまった。

元老院の横槍により……というよりか、彼らがエクスキューションの脅威に怯え、首都の警備を紅き翼に任せたが故に、アリカの傍に彼らはいなかった。

アリカとテオドラが捕らえられた、という情報を聞いた時、ナギはどこにいるかも分からないのに真っ先に飛び出そうとしたが、ラカンとアルビレオに無理矢理静かにさせられている。

以後、紅き翼は連合軍を抜け、戦争そっちのけでアリカ王女とテオドラ皇女の救出に奔走し始めた。

そんな最中、アシユレイは夜の迷宮にてアリカ王女と対面していた。

「初めまして、アリカ王女」

怯えてしまわぬよう、アシユレイはわざわざ体そのものを人間として作り替えた上で、魔力も最低限に抑えていた。

とはいえ、その滲み出る雰囲気は如何ともしがたく、アリカは目の前にいる自分と同じか、それよりも年下程度の見た目にはか見えないアシユレイに恐怖心を抱いていた。

「妾をウエスペルティア王国の王女と知つての狼藉か！」

だが、恐怖心を微塵も表に出さず、アリカは厳しく問い詰めた。そんな彼女にアシュレイは嬉しそうに笑みを浮かべる。

「何がおかしい？」

アリカは怪訝な顔をアシュレイに向けるが、当の本人はうんうんと頷く。

そして、アシュレイは笑みを崩さずにアリカに告げる。

「久しぶりに人間から怒られたのが、ちょっと嬉しくて。やっぱり敬われてばかりだと駄目ね」

その言葉の意味をアリカは正確に読み取り、人でないことが分かった。

そして、自分達を攫つたあの悪魔達はおそらくこの少女の部下であることもまた予想がついた。

その悪魔3人組は紅き翼には及ばないが、それでも精鋭を揃えた護衛であつたにも関わらず、1秒と経たずに自分とテオドラ以外の全員が石化するという離れ業をやつてのけた。

上位悪魔を召喚できるような亜人の高位召喚師か、とアリカはあたりをつけつつ、ならばと彼女は決意する。

召喚師は接近戦に弱いというのは常識だ。

極稀に接近戦もこなす万能な輩もいるが、目の前の少女からは底知れぬ怖さこそ感じるものの、熟練の戦士にあるような独特の雰囲気は感じられない。

紅き翼を間近で見してきたアリカだからこそ分かるものだ。

「妾とテオを攫ったのは何故じゃ？　そなたが完全なる世界の黒幕か？」

問いにアシュレイは笑みを崩さずに答える。

「前者に関しては単純に私があなただを欲しかったから。テオドラはおまけね。後者に関しては……想像にお任せするわ」

いけしゃあしゃあとそんなことをアシュレイは告げた。

黒幕役に用意した役者は既にいる。

最後に黒幕が正体を現さなければならぬ、という決まりがあるわけでもない。

「妾が欲しい？　妾の力が狙いか？」

「いや、そんなありがちなものじゃないわ。むしろ、もっと単純明快な理由よ」

「妾を操って紅き翼を殺すつもりか？」

ならば、と問いかけたアリカであったが、アシュレイは首を横に振る。

「どうしてそう、深く考えるのかしらね？　もっとこう、常識に則って欲しいというか……」

そう言うアシュレイだが、彼女は自分の常識が人間とは勿論、普通の神魔族と比べてもかなりズレていることに気づいていない。

普通の神魔族は自分の性欲の為に種族を創りだすなんてことはないのだ。

「ハッキリ言うけど……あなた、かなりの美女よ」

ビシッと指さして告げられた言葉にアリカは目を丸くする。何でこの場でそんな言葉が出てくるんだ、と彼女は心の底から疑問に思った。

「早い話、あなたを私のものにした。あなたを抱きたい」

真剣な表情で告げられ、アリカは目を瞬かせた後、一気に顔を赤くする。

パクパクと口が何度も開くが、言葉は出てこない。

元々王女として育てられてきた彼女はこんな直球な言葉は聞いたことがない。

そんな彼女にアシュレイは微笑ましく思う。

こういう初心な反応は実に良いものだ。

とはいえ、アシュレイはここで無理矢理やったり、あるいは洗脳して虜にすることもしない。

そういうのもそえられるが、アリカのような芯の強い女を壊し、服従させる方がアシュレイとしては好きであった。

その為の布石として、彼女に自分のことを強烈に印象づける必要がある。

忘れたくても忘れられないように。

故に、アシュレイはアリカの精神へ干渉していた。

会話が始まった瞬間から。

アシュレイのようなレベルになると、極々少量の魔力であっても極めて巧妙に凶悪な術を掛けることができる。

「妾はそなたらのような完全なる世界の手には落ちぬ！」

自らの心を落ち着ける為か、アリカは怒鳴った。

それもまたアシュレイからすれば可愛いものである。

「じゃあどうするの？」

問いにアリカは動いた。

その身に宿る特殊な、そう魔族と同等の質を誇る極めて濃い魔力を用い、その身を強化。

そして、彼女はアシュレイの首を両手で掴み、思いっきり絞めた。アシュレイは苦しげな顔でアリカの手を外そうともがくが、やがてその抵抗は小さくなり……

だらり、とアシュレイの手が力無く垂れ下がった。

彼女の端正な顔は苦悶の表情を浮かべている。

そこでアリカは一気に気が抜け、床にへたり込んでしまう。

また、彼女は首を絞めている最中、呼吸を忘れていた為にその息遣いは荒い。

やがて息を整えたアリカはゆっくりと自分の両手を見つめる。

あのときの感触はハッキリと彼女は覚えていた。

「……私が、殺した」

そう、小さく呟いた。

魔法で殺したなら、まだ実感は少ないだろう。

だが、彼女は絞殺という最も感触が残るやり方でやった。

一生忘れられないだろう、とアリカはぼんやりと感じた。

悪人だから死んでもしょうがない、と割り切れるような程に彼女は冷酷ではなかった。

そして、ふらふらとアリカは幽鬼のように立ち上がった。

彼女は何かに導かれるように歩いて部屋を出ていった。

「……アカデミー演技賞ものだわ」

アシュレイはそう言い、ゆっくりと起き上がった。

そして、彼女は首に残るアリカの手の感覚に笑みを零す。

人間に体を作りかえたから死ぬ、というようなことは当然ない。

さて、アリカが何故、わざわざアシュレイの首を絞めたかという
とアシュレイによる精神干渉だ。

勿論、それだけではなく、彼女は自分を絞殺した光景をアリカが
寝る度に夢として見るように呪いもかけていた。

それでいて精神が壊れないよう、またストレスで体が衰弱しない

ように保護処置も施したのだから、彼女の反則っぷりが窺える。
その後、アリカを外へ出したのも勿論アシュレイによる誘導だ。

要は全部アシュレイが仕組んだことだ。
アリカを手に入れる、ただそれだけの為に。

「あとはウエスペルティアを滅ぼすだけね」
「やれやれ、君は本当に恐ろしい悪魔だ」

呟いたアシュレイに後ろから声を掛ける存在がいた。

彼女と対等な口調で話せる輩はそう多くはない。

そして、今、話しかけた輩はそれをアシュレイが許している数少ない輩であった。

「黒幕の出番はまだ先よ？」

「僕も暇なんだ。君が用意したラストステージで出番が来るまで、
政府の書類仕事をやるだけなんだからね」

「いいじゃないの、ベルゼブブ」

サタン、アシュタロスに並ぶ地獄の実力者の1柱であり、地獄政府の宰相。

その彼にアシュレイは完全なる世界の黒幕役を頼んでいた。

人間が聞いたらきつとヤケクソ気味に叫ぶだろう。

勝てねーよバーカ、と。

紅き翼の面々は完全なる世界を潰すことが世界から与えられた役割ではない。

あくまで戦争を止めること、それが彼らの役割だ。

そして、ベルゼブブと戦うような段階に至っては既に戦争は終結

しているか、紅き翼がいなくてもすぐに終結する段階にまで達している、と予想されていた。

故に……彼らは絶対にベルゼブブに勝てない。用済みとなった者にいつまでも加護を与える程、世界システムは意味の無いことはしない。

「しかし、君も飽きないね」

やれやれ、と溜息を吐きそうな表情でベルゼブブが言った。その言葉だけでアシュレイには事足りる。

「魔法界は私と彼が作った箱庭。そこに住む者は全て人形。人形の女を愛するのは虚しくないのか、とそういうこと？」

「そういうことさ。君との会話は楽しいね」

「それはどうも。だが、私は創造した。それは地球の人間と変わらない」

ベルゼブブは頷く。

人間もまた神魔族が造った存在に過ぎない。

過程が違うだけで結局のところ、魔法界の住民も同じなのだ。

「では言い方を変えよう。君が少しその気になればたちまちのうちに虜にできる女を、何故わざわざ？」

「その方が楽しいからよ」

予想通りといえば予想通りの答えにベルゼブブは笑みを浮かべる。

「彼女の何もかもを奪ってやるのよ。そして、絶望したところで心を侵し、私の虜にして犬のように私に媚びへつらわせる」

嗜虐的な笑みを浮かべ、一片の迷いなくそう言い切るアシュレイにベルゼブブは問いかける。

常日頃から彼らが感じている疑問を。

「君は永遠に悪役であることに何か感じたりはしないのかい？」

アシュレイはおかしそうに笑いをこらえ、答える。

「世界は善と悪から成り立っている。私は悪となった。なら、どこに悪を為すことに疑問を挟む余地があるのか？」

アシュレイの解答は例えるなら人間が空気を吸うことに疑問を挟むか、とそういうものであった。

悪になったから悪を為す。

極めて単純な理由だ。

ベルゼブブはさすがだ、と素直に感心した。

魔族と言っても、その大半は元神族や元天使だ。

それはかつての地獄政府　ハルマゲドンをやっていた頃やそれ以前も　のメンバーも例外ではない。

そのような中に紛れ込んだ例外。

人から悪魔になったアシュレイ。

彼女は誰よりも悪魔らしかった。

「そういえば先日発表された最も恐ろしい魔族ランキング。君がやっぱり1位だったね。これで連続何年だい？」

「まあ、1000年は超えているんじゃないかしらね」

「魔界だけでなく神界でもやっぱり1位」

「賞品はキーヤんとサツちゃんと漫才できる権利……誰が欲しがるのよ？　もっといいモノ出しなさいよ」

「政府の国庫よりも君の金庫の方が潤っているらしいけどね」

何のことやら、と惚けるアシュレイ。

そのときであった。

「失礼します」

どことなくフェイトに似た長身の青年が現れた。

彼はアーウエルンクスシリーズのNo1、プリームムであった。

「アシュ様、アリカ王女及びテオドラ皇女が予定通りに脱出しました」

「それじゃ、予定通りにアリカが女王として即位するようにやっつきなさい。彼女の父親は私に協力的だったから、あんまり酷いことはしちゃ駄目よ」

「心得ました。では、アリカ王女に殺させます」

プリームムはそう言い、一礼するとスツとその場から消えた。

「彼も随分といい性格をしているようだね」

ベルゼブブは肩を竦める。

「可愛い私の使い魔だもの」

ふふん、と胸を張るアシュレイであった。

計画通り(前書き)

独自設定・解釈あり。

計画通り

「そろそろ頃合いかのう」

ウエスペルタティア王国の王都オスティア。

そこにあるホテルのバルコニーでゼクトは1人、夜空を見上げながら呟いた。

600年余り、人間界で活動した彼はナギのあまりのバカっぷりに呆れて彼の師匠となった。

その600年の中で唯一、彼の正体を見破ったのはドイツのとある医者唯一人。

あの男は才能に溢れていたが、残念ながら彼の主と戦う資格がなかった。

故にゼクトは彼の主には報告せず、そのまま活動を続けたのだ。

明日になればウエスペルタティア王国の国王は倒れ、アリカが女王となるが、ゼクトはこの大戦の真相にとつこの昔に気がついていた。それは単純でエクスキューションと名乗る上級魔族やら吸血鬼兵士やらが現れたことがきっかけだ。

あそこまで露骨にされて気づかない方がおかしい。

「ナギも結局は資格無き者であったか……残念じゃのう」

ナギが資格ある者であった場合、ゼクトの活動は終わり、あとはのんびり暮らせる。

さすがの彼も600年以上、自分の主と離れ離れというのは寂しいものであった。

「アリカ王女も大変なことになるのう……」

そう彼が呟いたとき。

噂をすれば影のことわざ通り、アリカの気配を部屋の外に感じた。数秒と経たずにドアがノックされ、ゼクトは許可を出す。

アリカは部屋に入るなり、彼の背後から問いかけた。

「すまぬが、少々聞きたいことがある」

アリカの声にゼクトはゆっくりと振り返る。

彼の視界に入った彼女の顔は実に真剣なものであった。

「何か用かのう？」

「アシユレイという少女を知っておるか？」

その名が出た瞬間、僅かに気温が下がったような感じがした。

ゼクトが何かした、というわけではない。

言霊であった。

「知っておるぞ」

ゼクトはあっさりと頷いた。

その様子にアリカは恐る恐る問いかける。

「その少女は何者だ？」

ふむ、とゼクトは顎に手を当てる。

教えたところで魔法界の住民であるアリカにはピンとこないだろうことは容易に想像ができる。

ならば、とゼクトは少しからかうことにした。

「死と恐怖と破壊を撒き散らす悪魔といったところかろう……ちなみにだが、アシュレイというのは数ある名の一つで旧世界では主にアシュタロスと呼ばれておる」

アリカは寒気を感じ、身を震わせる。

「勇壮にして強大な地獄の大公爵じゃが……そのアシュレイがどうかしたかの？」

「……妾はアシュレイと名乗る少女に夜の迷宮で会ったのじゃ」

絞殺した、とアリカは言えなかった。

彼女の言葉にゼクトは思案げな顔で言葉を紡ぐ。

「ふむ……つまり、その少女がアシュタロスであるか？」

「そうじゃ。妾が欲しい、と言いおった」

なるほど、とゼクトは頷きつつ、口を開く。

「普通に考えてアシュタロスが人間界に出てくるかのう？」

極々当たり前の問いにアリカは首をゆっくりと横に振る。

「それが答えじゃろう。何、心配することはない。お主が懸想しているナギが何としても守るじゃろう」

ゼクトの言葉にアリカは顔を真っ赤にし、その場から走り去っていった。

彼女の気配が部屋から出たことを確認し、ゼクトは笑みを浮かべ呟いた。

「ワシ自身は問いかけただけで否定しておらんのだ。人間と
いうのは自分の信じたいことしか信じないから。」

そのとき、ちょうどゼクトの視界に姿見が入る。

何の変哲もないただの硝子だ。

彼は笑みを浮かべたまま、その姿見へと歩み寄り、その前に立つ。

「普段はナギ達に気付かれぬよう、鏡に魔法をかけているのじゃが

…… 1人部屋というのはいいものじゃて」

そう呟くゼクトの姿は鏡に映っていないかった。

そして、翌日。

アシュレイは自らの居城にある彼女専用の食堂で空間投影モニターを見ながら、ゆっくりと食事をしていた。

彼女の本日のメニューはアメリカ牛のステーキ。

肉厚でありながら、かなり大きい。

またアシュレイは地味に大食いでもあるので、1枚では足らず、既に3枚目のおかわりに入っている。

なお、副食はパンではなくライスである。

アシュレイの傍にはセレステがワインを持って控えており、更に壁際には多くのメイド達が直立している。

また、アシュレイが座る椅子の背後には彼女を守護するように火のアートウルである式と水のアダドーのセブテンデキムが控えている。

アートウルの初代及びアダドーの16代目は現在、アメリカに貸し出され、新兵器の実験に付き合っている。

アートウルシリーズはつい最近、アシュレイが暇だったので作っただけだが、アダドーシリーズはわりと古い。

初代から15代目までも当然存在しているが、現在ソ連に貸出中だったりする。

何でも運河を水爆で作ろうとしたが、失敗したので正攻法で作ることになったとのことだ。

「頑張ってるわねえ」

呑気な声を上げるアシュレイ。

画面の中ではアリカを先頭に、紅き翼の面々がオステイアにあるウエスペルタティア王国の宮殿に突入している光景が映っていた。

多くの兵士達や鬼神兵がその行く手を阻まん、と迫るが紅き翼の敵ではない。

黄昏の姫巫女とあだ名されるアスナが国王側にいれば話は別だが、その彼女は既に儀式の為に墓守り人の宮殿に移されている。

そう、今、魔法界の戦争はクライマックスに差し掛かっていた。

戦争を裏で操っていた完全なる世界という秘密結社は白日の下に晒され、それに協力していたウエスペルタティア王国の王を倒し、墓守り人の宮殿で行われる世界を無に帰す儀式を阻止せん、と紅き翼が奮戦する……そんな状況であった。

そして、それはアシュレイのシナリオ通りであった。完全なる世界は元々彼女が世界システムの観測の為に作った組織だ。

紅き翼という世界の加護を受けた者達を察知することができ、なおかつ様々なデータも収集できたが故にその目的は達成されている。また、魔力枯渇の問題の為に紅き翼が出てきたわけではないが、魔法界を滅ぼしかねない戦争と世界に認知されたが故に紅き翼が出てきたことがニジとベルフェゴールから報告されている。

つまり、世界の中に世界がある、という状態であつても、世界システムは問題なく働く、という最大の目的も達成されてしまったことになる。

正直なところ、世界を無に帰す儀式とか魔力枯渇による魔法界の崩壊ということに関してはただの設定でしかない。

無に帰す儀式としているが、ぶっちゃけた話、ウエスペルタイアを効率的に、かつ悲劇的に滅ぼす為にアシュレイの手により作られたものだったりする。

わざわざアスナという核を使わなくてもいいのだが、その辺は悲劇さを演出する為だ。

「ああ、さすがプリームムね」

アシュレイは素直にプリームムを称えた。

モニターの中ではちょうどアリカが玉座の間にとどり着き、そこで父である国王を殺したところだ。

そこにはアリカと国王しかいなかった。

場面を変えてみれば紅き翼の面々はプリームムの指揮の下にセレ

ステを除いたアーウェルンクスシリーズに足止めをされているのがモニターに映った。

うまいことアリカだけが玉座の間に行けるようにしたらしい。

そこでアシュレイはモニターを消す。

もはや見る必要もなかった。

「音楽でも聞きましょう」

アシュレイが一声出せば彼女の食卓の横に大きな舞台が召喚された。

そして、たちまち舞台の上に現れる演奏者達。

総勢300人にも上る、女魔族達によって編成された楽団だ。

やがて準備が整い、指揮者がアシュレイに一礼した後、演奏が始まった。

その後、オーケストラの演奏を聴きながら、アシュレイは食事を楽しんだのだった。

カリカリカリと羽ペンを動かす音が広い部屋に木霊する。

ベルゼブブは墓守り人の宮殿の最奥部で書類仕事をしながら待っていた。

アリカ王女がクーデターを起こして既に2日が経過した。世界を無に帰す儀式とやらの準備はアーウエルンクスシリーズとデユナミスが行い、必要な魔力が溜まり次第勝手に発動する。そして、その魔力もあと僅かな時間で溜まる。用意された真実を知った連合軍やら帝国軍やらに墓守り人の宮殿は取り囲まれ、突入まで秒読み段階となっている。

帝国軍やメセンブリーナ連合軍に関しては間に合わない、と当初は思われたが、マクギル議員の奮闘によりどうにか間に合わせるこ
とができた。

彼は和平派であり、汚職を探っていた為に殺される筈であったが、結局殺されなかった。

アリアドネー、ウエスペルタティア王国、メセンブリーナ連合、ヘラス帝国。

魔法界の主要国が参加した一大決戦となるだろう、と彼らは思っていた。

最奥部で書類仕事をする優男が、人間程度がどうこうできる存在ではないことを知らずに。

ベルゼブブは手を止めた。

同時に僅かな振動。

それは魔法界の連合軍による攻撃が始まったことを示していた。

「やれやれ、さっさとここまで来てくれないものかな」

彼はアシュレイからある情報をもらっていた。

戦争は既に終結間近であり、紅き翼がいなくとも問題ない状況である、と。

それは紅き翼が用済みとなったことを意味する。
世界の加護を失った彼らは……

「ああ、ようやく来てくれたようだ」

彼は宮殿内部に突入してきた数名の中にアシュレイから聞いていた者がいることも魔力の波長から確認する。

その者は何でもアシュレイが数百年前に人間社会に仕込んだ使い魔らしく、闇の福音計画の影に隠した為に知る者は彼女しかいない、とのこと。

真っ直ぐ一本道となっている為に紅き翼が迷子になることもなく、またアーウェルンクスシリーズやデュナミスは準備が終わった後はさっさと地獄に引き上げていた。

故に邪魔者もない。

ベルゼブブが言葉を発してから10分後、紅き翼は彼のいる部屋に辿り着いた。

扉を開けた彼らは一斉にその身を強張らせた。

目の前にいる男が、人間などを超越した次元にいることに気がついたので。

「ご苦労様」

ベルゼブブがそう言った瞬間、唯一人を除いた紅き翼の面々の胸に大きな穴が空いた。

そこから鮮血が吹き出し、やがて彼らはゆっくりと倒れ伏し、ア

ルビレオは表紙の真ん中に穴が空いた魔導書を残して消え去った。

「で、君が彼女が言っていた使い魔君かな？」

問いに彼は頷いた。

それは髪を短く刈り揃えた少年であった。

「そうじゃ」

するとそのとき、音もなくアシュレイが現れる。

ゼクトは彼女を見るなり、すぐさま臣下の礼を取った。

「ゼクト……いえ、メフィスト。久しぶりね」

「アシュ様もお変わりなく……」

何故、アシュレイが紅き翼が世界の加護を受けているかもしれない、と特定できたのか。

アシュレイとてリアルタイムで世界の全てを知ることにはできない。

特定できたのはひとえにゼクトからのリークだ。

彼がアシュレイから与えられた仕事は才能ある人間を見つけ、監視しろというもの。

600年余りの間に何百人という才能を持った人間達と出会ったが、その中でも傑出していたのがナギであった。

異常な悪運と魔力を誇るナギと出会ったゼクトは以来、彼の余りのバカっぷりに見るに見かねて魔法の師匠となった。

そして、あまりの悪運の良さに彼はアシュレイに報告したのだ。以来、彼の任務は紅き翼の一員として行動するということになった。

容赦無く襲ってくるエクスキューショナーと称した上位魔族や吸

血鬼兵士達にはさすがのゼクトも自分ごと殺すつもりなんじゃ、と思っただのは内緒である。

もっとも、アシュレイがゼクトは味方だから、と言ってなかったのでベアトリクス達は殺す気であったのは確かであるが……

「さて、僕の頼まれ事はもう済んだ。帰らせてもらおうよ」

ベルゼブブはそう言うたとさっさと地獄へ転移していった。

彼は結構忙しいのだ。

「メフィストフェレス」

アシュレイがゼクトの本当の名を呼んだ。

彼はただ平伏し、次の言葉を待つ。

「あなたの功績は極めて大きい……だけでも、もう一働きしてくれないかしら？」

問いにゼクト　メフィストはただ御意、と告げる。

アシュレイは満足そうに頷き、メフィストの頭を撫でてやる。

彼女は彼を人間界に送り込んで以後、全く接触していない。

報告もナギの一件のみであり、それも念話でのものであった。

つまるところ……メフィストはアシュレイに飢えていた。

使い魔とは主に触られたり、褒められたりすると普通の部下にそっするよりも万倍も嬉しいもの。

頭を撫でられる様はまるで子犬のようだ。

「あなたの本当の姿を見せてくれないかしら？」

問いにメフィストはすぐさま行動を起こした。
みるみるうちに彼の体に変化していく。
短かった髪は背中辺りまで伸び、平坦な胸は膨らみ始める。
同時にその背丈もアシュレイと同じ程度にまで伸びた。

そこにいたのは白い髪の少女であった。

その姿は実に美しく、彼女が魂と引き換えに知識を授けたフアウスト博士が「メフィスト、お前は美しい」と言ったのも頷ける。

ゆつくりとメフィストはアシュレイの靴先に口付ける。

そんな彼女にアシュレイは笑みを浮かべつつ、死体となったナギ達へ視線を向ける。

「さっさとやりましょうか」

アシュレイは当初の予定に従い、アルビレオも含めてナギ達を蘇らせ、仮死状態とする。

その後、彼女が予定していた記憶を彼らに植え付け、激戦が行われている、ということアピールする為に適当に魔力砲を放ち、宮殿を内部から破壊する。

それからアシュレイはナギ達を仮死状態のうちに死なない程度に傷をつけ、満身創痍っぽく見えるようにした。

全てが終わった後、彼女はメフィストと共に墓守り人の宮殿を後にしたのだった。

そして、意識を取り戻したナギ達。

彼らの記憶ではナギがアッパー決めて造物主という黒幕をぶっ飛

ばしたことになる。

ぶつ飛ばしたナギ自身も造物主を倒した感触がその手に残っている。

げに恐ろしきアシュレイの記憶操作。

彼らは用意された記憶に疑問を抱くことなく、そのまま信じてしまった。

それを責めるのはあまりにも酷だろう。

世界の加護があつたならばともかく、今の彼らにはない。

勿論、今の状態であつても人類最強と言つても過言ではないが、それでもアシュレイと比べたら天と地ほどの差があつた。

「……お師匠」

ナギは顔を俯かせ、悔し涙を流す。

彼らの記憶の中では造物主は幽霊みたいなものであり、ゼクトに憑依され、乗っ取られたということになっている。

今、そのゼクトことメフィストはアシュレイにご褒美としてたっぷりと愛でられて、快樂の中にいると知ったらどう思つたろうか。

「ナギ、まずは儀式を止めねばなりません……そうしなければ全てが終わります」

アルビレオの言葉にナギは小さく頷いたのだった。

こうして紅き翼は魔法世界を救った。

シナリオを書いたアシュレイは自分の思い通りに進んだことに満足しつつ、ウエスペルタティア王国の崩壊を間近で見ようと逆天号に乗って現場へと赴くのだった。

そして、1983年9月30日。

その日、魔法世界では戦争の終結を迎えた。

ウエスペルタティア王国の離宮島において、メセンブリーナ連合及びヘラス帝国は停戦に合意。

そのまま記念式典及び完全なる世界を打ち破った紅き翼の祝勝会が開かれていた。

しかし、唯一人、アリカは気が晴れなかった。

それは世界を無に帰す儀式を封印した代償としてウエスペルタティアの王都オスティアのある無数の浮遊島が崩落するということも勿論ある。

だが、それだけではない。それは確かに重要であるが、できる限りの対策は女王権限で既にやってあり、あとは時を待つだけだ。

もう一つの気がかりはアシュレイであった。

アリカはゼクトとの問答の後も、彼女のことを考えている。

あのような尋常ではない恐怖をまき散らしていた存在が、自分が首を絞めた程度で死ぬのか、という疑問は拭えない。

考えれば考える程にアシュレイは不可解な存在だ。

上位悪魔を召喚できるような召喚師となれば完全なる世界でも幹部クラスとみていいが、ガトウの調査ではアシュレイなる人物は存在しない、とのこと。

「どうかしたのか？ 姫さん」

ワイン片手に気軽に話しかけてくるナギ。

いつもなら彼の笑顔に心が躍るアリカだが、今日はそういう気分ではなかった。

「いや、少しな……」

「ああ、アルが言ってた女の子の曰ってヤツか！」

ナギの言葉に無言でアリカはその顔面に拳を叩き込んだ。

一撃でノックアウトされたナギを放置し、アリカは避難の指揮を取るべく、祝勝会の会場を後にした。

その頃、アシュレイは逆天号に設けられた観覧席に座っていた。

元々そんな構造にはなっていないなかったのだが、一晩でアシュレイが改造し、胴体横部分に張り出しを作ってしまった。

アシユレイはテレジアに給仕させつつ、のんびりと始まるまで紅茶を楽しむ。

逆天号が見物にやってきて30分程したとき、地鳴りのような音が天空に木霊し始める。

その音は大きくなり、アシユレイは席から身を乗り出し、オステイアの方を凝視する。

大小様々な浮遊島は徐々に傾き始めている。

またそのオステイア周辺には無数の艦艇が飛んでおり、救助活動にあたっているのがよく分かった。

元々予期された事態だったのだろう。

その手際は迅速であったが、アシユレイとしてはウェスペルタテイア王国が残ってもらっても困る。

故に彼女は周辺空域の気流を大幅に乱した。

たちまちのうちに艦船同士が衝突したり、あるいは艦船に乗り込もうとしていた民間人達が吹き飛ばされていく。

それだけでは足らぬ、とアシユレイは落ちていく無数の浮遊島の傾斜を大きくしていく。

すると次々と浮遊島から大勢の人間が、動物が、建物が落下していく。

「見なさい、人がゴミのようね！」

笑いながらアシユレイは言った。

テレジアは主が満足している様子に満面の笑みを浮かべる。

「ああ、でも、あそこには何人の女達がいて、どれくらいが落下し、どれ程が死ぬのかしらね……それを考えるとぞくぞくするわ……」

アシュレイにあった感情は悲しみではなく、愉悦。

綺麗な女が潰れて肉片になる。

そついうことにも興奮してしまうアシュレイであった。

このオスティア崩落により、当時オスティアにいた人間達の40%以上が死亡した。

ウエスペルタティア王国はこれにより崩壊し、アリカ女王はメゼンブリーナ連合の元老院により、全ての罪を押し付けられた。

そして、彼女はケルベラス無限監獄に収容され、2年後の処刑が決まったのだった。

気高い女王の末路（前書き）

独自設定・解釈あり。

微工口あり。

駄け足気味だが、これ以上詳細に書くともろにR18に……

気高い女王の末路

「あらあら、先客がいらっしやるようね」

アシユレイはにこやかに笑いながら、アリカの髪を掴んでいる元老院議員に声を掛けた。

すると彼は何者だ、とアシユレイへ視線を向け、一瞬で恐怖に苛まれた。

そして、アリカの瞳はアシユレイを捉えるが、彼女はアシユレイが人にあらざる者と予期していた為に驚いたりはいしない。

「さて、議員さん。警備の兵はどうしたとかそういうありきたりな質問の前にあなたが最も知りたいことを教えてあげるわ」

そう言い、アシユレイはアリカの髪を掴んでいる議員の手を彼の意識に働きかけて退けさせる。

「墓守り人の宮殿、その奥にあるのは古代の超兵器でも莫大な金銀財宝でもない。あそこにあるのは宇宙処理装置^{コスモプロセッサ}。この世界を思うがままに改変できるものよ」

恐怖に苛まれながらも、彼はその言葉に驚愕する。

アリカもまたその信じられない事実を目を見開く。

不思議とアシユレイの言葉が嘘とは思えなかった。

それは妙な確信だ。

目の前の少女は嘘をつかない、と。

「でもあなたはそれを見る事ができないわ。なぜならば、あなたはこの後、家に帰って家族を殺した後、自殺するんだから」

アシュレイが告げた瞬間、議員はゆっくりと崩れ落ちそうになるが、すぐに立ち直った。

彼は一言も発さずアシュレイの横を素通りし、さっさと歩いていってしまっただ。

アリカは何をしたのか理解できた。

「精神操作……じゃが、あまりにも強力過ぎる……」

掠れたような声だった。

そのことから食事もなくに摂っていないことがよく分かる。

「そなたは何者じゃ……？」

問いかけにアシュレイは花の咲くような笑みを浮かべる。

「私はアシュレイ。よく言われるのはアシュタロス。あなたの飼主になる者よ」

名を告げられた瞬間、アリカは鳥肌が立った。

冷や汗が吹き出し、悪寒が襲う。

うずくまる彼女にアシュレイはあらあら、と困ったように笑う。

「強すぎるのも考えものね。まったく、人間達はどうして強くなりたいがるのか。連中に私の代役を務めさせてみたいわ」

やれやれ、と嘆息しつつ、アリカの恐怖をアシュレイは取り除く。

大抵の人間はアシュレイ自らが名乗った後、放っておいたらあまりの恐怖に自殺してしまう。

「ともあれ、アリカ。あなたは今日から私のペットね」
「嫌じゃ…………！」

アリカは涙目になりながらも、アシュレイの顔をハッキリと睨み、拒絶した。

健気な彼女にアシュレイはその嗜虐心を刺激される。

「ふーん…………そんな犬みたいに臭いの？」

「これは…………！」

「あちこちの毛も伸び放題なんですよ？」

アリカは羞恥に顔を俯かせた。

アシュレイは匂いフェチでもある。

そうであるが故に彼女は手を回し、アリカに風呂どころか水で濡らした手ぬぐいで体を拭かせることも1ヶ月に数度程度しかさせなかった。

当然体毛の処理もさせていない。

唯一許したのが散髪だけだった。

「排泄するにも、看守に言って、その拘束着を脱がしてもらわないといけないの？」

ニヤニヤと笑いながらアシュレイはそう言いつつ、更に続ける。

「どう？　自分がもう人間じゃなくて、犬であることを認めたら？　私のペットは素敵よ？　毎日そこの金持ちよりもいいものを食べて、好きなときに眠れて好きなときにやれるわよ？」

「妾は人間じゃ！　そなたのペットなどではない！」

強情ねえ、と思いつつもアシュレイは予想通りの展開に笑みを崩さない。

「じゃ、賭けをしましょう。あなたの好きなナギが本当にあなたのことを愛していたなら、あなたの勝ち。あなたの名誉も失われた民も国も全部私が何とかしてあげるし、私をペットにしてもいいし、本当の黒幕は私だとか言ってもいい」

「……それは嘘ではない、という証拠は？」

「私がアシュタロスだから、というのが証拠よ。悪魔は嘘をつかないし、契約は絶対を守る。人間などとは違ってね」

アリカは唸りつつも、更に問いかける。

「妾が負けたときは……？」

「私のペットになってもらう。ここで無理矢理あなたを拉致することなんて、簡単にできるだろうことはわかるでしょ？」

確かに、とアリカは内心頷く。

アシュレイがその気になれば先ほどの議員と同じように精神操作を行い、そうすることも可能だ。

「どういう内容じゃ？」

「簡単よ。私を用意したあなたの偽物とあなたがすり替わる。そのアリカが偽物だとナギが気づけばあなたの勝ち」

「……簡単じゃな。そなたが不正をしない、という保証は？」

「しないわ。約束する」

アシュレイの言葉にアリカは数秒迷ったものの、意を決して告げる。

「わかった。その賭けにのろう」

アリカの返事にアシュレイは満足気に何度も頷く。

「じゃ、あなたを先に私の居城に転移させるわ。あとのことは任せて頂戴」

そう言うや否や、アシュレイはアリカを転移させた。そして今度は召喚する。

牢獄内にふつと音も無く現れたのは気絶したアリカであった。その姿は先ほど転移させたアリカと瓜二つだ。やってきたアリカをアシュレイは適当に汚し、その場を後にした。

確かに、アシュレイはアリカに不正はしない、という約束をした。だが、同時に彼女はアリカにヒントを与えてもいた。それはコスモプロセスだ。

そう……アシュレイが用意したのはコスモプロセスで作ったアリカと少しだけ記憶が違うだけで、その性格から思考、ナギへの思いに至るまで全て本物と同じアリカだ。

偽物と本物を見分ける区別は唯一つ。アシュレイのことを知っているか否か、それだけだ。

そして、アリカはアシュレイのことはゼクトにしか話しておらず、そのゼクトは既にアシュレイの下にいたのでバレルの心配は無い。

悪魔と契約するときには事細かに規則を決めておかないと駄目だ、という典型であった。

アシュレイがアリカを監獄から連れ出した10日後 処刑当日。
紅き翼が兵士に化けて紛れ込み、派手にドンパチをやらかす中、
ケルベラス渓谷ではアリカを抱えたナギが脱出劇を繰り広げていた。

地獄のアシュレイの城ではその様子を本物のアリカと共にアシュレイは眺めていた。

当然、アリカが湯浴みすることをアシュレイは許可していないので臭いままだ。

アリカは固唾を飲んでモニターに映るナギと偽物を見つめている。彼女はナギを信じていた。

しかし、モニターの中では彼女の心を裏切るように、ナギは偽物を抱きかかえながら告白した。

これは、と思いアシュレイが声を掛けようとしたが、アリカはその機先を制し、告げる。

「偽物を油断させる為じゃ。ナギは汚いからのう」

その儂い言葉にアシュレイは笑みを浮かべつつ、事態の行方を見守ることにした。

偽物のアリカはナギの思いに小さな声で嫌いではない、と答えるが、すぐにナギにすっかりと言つように駄目出しをもらう。

するとアリカは大声でナギに告白し、すると彼はアリカの唇を奪った。

そして、ナギは求婚し、アリカは満面の笑みでそれを受けた

「……ナギ……」

アリカは目の前の光景に呆然と愛する男の名を呟いた。

しかし、非情にもモニターに映るナギは気づかず、偽物のアリカといちゃつき始めた。

「ねえ、もうちょっと見てみる？」

アシュレイの問いかけにアリカは思わず彼女の顔を見た。

アシュレイの顔には天使のような笑みがある。

数億年は生きているアシュレイがここまで機嫌がいい日も滅多にないことだった。

「ほら、あなたの言った通りに油断させる為かもしれないし、もしかしたら偽物を送り込んだ私に気づかれないように敢えてやっているのかもしれないし」

まさかの言葉にアリカは目を瞬かせる。

「よいのか？」

「いいわよ。私達に寿命の概念はないもの。でも、偽物が子供を産

「んだらそこで私の勝ちで終わりね」

「うむ、それで構わぬ」

「でも、とりあえずは負けそうだからある程度は犬っぽいことをしてもらおうよ？」

上げて落とすやり方であった。

アリカは渋い顔ながら、頷く。

抵抗したところでどうにもできないことが、分かっていた。

「それじゃ早速」

アシュレイは指を鳴らした。

するとアリカの着ていた拘束着は一瞬で消えて無くなった。

彼女がそれに気づき、驚く間も無くアシュレイは次の行動を取る。

アリカの手を後ろに回した上で手枷をはめ、さらに首には首輪。

両足には足錠　ただし、錠との間には鎖が無い　がはめられ、

その足錠はいつの間にか床に突き出た杭と鎖で繋がっている。

そして、首輪から伸びた鎖はやはり同じように床から出た杭に固定された。

「な、何じゃ！？」

「何って四つん這いだけでも。犬が二足歩行なんておかしいでしょう？」

当然と言わんばかりのアシュレイにアリカは羞恥にその白い肌を赤く染め上げる。

全部丸見えであった。

「あと、その体勢でモニターを見るのは首が痛くなるでしょうから、

頭に直接送り込むわ」

するとアリカの脳裏にモニターと同じ映像が見え始めた。

「ま、待て！ 食事は！？ トイレは！？」

「犬もどきになったんだから、口で食べることに。トイレは出せばメイトに処理するように言ってるから、どんとやっちゃって」

にこにここと笑うアシユレイ。

実に鬼畜である。

「悪魔め……！」

アリカの罵倒にアシユレイは首を傾げる。

「悪魔だもの。当然じゃない」

至極当然の解答にアリカは項垂れる。

どうやら自分と……というか、人類とアシユレイとの間には超えられない価値観の違いがあることが分かってしまったからだ。

しかし、彼女の苦難はまだ始まったばかりだった。

それからアリカはナギと偽物のアリカを24時間365日休むことなく、見せつけられた。

ところ構わずにいちゃつく2人にアリカはそんなものは自分では

ない、と叫んだが、聞こえる筈もない。

勿論、それは2人の情事も当然含まれる。

初体験からその気持ち良さにナギと偽物が溺れるのも無理は無く、2人は毎日休むことなくやりまくった。

アリカはそのような地獄を見せられ、また犬の生活を強いられてもなお、心は碎けなかった。

そんな彼女にアシュレイはますます気を良くして、彼女の部屋を変えた。

新たな彼女の部屋は城の玄関。

行き交う魔族達は汚いものを見るような目を向け、通りかかる淫魔達はアリカをおかずにその場で自慰をしたり……

それでもなお、アリカは耐えた。

その不屈の心にアシュレイは感動し、彼女に粗品を贈ったりしたが、ついにアリカが壊れるときがきた。

それは偽物のアリカがナギの子供を孕み、産んだとき。

アシュレイはすかさずにアリカに色々吹き込み、彼女を己のものにしたのだった。

ナギの子供が産まれて1年が経過していた。

地獄のアシュレイの城の一室ではアリカがアシュレイを見上げていた。

そんな彼女にアシュレイはとても優しい笑みを浮かべ、その頭を撫でてやる。

するとアリカは嬉しそうに笑みを浮かべ、アシュレイの手に頼ずりするように顔を上げる。

「ナギが見たら、どう思うかしらね？」

アシュレイは試すように問いかける。
するとアリカはその綺麗な顔を憎悪に染めた。

「あんな男、さっさと殺してしまいたい。妾の汚点じゃ」

「大丈夫よ。もうナギと偽物を封印されているから。時期を見てサクッと殺っちゃうわ」

造物主にナギとアリカが乗っ取られたので紅き翼が麻帆良の世界樹に封印した事になっている。

勿論、それはアシュレイが行った記憶操作の結果であり、そもそも造物主という幽霊みたいな完全なる世界の黒幕は存在しない。

彼らをはじめとした多くの関係者は何もなっていない全くの健康体の2人を封印し、犠牲を払って世界を救ったのだ、という自己満足に浸っている。

なお、この頃になると、アシュレイは面倒くさくなったので完全なる世界を使ったりせず、彼女自らが赴いて記憶操作をしていた。

「妾にはアシュ様しかおらぬ……」

そう言い、アリカはアシュレイの手をその赤い舌で犬のようにペロペロと舐めた。

アリカの手枷や足錠は既に外されており、当然の如く彼女は全裸

だ。

「やれやれ、モテる女は辛いわね」

いけしゃあしゃあとそんなことを言うアシュレイにアリカは懇願する。

「アシュ様、あの男と偽物の痕跡を消し去って欲しいのじゃ……妾にとつてそれは最も不快なこと……」

「ああ、大丈夫よ。もうちょっとしたら、コンロンとヘルマンとダイ・アモンを派遣して、その痕跡の、ネギのいる村ごと潰すから」

アリカはその言葉に歓喜に震え、アシュレイの手の甲に口付ける。

「上級魔族の彼ら3人をどうにかできるだけの戦力は地球上のどこにもないわ」

アシュレイは自信満々にそう言うのであった。

番外 クリスマス記念 クリスマスなんて死ねばいいのに……（前書き）

独自設定・解釈あり。
壊れ注意。

クリスマスにアシュレイが激怒しているようです。

番外 クリスマス記念 クリスマスなんて死ねばいいのに……

唐突だが、アシュレイが1年のうちに極めて不機嫌になるときが2日ある。

その2日間に関係しているキーヤンは毎年懲りもせず、アシュレイに招待状を送ってくる。

その日が近づくとつれ……アシュレイの不機嫌は加速度的に悪くなり、彼女の情事は極めて猟奇的なものになっていく。

特に前日は凄まじく、極上の淫魔が1000人単位で動員され、アシュレイのご機嫌取りに奔走する。

さて、それほどまでにアシュレイを苛立たせるその2日間とはクリスマス前の誕生日。

いわゆるクリスマスとクリスマススイブであった。

「何でキーヤンの誕生日が人間界で盛大に行われて、記念日にもなってるのに私の誕生日はそうになっていないのよ」

不機嫌な顔で告げるアシュレイ。

彼女は自室でエヴァンジェリンを呼び、お茶会という名の愚痴吐きをエヴァンジェリンに行なっていた。

聞かされる側からすれば堪ったものじゃないが、そこは宮仕えの悲しいところ。

エヴァンジェリンは文句を言いながらも、アシュレイの愚痴に付き合っしかなかった。

「そりゃ、悪魔だしな。あと、その話題は34回目だ」

エヴァンジェリンの最もな言葉だったが、アシュレイは我慢ならない。

基本的に自分が一番目立っていないくは嫌な彼女である。

「エヴァ、あなたは何か思わないの？」

「クリスマスは嫁としっぽりするんだ。いいじゃないか、クリスマスくらい。お前も婚約者としっぽりするればいいんじゃないか？」

けんもほろろにそう言われてしまう。

アシュレイとて相手は掃いて捨てる程にいる。

婚約者のフレイヤを筆頭に絶世の美女達がアシュレイに誘われれば喜んでクリスマスを過ごすだろう。

「私の誕生日だって記念日にしたいの。かくなる上は人類を脅すか……」

「おいバカやめろ。どこの世界に自分の誕生日の為に人類を脅迫する魔王がいるんだ？」

「ここにぞー！」

元気よく手を挙げるアシュレイにエヴァンジェリンは処置なし、と肩を竦める。

そのとき、ドアがノックされた。

アシュレイが許可を出せばいつもよりもスカートが短く、下着がチラチラと見えているテレジアが入ってきた。

クリスマスを一緒に過ごす為のアピールだ。

彼女達もアシュレイの気を引く為にわりと苦労しているようだ。

無論、アシュレイとてバカではないのでそこらには気がついてい

る。

とはいえ、彼女にとってはどうやって自分の誕生日を記念日にさせるか、そちらの方が重要だった。

「アシユ様、キリストから誕生日パーティーの招待状が……」

差し出された手紙。

それをアシユレイはテレジアからひつたくるとガジガジとその歯で噛み、ビリビリに破いた上で飲み込んでしまった。

まさかの凶行だが、毎年のことなので2人とも慣れっこだ。

「ああもうあの似非敬語野郎め……こうなったらあいつの母親を寝取ってやる！ 誕生日パーティーに戦力揃えて殴りこみよ！」

これである。

毎年毎年こういう結論だ。

そして、毎年毎年、キリストの母親であるマリアに赤子のようにあやされて、頭をなでなでされて帰ってくるのだ。

三界で恐怖されるアシユレイも、どうにもあの聖母マリアは苦手であった。

彼女は無限の包容力で何もかも優しく包み込んでしまうのだ。

アシユレイがどんなに怒り狂っていても、そつと優しく抱きしめられ、頭をなでなでされたらそれで試合終了だった。

ちなみにそのときのアシユレイは別人かと思う程にしおらしくなる。

普段のタカビーで傲慢で自己中で欲望一直線な性格が全く鳴りを潜め、見た目相応の少女になるのだ。

テレジアをはじめとした側近達が毎年毎年止めもせずアシユレ

イに従って、キーやんの誕生日パーティーに行くのは、ひとえにそのアシユレイを見る為と言っても過言ではない。

なお、そのときのアシユレイの様子は神魔族も写るような特殊な魔法が掛けられた写真や動画に収められ、恐ろしい程の高値で魔界や神界で売りさばかれている。

勿論、テレジア達は自分達の為に、と観賞用・保存用・実用・予備と確保しているのは言うまでもない。

そして、タダでは転ばないアシユレイはそれをしっかりと自らが流通を管理することで利益を上げていたりする。

内容は黒歴史だが、それでも金になるなら、と頑張る彼女はやっぱり凄かった。

「あの、アシユ様」

今度、入ってきたのはシルヴィアだった。

彼女はいつもの真つ黒な服ではなく、何故かミニスカでかつ、サンタクローズの格好をしている。

首にはベルが。

「……クリスマスなんて死ねばいいのに」

ポツリ、とアシユレイが呟いた怨念がたつぷり籠った言葉。

勿論、シルヴィアが駄目だから、とそういう意味ではなく、キーやんの誕生日なのに自分の配下達がここまで浮かれていることだ。

まあ、結局最後は着飾ったテレジア達を美味しく頂くのだが。

「アシユ様……その、似合いませんか？」

普段はクールなシルヴィアが悲しげな顔でその豊満な胸を押さえつつ、問いかけた。

とりあえずアシュレイは素早くシルヴィアの背後に回り、その胸を後ろから揉みしだいた。

「似合ってるわよ。でも、ベルより首輪の方が私としては好み」

クリスマスとかもはや関係なかった。

シルヴィアは喘ぎながらもどうにかその用件を告げる。

その用件はウリエルがやってきた、というものだった。

「ああ、あのシスコンのウリ公？ あんなの5000年くらい待たせても問題ないわよ」

うんうん、と頷くアシュレイ。

一応熾天使のウリエルをそんな風に呼べるのは彼女くらいなものだ。

それ故にアシュレイはシルヴィアとテレジア、そしてエヴァンジェリンを美味しく頂くこうとするが、それは阻止されることとなった。

アシュレイは殺気を感じ、シルヴィアごと横に倒れば数秒前までいた空間には神々しい槍が突き立てられていた。

「アシュタロス、人を待たせて何をしているつもりだ？」

「あら、ウリエル。使いつ走りのあなたが私にこんなことをしていると思ってるの？ ハルマゲドンになるわよ？」

ふん、と鼻を鳴らすウリエル。

彼はどうせアシュレイがまともに会わないだろう、と予期して勝手にここまでやってきていた。

本来なら侵入者として排除されるのだが、クリスマス前のこの時期に限ってはこれは恒例行事であった。

「で、私が来たのは分かっているな？ どうせお前は今年も招待状を飲み込んだんだろう？」

「当然。あんのコンチクショウめ……自分の誕生日だけ盛大にあんなに祝われて調子に乗ってるわ」

「……そこは突っ込むところなのか？」

ウリエルは真顔で尋ねた。

三界で一番調子に乗ってるのは言うまでもなくアシュレイである。しかし、彼女は気にしない。なぜなら彼女は魔王だからだ。

「で、ウリ坊。あなたは今年も案内役なのね？」

「実に残念なことにな。顔はいいが、性格最悪のお前を案内してやることになった」

「シスコンなあなたはきつとアムラエルにイケナイ妄想を抱いているのでしょね」

ウリエルは無言でアシュレイを殴ろうとした。

しかし、彼女は無駄な素早さを発揮し、ひらりと回避。

「24日の夕方に迎えに来る。それまでに首を洗って待っておけ」

「あなたはそこらの壁に頭ぶつけて死んでいいわ。アムラエルを出せ」

悪口の応酬であったが、テレジアもシルヴィアもエヴァンジェリンも慣れたもの。

これもまた恒例行事なのだ。

ともかく、ウリエルはさっさと帰っていった。

邪魔者が消えたのでアシュレイはそのまま3人を美味しく頂いた。

そして迎えた24日。

アシュレイはテレジア以下、総勢100名もの実力者達を揃えた。

その中にはヘルマンやコンロン、ダイ・アモンの三羽鳥の姿も当然あり、何故かリリスやリリムなどの淫魔の姿まである。

彼女達はアシュレイをお願いしてくっついていくのが毎年の恒例だ。

そんな彼らの前で檄を飛ばすアシュレイ。

「毎年毎年懲りもせんこつちゃ」

やれやれ、とサツちゃんは肩を竦める。

彼以外にベルゼブブなどの他の魔王も当然一緒に行く。

そんな中で随員が100名とかいう人数になっているのはアシュレイだけだ。

そんなとき、ウリエルが現れた。
彼はアシュレイを見、盛大な溜息を吐きつつも彼女を無視してサ
ツちゃんの近くへと歩み寄る。

「サタン様、準備はよろしいですか？」

「ワイらはええけど、アシュタロスは良くないんとちゃう？ ちょ
うど演説で一番盛り上がるどころやろ」

神族の悪行とか傲慢とか何とか色々と聞こえてくる。

下級の、純粹な魔族ならその演説に感動してしまうところだが、
これから起こることが分かっている100名の配下達は微笑ましい
視線をアシュレイに向けるだけである。

普段は恐れられているアシュレイもこの2日間だけは何をやって
も威厳が無くなるという悲しいときなのだ。

「アシュタロス」

ウリエルは呼んだ。

しかし、演説に夢中なアシュレイは気づかない。

「変態、好色」

やはり聞こえていないらしい。

仕方がないのでウリエルは伝家の宝刀、アシュレイを一瞬で気づ
かせる単語を告げることにした。

「アムラエルが来てるぞ」

「アムちゃん！ どー！」

文字通りの光の速さでアシュレイはウリエルの傍まで来るときよ

るきよると探し始めた。

24日と25日のアシュレイはまるで駄目なふたなり娘になるよ
うだ。

気配を探ればアムラエルがないことくらい分かるのである。

「お前のような変態がいるところに妹をやるわけないだろう」

ウリエルが忌々しげに告げた。

嘘をつかれたアシュレイはむっと頬を膨らませ、彼を睨みつける。

「嘘をついていいと思ってるの！ 悪魔でも嘘はつかないのに！」

「それはそれ、これはこれだ」

神に裏切られて、というのはわりとよくある話である。

主がそうするのならば神の使いである天使達もそうすることは稀
にある。

「ともあれ、さっさと行きますが、よろしいですね？」

ウリエルの問いにサツちゃんは頷いたのだった。

どこでキーヤんの誕生日パーティーが開かれるかというと、今年
は妙神山だった。

マンネリを無くす為に毎年毎年場所は変わり、その土地の料理を
楽しむわけだ。

妙神山に到着したサツちゃん一行は会場へと入った。

そこは主神達が既に集っており、主役のキーヤんの姿も見える。

「キリストおおおお」

アシュレイが叫びながら突っ込んだ。

「死ねええええ」

金剛石も砕けるその拳をアシュレイはキーヤんの顔面に叩きこもうとした。

普段ならこれでハルマゲドン一直線なのだが、今日と25日は許される。

なぜならこの場にいる全ての者達はキーヤんが絶対に倒されないことを知っていたからだ。

そして、あのアシュタロスの滅多に見られない顔が見られることも。

キーヤんに届く前に彼とアシュレイとの間に割り込んだ者がいた。その者により、アシュレイは首根っこを猫のように掴まれてしま

う。

「アシュちゃんだあー」

きゃー、と言いながらアシュレイを抱きしめる女性。

あのアシュタロスをアシュちゃんと呼べるのは世界広しといえど、たった1人しかいない。

「げえっ、マリアー！」

「1年ぶりのアシュちゃんもふもふー」

背中 of 翼に顔を埋めるマリア。

この妙に子供っぽい性格は狙ってるのか、それとも素なのか。
キーヤンにも分からなかったりする。

「ちょっと助けなさいよ！」

アシユレイは叫んだが、助けを求めた相手　テレジア達はすごい笑顔で抱きしめられてもふもふされている彼女を見ていた。そして、各々が色んな撮影機材を取り出してその姿を撮り始めた。コレは駄目だ、と思ったアシユレイは大人しくマリアにされるがままになった。

「さて、アシユタロスの可愛い姿も披露されたのでそろそろパーティーを始めましょう」

キーヤンの一声で彼の誕生日パーティーは始まった。

アシユレイはマリアに抱っこされて色々世話焼かれていた。そして、その姿の一部始終をカメラに収めるテレジア達。勿論、彼女らは鼻血を流しているが、人外なので大丈夫だ。

「アシユちゃん、フレイヤちゃんとはどうなの？　アシユちゃんモテるし、気が多いから私、心配だわ」

何故かアシユレイのお母さん面をするマリア。

これはマリアとアシユレイが初めて会ったときから続いていることだったりする。

大人の姿を取っている者がほとんどの魔王達の中で唯一人、少女の姿をしているアシュレイ。

そんな彼女はマリアの心の琴線に触れてしまったらしい。

「……大丈夫」

恥ずかしそうにそっぽを向きながら答えるアシュレイ。

そんな仕草にテレジアが鼻血をより勢い良く吹き出しながらひっくり返った。

しかし、誰も彼女を助けようとはしない。

そんなことよりも、アシュレイの姿を撮る方が大事なのである。

「それならいいわ……アシュちゃんのお胸はどうかしら」

そう言いつつ、アシュレイの胸をまさぐるマリア。

これも1年の恒例行事である。

マリア本人としては子供は女の子が欲しかったとのことだ。

「んっ、やあ……」

こそばゆい感触にアシュレイは身を振りつつ、喘ぐ。

ベアトリクスが今度はひっくり返った。

鼻血で顔を真っ赤にしながらも、その表情は実に安らかだった。

他の出席者達も同じようなもので、誕生日パーティーそっちのけでアシュレイをガン見である。

実際のところ、誕生日パーティーというのはただの建前で、アシユタロスのある姿やこんな姿を見よう、という集まりになりつつあった。

どつやら24日と25日はアシユレイだけでなく、主神や魔王達もまるで駄目な連中と化すようだった。

駄目駄目な紳士達(前書き)

独自設定・解釈あり。

駄目駄目な紳士達

「静かなところだ」

ヘルマンは眼下に見える村を見下ろしながら、そう呟いた。つい数日前に下ったアシュレイからの勅命。

それはウェールズにいるナギの息子を抹殺せよ、というものだ。

本来ならヘルマンら3人が出るまでもない簡単な仕事。

それこそ、数人の中級魔族でも派遣すれば事足りる。

村にいる戦力は魔法使いのみ。

住民は200人程おり、そのほとんどが魔法使いだが、最高でも中の上程度の力しか持っていない。

正直なところ、ヘルマンが上空100m程から魔力砲でもぶっ放せばそれで終わる。

「私としてはこういうところに家でも建てて静かに紅茶を飲みたいものだ」

コンロンの言葉にダイ・アモンが同意とばかりに頷く。

基本3人は紳士である。

故にこういう悪魔らしくない望みも彼らからすれば当然のものであった。

「ときに侯爵。作戦はどうするのだ？ 我ら3人が全員出るまでもないだろう？」

ダイ・アモンの問いかけにヘルマンは顎に手を当てる。

「標的だけ殺ろう。我々は紳士だ。スマートに任務を遂行せねばなるまい。2人は標的を私の下へ連れてきてくれたまえ」

ヘルマンの言葉に2人は頷き、早速標的　ネギ・スプリングフ
イルドの拉致にかかった。

それから10分後、ネギは眠らされてヘルマンの前に連れてこられていた。

あまりにもあっさりであったが、コンロンとダイ・アモンの2人ならば当然。

「さて、君に恨みは無いが、これも任務。死んでくれたまえ」

そう言い、ヘルマンがネギに手を向けた瞬間。

轟、という音と共に彼ら3人を巨大な圧力が襲った。

さながら見えない壁に押されたかの如く、ネギの周囲から弾き飛ばされる。

最上級魔族　上位悪魔神族と称される者ならばいざ知らず、上級魔族では人間形態のときに物理法則は無視できなかった。

「やれやれ……胸騒ぎがして来てみたらこれか」

啞えタバコにスーツを着た中年の男性が彼らから数十m程離れたところに立っていた。

彼はゆっくりとヘルマンらに近づき、彼我の距離が10m程になったところで止まった。

「で、君等はエクスキューショナーの残党か、それとも元老院の雇われか、どっちだ？」

その問いにヘルマンはすぐには答えず、ただちにアシユレイに報告する。

偶然と呼ぶにはあまりにもおかし過ぎた。

何故ならばこの日は紅き翼の面々が全員イギリス国外にいないことを確認してから行われた襲撃。

そうであるにも関わらず、目の前には紅き翼の1人がいた。

「……君は今日、日本の麻帆良学園にいたのではなかったのかな？
ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグ」

その言葉に彼　ガトウは微かに笑みを浮かべる。

「何、麻帆良にいますお姫様の為にイギリスのハロツズでくまのぬいぐるみでも買ってやろう、と思って1日遅らせたのさ。ついでだからネギ君に会っていいこう、と思って来た矢先にこの災難だ」

「なるほど……だが、我々と君では戦力に差がありすぎるのではないかね？　んんー？」

コンロンは腕を組みながら問いかけた。

事実である。

上級魔族の彼ら3人を相手にガトウだけでは荷が重すぎる。
そう、彼だけならば

事態は動いた。

ネギの真横に急にメガネを掛けた男が現れ、彼はすぐさまネギを抱きかかえると再び消えた。

ヘルマンらは第三者の介入を全く予期していなかった。

彼らからすれば人間などミジンコに等しい　すなわち、警戒するまでもないが故に結界を張っていなかった。

そもそも事前情報では転移魔法が使える者が村にいるとは聞いてはいない。

「先ほどの彼は確か、タカミチ君だったか。彼は魔法が使えなかった筈では？」

ダイ・アモンの問いにガトウはタバコを足元に捨て、その火を靴で揉み消す。

その後、彼はゆっくりと口を開く。

「転移魔法符だ。あまり人類を舐めるな、化物共」

瞬間、ヘルマンらはそこを飛び退いた。

彼らのいた地面は何か巨大なものがぶつかったかのように穴が空く。

ガトウは逃さぬ、とそれをヘルマンらに目掛けて連射する。

当たってもチクリとした程度の痛みしか感じないが、それでもわざわざ食らう必要もない。

ガトウは自らの必殺技である豪殺居合い拳を軽々と回避する様に

自信を無くしそうになるが、話に聞いていたエクスキューションの連中ならばこれくらいは当然だろう、と納得してもいた。

「調子に乗るのもいい加減にしたまえ」

コンロンは一瞬でガトウの背後に回りこむとその拳を彼の背に叩きこもつとする。

豪速で迫るその拳。しかし、ガトウに届くことはなかった。

彼は長年の勘で危険を察知し、すぐさま持っていた転移魔法符を起動させる。

コンロンの拳がガトウの背中にめり込む寸前、彼は掻き消えた。

「イレギュラーな事態だ。油断していたとはいえ、このような結果になるとは……」

「アシユ様にどう弁明しようか……」

ヘルマンの言葉に対し、ダイ・アモンは恐怖に体を微かに震わせながら呟いた。

彼も一応は吸血鬼の真祖であり、上級魔族クラスの実力を持っているのだが、それでもアシユレイは怖かった。

女であれば性的なおしおきで済むが、男であったならアシユレイは容赦しそうにない。

永久原子をその場で砕かれて、死ぬということも十分あり得る。

しかも、彼ら3人は揃いも揃って探索魔法が……というよりか、いわゆる補助に分類される魔法は得意ではない。

基本、詠唱も呪文名も必要なく、念じれば即結果になる悪魔の、本当の意味での魔法が魔族の魔法であり、神族の神霊術だ。

だが、それでもやはり個人差はある。

彼らは数十km程度ならどこにかなるが、痕跡から簡単に辿ってみればどうやらかなり遠くまで転移したらしい。

アシユレイなどの魔王やら魔神か、あるいは探索専門の魔族などは人間形態であっても数千km単位で簡単に追尾できるというのだから、彼らの駄目っぷりがよく分かる。

「屈辱だ。我らはこれまで多くの任務をスマートにこなしてきた。それをたかが人間が、我らに歯向かうとは……なんたる、なんたる……！」

コンロンは顔を俯かせ、怒りに拳を震わせる。

誇り高い彼としてはアシユレイによる罰よりも、そちらの方が我慢ならなかった。

「……戻ってアシユ様の指示を仰ごう。ここにおいても仕方がない」

ヘルマンの言葉に彼らは頷き、地獄へ帰還したのだった。

「……あれ？」

ネギが目覚めると、そこは村の見慣れた自分の部屋ではなかった。彼はベッドから起き上がり、きよるきよると辺りを見回す。

広い部屋だった。

見るからにふかふかしていそうな革張りのソファに見慣れない絵画。

何やら高そうな壺まで置いてある。

「あ、気がついたかい？」

その言葉にネギが視線を向けると、ドアを開けて高畑と見慣れぬスーツの男性が入ってきた。

「タカミチ、ここはどこ？」

「ここはロンドンのホテルだよ」

「ロンドン？」

ネギの言葉に高畑は頷きつつ、彼はもう1人の男を紹介する。

「ネギ君、こちらは僕の師匠だ」

「初めまして、ネギ君。ガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグだ」

「あ、はじめまして……」

差し出されたガトウの手をネギは握る。

そんな彼にガトウは優しく微笑み、頭を撫でる。

「私は紅き翼の一員で君のお父さんやお母さんのこともよく知っている……だが、君にまだ教えるわけにはいかない」

「どうしてですか!？」

ネギは身を乗り出した。

自分の両親の行方が気になるのは誰でも同じだろう。

彼の反応もガトウらの予想の内であった。

「君のお父さんがヒーローだということは知っているね?」

ガトウの問いにネギ君は頷く。

「残念だけど、世の中は絵本みたいに悪者をやっつけておしまい、
というわけにはいかないんだ。色々と事情があって君の両親のこ
は君が一人前になるまで話さない、と決めてあるんだ」

「どういう、ことですか……?」

「正直に言おう。君はついさっき、襲われた。かなり強い連中に。
何故だか分かるかな?」

ガトウの問いにネギは首を傾げ、悩む。

彼は幼いながらも、聡い。

故にその答えにあつという間に辿り着いた。

「僕が父さんの子供だからですか……?」

「その通りだ。英雄の息子というのは正直言って、君にとってはか
なりの重荷になると思う。ナギは悪いヤツをやっつけてはいたが、
同時に悪くはないヤツもやっつけてしまった。だから、恨まれてい
る」

「そんな……」

ネギはこの世に絶望したかのような表情となる。

それも当然だろう。

まだ彼は数えで3歳でしかない。
「聡いが、物事の善悪も分からない年齢だ。」

「だが、大丈夫だ。私やタカミチ、その他大勢の者が君の味方だ」

そう言い、ガトウはネギを抱きしめた。

彼はゆっくりと抱きしめながら言葉を紡ぐ。

「君が何もしなくても、周囲が君を放っておかない。さっきのように君を襲う者や君を悪いことに利用しようとする者……私達はそういった者をできる限り排除するが、それでも絶対安全とは言い切れない」

だから、とガトウは告げる。

とても残酷な言葉を。

「君には嫌でも強くなってもらう。私は勿論、魔法に関してはアルビレオという世界で一、二を争うヤツが面倒をみる」

ガトウはそこで言葉を切り、ネギの目をまっすぐに見据えた。

彼の目には様々な感情が浮かんでいる。

怯え、恐怖、困惑

ガトウはここまで言っておきながら、申し訳ない気持ちで一杯になっってしまう。

本来ならこのような子供に自分達の尻拭いを押し付けてはならないのに。

英雄の息子ということと振りかかる面倒事、それらのほとんどは紅き翼が、ナギが始末できなかつたものだ。

故に、ガトウは目を伏せてしまう。

しかし、ガトウはネギを侮っていた。

彼は確かにまだ子供であったが、あのナギの息子であったのだ。

「大丈夫です、ガトウさん」

ネギは僅かに震える声で言った。

ガトウはその声に目を上げた。

先程までの怯えなどは既に無く、そこには不安そうでありながらも力の籠った瞳。

あのナギを彷彿とさせるような、そんな瞳がそこにあった。

「僕は、父さんの、そしてまだ知らない母さんの息子です。そんな僕が弱虫だと、2人に怒られそうです」

強がりなのだろう。

彼の体は微かに震えている。

ガトウはその姿に目を伏せた。

ハツタリを張る見苦しさを感じたなどということでは当然ない。

むしろ、逆であった。

あまりにも幼いのに、自身を奮い立たせるようなその様はガトウの涙腺を緩めるのに十分だった。

友人の息子だから、という鼻屑は勿論ある。

魔法界や地球でもネギと同一年でありながら悲惨な境遇にある子供が多いことも承知している。

だが、それでも身内を優先するのは何ら恥ずべきことではなかった。

むしろ、見知らぬ赤の他人も身内も等しく同じに扱う、もしくは扱うことを強要する。そんなことができるのはそれこそキーヤンをはじめとした聖人か、余程の冷酷な薄情者のどちらかである。

聖人でもなければ冷酷な薄情者でもないガトウの気持ちは当然なのだ。

「……ネギ君、私の持つ技、その全てを君に伝えよう……タカミチ、ネギ君に抜かれないように頑張るんだな」

ガトウの言葉に高畑は力強く頷いた。

彼とてまだまだガトウには及ばないことは重々承知であった。

高畑とてエクスキューショナーの存在は知っている。

ガトウと対峙していたあの魔族は彼の知る魔族とはあまりにも力が違いすぎた。

ただそこにいるだけで体が竦んでしまう、そんな次元にある連中がネギの、自分達の敵なのだ。

今のレベルでは太刀打ちするどころか、瞬殺されておしまいだった。

「ネギ君、僕もまだまだ修行中だ。僕も頑張るから、君も頑張るって欲しい」

そう言い、高畑は頭を下げた。

「た、タカミチ！ 頭を上げてよ！ 僕なんてタカミチの足元にも及ばないし！」

さすがにこれにはネギが慌てた。

年上から頭を下げられる程、彼は自分が何もしていないことは理解している。

「いや、君は強いよ。君はもしかしたらナギさんを超えるかもしれない

ないね」

高畑の言葉にガトウは僅かに頷きつつ、口を開く。

「少なくとも、性格ではネギ君が勝っているな。こんないい子があ
のナギの息子だなんて……信じられん」

「……父さん、どんな人だったんですか……」

ネギは紅き翼の仲間達に多大な迷惑を掛けたらしい父親に若干幻
滅してしまつたのであった。

襲撃失敗から数日後、アシュレイはヘルマンらから詳しい報告を
受け、遂に来たか、と覚悟を決めていた。

彼女はアメリカのフィラデルフィアで行われる、第2次レインボ
ー・プロジェクト 通称第2次フィラデルフィア実験の為に米海
軍の技術者達に色々と教えていた矢先であつた。

彼女はしくじつたことに恐れおののくヘルマンらにただご苦労、
とだけ告げ、すぐさま特別チームへ調査を命じていた。

ユークロトスらが所属するあのチームだ。

総勢500名にもものぼる彼女らはすぐにネギ・スプリングフィー
ルドのデータを集め、予想を出してきた。

その結果は黒。

偶然ガトウと高畑がプレゼントを貰う為にイギリスに1日余分に滞在し、偶然彼らがネギの様子を見に行く。

そして、上級魔族と会敵するも、幸運にも逃げ果せた。

偶然とか幸運とか随分といっぱいついている。

これはあの大战時の紅き翼に酷似していた。

アシユレイはガトウや高畑がアスナと共に日本の麻帆良へ向かうのを知りながら放置した。

むしろ、彼らに掛かる追手を積極的に排除した。

何故ならばアスナはアシユレイにとって極めて重要な存在であり、万が一にも死んではならなかったからだ。

ともあれ、アシユレイはただちにサツちゃんとキーヤんにネギが資格ある者であることを報告し、その動きを慎重に見守るのであった。

設定資料とか用語など（前書き）

設定資料とか用語とか
軽いノリになっております。

設定資料とか用語など

魔王

いわゆる魔王。

サツちゃん含めて現在では合計8人の魔王が公式的にいることになっっているが、偶に勘違いした輩が名乗ることもある。

魔王クラスの連中はどいつもこいつも人類に想像できない能力を持っている。

勿論、魔力とかそういう面では言うまでもない程に大変なレベルにある。

誰か、横島忠夫かダーク・シュナイダー呼んでくれ。

現在の魔王一覧

サタン

ベルゼブブ

アシユタロス

ベリアル

ペイモン

ビレト

バエル

アスモデウス

魔神

魔王より一個格下の連中。

魔王になれなかった、と言っではいけない。

わりと数は多く、ぎりぎり魔神クラスというようなレベルから魔王に匹敵するような輩もいる。

実力が備わってくれば勝手に魔神を名乗っても問題はない。

魔王には大抵魔神が側近としてついているが、使い魔が魔神にま でなったようなアシユレイの例は稀である。

上位悪魔神族

いわゆる魔王とか魔神とかそういった位階にある連中のことをさす。

魔王と魔神は最上級魔族とも呼ばれる。

以下、上級魔族、中級魔族、下級魔族となっている。

勿論、その区分でもピンきりであり、最下級の超下っ端クラスになると人間を殺せるような力すら無く、脅かしたり怖がらせたり、テレビのリモコンを隠してしまう程度の力しかない。

アウゴエイデス（神族は光体、魔族は暗黒体）

神魔族の究極武装形態。

自らの持つエネルギーで構成された鎧であり、この形態のときは

人型のとときは次元が違う力を持つが、基本的にこの形態を持つのは最上級神魔族のみ。

その大きさは最低でも数百m程度。

気になる強さだが、とにかくすごいという認識で問題ない。

ネギとの最終決戦でも使われることはないだろう。

というか、使ったら星が壊れます。

なお、神族の光体を見ると精神的に満たされるとか光の国に行けるとか聖人になれる……なんてことはない。

魔族のものと同じく、発する膨大なエネルギーにより一瞬で常人は塩の柱と化すので要注意。

魔力（神霊力）

本来は神魔族が持つ特殊なエネルギーのこと。

魔族では魔力、神族では神霊力と呼ばれる。

本来なら人類が持ち得ない力であったが、太古の昔に神魔族と交わった人間達があり、彼らの子供にその力の一部が受け継がれてしまふ。

第一世代の魔力を持った人間達は凄まじく、ほとんど神魔族と変わらない奇跡や魔法を起こし、現代においても神話などにその活躍は残っている。

しかし、世代を経るごとにその力は薄まり、現在ではわざわざ詠唱して呪文名を唱えないと多くの魔法使いは魔法が発動しないレベル

ルにまで低下している。

本編にて魔力の質が、というのはこのことをさしている。

アリカをはじめとしたウエスペルタイア王族が扱えるのはアシユレイの方針によって、彼らが常に魔族に孕まされてきたからである。

魔族との混血であるが、アシユレイにより魔力しか受け継がないようになっていて、魔族の特徴が表れることはない。

彼女と同じように、かつて人間と交わった神魔族達も同じようなことをやっているの、人類に魔族的あるいは神族的が表れることはない。

魔法

人間が使うラテン語のものは神魔族が作った、初心者用の精霊及び魔力制御方法。

神魔族にとって魔法とは体を動かしたり、考えたりすると勝手に起こってしまう現象に過ぎない。

アシユレイがネタに走って、想像しただけでやれてしまうのはこの為。

なお、魔族では魔法と呼ばれているが、神族では神霊術と呼ばれる。

1980年代の世界情勢（地球）

ヨーロッパ、ロシア、中国でワルシャワ条約機構（WTO）を形成。

日本とアメリカは南米諸国と共に北大西洋条約機構（NATO）を形成。

西半分はアフリカ、中東、インドが全部WTOの勢力圏。

東側はビルマ（ミャンマー）から南はオーストラリア、ニュージーランド、東はハワイ、北は樺太までが日本の勢力圏であり、残り
はアメリカの勢力圏。

朝鮮半島は日清戦争の講和条約により非武装中立の緩衝地帯となっており、国家は存在していない。

日本が朝鮮半島に手を出さなかった為、近代化はなされず文明的には19世紀くらいで止まっている。

また南米諸国や先進国の面々とその先進国の傀儡政権を除けばあとは植民地しか残らなかつたりする。

アフリカやインドの夜明けはまだまだ先のようだ。

日本

アシユレイの入れ知恵による技術加速と影からの資金援助及び物資援助により史実とはかけ離れて、大東亜共栄圏を徳川幕府時代に打ち立ててしまった。

なお1950年代まで大日本帝国として存在していたが、1960年代に入ると憲法改正をはじめとした様々な刷新が行われ、日本国となった。

史実の日本とは違い、衆議院・参議院の代わりに上院・下院が置かれており、それぞれの定数は75名と151名。

特定議院の優越権は無い。

1980年代に入ってなお、アシュレイの援助は続いている。

麻帆良学園都市

世界樹の管理を日本の陰陽寮だけがやっていると思われがちだが、強くなる為にアシュレイの仲介により、共同で魔法使いとやることとなった。

しかし、元々魔法は西洋のものであり、東洋には陰陽術などの古来からのものがある。

故にこの学園長に陰陽寮陰陽頭の近衛近右衛門が魔法使いとなつて就任することで、彼は東洋への魔法使い進出を最低限に抑えた。

アメリカ

アシュレイの国と言っても過言ではないくらいに莫大な影響力を彼女はアメリカにおいて持っている。

独立戦争や南北戦争において彼女が多大な支援を行い、また現在に至るまで様々な分野に援助を行なっている。

日本とは古くから蜜月が続いている。

イギリスをはじめとした欧州各国

史実とは違い、アジアの富を得られなかった為に一番割を食った国家達。

それでもやっぱり強大化している。

なお、中欧にドナウ連邦なる見慣れぬ国家があったりする。

その連邦の正式名称は「オーストリアⅡハンガリーⅡスラヴ諸民族によるハプスブルク家のライタニアの王冠による大中欧ドナウ連邦合衆帝国」という何か凄そうな名前だが、早い話がオーストリア・ハンガリー二重帝国の後継国家。

第一次・第二次の両大戦がWTO対NATOであった為にヨーロッパは戦場とならず、オーストリア・ハンガリー二重帝国も何とか存続して(勿論アシュレイの暗躍があった)今日まできている。

ドイツ

未だにカイザーが健在。

故にドイツ帝国。

ナチスはそもそも存在すらしておらず、ナチスの指導者であったヒトラーはアシュレイに見込まれて本人の夢であった画家としてのその生涯を終えた。

彼は自分の絵を認めてくれたアシュレイに傾倒し、彼女の肖像画やその配下の肖像画を大量に描いており、それがバチカンの目に止まって彼の絵は宗教画として現在では評価を得ている。

なお、バチカンに保管されている絵は一部に過ぎず、大部分はアシュレイの居城にあり、彼女は専用部屋を作ってそこに飾ってある。

ソビエト

ネタには事欠かない赤い巨大熊。

ほとんど史実と変わらないが、ロマノフ一家がアシュレイにより日本に逃げていたり、大粛清でトハチエフスキーが生き残ったり、と細かいところが変わっている。

経済的破綻により史実では崩壊を迎えることになるが、やっぱりアシュレイが援助しているので21世紀までこの共産主義の親玉は存在しそうである。

中国

正式名称は大中華帝国。

日清戦争の後、清は崩壊し、漢族による統治を、ということで作立した国家。

ヨーロッパ諸国やロシアとの結びつきが強く、史実では安かろう悪かろうの代名詞的なこの国家の製品はヨーロッパ基準の品質を保っており、車が突然爆発するなんてことはない。

近代化に成功した中国はアメリカ並の国力を持っており、ロシアと並んで近場の日本に大きな脅威を与え続けている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0591t/>

悪魔に導かれて

2011年12月25日22時33分発行